

2013 年度

日中接触場面における中国語母語話者の
不一致応答の言語管理、生成のプロセス

千葉大学大学院

人文社会科学研究所

博士後期課程

楊 昉

目次

第1章 本研究の目的と研究対象	1
1.1 本研究の目的	1
1.2 本研究の背景	2
1.2.1 社会相互行為論からの示唆	3
1.2.2 語用論の観点からの分析	6
1.2.3 ポライトネス理論の観点からの分析	10
1.2.4 接触場面理論の観点からの分析	13
1.3 不一致応答に関する先行研究	16
1.3.1 不一致、不一致応答の定義	16
1.3.2 対人関係の視点から捉えられた不一致応答	20
1.3.3 母語場面での不一致応答に関する研究	21
1.3.4 接触場面での不一致応答に関する研究	25
1.3.5 不一致応答に関する接触場面研究	28
1.3.6 先行研究のまとめと残された課題	29
第2章 調査	33
2.1 調査目的	33
2.2 先行研究での調査方法と問題点	33
2.2.1 先行研究の調査場面	33
2.2.2 先行研究の調査方法	35
2.3 本調査の概要	38
2.3.1 調査方法	38
2.3.2 擬似的自然会話場面の録音、録画	38
2.3.3 自然会話場面の自主的録音	46
2.3.4 自然場面でのインターアクション調査	50
2.4 会話資料、インターアクション・インタビュー資料のデータ化	55
2.4.1 文字化の方法	55
2.4.2 不一致事象の抽出	56
第3章 本研究で用いる不一致応答の分析の枠組み	63
3.1 不一致応答に関与する社会的、場面的要因	63
3.2 JSの先行発話において留意された逸脱－命題の逸脱	67
3.2.1 先行発話において留意された命題の逸脱の同定	68

3.2.2 命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因.....	72
3.3 不一致の表示方法において留意された逸脱－自己表示の逸脱.....	79
3.3.1 不一致の表示方法において留意された自己表示の逸脱の同定.....	80
3.3.2 自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因.....	82
3.4 逸脱の留意が生じなかった CS の不一致応答	89
3.4.1 命題の逸脱が留意されなかった不一致応答	89
3.4.2 自己表示の逸脱が留意されなかった不一致応答	91
3.5 逸脱が留意された不一致応答における CS の調整.....	95
3.5.1 不一致応答に用いられるストラテジーの分類	96
3.5.2 命題の逸脱に対する調整.....	101
3.5.3 自己表示の逸脱に対する調整.....	102
3.5.4 双方の逸脱が留意された場合の調整	104
3.6 逸脱が留意されなかった不一致応答の生成プロセス.....	111
3.7 CS の不一致応答の言語管理、生成のプロセスの分析の枠組みと本論文の構成.....	112
第 4 章 社会的距離、力関係が潜在化する場面での CS の不一致応答.....	115
4.1 CS の不一致応答における逸脱の留意、調整段階の全体的傾向	115
4.2 CS の不一致応答における逸脱の留意と関与した社会的、場面的要因	117
4.2.1 命題の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因	117
4.2.2 自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因	122
4.2.3 命題の逸脱、自己表示の逸脱の双方が留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因	126
4.3 逸脱が留意された不一致応答における CS の調整.....	137
4.3.1 命題の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整：明確な不一致の表示	137
4.3.2 自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整：不一致表示の回避、婉曲な不一致の表示.....	144
4.3.3 双方の逸脱が留意された不一致応答における CS の調整：明確、婉曲な不一致の表示、不一致表示の回避.....	148
4.4 逸脱の留意が生じなかった不一致応答	164
4.5 上下関係が潜在化している場面での CS の不一致応答の特徴	165
第 5 章 社会的距離、力関係が顕在化する場面での CS の不一致応答.....	169
5.1 CS の不一致応答における逸脱の留意、調整段階の全体的傾向	169
5.2 CS の不一致応答における逸脱の留意と関与した社会的、場面的要因	172
5.2.1 命題の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因	172

5.2.2	自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因	180
5.2.3	命題の逸脱、自己表示の逸脱の双方が留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因	185
5.3	逸脱が留意された不一致応答における CS の調整.....	201
5.3.1	命題の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整：明確な不一致の表示	201
5.3.2	自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整：不一致表示の回避、婉曲な不一致の表示.....	212
5.3.3	双方の逸脱が留意された不一致応答における CS の調整：明確、婉曲な不一致の表示、不一致表示の回避.....	220
5.4	「その他」の事例	252
5.5	逸脱の留意が生じなかった不一致応答	253
5.6	上下関係が顕在化している場面での CS の不一致応答の特徴	254
5.6.1	「上下関係」のインプットがある場合の明示的不一致応答	257
5.6.2	「上下関係」のインプットがない場合の明示的不一致応答	259
5.6.3	CS の不一致応答に関与した社会的、場面的要因の全体的傾向	261
第 6 章	結論	267
6.1	両場面における CS の不一致応答の異同点	267
6.1.1	不一致応答事例の全体的な傾向	267
6.1.2	両場面での逸脱の留意、調整に関与した社会的、場面的要因.....	268
6.2	CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのモデル	271
6.2.1	言語管理プロセスと生成プロセス.....	271
6.2.2	CS の不一致応答の言語管理、生成のプロセスのモデル	274
6.3	今後の課題	279
《参考文献》		282
謝辞		
資料編		

第1章 本研究の目的と研究対象

1.1 本研究の目的

会話の進行中に、ある事実情報の真偽に対する認識、ある物事に対する感想や見解などをめぐり、相手の先行発話から考えのくいちがい(以下、意見の不一致とする)を感じて応答する、という発話行為は日常生活の場面でよく見かけられる現象である。この際に、異なる見解を明確に提示する応答は起こりうるが、会話の相手との関係、不一致の対象となる話題の内容、異なる意見の提示に関する社会文化的規範やルール、などの要因によって、婉曲な(mitigated/implied, Angouri&Locher 2012:1550)不一致の表示、または不一致の表示の回避が求められる場合もあると考えられる。

特に接触場面(Neustupný 1985a, Jernudd&Neustupný 1987, Neustupný 1994ほか)¹においては、会話参加者間の社会文化、社会言語そして言語的背景が異なるため、意見の不一致を感じた後の応答(以下、不一致応答とする)に対する認識、不一致応答に用いられる言語表現、調整ストラテジーに関する規範やルール、などの側面においても異なる部分があると考えられる。それによって、参加者間の意見の不一致がより生じやすくなり、意見の不一致を生じさせる先行発話の内容(不一致の対象)がますます多様化し、適切な不一致応答を行うことがより複雑に、より難しくなってくると予想される。

日中両国間の相互交流がより幅広く深まりつつある当今、日本語が基底言語として用いられる日中接触場面も増えつつあるが、依頼、勧誘、断りなどの発話行為に比べると、意見の不一致が生じた後の会話のやりとりについての研究が、まだじゅうぶん展開されていないのが現状である。また、日本語が基底言語として用いられる接触場面での不一致応答に関する先行研究には、非母語話者が不一致の表示または回避のために用いる言語表現、ポライトネス・ストラテジーなど、分析の焦点が不一致応答の言語プロダクトの側面に置かれている研究が中心である。個々の言語表現やストラテジーが選択され、不一致応答に使用されるようになったことの背景、その過程に関与する社会的、場面的要因の詳細、関与のしかたなど、不一致応答が言語化されるまでのプロセスについての研究はまだ数少ないため、プロセスの視点を取り入れて日中接触場面での中国語母語話者(以下、CS とする)の不一致応答を分析、考察することは有意義な課題であると考えられる。

日本語教育の現場では、不一致応答、特に不一致の表示が「非優先的応答」(Levinson 1983, Pomerantz 1984 ほか)であり、「本質的 FTA(フェイスを脅かす行為)」(Brown&Levinson 1987:66)であるという観点が広く受け入れ、教師の関心は主に学習者が不一致応答をやわ

¹ 接触場面(contact situation)は、ネウストプニーが取りあげた概念で、言語使用場面が様々な要素に基づいて分類できるが、その中で文化内(intracultural)と文化外(intercultural)の区別がもっともベーシックな要素の一つであり、この二つの場面に含まれる言語問題は本質的に異なる。異文化接触場面に含まれる外来性(foreignness)によって前者を「母語的」(native)ないし「内的」(internal)、後者を「外的」(foreign)ないし「接触的」(contact)と呼ぶことにした(Neustupný 1985a:44)。接触場面研究の理論的側面については、本章の 1.2.4 で詳しく説明する。

らかめに、ほのめかしに行う能力の育成に向けられている。一方、Angorui&Locher (2012:1550)は、発話事象(speech activity)の場面的特徴によって、不一致の表示が伴う応答は許容され、さらに適切で有益な(appropriate, beneficial)発話行為であると捉えられる場合があると述べている。また、親しい関係の参加者間での不一致の表示は、話し手の社交性(sociability)を示し、相手との親密さ(intimacy)を促進できる側面があるとも指摘されている(e.g. Schiffrin 1984, Kakavá1993, Locher 2004)。これらの知見を日本語教育の現場に導入し、不一致応答という発話行為に関連する語学能力の指導内容、指導の枠組みなどをあらためて検討する必要があると考える。

中国人日本語学習者²が場面の特徴に応じて不一致応答を適切に行い、異なる見解の伝達と円滑なコミュニケーションを同時に保持できる能力の育成を考える前に、まず、実際の日中接触場面において、CS が日本語母語話者(以下、JS とする)の先行発話から不一致を感じた後は、どのように応答を行っているか、個々の応答が言語化されるまでのプロセスはどのようなになっているか、そこにはどのような社会的、場面的要因が関与しているか、などの側面に注目し、CS の不一致応答の実態とバリエーションを明らかにしなければならない。これまでの CS の不一致応答に関する先行研究では、アンケート調査の結果やロールプレイ会話のデータに基づく分析が多く、実際に行われた不一致応答の事例を分析材料にした研究はまだ数少なく、実際の事例に基づく研究においても、同じ年齢層の親しい友人同士間の日常的雑談を扱ったものはほとんどである。よって、異なる社会関係にある JS との、異なる性格のインターアクション場面での不一致応答の事例を充実させ、より多角的、多面的視点から CS の不一致応答を考察することも不可欠である。

以上のことに基づき、本研究の目的を下記のように定めた。

- (1) 日中接触場面における CS の不一致応答を研究対象に、CS の不一致応答が言語化されるまでの過程に焦点をあて、関連する言語管理、生成³のプロセスを分析する。
- (2) CS の不一致応答に関連する言語管理、生成のプロセスにおいて、不一致が生じた場面に埋め込まれた様々な社会的、場面的要因の中、どのような要因が関与しているか、どのように関与しているか明らかにする。

以上の分析、考察の結果をふまえて、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのメカニズムを説明するモデルを提案する。

1.2 本研究の背景

本節では、発話行為の研究、特に不一致応答の研究に関する理論的、方法論的背景を社

² 表現上の利便性を図るため、本稿では、中国語または日本語の母語話者を言及する際に原則的に「CS」と「JS」を用いて示す。一部の内容では、「中国人日本語学習者」または「日本人英語学習者」などのような呼称を用いているが、これは目標言語の習熟度の視点から捉えた結果で、中国語または日本語を母語とする言語使用者の側面においては、前述の「CS」と「JS」と共通している。

³ 言語管理理論(Language Management Theory)の理論的側面は、Neustupný(1985a), Jernudd&Neustupný (1987)などを参照すること。本研究における言語管理理論使用の背景については、第3章で詳しく説明する。

会相互行為論、語用論、ポライトネス理論、接触場面理論の四つの側面から概観し、本研究で参考できる研究成果をまとめる。

1.2.1 社会相互行為論からの示唆

Goffman(1967:36, 44)は、人が会話(talk)において、儀礼的注意(ritual care)が必要なほかの種類 of 行為を行う時と同じように、「フェイス」への自発的な追求によって、どのように自分を表現したらいいかを知ることができると指摘し、そして、儀礼的注意または儀礼的秩序(ritual order)の主要な原則はおそらく公正(justice)ではなく、フェイスであると述べている。このように、社会的相互行為において、人々が主にフェイスへの追求を通して、儀礼的秩序を考慮した上で、自分の行動の適切さを判断していると指摘された。以下から、フェイスの概念と儀礼的秩序に関する Goffman(1967)の論述を概観し、本研究に与える示唆を述べる。

(1) Goffman(1967)における「フェイス」

フェイスについて、Goffman(1967:5)では次のように定義した。

The term *face* may be defined as the positive social value a person effectively claims for himself by the line others assume he has taken during a particular contact.

フェイスとは、ある特定の接触の間に、ある人が自分自身のために効果的に要求する肯定的な社会的価値であり、その人がとっていると他者が想定する立場に沿っているもの、と定義できる。

Goffman(1967:5)より引用、筆者訳

口頭的インタラクション(spoken interaction)の社会化された相互行為の参加者(socialized interactant)は、どのようにフェイスへの自発的な追求を通して、自分の行動の適切さを判断するかについて、Goffman(1967:36)では、人が自分に対して自動的に、そして繰り返して(repeatedly and automatically)、「このように行動したら／しなかったら、自分がフェイスを失い、または相手にフェイスを失わせることになるか」ということを問いかけることによって、それぞれの瞬間(each moment¹)の行動を意識的に、または無意識的に決めていくと述べられている。また、人が自分と他人のフェイスに対して儀礼的関心を与える(take ritual care of)ことは、会話の構造そのものに組み込まれ、フェイス、特に自分のフェイスへの指向性(orientation)は、儀礼的秩序による対人支配力の核心(the point of leverage)である (ibid.:40)。

Scollon et al. (2012)は、対面的インタラクション(face-face interaction)におけるフェイスが固定的なものというより交渉可能なものであると捉え、下記のように述べている。

Face is the negotiated public image, mutually granted each other by participants in a communicative event.

フェイスは交渉的な公的イメージで、一つのコミュニケティブなイベントにおいて参加者の相互作用によって成り立っている。

Scollon et al. (2012:47) より引用、筆者訳

以上の指摘から、社会的インターアクションにおいて、その場での参加者間の相互作用によって肯定的な社会的価値－「フェイス」が成り立ち、人々がそれを意識的に、または無意識的に追求することを通して、儀礼的秩序やルールを参照し、個々の行動(発話行為)を決めていくと示唆された。さて、人は自分のフェイス保持に特別な関心をもっているが、相手のフェイス保持に関してはどのような認識を持っているか、これにつて、Goffman(1967:6)では次のように述べられている：

A person will also have feelings about the face sustained for the other participants, and while these feelings may differ in quantity and direction from those he has for his own face, they constitute an involvement in the face of others that is as immediate and spontaneous as the involvement he has in his own face.

人はまた他人のために支えられたフェイスに感情を懐いている。これらの感情は量的にはまたは方向的には自分のフェイスに対して懐く感情と異なるかもしれないが、自分のフェイスとのかかわりと同じように、他人のフェイスとのかかわりを即座で自発的に構築している。

Goffman(1967:6)より引用、筆者訳

自分と他人のフェイスにはらう関心が会話の構築に与える影響について、Goffman(1967:11)は、自尊心のルールと思いやりのルールが結合した効果として、人がある出会いの中で、自分のフェイスと他の参加者のフェイスをともに保持できるように、自分を表現することになると述べている。そして、自分と他人のフェイスに対する配慮によって、参加者間の一時的(temporarily)な相互容認が成り立ち、このような相互容認が対面的インターアクションの基礎的な構造の特徴であると指摘した。なお、Goffman(1967:11)は、上記の相互容認が通常は「加工」された(working)容認で、「本当」の容認ではないと述べ、つまり、この「容認」は、率直に言い表された本心からの合意の評価に基づいた容認ではなく、参加者が本当は賛同できない判断に対して、一時的にリップサービスを行おうとする意欲に基づいた容認であると強調した。

さらに、互いの考えが異なる場合での参加者の行動について、Goffman(1967:11)は、表

面上の同意(surface agreement)も参加者間の異なる見解の提示と共存でき(compatible with)、相手に「尊敬」の意を示す手段となれると述べている。Goffman(1967:35,36)は、口頭的インターアクションにおいて、丁重な調和(polite accord)が通常は維持され、そして、互いに不一致を抱えている参加者が、ある事実や原則(fact and principle)に関する意見の不一致を同意の状態に導ける観点に対して、一時的リップサービスを提供し、その場の表面上の同意が成り立つために、慎重(discretion)とホワイト・ライズなどの手段を用いなければならないと指摘した。これらの指摘から、不一致応答が行われる場合において、自分と他人のフェイス保持に対する関心によって、話し手が一時的でありながらも相手の異なる意見を「容認」し、会話を構築していくことは通常のやり方であると示唆された。

(2) 儀礼的秩序

Goffman(1967)では、個人のフェイスに対する関心が根底となる儀礼的秩序が、社会的インターアクションにおいて、その場での発話行為の妥当性、指向性などに関する人々の判断に、どのように作用しているかについて、普遍的傾向の視点から論じられたが、具体的なインターアクション場面での実際の事例を通しての説明は省かれた。不一致を感じた後は、CSが実際にどのような儀礼的秩序を、どのように参照した上で、不一致応答を行うかについての考察において、Goffman(1967)で指摘された「フェイス」の概念、自分と相手のフェイス保持に対する関心の配分、インターアクションの調和を保つための「表面上」の相互容認の必要性、そして、Scollon et al. (2012)で述べられた参加者間の相互作用によるフェイスの交渉可能性、などは重要な参考内容となる。

なお、人と人の出会いに関する儀礼的構造(ritual structure)においても、儀礼的秩序が常に守られるとは限らなく、人が意図的に秩序に違反する行動を行い、自分のフェイスを保持できるものの、出会いが失敗になってしまう場合もある(Goffman 1967:39)との指摘から、相手の異なる考えを一時的に容認し、表面上の調和を保つことが社会的儀礼として求められているが、CSが何らかの場面的要因によって、自分のフェイス保持にだけ関心を持つようになり、不一致を意図的に提示することも起こりうると示唆された。

本研究では、文化的、言語的背景が異なるCSとJSによる接触場面での不一致応答を取りあげて研究対象にしたため、このような場面においても普遍的な儀礼的秩序が機能しているか、これらの秩序がCSの不一致応答にどのように関与しているか、などのことを考える際に、異なる文化集団における儀礼的秩序の普遍性と個別性についてのGoffman(1967)の指摘が参考となる。

Goffman(1967:6, 44)は、個々の出会いにおける参加者の自分のフェイスと他人のフェイスが同じ順番で構築されてきたものであり、文化における違いの底において人々はみな同じであると述べ、社会が儀礼などの手段を用いて、社会に属する成員を、社会的な出会いにおいて自己調整ができる参加者であるように集合させていると指摘した。また、自分のフェイスと他人のフェイスに対してどれほどの感情を懐くべきか、この感情が関与しているフェイスにおいてどのように配分されるべきか、といったことを決めるのは集団のルー

ルであり、場面に関する定義である(ibid.:6)。以上の指摘から示されたように、接触場面においても、自分と相手のフェイス保持に対する儀礼的関心、インタラクシオンの調和を保つための相互容認の必要性、などの儀礼的秩序は、文化的、言語的背景の異なりを超えて、参加者の間で共有されて機能していると考えられる。それと同時に、個々の参加者が所属するスピーチ・コミュニティ(Hymes 1972)ならではのルール、インタラクシオン場面の場面的特徴などの要因も、フェイス保持に対する参加者の関心の配分、相互容認を成り立たせるための言語表現の選択などに大きく影響していると予想される。

1.2.2 語用論の観点からの分析

本節では、語用論の研究対象、不一致応答に関する語用論的研究、日本語教育での語用論的研究の成果の応用、などの側面において語用論の観点からの示唆をまとめる。まず、語用論が成り立つ前に、発話行為の研究に用いられた発話行為理論を概観する。

談話の中において一定の発話行為や言外の意味が引き出されるメカニズムの究明にむけて、語用論の観点が導入される前に、発話行為理論(Austin 1962)に基づく研究が一時的に数多く行われていた⁴。不一致応答に関して、発話行為理論の観点からの考察が行われた先行研究は限られているが、Van Eemeren & Grootendorst(1984:43-44)では、「議論的討論」(argumentative discussion)における「対立的論争⁵」(contra-argumentation)という発話行為が成り立つための適切性条件が挙げられた。これらの条件を参考にし、CSの不一致応答を個別に抽出し、個々の発話行為(不一致応答)の成立に関わる適切性条件を定める試みはそれなりの意義があるが、やはり不十分にな考察になりがちであると考えられる。というのは、まず、参加者間の親疎関係やその場における役割関係、話題の内容などの「外部的」要因が発話に与える影響は、発話行為理論において研究対象から除外されているためである。そして、Searle(1969)は一つの「発話内行為」が原則的に一つの発話によって実現され、一つの「遂行的な動詞」(performative formula)によって「明示的に」示されるとしているが、Van Eemeren & Grootendorst(1984:31)が発話行為(e.g. 議論すること)が一発話で終わる事例のほうがまれであり、一つの「遂行動詞」(e.g. 「主張する」(argue))のみによって、論争を行うことのほうも現実的ではないと指摘したように、不一致応答に関しても、限られた場面(e.g. 法廷での弁護)を除いて、「～ということに反対です」のような形で行われる不一致応答が生じる頻度は非常に低いと考えられる。これに比べると、語用論の観点からの研究では、話題の背景、参加者間の親疎関係や役割関係などの文脈的要因からの関与も考察の視野に入れられ、話し手が発話の意味論上の意味以外の、「言外の意」を伝達するために、いかに様々な

⁴ 発話行為の3分類、個々の発話行為が成り立つための適切性条件、などの発話行為理論の理論的側面については、Austin(1962)、Searle(1969)を参照すること。

⁵ Van Eemeren & Grootendorst(1984:9)では、「説得」(convincing)を伴う「議論」(argumentation)において2種類の論争があるとし、それぞれが「賛成的論争」(pro-argumentation)と「対立的論争」(contra-argumentation)である。前者は表された意見を受け入れるように聞き手を説得するための論争で、後者は表された意見を受け入れないように聞き手を説得するための論争である。

言語形式を用いているのか、ということを解明しようとしている。

(1) 語用論の考察対象

話し手はどのように発話行為を通して意図的に意味を伝えているか、聞き手は話し手の発話の「文」の意味、そして話し手が実際に表そうとしている意味を理解するために、相手の発話をどのように解釈しているかについては、発話を構成する「文」の意味の考察、すなわち意味論の視点からの考察だけを頼りにしては限界がある。話し手の意味を伝えるための発話が具体的な場面において、具体的な相手を前にして行われるものであるため、発話の理解には、取りあげられた話題の背景、会話が行われている場面の場面的状況、会話参加者間の関係といった文脈(コンテキスト)的要素の関与を知ることが重要である。文脈からの影響についての関心が高まることに伴って、文脈的要素と言語形式がどのように相互作用し発話の遂行と理解に影響を与えているか、という課題を研究目的にした語用論研究は、1970年代に言語学の学問分野の一つとして成り立つようになった。

語用論の定義について諸説があり、まだ定まっていないようであり、たとえばウィルスン・ウォートン(2009:24)は、発話が聞き手にどのように理解されるかという視点に基づいて、狭い範囲で語用論を「発話の解釈において、言語形式とコンテキスト的要素がどのように相互作用するのかを研究する学問」と捉えている。このような定義からすると、語用論の中心課題は、話し手がある特定の場面である文を発話したことによって伝えることができる意味は(コンテキストに依存しない)文法によって決まる言語的意味をはるかに超えているのはなぜかを究明することになる(ibid)。Levison(1983)では、語用論の範疇には、ダイクシス、会話の含意、前提、発話行為、会話の構造などさまざまな現象が含まれ、発話行為も内包されているとした⁶。これらの指摘から、語用論の範疇では、発話の意味は意味論上の言語的意味とコンテキストの共同作用によっていかに伝えられ、いかに理解されているか、という課題の究明が中心のテーマになっていると考えられる。

Leech(1983)とThomas(1983)は、語用論を社会語用論(sociopragmatics)と語用言語学(pragmalinguistic)に分けて区別をつけた。語用論の観点からラポールマネジメントを論じたスペンサー＝オーディー(2004:46)は、ラポールマネジメントストラテジーの使用において重要な役割を果たす要因の一つとして、語用論的慣習(pragmatic conventions)を挙げた。語用論的慣習には社会語用論的慣習と語用言語学的慣習が存在し、この2種類の慣習は「社会的」属性を持ち、文化的異なりによって変異が生じる可能性がある(ibid. :50)。具体的には、前者は、発話する時の状況的変数(contextual variables)と文化に基礎を置く社会語用論的優先順位(sociopragmatics preference)が、いかに発話の選択に影響を与えるかに関する慣習である。参加者の所属する文化グループが異なれば、ある種の状況で用いるラポールマネジメントのための原則が異なるかもしれない。後者は、一定の状況において一定の語用論的

⁶ ダイクシス(言語が発話の文脈の特徴を記号化する方法)、会話の含意と前提(実際に言語としては記号化されていない意味を伝えるのに言語が用いられる方法)、発話内行為(述べる、質問する、命令するなどの言語行為を遂行するための言語の使用)、会話の構成(やりとりが繰り返されながら会話が作られる方法)(エリス 1996)

意味を伝えるには、どのような表現方法が必要となるかに関する慣習である。参加者の所属する文化グループが異なれば、ある種の状況でなされる戦略の選択およびその使用についての解釈が異なるかもしれない(ibid. :51)。

(2) 不一致応答に関する語用論的研究

比較文化、異文化間コミュニケーションの研究で注目される研究対象について、スペンサー＝オーティン(2004:52)は、実証的な比較文化的語用論研究(empirical cross-cultural pragmatic research)は、今までのところ、語用言語学的慣習の調査に集中してきたが、最近では、状況判断規範⁷(contextual assessment norms)の調査に集中する傾向となりつつあると述べている。一方、比較文化心理学や異文化間コミュニケーションの研究は、基本的な文化的価値に焦点を合わせる傾向が強いが、ある状況(場面)に特定の意味を伝えるための言語使用の考察に向けて、状況判断規範や社会語用論的慣習といった要素からの関与と、語用言語学的慣習の視点を統合することが必要であると指摘した(ibid. :51-52)。

語用論の観点に基づいて、CS、JSの不一致応答に関する発話行為(不一致の表示または回避)を扱った先行研究では、語用言語学的慣習からの影響を調べる研究のほうが多く、すなわち、話し手が不一致の表示または表示の回避などの語用論的意味を伝達するために、どのような言語表現、調整戦略を選択、使用しているかは分析の焦点となっている(Beebe&Takahashi 1989、Du 1995、白井 2008他)。Liu(2004)と王(2007)は、不一致が生じた場面の場面的特徴、文化的背景などの要因が、不一致の表示に用いられる言語表現の選択、使用にどのように影響しているかに注目し、社会語用論的慣習の側面についても考察を行った。これらの先行研究では、分析の焦点に異なりがみられたものの、不一致応答、とくに不一致の表示が伴う応答は、参加者間の対立(confrontation)、衝突(conflict)を生じさせ、会話にネガティブに影響している発話行為である(Angour&Locher 2012:1550)という分析の観点では共通している。このような観点は、Levinson(1983:330)、Pomerantz(1984:70)が指摘した、与えられた評価に対して意見の一致を示すことのほうが好まれ、優先的応答(preferred response)であるが、意見の不一致を示すことは非優先的応答 (dispreferred response)に属する、という認識に基づいている。具体的には、Levinson(1983:334)では、非優先的応答の一般化できる特徴について、「遅れ」、「前置き」、「説明」、「拒否部分」などの併用が挙げられ(レヴィンソン1989:412)、Pomerantz(1984:70-77)は、不一致の表示が行われる場合には次のような手段は一つ、あるいは組み合わせて用いられると述べている。

- 1) 遅延(delay)：一回の発言(turn)内、あるいは発言と発言の間に沈黙や間をおいて行う返答
- 2) 修正(repair)：明確化や反復の要求
- 3) 躊躇の標識(hesitation markers)あるいは、フィラー

⁷ 状況的要因に対する判断を行う際に参照される規範である。詳しくはスペンサー＝オーティン(2004:50)を参照すること。

- 4) 前置き(preface) : 返答の前に来る標識
- 5) 形だけの同意(token agreement) : 部分的な賛成として表現されるが、後で評価を下げたり、修正したりする表現が来る返答

Pomerantz(1984:70-77)より引用、筆者訳

以上の先行研究での指摘を参考にし、CSの不一致応答の考察にあたり、不一致応答という発話行為に関する社会語用論的優先順位、優先順位の選択に関わる状況的変数と文化背景、状況的変数の認知、判断に参照される規範やルールに注目する必要がある。そして、語用言語学的慣習の視点を取り入れて、CSが不一致応答に用いる言語表現の選択、使用に関与する文化グループの慣習、個人レベルの慣習などについて、分析する必要がある。

(3) 日本語教育における語用論的研究の成果の応用

これまでは、第二言語の学習者の語学能力を向上させるために、学習者の言語知識(linguistic knowledge)のほかに、学習者の発話についての語用論の視点に基づく研究、特に語用言語学的慣習の側面に焦点が当てられた研究が数多く行われた。これらの研究から、学習者の発話には文法的転移だけではなく、語用論的ルールの転移(pragmatic transfer)も起きていると指摘され、また、この種の転移は文法的転移と異なり気付かれにくいため、誤りを引き起こしやすいと論じされた(c.f. 生駒・志村1993、藤森1994)。

しかし、これまでの中間言語研究ですでに明らかになってきたように、学習者の母語と目標言語のどちらにも原因を求められない誤用が生じたりして、母語のルールより目標言語のルールを過剰にまたは過小に用いた例が見られるように、転移だけでは説明できない部分もある。たとえば、王(2006)はCSの母語場面、日中接触場面での会話を比較、分析し、接触場面においてCSは日本語または中国語のルールに従って不一致応答を行う側面があるほか、どちらの言語にも属しない学習者独特のルールを不一致応答に適用することもあると述べ、CSとJSの間の「中間」的な特徴を持っていると指摘した。

このような特徴と発話行為における社会語用論的、語用言語学的慣習からの影響を合わせて考えると、CSの不一致応答において、中国語、日本語の言語的、語用論的慣習や規範からの影響があるほか、不一致が生じた場面での状況的変数からの関与も大きいと予想される。人の言語的戦略の選択に関与する状況判断について、スペンサー＝オーティン(2004:45)は、あらゆる発話イベントに先立って、人は通常、関連する過去の経験に基づく様々な状況的変数についての安定した継続(ongoing)の概念をもっているが、相互作用が進行する中で、これらの変数の判断が動的に変化する可能性があるため、状況判断は「永続的」(standing)と「動的」(dynamic)の両方の特徴があると指摘した。よって、社会語用論的慣習、語用言語学的慣習の側面から、CSが不一致応答を行う際に考慮する状況的変数、参照する状況判断の規範などを明らかにするには、場面ごとに、事例ごとにこれらの変数、判断の規範による「永続的」、「動的」の影響を捉え、詳しく分析する必要がある。

1.2.3 ポライトネス理論の観点からの分析

これより、ポライトネス理論の基礎となる「ポライトネス」、「フェイス」、「FTA」などの概念、この理論を参考にし不一致応答を分析する際の留意点を述べる。

(1) ポライトネス理論の基本概念

Brown&Levinson(1987)はデュルケームの「儀礼」とゴフマンの「フェイス」の概念を受け継ぎ(ブラウン・レヴィンソン2011:1-2)、ポライトネス理論を確立した。ポライトネスの定義は、一つの「含意」(implicature)、つまり、状況の中で発せられる言葉によって、ポライトな態度や意図を首尾よく伝えることにより、伝達される可能性を持つある推論であり、この意味ではポライトネスは社会的関係を構築したり維持したりするために欠くことのできないもので、まさしく人間の協調行動一般にとっての前提条件であることと定められている(ブラウン・レヴィンソン2011:xii)。ポライトネス理論においては、人間の相互行為の指向性に関わる中心的なものは「フェイス」の概念で、つまり個々人の持つ自尊心(self-esteem)についての一定の仮説から導き出すことができるものである(ibid. :3)。具体的には、人間が自分のために要求したいと願う公的な自己イメージで、自らの行為を妨げられたくないという欲求(ネガティブ・フェイス)と、(何らかの点で)認められたいという欲求(ポジティブ・フェイス)からなっている(ibid. :17, 79-80)。

Brown&Levinson(1987)は、上記の2種類のフェイスへの欲求を普遍的なものだと想定した上で、フェイスに侵害をもたらす行為を「フェイスを脅かす行為」(FTA: face-threatening acts)と名づけ、様々な発話行為の中で、相手そして(または)話し手のフェイス欲求に本来的に反する行為、すなわち「本質的FTA」があると指摘した(ブラウン・レヴィンソン2011: 77, 85)。そして、本質的FTAのうち、「不同意の表明」(expression of disapproval)、「否認または不賛成、挑戦」(contradictions or disagreements, challenges)は、話し手が聞き手のポジティブ・フェイスのある点に関し否定的評価をしていることを示す行為であり、聞き手のポジティブ・フェイス欲求を脅かす行為であると指摘された(ブラウン・レヴィンソン2011:86)。

FTAによって欲求が満たされずフェイスが脅かされる可能性があるとき、ポライトネスは、そのフェイスの侵害を補償・軽減したり回避したりすることでフェイスを保持するべく機能する(滝浦2005:136)。話し手がFTAの行使に際して、このFTA行為による聞き手あるいは自身のフェイスを脅かす度合いに応じて、下図に示されているストラテジーを使い分け、フェイスを脅かす度合いが増せるほどより大きな番号のストラテジーを選ぶとされている(ブラウン・レヴィンソン2011:77-78)。

ストラテジー選択

決定状況

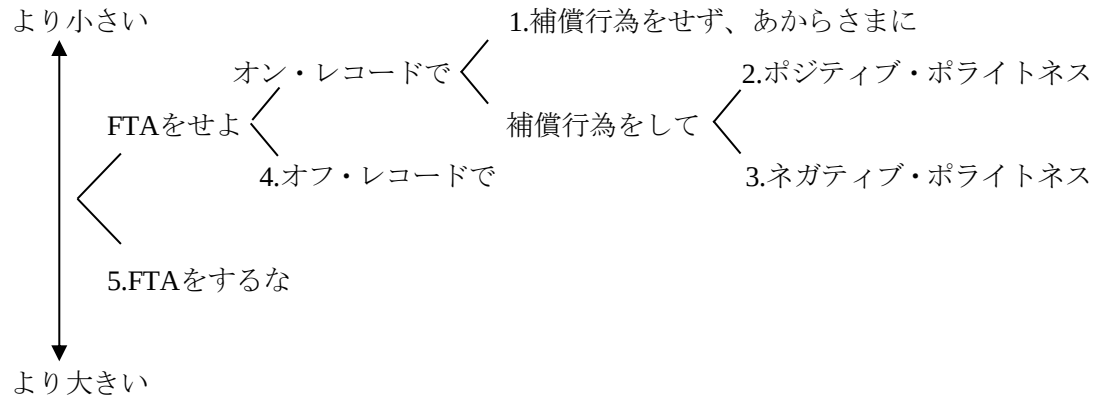


図 1: FTA を行うための可能なストラテジー⁸(ブラウン・レヴィンソン 2011:78)より引用

上記の五つのストラテジーのうちに、「ポジティブ・ポライトネス」(他者に近づこうとすること)、「ネガティブ・フェイス」(他者と距離を置こうとすること)、「オフ・レコード」(明白な押しつけを避けようとする)の三つは主なストラテジーである(ブラウン・レヴィンソン2011:3)。本質的FTAとされる「不同意の表明」、「否認または不賛成」を行う際に、Brown&Levinson(1987)はこれらの発話行為におけるポジティブ・ポライトネスの実現に用いるストラテジーとして、「一致を求めよ」と「不一致を避けよ」を挙げ、それぞれのストラテジーにおいて、次のような具体的な手段が含まれると述べている(ブラウン・レヴィンソン2011:151-160)。

一致を求めよ(seek agreement)

無難な話題(safe topic)、繰り返し(repetition)

一致を避けよ(avoid disagreement)

形だけの同意(token agreement)

擬似同意(pseudo-agreement)

罪のない嘘(white lies)

意見にヘッジをかける(hedging opinions)

FTAによるフェイス侵害の深刻度の算出においては、Brown&Levinson(1987)は多くの文化、おそらくはすべての文化で、以下の要因が考慮されていると主張している(ブラウン・レヴィンソン2011:97)。

SとHの「社会的距離」(social distance : D) (対称的關係)

SとHの相対的「力」(power : P)(非対称的關係)

特定の文化における絶対的な「負荷度」(rank of imposition : R)

⁸ 1～5 までのストラテジーについての定義の詳細はブラウン・レヴィンソン(2011:89-92)を参照すること。

そして、FTAを行う際の相互行為の参加者は上に挙げられた要因を以下のような算式に代入し、FTAによるフェイス侵害の深刻度を算出している(ブラウン・レヴィンソン2011:98)。

$$W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x \quad (W_x \text{は} FTA_x \text{の重さを示す数量値である})$$

上記の三つの要因は、CSの不一致応答に関与する状況的変数を考察する際に注目すべき対象となるが、その際、これらの要因の状況依存性と包含性を十分に考慮した上で考察を進めなければならない。

状況依存性について、たとえばPの測定に関しては、個人的Pの絶対値であれ役割的Pの数値であれ、このような安定した社会的評価は関与する一つの要素に過ぎなく、Pの交渉における一時的な弱さ、性格の強さ、関連性の強さなどすべてがPの測定に一定の役割を演じ、状況的要因がP、D、Rとして測定される値は、ある特定の状況に置かれたSとH、ある特定のFTAにのみ適応される(ブラウン・レヴィンソン 2011:101-102)。包含性に関して、ブラウン・レヴィンソン(2011:103)は、FTAによるフェイスへの侵害の査定にはP、D、Rをとりあげたのは、この三つだけが関連要因だということを主張するのではなく、この三つの要因は査定に原理的に影響を与える他のすべてのもの(地位、職業、民族的アイデンティティ、友情、状況的諸要因など)を包含する(subsume)ということを主張したいと強調した。

不一致応答におけるP、D、Rの場面依存性を論じた先行研究として、Rees-Miller(2000)では、相対的により強い力を持つとされている教師が、教室の場面において「知識の伝授」の目的を実現させるために、不一致を提示する時または学生から反論される時は、力関係(power relations)の下位階層に属する学生に比べ、より多くの補償的ストラテジーを用いる傾向があると指摘された。要因の包含性について、Locher(2004:98, 327-328)は不一致の表示に関与する要因として、文化的規範、会話のスタイル(conversational style)、話題の議論可能性(controversialness)、ある話題への参与度または関連知識の保有度、年齢、状態(status)、性別、参加者の発話のスタイル(speech style)などを挙げ、ラポールマネジメント⁹を論じたスペンサー＝オーディー(2004)においても、ラポールを維持・管理するためのストラテジーに影響する要因が詳しく述べられた。

(2) 不一致研究とポライトネス

「不同意の表明」、「否認または不賛成」は本質的FTAであり、それに伴うフェイス侵害を軽減、回避すべきである、などの観点に基づいて、不一致応答に関する先行研究が数多く行われてきた。これらの先行研究には、不一致の表示に伴うフェイス侵害を補償するためにJSが用いるストラテジーの研究(Jones 1990、Mori 1999、末田2000、大津2001、梶本2004、木山2005、王2008a ; 2008b、楊2010他)があり、英語使用場面でのJS、CSがフェイス

⁹ スペンサー＝オーディー(2004)ではラポールを「調和的關係」と同じ意味で用い(ibid.:17)、ラポールマネジメント研究の関心事について、「社会的諸関係を築いたり、維持したり、あるいは脅かしたりするためにことばがどのように用いられるかを研究し」、また「フェイスのみならず社会的権利の維持・管理の問題も含まれる」と説明している(ibid.:11)。

侵害の軽減に用いるストラテジーを研究対象とした村田(2004)、Cheng&Tsui(2009)、Tuan&Hsu(2009)などがある。そして、フェイス侵害の深刻度の度合いの算出に關与する要因と不一致の表示に用いられる言語表現、調整ストラテジーの關連性に焦点を当て、英語母語話者またはCS、JSの特徴を考察した先行研究には、Rees-Miller(2000)、Locher(2004)、Pan(2000)、Liu(2004)、王(2007)などがある。これらの先行研究の概要については、不一致応答に關する先行研究をまとめる1.3のところで詳しく取り上げて説明する。

1.2.4 接触場面理論の観点からの分析

これより、本研究で主に参考する理論的枠組みである接触場面理論の基本概念、接触場面の観点に基づくCSの不一致応答の捉え方などを説明していく。

(1) 接触場面の基本概念

接触場面(contact situation)という概念は最初「The foreign language situation」(Neustupný 1974)や「外国人場面」(ネウストプニー1981)と提起され、Neustupný(1985a)によって母語場面(native situation)と区別する概念として定着した。接触場面は一般的には異なる言語、文化背景を持つ参加者間のインターアクションの場面を指す(日本語教育学会2005、ファン2006:120)。接触場面という概念の提唱に伴い、接触場面への関心が高まり、近年日本語教育の分野においても接触場面から出発する教材開発の動きや、第二言語習得の立場からの接触場面研究も現れるようになってきた(ファン2006:120)。

社会の発展とともに急速に広がってきた人の移動によって、異なる言語の接触が増え、言語使用地域や言語使用者の言語変化をもたらした。このような異なる言語の接触によって生じる言語現象と変異に注目する言語接触(language in contact)の研究が20世紀の50年代から現れ、言語間の接触による言語的变化についての知識が蓄えてきた。しかし、近代社会からポストモダン社会へ移行しつつあり、人々の価値観が多様化している中、このような構造的、体系的な言語を前提として接触現象をとらえようとする近代社会的なアプローチでは人々が直面する多様な課題を取り扱うことができなくなっている(ファン2006:121)。そのため、接触場面の概念から出発する接触場面研究のフレームワークは「言語接触」を研究する新しいアプローチとして提起された。

(2) 接触場面研究の特徴

従来の「言語接触の研究」と区別して、接触場面研究の理論的枠組みにおける基本概念として、Neustupný(1985a)は「接触場面」、「訂正」、「ディスコース」、「非文法的能力」の四つを挙げた。また、接触場面研究のアプローチにおける基本的特徴、留意すべき点について、ファン(2006)は「言語接触の場面性」と「場面の参加者の視点」の導入を強調し、村岡(2011)はコミュニケーションが行われるディスコース、参加者の視点からみた言語使用のプロセス、問題の解決より問題の管理のありかたなどを指摘した。以上の先行研究の指摘に基づいて、接触場面研究の特徴として次のようなものが見出されると考える。

1) 場面の接触性

言語使用場面についての分類方法はさまざまあるが、接触場面研究では文化内 (intracultural) と文化間 (intercultural) の区別はもっともベーシックな要素であり、この二つの要素に含まれる言語問題は本質的に異なっている (ファン2010:77)。異文化接触場面に含まれる外来性 (foreignness) によって前者を「母語的」 (native) ないし「内的」 (internal)、後者を「外的」 (foreign) ないし「接触的」 (contact) に Neustupný (1985a) が分類した。ここで注意すべきなのは、「接触場面」でのコミュニケーションは「母語場面」のと本質的に異なり、さらに、接触場面でのコミュニケーションは、個別に考えられた二つの文化と知識に基づいて理解できないことである。つまり、言語と文化的背景の異なる参加者によるコミュニケーションの「接触的」場面性からの関与をまず考えなければならない。そのために、その場で参照される規範についての参加者間のローカルの交渉 (村岡2011) が落ち着くまでのプロセス、場面に対する参加者の個人的捉え方や言語使用についての管理などは考察の焦点となる。

2) 参加者の視点

ポストモダン社会においては、人々の言語、文化的背景がさらに複雑になるため、ある言語の母語話者または非母語話者といった属性を簡単に決められない人々が増えている。そのため、従来の言語体系中心の静的なパラダイムではこのような事態を扱うことができなくなり (ファン2010:80)、参加者の各自の視点に基づいて動的に場面を捉える必要性が現れ、接触場面研究といった新しいパラダイムへの転換が求められる。当事者はいかに使用言語を交渉して参加していくかという観点から、Fan (1994) とファン (2006) は接触場面には少なくとも3種類が存在していると指摘し、それぞれは相手言語接触場面、第三者言語接触場面、共通言語接触場面である。接触場面研究においては、参加者はどのように自分の言語を捉え、相手と交渉し、場面ごとにふさわしい言語使用を管理しているかは接触場面研究の最も重要な課題の一つである (ファン2010:80)。

3) ディスコース

「言語接触」研究では、焦点は言語体系と訂正的調整が体系に及ぼす結果に集中している (Neustupný 1985 a)。換言すれば、言語の接触によってどのような言語的变化 (linguistic change, Neustupný 1985 a) が起きたかのみに焦点が当てられている。接触場面研究では、接触の結果のほか、このような結果が生じるまでのプロセスの解明にも注目している。接触場面におけるディスコースに対する考察には、多くのプロセスが対象となっている。具体的には、すべての発話行為 (speech activities) に付随する発話 (speech) の評価、発話の回避のような事前調整などのものも含まれ、接触場面研究においてはすべて説明されなければならない (Neustupný 1985 a)。

4) 非文法的能力

場面が内的場面から接触場面へ移行する引き金になっているのは外来性

(foreignness)である(村岡2011:155)。接触場面研究で扱われる外来性は、言語だけではなく文法外コミュニケーション、社会文化的要素にもみとられる。外来性を感じるかどうか、感じたのは強い外来性なのかそれとも弱い外来性なのか、外来性を生じさせた要因はどのようなものなのか、といったことは参加者にとっては自明的かもしれないが、考察者にとっては体系的に、構造的に測れることは難しい。このため、2)で述べられたように、まず、常に参加者の視点に基づいて接触場面でのコミュニケーションのプロセスを考察すべきである。そして、文法外の要因によっても外来性が生じることがあるため、接触場面研究の考察対象はせまい意味での言語的(文法的)能力のみならず、参加者の非文法的能力(社会文化的要素も含む)も包含している。

(3) 言語管理のプロセス

接触場面におけるディスコースをプロセス研究の視点から捉えるには、言語管理理論の枠組みが用いられている。「言語管理」(language management)という命名は、Jerundd&Neustupný(1987)によるもので、参加者が生じる問題に対処するために自分や相手の言語使用に働きかけることを意味する(村岡2011:155)。言語管理理論の中核である部分は「管理プロセス」で、コミュニケーションの過程に生じる問題を解決するための意識や言語行動を指す。言い換えれば、当該場面の規範からの逸脱に始まり、その逸脱を調整するまでのプロセスを指している(加藤2010:11-12)。具体的には、以下のような過程となる。

- 1) まず、規範(norm)からの逸脱(deviation)が最初の段階である：ある場面における何らかの規範からの逸脱が生じる。
- 2) つぎに、その逸脱が留意(note)される可能性がある：逸脱は参加者のだれかによって留意される場合とだれにも留意されない場合がある。
- 3) また、留意されたら、評価(evaluation)される可能性がある：仮に留意された場合、否定的あるいは肯定的に評価される場合と、評価をされない場合がある。
- 4) さらに、評価された逸脱に対して調整(adjustment)が選ばれる：否定的に評価をされて問題となると、調整が決定される場合と調整されない場合がある。
- 5) 最後に、その調整が遂行(implementation)されることになる：調整が決定されると実際に行動に移される場合と、延期されたり中止されたりするような場合がある。

(Neustupný1985a、Neustupný1994、ネウストプニー1997、加藤2010)よりまとめた

このプロセスの特徴は、まず、何らかを判断するための基礎的規範からの逸脱によって活性化されることである。ここでの基礎的規範は基底規範(base norm:Neustupný 1985a)と呼ばれている。つぎに、それぞれの管理プロセスにおいては必ずしも1)から5)までの段階がすべて存在するとは限らず、各段階で止まる可能性もある。また、逸脱に対する評価の中に、否定的評価のほか、中立的評価、肯定的評価も含まれる可能性があり、否定的評価され、問題として認知された逸脱が、二次的に非評価されたり、逆に肯定的に再評価され

たりする場合もある(Fairbrother 2004、村岡2006)。そして、調整の目的も問題の解消のみならず、解消できない問題の負担の軽減、または問題の潜在化になる場合もある(村岡2006)。言語管理はすべての言語に向かう行動を含む(Neustupný 1994)というように、言語プロダクトより言語使用に関するプロセスのほうに関心をもち、談話を分析していく時に最適な理論的枠組みであると考ええる。

上記に述べられたように、接触場面研究は従来の「言語接触」研究に比べると、個別に考えられた言語と文化の接触に「接触場面」の「場面性」と「参加者の視点」を導入し、接触の結果(プロダクト)のみならずディスコース・プロセス(言語管理プロセス)にも分析の焦点を当て、さらに考察の範囲を「文法的規則」から社会文化的、社会言語的要素を含む「コミュニケーション規則」の全般に広げることによって、異文化コミュニケーション場面研究に適した理論的枠組みとして定着できたと考える。

本研究の研究結果を日本語教育、特に中国人日本語学習者の会話能力の育成へ還元するという目的を考える際、接触場面研究の観点に基づいて、CSの不一致応答のプロセスを分析、考察が必要となる。日本語教育の研究は外国人が実際に日本語をどのように使っているかを研究してみる価値があるはずであり(ネウストプニー 1981:30)、「すべての言語問題の基礎は談話のミクロプロセスにある」(ネウストプニー1997)と指摘された。そして、村岡(2006:106)は、学習者が参加する実際の場面を体系的に調査し、問題分析を行うことによって、問題を明らかにし、そこから必要な教育方法を考えていくという言語教育パラダイムへ転換すべきであると強調し、接触場面研究の視点に基づく言語教育のパラダイムの必要性を指摘した。また、接触場面教育について、加藤(2010:276)は、参加者の両者に実際に起こりえる問題とその解決方法の種類を提示する必要がある、相手話者がどのような談話上に現れていない意識、つまり管理プロセスでの「留意」と「評価」をもっているかを知ることが重要であると指摘した。

1.3 不一致応答に関する先行研究

この節では、不一致と不一致応答の定義、対人関係の構築・維持における不一致応答からの影響、CSとJS、そして英語母語話者が参加している母語場面、接触場面での不一致応答の特徴などについて、先行研究をレビューし、これまでの研究の成果をまとめ、まだ明らかにされていない課題を整理する。

1.3.1 不一致、不一致応答の定義

人々がある事実(fact)や考え(idea)をめぐる、相手と異なる意見ないし見解(opinion)を持っていることを表すには、英語の文献では、「disagreement」(Pomerantz 1984, Maynard 1985, Brown&Levinson 1987, Kakavá1993, Rees-Miller 2000, Locher 2004ほか)のほか、「conflict」、「not in accord」(Jones 1990, Szatrowski 2004)の用語が使用されることもある。日本語の文

献では、「意見の不一致」(大津2001、王2006他)、「不同意¹⁰」(末田2000、村田2002、木山2005、王2007他)、「不同調」(黄2003)などの用語が用いられている。なお、これらの用語が用いられながらも定義が明記されていない先行研究は数多い。これより、定義が明記されている先行研究から「不一致」の定義を引用し提示する。

(1) Rees-Miller (2000) : disagreement

A speaker(S) disagrees when s/he considers untrue some proposition(P) uttered or presumed to be espoused by an addressee(A), and reacts with a verbal or paralinguistic response, the propositional content or implicature of which is *not P*.

Rees-Miller (2000:1088)

話し手Sは、聞き手Aが発話した、もしくは信奉していることが前提とされるある命題Pが、真実ではないとみなした場合に不同意し、Pではない命題内容または含意を持つ発話で反応する。

木山(2005:166)より引用

(2) Waldron&Applegate(1994:4, Lochaer 2004:94より引用) : verbal disagreement

a form of conflict, because verbal disagreement are taxing communication events, characterized by incompatible goals, negotiation, and the need to coordinate self and other actions.

衝突の一つの形式である、というのは、口頭的不一致はやっかいなコミュニケーション事象であり、両立しない目標、交渉、そして自分とほかの行動の協調への要求によって性格づけられている。

筆者訳

(3) Jones(1990:41, Szatrowski 2004:2-3より引用) : not in accord

being ‘not in accord’ includes having opposing opinions, opposing goals, or even disagreements about the kind of conversation that is being developed—what the talk is about or what its purpose is.

“一致しない”には、相反する意見、目標を持つこと、さらに、展開されている会話の種類—会話の話題や目的—に対する不一致まで含まれている。

筆者訳

¹⁰ 「不同意」の定義について、末田(2000)、村田(2002)では明記されていないが、木山(2005)と王(2007)では、Rees-Miller(2000)の定義を援用している。

(4) 大津(2001)：不一致

会話の中で、摩擦の原因となる、参加者間の思考内容のくいちがい

(5) 王(2006)：不一致

会話参加者間の事実情報や認識などに対する思考のくいちがい

(6) 黄(2003)：不同調

インタビューにおいて、インタビュアー、つまり、情報要求者が推測や感想の確認を通して話し相手から情報、意見、感想を引き出そうとする発話を「同調要求」とし、その同調要求の発話に対して応答者側が訂正、否認、不賛成を示して同調しない場合を不同調と認定する

また、「disagreement」の対象の範囲について、Maynard(1985:3)では次のように指摘した。

any verbal or non-verbal preceding act type can serve as an initiator of disagreement, if contradicted.

先行するすべての言語的、非言語的行動のタイプが相反すれば、不一致を起こす材料となれる。

筆者訳

以上の先行研究での定義は、「不一致」に内包される内容(content, i.e., 何について反対されているか、Angouri and Locher 2012:1549)について、会話の相手が発話した内容(Rees-Miller 2000、王2006)から、インターアクションあるいは会話の目的、話題(Jones 1990, Waldron&Applegate 1994)、さらに、不一致を生じさせる非言語的行動(Maynard 1985)までと扱う範囲が異なる。不一致が対人関係に与える影響の側面についても、「対立の一形式」(conflict, Waldron&Applegate 1994)、「摩擦の原因となる」(大津2001)というように、影響の深刻度の度合いに異なりがみられた。なお、不一致を引き起こす物事の範囲、対人関係の構築・維持における不一致からの影響の深刻度などの面において、以上の先行研究では異なりがあるものの、ある物事に対する参加者間の認識がくいちがっているという点では共通し、「不一致」の中心的概念として抽出できると考える。したがって、先行研究での定義を参考にし、「意見の不一致」について次のように定義した。

会話の相手の先行発話に提示されたある事実情報の真偽についての認識や、ある物事に対する評価、感想などにおける会話参加者間の考えのくいちがい

「考えがくいちがう」とは具体的にどのようなことを指すかについて、Rees-Miller(2000: 1088)の「disagreement」の定義に従うことにした。つまり、ある物事をめぐって、CSとJSの間は考えがくいちがっているということは、JSが発話した、もしくは信奉していることが前提とされるある命題Pに対して、CSが「否認」、「不理解」または受け入れないと思っている(命題Pではないまたは命題Pの妥当性を一部しか受け入れない)ことである。また、Jones(1990)、Maynard(1985)の指摘も参考にし、JSの非言語的行動や、進行中のインタラクティブあるいは会話の目的、会話の話題に対して、CSが考えのくいちがい(e.g. 当該の行動や会話の目的、会話の話題に対する否定的意見)を感じる場合においても、意見の不一致が生じたと捉えて研究の対象に入れる。

話し手が相手の先行発話から不一致を感じた後の応答ということについて、英語の文献では、意味合いの面において完全に一致する用語が見当たらなかった。不一致の表示が伴う応答の視点から捉えれば、「disagreement」¹¹が最も多く使用され、「disagreeing response」(Walkinshaw 2009:30)や「disagreeing」、「express different opinion」などの使用もみられた。なお、上記の用語では、何らかの形(明示的または非明示的)での不一致の表示という意味が中核な意味であるため、本研究の研究対象である「不一致応答」と異なる側面があると考えられる。本研究において、不一致が生じた後のCSの応答全般が研究対象であるため、不一致の表示が伴う不一致応答のみならず、不一致を提示しない(不一致の表示の回避)応答も含まれている。日本語の文献には、王(2006)は不一致を感じてからの話し手が不一致を提示した発話のみならず、不一致を潜在化させた発話も取りあげ、「不一致応答」という用語で統一した上で考察を行った。本研究においても、CSが不一致を感じた後で、JSに対して応答することを表すには、「不一致応答」の言い方を用いることにした。

また、不一致の表示に関連して、異なる見解をもつ参加者間の意見交換といった発話行為を表すには、「口頭的対立」(verbal conflict)、「論争」(argument)、「議論／討論」(dispute)などの用語がある。不一致の表示とこれらの用語の包含関係について、(Locher 2004:100, Schiffrin 1990:256)は、最も広い意味で捉えられているのが「verbal conflict」で、「verbal conflict」というカテゴリの中に「argument」が置かれていると指摘し、Kakavá(1993:36, Locher 2004:95より引用)は、不一致の表示と「conflict」、「argument」、「dispute」との関係について、次のように説明した。

Since disagreement can lead to a form of confrontation that may develop into an argument or

¹¹ このように、「意見の不一致／不一致」と「不一致の表示」は異なる物事を指すが、英語の文献では「disagreement」のみで表される場合が多い。英語で書いた先行研究の内容を引用する際に、必要に応じて「意見の不一致／不一致」、「不一致の表示」のように区別して説明する。

dispute, disagreement can be seen as a potential generator of conflict. Not only can disagreement create conflict, but it can also constitute conflict, since an argument is composed of a series of disputable opinions or disagreements.

Kakavá(1993:36, Locher 2004:95より引用)

不一致の表示は論争または議論までに発展する可能性のある一種の衝突の形に導くことができるので、対立を生じさせる潜在的要因の一つとみなすことができる。不一致の表示は対立を生じさせることができるのみならず、対立を構成することもできる。それは、一つの論争は一連の議論可能な意見または不一致より成り立っているからである。

筆者訳

上記の指摘から、「verbal conflict」のカテゴリには、「argument」、「dispute」などのサブカテゴリがあり、不一致の表示は異なる見解をもつ参加者間の意見交換の基礎的な構成要素であることがわかった。そして、意見交換を「argument」、「dispute」までに導くことができ、「conflict」を生じさせることができるほか、不一致の表示自体は「argument」、「dispute」の内容の一部にもなりうるとわかった。本研究では、主に異なる見解を持つ参加者間の意見交換の構成要素の側面から不一致応答を捉え、議論や論争を導く可能性の側面の分析に深く踏み込む予定はない。

1.3.2 対人関係の視点から捉えられた不一致応答

人々が“自分の考えを貫くこと”のみを考慮し不一致を提示することは、インタラクシヨンの参加者にとって、一つの脅威(challenge)である(Locher 2004:94)ため、対人関係の構築・維持(interpersonal concern, Angouri&Locher 2012:1550)に与える影響の視点から不一致の表示を捉えて数多くの研究が行われてきた。これらの先行研究の観点を整理すると、不一致の表示は対人関係に消極的効果をもたらす、または積極的効果をもたらす、というように大きく二分できる。まず、不一致の表示を「消極的効果をもたらす」、「インポライト」な発話行為、非優先的応答であると位置付けて、その実施に用いられる典型的な言語的手段、ストラテジーを論述した研究には、1.2.2と1.2.3で述べられたLevinson(1983)、Pomerantz(1984)、Brown&Levinson(1987)のほか、Leech(1983)、Sacks(1987)、スペンサー＝オーディー(2004)などもある。

Leech(1983) は、フェイスへの配慮から不一致の表示を非優先的応答であると位置付け、さらに相手話者との不一致を最小限に収めるというマキシムをポライトネスの原理(politeness principle)¹²に入れた。Sacks(1987:57, Walkinshaw 2008:30より引用)においても、先

¹² Leech(1983)のポライトネスの原理では、六つのマキシムが挙げられている。一致のマキシム(agreement maxim)原則では、「自己と他者との意見相違を最小限にせよ」、「自己と他者との意見一致を最大限にせよ」と規定されている(山岡他 2010:68)。

行発話への同意を優先する傾向(同意の優先: preference for agreement)は普遍的に存在し、不一致の表示は非優先的な二次的応答(dispreferred second response)であると述べられている。また、スペンサー=オーディー(2004:2)は、意見の不一致には、ある情報の正確さやある行動の適切さについての意見の不一致といった「内容」的側面があるほかに、「人間関係」的側面もあると指摘した。後者について、不同意の表示は、相手に対する敬意の欠如を伝えることになったり、相手を出し抜こうする企てだと解釈されたり、憤慨や憎悪という感情を引き起こしたりする側面があると説明した(ibid)。

一方、Angouri&Locher(2012:1551)は、不一致の表示を「既定のネガティブな発話行為」(priori negative act)と見なすべきではないと指摘した。このように、不一致の表示が必ず参加者間の対立(conflict)を引き起こすとは限らず、対人関係を促進させる側面もあるとする先行研究には、Tannen(1984)、Schiffrin(1984)、Tannen&Kakavá(1992)、Kakavá(1993)、Locher(2004)、Sifanou(2012)、Angouri&Locher(2012)などがある。

ユダヤアメリカ人の会話を分析したSchiffrin(1984:311)は、近い社会的関係にある会話参加者間の異なる見解の交換には、社交的議論(sociable argument¹³)という種類のものがあり、これによって参加者間の連帯(solidarity)を示し、親密さ(intimacy)を保つことができると指摘した。Tannen&Kakavá(1992)とKakavá(1993)も、親しい関係の参加者間では不一致の表示は社交性(sociability)を表し、親密さを作り出す手段であると述べている。Sifanou(2012)、Angouri&Locher(2012)はこれまでの不一致の表示に関する研究を整理し、不一致の表示は必ずしも参加者間のラポートを侵害すると限らなく、不一致の表示の機能に関する文化グループレベル、個人レベルの認識、参加者間の親疎関係、不一致が行われる場面の特徴(e.g. 商談などの交渉場面、課題解決型の会議 problem solving meeting)などによって、対人関係の構築やインターアクションの目的の達成を促進できると指摘した。

以上の先行研究は主に英語母語話者の不一致の表示を扱った研究であるが、ポライトネスの実現に向かう関心が普遍的であるという観点に基づいて考えると、不一致の表示は相手のフェイスを侵害する恐れがあるため、非優先的発話行為であるという認識は、ほかの文化グループでも共通していると予想される。そして、不一致表示の機能に対する文化グループ別、個人別の認識の異なり、相手との親疎関係、参加しているインターアクションの性格や目的などの社会的、場面的要因によって、不一致の表示はインポライトネスな発話行為ではなくなり、インターアクションの進行に積極的効果をもたらすこともできる。

1.3.3 母語場面での不一致応答に関する研究

これより、英語、日本語、中国語の母語話者の母語場面での不一致応答を個別に取りあげ、または個々の母語場面での不一致応答の特徴を比較した先行研究を提示し、CS の不

¹³ Schiffrin(1984:331)は、「sociable argument」を、「議論のフォームを有しているが、議論のような深刻な実体(substance)を有していない意見交換(exchanges)」としている。

致応答研究に与える示唆をまとめる。

(1) 英語母語場面

Rees-Miller(2000)の研究では、不一致の表示頻度、表示内容の構成に、社会的役割の相違(e.g. 教師－学生)による権力(power)の不均衡な配分が影響しているほかに、インタースクシンの性格(e.g. 教室内の授業)、参加目的(e.g. 学生の授業参加の保持)なども関与していることが明らかになった。不一致の表示における権力の構築と行使、ポライトネスとの関連性(interface)を分析したLocher(2004)から、これらの過程に関与する社会的、場面的要因の多様性が指摘されている。この二つの先行研究から、不一致が生じた場面に埋め込まれた社会的、場面的要因から不一致応答に与える影響、これらの要因の場面依存性、包含性(ブラウン・レヴィンソン 2011:101~103)が述べられた。

(2) 日本語母語場面

日本語母語場面での不一致の表示に用いられる言語表現、調整ストラテジーについて、Jones(1990)は「明示的」、「非明示的」の不一致の表示に分類し、それぞれの場合に用いられる「言語的」と「非言語的」ストラテジーを挙げた。ジョンズ(1993)は、同僚や友人同士の話し合いにおいては、反対の表明を「遊び」(e.g. 冗談めかして言う)でやっているふりを通して、コンフリクト¹⁴の度合いを軽減することがあると指摘した。大津(2001)は、不一致の対象の異なるタイプ¹⁵ごとに、JSが共通して使用する緩和処置を考察した。大塚(2005)は、不一致の表示に用いられるターンのはじめの部分、そしてターンの中で生じるマーカーについて、また、Mori(1999)は不一致の表示に用いられる接続詞¹⁶、接続助詞の役割について分析した。Hayashi(2009)は、話し手が先行発話で表された「評価」(assessment)から離脱(departure)を感じ、応答する際に用いられる「うん」の機能、そして、Hayashi(2010)は、話し手が真偽判断の質問である先行発話から感じた問題の伝達に用いられる「可変的」答え(transformative answers)のバリエーション、個々の答えが不一致を潜在化させる機能を取りあげて考察を行った。

不一致の表示における社会的、場面的要因の関与について、ジョンズ(1993)は、場面の性格(e.g. テレビ番組での討論会)によって、コンフリクトの提示が許容される場合があると述べ、大津(2001)は、不一致の対象となる話題の性格によって、JSの緩和処置の使用傾向に異なりがみられると指摘した。そして、木山(2005)はポライトネス理論の観点に従って、不一致の対象となる話題の性格¹⁷、不一致の種類¹⁸、不一致の表示のしかた¹⁹、親疎関

¹⁴ Jones(1990)、ジョンズ(1993)では、「意見の不一致」をコンフリクト(conflict)と称している。

¹⁵ 大津(2001)では、不一致の対象となる話題の内容によって、ある事柄についての真偽判断をめぐる「事実認識の不一致」、ある事柄についての個人的な評価をめぐる「評価の不一致」、話し手が発話によって伝えようとした意図をめぐる「意図と解釈の不一致」の三つのタイプに分けて分析した。

¹⁶ Mori(1999)では、不一致の表示と同意の求め(pursuit of agreement)の時に用いられる「でも」、「けど」、「から」、「だって」、「だから」の役割を分析した。なお、「だから」については同意の求めに用いられた事例しか挙げられなかった(Mori 1999:158-168)。

¹⁷ 木山(2005)では、不一致となる話題の内容について、「真偽が実証されており、それについて議論の余地はないといった事実に関する不同意の内容」を「事実」とし、「真偽を実証する類のものではなく、立場や観点によって議論が成立するといった意見に関する不同意。事実について述べられているものであ

係²⁰の側面に焦点をあて、異なる種類の不一致が生じた後の不一致の表示頻度、不一致の表示方法における親疎関係からの影響を分析した。王(2007, 2008a, 2009)も同じくポライトネス理論の観点を取り入れ、親疎関係、上下関係、不一致の対象の三つの要因から不一致の表示に与える影響を考察し、P、D、Rの要因のほかに、会話の話題や目的もJSの不一致応答に関わる要因であると述べている。

会話やインターアクションの目的の達成という視点から、梶本(2004)は、JSが反対の意見を述べるという「目的達成」と、対人関係の維持という「対人関係配慮」の二つの指向性考慮しながら、様々な調整ストラテジーを選択して会話を進める特徴はあると指摘した。そして、「意見の一致を目指す」という目的で行われている会話では、断定的な否定の多用は目的の達成を妨げ(大塚2005)、そのかわりに、参加者が互いの異なる見解を部分的に認めながら、自分の意見の中で妥当点を示す傾向があると観察された(大和2009)。

(3) 日本語母語場面と英語母語場面の比較

不一致の表示に用いられるストラテジーの比較を通して、Beebe&Takahashi (1989)と白井(2009) から、叙述と質問形式をストラテジーとして不一致を提示する点では、JSと英語母語話者が共通しているものの、質問文の語調(tone)や内容構成(content)の側面では異なる傾向にあることが明らかになった。また、Beebe&Takahashi(1989)は、英語母語話者が常に日本人より直接的にまたは明確に不一致を示すとは限らなく、日本人も常に不一致の表示を回避するとは限らないと指摘した。これについて、村田(2002)は、アメリカ英語において自分の意見を述べてはいるが、「ソフトな明瞭さ」が最も大切にされていると述べ、また、双方の母語場面においても、会話の相手との上下関係、親疎関係などの要因が不一致応答に関与していると指摘した。

(4) 中国語母語場面

不一致の表示に用いられる言語表現を研究対象に、Wang(1998, Tuan and Hsu 2009より引用)は日常会話場面を取りあげ、CSが多く使用するストラテジー、異なる発話意図を実現させるために使い分ける前置き表現やマーカーを挙げた。

不一致応答に関与する社会的、場面的要因について、Pan(2000)は正式な(official)会議場面に注目し、Liu(2004)は大学での自然会話場面²¹を取りあげて、不一致の表示に用いるストラテジーの選択と使用における権力からの影響を論じた。この二つの研究から、階層的

でも、話し手が確認をとって、推測して発話しているとみなされる場合の不同意の内容」を「意見」とした。

¹⁸ 木山(2005)では、不一致を「不同意」と称し、「不同意の先行発話が自己卑下や相手（不同意する者）へのほめではない場合」の不同意を「実質的不同意」とし、「ほめである」場合の不同意を「儀礼的不同意」として分類した。

¹⁹ 木山(2005)では、不一致の表示のしかたについて、「発話の字義通りの意味によって分かる不同意」を「直接的な不同意」とし、「字義通りの意味ではなく、会話の文脈や、話者同士が共有する背景的情報に基づいて推論することによって分かる不同意」を「間接的な不同意」とした。

²⁰ 木山(2005)では、親しい友人同士、初対面同士のペアを分析、比較した。

²¹ Liu(2004)は、大学生と教師を考察対象に、DCT(Discourse Completion Test, 談話完成テスト)のデータと自然会話の録音データに基づいて、統計の手法とエスノメソドロジーの手法を用いて分析を行った。

な権力の構造が確立している場面において、権力の不均衡な配分が不一致の表示に最も大きく関与していると確認できた。特に、大学の環境においては、専門知識(knowledge)や情報(information)の保有度、割り当てられた責務(assignment of responsibility)、高圧力(coercion)、賞罰を決める権力(the ability to decide rewards and penalties)などは権力のリソースになっていることが明らかになった(Liu 2004:106-110)。そして、日常的会話場面に考察の焦点を当てたDu(1984)、Pan(2000)から、不一致応答に用いられる戦略の選択に関与する要因として、社会的地位や年齢の差異などの要因が挙げられた。CSの全体的特徴として、Pan(2000)は、CSが発話事象(speech event)の社会的コンテキスト、異なる場面での異なる力関係を認知し、場面ごとに決められた社会的制約に適応し、個人に強いられる社会的期待に満たせるよう、自分の役割と発話戦略(speaking strategies)調整していると指摘した(ibid.:104, 140)。

(5) 中国語母語場面と英語、日本語の母語場面の比較

Yeung(2000)は、香港出身の広東語母語話者(以下、HKCとする)とオーストラリアの英語母語話者(以下、AESとする)を調査対象者にして、それぞれの母語場面での会議²²を取りあげて分析、比較した。全体の傾向として、HKCのほうは不一致の表示をより多く回避すること、AESのほうはヘッジ表現をより多く使用することなど、予想に反する結果が得られた。これによって、不一致の表示には、文化的要因(cultural factors)のほかに、会話が収録された参加管理の場面(participative management situations)に対する制度上の要求(institutional demands)²³も大きく関わっていると指摘された。

王(2007)では、CSとJSを対象に、親疎関係、社会的地位、話題などの要因から不一致の表示に与える影響を分析、比較した。顕著な傾向として、まず、個人的範疇の話題が不一致の対象なる場合、親しい関係にある同位の相手に対して、CSのほうは不一致を明示的に示す傾向が強い。そして、社会的地位や役割が自分より高いに相手に対して、不一致の表示を回避する理由において異なりがみられたものの、回避する頻度が高い点ではCSとJSは共通している。また、Rees-Miller(2000)で述べられたように、先生として学生の意見に同意できないと想定される場面では、CSは言いにくいと感じる傾向があるとわかった。

中国語の母語場面、この場面と英語、日本語の母語場面との分析、比較を行った一連の先行研究から、CSは固定化された視点から権力の配分を認知する側面があるほか、不一致が生じた場面のコンテキストを考慮し、場面ごとの異なる力関係を「動的」視点から捉えた上で、自分の役割や発話戦略を調整していく側面もあるとわかった(Pan 2000)。そして、CSの不一致応答には、力関係や文化背景のほかに、参加する場面における制度化の要求や、親疎関係、不一致の対象となる話題の性格なども関与していることが明ら

²² 上下関係が顕在化する意思決定(decision-making)の会議。

²³ Yeung(2000)は、意思決定の会議に関する制度上の要求によって、参加者の積極的な参加が求められることになっている。したがって、HKCが従業員の立場でありながらも、会議の「場」においては、自分の見解に自信をもって固守するようになり、調整戦略を用いず不一致を明確に提示することも増えてくると解釈した。

かになった(Yeung 2000、王2007)。不一致が生じた場面ごとに、JSとの力関係からの影響に注目しながら、場面的コンテキストに対するCSの認知を多面的に捉えた上で、CSの不一致応答、それに関与する社会的、場面的要因を分析する必要があると示唆された。

1.3.4 接触場面での不一致応答に関する研究

本節では、CS、JS が参加している接触場面での不一致応答に関する先行研究をまとめていく。なお、これらの先行研究は社会文化的、社会言語的そして言語的背景の異なる参加者からなるコミュニケーション場面を取り上げたが、接触場面理論を応用して分析を行った研究ではない。つまり、場面の接触性(e.g. 言語をはじめとするすべての外来性要因が不一致応答に与える影響)、参加者の視点(e.g. 不一致の応答を行う際に参加者自身が感じる問題)、ディスコース(e.g. 不一致応答が言語化されるまでのプロセス)、非文法的能力(e.g. 不一致の応答に関する参加者の社会文化的、社会言語的能力)などの側面を分析、考察の焦点と定めなかった点では、接触場面研究と性格が異なっている。

(1) 英語使用の接触場面

1) JS が参加する英語使用の接触場面

ミラー(2004)²⁴は、否定的評価の表示によって参加者間の摩擦が生じた背景について、表示で用いられる緩和処置(前置きや躊躇の標識)に対する認識や解釈、否定的評価を行うタイミングや資格に関する文化的前提、などの側面における参加者間の違いを挙げた。また、否定的評価に伴う誤解や摩擦を避けるために、話し手が評価に用いる定型的表現のみならず、会話場面の状況に細心の注意を払う必要もあると提起した。服部(2004)は会話の話題に関する情報のなわ張り関係の視点に基づいて、情報が双方のなわ張り外にある場合と、聞き手のなわ張り内のみ深く入る場合を分析、比較し、前者の場合において不同意の応答がより簡略であると指摘した。そして、JS は反対意見、訂正情報の表明に使用される文型の点では英語母語話者(以下、ES とする)と類似しているが、独自の緩和戦略²⁵の使用も際立っていると述べられた(ibid)。JS が行う不同意の応答の全体的特徴として、応答は直截的なものになる傾向があり、応答における緩和戦略の使用頻度が低く種類も限られていると挙げられた。そして、JS が情報のなわ張り関係や先行発話の内容(事実、意見)に応じて緩和表現を使い分けることを十分に習熟できていなく、緩和戦略を出すタイミングも ES 並みの配慮を行うまでに至っていないと指摘された(ibid)。

2) CS が参加する英語使用の接触場面

Cheng&Tsui(2009)は、HKC と ES²⁶が参加する英語使用の接触場面で不一致が生じた会話

²⁴ ミラー(2004)で扱われたデータの一部は日本語使用の接触場面のものになっているが、ここでは「英語使用の接触場面」に関する研究に入れた。

²⁵ ネガティブ・ポライトネスの戦略としての「I'm sorry」、「Sorry」などの謝罪表現が発言冒頭に現れること、「I'm not sure」のような話題に関する情報が自分のなわ張り内ではないことを示す発話が反対意見、訂正情報の表明の前だけでなく後にも生起し、「no」のような事実、意見の相違を際立たせる表現が発言冒頭に多く現れることなどの特徴がある(ミラー2004:234)。

²⁶ 出身国はオーストラリア、アメリカ、イギリスなどである(Cheng&Tsui 2009)。

のやりとりを分析した。量的考察の結果からは、予想に反して、HKC はすべての場合において必ず不一致を示さないようにするとは限らなく、異なる意見または代案を提示するための不一致表示の回数が NSE を下回る傾向でもないとわかった。なお、HKC は双方または相手のフェイス保持を考慮し、やわらげられた言語表現や調和の手段(mitigating devices)²⁷を用いて不一致を示す傾向がより強いことが明らかになった。不一致を提示する際の発話の連鎖と言語表現に関する質的考察の結果から、双方の参加者は、相手に合わせて(aligned with)人間関係の維持、共通の基盤(common ground)の交渉・保持を図りながら不一致を示す傾向において、共通していることがわかった。参加者間の異なる傾向として、HKC が対立の回避に用いられる「回避戦略」(avoidance strategies)²⁸をより積極的に使用しているのに対し、ES は自分の位置を保持し、譲歩しない傾向がより強いと述べられた(ibid. :2377)。これによって、HKC が双方の参加者のフェイス保持をより多く考慮し、共通の認識の基盤の構築により多く関心を払う傾向であるとわかった。さらに、不一致の表示に最も強く関わるコンテキスト依存の要因には、対立(不一致の表示)管理に関する参加者別の文化的価値と志向のほか、インターアクションの目的、不一致を提示する話し手の目的、不一致の対象となる物事の内容なども含まれると指摘された。Tuan&Hsu(2009)は、台湾出身の中国語母語話者(以下、TWC とする)と ES が参加する英語使用の接触場面²⁹のデータをもとに、双方の参加者が用いる間接的な不一致表示の構造(sequential information)を分析した。TWC が「帰納的」なディスコースパターンを多く使用することに対して、ES は「演繹的」にディスコース情報を組み立てる傾向にある。この結果から、TWC はポライトネスと会話全体の展開を配慮し会話を進める特徴があり、ES は一旦自分の異なる見解を示し、その後は支える情報の提示を通してフェイス侵害を軽減する特徴があると指摘された。また、Cheng&Tsui(2009)と共通し、間接的な不一致表示の構造に関与する要因として、文化的差異のみならず、参加者間の社会的地位の相対的關係、話題といった場面コンテキストの要因も挙げられた。

(2) 日本語使用の接触場面

JS と韓国人日本語学習者(以下、KS とする)が参加する日本語使用の接触場面での不一致表示を考察した先行研究には、末田(2000)と李(2005)がある。末田(2000)は、JS の母語場面、JS と KS が参加する接触場面を比較し、事実情報に関する不同意表明³⁰において、双方はともに直接的な戦略を使用する傾向であるが、認識に関する不同意表明においては JS のほうが間接的な戦略をより多く用いていると指摘した。そして、不一致を提示する場合、「能動的な調整」³¹が多く用いられると、会話が「つなげる、はずませる」

²⁷ ヘッジ表現、見せかけの同意、不一致の内容の理由づけや詳述などが挙げられた(Cheng&Tsui 2009)。

²⁸ 戦略として、話題転換と多義的な言葉の使用(resorting to ambiguous language)が提示された(Cheng&Tsui 2009:2377)。

²⁹ 双方の参加者による討論(discussion)、課題解決(problem-solving)のためのインターアクション場面である。

³⁰ 末田(2000)では、「disagreement」を「不同意表明」と称している。

³¹ 末田(2000)は「能動的な調整」を相手のポジティブ・フェイスを満足させるために積極的に働きかけることとしている。

といった「双方向の会話展開」になりやすいが、このような調整の使用が減少するとともに、相手によってポジティブ・フェイスが満足されないため、自分で自分のポジティブ・フェイスを満足させる「一方向の会話展開」になる傾向が強まる。双方の参加者を比較すると、KSのほうは「自分のポジティブ・フェイスを満足させる調整」が多く、能動的な「相手のポジティブ・フェイスを満足させる調整」の使用が少ないとわかった。さらに、フォローアップ・インタビューから、双方の参加者はともに意見の不一致の表明によるフェイス侵害にそれほど気付かなかったが、JSは両場面での会話のはずみ方の印象の相違を明確に意識していることが明らかになり、「能動的な調整」の使用傾向の相違はこのような印象を生み出す一要因であると指摘された。李(2005)は、ロールプレイの形で行われるディベートのデータを対象に、議論の場におけるJSとKSの言語行動の相違を比較した。JSは自分の意見をストレートに表現する自己主張優先型より、相手配慮型を好む傾向であり、KSが自己主張優先型のほうを好むとは断言できないが、相手配慮型の使用においてJSと違って、相手の意見への同意や自分の意見のマイナス面を言う時の内容が具体的ではなく、発話も短いとみられた。そして、自分と異なる意見に最初に反応する時は、JSが自分の立場表明を先送りする衝突回避型を多く用いているのに対して、KSが自分の立場表明を優先する立場表明型を多く用いていることが明らかになった。

JSとCSが参加する日本語使用の接触場面での不一致の表示を分析した先行研究には、平野(2006)と楊・倉田(2011)がある。平野(2006)は、日本語教育実習生であるJSと日本語非母語話者³²を調査対象者とし、3ヶ月間の実習準備期間に行われた話し合いでの反対意見表明に着目して縦断的考察を行った。初期においては、JSが暗示的な「共感期待型³³」を最も多く使用していたことに対し、非母語話者は明示的な「否定型」が最も多かった。中期には、両者の最も特徴的だった「共感期待型」と「否定型」の使用が大幅に減少した。後期においては、JSから「共感期待型」が観察されなかったかわりに「指摘型」は増加したが、非母語話者からは「否定型」が観察されたことがなく、「指摘型」の使用が最も多かった。これらの考察結果から、接触歴の増加とともに、JSと非母語話者間では異なる側面が残る一方、双方が相手の規範をより多く参照し不一致の表示に適用できるようになり、使用する言語表現や調整ストラテジーも類似してくることが明らかになった。楊・倉田(2011)は、討論の場面における意見表明の仕方を対象に、JSとCSが表明で使ったモダリティの種類、使用頻度の特徴を比較した。使用頻度をみると、学習者の意見表明において、モダリティ表現を付加しない命題のみの発話が大勢を占めることが明らかになった。そして、学習者は反対意見を述べる場合においても、命題のみの発話を用いることがあるのに対し、JSは合意を宣言するような立場を明確にする場面、または討論の局面を分かりやすく示す文脈

³² 非母語話者は中国、韓国、台湾出身の人である(平野 2006)。

³³ 平野(2006)では、「相手の見解に対し明示的に否定・反対する」方略を「否定型」、「立場が対立するような意見や情報を提供する」方略を「指摘型」、「相手に情報や意見を求めることにより、暗に反対の意図を示す」方略を「発言要求型」、「論題と関係ない情報や自分の感想を述べることで相手からの共感を期待する」方略を「共感期待型」としている。

にしか、命題のみの発話を行なわないとわかった。また、モダリティの種類別(認識³⁴、伝達、観察・推定、伝聞)にみると、CSが使用したモダリティの種類も限られているため、討論の場面や発話の内容に応じて適切なモダリティの形式を選択して使用できる能力の育成が日本語教育の課題として挙げられた。

1.3.5 不一致応答に関する接触場面研究

接触場面理論の立場に従って、言語プロダクトとプロセスの視点からCSの不一致応答を捉えた先行研究には、王(2006)がある。そして、KSの事前調整の段階を研究対象としたキム(2008)において、KSが不一致の表示を行う際に参照する規範が述べられた。このように、不一致応答に関する接触場面研究がまだ数少ないのが現状である。

王(2006)は、JS、中国人日本語学習者、中国人母語話者を調査対象者に、それぞれの母語場面と日中接触場面での不一致応答を分析、比較した。分析は応答の同調性³⁵、応答ムーブ³⁶の構成要素、言語表現の構成要素、との三つの視点から行われた。まず、同調性の分析結果から、接触場面での中国人学習者はJSより非同調的ストラテジーを多く使用する傾向であるが、母語場面に比べると、同調および態度保留のストラテジーの使用が増える傾向にもあると見られた。そして、JSは接触場面において不一致を伝えないストラテジーの使用が多くなっている。

応答ムーブの分析から、接触場面においては、中国人学習者とJSが各自の母語場面に比べると、合図をより多く使用する点で共通していることがわかった。使用された合図の内訳をみると、中国人学習者は日本語のためらいマーカーを習得できた一方、最も多く使用しているのはやはり非同調的なマーカーであり、母語規範の保持が伺える。

言語表現の構成要素の分析から、接触場面において、JSは緩和的表現を用いる傾向がより強まってくることがわかった。中国人学習者は母語場面に比べると、「文を言い切らない」などの緩和的表現の使用頻度が増加する傾向は目立っているが、擬似疑問の多用など、母語による干渉も強いと見られた。全体的には、中国人学習者は不一致応答を行う際の日本語の規範を一部習得し、意識的に適用しようとする傾向があり、母語の転移による影響もあるため、JSとCSの不一致応答の中間的な特徴を持っているとまとめられた。

キム(2008)の研究は、韓国人超上級日本語話者が誤用を生み出さないように、表層化前の段階でどのような言語管理を行っているかを中心に分析した研究であるが、不一致の表示に関して「同調的な応答」のストラテジーが事前調整で最も多く使用されていることが

³⁴ 楊・倉田(2011)では、「認識」のモダリティには、「だろう、かな、じゃない」などの表現で表す「推量」、「かもしれない」で表す「蓋然性」、「感じ、みたい、って、(する)そうだ」などの表現で表す「証拠性」の三つのサブカテゴリが含まれ、「伝達」のモダリティには「ね、よ、よね、なあ、の、もの」があり、「観察・推定」のモダリティには「感じ、みたい、(し)そうだ」があり、「伝聞」のモダリティには「って/という系、(する)そうだ」があると分類し分析を行った。

³⁵ 王(2006)は先行発話との同調性の度合いに基づいて、CSが不一致応答に用いたストラテジーを、「同調的」、「態度保留」、「非同調的」の三つの傾向に分類した。

³⁶ 王(2006)は Sinclair&Coulthard(1975)で提唱された発話交換構造モデルに基づき、不一致応答ムーブを合図、前部、主要部、後部という四つの構成要素に分けて分析を行った。

明らかになった。韓国人超上級日本語話者が「日本人との会話では、相手の話に強く否定すると相手はびっくりするのでできるだけ否定する表現は避けようとする」、「強い否定は日本語の規範ではない」といった規範を相手規範として認識し、相手とのくいちがう思考内容を会話上に顕在化させない同調的な応答を行う傾向があると指摘された。キム(2008)において、平野(2006)で述べられたように、接触場面の経験が増えるとともに、非母語話者が不一致応答に関する相手規範をより積極的に適用する傾向になると示唆された。

英語そして日本語接触場面でのCSの不一致応答に関するCheng&Tsui(2009)、Tuan&Hsu(2009)、平野(2006)、王(2006)、楊・倉田(2011)などでの分析結果をまとめると、ESに比べて、CSは双方のフェイス保持をより多く配慮し、反対意見の表明による対立を緩和できるように、言語表現や調整ストラテジーを工夫する傾向が強いとみられた。なお、JSに比べると、CSは異なる見解の提示を優先的に考慮し、一部のモダリティ表現を用いながらも不一致を明確的に示す傾向が顕著であると指摘された。この二つのやや相反する傾向を生み出す背景には、不一致の表示に参加者の文化的背景のほかに、場面コンテキストも大きく影響する(Schiffrin 1984, Pan 2000, Locher 2004, Cheng&Tsui 2009ほか)と指摘されたように、異なる性格の接触場面の特徴(e.g. 英中接触場面と日中接触場面)、個々の不一致応答が行われた場面の社会的、場面的要因(e.g. 親疎関係、インタラクティブな会話の目的)からの影響があると考えられる。特に、王(2006)とキム(2008)から、非母語話者が日本語使用の接触場面で不一致応答を行う際に、参照する規範の多様性と変動性の一端を示唆された。このように、接触場面理論の立場に従い、場面の「接触性」をふまえた上で、不一致応答に用いられる言語表現、調整ストラテジー、不一致応答が言語化されるまでの言語管理、生成のプロセス、関与する社会的、場面的要因、などの側面から、CSの不一致応答の分析を進める必要性をふたたび確認できた。

1.3.6 先行研究のまとめと残された課題

(1) 先行研究のまとめ

これまでに挙げた先行研究から、対人関係の構築・維持において不一致応答が果たす機能、不一致応答に利用される言語的、非言語的リソース、これらのリソースの選択、利用における文化、言語的背景をはじめとする様々な社会的、場面的要因からの関与など、不一致応答研究についてある程度の知識の蓄積ができてきたことが明らかになった。その一方、研究のアプローチの側面において、さらに改善する余地があると考ええる。

CSの不一致応答に関する先行研究には、母語場面でCSの不一致応答の分析、他言語の母語場面での不一致応答との比較、などのアプローチが用いられた研究が大半である(Du 1995, Wang 1998, Pan 2000, Liu 2004, Yeung 2000, 王2007他)。また、接触場面での参加者の不一致応答を取りあげた研究のほとんどが、接触場面という言葉を用いながらも、CSと目標言語の母語話者の特徴の比較にとどまる研究(Cheng&Tsui 2009, Tuan&Hsu 2009, 平野2006, 楊・倉田2011)であり、接触場面理論に基づいて日中接触場面でのCSの不一致応

答を研究対象とした先行研究は数が非常に限られている。

母語話者と非母語話者を比較した研究では、それぞれの母語場面における発話行為の特徴、そして、接触場面における双方の発話行為の相違点の一部を明らかにすることはできる。なお、発話行為における双方の異なる傾向、特に接触場面での異なる傾向を生じさせる要因が、参加者間の文化的、言語的背景の相違、接触場面での非母語話者の文法的、語用論的転移のみに限られている、という観点はこのような研究の根底にあると考える。接触場面は母語場面と根本的に同じではなく(Neustupný1985 a)、この二つの場面はコミュニケーションのパターンやそこに含まれる問題が本質的に相違している(ファン2006:123)と指摘されたように、接触場面においては母語場面と同じ現象が起こりうるが、母語場面では起らないような現象も現れ、参加者間の文化的、言語的差異または転移のみでは説明しきれない部分がある。それは、接触場面において使用される言語の母語規範が基底規範として適用される(Neustupný1985 a)のみならず、非母語話者が自分の母語の規範やインターアクションの進行とともに双方が交渉しながら作り上げる接触規範を参照することもあり(加藤2010:37)、接触場面では自明の場の規範が原則として参照できないことになる(村岡2011)からである。以上の指摘と王(2006)、キム(2008)の分析結果をあわせて考慮すると、意見の不一致が生じた日中接触場面では、CSが場面的コンテキストの特徴に応じて、相手規範(日本語規範)、母語規範(中国語規範)、接触規範などの様々な規範を個別に、または複合的に参照して適用した上で、不一致応答を行うことになっていると予想される。したがって、母語場面でのCSの不一致応答の分析結果、他言語の母語場面での不一致応答と比較した結果などは参考する価値があるが、本研究では、研究の出発点を接触場面研究の観点に切り替え、CSの視点に基づいて不一致応答が言語化されるまでの言語管理、言語生成のプロセスを事例ごとに分析していく必要がある。

また、不一致応答に関与する要因として、Brown&Levinson(1987)が指摘したP、D、Rの三つの要因のほかに、不一致応答の実施に関する文化グループレベル、個人レベルの規範や認識、不一致が生じたインターアクションや会話の目的、不一致の対象となる話題の性格および話題に関する情報の保有度、などの要因も先行研究から挙げられた。なお、これらの要因からの関与を調べる際に、DCT(Discourse Completion Test, 談話完成テスト)やロールプレイ調査の方法を用いた先行研究が多い(Beebe&Takahashi 1989、Du 1995、村田2002、梶本2004、大塚2005、白井2009、大和2009、楊・倉田2011他)。これらの調査方法によって、不一致応答に利用される言語的リソース、その場に埋め込まれる社会的、場面的要因に対する参加者の認識や解釈の一般的傾向を調べることができるが、不一致の内容、不一致が生じた場面、不一致応答の相手との社会的距離、などの場面的コンテキストの側面を事前に設定した調査だけでは、実際のコミュニケーションで行われる不一致応答の実態をどの程度に反映できるかは疑問に思う。

たとえば、「親しい上司に不一致を示す」や「友人にこの店の料理はお勧めできないと不一致を示す」の場面を設定して、DCTやロールプレイ調査の方法を用いてこれらの状況

での不一致応答を教えてもらうことによって、CSの一般的な傾向をある程度把握できるが、実際のコミュニケーションでCSが行う応答と異なる可能性があると考え。そして、事前に設定された社会的、場面的要因と調査から得られた不一致応答との関連性を分析していく際に、実際のコミュニケーションでは大いに即興するところがあり、相手との接触歴 (relational histories)や個人的特質(personal traits)などからの影響も大きいため(Sifianou 2012:1555)、事前に設定された要因以外の要因が不一致応答に関与することも起こりうる と予想される。このように、DCTやロールプレイ調査のような調査方法だけでは、当事者の視点ではなく場面を設定した調査者の視点に基づく考察となりがちであるため、生じた不一致がコミュニケーションの妨げとなるか否か、不一致応答に用いられる言語表現、調整ストラテジーが適切であるか否かなど、当事者が実際に問題視している部分の考察が欠けてしまうおそれがある。この問題を解消するには、実際のコミュニケーション場面のデータを増やし、当事者の視点に基づく考察が不可欠である。

(2) 残された課題

ここまで、不一致応答にまつわる先行研究を概観したが、まだ明らかになっていなくさらに解明すべき課題は次のようになっている。

- ・ 不一致の表示に伴うフェイス侵害を軽減するためのストラテジー、自分の考えを強調して相手を説得させるためのストラテジーなどは先行研究での分析の焦点となっているが、実際のコミュニケーションにおいては、対人関係の構築・維持、または会話進行の保持をより多く配慮し、不一致を提示せず潜在化させる応答もあると考えられる。これらの応答も不一致応答の枠に入れて合わせて考察する必要がある。
- ・ 接触場面での不一致応答(特に不一致の表示)を研究対象とした研究が増えてきたが、参加者の母語、母文化の比較によって双方の差異を探るものに集中している。接触場面理論と言語管理理論に基づいて、接触場面の場面性、接触性をふまえて、参加者の視点を加えた上で、CSの不一致応答に関与する社会的、場面的要因の構成、関与のしかたを分析し、不一致応答が言語化されるまでの言語管理、生成のプロセスを解明することが課題として残されている。
- ・ 不一致応答に関与する文化的、言語的背景についての調査、分析は進められ、蓄積ができてきたと思われるが、実際のコミュニケーション場面に着目した考察はまだ数少ない。複数の調査方法を利用して、異なる社会的関係にあるJSとの、異なる性格のインターアクションにおいてCSが行った不一致応答の事例を増やし、多角的、多面的な視点から考察を進めることが求められている。

上記のように、日中接触場面におけるCSの不一致応答について、解決すべき課題は依然として多く残されている。実際に行われた不一致応答の事例を増やし、母語、母文化の差異のみに注目し接触場面でのインターアクションを説明しようとする立場から接触場面研究の立場に切り替えることによって、従来の調査・分析の方法を改善して残された課題の

解明に努める必要がある。

これより、第2章では先行研究での調査方法を概観し改善点をまとめて、本研究で行われた調査の概要を述べ、不一致、不一致応答にあたる内容をデータから同定する方法を説明する。第3章では、CS不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスの分析に用いる枠組みを説明する。第4章では、上下関係が潜在化している場面でのCSの不一致応答、第5章では、上下関係が顕在化している場面でのCSの不一致応答に焦点を当て、ミクロレベルでの考察を通して、CSの不一致応答の言語管理、生成のプロセスの諸段階の特徴、社会的、場面的要因からの関与などを明らかにする。第6章では、これまでの分析、考察の結果をまとめ、日中接触場面でのCSの不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのメカニズムを説明するモデルを提案する。

第2章 調査

本章では、まず先行研究での調査方法をまとめ、改善すべき点を指摘する。次に本研究で行われた調査の概要を紹介し、データから不一致、CS の不一致応答にあたる内容を同定し、抽出する方法を説明する。

2.1 調査目的

本研究では、CS が JS の先行発話から意見の不一致を感じ、不一致応答を談話上に言語化するまでの過程を詳しくみていくことによって、日中接触場面での CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのメカニズムを明らかにし、そのメカニズムを説明するモデルの提案を研究目的とした。まず、CS がどのような社会的、場面的要因をインプットし、どのような逸脱を留意し否定的に評価した上で、これらの逸脱を解消、軽減できるように計画を立て不一致応答を調整していくか、そして、CS が逸脱を留意していない場合は不一致応答をどのように生成していくかを明らかにする必要がある。そのため、複数の調査方法を組み合わせて、異なる社会的関係にある参加者間で不一致が生じる場面を多面的に収集し、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスを多角的に考察できることが望ましい。以下、不一致応答に関する先行研究での調査方法、その改善すべきところをまとめ、本研究の調査概要を説明する。

2.2 先行研究での調査方法と問題点

本節では、調査場面、データの収集方法の側面から先行研究での調査方法を整理し、改善すべきところを検討する。

2.2.1 先行研究の調査場面

これまでの不一致応答に関する先行研究は、第1章でも挙げたように、発話行為論、語用論またはポライトネス理論に基づいて、ある言語の母語場面での不一致の表示に用いられる言語表現や調整ストラテジーの構成要素、使用傾向などの側面を研究対象としたものが多い。そして、ある言語の母語話者と非母語話者(e.g. JS と CS である日本語学習者)が参加する接触場面に注目し、不一致の表示に関わる参加者の発話行為の比較を通して、非母語話者の不一致の表示における語用論的転移、目標言語のルールをじゅうぶん習得できていないことによる非母語話者の誤用、これらの誤用に対する母語話者のマイナスの評価、などを調べる研究も多く行われた。これらの先行研究では、研究対象や適用される理論的枠組みにおいて異なりが見られたものの、共通項として、不一致応答の発話行為に関与するある言語の文化的、言語的特徴、またはこれらの特徴における異なる言語間の相違点などの考察が分析の焦点として取り込まれている。特に、非母語話者についての考察では、

母語の言語的、文化的背景の特徴や転移のみに基づいて、接触場面での非母語話者の不一致応答の傾向を説明しようとする先行研究がほとんどで、接触場面理論に基づいて不一致応答の発話行為を捉え、そこで行われている言語管理、生成のプロセスに注目する先行研究は非常に少ない。

以下より、第1章で述べた先行研究について、着目する場面、研究する対象の側面からあらためて分けて再掲する。まず、着目する場面は母語場面と接触場面のどちらに属するかで、大きく二つに分けられる。母語場面での不一致応答を分析する、または異なる言語間の母語場面での不一致応答を比較する研究と、第二言語教育などの視点から、ある言語の母語話者と非母語話者が参加するコミュニケーションにおいて非母語話者が行う不一致応答を分析する、接触場面に着目した研究である。この2種類の場面での不一致応答に関する先行研究は、分析の焦点(e.g. 明確なまたは婉曲な不一致の表示に用いられる言語表現)、適用される理論的枠組み(e.g. 語用論またはポライトネス理論)によってさらに細分化できるが、研究対象と着目した場面からは、次のように分けられると考える。

○ 母語場面

- (1) ある一種類の母語場面の分析を通して、不一致応答に関する言語的、文化的特徴を見出そうとする研究

Leech(1983)、Pomerantz(1984)、Van emeren&Grootendorst(1984)、Du(1984)、Jones(1990)、ジョンズ(1993)、Wang(1998)、Mori(1999)、Rees-Miller(2000)、Pan(2000)、大津(2001)、スペンサー=オーディー(20004)、梶本(2004)、Liu(2004)、Locher(2004)、木山(2005)、大塚(2005)、Hayashi(2009, 2010)、王(2008a, 2008b)、大和(2009)他

- (2) 二つ以上の母語場面を比較・分析し、それぞれの母語話者の不一致応答の共通する特徴、そして、文化や言語的背景の違いによる相違点を見出そうとする研究

Brwon&Levinson(1987)、Beebe&Takahashi (1989)、村田(2002)、Yeung(2000)、王(2007)、白井(2009)他

○ 接触場面

- (1) ある一種類の接触場面の分析を通して、双方の参加者または非母語話者の不一致応答の言語的特徴や、母語そして接触場面での使用言語からの影響を見出そうとする研究

ミラー(2000)、服部(2004)、李(2005)、平野(2006)、キム¹(2008)、Walkinshaw(2009)、Cheng & Tsui(2009)、Tuan&Hsu(2009)、楊・倉田(2011)他

- 2) 母語場面と接触場面の比較・分析を通して、母語話者と非母語話者の不一致応答の差異を見出そうとする研究

末田(2000)、王(2006)、楊(2009)他

¹ キム(2008)での考察範囲は不一致応答のみならず、超上級の韓国語母語話者の事前調整ストラテジーの全般に及んでいる。

母語場面での不一致応答の言語的特徴や、母語場面同士、母語場面と接触場面の比較によって、異なる母語話者間の不一致応答に関する言語表現、言語文化の特徴を見出す研究は必要であるが、分析の結果は直接第二言語教育に応用しがたいおそれがあると考え。応用の可能性や具体的な方策を考える前に、まず、ネウストプニー(1981)、Neustupný(1985a)で述べられた接触場面理論の枠組みに基づく分析の必要性、接触場面の参加者が参照する規範の多様性と変動性(ファン 2010、加藤 2010、村岡 2011 他)などから示唆されたように、非母語話者がどのような場面に参加し、実際にどのようなことを問題と認知した上でどのような言語行動を行っているかについての分析は不可欠である。また、接触場面という用語を用いながらも、「異文化接触」や「外国語使用」と同義語で扱い²(ファン 2010:79)、対照分析の観点に基づいて参加者間の差異や、母語または使用言語からの影響にのみ分析の焦点を置く研究がほとんどである。ファン(2006: 122-123, 2010:79-83)が指摘した接触場面の成立に関わる「場面性」と「接触性」をふまえ、接触場面研究のアプローチ、視点や手法(ファン 2006:130-131)を用いて、CS の不一致応答の分析を進める必要がある。

2.2.2 先行研究の調査方法

先行研究は注目した場面と研究対象によって四つのカテゴリに分けられるが、調査方法に関しては、教材参考書に載せられた会話データを扱う王(2008a, 2008b)を除いて、大きくアンケート調査(DCT の方法も含まれる)、ロールプレイによる会話の録音調査、自然会話の録音・録画調査に集約できる。これらの調査方法の採用背景や理由などが明記されていない先行研究は多いが、調査方法別の利用頻度からみると、ロールプレイ調査や自然会話による調査が大半を占めている。

(1) アンケート調査

アンケート調査は、多数の対象者を獲得することが可能なので、近代においては利用頻度の高い調査方法の一つである(ネウストプニー2002:23)。調査協力者別に(e.g. 母語が異なる話者同士、ある言語の母語話者と学習者)調査項目に回答してもらうことによって、異なる言語間の比較、目標言語の運用における母語からの語用論的転移、そして目標言語から学習者に与える影響の発見、などの調査が容易になるのである。その一方、アンケート調査のような質問調査³では、直接対象者の行動についての情報を得ることはむずかしいという不備があり、ネウストプニー(2002:23)は下記の理由を挙げた。

A 行動があり

B この行動について対象者の態度、感情、意見など、普通「意識」と言われる認知行動があると同時に、

C 自分のこの「意識」についての発言、スピーチ・パターンなどがある

² このような扱い方による研究上の弊害の詳しくはファン(2010:78-80)を参照すること。

³ ネウストプニー(2002:22)では、インタビューとアンケートをあわせて「質問調査」と扱っている。

インタビューやアンケートでは調査の対象にされる「行動」は、認知行動やスピーチ・パターンと混ざった形でしか存在しなく、「意識」を調査の対象にしても、B のレベルでの「意識」は直接には観察できないし、C のレベルには、何を言うかまたは言わないか、自分の態度をどの程度明瞭に出すかなど、種々の制約があるため「意識」は観察しにくいことになる(ネウストプニー2002:23)。したがって、アンケート調査は比較的に短い時間での大規模なデータ収集に適しているとされるが、接触場面において CS が不一致応答を行う際の意識(生じる問題についての認知や問題解決の方策に対する認知など)を調べるにはふさわしくないと考える。

また、アンケート調査に属する DCT を用いた先行研究には Du(1995)、村田(1996)と Liu⁴(2004)がある。この調査方法では、調査者が事前にデザインした先行発話を調査協力者に提示し、先行発話に応じてどのように応答するかを空欄に記入してもらうこと(cf. Blum-Kulka 1989, Beebe&Takahashi 1989)が最も普遍的な実施形態である。なお、Du(1984)、村田(1996)、Liu(2004)⁵は、デザインした先行発話また後続発話(空欄に後続する部分)が調査協力者のストラテジーに与える影響を配慮し、場面状況に関する文脈の提示のみを行い、調査協力者が応答を自由に記入できるように DCT をデザインして実施した。

DCT も短い時間で大量なデータを効率的に収集できる方法であるが、Cohen(2006:25)が指摘したように、DCT を含むアンケート型の調査では、口頭的インターアクションにおける音声的そして非言語的行動の考察が難しいほか、筆頭で記入する場合は実際の口頭での応答より長い時間が与えられること、また記入する応答は実際の口頭での応答より短くなることなど、実際の発話状況での言語行動とかけ離れている側面から調査結果に与える影響を無視できない。このように、実際に口頭で行われる不一致応答の構成要素やバリエーションの詳細、不一致応答に伴うイントネーションや非言語的行動の役割の考察には、DCT 調査だけでは限界があるといえよう。

(2) ロールプレイ調査

ロールプレイ調査を採用した先行研究には梶本(2004)、李(2005)、白井(2009)⁶、楊・倉田(2011)がある。この方法では、調査者はある発話行為が行われうる場面を設定し、実際の発話事象(speech event)により近くまで近づいて、そこでの比較的長いインターアクションの連鎖を考察することができるようになる(Gass 2006:47)。アンケート調査に比べると、ロールプレイ調査では、イントネーションやポーズなどの周辺の発話要素、一つ以上の発話からなる発話行為、などに関しても詳しく考察できるようになる。一方、役割(ルール)を指定された協力者が行った発話行為には演技(意識的または無意識的に)による部分が含ま

⁴ Liu(2004)は、DCT 調査方法の不足を補償するために質的エスノグラフィー的調査方法も併用した。

⁵ Liu(2004)は、参考応答を選択肢に組み入れ、調査協力者が最も適切であると考えた参考応答を選び、該当の選択肢がないと考える場合は自分なりの応答を自由に記入できる形での DCT 調査も行った。

⁶ 白井(2009)は絵カードを並べて自然なストーリーを作り上げる課題を協力者に提示し、楊・倉田(2011)は討論の課題を JS と CS からなるグループに与え、そこで行われる会話データを分析したが、本研究ではこの二つの先行研究での調査方法をロールプレイ調査に分類した。

れることを否めないと考える。また、不一致応答に関する先行研究では、協力者に自分の主張や反対意見を相手に伝えるようにと調査者が事前に指示し、効率的な反対意見の表示方法について考察できる一方、目的が事前に決められたインターアクションであるため、協力者が相手の考えを一部受け入れると同時に反対意見を抱える場合、対人関係を配慮したりして反対意見を潜在化させる場合での不一致応答について、考察しがたくなると考えられる。ロールプレイ調査から得られたデータは実際場面での発話行為とかけ離れてしまう部分があり、この調査方法のみでは考察できる範囲も限られていることがわかった。

(3) 自然会話などの談話調査

三つ目の調査方法として、Leech(1983)、Pomerantz(1984)、Brown&Levinson(1987)、Jones(1990)、Mori(1999)、末田(2000)、Pan(2000)、木山(2005)、王(2006)、Cheng&Tsui(2009)などでは、なるべく自然会話に近い談話のデータを収集し、実際に行われた不一致応答について分析を行った。自然会話に近い談話のデータを収集する調査方法は、実際場面での発話のやりとりに最も近くまで近づいて考察でき、特に実際場面で行われた不一致応答の質的分析に適していると考えられる。さらに、Cohen(2006:35)は、ロールプレイ後に行われた発話行為に対する参加者の回顧や自省についてインタビューを実施することで、発話行為に関する参加者の認知的プロセスを探ることができ、ロールプレイ調査の調査結果の信頼性と妥当性を支える役割を果たせると指摘した。本研究においても、自然会話データの収録後に調査協力者にインタビューを行い、会話データとインタビューでの報告内容をあわせて、不一致応答を行う際の CS の内面的動きを詳しくみていく必要がある。

先行研究での調査方法を検討した結果から示したように、なるべく自然会話に近い談話のデータを収集する方法が最も適切であると考えられる。いかにして自然な会話を録音、録画し、どのような形で収録後のインタビューを行うかなどは、このような調査方法を適用する際に考慮すべき課題となる。また、不一致応答には、会話参加者間の力関係、親疎関係をはじめとする様々な社会的、場面的要因が関与していると先行研究から指摘されているが、自然会話データでの不一致応答に関する先行研究の大半は、データが日常的雑談の場面での会話に集中し、調査協力者が親しい友人、同級生または同僚など、近い社会的地位、役割関係に話者同士に限られている。特に JS、CS の不一致応答に関する先行研究ではこのような傾向がより顕著で、友達、知り合い、同級生間での不一致応答を研究対象としたものに集中している(Wang 1998、Mori1999、末田 2000、大津 2001、梶本 2004、木山 2005、大塚 2005、平野 2006、王 2006、大和 2009、Cheng&Tsui2009、楊 2009、Hayashi2009; 2010)。これらの先行研究では、友人関係や同輩関係にある JS、CS 同士間の不一致応答について、用いられる言語表現や調整ストラテジー、関与する要因などの側面から分析が進められてきたが、異なる性格のインターアクション場面での、異なる社会的地位や役割関係にある JS に対する CS の不一致応答の考察はまだ十分に展開されていない。本研究において、分析データをより充実させた上での CS の不一致応答の分析、考察が必要となる。

2.3 本調査の概要

本節では、本研究に用いるデータの収集方法、調査協力者の構成、データから不一致、不一致応答にあたる内容を同定、抽出する際の手順などについて説明する。

2.3.1 調査方法

先行研究での調査方法を検討し、演技ではなく、実際のインタラクショナルに参加している調査対象者本人が行った不一致応答の事例を収集するには、やはり実際の会話の録音、録画以外にはないことがわかった。本研究では、なるべく自然会話に近い場面で生じた不一致応答を録音、録画の方法で収集できるように、そして異なる社会的地位、役割関係や親疎関係にある話者同士が参加している日中接触場面での不一致応答の事例を増やすために、主に次の3種類の調査方法を用いることにした。

- (1) 擬似的自然会話場面の録音・録画
- (2) 自然会話場面の自主的録音
- (3) インタラクショナル・インタビューの録音

以下では調査方法ごとに調査協力者、調査の実施手順、調査期間などについて説明する。

2.3.2 擬似的自然会話場面の録音、録画

- (1) 調査協力者

調査は2008年7月から11月にかけて行われ、計8組のペア(JS:8人、CS:8人、詳しい属性は下記の表1を参照する)が参加する日中接触場面での会話を収録した。CSの全員は、調査時に短期交換留学生として海外交流協定校の日本の大学に留学している。ペア1を除いて、全員は日本、中国の大学に在学する学部生、大学院生である。そして、協力者の大半は女性で(JS1、JS5、CS8は男性)、年齢は20代(JS1は30代)である。本研究ではCSの性別、年齢の差異から不一致応答に与える影響を検討しないため、またLiu(2004:105, 110)は中国の学術的環境(academic situation, e.g. 大学)での不一致の表示において、性差からの影響を観察できなかったと述べたため、調査協力者の性別や年齢について特に制限を設けなかった。ペア1(初対面)を除いて、ほかの7組のペアは留学生とチューターの関係にあり、調査当時までは定期的に会い(平均8回、1~2時間前後/回)、友達関係になりつつあると各ペアから報告された。初対面同士ペアと友人同士ペアでの不一致表示を比較した木山(2005)は、初対面同士ペアでは社会的距離に応じての考慮が多くなされるため、友人同士ペアのほうはより多く実質的不一致の表示を行い、異なる意見の表明が伴う不一致の表示、直接的な表示方法を用いた不一致の表示の頻度においてもより高いと指摘した。このように、不一致応答のバリエーションをより多く考察できるように、初対面よりある程度の人間関係が構築できているペアのほうが適切であると考えられる⁷。

⁷ ペア1のデータは参考資料として用いることにとどめ、分析用のデータに入れなかった。

CS の日本語能力に関して、参加者間の言語能力の差によって会話参加の前提に関わる言語能力の問題が生じる(村岡 2003)との指摘から、初級レベルの CS はまだ日常会話をスムーズに行えないため、不一致を示そうと思っても言語能力の不足で参加回避の戦略を選択する傾向になりやすいと予想される。このような傾向からの影響を避けるために事前に会話能力について尋ね、日本語での日常会話が不自由なくできることを最低限として協力者を選定した。CS の全員は日本語専攻の学生であり、調査当時はすでに 3 年間以上の日本語の専門教育をうけ、日本語能力試験 1 級の資格を持っている。そこで、調査当時は学歴が修士以上である CS1、CS2、CS3、CS5、CS8 を「上級」レベルと判定できるほか、学部生の CS4、CS6、CS7 は留学先の大学では、日本語の上級クラスで講義をうけているため、同じく「上級」レベルであると判定した。滞日歴の側面では、CS の全員は初めて来日し、CS1 と CS2 を除いて調査当時までは 2 ヶ月ほどの滞在歴である。日本語の専攻で、渡日前に日本人母語話者との接触経験⁸がすでにあり、相手の JS も定期的にあうチューターであるため、比較的短い滞日歴による緊張感やほかのマイナスの影響はないと考える。なお、不一致応答に用いられる言語表現や調整戦略の選択、使用においては、文法的規則のみならず社会文化、社会言語的規範やルールに関与もあるため、日本語の学習歴のほかに滞日歴などの接触場面の参加経験からの影響もあると予想され⁹、CS の不一致応答の分析で考慮すべき要因の一つであると考え。収録した各ペアの会話の長さは、ペア 8¹⁰を除いて全部 20 分～30 分前後である。調査協力者の概要は次の表 1 の通りである。

⁸ 接触する相手は所属する中国の大学での日本人教師、日本人留学生のほか、毎年短期中国語研修に参加する交流協定校からの日本人大学生も含まれ、CS 全員は来日する前に研修クラスの日本人大学生のチューターを担当した経験がある。

⁹ 例えば、断わりを分析した伊藤(2000)は、学習歴だけではなく滞日歴も社会的能力に影響していると述べ、平野(2006)は時間の推移とともに、日本語教育実習生の JS と CS の不一致提示の方略の使用傾向が類似してくると指摘し、加藤(2010:227)は接触場面での接触頻度の増加に伴う規範の適用のされ方の動態性、基底規範自体の変容といった規範の動態性を指摘している。

¹⁰ このペアは CS8 のレポートの添削が入っているため、JS8 が原文内容の確認、添削するための時間が含まれ、データの長さは 50 分前後となった。

表 1：擬似的自然会話場面の調査協力者

ペア	被調査者	性別	年齢	身分	滞日歴 (調査当時まで)	日本語 レベル	関係
1	CS1 ¹¹	F	20 代後半	博士 1 年	はじめて、 8 ヶ月	超上級 ¹²	初対面
	JS1	M	30 代後半	大学 教師			
2	CS2	F	20 代前半	修士 2 年	はじめて、 8 ヶ月	上級	留学生と チューター
	JS2	F	30 代前半	修士 1 年			
3	CS3	F	20 代前半	修士 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生と チューター
	JS3	F	20 代後半	博士 2 年			
4	CS4	F	20 代前半	学部 4 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生と チューター
	JS4	F	20 代前半	学部 2 年			
5	CS5	F	20 代前半	修士 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生と チューター
	JS5	M	20 代前半	修士 1 年			
6	CS6	F	20 代前半	学部 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生と チューター
	JS6	F	20 代前半	学部 1 年			

¹¹ 会話調査とインターアクション・インタビュー調査の両方に参加した調査協力者がいるが、記載の便宜上に固定の番号ではなく、通し番号で振り分けて提示した。

¹² キム(2008)では、「超上級話者」は「日本語能力試験 1 級資格の所持」、「5 年以上の滞在歴」、「日本語学習も自然習得ではなく日本の教育機関での学習経験がある」の 3 つの基準に全部満たす外国人日本語学習者であると捉えている。中国国内で 3 年間の修士課程を修了した CS1 は渡日前までは大学の日本語教師を 2 年間勤めた経験もあるので、「超上級」と判断した。

ペア	被調査者	性別	年齢	身分	滞日歴 (調査当時まで)	日本語 レベル	関係
7	CS7	F	20 代前半	学部 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生と チューター
	JS7	F	20 代前半	学部 3 年			
8	CS8	M	20 代後半	修士 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生 と チューター
	JS8	F	20 代前半	修士 2 年			

(2) 調査手順

一組のペアが 1 回会話をし、その後、協力者別にフォローアップ・インタビュー(ニューストプニー1994、ファン 2002、村岡 2004)を実施した。ペア 1 を除いた JS と CS は留学生とチューターの関係であるため、調査協力を依頼した後は初対面による緊張感の打ち解けや会話の相手の紹介をする必要がなく直接に会話場面の収録に入り、具体的には次のような段階を踏んで行われた。

- 1) 準備：会話収録の依頼
- 2) メイン調査：調査室まで案内し、自由に会話をしてもらう 20 分～30 分前後
- 3) 文字化：録音、録画した会話のデータをもとに会話内容を文字化する
- 4) フォローアップ・インタビュー：会話の映像を見せながら、調査協力者にフォローアップ・インタビューを行う 1 時間前後

1)から 4)まではそれぞれ別の日に行われたが、まず会話の収録を依頼し、承諾を得られた後は協力者の都合に合わせて収録の日程を決めてもらった。調査の本来の目的は依頼とメイン調査の時に伝えないことにし、ただ留学生が日本語を使つての実際のコミュニケーション場面を調査したいとの旨を調査協力者に告げた。メイン調査の当日に、協力者を録音、録画およびフォローアップ・インタビュー用の部屋まで案内し、新しい場所や調査が行われるという設定による緊張感を緩和させるために、最初は調査者が自己紹介¹³や収録の流れの説明をしたり、協力者の雑談にまじりながら参考話題¹⁴を提示したりした。最初の緊張感が打ち解けられ、普段の会話の雰囲気になりつつあるように思われた時に、調査

¹³ 調査者が CS 全員とは知り合いであるが、チューターの JS とはほとんど初対面である。

¹⁴ 録音が始まる前に「今度の連休の計画」、「最近のはまっていること」などの話題を参考として提示したが、使うかどうか、会話の進行などについて各自のペアに任せると説明した。

者がこれよりは2人で自由に話しを続けてもらおうと伝え、退室した。会話時間は20分前後になると、調査者はロックし入室して会話の収録を終了させるが、少し時間を延ばしてほしいと申し出た¹⁵ペアに対して、そのまま会話を続けてもらい、再び退室することにした。そして、調査者は録音、ビデオ映像で会話の内容を確認した上で会話収録後の1週間以内に、協力者別にフォローアップ・インタビューを実施した。フォローアップ・インタビューは協力者の母語に合わせて(日本語または中国語)使用言語を決めてから実施し録音したが、インタビュー・データとして使用できるように必要な部分を取り出して文字化した。

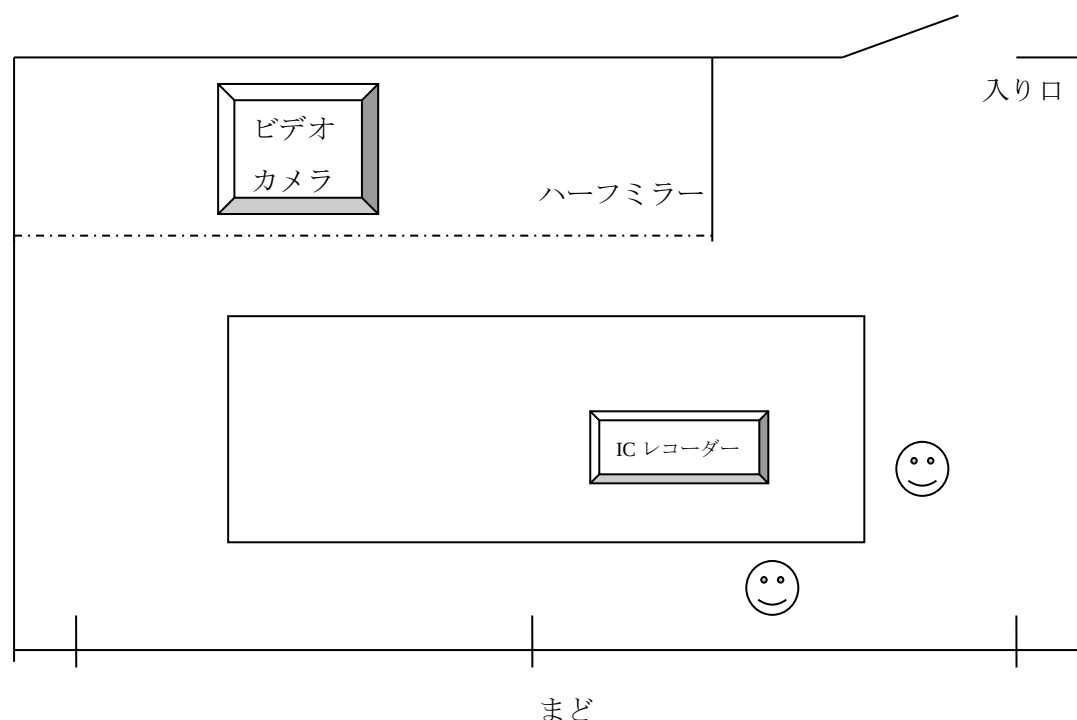
調査機材としてビデオカメラとICレコーダーを使用したため、どうしても協力者の注意を引き、会話の進行に影響はないと言い切れないが、ビデオカメラは協力者側の視線から見えないハーフミラーの後ろに設置してあるため、ビデオ機材の可視化による影響を最大限に避けられると考える。また、音声をきれいに拾えるようにICレコーダーを協力者の視線範囲内に置いてあるが、日頃のICレコーダーの利用の増加によって機材の存在自体に慣れがあると思われ、会話の進行に伴って目の前の会話の相手に集中するようになるため、分析用のデータとしての価値は充分にあると考える。

調査地： 千葉県内のある大学の一室

録画機材： SONY・デジタルHDビデオカメラレコーダー HDR-SR11

SONY・ワイヤレスマイクロホンセット ECM-HW1

録音機材： SANYO・デジタルICレコーダー ICR-PS182RM



¹⁵ 会話が盛り上がってもう少し話し続けたいと申し出たペアがあった。

上記の説明から示したように、話題の選択や会話の進行などについて調査協力者が自由に決められる点からみると、収録した会話は自由会話の場面に分類できる可能性もあると思えるが、協力者の JS と CS は指定された調査地点で限られた時間の中で会話をするように求められたため、普段の日常的会話場面とは少しかけ離れる部分もあると思われる。従って、本研究ではこのような形で収集した場面を「擬似的自然会話場面」と称し、会話の自然さがまったく損なわれていないと言い切れないが、分析に値する会話を収集できたと考えよう。

(3) フォローアップ・インタビュー

本研究では、日中接触場面での CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのメカニズムを解明できるよう分析を進めていくが、これらのプロセスの諸段階を詳しく捉えるには、談話上に言語化された不一致応答の発話内容のほか、応答当時の意識や感想など、不一致応答に関する CS の認知的プロセス(Cohen 2006)や内面的動きを把握することも不可欠である。このような参加者の内省的データを得るための方法の一つとして、フォローアップ・インタビュー(ネウストプニー1994、ファン 2002、村岡 2004)がある。本研究では、擬似自然会話場面、自然会話場面の CS¹⁶を対象にフォローアップ・インタビュー(以下、FUI とする)を個別に行い、報告された不一致応答時の意識や感想と不一致応答の発話内容を合わせて分析用のデータに入れた。

FUI の定義について、ファン(2002:88)は次のように述べている。

フォローアップ・インタビューは、調査対象者の実際の行動に伴う認知プロセスを意識化し、言語化するための方法論である。フォローアップ・インタビューでは録音や録画で反映されない対象者の調査時の意識や考えを明らかにしようとする目的で行われ、調査データを質的に補足する。フォローアップ・インタビューは調査後にしばしば行われる対象者の感想や意見の採取や調査内容の確認のためのインターアクションとは異なり、体系的な手続きである。

ファン(2002:88)より引用

ファン(2002:88)の定義から示したように、FUI は調査対象者の内省(introspection)に基づく方法の 1 種類であり、この方法は 1970 年代の半ばにはすでに方法論として成立し、とくに言語管理理論で扱われる「管理プロセス」のそれぞれの段階を調査するには有効な方法である(ネウストプニー2002:29)。これについて、ネウストプニー(1994)は次のように指摘している。

私たちが行動している間、自分の行動をモニターしたり、評価したりして、また評価の

¹⁶ 擬似自然会話場面に参加した JS 全員、自然会話場面に参加した JS の一部に対しても FUI を行った。

結果適切ではない箇所があるとすれば、その訂正の適否を考察したのち、訂正を実行することもある。ただし、これらのプロセスはほとんど行動の表面にでないで、録音や録画の資料には記録されない。記録を補足するために、フォローアップ・インタビューという研究方法が使える。

ネウストプニー(1994a:4-15)より引用

これまでの JS と CS の不一致応答に関する研究では、王(2006)、楊(2009)を除いて、すべては不一致が生じた談話資料における不一致応答のプロダクトの側面のみに焦点が当てられ、プロセスの側面は注目されなかった。不一致と不一致応答が生じた談話をより詳しくみるには、言語プロダクトの側面のみならず、これらの発話行為を実施した参加者の行動の背景や裏づけ、といった発話行為に関する内面的なプロセスも分析の焦点に定める必要がある。FUI は、言語管理理論に基づいて CS の不一致応答の言語管理、生成のプロセスを分析する本研究においては必要不可欠な調査方法であると考え。FUI の実施にあたり、まずネウストプニー(1994:15-17)、ファン(2002:93)で挙げられた実施段階の構成、段階ごとのインタビューの実施手順などの内容が参考となる。

- 1) ウォーミング・アップ：安心できるインタビュー環境を作ったり、後ほどの意識調査の結果を裏付けるデータをとったりする目的で、いくつかの事項について話す。
- 2) 記録前の意識：本調査の行動に入るにあたって意識変化があったかどうかを確かめるために、自分の役割への期待、他の参加者へのイメージなどを質問する。
- 3) 記録時の意識：本調査時に行われた行動の全部、または一部に関する意識を確かめるために、自分の行動についての意識の有無、行動のもとになった規範、逸脱として捉えた行動、否定的に評価した行動、相手の行動について、録音・録画データを用いて、コメントを求める。
- 4) 記録後の意識：本調査の行動の後に、どのような意識変化があったかを確かめる。
- 5) 確認：各段階の意識調査結果の確認、仮説の紹介、研究者の分析予定を知らせ、対象者の意見を求める。

FUI を実施する際の留意点として、まず、FUI での質問の対象が「フォローアップ・インタビューの時点の観察やコメントではなく、一次調査の具体的な箇所についての証言である」とネウストプニー(2002:29)が指摘したように、FUI の主要目的は FUI 当時の調査協力者の感想や意見を聞き出すことではなく、会話場面が記録された当時の調査協力者の意識に常に焦点を当てることは大事である¹⁷。そして、ファン(2002:94)が FUI から得られたデータの妥当性、信頼性にかかわる問題は常に潜在し、FUI の力を過大評価することもよ

¹⁷ FUI の参加者、実施する時間や場所、事前に用意すべき材料、使用言語、質問の聞き方、などの側面の留意点について、詳しくはファン(2002:90-93)を参照すること。

くないと指摘し、村岡(2004)が FUI のデータを慎重に使い分けて分析に用いる必要性を強調している¹⁸。

以上の留意点を念頭に置きながら、実施段階を踏まえて、FUI 中に用いる質問のタイプ、質問時の注意事項についてのファン(2002:93)、加藤(2010:61-62)の指摘を参考にし、次のように FUI を実施した。

1) オープンエンドな質問

映像や録音を再生しながら協力者に見せたり、聞かせたりしているが、会話当時の意識について何か思いついたことがあったら、いつでも再生を止めることができると事前に説明して、その時は協力者に思い出したことから何でも話してもらおう。報告された内容の中では、不一致や不一致応答に関する調整行動の報告もあるし、ほかの談話上に現れていない管理プロセスなどについての報告も含まれる。

なお、自分で再生を止めてから報告し始めることに慣れていない協力者もいるため(または会話データの視聴に集中し、報告すること自体を忘れかけたりする協力者)、調査者は2〜3分程度を目安に話題が区切れたところで再生を止めて、もし思い出したことがあったら教えてもらいたいと依頼していった。

2) 構造的な質問

基本的に会話データを確認した上で調査の目的に合わせて事前に用意された質問である。

- ・ 構造質問：オープンエンドな質問の中で、協力者より語られなかった談話上に現れた不一致応答に関する調整行動について質問し、主に計画段階、実施段階で参照された規範や、実施のプロセスを明らかにするための質問である。または不一致が生じたかどうかを確認してもらい、不一致を潜在化させた応答を探る。
- ・ 留意・評価質問：主に調整段階以前の留意や評価段階について何らかの意識があったかを聞く質問である。逸脱と留意した対象は何であるか、どのような社会的、場面的要因が関与したか、留意した対象をどのように評価をしたか、について聞き取る。
- ・ 比較質問：接触場面と内的場面对比させる質問をする。このような質問の仕方は研究者の解釈フレームを与えてしまう危険があると村岡(2004)では指摘したが、インタビュー時の解釈や言語意識を問う目的に変更した場合には、特に当該の言語行動が接触場面での特有なものであるかどうかを確認するためには、内的場面での言語行動を思い出してくれるように質問する必要がある(村岡 2004、加藤 2010:61)。
- ・ 記述的質問：会話の相手と会う頻度、親疎関係、日本に留学に来た理由や日本語学習歴、会話前の準備、インターアクションの目的などについて質問するものである。

¹⁸ FUI のデータを分析に用いる時の留意点について、詳しくは村岡(2004:225)を参照すること。

このように、本研究では擬似自然会話場面、次に紹介する自然会話場面の録音、録画資料から作成した談話資料と、FUI で聞き取れた内容の結果を合わせてバランス良く用いることを心がけ、分析を進める。

2.3.3 自然会話場面の自主的録音

2.3.2 での調査方法を用いて自然会話場面に近い日中接触場面の会話データを収集でき、研究対象である CS の不一致応答の事例もある程度集められたが、相手話者の先行発話に異なる見解や認識を抱える「反応」がないと不一致応答が生じてこないもので、会話の自然さを保つために話題や会話の進行を協力者に任せたため、そして、限られた時間内での会話であるため、不一致の対象となる話題のバラエティ¹⁹、不一致および不一致応答が生じる頻度などが予想を下回る結果になった。そこで、比較的長い時間を与え、自然場面により近い環境で会話を行ってもらうことを通して、不一致および不一致応答の事例をより多く収集できるように、協力者に会話を自主的に録音してもらう方法を追加した。

(1) 調査協力者

調査は 2010 年 7 月から 12 月にかけて行われ、計 12 組のペア(JS : 12 人、CS : 10 人²⁰、詳しい属性は表 2 を参照する)による日中接触場面での会話を収録した。ペア 1 以外は、CS の全員は大学の学部生または大学院生で、CS10、CS13～CS18 は調査当時に短期交換留学生として海外交流協定校である日本の大学に留学し、CS9、CS11、CS12 は日本の大学に在学している。CS 側の協力者は CS11 を除いて、JS 側の協力者は JS12、JS13 を除いて全員は女性である。可能であれば自分のチューターやアルバイト先の同僚など、日頃の接触頻度が比較的高い日本人との会話を録音してほしいと依頼したため、12 組のペアの中では、留学生とチューターの関係であるペアは 6 組で、同僚関係は 3 組、友人関係は 2 組²¹、上司と部下の関係にあるペアは 1 組となっている。また、年齢の側面において、CS の全員は 20 代であるが、JS のほうは JS9(30 代)、JS11(30 代)と JS13(30 代)を除いて全員は 20 代である。話者間の関係、協力者の性別と年齢の構成などの側面において擬似自然会話場面よりバラエティが豊富で、会話時間、話題などについても制限しないで自由に決めてもらうため、異なる場面において異なる関係の会話の相手との間で生じた様々な意見の不一致、不一致応答の考察に適しているデータになると考える。CS の日本語能力については、擬似的自然会話場面と同じように、日本語での日常会話が不自由なくできることを最低限として協力者を選定した。CS9 と CS12 を除いた CS の全員は日本語が専攻で、調査当時はすでに 3 年間以上の日本語の専門教育をうけ、CS15 を除いて全員は日本語能力試験 1 級の資格を

¹⁹ 大津(2001)が挙げた不一致の対象の三つのタイプ(事実情報の正確さ、行動の適切さ、物事に対する個人的評価)、木山(2005)が挙げた「事実」または「意見」に対する不一致。

²⁰ CS11 はアルバイト先の店長、2 人の同僚(計 3 人)との会話を収録してくれた。

²¹ 友人関係にあるペア 6 では、CS12 と JS14 はクラスメートで授業以外の時間にもよく一緒に買い物に出かけたりしていると報告された。ペア 8 では、CS14 と JS16 は語学研修の時に知り合いになり(CS14 は JS16 のチューターを担当していた)、来日後も定期的に会うようにしている。

持っている。そこで、調査当時は学歴が修士以上である CS16 を「上級」レベルと判定できるほか、学部生の CS10、CS13、CS14、CS15、CS17、CS18 は留学先の大学で日本語の上級クラスで講義を受けているため、同じく「上級」レベルであると判定した。また、キム(2008)の基準を参考にし、滞日歴および日本語の学習歴によって CS9、CS11、CS12 を「超上級」であると判定した。擬似的自然場面に比べると協力者別の滞日歴と日本語能力の差異が比較的顕著であるが、実際の会話内容をみると日常的雑談に属するものが多く、日本語能力の差異による影響がほとんどないことがわかった。また、滞日歴は不一致応答に用いられる言語表現や調整ストラテジーの選択、使用に影響する可能性があると先行研究から指摘されたため、滞日期間の異なる協力者別の事例を通して、滞日歴などの接触経験から CS の不一致応答に与える影響をより多面的に考察できると考える。なお、会話データは自主的に収録してもらったため、ペア別の会話の長さは 10 分～60 分前後までとやや幅が広い(詳しくは表 2 を参照する)。

表 2：自然会話場面の調査協力者

ペア	被調査者	性別	年齢	身分	滞日歴 (調査 当時まで)	日本語 レベル	関係	録音 時間
1	CS9	F	20 代後半	博士 2 年	4 年 ²²	超上級	バイト 先の 同僚	20'23"
	JS9	F	30 代後半	契約 社員				
2	CS10	F	20 代前半	学部 3 年	はじめて、 10 ヶ月	上級	留学生 とチュ ーター	37'09"
	JS10	F	20 代前半	学部 3 年				
3	CS11	M	20 代後半	修士 2 年	4 年	超上級	バイト 先の 同僚	8'28"
	JS11	F	30 代後半	パート				
4	CS11	M	20 代後半	修士 2 年	4 年	超上級	バイト 先の 同僚	15'57"
	JS12	M	20 代前半	学部 1 年				

²² CS9 は小学校の時に家族滞在で 1 年半ぐらい日本に居住したことのある「帰国子女」である。表 2 ではこの 1 年半は加算されていない。

ペア	被調査者	性別	年齢	身分	滞日歴 (調査 当時まで)	日本語 レベル	関係	録音 時間
5	CS11	M	20 代後半	修士 2 年	4 年	超上級	バイト 先の 上司	33'36"
	JS13	M	30 代後半	店長				
6	CS12	F	20 代前半	学部 4 年	7 年	超上級	友人	32'48"
	JS14	F	20 代前半	学部 4 年				
7	CS13	F	20 代前半	学部 4 年	はじめて、 10 ヶ月	上級	留学生 とチュ ーター	59'54"
	JS15	F	20 代前半	学部 4 年				
8	CS14	F	20 代前半	学部 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	友人	48'31"
	JS16	F	20 代前半	学部 1 年				
9	CS15	F	20 代前半	学部 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生 とチュ ーター	34'08"
	JS17	F	20 代前半	学部 1 年				
10	CS16	F	20 代前半	修士 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生 とチュ ーター	36'48"
	JS18	F	20 代前半	学部 4 年				
11	CS17	F	20 代前半	学部 4 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生 とチュ ーター	31'43"
	JS19	F	20 代前半	学部 2 年				
12	CS18	F	20 代前半	学部 3 年	はじめて、 2 ヶ月	上級	留学生 とチュ ーター	53'06"
	JS20	F	20 代前半	学部 2 年				

(2) 調査手順

一組のペアが1回会話をし、その後、協力者別に FUI を実施した²³。CS に会話の録音(場面の制約で録画が困難の場合はあると考え、音声のみを収録することにした)を依頼し承諾を得られた後は、IC レコーダーを渡して可能な範囲で知り合いの日本人との会話場面を自主的に録音してもらい、データを収集した。具体的には次のような段階を踏んで行われた。

- 1) 準備：会話録音の依頼、IC レコーダーを渡しておく
- 2) 録音：自主的に日本人との会話を録音してもらう 時間は特に制限しない
- 3) 文字化：録音した会話のデータをもとに会話内容を文字化する
- 4) フォローアップ・インタビュー：会話の音声を再生しながら、調査協力者にフォローアップ・インタビューを行う 1 時間～1 時間半前後

1)から 4)まではそれぞれ別の日に行ったが、まず協力者に会話の収録を依頼し、承諾を得られた後は IC レコーダーを渡して協力者の都合に合わせて収録の日程を決めてもらった。調査の本来の目的は依頼の時に伝えないことにし、ただ中国人母語話者が参加する日本語使用のコミュニケーション場면을調査したいとの旨を調査協力者に告げ、話題や会話の長さは制限がないと説明した。録音完了の連絡が協力者から入った後は、IC レコーダーを回収し、協力者の都合に合わせて FUI の時間を決めてもらった。そして、調査者は録音で会話の内容を確認した上で会話収録後の 1 週間以内に、協力者別に FUI を実施した。FUI は協力者の母語に合わせて(日本語または中国語)使用言語を決めてから行って録音し、インタビュー・データとして使用できるように必要な部分を文字化した。

今回の調査方法では IC レコーダーのみを使用し、映像と合わせて協力者の表情、姿勢などの非言語的行動について確認できないが、不一致応答の意味伝達で最も中核的役割を果たす言語表現の部分を確認できること、そして、必要に応じて発話当時の状況を FUI で回想してもらい、場面情報がある程度確認できるため、音声のみでのデータの不足による影響を大きく解消できると考える。なお、擬似的自然場面での会話に比べると、協力者は全て本人の意思で会話を開始または参加し、時間、場所の制限などを配慮することなく自由に話題を選択し会話を進められる点においては、即興的で実質行動が伴う実際場面での自然会話により近いと考えられる。このため、この調査方法で調査した場面を「自然会話場面」と称し、擬似的自然会話場面でのデータを合わせて分析の対象とする。データの収集には様々な制約があり、すべての制約をなくす万能な調査方法はないが、この調査方法で少しでも自然場面に近い会話データを収集できたと言えよう。

²³ ペア 1、3、4、5 は CS にのみ FUI を行った。

2.3.4 自然場面でのインターアクション調査

擬似的自然会話場面と自然会話場面で収集した談話資料から CS の不一致応答の事例が集められ、応答の発話内容と FUI で報告された応答時の意識や感想を合わせて分析することによって、CS の不一致応答の言語管理、生成のプロセスの諸段階を詳しく捉えることが可能になると考える。一方、会話の相手はやはり同年齢帯の親しい友人が占める割合が高く、会話内容の面でも日常的雑談の内容が多いため、収集したデータのバリエティがやや限られている。異なる社会的地位や役割関係、親疎関係にある JS との、異なる性格のインターアクション場面における CS の不一致応答をより多面的に考察できるように、自然場面に近い会話場面の録音、録画に新しい調査方法を加える必要があると考える。

(1) インターアクション・インタビュー

自然場面の言語行動をデータとして収集する方法には、対象者の発話を録音、録画することのほか、自然な場面で対象者が経験したインターアクションや具体的な言語行動について出来る限り詳細に聞き出すことも考えられる(村岡 2002:133)。このような方法はインターアクション・インタビュー(ネウストプニー1994、村岡 2002)と呼ばれ、調査者が入り込むことの難しい場面での言語行動についてデータを収集する際に用いられる(村岡 2002:128)。様々な場面での不一致応答に関する言語行動をなるべく多く収集できることが期待される一方、調査者がすべての場面に入り込み、その場でデータを収集することは様々な制約があるため実行しがたいと思われる。インターアクション・インタビューは、実際の言語行動のデータとは言えないものの、実際の言語行動についてデータを収集できる数少ない方法の一つであり、特に、挨拶、依頼、断わりなどのスピーチ・イベント、買い物、授業などの場面について聞き出すことに有効である(村岡 2002:134)ため、本研究では、この調査方法もデータ収集に用いて、様々なインターアクションにおける CS の不一致応答に関する言語行動の内容を集めた。

ネウストプニー(1994)はインターアクション・インタビューの定義を次のように述べた。

インターアクション・インタビューの名称自体が、その目標を指し示している。つまり、このインタビューは、意識、知識、あるいは態度を測定するのではなく、インターアクションで何が実際におこったかを調べる道具である。

ネウストプニー(1994:19)より引用

また、インターアクション・インタビューは半構造化インタビューに属し、半構造化インタビューの特徴について、村岡(2002:127)は次のように指摘している。

半構造化インタビュー(semi-structures interview)は、調査者があらかじめ質問項目を準備しているものの、対象者の意識の流れや内省を重視して、柔軟に対応していく方法を言う。半構造化インタビューにおいては、現在時からふりかえって過去の出来事や行為について

回想(retrospection)してもらったり、過去の時点にもどってそのときの意識を内省(introspection)し、報告してもらうことになる。

村岡(2002:127)より引用

インターアクション・インタビューの実施について、ネウストプニー(1994)、村岡(2002)が「準備段階」と「実施段階」に分けて、段階ごとの作業手順や留意点、適宜にリコール・インタビューに切り替えることの必要性などを説明している。インターアクション・インタビューの調査方法を用いた接触場面研究の先行研究には、村岡(2003)、金子(2004、2006)、今(2009)などがある。これらの研究では、半構造化したインタビューのかたちを用いて対象者の様々な場面でのコミュニケーション行動について質問し、得られた言語行動についての報告内容を分析して、個々のコミュニケーション行動における調査協力者の意識を探ることに成功した。本研究で行われたインターアクション・インタビューの対象者、具体的な実施の手順は下記の通りである。

(2) 調査協力者

調査は2009年5月から12月にかけて行われ、計14人(男:8人、女:6人、詳しい属性は表3を参照する)の中国出身で日本に居住している在日中国人にインターアクション・インタビューを行った。調査協力者を選定する際に、年齢、性別、身分について特に制限を設けなかったが、一定の日本語能力(「上級」以上)、一定の滞日期間(1年以上)、学生の場合は一定の頻度と範囲で勉学以外の社会生活に参加していることなどを基準にし、依頼する対象者を選定した。一定の日本語能力によって、あらゆる場面でのJSとのインターアクションにおいて柔軟に対応でき、インターアクション参加前提となる言語能力の不足による障害はほぼ避けられると考える。そして、一定の滞日経験があり、日本の社会生活に一定の頻度と範囲で参加できている協力者は、日本社会とのつながりはより強いため、日頃のインターアクションの相手や内容などの側面では、滞日歴の短いまたは社会生活との接点が少ない協力者よりバラエティが豊富であると予想され、データの収集には適していると考えられる。

村岡(2002:130)は調査者が対象者の「友人の友人」として自己紹介をすることによって、自分の身分が保証を得られ、インタビューには有効な関係設定であると指摘したように、調査者と協力者間の信頼関係の構築はインタビューの成否に関わる要素の一つである。本調査では、調査協力者はCS27とCS30(2人ともは友人の紹介で知り合った)を除いて、全員が調査者の知人である。これによって、インタビューによる緊張感はある程度打ち解けることができ、比較的にリラックスした状態で経験したインターアクションを語ってもらえると考えられる。年齢の面では、20代は9人、40代は3人、30代は2人で、身分の面では、在学中の大学生または大学院生は7人、会社員は5人、大学教師は2人である。滞日歴からみると、1年未満は3人、1年以上6年未満は5人、6年以上10年未満は2人、10年以上は4人である。日本語能力について学習歴と滞日歴を参考に分けると、「上級」レベルの

協力者は4人(CS20～CS22、CS32)、残りの10人は「超上級」に分類できると考える。協力者1人につき2～3回ずつインタビューを行い²⁴、1回のインタビューの時間は1時間～1時間半程度である(詳しくは表3を参照する)。報告されたインターアクションの内容からみると、会社での会議、上司または同僚との業務上の個別相談、取引先との打ち合わせ、アルバイト先での店長との仕事上の話し合い、同僚との雑談、客との業務上の接触(商品の清算やほかのサービス提供など)、大学での先生との話し合い(e.g. ゼミでの発表や講義中の質問)、先輩、後輩との雑談や勉学上の相談など、多岐に分かれている(詳しくは巻末資料を参照する)。

このように、インターアクション・インタビューの協力者は、会話収録場面の協力者より、年齢、身分、滞日歴などの面においてバラエティが豊富で、また、数日分のインターアクションについて詳しく報告してくれたため、日中接触場面におけるCSの不一致応答の事例をより幅広く収集できた。インターアクション・インタビューでの報告内容から、実際の言語行動の細部まで捉えきれないものの、インターアクションの場面や相手に関する情報、生じた不一致、行われた不一致応答の内容、応答時の意識や感想、などの側面について知ることができる。インターアクション・インタビューでの報告内容は慎重な選別により、CSの不一致応答の考察に適するデータとして用いられると考える。なお、加藤(2010:57)は、参加者が日本での滞日期间が長いほど、日本の社会文化事情に詳しくなり、逸脱が見つけにくいと指摘し、滞日歴が不一致応答における逸脱の留意や調整の段階に関与する可能性はあると示唆された。今回の調査協力者の中で滞日歴が比較的に長い協力者は数人あり、不一致応答に関する日本語の言語的、社会文化的規範を無意識的に使用(加藤2010:41)したりして、適用した規範のリソースの所在について強く意識しない可能性があると考えられる。これについては、必要に応じてリコール・インタビューに切り替えて回想してもらい、個別に考察する²⁵ことによってある程度解消できると考える。また、滞日歴の異なる協力者別の事例は、日中接触場面でのCSの不一致応答の研究により多様な考察の切り口を提供してくれると考える。調査協力者の概要は下記の表3の通りである。

²⁴ 協力者の都合により、CS28、CS31、CS32には1回のみインタビューを行った。

²⁵ 実際のインタビューにおいては、内的場面、接触場面での不一致応答に関する自分の言語行動一般について、必要に応じて、リコール・インタビューに切り替えて語ってもらった。なお、予想にやや反して、滞日歴の長さに関わらず、協力者が応答時に参照した規範は母語規範、相手規範または接触規範のいずれに属するかについて強く意識しており、滞日期间が長いほど場面に応じてそれぞれの規範を意識的に使い分ける傾向が強いと見受けた。

表 3：インターアクション・インタビューの調査協力者

調査協力者	性別	年齢	身分	滞日歴 (調査当時まで)	日本語 レベル	調査回数
CS19	男	30 代前半	会社員	4 年(以前 1 年 ²⁶)	超上級	2 回 計 2 時間 22 分
CS20	男	20 代前半	修士 1 年	2 年	上級	4 回 計 4 時間 30 分
CS21	女	20 代前半	修士 3 年	8 ヶ月(短期交換)	上級	3 回 計 4 時間 21 分
CS22 ²⁷	女	20 代前半	修士 3 年	8 ヶ月(短期交換)	上級	5 回 計 5 時間 30 分
CS23	女	30 代後半	大学非常勤教師	20 年	超上級	2 回 計 2 時間 32 分
CS24 ²⁸	女	20 代前半	博士 2 年	3 年	超上級	3 回 計 3 時間 54 分
CS25	男	40 代後半	会社員	12 年	超上級	2 回 計 1 時間 34 分
CS26	男	20 代後半	会社員	7 年	超上級	3 回 計 4 時間 17 分
CS27	女	20 代前半	学部 3 年	6 年	超上級	2 回 計 2 時間 55 分
CS28	男	40 代前半	大学専任教師	23 年	超上級	1 回 計 50 分
CS29	男	20 代前半	修士 1 年	3 年	超上級	2 回 計 2 時間 37 分
CS30	男	40 代後半	会社員	16 年	超上級	2 回 計 2 時間 10 分
CS31	男	20 代後半	会社員	6 年	超上級	1 回 計 51 分
CS32	女	20 代前半	学部 3 年	7 ヶ月(短期交換)	上級	1 回 計 53 分

(3) 調査手順

協力者 1 人につき 1 回以上インタビューを行うと計画し、先に調査目的を伝えることが報告内容に何らかの影響を与えると考えため、「日本在住の中国人が日本語を使ってコミュニケーションをする場面について調べている」という情報のみを協力者に伝え、インタビューの協力を依頼することにした。インタビュー実施日が決まってから、実施日の前日の 1 日の生活をメモに取ったりして記録しておき、実施日の当日に報告してもらえるように指示した(前日にあらためてメールなどで協力者と確認しておく)。インタビューでは実施日の前日の生活を詳しく報告してもらい、報告内容をすべて録音してデータを収集した。具体的には次のような段階を踏んでインタビューを実施した。

- 1) 準備：インタビューの依頼、実施日の決定、その前日の生活の記録を依頼
- 2) 1 回目のインタビュー：半構造化の形でインターアクション・インタビューを行い、調査実施日の前日の 1 日の生活について 1 時間おきを目安に時間を追って振り返り、報告してもらった。特に不一致が生じたと思われるインターアクションについて、セッティング、参加者、話題、不一致応答に関連する言語行動など情報を詳しく聞き取

²⁶ CS19 は修士課程の在学中に交換留学生として日本に 1 年間留学した経験がある。

²⁷ 調査協力者 CS22 に擬似自然会話の収録(CS3)も協力してもらった。

²⁸ 調査協力者 CS24(CS9)、CS27(CS12)、CS29(CS11)、CS32(CS10)に自然会話の収録も協力してもらった。

った。また、必要に応じて、リコール・インタビューに切り替えて特定のインターアクションや言語行動に結びつく経験や解釈を聞き取り、これらのインターアクションや言語行動の背景分析の参照資料とした。1回のインタビューが終わった後は、次のインタビュー実施日を決め、同じく記録を依頼したが、1回のインタビューの長さは1時間～1時間半前後となっている。

- 3) 文字化：録音したインタビューのデータから必要な部分を取り出して文字化する
- 4) 2回目のインタビュー：前回のインタビューの内容の確認、次に、同じく1時間おきを目安に前日の生活を回想して報告してもらった。必要に応じて1)–3)の順番で2回目以後のインタビューを実施する

1)から4)まではそれぞれ別の日に行ったが、まず協力者にインタビューの収録を依頼し、承諾を得られた後はインタビューの実施日を決めて、その前日の生活を記録するように頼んだ。実施日の当日は、雑談を混じりながらインタビューの所要時間を告げてからインタビューに入る。1日の生活の中で不一致および不一致応答がどのようなインターアクションの中で起きてくるかはほとんど予測できないため、まず村岡(2002:137)で述べられたように、1時間ごとに区切って何が起きたかを聞き、1日のインターアクションの全体像を把握できるように質問していった。次に、明らかになった個々のインターアクションについて個別に質問し、インターアクションについての印象、どこで、だれとのインターアクションであったか、内容や言語バラエティなどにどのような特徴があったか、このインターアクションの前に予想したり事前調整したりしたことがあったか、また、インターアクションの相手とはどのような関係にあるか、会う頻度や接触歴はどれぐらいあったか、などについて聞き取ることにした。特に、語られたインターアクションにおいて不一致が生じたと思われる際に、参加者間でどのような言語行動が起きたか(不一致および不一致応答)、その時に協力者が意識した問題はあったか、どのような問題を意識したか、どのように不一致応答を管理し調整したか、そして、インターアクション後の感想がどうだったか、などについて詳しく報告してもらった。また、似たようなインターアクション、場面は前に経験したことはあるか、この前の経験と語られたインターアクションでの言語行動との関連性の有無、などについては適宜にリコール・インタビューに切り替えて、当該の不一致応答に結びついているさまざまな経験や解釈を明らかにしようとしていた(村岡 2002:139)。協力者の全員が中国語母語話者で、より気軽にインターアクションを報告してもらえるように、インタビューは原則的に中国語を用いて行ったが、特定の報告内容によって一時的に日本語に切り替えて語る協力者もいた。インタビューが終了後、不一致、不一致応答が起きたインターアクションについての報告の録音をもとに、インターアクションのセッティング、参加者、話題や目的、不一致の対象、不一致応答の詳細、不一致応答を行った際に留意した問題、実施した調整行動などの側面に該当する内容を文字化し、インターアクション相手との関係、接触頻度、似たようなインターアクションでの不一致応答の経験な

ど、リコール・インタビューから得られたエピソード的信息も記録した。

インタラクショ・ン・インタビューで収集したデータは、不一致応答に関する言語行動の細部までは反映しきれないが、不一致が生じたインタラクショ・ンの具体的な場面情報、生じた不一致および行われた不一致応答についての報告内容のほかに、インタラクショ・ン相手や不一致応答一般に関するエピソード的信息も含まれるため、異なる場面でCSの不一致応答のバリエーションをより多面的、多角的に考察するのに適するデータであると考ええる。

2.4 会話資料、インタラクショ・ン・インタビュー資料のデータ化

この節では、主に会話資料とインタラクショ・ン・インタビュー資料の文字化で用いられた記号を示し、収集した資料から生じた不一致、行われた不一致応答に関わる会話データ、インタビューでの報告内容の抽出方法を説明する。

2.4.1 文字化の方法

収集した擬似自然会話場面と自然会話場面の会話資料はすべて文字化したが、インタラクショ・ン・インタビュー資料については、不一致が生じて不一致応答が行われたと確定できたインタラクショ・ンに関する報告内容の部分のみを文字化した。文字化の作業に際して、主に桜井(2002)、宇佐美(2004)を参考にし、意味内容がすぐ理解できるように漢字仮名交じりで内容を示すようにし、下記のような記号化の設定を行い、文字化を行った。資料の文字化は主に録音をもとに行ったが、映像も収録された擬似自然会話場面については、映像データを用いてもう一度文字化資料を確認し、CSの不一致応答に伴う非言語行動の説明を適宜に付け加えた。なお、インタラクショ・ン・インタビュー資料については、同時発話や重複発話などのような会話分析上に重要視されている談話上の特徴より、報告内容の詳細の記述が最も重要であると考えため、これらの資料の文字化にあたり、下記で示された文字化の規定を一部簡略化した形で文字化を行った。以下は文字化資料で使用された記号の一部を示す(詳しくは巻末資料を参照する)。

文字化に用いられる記号

記号	意味
ー	音を伸ばした発音 「ーー」は相対的に伸びが長いことを表す
↑	上昇イントネーション(疑問文に付くことが多い)
、	語句の断続を明らかにする息継ぎの箇所を示す
。	文の切れ目を表す
(数字)	会話中の沈黙時間の長さを示す。()の中の数字は沈黙時間の秒数である
<>	同時発話されたものは、重なった部分の双方を<>で括る

記号	意味
【 】	第1話者の発話が終わる前に、途中から挿入される形で、第2話者の発話が始まる場合、結果的に終了した第1話者の発話の終わりには、【】をつけ、第2話者の発話の冒頭に】をつける
=	間が短い発話の交替を示す
()	短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に()に括って入れてある
(笑)	笑いながら発話したものや笑い等は、(笑)、(笑いながら)と記してある
(< >)	相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(< 笑 >)と記してある
“ ”	発話中に、話者及び話者以外の者の発話、思考などの内容を引用された場合、その部分を“ ”に記してある
????	聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、?のマークをつける
(内容?)	音声聞き取りにくい場合、()の中に聞き取れた内容を表記し、?をつける
「 」	固有名詞等、協力者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表す時に「苗字」、「地方名」、「店名」、「会社名」などのように提示する

2.4.2 不一致事象の抽出

2.3 で説明したように、本研究では DCT のようなアンケート調査、擬似的ディベートのようなロールプレイ調査などの方法を用いるのではなく、JS と CS の 1 対 1 の擬似的自然会話と自然会話の録音、録画、そしてインターアクション・インタビューでの CS の報告内容の録音、などの方法を用いて資料を収集したことである。見解(point of view)を提示するすべての発話には相手からの不一致の表示が後続する可能性があり (Angouri&Locher 2012:1550)、不一致および不一致応答の出現はほとんど予測不能である (Sifianou 2012:1557) と指摘されたように、本研究においては、調査した会話場面で取りあげられる話題や会話の進め方などの選択は調査協力者に任せてあり、1 日のインターアクションは調査者がコントロールできる範囲内のことではないため、参加者間で不一致が生じ、CS が不一致応答を行うことは個々の不特定なところで起きていることも十分にありうる。そこで、会話データと FUI での報告内容、インターアクション・インタビューでの報告内容などをあわせて詳しく分析する前に、生じた不一致、CS が行った不一致応答に関わる会話のやりとり、インタビューでの報告内容を同定し、抽出する必要がある。

2.4.2.1 不一致応答が生じた談話の構造

生じた不一致の内容、行われた不一致応答の内容などに該当する部分を同定し、データ

から抽出する前に、まず、談話上の不一致応答の出現位置を確認する必要がある。

隣接ペアの視点に基づいて不一致の表示を考察した Sacks(1987)、Pomerantz(1984)から、不一致の表示の前に不一致の対象となる発話が必ずペアで現れると示唆された。また、Soring(1977:364)は、不一致の表示が会話の相手の先行発話(prior utterance)に対する 1 種の反応であると述べ(Walkinshaw 2009:29 より引用)、Locher(2004:99)は不一致の表示が先行する刺激 (preceding prompt)に対する反応的行動であると指摘した。さらに、木山(2005:167)では、「不同意²⁹は、ある発話に対してなされるものであり、不同意の対象となる相手の発話が必ずある」と指摘されている。このように、談話上の出現位置からみると、CS の不一致応答の前に不一致を生じさせた JS の先行発話が必要であると確認できる。

不一致応答が行われた後の会話の連鎖について、Locher(2004:95)は、不一致の表示は本来的に先行行動(previous actions)に後続する発話行為であると同時に、次の話し手に後続の位置(next-position)を提供し(open)、示された不一致に対する何らかの反応を要請する発話上の機能も果たせると指摘した。このように、CS の不一致応答が JS の先行発話に後続する部分であるが、会話連鎖の視点からみると、JS の応答を要請する先行部分でもある。JS の応答においても不一致が提示され、参加者間の不一致応答が連鎖的に行われる場合、会話が「議論」(argument)にまで発展していく可能性がある(Kakavá1993:36)。

CS の不一致応答の前に不一致を生じさせた JS の先行発話が必要である、そして、CS の不一致応答が応答内容に対する JS の反応を要請し、不一致応答の連鎖を生じさせる可能性がある、といった視点から、CS の不一致応答が生じた談話の構造は次のようになる可能性があると考えられる。

1) JS の先行発話の直後に意見の不一致が生じる場合

JS の先行発話→CS が先行発話から意見の不一致を感じ不一致応答を行う→(JS の応答)→(CS が引き続き不一致を感じて応答する)→・・・

これは CS の不一致応答が生じた談話の最も典型的な構造であり、JS の発話の直後に CS が不一致を感じ、不一致応答を行うという流れになっている。後続する JS の応答から CS が引き続き不一致を感じ、不一致応答を行う場合、「JS の先行発話→CS の不一致応答」のシーケンスが継続して起こり、議論まで発展していくことも起こりうると考えられる。

2) JS の先行発話の直後に意見の不一致が生じない場合

JS の先行発話→CS の後続発話→JS の先行発話(JS が CS の発話から不一致を感じて応答することが起こりうる)→CS が JS の先行発話から不一致を感じて不一致応答を行う→・・・

²⁹ 木山(2005)では、「disagreement」を「不同意」と称している。

この場合は、JS の先行発話の直後に CS が不一致を感じずに応答するが、後続する JS の応答から不一致を感じて応答を行う流れになっている。その後の会話の展開可能性として、1)で示したように、「JS の先行発話→CS の不一致応答」のシーケンスが継続して起こり、議論まで発展していくことが起こりうると考えられる。

以上は、不一致を生じさせた JS の発話を先行発話と位置づけた上で、研究対象である CS の不一致応答の談話上の出現位置は、2 種類の可能性があるとして説明した。出現位置が異なるにしても、CS が不一致応答を行う前に必ず不一致を生じさせた JS の先行発話があるという点では共通している。

2.4.2.2 先行発話と不一致応答の同定

これより、収集した会話資料、インタラクショントークン・インタビュー資料に基づいて、不一致を生じさせた JS の先行発話、それに後続する CS の不一致応答に該当する部分の同定の手順、不一致応答の分析単位の判定について説明する。

(1) 先行発話と不一致応答の同定手順

会話のやりとりの中からで不一致、不一致応答を同定する際に、不一致が生じるメカニズムについての Walkinshaw(2009)の説明が参考となる。Walkinshaw(2009:29)では、話し手が発話を通して一つの行為(action)、例えば、ある事実の陳述や声明(statement)、賞賛、苦情を言う、賛辞を言う、侮辱する、自慢する、一つの意見や自己卑下(self-deprecate)を申し出る(offer)、などを実行しようとする場合、この発話が第一次的評価(initial assessment)となり、後続するターンにおいて、聞き手が第一次評価に同意するか、それとも不同意するかを選択した上で、第二次評価(second assessment)を行うように求められていると説明した。このように、JS の先行発話では事実情報についての陳述や声明、物事に対する評価や感想などの内容が提示される場合、CS が先行発話に対する「同意」または「不同意」の意思表示を行うように求められ、先行発話に対する「意見の不一致」、「不一致応答」が生じてくる可能性があると考えられる。

会話データから不一致、不一致応答に該当する部分の同定作業の手順は、下記の通りである。

- 1) JS の発話、後続する CS の応答に対して内容の側面を取りあげて分析する。
- 2) 先行研究で挙げられた不一致応答に用いられる言語表現、調整ストラテジーを参考にし、
言語表現上の特徴を取りあげて分析する。
- 3) 双方の判定結果を総合的に検討し、研究対象として抽出すべき部分を同定する。

1)の段階において、Walkinshaw(2009:29)の説明を参考にし、事実情報の陳述や声明、物事に対する評価や感想などの内容が提示される JS の発話、それに後続する CS の発話の発

話内容に注目し分析を行う。具体的には、CS の応答には先行発話に対する「同意」の態度を示す内容が含まれているか否かによって、不一致が生じたか否か、CS の応答が不一致応答に該当するか否かを判定していく。CS が応答において異なる見解を明確に提示する場合は比較的判定しやすいが、CS が異なる見解をほのめかして提示して応答する場合、または、感じた不一致の表示を回避して応答する場合、CS の応答が不一致応答であるか否かについての判定が難しくなる。したがって、CS の応答内容の側面のほかに、2)の段階では、Brown & Levinson(1987)、Pomerantz(1984)が指摘した不一致の表示に用いられるポライトネス・ストラテジー、Jones(1990)、王(2005)³⁰が挙げた日本語での「明示的」(direct/explicit)、「非明示的」(mitigated/implied)不一致の表示に用いられる調整ストラテジー、言語表現を参考にし、言語上の特徴を注意深く観察し判断を加える必要がある。3)の段階において、1)と 2)の判断結果を検討し、該当する CS の不一致応答の内容を同定し、そこからさかのぼって、不一致を生じさせた JS の先行発話、不一致の対象を抽出する。

ここまでの作業は主に調査者の視点に基づいて行われるため、当事者の CS の視点から捉えた結果と異なる可能性があると考えられる。そこで、同定の結果を検証するために、CS の応答に関する FUI での報告内容を照らし合わせて確認する作業は不可欠である。具体的には、JS の先行発話に対する感想、応答時の発話意図などに関する CS の報告内容を参照した上で、上記の 1)～3)を通しての同定結果を確認する。

とくに、内容、言語表現上の特徴から、CS が何らかの形(明確または婉曲)で不一致を示して行った不一致応答を同定することは可能であるが、意見の対立を談話上に顕在化させないための不一致応答について、上記の方法だけでは見逃す恐れがある。このような不一致応答に対して、発話内容よりは FUI から得られた CS の応答時の意識や感想を主に参照し、不一致が生じたか否か、異なる見解の提示を回避して不一致応答を行ったか否か、などについて確認した上で判断するほかない。

インターアクション・インタビューにおいては、会話場面と異なって、協力者が自ら、または調査者の確認の質問によって、様々なインターアクションで生じた不一致、自分の不一致応答の内容を報告することになっている。したがって、インターアクション・インタビュー資料から不一致、CS の不一致応答に該当する部分を同定する際に、主に不一致事象に関する報告内容である否かを確認した上で判断し、研究対象として抽出すべき部分³¹を同定する。

これより、収集した資料から生じた不一致、CS の不一致応答を同定する作業について、事例を挙げて説明する。まず、インターアクション・インタビュー資料での同定作業を説明していくが、会話資料についての説明は分析の枠組みを扱う第 3 章での事例説明とあわせて行う。下記の例 1 では、CS がインターアクションで生じた不一致応答を自ら報告した。

³⁰ 日本語での「明示的」、「非明示的」不一致表示に用いられるストラテジー、言語表現について、詳しくは Jones(1990:91、梶本 2004:27 より引用)、王(2005)を参照すること。

³¹ リコール・インタビューから得られた CS の不一致応答に関するエピソードの情報も抽出し、具体的な不一致応答の事例を分析する際の参考資料として用いることにした。

例 1 ワイシャツの色は茶色だった(不一致が生じたと自ら報告された事例)³²

番号	発話者 ³³	発話
1	CS22	そのシャツは茶色にみえたからさ、(うん)私は茶色と書いた、そして彼は灰色だと言った、実は、茶色だったのよ
2	R	うん、それでどう答えた↑
3	CS22	お客さんだからさ、私は何もいえない、私は“すみませんでした。電球の光で茶色にみえました。今度は気をつけますと言った”(後略))

例 1 では、クリーニング屋でアルバイトをしている CS22 が預かった客(JS)のワイシャツの色を伝票に記入した時のインターアクションが報告されている。茶色と記入した後は JS に灰色であると訂正され、CS22 は色を見間違えたと言った(番号 3³⁴)。JS の先行発話(茶色ではなく灰色だ)に対する感想として、CS22 が「実は、茶色だったのよ」と報告したため、シャツの色をめぐる不一致が生じ、CS22 が不一致応答を行ったと判定できる。

例 1 のように、インターアクションにおける個々の言語行動についての語りの中に、協力が自ら不一致が生じたと報告した事例がある。不一致事象の抽出にあたり、生じた不一致、行われた不一致応答に関する報告内容を研究対象として同定する(e.g. 番号 1、3)。

また、次の例 2 のように、調査者の確認の質問によって不一致が生じたと判定できた事例がある。

例 2 病院のプライバシー保護の方針が正しい(調査者の質問によって確認できた不一致)

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略))彼女(JS)は、すこしやりすぎ、すぎ、すぎだと考えていたさ
2	R	うん、 <u>彼女はやりすぎだと考えて</u>
3	CS21	うん
4	R	あなたは、病院のそれ(プライバシー保護の方針)をどう考えているか＝
5	CS21	＝ <u>そのやりかたは非常に正しいと思う</u> 。というのは ((後略))

例 2 では、CS21 は知り合いの日本人と食事をしながら雑談する時のインターアクションを報告している。これまでの会話では、病院側が患者のプライバシー保護のために家族以外の人に病室番号を教えない、というやりかたについて JS が「やりすぎだ」と感想を述べ

³² 事例を提示する際に、不一致を生じさせた JS の先行発話に下線「_____」、CS の不一致応答に下線「_____」をつけて示す。以下は同様。

³³ 「発話者」の列において、会話資料の場合は会話参加者の通し番号が提示され、インターアクション・インタビュー資料の場合は調査協力者の通し番号が提示され、「R」は調査者(intervirwer)を示す。以下は同様。

³⁴ 会話資料、インターアクション資料での先行発話、不一致応答、応答時の感想などに当たる内容を言及する時、発話番号(e.g. 番号 1、番号 1・3 行目)を付け加えて説明する場合がある。以下は同様。

た(番号 1)。調査者が JS の考えを確認し、CS21 の考えを尋ね(番号 2、4)た後、CS21 が「非常に正しいと思う」(番号 5)と答えたため、病院側のプライバシー保護の方針をめぐって 2 人が異なり見解を持ち、不一致が生じたと判定できる。このように、インターアクションにおける個々の言語行動について報告してもらう際に、調査者は常に参加者間の考えの確認を心がけ、不一致、不一致応答の有無を確定できるように質問しながらインタビューを進めていった。不一致事象の抽出にあたり、例 1 と同じように、生じた不一致、行われた不一致応答に関する報告内容³⁵を研究対象として同定する(e.g. 番号 2、5)。

(2) 不一致事象の分析単位

会話資料とインターアクション・インタビュー資料から同定できた CS の不一致応答の事例には、JS の先行発話に対する一つのターン³⁶で終わる応答のほかに、一つ以上のターンにまたがって行われる応答もある。不一致応答を集計し個別に分析していく際に、原則として、一つのターン内で行われた不一致応答を 1 件の不一致応答の事例と捉えて研究対象と定める。そして、一つ以上のターンにまたがる不一致応答について、CS の応答内容と FUI での報告内容と照らしあわせ、ひとまとまりの応答内容を成すと考えられる部分まで区切って、1 件の不一致応答の事例として取りあげる。これによって、先行発話に対する一つ以上のターンからなる CS の不一致応答は、その応答内容によって、1 件の不一致応答の事例として集計される場合があり、1 件以上の不一致応答の事例に分けて個別に集計される場合もある。後者の場合は、一つの先行発話に対して 1 件以上の不一致応答が行われることになる。

一つの先行発話に対して 1 件以上の不一致応答が行われた事例に対して、応答ごとに関連する言語管理、生成のプロセスを詳しく分析する必要があり、不一致応答間の継起関係を取りあげて検討する必要もある。同一インターアクションにおいて継続して行われる不一致の表示について、Kotthoff (1993, Angouri&Locher 2012:1550 より引用)は、不一致の表示に関するフレームは、婉曲な提示(そして聞き手のフェイス保持)に対する期待(expectation)から、話し手のフェイス保持に対する期待へと移行していく可能性がある³⁷と指摘した。このように、不一致応答間の継起関係の考察も、CS の不一致応答の言語管理、生成のプロセスの解明につながると考えられる。そして、一つのターンで終わる不一致応答に対して、主に「主要部」³⁸に用いられる言語表現、関連する FUI での報告内容と合わせて考察を進めていくが、応答内容の構成要素の配列関係にも目を向ける必要がある。

³⁵ 紙面の都合上、例 2 では生じた不一致に関する報告内容のみを載せた。

³⁶ 本研究では、金(2000)の定義を参考にし、ターンを「話し手が話し始めてから他者の発話やポーズで区切られるひとまとまりの発話である」としている。

³⁷ 移行の引き金として、Kotthoff(1993, Angouri&Locher 2012:1550 より引用)は、話し手が自分の主張に確信がない印象を与えたくないという欲求を挙げた。

³⁸ 王(2005)では、Sinclair&Coulthard(1975)の発話交換構造モデルに基づき、CS の不一致応答ムーブを「合図」(singal)、「前部」(pre-head)、「主要部」(head)、「後部」(post-head)に分けて、各部分の構成要素を挙げた。本研究もそれを参考にし、応答内容の表出に最も中心的な役割を果たす部分を「主要部」とした。

本章では、本研究で行われた会話調査、インターアクション・インタビューの概要、会話資料、インターアクション・インタビュー資料において生じた不一致、CS が行った不一致応答の内容を同定し、抽出する作業の説明を行った。本研究では、会話資料、インターアクション・インタビュー資料を収集し、会話資料における不一致応答に対して FUI も行ったので、日中接触場面での CS の不一致応答の「言語的プロダクト」の側面を詳しく考察でき、応答時の CS の感想や意識の詳細を捉えられるようになる。これらのデータに基づいて、不一致応答における発話内容の側面、発話時の内面的意識の側面を合わせて考察することにより、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセス、関与する社会的、場面的要因の考察を進めていく。次の第 3 章では、本研究で用いる分析の枠組みを提示し、分析の焦点となる内容を説明する。

第3章 本研究で用いる不一致応答の分析の枠組み

本章では、言語管理プロセス(Neustupný 1985a, 1994; Jernudd& Neustupný 1987 ほか)、生成プロセス(ネウストプニー1999、高 2006)の枠組みを参考にし、日中接触場面でのCSの不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスの考察で用いる分析の枠組みを説明する。

具体的には、まず、先行研究の指摘に基づいて、不一致応答が言語化されるまでの言語管理、生成のプロセスの諸段階において、不一致が生じた場面に埋め込まれた様々な社会的、場面的要因が関与する可能性を提起する。次に、「逸脱の留意」の概念を援用し、CSが不一致応答を行う際に留意した対象を、「先行発話の命題内容に関わる逸脱」、「不適切な不一致の表示方法に関わる逸脱」との2種類の逸脱に分類した上で、留意された逸脱の同定方法、2種類の逸脱の特徴を説明する。そして、不一致応答に関わる調整の段階に焦点をあて、CSが不一致応答に用いた調整ストラテジーの明示度、留意した片方または双方の逸脱に対してCSが行った調整のバリエーションを考察する。これと同時に、「逸脱の留意」、「調整の段階」の分析を通して、不一致応答の管理プロセスの諸段階における社会的、場面的要因からの関与を明らかにする。逸脱が生じずに言語管理が行われなかった不一致応答に対して、生成プロセスのモデルに基づき、CSが「インプット」の段階で注目し選択した社会的、場面的要因を明らかにした上で、不一致応答が「表層化」されるまでの生成プロセスの諸段階を考察する。

3.1 不一致応答に関与する社会的、場面的要因

言語管理理論では、何らかの規範が参照され、逸脱が留意されたことにより、管理プロセスが活性化されるので、「規範からの逸脱」、「逸脱の留意」が管理プロセスを活性化させる引き金であるとされている。CSの不一致応答に関する管理プロセスの考察にあたり、CSが不一致応答において留意した逸脱の詳細から取り組む必要がある。

接触場面の参加者が逸脱を留意する際に参照する規範について、Neustupný(1985b)は参加者が無数ともいえる規範のすべてを常に使用しているわけではなく、そのうちのいくつかを選択し、それぞれの場面の基底規範を形成していると指摘した。また、加藤(2010:40)が接触場面で適用される規範の多様性と変動性の実態を詳しく考察し、一人の人間が持っているそれぞれの規範は、ある場面では活性化され、別の場面では活性化されないことがあると述べている。これらの先行研究では、不一致応答に関する管理プロセスで適用される規範は場面ごとに変動する可能性があるとし唆された。規範の変動性が生じる背景について、ファン(2010:89)が場面要素からの関与を挙げた。具体的には、接触場面で行われる発話行為はコミュニケーションの目的や、相手や、内容などの場面要素に制約され、様々な発話事象によってある要素が前面に現れ、ある要素が背景化するわけで、規範も顕在化されたり、または潜在化されたりすることがあり、規範の変動性が増していくようになると説明した。不一致が生じた場面においても、様々な場面要素が適用される規範の選択、逸

脱の留意、逸脱の調整などの管理プロセスの諸段階で関与して不一致応答を制約し、そして、その関与のしかたが場面ごとに変動していると考ええる。

管理プロセスにおける場面要素の関与のしかたについて、ネウストプニー(1999:10-11)は、「管理プロセス」に「生成プロセス」¹が前置していると述べ、生成プロセスにはまず「インプットのプロセス」(inputting, coding)の段階があり、この段階において、行動場面の多くの事柄がまず、行動で使うもの(e.g. 参加者の年齢)と使わないもの(e.g. 参加者の目の色)に分けられ、「コミュニケーションの目標・セッティング(時間と場所)・参加者・内容」が決まると説明した。高(2006)が提案した「生成プロセス」のモデルにおいても、ある発話行為の実行に関わる「機能(発話意図)」、「表現」、「表層化」の段階に先立って、社会的なインプットからコミュニケーションの目標、場面、参加者、内容などの要素が選択される「インプット」の段階があり、その選択結果に基づいて生成プロセスが展開していくとされている。このように、不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスにおいて、様々な場面要素が選択され、インプットされるプロセスや段階が先行していると示唆された。

不一致応答に関する先行研究には、不一致の表示方法の選択、使用に影響する要因を取りあげた研究が多い。ポライトネス理論(Brown&Levinson 1987:74-76)で挙げられた参加者間の「社会的距離」(distance)、「権力」(power)、「特定の文化における行為 x の負荷度」(rank of imposition)の要因のほかに、不一致の対象の性格(Rees-Miller 2000、大津 2001、スペンサー＝オーディー2004)、不一致の表示という発話行為に対して参加者が持つ文化的価値と志向(規範)(キム 2008、Cheng&Tsui 2009、Tuan&Hsu 2009)、インターアクションの目的や不一致提示の目的(Cheng&Tsui 2009)、不一致の対象に関わる情報のなわ張り関係(服部 2004)などの要因も挙げられ、これらの要因が不一致表示の頻度、表示のパターンや表示の明示度の度合いなどに影響を及ぼすと指摘された。ラポール² (rapport)の維持・管理を論じたスペンサー＝オーディー(2004)、自然会話場面での不一致の表示を分析した Locher(2004)では、不一致応答に関与する社会的、場面的要因が最も詳しく述べられた。

スペンサー＝オーディー(2004:33-49)では、ラポールマネジメントのための戦略の使用に影響を与える要因として、(1) 話し手がとり得るラポールへの方向性(促進、保持、無視、挑戦)、(2) 状況的変数(contextual variables)、(3) 語用論的慣習(第 1 章の 1.2.2 を参照する)が挙げられた。以下では、本研究で主に参考する状況的変数の構成を引用し説明する。

A 参加者と参加者間の関係

A1 支配力 (French&Raven 1959、スペンサー＝オーディー2004:38-39 より引用)

¹ ネウストプニー(1999)において、「生成プロセス」とは、コミュニケーションが開始される以前の「インプットのプロセス」から実際に発話されるまでの「表層化のプロセス」までを指している(加藤 2010:11)。具体的には、「インプットのプロセス」、「配列のプロセス」、「表層化のプロセス」の三つの段階が含まれている。詳しくは(ネウストプニー1999:10-11)を参照すること。

² スペンサー＝オーディー(2004:4)は、対人関係の管理、つまり調和の取れた社会関係を促進し、維持し、また脅かすものでもある言語の使用を「ラポールマネジメント」としている。

報酬支配力(reward power)、高圧支配力(coercive power)、専門支配力(expert power)
正当支配力(legitimate power)、偶像支配力(referent power)

ここでは注意しなければならないのは、参加者間の支配力の配分は常に固定されているのではなく、見方によって異なる役割関係になる可能性があることである。たとえば、店の客はウェーターに対して報酬および高圧的支配力を持っている一方、ウェーター側からみれば、客に対して一定の要求をする権利を有し、正当および高圧支配力を持っていると考える。

A2 距離 参加者間の「距離」に対する認識に影響しそうな要素として、社会的類似／相違・接触の頻度・知り合ってから長さ・親密さ、あるいはお互いをどの程度知っているか・同じような考え方の持ち主だという感覚・肯定的／否定的感情がある。

A3 支配力と距離の相互関係

文化によって、この二つの変数が比例する場合(e.g. 支配力が大きいほど距離も大きくなる)があるほかに、無関係の場合もある(e.g. 支配力が大きいにせよ小さいにせよ、当事者に知覚される距離の程度が変わらない)。

A4 参加者の数

話し手／聞き手あるいは聴衆として参加する人の数が話し手の話し方、話の内容に影響する。

B メッセージの内容：コスト³と利益

メッセージは、その内容により、フェイスを脅かす度合いにおいて異なりえるし、「コスト」が結びつく可能性もある。また、「利益」が結びつくことがある。

C 社会的／相互作用的作用的役割(social/interactional roles)

社会的／相互作用的作用的役割関係(e.g. 教師と生徒、雇用者と被雇用者、店員と客)は、その関係の支配力および距離を部分的に決定するばかりではなく、その役割メンバーの権利と義務をも規定する。

D コミュニケーション活動

講義、就職面接などのコミュニケーション活動はそれぞれ特徴的なパターンを持ち、その活動と結びついた「文化的に固有の慣習および理想」が、参加者の話し方とその解釈に影響と与える。

E 状況の全体的判断

A～Dの状況的変数は、言語使用への影響において、「永続的」(standing)役割を果たすこともあるし、「動的」(dynamic)役割を果たすこともある。人はインターアクションにおいて適切な戦略を選択するには、「動的」状況判断と「永続的」判断を結びつける必要がある。

スペンサー＝オーディー(2004)が挙げたこれらの状況的変数は、コミュニケーション活

³ スペンサー＝オーディー(2004:42)では、金銭的なもののほか、時間、努力(effort)、負担(imposition)、不便(inconvenience)、危険(risk)も「コスト」に入れた。

動でのラポールマネジメントを実現させるための、ストラテジーの選択と使用の全般において影響すると思われる要因であるが、不一致応答が行われる場合のコミュニケーション活動においても機能していると考える。

不一致の表示における権力とポライトネスの相互作用(interface)の解明を図る

Locher(2004:324-331)の研究では、不一致が生じた場面でのインターアクション、そして、不一致の表示に影響する要因について、下記のように述べられた。

- A 不一致の対象となる話題への参与度の度合い、話題に関する熟知度、そして専門的知識の保有度(involvement and familiarity with the topic as well as professional expertise)
- B 不一致の対象となる話題をめぐる参加者間の考えのくいちがいの度合い(the degree of controversy involved the topic)
- C インターアクションにおける参加者別の役割、地位(status)
- D 異なる種類のインターアクションに関する慣習的な規範
- E インターアクションの目的、不一致提示の目的
- F 参加者間の関係、参加者のそれぞれのフェイスへの欲求、言語的、文化的背景、参加者の発話スタイル(speaking style)、個々のインターアクションの構造(frame)に関する知識の保有度

以上の要因のほかに、生じた不一致における意見の対立やインタレストの衝突の深刻度は、聞き手(不一致を感じる参加者)の行動環境(the addressee's action-environment)に制限をかけ、聞き手が自分のフェイス保持のために不一致を示すことがあると Locher(2004:328)が言い加えた。Locher(2004)が挙げた要因には、スペンサー＝オーディー(2004)での状況的変数と共通しているもの(参加者間の社会的／相互作用的作用的役割や支配力の配分、参加者間の関係、個々のインターアクションの構造に関する文化的、慣習的な規範や知識、参加者間における意見が異なる程度、インタレストの対立や衝突の深刻度の度合い)以外に、不一致の対象となる話題に関する熟知度や専門的知識の保有度、インターアクションの目的、不一致提示の目的などの要因が含まれ、これらの要因も不一致応答の言語管理、生成プロセスに関与してくる可能性が高いと示唆された。

以上では、不一致の表示に関与する状況的要因についての先行研究を概観し、CS の不一致応答の管理、生成のプロセスにおいてインプットされ、関与する可能性のある社会的、場面的要因の構成を提起した。本研究では、スペンサー＝オーディー(2004)、Locher(2004)をはじめとする先行研究での指摘を参考にし、FUI など得られた応答時の CS の意識や感想に基づき、CS が不一致応答においてインプットした社会的、場面的要因を同定し、抽出した。抽出された要因の詳細について、逸脱の留意の段階を説明する 3.2 と 3.3 での事例説明とあわせて例示する。

3.2 JSの先行発話において留意された逸脱—命題の逸脱

逸脱について、Neustupný(1985a)は、接触場面の参加者が持つ言語的、社会言語的、または社会文化的規範に合わないとして留意した、会話の進行の妨げとなるものとしている。接触場面において起こる様々な逸脱について、Neustupný(1985 a)は下記の四つのタイプを挙げた。

(1) 命題の逸脱(propositional deviance)

命題を形成したり理解したりする能力がないことであり、換言すれば、言われるべきことが(全体、または一部で)言われず、理解されるべきことが不理解のままになることである。

(2) 表示の逸脱(presentational deviance)

話し手が自分自身について作り出したイメージが自分の態度や意図の本当の姿ではないということに気付いたり、相手を評価することの難しさを感じたりすることである。

(3) 運用の逸脱(performance deviance)

内的(母語)場面で利用される規範に従って、メッセージを運用する話し手、聞き手の能力が欠けていることにある。

(4) 訂正の逸脱と不協調の逸脱(correction deviance and discord deviance)

訂正の逸脱は自分の発話の不適切さを訂正する能力の不足である。不協調の逸脱は、場面の特徴(話し手の自己、受信者の特徴、内容など)の間の協調ではない感覚であり、場面の外来要因がコミュニケーションの母語の手段と一致していない(あるいは逆の場合)と参加者が感じる場合である。

Neustupný(1985a:50-52)より、筆者訳

CSの不一致応答の際に、まず、不一致の対象、つまり不一致を生じさせたJSの先行発話の発話内容がCSの留意の対象となりうると考える。Neustupný(1985 a)が述べたように、参加者が言われた命題を理解したりする能力がないと感じる場合、命題の逸脱が生じることがある。この指摘によって、JSの先行発話で表された命題内容に「不同意、不理解」しているCSが、不一致を感じると同時に、その先行発話を会話の進行の妨げとなるものと捉えて、逸脱と留意することは起こりうると考えられる。また、隣接応答ペアの視点から見ると、不一致が生じる際に、会話の相手に同意を示す(「一時的なリップサービスとしても」、Goffman 1967:11)ことは優先される行動であり(Sacks 1987)、不一致の表示のほうは非優先的応答となる(Pomerantz 1984)。一方、実際のCSの不一致応答の事例には、CSがJSに賛同の意を示すかわりに、異なる見解を提示する事例がある。このような事例において、CSが不一致を感じ、JSの先行発話が会話の妨げであると逸脱を留意した上で、逸脱の解消のために非優先的応答の形(不一致を示す)を選択し、調整を行う管理プロセスが存在する可能性はあると考えられる。

これから事例を挙げて、CS が JS の先行発話において留意した逸脱を同定する手順、逸脱の留意に関与したと考えられる社会的、場面的要因を説明する。

3.2.1 先行発話において留意された命題の逸脱の同定

会話資料においては、まず 2.4.2.2 で述べられたように、CS が JS の先行発話に対して何らかの形で不一致を示した場面に注目し、JS の先行発話 - CS の不一致応答のペアを抜き出す。次に、CS が不一致を提示せず行う応答もあると予想されるので、これらの応答について、主に FUI での報告内容に基づき、生じた不一致の内容、JS の先行発話による逸脱の有無を確認し、該当する JS の先行発話 - CS の不一致応答のペアを抽出する。ここで注意しなければならないのは、CS が何らかの形で(明示的にまたは婉曲的に)不一致を示したということを基準に、前置する JS の先行発話を留意の対象として機械的に抽出していくと、逸脱と留意された先行発話のほかに、そうではないもの(不一致を生じさせたが逸脱と留意されない先行発話)も含まれる可能性がある。したがって、CS が不一致を提示せず応答を行った事例についてはもちろんのこと、CS が何らかの形で不一致を示した事例に対しても、会話資料と FUI での報告内容を照合し、JS の先行発話に対する CS の応答時の感想を確認した上で、先行発話による逸脱の有無を事例ごとに検証することは不可欠である。そのために、次のような留意点を心がけて同定作業を行った。

- (1) JS の先行発話とともに抽出された CS の不一致応答に何らかの特徴がある場合は (e.g. 否認表現、断定の文末表現、強調の意を示すイントネーション、一つの先行発話に対する 1 回以上の不一致提示) 、JS の先行発話に対して何らかの留意があったとまず仮定する。
- (2) 次に、FUI での報告内容を参照し、「JS の発話内容が実情に合わないので不一致を感じた」、「JS の発話に納得できなく不一致を感じた」、「その時は不一致を示すべきだと思った」といったような応答時の感想が語られた場合、CS が JS の先行発話を何らかの規範からの逸脱と留意したと考えられる。
- (3) さらに、言語的、非言語的表現上の特徴が観察できず最初は切り出されなかった不一致応答について、FUI での報告内容から不一致が生じ、JS の先行発話が留意されたなどと確認できる場合、該当する先行発話 - 不一致応答のペアを抽出する。

上記の手順は、一つ以上のターンにわたっての先行発話 - 不一致応答のペアにも対応できる。たとえば

JS : 先行発話

CS : 不一致応答の一つ目のターン

(JS : 応答)

CS： 不一致応答の二つ目のターン

・・・

1 件の不一致応答⁴の一つ目のターンにおいては、CS が JS の先行発話を逸脱として留意したと思わせる何らかの特徴がない場合、会話資料に基づく分析だけでは、先行発話が留意されたと判定できない。なお、FUI での報告内容から、一つ目のターンにおいては CS が JS の先行発話を留意したと判定できる場合、先行発話が逸脱と留意されたと確定でき、当該の先行発話 - 不一致応答のペアを抽出していく。また、一つ目のターン内の発話内容、FUI での報告内容から、CS が JS の先行発話を留意したか否かについて判定できない場合がある。このような場合、二つ目のターンでは先行発話が留意されたとと思わせる特徴が見られ、FUI での報告内容からも留意が生じたと判定できるとすれば、CS の応答の一つ目のターンに前置する JS の先行発話が留意された対象であると考え⁵、当該の先行発話 - 不一致応答のペアを抽出していく。

このように、会話資料と FUI での報告内容を照合し判断していくことにより、CS が逸脱と留意した JS の先行発話とそれ以外の先行発話(不一致を生じさせたのみ)を分けて分析できるようになり、また、会話資料のみで判定できないが留意された JS の先行発話も分析に入れることが可能となる。

インタラクショング・インタビュー資料においての同定作業にあたり、インタラクションで生じた不一致に対してどのような印象を持っているか、不一致応答を行う時にどのような問題を意識したか、問題の解消のためにどのように調整を行ったか、などの側面についての CS の報告内容を参照し、JS の先行発話において逸脱が留意された先行発話 - 不一致応答のペアを抽出していく。

これより事例を挙げて、留意された JS の先行発話と CS の不一致応答の同定作業を説明する。

例 1 スープの味は塩辛い(JS の先行発話において逸脱が留意された)

番号	発話者	発話
1	CS15	<そして>南のほうは、(はい)肉もあるかもしれませんが、<え↑>豚肉、(え↑<笑>)<いろいろな> 【
2	JS17	】 <あまいの>たべたと思ったら(笑いながら)豚肉がでる
3	CS15	えええ、いいえいいえ、豚肉が入ったらー、ええ塩辛いです

⁴ 本研究では、一つの先行発話に対して一つ以上のターンにわたって行われた不一致応答に対して、発話内容および FUI での報告内容に基づき、ひとまとまりの内容と区切られるターンまでの応答内容を一つの不一致応答の事例として、1 件と計上する(2.4.2.2 を参照すること)。

⁵ 二つ目のターンの発話では CS が JS の先行発話を留意したと思わせる何らかの特徴がないが、FUI での報告内容から留意が生じたと確認できる場合も含む。

例 1 では、CS15 は旧正月に中国人は日本の白玉と似たようなものを食べる習慣があり、中身が豚肉となる種類もある(番号 1)と紹介した。JS17 は日本の白玉の味を連想し、CS15 が紹介した食べ物はスープが甘いわりに、中身が豚肉であるため不思議な味になる(番号 2)と推測⁶して発話した。後続の発話(番号 3)で CS15 が「味は塩辛い」と異なる見解を明確に示していると見られたため、スープの味をめぐって意見の不一致が生じたと判定できる。

番号 3 の応答では、否認表現が繰り返して用いられること(「いいえいいえ」)、そして、断定的な文末表現も使用されたこと(「塩辛いです」)から⁷、CS15 は少し焦りながら相手の先行発話を否定し、正しい情報の伝達を図っていたと解釈できる。応答時の意識について、CS15 が FUI で「相手の話しは正しくない。スープの味は甘い味ではなく、塩辛いです。これが確実に知っている情報なので、正しい情報を相手に伝えて説明することに集中していた」と報告した。実際の応答内容と FUI での報告内容をあわせて考えると、CS15 は番号 2 の JS17 の先行発話が会話の進行の妨げ(スープの味に関する JS17 の認識が正しくないため、話題の展開が阻まれる)であると認知し、逸脱と留意したと確認できる。つまり、CS15 は JS17 の先行発話において不一致を感じたほか、逸脱も留意したと考える。

例 2 私のミスではない(JS の先行発話において逸脱が留意された)

番号	発話者	発話
1	CS22	だから私は詳しく説明したの、まず、(うん)新人なので、金を数える時はいつもゆっくり数えているんです、(うん)そして、私たち 2 人(もう 1 人のバイト仲間が一緒であった)の当番の期間中なので、信じてくれないなら、防犯カメラの映像を確認すればいい、大きな店なら、防犯カメラで清算の時に正しくおつりを渡したかどうかを確認できるから、そうすると確認できるから
2	R	そう、その上(レジ)に確かあったような 【

⁶ JS17 が CS15 の紹介に対する感想を FUI で、「見たことも食べたこともないが、甘さと塩辛さが混ざっている不思議な味でしょうと思っていた」と報告した。

⁷ 「えええ」、「ええ」のフィラーは、不適切な不一致の表示方法の留意によるためらいではなく、「白玉」のスープの味をどのような言葉で説明したらいいかを考えるための時間稼ぎに用いたと CS15 が FUI で報告した。

番号	発話者	発話
3	CS22	II レジに向けられている防犯カメラは二つあるから、映像を取り出して確認すればいいと私が言った、(うん)彼(オーナー)はそのう、“そこまでしなくても”とか言っていて、(うん)それほどきれいに映っていないかもしれないとか、いろいろな言い訳をしていた、(うん)私は、もし映像を確認したくないなら、もう運が悪かったと認めざるをえない、私たちの2人は、ほかの原因も見つからなく、その期間にいたのは私たちの2人だけなので、1人ずつ2500円出す、この責任は負わなければならないが、(うん)、私はこの責任を負わなければならないが、私1人のミスだと言ってはいけな
		いと言った
		4行を略した
4	R	それまで、そのオーナーに対してもいつも“はい、わかりました”と答えていると言っていたよね
5	CS22	うん、でも私は金を預かる時はいつも慎重にやっているから、とても私のミスとは考えられない。(うん)普段は気をつけるかもしれないが(言い方)、でも、その時は金を賠償するとしても、私の責任ではないとはっきりと言わなければならなかった

例2では、アルバイト先でレジ閉めの時に5000円が足り合わないと分かり、CS22が店のオーナー(JS)と責任の所在について話しあう時のインターアクションが報告された。「レジを担当したあなたのミスだ」とのJSの先行発話に対して、CS22が入金の手続きをいつも慎重にするので自分の責任ではない(番号1・1～2行目、番号3・8～9行目、番号5・1～2行目)と考えていたため、責任の所在をめぐって意見の不一致が生じたと判定できる。

応答時の意識について、CS22が「その時は賠償しても自分の責任ではないと明確に示すべきだった」(番号5・3～4行目)と報告した。この報告内容から、CS22はJSの先行発話によって入金ミスの責任が押し付けられ、自己フェイスが侵害されたと考え、その先行発話を逸脱と留意したと確認できる。つまり、例1のように、CS22はJSの先行発話において不一致を感じ、その先行発話を逸脱とも留意した。

例1、例2が示したように、CSがJSの先行発話から不一致を感じ、その場に埋め込まれる様々な状況的要因を認知した上で、先行発話の内容において逸脱を留意する可能性がある。この種類の逸脱は、Neustupný(1985a)で述べられた逸脱の分類に基づいて考えると、CSがJSの先行発話の命題内容において留意する逸脱であるため、「命題の逸脱」と称することは適切だろう。調整のタイミング⁸(ネウストプニー1995a)の視点からとらえると、この

⁸ ネウストプニー(1995a)は調整のタイミングに関して、問題が発見する以前に問題を予測し調整する事前調整、問題が実際に現れている途中で調整する事中調整、問題発見後に調整する事後調整に分けられると指摘した。

留意は、不一致応答が言語化される前の段階において、CS が問題を予測して JS の先行発話において逸脱を留意するため、1 種の「事前留意」に近い特質をもっていると考え。

3.2.2 命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因

例 1、例 2 で示唆されたように、CS は JS の先行発話において、事実情報に対する JS の認識が正しくない、または、自分のフェイスが侵害されるなどと認知したことで、その先行発話を命題の逸脱と留意することがある。このような場合、「事実情報に合わない」こと、「CS のフェイスが侵害される」ことが命題の逸脱(Neustupný 1985a)の留意に関わる要因となる。このように、「逸脱の留意」の概念を援用し、3.2.1 で説明した手順に従って CS の不一致応答を分析することによって、CS が JS の先行発話において命題の逸脱を留意した事例を同定でき、逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因を抽出することができた。先行研究で挙げられた不一致の表示に関与する状況的変数、場面的要因の内容を参考にし、抽出した命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因を、下記の表 1 で示す。

表 1：命題の逸脱の留意に関与する社会的、場面的要因

番号	インプットされた社会的、場面的要因
1	中国語の言語的規範に合わない
2	中国の社会文化的規範に合わない
3	日本の社会文化的規範に合わない
4	社会経済的規範に合わない
5	CS の接触規範に合わない
6	実情に合わない
7	社会的常識に合わない
8	CS の個人規範に合わない
9	インターアクション内の期待(目的、誤解、話題/会話進行)
10	CS のポジティブ・フェイスが侵害された
11	CS のインタレストが侵害された
12	JS のインタレストが侵害された

これよりは、1 番～12 番の要因の内容について、事例を加えて簡潔に説明していく。

(1) 中国語の言語的規範に合わない

CS が不一致を感じ、さらに JS の先行発話が中国語の言語規範からの違反であると認知し、先行発話を命題の逸脱と留意した事例がある。例えば、歌手やバンドを組む人が「ミュージシャン」の範疇に入れないとの JS の先行発話に対して、CS が中国語ではこのような人たちも「ミュージシャン」と呼ぶことができると考え、不一致を感じたほか、先行発

話が中国語の言語的規範に合わないことでそれを命題の逸脱と留意した。

(2) 中国の社会文化的規範に合わない

例3 ホテルの形は「メロン」に似ていない

番号	発話者	発話
1	JS16	なん、なんかね名前<覚え>ていないです、(<はい>)すごい聞くんだけど 一(はい)わたしいつもそれを通して、(うん)うちの一、家族は一、(はい) 家族というか、 <u>うちの一、父親と一、(はい)弟は一、(はい)このホテルのこ と“メロン”ってゆうの(笑)</u>
2	CS14	<u>あ、そうですか、きっと高級なホテルだと<思います??></u>

例3では、CS14とJS16は横浜にあるホテルの外観について話している。そのホテルの形が「メロン」に見えるから、家族では「メロン」と呼ばれているとJS16が発話した。この先行発話に対する感想として、CS14はFUIで「なぜメロンと呼ぶかは理解できない。中国人なら“メロン”より“船帆”のほうを連想しやすい。どう見ても“メロン”に似ていないと思って、すこし驚いた」と報告した。この報告内容によって、ホテルの形をめぐって不一致が生じたと判定できる。そして、CS14はJS16の先行発話が中国の社会文化的規範(e.g. どちらかといえば、そのホテルの形がメロンではなく船帆の形に近い)からの違反であると考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

このように、中国の社会文化的規範が参照され、CSはJSの先行発話がこれらの規範からの違反であると認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(3) 日本の社会文化的規範に合わない

中国の社会文化規範のみならず、CSが「日本の社会文化的規範」の要因をインプットし、命題の逸脱を留意した事例もある。例えば、学会メンバーによる食事会の割り勘について、相手⁹はほかのメンバーが大学の教授や教員なので自分が払わなくてもよいと言い出した。これに対して、CSは「食事代は身分と関係なく払うべきだ」、「自分の分を払うことは日本の常識だ。これを守らないと非常識の人間だと思われる」と考えた。この事例では、CSが不一致を感じたほか、相手の先行発話が日本の社会文化的規範(e.g. 割り勘と決められた以上、自分の分をちゃんと払うべきだ)からの違反であると考え、逸脱と留意したと確認できる。

このように、日本の社会文化的規範が参照され、CSはJSの先行発話がこれらの規範からの違反であると認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(4) 社会経済的規範に合わない

⁹ この事例では、CSのインターアクション相手は中国語の母語話者であるが、不一致応答を行った時はCSが日本語を用いて異なる見解を提示したため、一種の接触場面になると考え分析の事例に入れた。

1) 経済的規範

決められた商品の納品期間の変更をめぐって、JSは5月から7月に延ばしてほしいと言いつたが、CSは「7月に変更すると、その分の収益は上期決算に計上できなくなり、会社に損失をもたらす」、「6月までの変更は可能であるが、7月までの変更は絶対できない」と考えた。この感想によって、CSはJSの先行発話から不一致を感じたほか、その先行発話が社会経済的規範(e.g. CSの会社の収益に関わる規範)からの違反であると考え、逸脱と留意したと確認できる。本研究では、「社会経済的規範」の要因について、参照される規範のリソースによって、「経済的規範」、「会社の規範」、「仕事の規範」に分けて考察した。

2) 会社の規範

取引先を訪問する際の社員の人数をめぐって、JSは早く仕事に慣れるために2人の社員を連れて行く必要があると言いつたが、CSは「取引先の訪問に関して、社内規定では2人までだと決められている」、「3人で行くのはいけない」と考えた。この感想によって、CSはJSの先行発話から不一致を感じたほか、その先行発話が会社の規範(e.g. 取引先の訪問に行く人数は2人までだ)からの違反であると考え、逸脱と留意したと確認できる。

3) 仕事の規範

JSがプログラムを書いた時、使用すべき関数を取り入れなかったため、プログラムの試運転がうまくいかなかった。このバグに対して、CSは「プログラミング上のバグだ」、「その関数を入れるべきだった」と考えた。これによって、CSはJSが書いたプログラム¹⁰にバグがあると不一致を感じたほか、それが仕事の規範(e.g. プログラミングの規範)からの違反であると考え、逸脱と留意したと確認できる。

このように、CSは「実質活動」(e.g. 商談)が伴うインターアクションにおいて、社会経済的規範(経済的規範、会社の規範、仕事の規範)を参照し、JSの先行発話がこれらの規範からの違反であると認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(5) CSの接触規範に合わない

ファン(2010:87)では、「接触規範」について、参加者どちらの規範でもなく、接触場面ならではの新たな規範と定義している¹¹。CSが「接触規範」の要因をインプットし、命題の逸脱を留意する事例が観察できた。例えば、ホームビジットに持って行く土産について、JSはホストファミリーに子供がいるので、高価なものを用意する必要がなく、折り紙のような子供と一緒に遊べる道具を持っていけばいいと発話した。これに対して、CSは「自分の印象では、日本人は他人の家を訪れる時に、箱入りのお菓子を持っていくことが礼儀なので、やはりそうしたほうが妥当だ」、「箱入りのお菓子は高いが、折り紙だけではやはり失礼になるかもしれない」と考えた。これらの感想から、CSがJSの先行発話から不一致を感じたほか、その先行発話が「日本では他人の家を訪れる時は箱入りのお菓子を持っていくことが礼儀

¹⁰ Maynard(1985:3)が指摘した、「あらゆる進行中の言語的、非言語的行動のタイプ(any verbal or non-verbal proceeding act type)」が対立しているならば、不一致を引き起こす引き金になりうる」ことを参考にし、発話内容ではないが、JSが書いたプログラムの内容を不一致の対象と捉えて分析の対象にした。

¹¹ 「接触規範」の定義についてまた加藤(2010:34-35)を参照すること。

である」といった規範から違反であると考え、逸脱と留意した確認できる。この事例で C S が参照した規範は、中国または日本の規範のどちらにも属せず、CS の接触経験によって新たに形成された規範に近いと考え、接触規範と定めた。

このように、接触規範が参照され、CS は JS の先行発話がこれらの規範からの違反であると認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(6) 実情に合わない

本章の例 1 では、中国式の「白玉」の味をめぐって、JS はスープが甘いわりに「白玉」の中身は塩辛く、不思議な味であると発話した。先行発話に対する感想として、CS は FUI で「JS の認識が正しくなく、スープの味も塩辛い味だ」、「よく知っている情報なので情報の伝達に集中していた」と報告した。これらの報告内容から、CS は不一致を感じたほか、JS の先行発話が事実情報に合わないと考え、逸脱と留意したと確認できる。

このように、事実情報の真偽判断をめぐり不一致が生じ、CS は話題となる事実情報に対する JS の認識が正しくないと認知する場合、先行発話を命題の逸脱と留意することがある。

(7) 社会的常識に合わない

ファン(2010:88)は、接触場面で用いる規範の中には、「普遍規範」(universal norms)も存在すると指摘し、特定の言語に依存するものではなく、自然言語なら普遍的に存在する規範¹²であると規定している。加藤(2010:34)においても、よりユニバーサルと見られる「共有規範」¹³が接触場面で参照されることがあると述べられている。ここでの「普遍規範」や「共有規範」は異なる言語の母語話者が言語的、社会文化的、社会言語的規範などの側面において共有している規範であると考えられる。本研究では、JS の先行発話における逸脱の留意に関与した参加者の双方が共有する規範やルールについて、社会的常識と称することにした。なお、これらの「常識」が双方の参加者が共有し、社会的に普遍的に受け入れられているルールであるということは、CS の視点(FUI での報告内容に基づく)からとらえた結果であり、JS が必ず同じような認識と持っているとは限らない。

例えば、バイト仲間が仕事をやめることをめぐって、JS はその人が恋人と別れば仕事をやめないで済むと言い出したが、CS は「JS がただバイトを辞めてほしくないから、彼氏と別れたほうがいいなどのことを言っている。このような考えはよくないと思っている。

“いやです”と言い出したのは相手の発話内容が“いやだ”という意味だ」、「付き合っている人の破局を期待することはおかしい。このような話はすべきではない」を考えた。この事例では、CS が不一致を感じたほか、JS の先行発話が社会的常識 (e.g. 自分の都合で他人の破局を望むべきではない) からの違反であると考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

このように、共有していると思われる社会的常識が参照され、CS は JS の先行発話がこ

¹² ファン(2010:88)では、日本語のあいづちを含む話順取りのメカニズム、依頼などの言語行動におけるポライトネスのシステムなどを「普遍規範」の事例として挙げた。

¹³ 加藤(2010:34)では、話題に関わる母語話者と非母語話者双方に共通する共有規範を例示し、Grice(1975)の「協調原理」や Leech(1983)の「丁寧さの原理」も共有規範の一つと考えられると述べている。

これらの常識からの違反であると認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(8) CS の個人規範に合わない

加藤(2010:35)は、「個人規範」について、個人的な好みや性格などが反映して形成されるような規範であるとしている。本研究においても、個人規範と考えられる要因が命題の逸脱の留意に関与した事例が観察できた。例えば、ある地方の気候の特徴をめぐって、JS は寒いところであると発話したが、CS は「寒いところというよりは暑いところだと思う」、「自分は夏がどれほど暑いかを基準に現地の気候の特徴を捉えている。ここは夏がとても蒸し暑いので、暑いところだと思っている」と考えた。これらの報告内容によって、CS は不一致を感じたほか、JS の先行発話が自分の個人規範(e.g. 夏の暑さを基準にしてある地方の気候の特徴を捉える)からの違反であると考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

このように、CS の個人レベルの個別な規範が参照され、CS は JS の先行発話がこれらの規範からの違反であると認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(9) インターアクション内の期待

1) インターアクションの参加目的の達成

Locher(2004:325-327)は、参加しているインターアクションの目的の達成が、不一致を提示するか否か、どのように提示するかに影響していると指摘した。本研究においても、CS がインターアクションの目的の達成を考慮し、JS の先行発話を命題の逸脱と留意した事例が観察できた。例えば、プロジェクト・チームの会議では、チームが目指す目標について、JS は合格すればいいから高く設定する必要がないと発話した。この先行発話に対して、CS は「このような目標の設定は低すぎる」、「適切な目標を設定することは会議の議題だが、JS のいう通りにしたら、皆はやる気を失ってしまう」と考えた。この事例では、CS は不一致を感じたほか、JS の先行発話がインターアクションの参加目的(e.g. チームの目標を適切に設定する)の達成を妨げると考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

2) 会話の話題

Jones(1990:41, Szatrowski 2004:2-3 より引用)が指摘したように、「不一致」(not in accord)という事象には、参加者間の意見や目標が相反していることのみならず、展開されている会話の話題や目的に対する参加者間の考えが異なることも含まれている。本研究ではこの指摘を参考にし、CS が会話の話題や進行に違和感を覚えた事例を、JS の先行発話において逸脱が留意された事例に入れて分析の対象とした。

例 4 バーゲンの話題に興味がない

番号	発話者	発話
1	JS14	パルコのバーゲン行ったんだけど、らしいんだけどー、(うん)うん、 <u>うちもでもやっぱり、地元の百貨店、(うん)うーんと、やつがたしか木曜</u> <u>からなのかな、(うん)木曜から、来週の火曜とかまであるからー、うん、</u> <u>ちょうど週末かかっているからね行こうかなって(笑)</u>

番号	発話者	発話
2	CS12	うーん

例4では、JS14は週末にデパートのバーゲンに行くという話題(1番)を持ち出したが、この先行発話に対する感想として、CS12はFUIで「相手がずっとバーゲンの話しをしてきたが、バーゲンでの買い物という話に興味がない。その話題を続けたくはない」と報告した。これによって、CS12は不一致(バーゲンの話題を続けたくない)を感じたほか、JS14の先行発話で提示された話題に違和感を覚え、先行発話を逸脱と留意したと確認できる。

3) 会話の進行

例5 実験内容の説明は要らない

番号	発話者	発話
1	CS12	えー、なに、どんな実験だっけ
2	JS14	あのう、ちょっと待ってください(笑) (1)ええとね、としのきって分かるかな、あのう、ベンゼンに一、(.)うんと一【【
3	CS12	】】うん、TSでしょう↑

例5では、CS12はJS14が午後に行う実験の名前を尋ねた(1番)後、JS14は実験内容の説明をしはじめた。番号3の発話ではCS12がJS14の説明に割り込んで実験の名前を確認した。JS14の説明に対する感想として、CS12はFUIで「相手はまだ説明し続けているが、すでに実験の名前が分かったので、これ以上の説明が要らないと思った。それで、実験の名前を提示した」と報告した。これらの報告内容によって、CS12は不一致(説明は要らない)を感じたほか、JS14の先行発話が会話の展開への期待(実験の名前の提示)からはずれたと考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

例4と例5では、JSの先行発話で述べられた具体的な命題内容に異なる見解を抱えているというより、CSは先行発話において提示された話題、または会話の展開の流れに不一致を感じ、命題の逸脱を留意した。本研究では、例4のように、JSが持ち出した話題に違和感を覚え、CSが先行発話を命題の逸脱と留意したことに関わる要因を「インターアクション内の期待(話題)」と定めた。例5のように、CSがJSの後続発話が会話の展開への期待からはずれたと認知し、命題の逸脱を留意したことに関わる要因を「インターアクション内の期待(会話の進行)」に分類した。

4) 誤解

例6 能力試験はまだうけていない

番号	発話者	発話
1	JS17	日本語↑のうりょくけんてい↑
2	CS15	うん<きのう>

番号	発話者	発話
3	JS17	<なんか>、なんだっけ↑
4	CS15	きのうあいやいやいや、おととい、(お) ありまーした
5	JS17	おい、おととい↑
6	CS15	はい
7	JS17	<u>おい、おつかれさまでした、なんか4種類</u> 【
8	CS15	】 え、わたし、まだですけど ¹⁴

例6では、CS15がおとといは日本語能力試験の試験日だった(番号4)と発話したが、JS17がCS15も当日の試験に参加したとの意味を受け取り、「お疲れ様でした」(番号7)と発話した¹⁵。この先行発話に対する感想として、CS15はFUIで「なんか私が試験に参加したと思われたらしくて、慌てて訂正した」、「誤解されたので説明が必要だった」と報告した。これらの報告内容によって、CS15は不一致を感じたほか、自分の発話内容を誤解したJSの先行発話が会話の進行の妨げとなると考え、逸脱と留意したと確認できる。大津(2001)では、このような、話し手が発話によって伝えようとした意味を聞き手が誤解した場合において生じた不一致が「意図と解釈の不一致」に分類されている。本研究はこの指摘を参考にし、自分の発話内容がJSに間違って読み取られたため、CSがJSの先行発話を命題の逸脱と留意した事例に関わる要因について、「インターアクション内の期待(誤解)」に分類した。

(10) CSのポジティブ・フェイスが侵害された

本章の例2では、入金ミスの責任の所在について、JSはCSの責任であると言い出した。この先行発話に対して、CSは「新人の私はいつも慎重にお金を扱うので自分の責任とは考えられない」、「その時に自分の責任ではないと明言すべきだった」と考えた。これによって、CSは不一致を感じたほか、JSの先行発話が自分のポジティブ・フェイス(e.g. 金銭扱いが慎重な人)を侵害すると考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

このように、CSはJSの先行発話が自分のポジティブ・フェイスに侵害をもたらすと認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(11) CSのインタレストが侵害された

ネウストプニー(2000:38)は、「インタレスト」(interest)について、日本語の「関心」や「利害」とほぼ同じ内容を示し、言語管理理論に基づく規範的研究の基礎的な概念の一つであると指摘した。不一致の表示における参加者間の異なるインタレストからの関与について、Locher(2004:328)は、生じた不一致に伴うインタレストの衝突(clash)や対立(conflict)が深刻である場合、聞き手(不一致を感じる側)がフェイス保持のために不一致を明示すること

¹⁴ CS15は「けど」の使用について、FUIで「習慣的に付け加えて使った。記憶に残っていない」と報告した。

¹⁵ JS17はFUIで「相手がその試験に参加したと思ってそのように言った」と報告した。

があると述べている。本研究では、例えば、キャンペーン中の作業時間の調整をめぐって、JSは調整する必要がないと発話したが、CSは「作業時間を追加する必要がある」、「追加してもらわないと自分を含めた全員が作業に追いつけなくなり、非常に疲れる」と考えた。これらの報告内容によって、CSは不一致を感じたほか、JSの先行発話が自分のインタレストを侵害する(e.g. 労力がかかる)と考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

このように、CSはJSの先行発話が自分のインタレストを侵害し、必要ではないコスト(スペンサー=オーディー2004:42)がかかると認知する場合、命題の逸脱と留意することがある。

(12) JSのインタレストが侵害された

事例の数は少ないが、CSはJSの先行発話がJS自身のインタレストを侵害すると認知し、命題の逸脱を留意した事例がある。例えば、商品代金を多めに支払ったJSに対して、CSは「JSが多めに支払ったので、それを教えてあげなければならなかった」と考えた。これによって、CSは多めに支払ったことに不一致を感じたほか、JSのインタレストが侵害されると考え、先行発話(代金を多めに支払った行動を含む)において命題の逸脱を留意したと確認できる。

以上では、CSがJSの先行発話において命題の逸脱を留意した事例に関与した社会的、場面的要因の構成を説明した。CSの不一致応答に関する管理プロセス、特に逸脱の留意、逸脱の調整の段階におけるこれらの要因の具体的な関与のしかたについて、不一致応答の事例を詳しく扱う第4、5章であらためて事例を挙げて考察する。

3.3 不一致の表示方法において留意された逸脱—自己表示の逸脱

3.2では、不一致応答の際に、CSが不一致を生じさせた(不一致の対象である)JSの先行発話において命題の逸脱を留意する可能性があると述べた。「逸脱の留意」の概念を援用しCSの不一致応答を考えると、CSが不適切な不一致の表示方法(e.g. JSのフェイスを侵害するおそれのある表示方法)において逸脱を留意することも起こりうる。不一致の表示が先行発話に対する「第二次的評価」である(Walkinshaw 2009:29)との観点からみると、この種類の逸脱は、不適切な不一致の表示方法によって作り出されたイメージが、CSが保持しようとする自己イメージ(e.g. 他人に好まれ、または承認されている人 a person to be liked or approved of, Sifanou 2012:1559-1560)¹⁶に合わないとは認知され、留意された逸脱であり、または、対人関係の構築・維持を考慮し、不適切な不一致の表示方法によって相手を評価することの難しさを感じた上で、留意した逸脱である。接触場面で生じうる逸脱のタイプ(Neustupný 1985a)を参考にし、このような不適切な不一致の表示方法においてCSが留意した逸脱を「自己表示の逸脱」と名付けた。

後続の管理プロセスにおいて、CSは不適切な不一致の表示方法による逸脱を否定的に評

¹⁶ Goffman(1967:10)においても、社会的な相互作用の中で人間は「思いやりのある人間」という自己イメージを保持しようとする意欲があると指摘された。

価する場合、それを解消、軽減できるように調整計画を立て、不一致応答を調整していく。調整の結果として、不一致の明確な表示よりは、回避、婉曲的な不一致の表示が多く行われることになる予想される。キム(2008)では、韓国人超上級日本語話者が不一致応答を行う際に、相手規範をより多く参照し、強い否定的応答を避けるように、事前調整を積極的に行う傾向があると指摘した。この指摘を参考にとすると、不適切な不一致の表示方法による逸脱の留意も1種の「事前留意」であると考ええる。

これからは事例を挙げて、CSが不一致の表示方法において留意した逸脱を同定する手順、逸脱の留意に関与したと考えられる社会的、場面的要因を説明する。

3.3.1 不一致の表示方法において留意された自己表示の逸脱の同定

会話資料の同定作業にあたって、まず2.4.2.2で示したように、CSがJSの先行発話から不一致を感じた事例を同定し、JSの先行発話 - CSの不一致応答のペアを抜き出す。次に、不一致応答の内容、言語表現上の特徴、FUIでの報告内容を照合した上で、不一致の表示方法が留意されたか否かを確認していく。具体的な手順は次の通りである。

- (1) Levinson(1983:334)、Pomerantz(1984:65-77)、Brown&Levinson(1987:113-117)、Jones(1990:91)、王(2005)などで挙げられた非優先的応答の特徴、話し手が反対意見を述べる際の緩和処置を参考にして、不一致の表示が伴うCSの不一致応答の言語表現からなんらかの特徴(緩和的表現の使用、反対意見の後回しなど)がみられる場合、不一致の表示方法が留意されたと仮定し、該当する先行発話 - 不一致応答のペアを抽出する。
- (2) 次に、抽出された不一致応答に関するFUIでの報告内容に注目し、「直接的に否定することはよくないので、言い方を変えた」、「JSの考えに賛同できないが、自分の考えを遠回しに提示できるように工夫した」などのような、不一致の表示方法の調整に関する内省報告が語られた場合、CSが不一致の表示方法において逸脱を留意したと判定する。
- (3) 特に、CSが不一致を提示せずに行った不一致応答は不一致の表示方法が調整された結果であると考えられるが、談話上に不一致の表示が現れてこないため発話内容による分析だけでは判定しがたい。このような場合、主にFUIでの報告内容を参照して、CSが不一致の表示方法において逸脱を留意したか否かを確認し、該当する先行発話 - 不一致応答のペアを抽出していく。

一つ以上のターンにわたっての先行発話 - 不一致応答のペアに対して、不一致の表示方法において逸脱が留意されたか否かを確認する際は、3.2.1で提示した手順通りに行う。インターアクション・インタビュー資料においての同定作業も、3.2.1で述べたように、インターアクションで生じた不一致事象に関するCSの報告内容に基づき、不一致の表示方法

において逸脱が留意された先行発話 - 不一致応答のペアを同定していく。

次は、事例を挙げて、不一致の表示方法が留意された不一致応答の同定作業を説明する。

例 7 北海道以外のところでも買えるはず(不一致の表示方法において逸脱が留意された)

番号	発話者	発話
1	CS17	「地名」、「地名」、「地名」のところ、えー、「地名」の近くには、(うん)売っていないですか↑
2	JS19	<u>たぶん、北海道限定ですかね</u>
3	CS17	えー
4	JS19	うんたまにー、デパートにー、(うん)北海道物産店みたいなくのが>(＜あー>)やっているとー、売ってたりするかもしれない

例7では、CS17は大好物の北海道産のお菓子が近所の店でも買えるか(1番)を聞いた後、JS19の「北海道でしか買えない」(番号2)の先行発話に対して「えー」(番号3)と応答した。先行発話に対する感想として、CS17はFUIで「中国でも、北方地域の名物は南方地域のスーパーとかで普通に買えるから、このお菓子は北海道以外のところでも買えるはずだと思う」と報告したため、まず、お菓子の販売場所をめぐって不一致が生じたと判定できる。そして、CS17はJS19の先行発話が中国の社会文化的規範(e.g. 遠い地方の名物でもスーパーなどで買えるはず)からの違反であると考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

応答で不一致を潜在化させたことについて、CS17はFUIで「大きなスーパーへ行けば買えると思っているが、その場での否定的応答は相手の発話を信用しないというマイナスなイメージを与えてしまうので、提示せずに応答した」、「“そうですか”より“えー”のほうが、相手の発話に興味をもって聞いていることをよく表せ、自分の感情をよりよく伝えられるから、“えー”を使うことにした」と報告した。これによって、JSの先行発話による命題の逸脱のほかに、CS17は不適切な不一致の表示方法(e.g. 明確な否定)が相手のフェイスを侵害する恐れがあると予想し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

次に、第2章の例1を再掲し、インターアクション・インタビュー資料での同定手順を説明する。

例 8¹⁷ ワイシャツの色は茶色だった(不一致の表示方法において逸脱が留意された)

番号	発話者	発話
1	CS22	そのシャツが茶色にみえたからさ、(うん)私は茶色と書いた、そして彼は <u>灰色だと言った</u> 、実は、茶色だったのよ
2	R	うん、それでどう答えた↑

¹⁷ 事例の通し番号は章ごとに設定するため、ここでは例8と表示している。

番号	発話者	発話
3	CS22	お客さんだからさ、私は何もいえない、私は“すみませんでした。電球の光で茶色にみえました。今度は気をつけますと言った” ((後略))

この事例では、まず、クリーニングに預けるシャツの色は茶色ではなく灰色だという先行発話において、CS22 が不一致(番号 1・2 行目:「実は、茶色だったのよ」)を感じたほか、その先行発話が実情に合わないとは認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

不一致の表示方法に関する報告内容に注目すると、CS22 が応答する際に不一致を提示せず見間違えたとは謝ったことがわかった。そして、不一致を潜在化させた背景について、「JS が客だから何も言えない」と応答時の感想が語られた。これらの報告内容によって、CS22 は、不一致の表示自体が社会的役割(客-店員)の差異による支配力の不均衡な配分の維持を脅かす恐れがあると予想し、不適切だと判断した上で自己表示の逸脱と留意したと確認できる。

例 7、例 8 から示したように、命題の逸脱のほかに、CS は不一致の表示方法が JS のポジティブ・フェイスや支配力の不均衡な配分などを侵害する恐れがあると予想する場合、その表示方法を不適切だと判断し、逸脱と留意することがある。

3.3.2 自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因

先行研究で挙げられた不一致の表示に関与する状況的変数、場面的要因の内容を参考にし、CS が自己表示の逸脱を留意した不一致応答の事例に関与した社会的、場面的要因について、下記の表 2 で集計し整理した。

表 2：自己表示の逸脱の留意に関与する社会的、場面的要因

番号	インプットされた社会的、場面的要因
1	上下関係(職位、社会的役割、勤続年数、年齢などの差異による不均衡な支配力の配分)
2	日本の社会文化的規範
3	インターアクション内の期待(目的、言語/社会文化ゲスト)
4	JS のポジティブ・フェイスが侵害される
5	JS のネガティブ・フェイスが侵害される
6	親疎関係(親しくない)
7	不一致の対象となる話題に関する情報の保有度(低い)
8	場面(公的)
9	JS のムード
10	コミュニケーションの媒体(電話)
11	接触場面の接触性

これよりは、表2で挙げた自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の内容を説明する。

(1) 上下関係

例8から示したように、CSは社会的役割(客-店員)の側面におけるJSとの差異を認知し、この差異によって確立できた上下関係、支配力の不均衡な配分を配慮して、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意することがある。不一致の表示に関わる要因として、参加者間の「距離」と「権力」(Brown&Levinson 1987)、職位(professional rank, Locher 2004:326)、ランクの違いと力関係(rank difference and power relation, Pan 2000:80)、社会的／相互作用的作用関係(スポンサー＝オーディエンス2004)などが挙げられ、特に社会的／相互作用的作用関係はその関係による支配力および距離を部分的に決定するばかりではなく、その役割メンバーの権利と義務をも規定する側面がある(スポンサー＝オーディエンス2004:44)。

このように、CSは職位、社会的役割、年齢などの差異によって確立できた上下関係の要因をインプットした上で、不一致が生じた場面での支配力(権力)の不均衡な配分を考慮し、不適切な不一致の表示方法が上下関係の維持を脅かす恐れがあると予想する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。

(2) 日本の社会文化的規範

加藤(2010:34)は、日本語接触場面で選択されうる規範の中に日本語母語規範があり、この規範に言語的規範だけではなく、社会言語的規範や社会文化的規範も含まれていると述べた。日本の社会文化的規範の要因がCSの不一致応答における自己表示の逸脱の留意に関与した事例も観察できた。例えば、横浜の規模をめぐり、CSは横浜が日本で一番大きな港の都市であると発話したが、JSに一番大きな港の都市はおそらく横浜ではなく神戸かもしれないと言われ、不一致が生じた。先行発話に対して、CSが「自分がネットから調べた情報なので自信がある」、「相手はただイメージを言っているだけだ」と考え、先行発話を命題の逸脱と留意した。なお、応答時に、「調べたのは中国のサイトで、日本で用いられる規模の計算方法が中国の方法と異なるかもしれない。日本のサイトで書いてある内容が中国のサイトの内容と異なるかもしれない。だから中国のサイトではこう書いてあるが、正しいかどうかは分からないと言いつけ」と報告したように、CSは日本の社会文化的規範(e.g. 中国と異なる方法で都市の規模を計算するので結果が同じではないかもしれない)をインプットし、不一致の明確な表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意した。

このように、CSは日本の社会文化的規範をインプットした上で、不一致の表示内容がこれらの規範からの違反であると判断する場合、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意することがある。

(3) インターアクション内の期待(目的、日本語の言語／社会文化ゲストなど)

1) インターアクション内の期待(目的)

Locher(2004)は、インターアクションの目的や不一致の表示の目的が不一致の表示方法の選択、使用に関わる要因の一つであると指摘した。このように、CSが不適切な不一致の表

示方法がインターアクションの参加目的の達成を妨げる恐れがあると予想し、自己表示の逸脱を留意した事例を観察できた。例えば、会議記録の内容をめぐって、JS は発言間の関連性を示す内容の追加が必要であると発話したが、CS は関連性のない発言なので追加する必要がないと不一致を感じた。不一致応答を行う際に、「この記録を早めに出さなければならぬので、追加の必要性についてこれ以上時間をかけて議論することができないと考え、自分の考えを言わないことにした」と報告したように、CS は会議記録の内容の確認、記録の提出といったインターアクションの目的の達成を配慮し、不一致の表示自体が不適切だと判断し、自己表示の逸脱と留意した。

2) インターアクション内の期待(日本語の言語／社会文化ゲスト)

ファン(1999)は、接触場面の非母語話者が使用言語の言語ゲストとして、自己参加¹⁸、他者参加の調整計画をたて、参加回避と参加達成、または支援懇請と参加譲渡の調整ストラテジーを用いる傾向があると指摘した。また、村岡(2002)は異文化インターアクションにおける在日外国人の調整行動を取りあげ、そこで接触規範に向かう調整が最も多く行われ、用いられるストラテジーには「ホストに同調する」¹⁹の種類があると述べている。CS の不一致応答の事例においても、不一致の対象となった話題に関する日本語の言語的知識、日本の社会文化的知識の不足によって、CS が日本語の言語ゲストまたは日本の社会文化ゲストのカテゴリ化を意識し、不一致の表示方法において逸脱を留意した事例を観察できた。

例えば、CS が作った資料の日本語の表記について、JS は間違っただと発話したが、CS は日本人が書いた資料にも同じ言い方が使われ、間違っただではないと不一致を感じた。不一致応答の際に、CS は「相手は日本人だから、言われた通りに直せばいい」、「日本語の使い方の正誤を判断できるのは日本人だけで、自分にはそういう資格がない」と考え、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱と留意した。この事例では、日本語の言語ゲスト(e.g. 自分は日本語の使い方の正誤を判断する資格がない)という要因が、自己表示の逸脱の留意に関与したと考える。

また、例3では、CS14 がホテルの形はメロンに似ていないと不一致を感じた後、「このホテルの形から、日本人は果物の形を連想しやすいかもしれない」と考え、「このへんのことはよく分からない。メロンの形に見えるというのが日本では通常を考えかもしれないと思ったので、自分の考えを言わないことにして、きっと高級なホテルだという話に切り替えた」と応答した。これらの報告内容から、CS14 は話題に関する日本の社会文化的規範の知識(e.g. 果物の形に関する連想)の不足を考慮し、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱と留意したと確認できる。

CS はインターアクションの参加目的の達成、自分が日本語の言語ゲストまたは日本の社会文化ゲストであるなどの要因をインプットし、不適切な不一致の表示方法が参加目的の

¹⁸ 「自己参加」の調整計画は言語ゲストが伝達の逸脱を留意する場面に使われ、「他者参加」の調整計画は言語ゲストが理解の逸脱を留意する場面に使われている(ファン 1999:40)。

¹⁹ 具体的には、「相手言語規範に従う／消極に従う」、「要求を受け入れる」のストラテジーが含まれている(村岡 2002:119)。

達成や会話進行の妨げとなる(言語／社会文化ゲストにあるまじき行為である)と認知する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。なお、同じく日本の社会文化的規範に関する要因であるが、CS は母語規範との違いに気づき、両方の規範の妥当性を認めた上で自己表示の逸脱を留意し、調整する場合の要因を「日本の社会文化的規範」と定める。そして、CS は話題に関する日本の社会文化的規範の知識が不足していると認め、自己表示の逸脱を留意した上で、母語規範の「抑制」(村岡 2002)に向かって調整する場合の要因を「社会文化ゲスト」とする。換言すれば、前者の要因は「相手規範に従う」調整(村岡 2002:119)にも関わる要因で、後者は「相手規範に消極的に従う」調整(ibid)にも関わる要因である。

(4) JS のポジティブ・フェイスが侵害される

例 7 から示したように、CS は不適切な不一致の表示方法が JS のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。

(5) JS のネガティブ・フェイスが侵害される

(4)の要因と共通して、CS は不適切な不一致の表示方法が JS のネガティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。

(6) 親疎関係(親しくない)

参加者間の「distance」(Brown&Levinson 1987)、接触の頻度・知り合ってから長さ・親密さ(スペンサー＝オーディー 2004:39-41)、接触歴(relational histories, Sifanou 2012)、関係(relationship, Angouri&Locher 2012)など、呼び方が異なるものの、参加者間の親疎関係が不一致の表示に関わる要因の一つであると先行研究から指摘されている。例えば、第 2 章の例 2 では、患者のプライバシーを保護するための病院側のやりかたをめぐって、不一致が生じた。CS21 は応答時に JS との年齢の差異による「上下関係」のほかに、「知り合いになってから 2、3 回会っただけで、まだそこまで親しくなっていないので、自分の考えをもう 1 回伝えることを控えた」とも考慮した。この報告内容から、JS との親疎関係の要因もインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与したと確認できる。

このように、CS は JS との親疎関係(親しくない)を考慮し、不適切な不一致の表示方法が対人関係の維持を脅かす恐れがあると予想する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。

(7) 不一致の対象となる話題に関する情報の保有度(低い)

Grice(1975:47)では、協調の原理と下位関係に属する四つの会話の行動原則(Maxim)が述べられた。その中の質の原則(maxim of quality²⁰)は不一致応答が行われる接触場面においても、一つの普遍規範(ファン 2010)または共有規範(加藤 2010)として参照されと考えられる。つまり、不一致応答においても、話し手が不一致の対象に関する情報を十分に持たない限り、不一致の表示自体、または明確な不一致の表示を控えるという原則が機能している。これについて、不一致の表示における権力の行使(exercise)の視点から、Locher(20

²⁰ 「質の原則」は、真実であることを発話することを指し、具体的には、1)虚偽であると思っていることは言わないこと。2)十分にな証拠がないことは言わないこと。の 2 点である(山岡・牧原・小野 2010:45)。

04:325)は不一致の対象となる話題の参与度、熟知度、そして専門的知識の保有度の度合いが、不一致が生じたインターアクション、不一致の表示などに関与していると指摘した。この指摘からも、不一致応答において、話題に関する情報の保有度が関わる要因の一つであると示唆される。例えば、下記の例 9 では、来週はまだ 6 月であるか否かをめぐって不一致が生じたが、CS2 は「まだ 6 月だと思っているが、相手にそうではないと言われて少し自信がなくなった。確実に知っているわけではないので、確認の形で自分の考えを提示するようにした」と FUI で報告した。これによって、CS2 は話題(来週はまだ 6 月であるか)に関する情報の保有度が低いと考慮し、明確な反対意見の提示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

例 9 来週はまだ 6 月である

番号	発話者	発話
1	CS2	うん、＜来週の火曜日は↑＞
2	JS2	＜これおいしいです＞、えっ、 <u>来週一、まだ 6 月だったっけ↑火曜日</u>
3	CS2	<u>6 月じゃな一いですか↑6 月でしょう↑</u>
4	JS2	ちょっと待ってね {手帳を出して確認する} ああ、7 月、(ああ)7 月、7 月 1 日なのよ

このように、CS は不一致の対象となる話題に関しての情報をじゅうぶん保有せず、不適切な不一致の表示方法が「質の原則」からの違反(e.g. 十分にな情報を持たないままで反対の意見を述べること)であると認知する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。

(8) 場面(公的)

スペンサー＝オーディー(2004:41-42)は、参加者(話し手／聞き手あるいは聴衆として参加する人)の数²¹がラポール・ストラテジーの選択、使用に関与する要因の一つであると指摘し、Sifanou(2012:1557)において、インターアクションが属する範疇(私的また公的 private or public domain)、参加人数(一対一または多人数 dyadic or multiparty)などの要因が不一致の表示に影響し、第三者の存在は不一致の表示の構築、解釈と結果に影響していると述べられている。本研究からも、CS は場面の参加者の数、場面の改まり度の度合いを考慮し、自己表示の逸脱を留意した事例を観察できた。例えば、部門会議で知らせられた社内規程について、CS はこの規程が何の役にも立たないと不一致を感じたが、「部門会議の場は上意下達場で、部長や課長も参加しているので、抱えている不一致を示す場ではない。自分の考えを提示しなかった」と報告した。これによって、CS は部門会議というインターアクションの場面的特徴をインプットし、その場での不一致の表示自体を不適切だと判断し、逸脱と留意したと確認できる。本研究では、第三者が同席している職場でのインターアク

²¹ 例えば、多くの文化において、一対一で内密に批判されることよりも、他の人たちの面前で批判されるほうが、フェイスに対する脅威となる(スペンサー＝オーディー2004:42)。

ションの場면을「場面(公的)」と扱うことにした。

このように、CSは「公的」の場というインターアクションの場面的特徴をインプットし、不適切な不一致の表示方法がこの種類の場面に関する慣習的規範からの違反であると認知する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。

(9) JSのモード

この要因が関与した事例では、CSが不一致応答を行う際に、「JSはその日に熱があり、前の日に足も怪我した」、「朝からはもう“今日は機嫌が悪いからみんな気をつけろ”と言っているので、JSと言い争うことができない」と考えていた。この報告内容によって、CSはJSのモード(e.g. 機嫌悪い)という要因をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断し、逸脱と留意したと確認できる。

このように、CSは不適切な不一致の表示方法がJSのモードを損なう恐れがあると予想する場合、自己表示の逸脱と留意することがある。

(10) コミュニケーションの媒体(電話)

Hymes(1972)のSPEAKINGモデルは、発話事象を構成する要素の一つとして「手段道具」(instrumentalities)が挙げられ、ネウストプニー(1995a:73)の社会言語的規範²²においても、コミュニケーションで用いる媒体(コミュニケーション・チャンネル)が関与する要因の一つであると指摘されている。これらの指摘によって、不一致が生じ場面で用いられる媒体の特徴が不一致応答に影響する側面があると考えられる。収集した事例のほとんどは対面の形で行われたインターアクション、会話の事例であるが、CSが「JSの話が正しくないかとも思ったが、電話で話しているので、詳しく聞くのはよくないと思って少し確認しただけだった」と報告した事例がある。この事例では、CSが使用する媒体(電話)による制限を考慮し、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意したと考える。

このように、CSはコミュニケーションで使用する媒体が不一致の表示方法にかかる制限を考慮し、自己表示の逸脱を留意することがある。

(11) 接触場面の接触性

ファン(2010:82)は場面の接触性(contactedness)について、当事者の外来性の受け止め方にかかると説明し、接触性を左右する外来性の要素が「談話による外来性」、「慣習による外来性」²³に分けられると述べている。リコール・インタビューでは、CSは「中国にいた時は思うままに発話する習慣だったが、日本に来てから異なる意見を示さない、またはできるだけ遠回しに示すようにする習慣が身についた」、「日本にいるなら、相手と対等な立場にいるにしても、できるだけマイナスな意見を言わない。または、せいぜい質問や提案の

²² ネウストプニー(1995a:73)では、次の九つの社会言語的規範を挙げている：点火のルール、セッティング・ルール、参加者のルール、バラエティ・ルール、内容のルール、形のルール、媒体のルール、操作のルール、運用のルール。

²³ ファン(2010:82)は、「談話による外来性」が参加する談話の制約によって変動し、「慣習による外来性」が参加者本人の文化背景、生活環境、あるいは性格、理念から形成されてきたものとしている。

形で提示するまでだ」と報告した事例がある。一部の CS に限られているが²⁴、日中接触場面で不一致が生じる場合、CS は日本語使用場面の慣習的な規範、自分の接触経験から形成された外来性を受け取り、前景化する場面の「接触性」をインプットし、不一致の表示方法において自己表示の逸脱(e.g. 明確な不一致の表示が不適切である)を留意することがある。これは、日中接触場面での不一致応答に向かう習慣化された言語管理²⁵のパターンの一つであると考えられる。

命題の逸脱、自己表示の逸脱の留意に関与した諸要因のほかに、逸脱の留意に関係しないが、CS が不一致の表示方法を選択する際にインプットしたと報告された要因がある。これらの要因を「逸脱の留意と直接的に関係しない社会的、場面的要因」として表 3 で集計し整理した。

表 3：逸脱の留意と直接的に関係しない社会的、場面的要因

番号	インプットされた社会的、場面的要因
1	話題に関する情報の保有度(高い)
2	インターアクション内の期待(目的)
3	親疎関係(親しい)
4	場面(私的)
5	話題(冗談)
6	職場の雰囲気 ²⁶

表 3 で挙げられた要因は不一致応答の際にインプットされたが、逸脱の留意と関係していない側面において表 1、表 2 での要因と異なっている。なお、これらの要因は不一致の表示方法の選択(主に不一致の明確な提示)に間接的に関与したと考えられる要因である。例えば、「白玉」のスープの味をめぐる不一致が生じた例 1 では、CS が「これが確実に知っている情報なので、正しい情報を相手に伝えて説明することに集中していた」と報告したように、話題に関する情報の高い保有度もインプットされ、不一致応答に関与したと考える。また、上下関係において上位である JS に対して、CS はインターアクションの目的の達成、JS との親しい親疎関係、「私的」場面(第三者がいない場面)、不一致の対象が冗談めいた話題であるなどの要因もインプットしたため、不一致の表示方法に関する規範の適用を緩和させ、明確な不一致の表示を行う事例がある。そして、リコール・インタビューでは、職場での不一致応答について、CS は「外資系の会社なので日系会社と違って、上司でも平等に意見交換ができる雰囲気だ」、「一緒にディスカッションする時はボスにも、同僚にも、異なる考えがあったら直接的に提示する。意見の明確な伝達のほうを重視して

²⁴ リコール・インタビューでは、母語場面と日中接触場面での不一致応答一般について、場面の接触性によって、異なるストラテジーを習慣的に使い分ける傾向があると報告した CS は 7 人で、CS19、CS21、CS24～25、CS27、CS30～31 となっている。

²⁵ 接触場面での習慣化された言語管理の特徴について、村岡(2010)を参照すること。

²⁶ 「6」の要因は、CS に対するリコール・インタビューで報告された要因である。

いる」と報告し、「職場の雰囲気」も不一致の応答に関与する要因の一つになりうるとわかった。CS の不一致応答に関する言語管理のプロセスにおいて、表 1～表 3 の諸要因が具体的にどのように関与しているかについて、第 4、5 章で不一致応答の事例の分析を通して、詳しく取りあげて説明する。

3.4 逸脱の留意が生じなかった CS の不一致応答

以上、CS の不一致応答において、命題の逸脱、自己表示の逸脱の 2 種類の逸脱が留意されることによって、言語管理プロセスが活性化される可能性があることを説明した。なお、加藤(2010:42)が指摘するように、接触場面において、問題(逸脱)がなく規範が談話上に適用される場合もあり、逸脱に対する留意が生じない CS の不一致応答も存在すると予想される。この節では、CS が命題の逸脱、自己表示の逸脱を留意しなかった不一致応答の事例を挙げ、この種類の不一致応答の特徴を説明する。

3.4.1 命題の逸脱が留意されなかった不一致応答

留意された命題の逸脱を解消、軽減するために、CS が異なる見解を JS に明確に、効率よく伝達できる表示方法を選択して、不一致応答を調整することは起こりうる。一方、不一致の表示が伴う CS の不一致応答のすべてが、CS が命題の逸脱を留意し、それを解消、軽減するための調整計画を実施した結果であるとは限らない。

CS が不一致を提示した背景には、命題の逸脱の解消のために活性化された管理プロセスがあるほかに、親密さを表して連帯を促進したり、インターアクションへの参加意欲を示したりするという発話意図が存在する可能性もある。この可能性について、Schiffman(1984:331)は、親しい関係にある参加者間の異なる意見の交換を「社交的議論」のカテゴリに分類し、このような場合での不一致の表示は社交性 (socialability)を示す手段でもあると指摘した。この観点と共通して、Tannen(1984)、Tannen&Kakav á(1992)、Kakav á(1993)²⁷、Locher(2004)などにおいても、親密な場面 (e.g. 家族メンバーや友人が集まる場面) での不一致の表示が親密さや社交性を示すサインになりうると述べられている。また、Sifianou(2012:1560)はフェイス増強(face-enhancing)の視点から、直接的な同意、さらに沈黙に比べると、不一致の表示のほうは、話し手がインターアクションに無関心ではなく、高い参加意欲を持っていることをよりよく表せると指摘した。これらの指摘から、CS が命題の逸脱を留意せず、不一致を提示する不一致応答もあると考えられる。

会話の進行中に不一致を生じさせる先行発話が命題の逸脱と留意される可能性について、Sifianou(2012:1558)は、ある話題内容が議論的、または聞き手(不一致を感じる側)によって否定的に評価される対象になる可能性は固定的ではなく、不一致が生じた場面での社会的、場面的要因、特に参加者の個人的特質、参加者間の接触歴の要因によって決められ

²⁷ Tannen(1984)、Tannen&Kakav á(1992)、Kakav á(1993)はギリシア社会の日常生活での不一致の表示を研究対象としている。

ることが多いと指摘した。その理由として、参加者の中で、議論好き(more argumentative)で頻繁な議論を通して、人間関係を構築していく特質をもつ人もいれば、そうではない人²⁸もいるし、また、自分の考えを見直して知識の不足(less than full knowledgeability)を認めることに抵抗のない人がいれば、そうではない人もいることが挙げられた(Sifianou 2012:1559)。さらに、自己概念(self-concept)²⁹が攻撃される(attack)³⁰場合は、この概念に含まれる様々な側面を重視する程度が参加者別に異なるかもしれないため、行われる不一致の表示も異なる可能性がある(ibid)。このように、不一致が生じた場面では、話題内容、参加者の個人的特質や参加者間の接触歴をはじめとする状況的要因の関与で、CSがJSの先行発話において命題の逸脱を留意する可能性が場面ごとに変動してくると思われる。つまり、ある話題をめぐってCSが異なる見解を持つと同時に、JSの先行発話を会話の進行の妨げと捉えて、命題の逸脱と留意することはある。一方、CSは不一致を抱えていながらも、JSの先行発話を会話の進行の妨げと捉えるまでに至らず(e.g. 異なる考えとしての妥当性や、社交的議論のリソースとしての妥当性を認めるなど)、先行発話を命題の逸脱と留意しないこともある。なお、どちらの場合においても、不一致の表示(明確なまたは婉曲な)が伴う不一致応答が行われる可能性は高いため、CSが命題の逸脱を留意したか否かを判定するには、応答内容のみならず、先行発話に対する感想、応答時の意識などに関するCSの報告内容と照合し、慎重に判断する必要がある。以下は、判定手順の説明を加え、命題の逸脱が留意されなかった事例を提示する。

例 10 東南アジアは魅力的な旅行先ではない(命題の逸脱が留意されなかった)

番号	発話者	発話
1	CS13	どこに行く↑
2	JS15	<u>なんか東南アジアに行こうかつていうはなし></u>
3	CS13	<おー>、東南アジア、あついよ(笑)
4	JS15	あついよね、でもね、寒い所よりはぜんぜんいいんですよ、わたしも、あついの(ならまだ??)
5	CS13	<u>うん...東南アジア</u> {咳をする}
6	JS15	<でも> 【 【
7	CS13	】】 <u><すごく>行きたいところないね、東南アジア(笑)</u>

²⁸ 例えば、あらゆる対立(opposition)を嫌う人(Sifianou 2012:1558)、特定の種類の FTA に抵抗する(object to)人(Brown&Levinson 1987:78)である。

²⁹ Ting-Toomey(2005:81)では、自己概念に含まれる側面について、「是認」(approval)、「信頼性」(reliability)、「能力」(competence)、「道徳のフェイス」(moral face)の側面が挙げられた(Sifianou 2012:1559 より引用)。

³⁰ 攻撃的コミュニケーションについて、Infante&Rancer(1996)は、「論争的」(argumentativeness)と「口頭的攻撃」(verbal aggressive)の2種類を挙げ、それらは「他人がとる位置」(position taken by others)に対する攻撃と、「他人の自己概念」(the other's self-concept)に対する攻撃である(Sifianou 2012:1559 より引用)。

例 10 では、2 人は夏休みの予定について話している。東南アジアの観光に行く予定である(番号 2)との JS15 の発話に対し、CS13 は「東南アジアは行きたいところがない」(番号 5、7 番³¹)と異なる見解を提示した。また、先行発話に対する感想として、CS13 が FUI で「東南アジアはそれほど有名な観光地もなく、旅行先としての魅力がないと思う」と報告した。以上のことによって、東南アジアの旅行の魅力をめぐって不一致が生じたと判定できる。そして、CS13 がターンを奪ってまでして、不一致を明確に示した(番号 7)ことから、番号 2 の JS の先行発話が不一致を生じさせたほか、CS13 に命題の逸脱とも留意されたと見うけられる。しかし、応答時の感想として、FUI で「自分はそう思っているだけで、相手が行きたいならばそれでいい」、「自分の考えを伝えることのほうを重視し、相手が賛成してくれるかどうかは問題にならない。東南アジアに行かないように相手を説得することは目的ではない」などと報告したため、CS13 は先行発話から不一致(東南アジアは魅力のない旅行先)を感じたが、その先行発話を会話の進行の妨げと捉えていなく(「相手が行きたいならばいい、相手を説得しようと考えていない」)、命題の逸脱と留意しなかったと確認できる。

この事例から示したように、異なる見解が示され、時には強い口調で提示された不一致応答には、CS が JS の先行発話を単に不一致の対象と捉えるのみで、命題の逸脱と留意しておらず、命題の逸脱に関する言語管理を行わずに応答を行った事例も含まれている。これらの事例に対して、自己表示の逸脱のみが留意された事例を管理プロセスのモデルに基づき、そして、両方の逸脱も留意されなかった事例を生成プロセスのモデル(ネウストプニー 1999、高 2006)に基づいて分析する必要がある。特に後者の事例について、生成プロセスの「インプット」の段階を考察することによって、CS が不一致応答を生成的行った際にインプットした社会的、場面的要因を明らかにすることができる。生成的行われた不一致応答の事例の分析結果と、言語管理が行われた事例の分析結果を比較することによって、CS が不一致応答の際にインプットする社会的、場面的要因、インプットする要因に対する CS の解釈、不一致応答の管理、生成のプロセスにおける CS の規範の適用などの側面をより多角に考察できると考える。

3.4.2 自己表示の逸脱が留意されなかった不一致応答

3.4.1 で述べられたように、参加者間の親疎関係によって、不一致の表示が必ずしも相手のフェイスを侵害するとは限らず(Schiffirm 1984, Tannen& Kakav á1992, Locher 2004, Sifianou 2012 ほか)、CS が JS との親密さを表し、連帯を増強するための手段ともなりうる。例えば、中国語母語場面での不一致応答に関する会話のやりとりを分析した王・松村(2010)は、聞き手と親しい関係にある場合、話し手が不一致を明確に示す傾向が強いと述べている。また、参加者の個人的特質や参加者間の接触歴によって、不一致の表示が伴う意見交

³¹ 番号 3 の「東南アジアはあつい」の発話は、JS15 の先行発話によって思いついた内容であり、後の応答内容と関係していないと CS13 が FUI で報告した。

換を積極的に行い、対人関係の構築・維持を図る参加者もいる(Sifianou 2012)。このように、CS が不一致の表示方法を調整せず、不一致応答を行うことも起こりうると考えられる。

参加者間の親疎関係や参加者の個人的特質などの要因のほかに、不一致の内容や不一致が生じた発話事象の場面的コンテキストによって、不一致の明確な表示が認められ、さらに期待される場合もあると先行研究は指摘している。不一致の内容について、Rees-Miller(2000)は、事実を伝える (telling the truth)不一致の表示がすべてのコンテキストにおいてもフェイス侵害のしるしになるとは限らないと述べている。発話事象の場面的コンテキストからの影響について、Angouri&Locher(2012:1551)は、特定の実践(certain practices)において、例えば意思決定(decision making)、課題解決(problem-solving)を目指す会話(talk)のような場面では、不一致の表示が例外というより期待されている発話行為となることが多いと指摘した³²。なお、Angorui(2012)、Marra(2012)はこのような場面的コンテキストにおいて、課題中心の対立意見(task oriented opposing views)の交換は認められるが、個人的攻撃(personal attack)は否定的に評価される対象になるとも指摘している。

上記の先行研究での指摘に基づき、自己表示の逸脱の留意に関与する要因(e.g. JS のポジティブ・フェイス)が場面的コンテキストの特徴によって背景化し、不一致の対象となる話題内容(e.g. 事実情報に関する話題)、インターアクション場面の性格(e.g. 課題解決を目指す会話)、CS の個人的特質(e.g. 議論好きな人)、JS との接触歴(e.g. 親友関係)、場面の改まり度(e.g. 第三者がいない「私的」場面)、などの要因が前景化する場合があると考えられる。このような場合、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、CS は自己表示の逸脱を留意せず不一致応答を行うことがある。Locher(2004:112-113)は、不一致の表示に用いられる調整ストラテジーの選択が、常に対人関係の維持を考慮した上で行われているとは限らないと指摘した。このように、言語表現上の特徴(e.g. 婉曲な不一致の表示)から、CS の不一致応答において自己表示の逸脱が留意されたと見受けられても、これらの応答のすべてが、CS が自己表示の逸脱を留意し、調整を行った結果であるとは限らない。自己表示の逸脱が留意されたか否かを判定するには、不一致応答の内容、用いられる言語表現のみならず、応答時の意識や感想に関する CS の報告内容も参照して判断する必要がある。以下は、判定手順の説明に加え、自己表示の逸脱が留意されなかった事例を提示する。

³² これについて、Angorui(2012)、Marra(2012)はヨーロッパ、ニュージーランドの職場での課題解決の会議を考察し、このような場面コンテキストにおいて行われる不一致の表示が「期待される」(expected)、「無標的」(unmarked)、「日常的」(daily)な行動で、参加者のアイデンティティと対人関係の管理を脅かす恐れがないと指摘した。

例 11 出身大学によって初任給がずいぶん異なる(自己表示の逸脱が留意されなかった)

番号	発話者	発話
1	CS20	((前略)) 彼(JS)が最初中国では出身大学が異なるとその就職先や、(うん)収入などは、ぜんぶ出身大学と直接に関係していることを知らなくてさ、(うん)彼はそれを知らないから、(うんうん)彼は、よく清華大学に行くけど、(うん)清華大学は国内(中国)ではいい大学だということを知っているが、(うん)日本と同じように、みんなの大学を出た後の初任給があまり変わらないと思っている、彼は(実際のことが)分からない、(うん)そこで私は中国では出身大学が異なると、社会人になった後の収入がぜんぜん違うという情報を教えてあげた、(うん)彼はそれを聞いてから、“あ、そういうことだったんだ”って、そして私は、中国の収入の格差は日本よりはずいぶん大きいから、みんないい大学に入りたがっているんだよと言った
2	R	先生に教えた時は、敬語の使用に気をつけていた↑またほかに注意したところはあった↑
3	CS20	ほとんどなかった、彼に“いいえ、違います。出身大学が違ったら収入がずいぶん違います”とそのまま言っただけ
4	R	丁寧語を使用していただけね
5	CS20	うん、丁寧語を使わない時もある、(うん)「苗字」先生は、気軽にしゃべれる数少ない先生の1人だと思う、(うん)彼はとてもやさしいし、普通に友達と話す感じで、“です・ます体”などの使用は、彼と話す時はそれほど気にかけていないよ
6	R	中国の実情は彼が考えていたのと違うということをそのまま直接的に伝えたんだね
7	CS20	そう、私は直接的に“いいえ、違います。出身大学違うと、収入がずいぶん違います”と言った、(うん)先生に直接的に説明した

例 11 では、CS20 は中国の大学生の初任給と出身大学の関係について、先生の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。出身大学が異なっても日本と同じように、初任給があまり変わらない(番号 1・6～7 行目)との JS の先行発話に対して、CS20 が「中国では就職先や収入などは出身大学と直接に関係している」(番号 1・1～2 行目)と考えていたため、不一致が生じたと判定できる。そして、先行発話が実情(出身大学によって初任給がずいぶん異なる)に合わないため、命題の逸脱と CS20 に留意されたと考えられる。

不一致応答の際に、異なる見解を「直接的に、そのまま」(番号 1・7～8 行目、番号 3、7)JS に提示したと報告したため、CS20 は不一致の表示方法を調整せず不一致を明確に示

したことがわかった。この不一致応答が行われた背景に関して、CS20 が「先生はそれが知らなかった」、「私の説明を聞いた後は“あ、そういうことだった”と言った」(番号1・3行目、8〜9行目)、「JS は優しい人で、友達感覚で気軽にしゃべれる」、「です・ます体の使用を留意しない場合もある」(番号5)と報告したことから、自己表示の逸脱の留意と関係していないが、話題に関する情報の保有度が高いこと、JS との親しい関係などの要因がインプットされ、不一致の表示方法の選択に関与したと考えられる。Sifianou(2012:1558)は、長期的な関係(longterm relationship)にある参加者の間で、どのような緩和的(mitigated)または非緩和的な(unmitigated)不一致の表示が許容されているか、適切な行為(politic behavior)がどのような時に境界(boundary)を超えて、対人関係を脅かす行為に変わるかなどについて、共通の認識が成り立っているため、不一致の表示の側面において、対立関係(antagonistic relationship)にある参加者と異なる特徴を示していると指摘した。この指摘と、報告されたJS との親しい関係、普段のコミュニケーションの様子(番号5)とあわせて考えると、CS20 は構築してきたJS との親疎関係、共有するインターアクションの規範(e.g. 直接的に不一致を示してもいい)により多く注目し、不一致の表示方法を留意しなかったと確認できる。つまり、情報の保有度と親疎関係の二つの要因が前景化することによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、CS20 が社会的役割は上位であるJS に対しても、自己表示の逸脱を留意せず不一致応答を行ったと考える。なお、不一致応答において「丁寧形」が用いられた(番号3)ことは、CS20 が不適切な不一致の表示方法(e.g. 先生に対するためぐち言葉の使用)による自己表示の逸脱を留意し、調整を行った結果であるというより、CS20 が先生のJS に対して、日本語のコミュニケーション規範に従って生成的に言語表現を選択した結果(村岡 2010:48)に近いと考えられる。

例 11 では、CS が自己表示の逸脱を留意せず、否定的意見を明確に示す発話機能、その発話機能を果たすための言語表現などを生成的に選択し、不一致応答を行った。次の例 12 では、CS が緩和的言語表現を用いて不一致応答を行ったと見受けられるが、FUI での報告内容の確認を通して、CS が自己表示の逸脱を留意して調整を行った結果ではないことが明らかになった。

例 12 図書館より家のほうが快適である(自己表示の逸脱が留意されなかった)

番号	発話者	発話
1	JS14	うんうん、(3) {食べている} なんだかんだ、いえー、 <u>うん、家より図書館のほうが快適かもしれないしね</u>
2	CS12	うん(笑)
3	JS14	うん(笑いながら)、うん
4	CS12	いや、 <u>うちの、場合は、逆かも</u>
5	JS14	あ、まじで↑

番号	発話者	発話
6	CS12	うち快適すぎて寝ちゃうー、(あ、なるほど)うちの勉強部屋、机の、(うん)すぐ後ろにベッドがあるんで

例 12 では、2 人は夏休み中の勉強場所について話している。自宅より図書館のほうが快適かもしれない(番号 1)との JS14 の先行発話に、CS12 が自分の場合は逆かもしれない(番号 4³³)と応答した。不一致応答においては、異なる見解の提示が行われ、文末に蓋然性を表す「かも」が付け加えられたため、不一致が婉曲的に示されたと見られ、すなわち CS12 は不一致の明確な表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意した上で、不一致応答を調整したと解釈できる。

なお、「かも」の使用背景について、CS12 が FUI で「ここでの“かも”は意識的に使用したのではなく、習慣的に使用したと思う」、「普段の会話においても、相手に反対の意見を言う時に“かも”を無意識的に、習慣的に最後のところに付け加えて使うことがある」と報告した。また、この言語表現の習慣化された使用について、「日本に来てからこれを使うようになった」とも語られた。これらの報告内容から、番号 4 の応答は CS12 が自己表示の逸脱を留意し、「かも」を文末に追加すると調整計画を立て、調整を実施した応答ではないと判定できる。加藤(2010:45)では、接触場面において規範が無意識的に使用される場合があると指摘された。この事例では、CS12 が不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意して、不一致を婉曲的に示すように調整したのではなく、場面の「接触性」、JS14 との接触歴などの要因の前景化によって、CS12 が不一致の表示方法を留意せず、日本語の規範に従って対立を緩和するための「かも」を生成的に選択し、不一致応答を行ったと考える。

以上の 2 例から、不一致の生じた場面ごとにインプットされた社会的、場面的要因の関与で、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、CS が自己表示の逸脱を留意せず不一致応答を行うことがあると示唆された。これらの応答に対して、命題の逸脱のみが留意された事例を管理プロセスのモデルに基づき、そして、両方の逸脱も留意されなかった事例を生成プロセスのモデル(ネウストプニー1999、高 2006)に基づいて分析する。

3.5 逸脱が留意された不一致応答における CS の調整

これまでの事例説明を通して、CS の不一致応答において 2 種類の逸脱が留意され、言語管理プロセスが活性化されていく可能性があることを述べた。例 1、例 6 のように、片方の逸脱のみが留意される場合がある一方、例 2、例 3、例 7 のように、双方の逸脱がともに留意される場合もある。さらに、両方の逸脱が留意されずに行われた事例もあり、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスはより一層複雑に組み込まれていることが予

³³ 番号 2 の「うん」の使用について「“うん”と言ったこと自体はあまり記憶に残っていない。なぜそう言ったかについても覚えていない」と CS12 は FUI で報告したため、管理された発話というより「生成的に」行われた応答に近いと考えられる。

想される。これらの管理、生成プロセスのメカニズムを説明するモデルを考案する前に、まず、言語管理プロセス(Neustupný 1985a, 1994; Jernudd& Neustupný 1987 ほか)のモデルに基づき、「逸脱の留意」に後続する「調整」の段階にも焦点を当て、片方、双方の逸脱が留意された不一致応答における CS の調整のバリエーションを確認する必要がある。

3.5.1 不一致応答に用いられる戦略の分類

3.2～3.4 の事例が示すように、CS は不一致応答において、不一致を明確にまたは婉曲に示したり、不一致を潜在化させたりして、様々な戦略を用いている。留意された逸脱に対する CS の調整のバリエーションを確認する前に、まず、応答内容における不一致表示の明示度の度合いの視点から、CS が不一致応答に用いる戦略を判定し、分類する必要があると考える。

不一致の表示が伴う発話について、先行研究は、不一致の表示の明示度によって次のように分類している。Pomertanz(1984:70, 74)は、「強い」(strong)と「弱い」(weak)の2種類を挙げ、Rees-Miller(2000)は「やわらげられた」(softened)、「つよめられた」(aggravated)、「中立的」(not softened or strengthened)と3種類に分けた。また、Jones(1990)、Szatrowski(2004)、木山(2005)、Angouri&Locher(2012)などでは、「直接的 direct・間接的 mitigated」、「明示的 explicit・非明示的 implied」、「公開的対立 open conflict」、「隠れた対立 hidden conflict」などと分類されている。熊谷(1994)は、生じた不一致に応答する際の戦略として、「同調的、態度保留、非同調的」の3種類を挙げた。ここで、先行研究における代表的な分類についての定義を確認しておく。

(1) Rees-Miller(2000:1094-1095)

「やわらげられた」不一致の表示(softened disagreement) :

肯定的コメント、ユーモア、包括的な第1人称代名詞(inclusive first person pronouns)、部分的同意が含まれる不一致の表示。

「中立」の不一致の表示(disagreement not softened or strengthened) :

先行発話に対立する発話内容であるが、特別な言語的マーカーが付随していない。一部の事例では否定的表現または「yes/no」のような語彙が用いられる。そして、先行発話の一部をほかの言葉に変えたり、異なるイントネーションに切り替えたりして先行発話を復唱し不一致を提示する「口頭シャドウイング」が用いられることがある。

「強調された」不一致の表示(aggravated disagreement) :

修辞疑問文(rhetorical question)、intensifiers(ユニバーサルの限量詞: universal quantifiers)、第2人称の「you」を命令や非難の口調、または断定的語彙とともに使用する(use of personal you with imperative or accusatory force, or judgmental vocabulary)。

(2) Szatrowski(2004:3)

open conflict :

相手の発話または目標(goal)に対して、直接的な反対意見の表明またはほかの明確な不一致の表明がなされる。

hidden conflict :

それほど直接的ではない(less direct)不一致の表明や合意の欠けた微妙な意味合い(subtle implications of a lack of accord)の伝達がなされる。

(3) 木山(2005)

直接的な不同意：発話の字義通りの意味によって分かる不同意。

間接的な不同意：字義通りの意味ではなく、会話の文脈や、話者同士が共有する背景的情報に基づいて推論することによって分かる不同意。

以上の不一致の表示の分類、Jones(1990)、王(2006)で挙げられた不一致応答の表示に用いられる「直接的言語表現」、「緩和的言語表現」³⁴に基づいて、事例での応答内容と FUI での報告内容などについての分析結果を加え、不一致表示の明示度の度合いの視点から、CS が不一致応答に用いるストラテジーを次の 3 種類に分類した。

(1) 明示的な不一致の表示

CS は JS の先行発話に対して直接的で明瞭に考えのくいちがいを提示して応答する。このストラテジーが用いられる不一致応答では、CS が JS との意見の不一致を発話の字義通りに明示的に示しているため、明示的不一致応答と呼ぶことにする。

(2) 婉曲的な不一致の表示

CS は JS の先行発話に対して様々な緩和的手段を用いて考えのくいちがいを婉曲的に提示して応答する。具体的には、意見の不一致を程度副詞(e.g. 「ちょっと」)や、推量表現(e.g. 「じゃん」「じゃない」)、蓋然性を示す表現(「かもしれない」)、推定表現(e.g. 「感じ」、「みたい」)といったモダリティ表現の使用によって、語気をやわらげて示す。または、考えのくいちがいを提示する内容が談話上に現れていないが、CS の JS の先行発話に対する疑念を表す態度を示したり、自分の異なる見解を裏付ける事例(対案)を挙げたりして意見の不一致をほのめかす。これらのストラテジーが用いられる不一致応答は、婉曲的不一致応答と呼ぶことにする。

(3) 不一致の表示の回避

CS は JS の先行発話に対する考えのくいちがいを提示せずに応答する。このストラテジーが用いられる不一致応答では、見せかけの賛成やほかの話題への切り替えなどによって、CS が JS との意見の不一致を潜在化させているため、回避的不一致応答と呼ぶことにする。

³⁴ これらの言語表現の詳細は、Jones(1990:59, 梶本 2004:47 より引用)、王(2006:71-73)を参照すること。

これよりは、事例を挙げて明示度が異なる CS の不一致応答の特徴を説明する。

例 13 春は花粉症がある (明示的不一致応答)

番号	発話者	発話
1	CS10	秋か、うーん、春がいちばん好きかなー、わたしは
2	JS10	<u>花粉症じゃん、はる</u>
3	CS10	(1)わたし花粉症はないからー
4	JS10	(笑)
5	CS10	(笑)
6	JS10	油断できないんだぞ、なんか、まえ、ぜん、まえの、の年までー、(うん) 花粉症じゃなかったのにー、いきなり花粉症になる人とかいるんだって

例 13 では、2 人は最も好きな季節について話している。春のほうがいちばん好きだ(1 番)との CS10 の発話に、JS10 は花粉症があるから春はいい季節ではない(番号 2)と自分の考えを述べた。番号 3 の応答では、CS10 が花粉症ではないから春でも平気であると異なる見解を明確に提示したため、明示的不一致応答が行われたと判定できる。例 13 の CS10 の不一致応答のように、直接で明瞭に考えのくいちがいを示した応答は明示的不一致応答となる。

例 14 調理者が洗い場を補佐することの妥当性(婉曲的不一致応答)

番号	発話者	発話
1	JS12	((前略)) <u>お客さんから、直接なんか言われるわけじゃないしー、作ってる最中、いっしゅん目線が離してオッケなんだよ</u>
2	CS11	<u>え、でもこの店の調理者の負担がちょっとく重いじゃないですか</u>
3	JS12	<うんうん、ぜんぜん>ほかの店もぜんぶそう

例 14 では、CS11 はバイト先の店長である JS12 と洗い場の仕事の補助について話している。今は接客の人が補助することになっているが、調理師のほうは客から指示をうけることがないので、補助すべきである(番号 1)と JS12 が発話した。その後、CS11 が異なる見解を提示した(番号 2)とみられ、また、先行発話に対する感想として、CS11 が FUI で「この店では調理する人の負担がもともと重いので補助する余裕がない」と報告したため、調理師が洗い場の仕事を補助することの妥当性をめぐって、不一致が生じたと判定できる。CS11 の応答において、程度副詞の「ちょっと」が加えられ、「じゃないですか」と擬似疑問のかたちで不一致が示されたため、緩和処置がとられた不一致応答であると考えられる。ブラウン・レヴィソン(2011:213, 217)は、「a little, a bit」(ちょっと)のような縮小の機能を持つ程度副詞がポライトネス・ストラテジーに属するヘッジ表現の一種であり、不一致の表

示による対立を和らげることができ、また、擬似疑問の使用によってやわらかい不同意を表すことができると指摘したため、CS11 は反対意見の提示を弱め、不一致を婉曲に示すストラテジーを用いたと判定できる。

例 15 横浜は最大の港の都市(婉曲的不一致応答)

番号	発話者	発話
1	CS14	はい、(<笑>)横浜はたしか今の日本、でも一、最大の港の一、都市ですね
2	JS16	<u>(1) 最大なのかな一、でも大きいと思う<よ>(<はい>)うーん、なんかこう、神戸とか、(<はい>)<あっち>のほうも大きいと思うけど</u>
3	CS14	<u>あ、...そうですか</u>
4	JS16	うーん
5	CS14	<u>あ、...かもしれない、でも中国語の(うん)インターネットのホームページで載っているのは一、(うん)横浜市は、<とても> 【</u>
6	JS16	】 一番 ↑
7	CS14	はい

例 15 では、CS14 が横浜は日本で最大の港である(1 番)と発話した後、JS16 は「最大」という限定表現に疑念を示し、神戸のほうは最大の港かもしれない(番号 2)と応答した。この発話に対して、CS14 が FUI で「やはり横浜は最大であると思う」と報告したため、横浜の規模をめぐって不一致が生じたと判定できる。CS14 の応答内容をみると、まず 3 番ではあいづち的な表現が用いられた。番号 5 の応答では、CS14 が蓋然性を示す「かもしれない」を発話した後、中国語のウェブサイトで載せられている横浜の情報を紹介し、自分の主張の裏付けとなる内容を提示したとみられた。

Locher(2004:130)は、番号 5 の応答のような、伝達内容がほかの情報リソースから得られたものであると明確に相手に伝えることを、「責任の転移」(shifting responsibility)のストラテジーとしている。このストラテジーが、「自分の報告内容に責任を負わないイメージを描く portray themselves as not responsible for what they are reporting」機能を果たし、不一致表示による対立の緩和処置の一つであると指摘された(ibid. :113)。Brwon&Levinson(1987:152)でも、伝聞の意味を表す表現がヘッジ表現であり、話し手はそれによって話の真実性を信じているという責任から逃れることができると指摘した(ブラウン・レヴィンソン 2011:210)。また、応答時の意識について、CS14 が FUI で「反対の意見をこれ以上に言うと、対立が強まるだけで何の結果も出ない」、「中国のサイトから調べてきた情報の提示にとどめることにした。これで十分にだと思った。」などと報告した。これらの報告内容と先行研究での指摘をあわせてみると、CS14 が不一致を明示的に示すかわりに、伝聞の形で自分の考えを

支える情報の提示にとどめて、不一致をほのめかして示すように応答したと確認できる。

例 14 のような、やわらげ表現を用いて不一致を示した CS11 の不一致応答、例 15 のような、伝聞の形を用いて、自分の反対意見を裏付ける情報のみを提示することによって、不一致をほのめかしに示した CS14 の不一致応答は、婉曲的不一致応答となる。

例 16 肉まんの味(回避的不一致応答)

番号	発話者	発話
1	JS16	<あ、中華街の>肉まんたべたー↑
2	CS14	はい、食べました
3	JS16	本当に↑おいしいよ、(<笑>)おいしいですよ
4	CS14	<笑>本当においしーかったです(.)あ、北京の、ことおり、(1) でもその、あ、パンダさん

例 16 では、CS14 が写真を見せながら横浜観光のことを紹介しているうちに、JS16 は中華街の肉まんがおいしいとの話題を提起した(番号 1、3)。この発話に対する CS14 の感想として、「おいしいというより、お世辞で言っても普通ぐらい」と報告されたため、中華街の肉まんの味をめぐって不一致が生じたと判定できる。番号 4 の応答では、CS14 が先行発話の一部を繰り返して賛同の意を示してから、写真の紹介に話題を切り替えたとみられた。

先行発話の一部もしくは全部を繰り返すことについて、Brown& Levinson(1987:112)は、相手の話に対して心からの同意を強調する効果があると指摘した(ブラウン・レヴィンソン 2011:152)³⁵。この指摘と共通して、Locher(2004:137-138)も、先行発話の繰り返しは「同意の表示」の機能を果たすことができ、先行発話への支持となり、相手との連帯を積極的に示す手段の一つであると述べている。また、応答時の感想について、CS14 が FUI で「JS16 が 2 回もおいしいと言い続け、とても気に入ったようなので、おいしくないそのまま伝えたらどうも失礼になると思い、相手の発話に合わせておいしいと言った」と報告した。この報告内容と先行研究での指摘を参考にし、CS14 は先行発話に不一致を抱えているが、先行発話の一部を繰り返し、さらに賛同の意を示すことによって、不一致を潜在化させ回避的不一致応答を行ったと確認できる。

例 16 のような、相手の考えに同調の意を示し、生じた不一致を潜在化させる(話題転換も含む)CS14 の不一致応答は、回避的不一致応答となる。

これより、異なる戦略が用いられ、不一致表示の明示度が異なる CS の不一致応答の分類をふまえて、留意された逸脱に対する CS の調整のバリエーションを確認する。

³⁵ Pomerantz(1984:83)は、先行発話の繰り返しが先行発話の内容に対する不一致または疑問を提示する手段になることもあったと述べた。

3.5.2 命題の逸脱に対する調整

CS が留意した命題の逸脱を否定的に評価する場合、その逸脱の解消、軽減を考慮し調整計画を立て、不一致応答を調整していくプロセスになると予想される。ここでは、例 13 を再掲し、留意された命題の逸脱に対する CS の調整を考察する。

例 13 花粉症がないから春でも困らない(留意された命題の逸脱に対する調整)

番号	発話者	発話
1	CS10	秋か、うーん、春がいちばん好きかなー、わたしは
2	JS10	花粉症じゃん、はる
3	CS10	(1)わたし花粉症はないからー
4	JS10	(笑)
5	CS10	(笑)
6	JS10	油断できないんだぞ、なんか、まえ、ぜん、まえの、の年までー、(うん) 花粉症じゃなかったのにー、いきなり花粉症になる人とかいるんだって

例 13 では、2 人は自分が一番好きな季節について話している。

(1) 不一致の内容

「春は花粉症があるからいい季節ではない」(番号 2)との JS10 の先行発話に対して、CS10 が「私は花粉症がないから大丈夫だ」(番号 3)と異なる見解を明確に提示したため、春はいい季節であるか否かをめぐって不一致が生じ、明示的不一致応答が行われたと判定できる。

(2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、CS10 は FUI で「花粉症のある人にとっては春が嫌な季節だが、自分は花粉症がないから春でもぜんぜん大丈夫だよという事実を伝えたかった」と報告した。この感想から、CS10 は先行発話が実情(自分は花粉症がないから大丈夫だ)に合わないと認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

(3) 逸脱の調整

応答時の意識について、FUI で「事実を伝えたかった」と報告したように、CS10 が留意した命題の逸脱を否定的に評価し、それを解消するための調整計画(e.g. 不一致を提示する)を立てたことが明らかになった。そして、不一致の表示方法について、FUI で「言い方を気にせず、そのまま話していた」と報告したため、CS10 は不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意せず、命題の逸脱の解消のみを考慮し、明示的不一致応答を行うように調整したと確認できる。

例 13 から示唆されたように、命題の逸脱のみが留意され、否定的に評価される場合、CS がこの逸脱の解消、軽減を考慮し、不一致を明確に提示できるように調整計画をたて、明示的不一致応答を行う可能性が高まると予想される。

3.5.3 自己表示の逸脱に対する調整

CS が留意した自己表示の逸脱を否定的に評価する場合、その逸脱の解消、軽減を考慮し調整計画を立て、不一致応答を調整していくプロセスになると予想される。

例 17 ダンスのほうがいい(留意された自己表示の逸脱に対する調整)

番号	発話者	発話
1	JS15	そうそう、うんとう、運動していないからさー、ちょっと、ね、 <u>ちょっといい機会だから、3 週間みっちり、ただで使わせもらおう<と思って</u> <u>≥</u>
2	CS13	<u><うーん>、けど私なら、なんか、きかいの運動より、(うーん)ダンスとかよかった<と思う>。</u>
3	JS15	<あー>、そうだねー、でも、それやりにもー、なんか、教室とか

例 17 では、2 人は JS15 がフィットネスクラブの無料体験の機会を得られたことについて話している。

(1) 不一致の内容

これからフィットネスクラブに通う予定だ(番号 1)との JS15 の先行発話に、CS13 が個人判断を示す「と思う」³⁶を文末に加えて、器械で鍛えることよりダンスのほうがいいと応答した。また、先行発話に対する感想として、CS13 が FUI で「女の子が器械などで体を鍛えることはあまりよくないと思っている。やはりヨガやダンスのほうがふさわしい」と報告した。この報告内容と番号 2 の応答内容をあわせて考えると、フィットネスクラブに通うことの妥当性をめぐって不一致が生じたと判定できる。

(2) 自己表示の逸脱

JS15 の先行発話に対して、CS13 が女の子にとってフィットネスクラブはそれほどふさわしくないと不一致を感じたほか、「人によって好みが違うから、彼女はそのほうが好きならばそれでもいい」とも考えていたと FUI で確認できた。この感想から、CS13 が JS15 の先行発話において不一致を感じたが、命題の逸脱を留意しなかった(「彼女が好きならばそれでもいい」)と確認できる。

番号 2 の不一致応答が行われた背景に関して、CS13 は FUI で「相手は今回の無料体験の機会を得られてとてもラッキーだと思っているようで、それはあまりよくないなどと直接的には言えない」と報告した。この報告内容から、CS13 が「相手のポジティブ・フェイス」の要因をインプットし、明確な不一致の表示が JS15 のフェイスを侵害する恐れがあると予想し、自己表示の逸脱と留意したことがわかった。

³⁶ Brown&Levinson(1987:64)は、「I think」を一つの質的ヘッジ表現(quality hedge)と捉え、話し手が自分の発話の真実さについてのすべての責任を負うわけではないことを伝え、聞き手へ率直に押し付ける(opening imposing)ことを避けるために使用されていると指摘した。

(3) 逸脱の調整

自己表示の逸脱の留意に関する報告内容のほか、ヘッジ表現の「と思う」の使用について、CS13はFUIで「相手の考えを認めてから、自分の考えを提示しようと考えた」、「“と思う”を使ったほうがやわらかくなる。つまり、自分の場合は皆で集まってダンスなどをするののほうが好きだと伝えることにとどめて、実はこっちのほうがもっといい方法だよとそれとなく提示する」と報告した。これらの報告内容によって、CS13が自己表示の逸脱の解消を考慮し調整計画をたて、あくまでも個人の見解であることを言い加えて、異なる見解を婉曲に示すように不一致応答を調整したと確認できる。

例17では、CSが留意した自己表示の逸脱を解消するために、主張の個人性を強調する言語表現を用いることによって、婉曲的不一致応答を行うように調整したが、次の例18では、CSが不一致を潜在化させるように応答を調整した。

例18 バーゲンのものは買う価値がない(留意された自己表示の逸脱に対する調整)

番号	発話者	発話
1	JS14	<u>うん、その一、なんだろう、本当は高いけど一、安くなっているっていうんだったら買おうと思うんだけど一、でも元から安っぽそう一なもの</u> <u>はやっぱり、て、<ちょっと抵抗>(＜うーん＞)がある、(笑)うん</u>
2	CS12	<u>あでも、もともと高かったものを安くする理由考えたことがある↑</u>

例18では、2人がバーゲンでの買い物について話している。

(1) 不一致の内容

バーゲンで値下げしたものは買う価値があるが、もともと安いものは買うべきではないとのJS14の先行発話に、CS12は商品を値下げした理由を尋ねて応答した。先行発話に対する感想として、CS12はFUIで「バーゲンのものは、どちらを買うべきではないと思う」、「JS14が買いたいなら別に反対するわけでもないが、自分ならばバーゲンで買い物をしないほうだ」と報告した。これらの報告内容から、まず、バーゲンで買い物をすることの価値をめぐる不一致が生じたと判定できる。そして、CS12がJS14の先行発話において不一致を感じたが、命題の逸脱を留意しなかった(「JS14が買いたいならそれでいい」)と確認できる。

(2) 自己表示の逸脱

応答時の感想について、FUIで「JS14はバーゲンでの買い物を楽しみにしているようで、直接的に自分の考えを伝えることはよくないと思った」と報告したため、CS12が「JSのポジティブ・フェイス」の要因をインプットし、不一致の表示自体がJS14のフェイスを侵害する恐れがあると予想し、自己表示の逸脱と留意したことが明らかになった。

(3) 逸脱の調整

CS12の応答では異なる見解の提示が見られなかったため、回避的不一致応答が行われた

と判定できる³⁷。不一致を示さず話題転換のかたちで応答した背景について、CS12はFUIで「直接的に自分の考えを伝えることよりは、相手を考えさせたほうが納得してもらいやすくなるから質問の形を用いた」と語った。この報告内容から、CS12が自己表示の逸脱の解消を考慮し調整計画を立て、質問の形で話題転換を行い、不一致を潜在化させるように応答を調整したことがわかった。

例17と例18から示唆されたように、自己表示の逸脱のみが留意され否定的に評価される場合、CSはこの逸脱の解消、軽減を考慮し、不一致の非明示的な表示、または不一致の潜在化ができるように調整計画を立て、婉曲的、回避的不一致応答を行う可能性が高まると予想される。

3.5.4 双方の逸脱が留意された場合の調整

ここまでは、事例を挙げて、命題の逸脱、自己表示の逸脱の片方のみが留意された不一致応答におけるCSの調整を説明したが、引き続き、双方の逸脱がともに留意された場合のCSの調整にどのようなバリエーションがあるか確認する。

3.5.4.1 命題の逸脱に対する調整を優先させる場合

3.2.2では命題の逸脱の留意に関与する社会的、場面的要因が挙げられたが、これらの要因は双方の逸脱が留意された後の調整段階において、命題の逸脱に対する調整の優先順位にも関与してくると思う。例えば、話し手のフェイスという要因の関与について、Bousfield(2007:28)は、不一致が生じたディスコースにおいて、「自己保全」(self-preservation)の原則によって、不一致の表示が弁解的で攻撃的な形を持つようになってくることがあると述べている(Sifianou 2012:1560より引用)。Sifianou(2012:1559)において、話題内容が話し手の信念(belief)と知識に関する内容である場合、コミュニケーションが攻撃的なものになる可能性が高いと指摘された。また、Kotthoff(1983)は、不一致が生じた同一インターアクションにおいて、緩和(聞き手のフェイスを保持する)への期待(exception to mitigate)から、緩和の継続が話し手のフェイスを侵害するという期待へと、1種のフレームの転換が起こると指摘した(Angouri&Locher 2012:1550より引用)。このような転換が生じる背景に、不一致の提示側が自分の観点到確信を持っていないイメージを避けたいという考えがある(ibid)。さらに、不一致の深刻度(severity)と話し手のフェイスへの関心からの影響について、Rees-Miller(2000)は、深刻度の度合いが高い³⁸と話し手が考える場合、聞き手に思いやりを示して緩和した不一致の表示を行うか、それとも自己尊敬(self-respect)を保つために強められた不一致の表示を行うかの選択を行い、不一致の表示のしかたを決めていくことになるという指摘した。このように、CSは命題の逸脱が自分のフェイスを侵害する度合いが高いと認

³⁷ この不一致応答に対して、JS14はFUIで「ただの質問として相手の発言を受け取った」とも報告した。

³⁸ Rees-Miller(2000:1098)は、生じた不一致が参加者の個人または職業上(professional)のアイデンティティ、価値(worth)、信念、評価(values)を脅かす場合は、深刻度の高い不一致となるとしている。

知する場合、この逸脱の調整を優先させた上で調整計画をたて、不一致応答を調整していくことが多くなると予想される。

不一致の対象となる話題からの関与について、Du(1984)では、社会的地位や年齢などの差異によってCSの不一致の表示方法が制限されることはあるが、個人範疇に属する話題が不一致の対象となると、アメリカ英語の母語話者に比べて、CSのほうはより自由にコメントできる傾向があると指摘された。これによって、CSは個人範疇の内容をめぐって不一致を感じ命題の逸脱を留意する場合、不一致の表示方法より命題の逸脱の解消をより多く考慮すると示唆された。また、CSの不一致応答の全体的特徴に関して、平野(2006)がCSを含む日本語の非母語話者が「否定型」の反対意見表明を多用する傾向にあると述べている。楊・倉田(2011)からは、日中接触場面におけるCSが反対意見を提示する場合においても、命題のみの発話を用いる特徴があると指摘された。Angorui&Locher(2012:1549)が指摘したように、不一致の表示が先決的な(priori)ネガティブな行動ではなく、あるコミュニティやグループに属する人々が長い時間にわたって形成させた異なる規範は、不一致の表示に対する認知(preceived)と実行(enacted)に影響を与えている。

これらの指摘を参考に、CSが双方の逸脱を留意した後は、自分のポジティブ・フェイスの保持への関心、不一致の対象となる話題の性格や不一致応答に関する母語の慣習的規範などの要因によって、命題の逸脱の解消、軽減を優先させ、不一致応答を調整していくことがあると考える。例えば、例2ではCSは職位の差異による「上下関係」の要因をインプットして自己表示の逸脱も留意したが、侵害された自分のポジティブ・フェイスにより多くの関心を払い、命題の逸脱の調整を優先させた。下記の例19では、CSがインターアクションの目的の達成をより多く考慮し、命題の逸脱の調整を優先させた。

例19 目標の設定が低すぎる(命題の逸脱の解消を優先させた調整)

番号	発話者	発話
1	CS24	((前略)) その女の子(JS)は最初からもう何を言ったかと思う↑(うん)この人、最初からもう、私たちのチームが集まるともう最初からは“ <u>みんな「展示会名」にいかなくいいよね</u> ”、(うん)“ <u>合格すればいい</u> ”<うん>(うん)“ <u>パスできればいい</u> ”、(うん)“ <u>単位とれればいいよね</u> ”(うん)そのような意味で、それでこの発言一つだけでもう完全に、皆はやる気満々にしてもこの発言がされると、もう完全に冷めてしまうのさ、そして、日本人の子供たち ³⁹ はどうしてもその発言に反発したいまでやる気満々ではないのさ、でも私はやはり我慢できなくて、その時はこう言った、“ <u>その目標でいくと一、単位取れなくない↑</u> ”って、(笑い

³⁹ ほかのチームメンバーがCS24より年下なので、CS24はインタビューでチームメンバーのことを「子供」の呼称を使って指示していた。

		ながら)(うん)つまり、目標をあまりにも低く設定してはいけないのさ、(うん)最高標準の目標を設定しなくても最初から、もう(うん)最初から水をかけてはいけないさ
		4行を略した
2	R	うん、その時はやはり我慢できなくて言った
3	CS24	(笑)そう、実はその時は日本では、このような場合はふつう反駁しないほうがいいと分かるのさ、(うん)でも、やはり言わなければいけないと思っていた、そうしないとみんなはやる気を失うからさ

例 19 では、CS24 がプロジェクト・チーム⁴⁰会議でのインターアクションを報告した。この会議では、チーム単位で参加するデザインコンテストでの目標について、チームメンバーが話し合っている。

(1) 不一致の内容

JS はチームの目標について、「合格すればいい、単位を取ればいい」(番号 1・2～4 行目)と発話したが、CS24 が「その目標では単位が取れなくなる」(番号 1・9 行目)と応答したため、目標の設定をめぐって不一致が生じたと判定できる。

(2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「その発言だけでは皆の熱情が冷めてしまうので、それが我慢できなくて反駁した。この目標はあまりにも低い」(番号 1・5～8 行目、10 行目)、「言わないと皆はやる気を失ってしまう」(番号 3・2～3 行目)と報告された。これらの報告内容によって、CS24 が不一致を感じたほか、JS の先行発話がインターアクションの参加目的(e.g. 適切なチーム目標の設定)を妨げると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

(3) 自己表示の逸脱

応答時の感想として、「日本人のメンバーはどうしても反駁したいまでやる気満々ではない」(番号 1・7～8 行目)、「日本ではこのような場合は通常は反駁しないほうがいいと分かっているが」(番号 3・1～2 行目)と報告された。これらの報告内容によって、CS24 は不一致が生じた場面に関する日本の社会文化的規範(e.g. 会議の時は他人の意見を直接的に反駁しないこと)の要因をインプットし、不一致の表示自体が不適切だと判断し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

(4) 逸脱の調整

「我慢できなくて反駁した」(番号 1・8 行目)、「反駁しないほうがいいと分かっているが、言わなければならなかった。そうしないと皆はやる気を失う」(番号 3・2～3 行目)との報告内容から示されたように、CS24 が命題の逸脱の解消を優先的に考慮し、不一致の明確な提示を選択して不一致応答を調整したことが明らかになった。つまり、この事例では、

⁴⁰ デザインコンテストに参加するために結成されたプロジェクト・チームである。

CS24 が不一致の表示に伴う JS のポジティブ・フェイスへの侵害より、インタラクションの目的の達成のほうを重視し、命題の逸脱の調整を優先させた。言語管理プロセスの視点から捉えると、CS が双方の逸脱を留意した後、命題の逸脱に関する管理プロセスは調整実施の段階までに至ったが、自己表示の逸脱に関する管理プロセスは留意または評価の段階にとどまり、調整計画、計画実施の段階にまで至らなかったと解釈できる。

3.5.4.2 自己表示の逸脱に対する調整を優先させる場合

ポライトネス実現の観点に基づき、不一致の表示に伴うフェイス侵害を軽減することの必要性、用いられる調整ストラテジーの詳細などについて、すでに多くの先行研究(Leech 1983, Pomerantz 1984, Brown&Levinson 1987, Jones 1990 ほか)が行われ、不一致の表示方法を調整することの必要性、重要性が指摘されている。すでに提示したように、話し手は不一致の深刻度の度合いに応じて、聞き手のフェイス保持をより多く考慮し、緩和した不一致の表示方法を選択する場合もある(Rees-Miller 2000)。このように、CS は「JS のポジティブ・フェイス」の要因をインプットし留意した自己表示の逸脱に対して、その調整を優先させることがありと予想される。この要因のほかに、CS の母語場面を考察した Pan(2000) は、CS は発話事象の社会的コンテキスト、異なる場面での異なる力関係を認知した上で、自分の役割と発話ストラテジーを場面ごとに調整していく傾向があると指摘した。この指摘から、不一致が生じた場面の場面的コンテキストの特徴によって、CS は上下関係による不均衡な支配力の配分をより多く配慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させ不一致の表示方法を調整することも起こりうると示唆された。また、接触場面での CS の不一致応答の全体的特徴に関して、平野(2006)は、接触経験の増加とともに、CS を含む日本語の非母語話者が用いる反対意見表明の方策が「否定型」から「指摘型」へ移行していく傾向があると述べ、王(2006)は、母語場面での CS に比べると、日中接触場面での CS は同調および態度保留のストラテジー、緩和的表現をより多く使用していると指摘した。これらの指摘を参考にし、CS が双方の逸脱を留意した後は、不一致が生じた場面の場面的コンテキストに基づき、場面の接触性、顕在化されている支配力の配分、不一致の表示が JS のフェイスを侵害する深刻度の度合い、などの社会的、場面的要因を総合的に考慮した上で、自己表示の逸脱の解消、軽減を優先させ、不一致応答を調整していく可能性があると考えられる。例えば、例 7 では CS が双方の逸脱を留意した後、JS のポジティブ・フェイスの維持をより多く配慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させて回避的不一致応答を行った。以下の例 8(再掲)では、CS が上下関係への適応をより多く配慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させた。

例 8 ワイシャツの色は茶色だった(自己表示の逸脱の解消を優先させた調整)

番号	発話者	発話
1	CS22	そのシャツが茶色にみえたからさ、(うん)私は茶色と書いた、そして彼は灰色だと言った、実は、茶色だったのよ
2	R	うん、それでどう答えた↑
3	CS22	お客さんだからさ、私は何もいえない、私は“すみませんでした。電球の光で茶色にみえました。今度は気をつけます”と言った ((後略))

例 8 では、クリーニング屋でバイトしている CS22 は客からワイシャツを預かり、シャツの色を伝票に記入した際のインターアクションを報告している。

(1) 不一致の内容

シャツの色が灰色だとの JS の先行発話に対して、CS22 が茶色だと思った(1 番)ため、ワイシャツの色をめぐって不一致が生じたと判定できる。

(2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「実は茶色だった」(番号 1・2 行目)と語られたため、CS 22 は JS の先行発話が実情に合わないと考え、命題の逸脱と留意したと確認できる。

(3) 自己表示の逸脱

命題の逸脱のほかに、「客だから何もいえない」(番号 3)との報告内容から示されたように、CS22 は社会的役割の差異(客-店員)によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、不一致の表示自体が上下関係の維持を脅かす恐れがあると予想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱と留意した。

(4) 逸脱の調整

CS が双方の逸脱を留意したが、「客だから何も言えない」ため、自分が見間違えたとして JS に謝った(3 番)ことから、不一致が提示されずに回避的不一致応答が行われたとわかった。「客だから何も言えない」との報告内容によって、CS22 が JS の持つ支配力(e.g. 高圧支配力、正当支配力、スペンサー=オーディー 2004:38-39)を配慮し、上下関係への適応を図り自己表示の逸脱の調整を優先させたことが明らかになった。言語管理プロセスの視点から捉えると、CS が双方の逸脱を留意した後、自己表示の逸脱に関する管理プロセスは調整実施の段階までに至ったが、命題の逸脱に関する管理プロセスは留意または評価の段階にとどまり、調整計画、計画実施の段階にまで至らなかったと解釈できる。

3.5.4.3 命題の逸脱、自己表示の逸脱に対する調整をともに考慮する場合

加藤(2010:32)は接触場面での基本的な規範⁴¹の方向性について、「コミュニケーションを成立させなければならない」、「良好な対人関係を形成・維持しなければならない」の二つ

⁴¹ 加藤(2010)は二つの基本的な規範を挙げ、それぞれは「コミュニケーション成立規範」、「対人関係規範」としている。

を挙げ、接触場面でのインターアクションの最も大きな目標でもあると述べている。この二つの方向性は、不一致応答における逸脱の留意、調整を動機づけている目標でもあると考えられる。つまり、前者はコミュニケーションを成立させるための、命題の逸脱に対する調整の目標で、後者は対人関係を形成・維持するための、自己表示の逸脱に対する調整の目標である。CS は不一致応答を行う際に、片方の目標のみならず、双方の目標の実現を目指して調整する場合もあると予想される。また、梶本(2004)は JS が相手の提案に対して反対意見を述べる際の言語行動を分析し、話し手は「目的達成」⁴²、「対人関係配慮」の二つの指向性に関わる工夫を凝らして会話を進めていく特徴があると指摘した。調査対象は JS であるが、CS の不一致応答においても、不一致の表示という「目的」の達成を目指す命題の逸脱に対する調整、そして、「対人関係配慮」を目指す自己表示の逸脱に対する調整、との2種類の調整がともに図られることがあると考える。例えば、Cheng&Tsui(2009)は HKC と NSE からなる英語使用の接触場面を考察し、HKC のほうは双方のフェイス保持をより多く考慮し不一致の表示を行う傾向があると指摘した。そして、HKC は対立の悪化を回避し、双方のフェイスを同時に保持できるように、話題転換と多義的な言語表現の使用⁴³などの調整ストラテジーを多く用いる特徴があると指摘された(ibid)。下記の例 15(再掲)では、CS が留意した双方の逸脱の解消をともに考慮し、不一致応答を調整した。

例 15 横浜は最大の港である(双方の逸脱の解消がともに考慮される場合)

番号	発話者	発話
1	CS14	はい、(<笑>)横浜はたしか今の日本、でも一、最大の港の一、都市です
2	JS16	(1)最大なのかな一、でも大きいと思う<よ>、(<はい>)うーん、 <u>なんかこう、神戸とか、(<はい>)<あっち>のほうも大きいと思うけど</u>
3	CS14	<u>あ、そうですか</u>
4	JS16	うーん
5	CS14	<u>あ、かもしれない、でも中国語の(うん)インターネットのホームページで載っているのは一、(うん)横浜市は、<とても> 【 【</u>
6	JS16	】】 <一番↑>
7	CS14	はい
8	JS16	あ、本当に↑
9	CS14	<u>大きな港です、でも一、じつは、そうですか分からないんです⁴⁴</u> (2) あ、 <u>インドの<すいとう>(<うん>)です</u>

⁴² 梶本(2004)の調査では、「目的」は反対意見を効率よく相手に伝え、聞き入れてもらうことである。

⁴³ HKC は既に構築できた共通の基盤に向かって話題転換を行うことによって、対立の悪化を回避できるようになる。そして、多義的な言語表現の解釈多様性によって、HKC は双方のフェイスを保持できるようになる(Cheng&Tsui 2009:2377)。

⁴⁴ この発話が「実はそうであるかどうかは分かりません」という意味であると FUI で確認できた。

例 15 では、2 人は横浜が港都市としての規模の大きさについて話している。

(1) 不一致の内容

CS14 の「横浜は日本の最大の港である」(番号 1)の発話に続いて、JS16 は神戸のほうが最大の港かもしれない(番号 2)と発話した。この先行発話に対して、CS14 があいづち的な表現(番号 3:「そうですか」)を用いて反応し、否定的意見を直接的に示すかわりに不確かな態度を示しながら、自分の主張を支える情報(番号 5、9)を提示した。先行発話に対する感想として、CS14 は FUI で「この前に横浜を紹介するウェブサイトから読んだ内容では、日本で一番大きな港だと書いている。自分が正しいと思っている」と報告した。応答内容と報告内容をあわせて参照すると、横浜が日本の最大の港であるか否かをめぐって不一致が生じたと判定できる。

(2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、CS14 は FUI で「最大の港であるということは自分がインターネットから調べてきた情報で、信憑性について自信がある。相手はただ自分のイメージを言っているだけだ」と報告した。この報告内容によって、CS14 は JS16 の先行発話が実情(e.g. サイトで載せられている横浜の規模に関する情報)に合わないと認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

(3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「互いのイメージが対立している。このまま話し続けたら対立が強まるだけで何の結果もでない」、「日本人である相手のイメージを尊重して、あなたが間違っていると言いたくはない」、「横浜は最大の港だと確信していたが、神戸なども大きいと言われたので、自分が調べたのは中国のサイトで、日本のサイトでは異なる内容が書かれているかもしれないと思った」、「規模の計算のしかたは国によって異なるので、日本で用いられた規模の計算方法が中国の方法と異なるかもしれない。結果が異なってくるかもしれないと考えなおした」などと語られた。これらの報告内容から、CS14 は JS16 のポジティブ・フェイス(「相手のイメージを尊重する」)、日本の社会文化的規範(e.g. 中国と異なる統計方法を用いて都市の規模を計算する)の要因をインプットし、反対意見の明確な提示が JS のフェイスを侵害し、日本の社会文化的規範からの違反になる恐れがあると予想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

(4) 逸脱の調整

CS があいづち的な表現を用いて応答した(番号 3)後、異なる見解を明確に示すかわりに、中国のサイトで載せられている情報のみを提示し、さらに蓋然性を示す「かもしれない」を用いて提示した情報に自信がない(番号 5、9)と付け加えた。これらの応答内容から、婉曲的不一致応答が行われたと判定できる。応答時の感想として、CS14 は FUI で「反対の意見をこれ以上に言うとか対立が強まるだけで何の結果もでないので、同調する応答を選んだ」(番号 3 の発話)、「中国のサイトから調べてきた情報の提示にとどめた。これで十分だと思った」、「中国のサイトではこのように書いてあるが、実は正しいかどうかは分から

ないと言い加えた」(番号5、9の発話)と報告した。このように、CS14は双方の逸脱を留意した後、命題の逸脱の解消(正しいと思う事実情報の提示)のほかに、自己表示の逸脱の解消(伝聞の形で自分の考えを支える情報を提示するのみで、確実か否かが分からないと言い加える)も図り、つまり、双方の逸脱の解消をともに考慮し、婉曲的不一致応答を行うように調整した。言語管理プロセスの視点から捉えると、CSが両方の逸脱を留意した後、管理プロセスが活性化され、二つの逸脱を同時に解消、軽減できるように調整計画が立てられ、計画実施の段階まで至ったと解釈できる。

3.6 逸脱が留意されなかった不一致応答の生成プロセス

3.5では命題の逸脱、自己表示の逸脱の片方、または双方が留意された不一致応答におけるCSの調整のバリエーションを確認したが、3.4での分析から明らかになったように、不一致の対象となる話題の内容、不一致が生じたインターアクション場面の性格、参加者の個人的特質や参加者間の接触歴などの要因の関与で、どちらの逸脱も留意されないCSの不一致応答の事例もある。ネウストプニー(1999)、高(2006)の生成プロセスのモデルに基づいて考えると、これらの事例では、CSが不一致の生じた場面における様々な状況的要因をインプットした後、不一致応答を通して実現させようとする機能(発話意図)、機能の実現に必要な言語表現をほぼ自動的に選択し、不一致応答を表層化していくプロセスになっている。下記では、3.4の例10を再掲し、逸脱の留意が生じなかったCSの不一致応答に関する生成プロセスを詳しくみていく。

例10 東南アジアは魅力的な旅行先ではない(逸脱の留意が生じなかった不一致応答)

番号	発話者	発話
1	CS13	どこに行く↑
2	JS15	<u>なんか東南アジアに行こうかつていうはなし></u>
3	CS13	<おー>、東南アジア、あついよ(笑)
4	JS15	あついよね、でもね、寒い所よりはぜんぜんいいんですよ、わたしも、あついの(ならまだ??)
5	CS13	<u>うん、東南アジア</u> {咳をする}
6	JS15	<でも> 【 【
7	CS13	【 【 <すごく>行きたいところないね、東南アジア(笑)

例10では、JS15が東南アジアへ旅行に行く予定だと発話した後、東南アジアが旅行先としての魅力をめぐって不一致が生じ、CS13が明示的不一致応答(番号5、7)を行った。先行発話(番号2)に対する感想として、「東南アジアは魅力がないと思うが、自分はそう思っているだけで、相手が行きたいならばそれでいい」、「東南アジアに行かないように相手を

説得することは目的ではない」と報告され、CS13 が命題の逸脱を留意しなかったと確認できた。応答時の感想について、「自分の考えを伝えることのほうを重視し、相手が賛成してくれるかどうかは問題にならない」、「考えをそのまま伝えることにした」と報告され、CS13 が自己表示の逸脱も留意しておらず、不一致の表示方法を調整せず不一致応答を行ったと確認できる。つまり、この事例で不一致が明示的に示されたことが、CS13 が逸脱を留意し言語管理を行った結果ではなく、不一致応答を生成的に行った結果に近いと考えられる。

生成プロセスのモデルに基づいてみると、CS13 が不一致を感じた後、「インプット」の段階ではコミュニケーションのセッティング(e.g. 場所や参加者の人数)、JS15 との関係や接触歴(e.g. 親しい関係)、先行発話の内容や関連する背景的知識(e.g. 東南アジアの観光地に関する情報)などがインプットされ、そして、反対意見の表明という不一致応答の機能(発話意図)が決まり、必要となる言語表現が選択された上で、不一致応答が表層化されていくプロセスになっていると解釈できる。なお、ここでの逸脱を「留意しなかった」ことは、CS13 の視点から捉えた結果であり、JS15 が CS13 の不一致応答においても逸脱を留意しなかったことを意味するわけではない⁴⁵。

3.7 CS の不一致応答の言語管理、生成のプロセスの分析の枠組みと本論文の構成

先行研究から、接触場面において多様な規範が異なるレベルで参照、適用され、様々な種類の逸脱が留意されることにより、関連する言語管理のプロセスが活性化されてくると指摘された⁴⁶。CS の不一致応答においても、様々な規範の参照と適用、異なる種類の逸脱に対する留意、活性化される多様な管理プロセスが存在すると予想される。そして、逸脱が生じずに言語管理が行われない不一致応答に関する生成プロセスもあると考えられる。CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのメカニズムを明らかにするには、言語プロダクトとして談話上に現れた明示的、婉曲的、または回避的不一致応答が、どのような言語管理、生成のプロセスを踏まえて表層化されているのか、といった視点からの分析が必要である。さらに、逸脱の留意、調整をはじめとする管理プロセスの諸段階、そして、生成プロセスの諸段階において、どのような社会的、場面的要因がどのように関与しているか、といった側面にも注目し分析を深める必要がある。本章では、以上の課題を明らかにするための、CS の不一致応答の事例で用いる分析の枠組みを説明した。

具体的に、「逸脱の留意」の概念を援用し、CS の不一致応答においては、少なくとも JS の先行発話の内容による命題の逸脱、不適切な不一致の表示方法による自己表示の逸脱、との 2 種類の逸脱が留意されうると提起し、事例分析を通してその可能性を説明した。そ

⁴⁵ CS13 の不一致応答に対する感想として、JS15 は FUI で「これまでは何回も東南アジアに行ったし、相手が言う魅力がない、見どころがないという内容を否定したかった」、「これから旅行に行く予定だったが、魅力がないと言われてやや驚いた」と報告した。これによって、JS15 は CS13 の応答において不一致を感じ、命題の逸脱も留意したと考える。

⁴⁶ 接触場面で参照される規範、留意される逸脱の多様性、変動性を論じた先行研究は、Neustupný(1985a,1985b,1994)、Jernudd&Neustupný(1987)、ファン(2003,2010)、村岡(2002,2010)、加藤(2010)などを参照すること。

して、逸脱に対する留意のバリエーションとして、双方の逸脱がともに留意されることのほかに、片方の逸脱のみが留意されること、または逸脱の留意が生じないことも起こりうるとわかった。さらに、CS がインプットした、上記の 2 種類の逸脱の留意に関与する社会的、場面的要因を不一致応答の事例ごとに抽出でき、個々の要因の内容を説明した。

次に、逸脱が留意された後の調整の段階に焦点をあて、CS の調整のバリエーションを考察した。これによって、CS が片方の逸脱のみを留意して調整を行う場合があるほかに、双方の逸脱を同時に留意して調整を行う場合もあると確認できた。前者の場合、CS が留意した片方の逸脱の解消を考慮し、調整計画を立てた上で実施して、不一致応答を調整することになっている。後者の場合、さらに、CS が留意した双方の逸脱から、片方の逸脱の解消を優先させ、不一致応答を調整する場合と、双方の逸脱の解消をともに考慮し不一致応答を調整する場合に分かれているとわかった。また、逸脱が留意され言語管理が行われた不一致応答のほかに、逸脱の留意が生じずに生成的に行われた不一致応答の事例もあった。これらの事例では、先行発話の内容、不一致が生じた場面の場面的な条件などのコミュニケーション要素(高 2006:92)がインプットされてから、不一致応答において果たされる機能(発話意図)、必要となる言語表現などがほぼ自動的に選択され、不一致応答が表層化されていく生成プロセスになっている。このように、CS の不一致応答において、不一致が生じた場面に埋め込まれる様々な社会的、場面的要因がインプットされ、命題の逸脱、自己表示の逸脱の留意によって活性化される言語管理プロセス、逸脱が生じずに言語管理が行われていない生成プロセスが存在し、より複雑に組み込まれた構造を示している。

これからの第 4 章、第 5 章では、本章で述べた分析の枠組みを用いて、事例ごとに CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセス、特に逸脱の留意、調整の段階に焦点を当てて分析を行っていく。第 4 章では、社会的距離の差異や支配力の不均衡な配分が潜在化している場面(e.g. 同輩や友人の JS との日常的会話での不一致応答の事例、会話資料が中心である)、第 5 章では、社会的距離の差異や支配力の不均衡な配分が顕在化している場面(e.g. 会社の上司の JS との不一致応答の事例、インターアクション・インタビュー資料が中心である)を取りあげて分析を進める。データの性格が異なるが、分析の手順は共通している。具体的には、まず、会話資料、インターアクション・インタビュー資料に基づいて、生じた不一致、行われた不一致応答に該当する部分を同定し、抽出する。次に、抽出する不一致応答の発話内容、FUI などによって報告された応答時の意識や感想を照合し検討した上で、判定の妥当性を確認する。そして、「逸脱の留意」の概念を援用し、個々の不一致応答において CS が注目した対象を同定し、そこから CS が留意した逸脱の詳細、逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の構成を明らかにする。調整段階の分析に当たって、主に本章で述べた CS の調整のバリエーションに基づき、事例ごとに CS が片方の逸脱、双方の逸脱を留意した後で行う調整、特に双方の逸脱を留意した後の調整の優先順位の選択に注目し分析を進める。これと同時に、調整の段階における社会的、場面的要因からの関与を合わせて考察する。逸脱が生じずに言語管理が行われなかった不一致応答について、生成

プロセスのモデルに従って「インプット」の段階に焦点をあて分析していく。

このように、第4章、第5章は逸脱の留意、調整の段階に焦点をあて、CSの不一致応答の管理プロセス、そして、生成プロセスの詳細を分析していくが、それぞれの章で取りあげられるデータの特徴に応じて、第4章では「親疎関係」の要因、第5章では顕在化している「上下関係」の要因からの関与に注目し、考察を深める。具体的には、「逸脱の留意」の段階では、これらの要因によってどのような逸脱が留意されたか、または留意されなかったか(e.g. CSが片方の逸脱のみを留意し、または、双方の逸脱も留意していない)、そして、逸脱が留意された後の調整計画、調整実施の段階において、これらの要因が逸脱の調整、特に調整の優先順位の選択にどのように関与しているか、といった側面を取りあげて場面ごとの特徴を明らかにする。

第6章では、まず、CSの不一致応答に関与する社会的、場面的要因、留意された逸脱の詳細、逸脱に対するCSの調整のバリエーションについて、第4章と第5章の分析を通して明らかになった特徴を整理し、二つの場面の異同点を明らかにする。そして、以上の考察結果に基づいて、言語管理プロセス、生成プロセスのモデルを参考にし、CSの不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのメカニズムを説明するモデルを提案する。

第4章 社会的距離、力関係が潜在化する場面でのCSの不一致応答

本章では、友人関係(中国人留学生－日本人の同級生／日本人学生チューター／日本人の友人、など)、同輩関係(中国人社員－日本人社員／アルバイト仲間、など)にあるCSとJSの間で不一致が生じた場面を取りあげ、CSがその場で行った不一致応答を分析する。

分析では、まず、言語管理プロセス(Neustupný 1985a, 1994 ; Jernudd & Neustupný 1987 ほか)、に基づき、「逸脱の留意」の概念を援用して、CSが応答時に留意した対象を抽出する。そして、CSが不一致応答において2種類の逸脱－命題の逸脱、自己表示の逸脱を留意する可能性を念頭に置き、不一致応答の事例ごとにCSが留意した逸脱、インプットした社会的、場面的要因、留意の段階における諸要因からの関与を明らかにする。次に、調整の段階に焦点をあて、留意された逸脱に対するCSの調整行動の実態を明らかにし、調整段階、特に双方の逸脱が留意された後の調整の優先順位における諸要因からの関与を考察する。また、逸脱が留意ずに言語管理が行われなかった不一致応答に関して、生成プロセス(ネウス トプニー1999、高 2006)のモデルに基づき、CSが「インプット」の段階で選択した要因に焦点をあて分析する。以上の分析結果により、CSの不一致応答が談話上に言語化されるまでの言語管理、生成のプロセスの諸段階において、どのような社会的、場面的要因が、どのように関与したか(あるいは関与しなかったか)を明らかにし、上下関係が潜在化している場面でのCSの不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスの傾向を探る。

4.1 CSの不一致応答における逸脱の留意、調整段階の全体的傾向

まず、上下関係が潜在化している場面でのCSの不一致応答(222件)における逸脱の留意、調整の全体的傾向を確認し、その集計結果を下記の表1、表2で示す。

表1：上下関係が潜在化する場面での不一致応答における逸脱の留意、調整の集計結果
(単位：件)

管理有無	留意された逸脱	調整された逸脱	事例件数	合計
管理あり	命題の逸脱のみ	命題の逸脱	81	179(80.1%) ¹
	自己表示の逸脱のみ	自己表示の逸脱	29	
	命題・自己表示	命題の逸脱	1	
		自己表示の逸脱	25	
		双方の逸脱	43	
管理なし	逸脱の留意なし	なし (生成プロセス)	39	39(19.7%)
その他	4(リコール・インタビューでの報告：4)			4(0.02%)

¹ () の中の割合は全事例 (222 件) に対するそれぞれの該当事例数の割合を表す。

表 2：言語管理が行われた不一致応答における逸脱の留意、調整の集計結果(単位：件)

留意された逸脱	調整された逸脱	事例件数
命題の逸脱のみ	命題の逸脱	81(45.2%) ²
自己表示の逸脱のみ	自己表示の逸脱	29(16.3%)
命題・自己表示	命題の逸脱	1(0.005%)
	自己表示の逸脱	25(13.9%)
	双方の逸脱	43(24.1%)
合計		179(100%)

表 1 では事例全体の集計結果を示し、表 2 では逸脱が留意され言語管理が行われた事例の集計結果を取り出して示している。表 1 の左端より、「管理有無」の列では、不一致応答において言語管理が行われたか否かによって、「管理あり」と「管理なし」に分けて集計結果を示しているが、「その他」には、リコール・インタビューから得られた、不一致応答に関するエピソード的事例の数が表示してある。「留意された逸脱」の列では、逸脱の留意のバリエーション別に集計結果を表示している。具体的に、言語管理が行われた「管理あり」の事例に対して、CS が片方の逸脱のみ、または双方の逸脱を同時に留意した事例をそれぞれ「命題の逸脱のみ」、「自己表示の逸脱のみ」、「命題・自己表示」と表記して集計結果を示している(「管理なし」の事例に対して、「逸脱の留意なし」と表示する)。「調整された逸脱」の列では、留意された逸脱に対する調整のバリエーション別に集計結果を表示している。まず、CS が片方の逸脱のみを留意し調整を行った事例は逸脱別に集計結果を示している。そして、CS が双方の逸脱を留意した事例に対して、逸脱の調整の優先順位別に、「命題の逸脱」(命題の逸脱の調整を優先させた事例)、「自己表示の逸脱」(自己表示の逸脱の調整を優先させた事例)、「双方の逸脱」(双方の逸脱をともに調整した事例)と分けて集計結果を表示している。事例は全部で 222 件あり、そのうちの 186 件は会話資料で収集された事例で(擬似自然会話場面：33 件、自然会話場面：153 件)、残りの 36 件はインターアクション・インタビューで報告された事例(リコール・インタビューから得られた 4 件を含む)である。

全体の傾向として、まず、表 1 に注目し「管理あり」、「管理なし」に属する不一致応答の事例数をみると、「管理あり」の不一致応答が全体の 8 割を占め、「管理なし」の事例数の 4 倍以上を上回り(「管理あり」：80.1%、「管理なし」：19.7%)、逸脱が留意され言語管理が行われた事例のほうは多数であることがわかった。そして、表 2 に注目し「管理あり」の事例を留意のバリエーション別に分けて、それぞれの事例数を比較すると、CS が命題の逸脱のみを留意した事例は 81 件で半数近く(約 45%)を占め、双方の逸脱をともに留意した事例はそれに次いで多く(69 件、約 39%)、自己表示の逸脱のみを留意した事例は最も少な

² () の中の割合は「管理あり」の全事例(179 件)に対するそれぞれの該当事例数の割合を表す。

く 29 件(約 16%)であるとわかった。また、留意が生じた事例を逸脱別に集計すると、命題の逸脱に対する留意が生じた事例は 150 件(「命題のみ」 + 「命題・自己」)で、自己表示の逸脱は 98 件(「自己表示のみ」 + 「命題・自己」)となる。これによって、不適切な不一致の表示方法に比べると、CS が先行発話の内容のほうを会話進行の妨げとより多く認知したことが示唆されている。そして、双方の逸脱が留意された事例(69 件)での調整の優先順位からみると、CS が双方の逸脱をともに調整した事例は最も多くの 43 件で(約 62%)、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例は 25 件(約 38%)、命題の逸脱の調整を優先させた事例は 1 件のみである。これによって、CS が不一致の表示と対人関係の維持との二つの目的の達成を同時に考慮し、不一致応答を調整していく傾向が最も強いと示唆された。

4.2 CS の不一致応答における逸脱の留意と関与した社会的、場面的要因

本節では、上下関係が潜在化している場面での CS の不一致応答に関わる会話内容(会話資料)とインタビューでの報告内容(インターアクション・インタビュー、リコール・インタビュー資料)、応答時の意識に関する CS の内省報告(FUI、インターアクション・インタビュー、リコール・インタビュー資料)を対象に、CS が留意した逸脱、個々の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の詳細などについて、留意のバリエーション別に分析して明らかにする。なお、リコール・インタビューから得られた事例は、日中接触場面における CS の不一致応答のエピソード的情報を含み、不一致応答に対する習慣化された言語管理の特徴の調査に役立つが、CS が留意した逸脱、行った応答の内容などについて詳しい情報が含まれていないため、具体的な事例の分析の参考資料として用いることにとどめる。

4.2.1 命題の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因

逸脱が留意され言語管理が行われた 179 件の事例のうち、CS が命題の逸脱のみを留意した事例は 81 件である。これらの事例で CS がインプットし、命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因について、下記の表 3 で要因別のインプット回数の集計結果を示す。表 3 の集計結果の単位が「回」であり、つまり、要因別に 1 種類の要因につき、インプットの回数を 1 回と計上し、81 件の事例における要因別のインプット回数を集計した結果である。また、下記の表 4 では、事例別のインプットされた要因の構成を集計した結果を示し、単位が「件」である。1 件の事例では、CS が 1 種類以上の要因をインプットし命題の逸脱を留意したことがあり、この場合、この 1 件の事例における要因別のインプット回数の合計が 1 回以上となる。そのため、表 3 の「要因別のインプット回数」の合計は表 4 の「事例の総件数」を上回ることになる。表 4 で示すように、CS が「実情」をほかの要因とともにインプットした事例は 5 件(「実情、CS のポジティブ・フェイス」4 件、「実情、インターアクション内の期待(目的)」1 件)あるため、81 件の事例であるが、要因別のインプット回数の合計は 86 回となっている。

表 3：命題の逸脱のみが留意された事例に關与した社会的、場面的要因(単位：回)

インプットされた要因		小計
中国語の言語的規範 ³		13(14.1%)
中国の社会文化的規範		2(2.3%)
実情		57(68.4%)
CS の個人規範		1(1.2%)
インターアクション内の期待	目的	1(1.2%)
	誤解	6(5.9%)
CS のポジティブ・フェイス		4(4.6%)
CS のインタレスト		2(2.3%)
合計		86(100%)

表 4：命題の逸脱のみが留意された事例(単位：件)

インプットされた要因		小計
中国語の言語的規範		13(16.7%)
中国の社会文化的規範		2(2.4%)
実情		52(64.1%)
実情、CS のポジティブ・フェイス		4(4.8%)
CS のインタレスト		2(2.4%)
実情、インターアクション内の期待(目的)		1 (1.2%)
インターアクション内の期待(誤解)		6(7.2%)
CS の個人規範		1(1.2%)
合計		81(100%)

これより、要因別のインプット回数の順番に基づき、表 3 の要因が単独で、そしてほかの要因とともに命題の逸脱の留意に關与した事例を例示し、CS が留意した逸脱、逸脱の留意における諸要因からの關与を分析する。

4.2.1.1 単独の社会的、場面的要因が關与した事例

まず、CS が 1 種類のみをインプットし、命題の逸脱のみを留意した事例を分析する。

(1) 実情(52 件)

表 3 で示したように、CS が命題の逸脱のみを留意した事例では、「実情」の要因のイン

³ 紙面の幅による制限のため、各要因の内容を一部略した形で表示している。各要因の定義について、第 3 章の 3.2.2 を参照すること。

プット回数が最も多く、86 回のうちの 7 割近く占めている。81 件の事例のうち、この要因が関与した事例は 57 件(単独で関与した事例：52 件、ほかの要因とともに関与した事例：5 件)であり、全体の 7 割以上占めている。これらの結果から、CS が命題の逸脱のみを留意した事例において、「実情」の要因が最も大きく関与する要因であるとみられた。この要因を内容の側面からみると、CS 自身や中国に関するその真偽が実証可能な事実情報としての「実情」、そして、CS が実体験によって確認が取れた事実情報として捉えている「実情」に分けられる。前者の場合、例えば、第 3 章の例 1 のように、CS が中国の「白玉」のスープの味は甘い味ではなく塩辛い味であると不一致を感じ、命題の逸脱を留意した事例や、例 13 のように、CS が自分は花粉症ではないから春でも大丈夫であると不一致を感じ、命題の逸脱を留意した事例である⁴。後者の場合は、例えば、第 3 章の例 15 のように、CS がインターネットから調べてきた情報に基づいて、横浜が日本で一番大きな港であると不一致を感じ、命題の逸脱を留意した事例や、例 16 のように、CS が中華街の肉まんを食べた経験から、JS が言うほど美味しくなくて普通だったと不一致を感じ、命題の逸脱を留意した事例である。「実情」の要因が単独で関与した 52 件の事例の中、前者に属する事例は 33 件で、後者の事例は 19 件である。「実情」の情報リソースの側面において異なるものの、CS は JS の先行発話から不一致を感じた後、Grice(1975:47)の「質の原則」(maxim of quality：虚偽であると思っていることをいわないこと)に従い、事実情報に合わない先行発話を会話の妨げであると認知し、命題の逸脱と留意した側面において共通していると考えられる。

(2) 中国語の言語的規範(13 件)

この要因がインプットされた 13 件の事例は CS7 の 1 件を除き、CS18 が中国語の宿題の添削について、JS20 と話し合うインターアクションでの事例に集中している。これらの事例において、CS18 は相手が用いた中国語の言語表現⁵から不一致を感じ、中国語の言語的規範からの違反であると認知して命題の逸脱を留意した。例えば、「他的性格很聪明(彼の性格が賢い)」と書かれた中国語の文において、CS18 は「賢いというのは人の性格ではない」と不一致を感じたほか、「このような言い方は中国語にはない。明らかに間違っている」と FUI で報告したように、「中国語の言語的規範」の要因をインプットし、命題の逸脱と留意した⁶。CS7 の事例⁷では、肉まんの中国語の発音をめぐって、CS7 は相手の発音が正しくないと不一致を感じた後、「JS7 の発音が正しくないので、訂正したくなった」と考え、先行発話において命題の逸脱を留意した。接触場面で参照される基底規範のリソ

⁴ 第 3 章の例 12 で提示した自宅と図書館はどちらのほうが快適であるかをめぐる不一致の事例も参照できる。

⁵ 不一致の対象となったのは、JS の発話ではなく、JS が書いた中国語の宿題の内容である。Maynard(1985:3) が指摘したように、あらゆる先立つ言語的、または非言語的発話行動のタイプ(act type)が対立するならば、不一致を引き起こす引き金として機能することができる。本研究では、この指摘を参考にし、不一致を生じさせた中国語の宿題の内容も「先行発話」と扱い、分析の対象とした。

⁶ 紙面による幅の制限のため、第 4 章で挙げる会話での不一致応答の事例について、その原文を本文中ではなく、巻末の資料編の「不一致応答の会話例」の節で提示することにした。ここの CS18 の 12 件の事例の原文は会話例(ペア 19)の例 5～10、例 12～17 を参照すること。

⁷ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 6 の例 1 を参照すること。

ースについて、Neustupný(1985b)、村岡(2011)は、基底規範が使用言語の母語話者の規範に定められることは多いが、参加者間の交渉によって決められることも少なくないと指摘している。この13件の事例は主にCS18の事例に集中し、CSの全体的傾向として判定しきれないが、話題が中国語の言語表現に関する内容となり、CSがJSの先行発話から不一致を感じる場合、その先行発話が命題の逸脱と留意される可能性は高まると考えられる。つまり、このような場合は中国語の言語的規範が基底規範として機能しているため、CSがこれらの規範をインプットした上で、言語ホスト(ファン 1999)としてのカテゴリ化を意識して、JSの先行発話において命題の逸脱を留意する傾向があると予想される。

(3) 中国の社会文化的規範(2件)

この要因がインプットされた事例はCS13の2件の事例となる。「中国では春巻はおかずではない」とのJS15の先行発話において、CS13は不一致を感じ、「中国では春巻が朝食の時は主食のような感じだが、それ以外の時はおかずだから、JS15の発話を聞いてびっくりした」と命題の逸脱を留意した⁸。このように、中国の社会文化に関する内容が話題となるため、CSはJSの先行発話に関連する中国の社会文化的規範からの違反であると認知し、命題の逸脱と留意した。

(4) インターアクション内の期待(誤解) (6件)

この要因がインプットされた事例⁹は6件で、CS3、CS15の3件ずつとなる。例えば、第3章の例6では、JS17が日本語能力試験日の日にちについてのCS15の発話内容を、CS15も試験に参加したと間違えて理解したため、CS15は先行発話を命題の逸脱と留意した。また、「通学は大変だ」との発話内容を、JS17が「数学は大変だ」と聞き間違えて発話したため、CS15は先行発話を命題の逸脱と留意した。これらの事例が示すように、CSはJSの先行発話において、自分の発話内容が相手に理解しまちがえられ、発話意図が誤解されたと認知したため、不一致を感じたと同時に、先行発話を命題の逸脱と留意した。

(5) CSのインタレスト (2件)

この要因がインプットされた事例はCS11の2件の事例となる。午後5時から夜10時までの時間帯にアルバイトに出てほしいとのJS13の先行発話に対して、CS11¹⁰はその5時間が加算されたら月の標準時間数¹¹を超えると不一致を感じた。そして、「毎月の上限を超えるとアルバイトができなくなる」と考え、CS11はJS13の先行発話が自分のインタレスト(e.g. 金銭的コストがかかる)を侵害する恐れがあると予想し、命題の逸脱と留意した。

(6) CSの個人規範 (1件)

CSが個人的な好みや性格によって形成された規範をインプットした事例は1件のみで

⁸ 会話の原文は資料編(会話例)のペア14の例10を参照すること。

⁹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア2の例4～5、ペア16の例1、例4～5を参照すること。

¹⁰ 会話の原文は資料編(会話例)のペア12の例6を参照すること。

¹¹ ここでは、CS11のアルバイト先で設けられた、留学生のアルバイト時間数は1週28時間以内、1か月100時間以内の上限を指す。

ある。この事例では、すでに第3章の3.2.2¹²で説明したように、CS13はJS15の先行発話から不一致(千葉は寒いところではなく暑いところだ)を感じ、そして、先行発話が「夏の暑さを基準にしてある地方の気候の特徴を捉える」との個人規範からの違反であると認知し、命題の逸脱と留意した。

4.2.1.2 複数の社会的、場面的要因が関与した事例

これより、CSが1種類以上の要因をインプットし、命題の逸脱のみを留意した事例を分析する。

(1) 実情、インターアクション内の期待(目的) (1件)

CSが「実情」、「インターアクション内の期待(目的)」の要因をともにインプットし、JSの先行発話において命題の逸脱を留意した事例は1件である。この事例¹³において、CS20はチューターのJSにゼミ発表用の原稿を添削してもらい、書いた文の主語が曖昧で分かりづらいとのJSの先行発話に対して、「前の段落と合わせてみれば意味が分かる。曖昧ではない」と不一致を感じた。応答時の意識について、CS20が「原稿を直してもらえないと発表はだめになるかもしれないので、添削はとても重要だ」、「JSが時間を作って直してくれるので、丁寧な態度が必要だ」、「丁寧な態度は必要だが、自分の考えを明確に伝えて直してもらうことも大切だ。反駁すべき時は反駁する必要がある」とFUIで報告した。これらの報告内容により、CS20はJSの先行発話(書いた文に対する理解)が実情(文の主語が明確である)に合わなく、インターアクションの参加目的(JSに自分の考えを正確に理解し、原稿を添削してもらうこと)の達成を脅かす恐れがあると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

(2) 実情、CSのポジティブ・フェイス(4件)

CSが「実情」、「CSのポジティブ・フェイス」の要因をともにインプットし、JSの先行発話において命題の逸脱を留意した事例は4件である。例えば、「中国では猫を食べる習慣がある」とのJS10の先行発話において、CS10¹⁴は「そのような習慣は聞いたこともない」と不一致を感じたほか、「中国人が猫を食べると思われたなんて、それを聞いて非常に驚いた」、「中国人のイメージを守り、猫を食べることはないと明確に教えなければならないと思ってそのまま話した」と報告したように、命題の逸脱を留意した。また、CS10¹⁵の故郷の地名を間違えたJS10の先行発話において、CS10は不一致を感じたほか、「故郷のことはよく話しているし、JS10がチューターとして1年近くも付き合ってきたのに、まだ覚えていないようで少しがっかりした」と、自分のポジティブ・フェイスが侵害され

¹² 会話の原文は資料編(会話例)のペア14の例17を参照すること。

¹³ 紙面の幅による制限のため、第4章で挙げるインターアクション・インタビュー資料から得られた不一致応答の事例について、関連する報告内容の日本語の訳文を本文中ではなく、巻末の資料編(第4章で用いられたインターアクション・インタビュー資料)の節で提示することにした。このCS20の事例は例1を参照すること。

¹⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア9の例14を参照すること。

¹⁵ 会話の原文は資料編(会話例)のペア9の例12を参照すること。

た(故郷の地名を覚えてもらえなかった)と考え、命題の逸脱を留意した。4件の事例がCS 10の事例に集中し、CSの全体的傾向として判定しきれないが、Grice(1975)の「質的原則」、人間が自分のフェイスを満たす欲求(Brown&Levinson 1987)の普遍性から考えると、CSがこの二つの要因をともにインプットする場合、JSの先行発話において命題の逸脱を留意する可能性が高まると予想される。

4.2.2 自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因

逸脱が留意され言語管理が行われた178件の事例のうち、CSが自己表示の逸脱のみを留意した事例は29件である。これらの事例でCSがインプットし、自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因について、下記の表5では要因別のインプット回数の集計結果を示している。そして、下記の表6では、事例別のインプットされた要因の構成を集計した結果を示す。表6で示すように、CSが「インターアクション内の期待(目的)」、「インターアクション内の期待(言語ゲスト)」の要因をともにインプットした事例は2件あるため、29件の事例であるが、要因のインプット回数の合計は31回となっている。

表5：自己表示の逸脱のみが留意された事例に関与した社会的、場面的要因(単位：回)

インプットされた要因		小計
場面(ゼミ)		3(9.6%)
インターアクション内の期待	目的	2(6.4%)
	言語ゲスト	4(12.8%)
JSのポジティブ・フェイス		19(61.6%)
JSのネガティブ・フェイス		1(3.2%)
話題に関する情報の保有度(低い)		2(6.4%)
合計		31(100%)

表6：命題の逸脱のみが留意された事例(単位：件)

インプットされた要因	小計
場面(ゼミ)	3(10.2%)
インターアクション内の期待(目的)、(言語ゲスト)	2(6.8%)
インターアクション内の期待(言語ゲスト)	2(6.8%)
JSのポジティブ・フェイス	19(66.0%)
JSのネガティブ・フェイス	1(3.4%)
情報の保有度(低い)	2(6.8%)
合計	29(100%)

命題の逸脱のみが留意された事例が 81 件あることに対し、自己表示の逸脱のみが留意された事例が 29 件にすぎない。このことから、上下関係の潜在化している場面において、CS が友人や同輩の JS に対して不一致応答を行う際に、不一致の表示方法に比べると、不一致を生じさせた JS の先行発話を留意する頻度がより高いと示唆された。その背景には、Schiffin(1984)、Tannen(1984)、Locher(2004)、Sifianou(2012)などの先行研究が指摘した、友人同士間の不一致の表示が必ずしもコンフリクトやインポライトネスをもたらすとは限らず、親密さや社交性を示す手段となることができ、会話への参加意欲を表しフェイス促進の機能を果たせることがあると考える。つまり、JS との力関係の配分の特徴(上下関係の潜在化)や親疎関係(親しい)によって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、CS が自己表示の逸脱を留意する頻度が低くなると推察できる。

表 5 の要因をみると、全部で 6 種類となり、不適切な不一致の表示方法に対する留意に関与した点において、表 3 の要因と異なる性格を持っている。なお、表 3 と共通する要因には、「インターアクション内の期待(目的)」の要因がある。CS がこの要因をインプットし、不適切な不一致の表示方法がインターアクションの参加目的の達成を脅かすと予想し、自己表示の逸脱を留意した点では、表 3 で挙げられたこの要因と異なっている。

これより、要因別のインプット回数の順番に基づき、表 5 の要因が単独に、そしてほかの要因とともに自己表示の逸脱の留意に関与した事例を例示し、CS が留意した逸脱、逸脱の留意における諸要因からの関与を分析する。

4.2.2.1 単独の社会的、場面的要因が関与した事例

(1) JS のポジティブ・フェイス(19 件)

29 件の事例では、「JS のポジティブ・フェイス」の要因が関与した事例は 19 件で、全事例の 3 分の 2 を占めている。命題の逸脱に比べて自己表示の逸脱が留意される頻度は低いが、ポライトネスの視点に基づいて不一致の表示を扱った先行研究(see, e.g., Leech 1983, Brown&Levinson 1987, etc)が指摘したように、CS が不一致応答を行う際に、不適切な不一致の表示方法に伴うフェイス侵害の軽減を最も多く考慮し、自己表示の逸脱を留意する傾向が強いことがわかった。

例えば、第 3 章の例 18 では、バーゲンでの買い物の価値をめぐって不一致が生じたが、CS12 は「JS14 が買いたいなら別に反対するわけでもないが、自分ならばバーゲンで買い物をしないほうだ」と考え、先行発話を命題の逸脱と留意しなかった。応答時に、「JS14 は買い物を楽しみにしているようなので、自分の考えを直接的に提示するのはよくないと思った」と FUI で報告したように、CS12 は明確な不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱と留意した。もう 1 件の事例¹⁶において、中国語の語学研修をまた計画しているとの JS20 の先行発話に

¹⁶ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 22、例 23 を参照すること。

対して、CS18は「去年とまったく同じな研修コースだから、行く必要はない」、「場所を変えたほうがいいと思った」と不一致を感じた。なお、JS20の計画に対する感想として、「去年の研修が楽しかったからまた行きたい気持ちがよく分かる。研修は確かに語学力の向上に役立つ」と報告したため、CS18が先行発話を命題の逸脱と留意しなかった(相手の気持ちが理解できる)と確認できる。応答時の感想として、CS18がFUIで「相手がまた研修にいくと決めたから、行かないほうがいいよと言うと失礼になる」、「どうも行く気満々のようで、もう自分の考えを提示しないほうがいいと思った」とFUIで報告した。これらの報告内容によって、CS18が不一致の表示自体が相手のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱と留意したと確認できる。

(2) 場面(ゼミ¹⁷)(3件)

この要因がインプットされた3件の事例はCS24の事例に集中している。これらの事例において、ゼミに参加しているCS24¹⁸が発表者の観点において不一致を感じたが、「相手の考えを一つの観点として認める」とも考え、先行発話を命題の逸脱と留意しなかった。そして、応答時の感想として、CS24は「ゼミの場は友達としゃべる場合と違って、言い方に気を付ける必要がある」、「直接的に正しくないと言うのではなく、自分がそう考えているだけで、正しいかどうかは分からないと、相手に確認する形で提示した」と報告した。このように、CS24が不一致応答を行う際に、「ゼミの場」という場面的特徴を配慮し、その場での明確な不一致の表示が不適切だと判断し、自己表示の逸脱と留意した。金(2013)はゼミでのCSが「不同意コミュニケーション」を行う際に、不一致の表示に伴って「表現形式への不安」と「理解主体に与える印象への不安」を抱える場合はあると述べている。また、スペンサー＝オーディー(2004)、Locher(2004)は、インターアクションの参加者の数、インターアクションに関する慣習的規範も不一致の表示に関与する要因であると指摘している。これらの指摘によって、不一致応答の際に、CS24がゼミの場面を、発言の形式や内容などが制限される場面であると認識しているため、明確な不一致の表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。また、CS24がゼミでの意見交換に関して、リコール・インタビューでは、「ゼミの時に通常は反対意見の表示を控えている。不一致を示す時も、直接的に言うのではなく、相手の発言に関連する質問を聞いたりして、質問の数を二つぐらいまでに抑える。“〇〇のじゃないかと思いますが、実は〇〇”のような不確定の形で示したりしている」と報告した。このように、CSの全体的傾向としてまとめられないが、「ゼミ」の要因が関与したこの3件の事例では、ゼミでの不一致応答に対するCS24の習慣化された言語管理のパターンの一端を示した。

(3) インターアクション内の期待(言語ゲスト)(2件)

この要因が単独でインプットされた事例は2件で、CS17とCS31の1件ずつとなる。CS17

¹⁷ 大学で行われる「ゼミナール」のことを意味する。

¹⁸ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第4章の資料)の例2を参照すること。

の事例¹⁹では、会話の話題になっている人が「日本人観光客」であるとの JS19 の先行発話に対して、CS17 は「その人は先輩の知り合いで、本人と会ったことはない。先輩が通訳の時に知り合った人なので、観光客ではなく、仕事のために中国に来た人だと思っている」と不一致を感じた。なお、CS17 が FUI で「自分がそう思うだけで、先輩に確認したわけではない。その人が観光客でもあるかもしれない」とも報告したため、先行発話を命題の逸脱と留意しなかったと確認できる。応答時に、「先輩がその人と知り合いになった背景から説明しようと思ったが、日本語が複雑になるので、詳しい説明を省きたくなり、“かもしれない”とごまかしてからほかの話題に切り替えた」と FUI で報告したように、言語ゲストとしてのカテゴリ化の要因が前景化するため、CS17 は不一致の表示に必要となる日本語能力の不足を考慮し自己表示の逸脱を留意した。CS31 の事例²⁰では、広告内容の日本語の表現をめぐって、CS31 が JS と異なる考えを持ち、「自分が選んだ表現は通じないことはない」と不一致を感じた。なお、応答時に、CS31 は「日本語の表現について、決定権はやはり日本人の JS 側にある」、「デザインのことなら自分の考えを言うが、日本語の表現のことなら JS に言われた通りに直せばいい」などと報告したように、言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識し、不一致の表示自体を不適切だと判断して自己表示の逸脱を留意した。

(4) 話題に関する情報の保有度(2 件)

この要因が単独でインプットされた事例は 2 件で、CS2²¹と CS28²²の 1 件ずつとなる。第 3 章の例 9 が示したように、CS は話題に関する情報を十分に保有していないことを考慮し、Grice(1975:47)の「質の原則 maxim of quality」(根拠のないことを言ってはならない)に従い、明確な不一致の表示を不適切だと判断して自己表示の逸脱を留意した。

(5) JS のネガティブ・フェイス(1 件)

この要因がインプットされた事例²³では、CS21 は新幹線の切符を無くした JS に対し、途中で乗ったバスのバス会社に問い合わせることを提案したが、問い合わせても意味がないと JS に言われた。その後、CS21 はやはり問い合わせが必要であると考え、不一致を感じたが、「本人が聞こうとしないなら本人の考えを尊重して、そのまま聞かないことにした」と報告したように、再び提案すること(不一致の表示)が JS のネガティブ・フェイスを侵害する(問い合わせを促す)恐れがあると予想し、自己表示の逸脱と留意した。

4.2.2.2 複数の社会的、場面的要因が関与した事例

「インターアクション内の期待(目的)」、「インターアクション内の期待(言語ゲスト)」の要因がともにインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は CS8 の 2 件²⁴とな

¹⁹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 18 の例 1 を参照すること。

²⁰ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の資料)の例 3 を参照すること。

²¹ 会話資料の資料編(会話例)のペア 1 の例 1 を参照すること。

²² インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の資料)の例 4 を参照すること。

²³ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の資料)の例 5 を参照すること。

²⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 7 の例 1 を参照すること。

る。CS8がJS8に発表のレジメを添削してもらうインターアクションでは、JS8が研究内容の文章なので文末では「と思う」を使わないほうが良いと発話した。この先行発話に対して、CS8は「“と思う”と削除すると断言しすぎる感じがするので、ふさわしくないと思っていた」、「“と思う”を使ってもいい」と考え、不一致を感じた。なお、先行発話に対する感想として、CS8がFUIで「日本人のJS8に使わないほうが良いと言われた後、もしかして自分の使い方が正しくなく、JS8が言う通りに直したほうが良いかもしれないと思った」とも報告したため、先行発話が命題の逸脱と留意されなかった(JS8の添削意見の妥当性を認める)と確認できる。応答時に、「日本語の表現、レジメの内容を添削し、用例の妥当性を判断してもらうことが目的なので、とりあえず聞いておいて、ほかの日本人にも“と思う”の使い方を確認してから、どのような表現が適切であるかを決めようと考え、自分の意見を言わないことにした」、「日本語のことについて、日本人である相手の考えを否定できる自信がない。すぐに反対の意見を言わないほうが良いと思った」と報告したように、CS8がインターアクションの参加目的(レジメの添削)の達成を考慮し、反対意見を示す自信がないと言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識して、不一致の表示自体を不適切だと判断し自己表示の逸脱と留意した。

加藤(2010:184, 187)は、接触場面における日本語非母語話者に、コミュニケーションの成立だけではなく、正しい日本語の言語的規範に従うべきだという接触場面規範が常に顕在化している特徴があると指摘した。「言語ゲスト」の要因がインプットされた4件(単独で、ほかの要因とともにインプットされた事例が2件ずつ)の事例においても、このような特徴がみられ、すなわち、CSが不一致の表示に必要な日本語能力の不足によって、言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識し、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意した。

4.2.3 命題の逸脱、自己表示の逸脱の双方が留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因

逸脱が留意され言語管理が行われた179件の事例のうち、CSが双方の逸脱をともに留意した事例は69件である。これらの事例でCSがインプットし、逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の構成、要因別のインプット回数の集計結果を命題の逸脱、自己表示の逸脱の二つに分けて下記の表7、表8で示す。

表7：双方の逸脱が留意された事例に関与した社会的、場面的要因
(命題の逸脱、単位：回)

双方の逸脱の留意に関与した要因(命題の逸脱)	小計
中国語の言語的規範	6(8.4%)
中国の社会文化的規範	6(8.4%)
日本の社会文化的規範	1(1.4%)

双方の逸脱の留意に関与した要因(命題の逸脱)		小計
CS の接触規範		2(2.8%)
実情		43(63.6%)
常識		3(4.2%)
CS の個人規範		1(1.4%)
インターアクション内の期待	目的	1(1.4%)
	会話進行	2(2.8%)
	話題	2(2.8%)
CS のポジティブ・フェイス		1(1.4%)
CS のインタレスト		1(1.4%)
合計		69(100%)

命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因について、CS が双方の逸脱をともに留意した事例と、命題の逸脱のみを留意した事例(表 3 を参照すること)を比較した結果、「中国語の言語的規範」、「中国の社会文化的規範」、「実情」、「CS の個人規範」、「インターアクション内の期待(目的)」、「CS のポジティブ・フェイス」、「CS のインタレスト」の 7 種類の要因が共通し、「実情」のインプット回数が両方の事例においても最も高い(6 割以上)ことが明らかになった。

以上の 7 種類の要因以外に CS がインプットした要因は、「日本の社会文化的規範」、「CS の接触規範」、「常識」、「インターアクションの期待(会話進行／話題)」である。これらの事例では、接触場面で参照される規範の多様性を論じた Neustupný(1985b)、ファン(2010)、加藤(2010)などが指摘しているように、不一致が生じると同時に、不一致の対象となる話題の内容によって、相手言語の社会文化的規範、接触規範、または常識(普遍規範)、個人規範²⁵などの要因が前景化し、CS はこれらの要因をインプットし、JS の先行発話において命題の逸脱を留意した。また、Jones(1990:41)が「一致しない」(not in accord)という事象に、参加者間の意見、目標の対立のほかに、進行中の会話の話題や目的などに対する不一致も含まれている(Szatrowski 2004:3 より引用)と指摘したように、CS が先行発話の内容が会話の進行に対する自分の期待から外れていると認知し、命題の逸脱を留意した。このほか、CS が先行発話で提示された話題に違和感を覚えて不一致を感じ、先行発話を命題の逸脱と留意した事例も観察できた。表 7 の要因による関与の詳細について、CS がこれらの要因を、自己表示の逸脱の留意に関与する要因とともにインプットした事例ごとに分析していく。

下記の表 8 では、双方の逸脱が留意された事例において、CS がインプットし、自己表示の逸脱の留意に関与した要因の構成、要因別のインプット回数の集計結果を示している。なお、CS が 1 種類以上の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意した事例は 8 件(「日

²⁵ 接触規範、普遍規範、個人規範の定義については第 3 章の 3.2.2 を参照すること。

本の社会文化的規範、JS のポジティブ・フェイス」：2 件、「日本の社会文化的規範、インターアクション内の期待(目的)」：1 件、「インターアクション内の期待(目的)、JS のポジティブ・フェイス」：1 件、「インターアクション内の期待(目的、文化ゲスト)」：2 件、「インターアクション内の期待(言語ゲスト)、JS のポジティブ・フェイス」：1 件、「情報の保有度(低い)、媒体(電話)」：1 件)あるため、69 件の事例であるが、要因のインプット回数の合計が 77 回となっている。

表 8：双方の逸脱が留意された事例に関与した社会的、場面的要因
(自己表示の逸脱、単位：回)

双方の逸脱の留意に関与した要因(自己表示の逸脱)		小計
日本の社会文化的規範		8(10.4%)
場面の接触性		4(5.2%)
インターアクション内の期待	目的	4(5.2%)
	言語ゲスト	5(6.5%)
	文化ゲスト	4(5.2%)
JS のポジティブ・フェイス		32(41.2%)
話題に関する情報の保有度(低い)		19(25.0%)
媒体(電話)		1(1.3%)
合計		77(100%)

自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因について、CS が双方の逸脱とともに留意した事例と、自己表示の逸脱のみを留意した事例(表 5 を参照すること)を比較し、「インターアクション内の期待(目的／言語ゲスト)」、「JS のポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の 4 種類の要因が共通し、「JS のポジティブ・フェイス」の要因のインプット回数が両方の事例においても最も高い(自己表示のみ：6 割、双方：4 割)ことが明らかになった。

以上の 4 種類の要因以外に CS がインプットした要因は、「日本の社会文化的規範」、「場面の接触性」、「インターアクション内の期待(文化ゲスト)」、「媒体(電話)」である。第 3 章の 3.3.2 で説明したように、CS が話題内容に関連する日本の社会文化的規範、インターアクション場面の性格や自分の理念によって受け止めた場面の接触性(ファン 2010)、インターアクションで用いられる媒体(Hymes 1972、ネウストプニー 1995a)などの要因をインプットし、不適切な不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意した。

この 69 件の事例では、CS が不一致応答を行う際に、表 7 と表 8 の社会的、場面的要因とともにインプットし、命題の逸脱と自己表示の逸脱の双方を留意したが、インプットした要因の組み合わせの詳細は下記の表 9 で示す。行ごとに命題の逸脱の留意に関与した要

因、列ごとに自己表示の逸脱の留意に関与した要因を並べ、「○」は当該の行と列の要因がペアでインプットされたことを示し、「()」にペアごとの事例数を提示した。

表 9: 双方の逸脱が留意された事例に関与した社会的、場面的要因の組み合わせ(単位: 件)

自己表示 命題	日本の 社会文化 的規範	接触 性	目的 ²⁶	言語 ゲスト	文化 ゲスト	JS の P.フェ イス	保有度 (低い)	媒体 (電話)
中国語の 言語的規範		○(4)		○(1)			○(1)	
中国の社会 文化的規範	○(2)			○(1 ²⁷)	○(1)	○(3)		
日本の社会 文化的規範						○(1)		
CS の 接触規範	○(1 ²⁸)		○(1)		○(1)			
実情	○(4 ²⁹)		○(3 ³⁰)	○(3 ³¹)	○(2)	○(20)	○(16)	
常識						○(1)	○(2 ³²)	○(1)
CS の 個人規範						○(1)		
インターアク ション内の 期待(目的)	○(1)							
インターアク ション内の期 待(会話進行)						○(2)		

²⁶ 紙面の幅による制限のため、「JS のポジティブ・フェイス」と「CS のポジティブ・フェイス」の要因を「JS の P.フェイス」、「CS の P.フェイス」と略し、「インターアクション内の期待(目的)」を「目的」略して表示する。

²⁷ この 1 件の事例では、「JS のポジティブ・フェイス」の要因も同時にインプットされた。

²⁸ この 1 件の事例では、「JS のポジティブ・フェイス」の要因も同時にインプットされた。

²⁹ この 4 件の事例には、「JS のポジティブ・フェイス」の要因も同時にインプットされた事例が 2 件ある。

³⁰ この 3 件の事例には、「インターアクション内の期待(文化ゲスト)」の要因も同時にインプットされた事例が 2 件ある。

³¹ この 3 件の事例には、「JS のポジティブ・フェイス」の要因も同時にインプットされた事例が 1 件ある。

³² この 2 件の事例には、「媒体(電話)」の要因も同時にインプットされた事例が 1 件ある。

自己表示 命題	日本の 社会文化 的規範	接触 性	目的	言語 ゲスト	文化 ゲスト	JS の P.フェ イス	保有度 (低い)	媒体 (電話)
インターアク ション内の 期待(話題)						○(2)		
CS の P.フェイス						○(1)		
CS の インタレスト						○(1)		

表 9 の最も大きな特徴として、命題の逸脱の留意に関与した 12 種類の要因のうち、9 種類の要因が「JS のポジティブ・フェイス」とペアでインプットされていることが挙げられる。また、すでに述べたように、自己表示の逸脱の留意に関与した要因の中、「JS のポジティブ・フェイス」のインプット回数が最も高い(表 8 を参照すること)。このように、CS が双方の逸脱とともに留意した事例において、「JS のポジティブ・フェイス」が最も多くインプットされ、7 割以上(12 種類のうちの 9 種類)の命題の逸脱の留意に関与する要因とペアでインプットされたため、この要因からの関与が大きいと示唆された。これより、命題の逸脱の留意に関与した要因ごとに、双方の逸脱の留意に関与した要因間の関連性に注目しながら、CS が双方の逸脱とともに留意した事例を分析していく。

(1) 中国語の言語的規範(6 件)

この要因が「場面の接触性」、「言語ゲスト」、「情報の保有度(低い)」の要因とともにインプットされた事例は 6 件で、CS3(1 件)と CS18(5 件)の事例となる。まず、CS3 がこの要因と「言語ゲスト」をともにインプットした事例³³では、歌手やクラシック音楽関係の人はミュージシャンではないとの JS3 の先行発話において、CS3 は「ミュージシャンはもともと英語の単語で、中国語の訳語では歌手やピアノの演奏家もその範疇に含まれ、ミュージシャンとも呼べると思っている」、「JS3 の説明は自分のイメージと異なるので驚いた」と不一致を感じ、先行発話が母語の言語的規範からの違反であると認知して命題の逸脱を留意した。応答時に、「日本語では JS3 が言ったように、バンドの人にしか使われていないかもしれない。語源が英語の単語は日本語と中国語において、意味の解釈が異なることはこれまで何回も経験したことがある。言語が違うのでしようがない、もう慣れてきた」、「日本語での意味合いを尊重し、不一致の表示を回避した」と報告したように、CS3 は日本語の言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識し(意味の異なりに慣れてきた、日本語での意味合いを尊重する)、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意した。この

³³ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 2 の例 3 を参照すること。

ように、日本語の言語表現に関する先行発話の内容によって不一致が生じ、その先行発話が命題の逸脱と留意されたため、関連する知識が活性化され、CS が日本語の言語知識の不足を考慮し、自己表示の逸脱も留意することは生じやすいと示唆された。

残りの 5 件の事例は、CS18 が JS20 の中国語の宿題を添削するインターアクションに集中している。「情報の保有度(低い)」の要因もインプットされた事例³⁴ (1 件)では、CS18 が中国語の言語的規範からの違反であると認知し先行発話において命題の逸脱を留意した後、問題とされる中国語の表現に自信がないため、明確な不一致の表示を不適切だと判断して自己表示の逸脱を留意した。また、ほかの 4 件の事例³⁵では、応答時に「JS20 の訳が正しくないなので自分の考えを教えたが、日本語を使うと何となく断言するのがよくないという雰囲気を感じるので、いつも言い切らないように気を付けている」、「やはり“ちょっと”のような限定表現をつけないと気がすまない感じだった」と報告したように、CS18 は場面の接触性(断言がよくないという雰囲気)を受け止め、明確な不一致の表示を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

(2) 中国の社会文化的規範(6 件)

この要因と一緒にインプットされたのは「日本の社会文化的規範」、「文化ゲスト」、「言語ゲスト」、「JS のポジティブ・フェイス」の四つの要因である。まず、社会文化的規範に関する先行発話の内容が命題の逸脱と留意されたため、CS が関連する日本の社会文化的規範を想起し、またはその規範についての知識の不足を考慮して、自己表示の逸脱を留意した事例は 3 件ある。前者の事例³⁶では、例えば、美術館の見学に行ってきた CS14 が、美術への関心は中国人より日本人のほうがずいぶん高いと感想を述べ、JS16 に「本当に↑」と疑われた。先行発話において、CS14 は「中国では朝からもう開館待ちの行列ができていることを見たことがないので、やはり日本人のほうは関心が高い」と不一致を感じ、中国の社会文化的規範(e.g. 美術館の前で行列ができることはまれである)をインプットして命題の逸脱を留意した。応答時に、「中国人の私からみればやはり日本人のほうは美術に高い関心を持っていると思うが、日本人にとっては普通の光景で、もう見慣れているからそういう自覚を持っていないかもしれない」、「自分が見た光景を事例として提示することにとどめたほうがいいと思った」と FUI で報告したように、CS14 は日本の社会文化的規範(e.g. 美術館の前で朝から行列があることはごく普通で、日本人は美術への関心が高いことの証明ではない)を配慮し、明確な不一致の表示を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。後者の事例³⁷は、すでに 3.3.2 で提示したように、CS14 は JS16 の先行発話において命題の逸脱(ホテルの形から果物を連想しがたい)を留意したほか、関連する社会文化知識の不足(「日本人は果物を連想しやすいかも、このへんのことは詳しくない」)を考慮し、不一致の表示自体を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

³⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 18 を参照すること。

³⁵ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 3~4、例 6、例 11 を参照すること。

³⁶ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 15 の例 2 を参照すること。

³⁷ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 15 の例 1 を参照すること。

CS が「中国の社会文化的規範」と「JS のポジティブ・フェイス」、または「中国の社会文化的規範」と「JS のポジティブ・フェイス」、「言語ゲスト」をともにインプットし、双方の逸脱を留意した事例はそれぞれ 2 件と 1 件ある。前者の事例は、第 3 章の例 7 で提示したように、CS17 が JS19 の先行発話において命題の逸脱(「中国でも遠い地方の名物をスーパーなどで買えるからそのお菓子は北海道以外のところでも買えるはず」)を留意したほか、不一致の表示に伴う相手のフェイスへの侵害(「相手の話を信用しないというマイナスなイメージを避けるために自分の考えを述べなかった」)を考慮し、不一致の表示自体を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。「JS のポジティブ・フェイス」と「言語ゲスト」がともに自己表示の逸脱の留意に関与した事例³⁸では、CS5 が自転車の無断駐輪で罰金されたことの理由について JS5 と話し合い、JS5 は日本の国土が狭く、特に昔からの狭い道もそのまま使われているからであると説明した。この先行発話において、CS5 が「中国でも狭い道があるが、道の幅と関係なく、駐輪場以外の場所にとめても罰金にとられることはない」、「相手が挙げた情報は理由になれない、やはり納得できない」と不一致を感じ、中国の社会文化的規範 (e.g. 道が狭くても罰金をとらない) からの違反であると認知し、命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS5 が真剣そうに理由を述べているので、引き続き否定的意見を提示すると、会話が継続できなくなってしまう」、「相手の理由に反駁するための日本語がうまくまとまらなかった」と FUI で報告したように、CS5 は相手のポジティブ・フェイス、日本語の言語ゲストの要因をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

(3) 日本の社会文化的規範(1 件)

この要因が「JS のポジティブ・フェイス」³⁹とともにインプットされた事例は 1 件あり、CS23 の事例となる。第 3 章の 3.3.2 ですでに提示されたように、CS23 は「日本の社会文化的規範」(食事代は割り勘と決められた以上、自分の分をちゃんと支払うべきだ)をインプットし、先行発話において命題の逸脱を留意した。そして、応答時に「相手の気持ちも考慮した。あまりにもストレートに言うとはよくないから」と明確な不一致の表示に伴うフェイス侵害を考慮し、自己表示の逸脱も留意した。

(4) CS の接触規範(2 件)

この要因が「日本の社会文化的規範」、「インターアクション内の期待(目的／文化ゲスト)」の要因とともにインプットされた事例は 2 件で、CS3 と CS5 の 1 件ずつとなる。CS の接触場面の経験によって形成された接触規範が命題の逸脱の留意に関与し、CS が関連する日本の社会文化的規範を想起し、または関連する規範の知識の不足を考慮したため、自己表

³⁸ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 4 の例 1(7～19 行目)を参照すること。

³⁹ この事例は、インターアクション相手が中国語の母語話者であるが、CS23 が日本語を用いて不一致応答を行ったため、一種の接触場面(第三者言語接触場面、ファン 2006:129)になると考えられ分析の対象に入れた。また、要因として「JS のポジティブ・フェイス」の要因を援用した。インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の資料)の例 6 を参照すること。なお、FUI で確認できなかったが、ここでのコード・スイッチング(日本語で不一致を示すこと)も、フェイス侵害の軽減に機能したと考えられる。

示の逸脱も留意した。CS3の事例⁴⁰では、ホームビジットには折り紙など、子供と一緒に遊べる道具を持って行けばいいとのJS3の先行発話において、CS3が「自分の印象では、箱入りのお菓子を持っていくことが日本の礼儀なので、折紙だけでは失礼かもしれない」と不一致を感じ、接触規範(e.g. ホームビジットの時は箱入りのお菓子を持っていくことが礼儀である)からの違反であると認知し、命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS3の話を聞いて折り紙などのおもちゃ類のものでもいいとわかったが、やはり失礼になるかもしれないと思っている。ここではJS3にアドバイスを求めることが目的なので、直接的に自分の考えを提示する必要はないと思っていた」とFUIで報告したように、CS3は関連する日本の社会文化的規範(e.g. 折り紙でも失礼にならない)、インターアクションの目的の達成(アドバイスを求める)などの要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意した。

CS5⁴¹の事例では、手伝ってくれた日本人の友人から、中国で困っている日本人を見かけたら自分のように手伝ってあげてほしいと頼まれ、感心したとCS5が話した後、JS5にそのようなセリフは自分を含めて、普通の日本人なら言えないものだと言われた。先行発話において、CS5は「恥ずかしくて言えないと聞いてびっくりした」、「日本に来てから日本人は皆が親切な人だと感じている。このようなセリフはだれでも普通に言えるのではないかと思う」と不一致を感じ、接触規範(e.g. 日本人は皆が親切なので、このようなセリフを言うのは別に恥ずかしいことではない)からの違反であると認知し、命題の逸脱を留意した。応答時に、「最初は理解できなかったが、JS5が言ったように、日本人はやはり恥ずかしがり屋の性格だから言えないかもしれないと考え直した」、「その友人はむしろ特別な日本人で、JS5が言ったのはおそらく日本人の普遍的な性格かもしれない。詳しく分からないが、やはりJS5が言ったことのほうはより客観的で、信用できると思うので、意見の提示を取りやめた」とFUIで報告したように、CS5が関連する日本の社会文化的規範(e.g. 普通の日本人ならそのようなセリフが言えない)の知識の不足(「詳しく分からない。JS5を信じる」)を考慮し、不一致の表示自体を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

(5) 実情(43件)

CSが双方の逸脱を留意した事例のうち、この要因が命題の逸脱の留意に最も多く関与し、一緒にインプットされた要因は「日本の社会文化的規範」、「インターアクション内の期待(目的／言語／文化ゲスト)」、「JSのポジティブ・フェイス」、「情報の保有度(低い)」である。これらの要因の中、「JSのポジティブ・フェイス」の要因が最も多くインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与している(20件：単独に関与した事例17件、ほかの要因とともに関与した事例3件)。例えば、第3章の例15では、CS14はJSのポジティブ・フェイス(「相手のイメージを尊重し、間違っていると言いたくない」と、日本の社会文化的規範(e.g. 中国と異なる統計方法で都市の規模を計算する)の要因をインプットして、明確な不一致の表示を不適切だと判断し自己表示の逸脱も留意した。この20件の事例から、その

⁴⁰ 会話の原文は資料編(会話例)のペア2の例1を参照すること。

⁴¹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア4の例3を参照すること。

真偽が検証可能な事実情報をめぐって CS が不一致を示す時においても、不一致の表示に伴うフェイス侵害を軽減し、ポライトネスの実現を図るというポライトネスの原理 (Brown&Levinson 1987)が機能していると示された。

「JS のポジティブ・フェイス」のほかに、「情報の保有度(低い)」の要因も自己表示の逸脱の留意に多く関与している(16 件)。例えば⁴²、今日はオープンキャンパスの日ではないとの JS10 の先行発話において、CS10 が「キャンパスに高校生らしい人がたくさん歩き回っているので、オープンキャンパスの日ようだ」と考えて不一致を感じ、先行発話が実情(「高校生らしい人がたくさんいる」)に合わないとは認知し命題の逸脱を留意した。応答時、「確実に知っているわけではなく、ただ見ている光景から判断するだけだから、反対意見を明確に示さず確認の形で提示することにした」と FUI で報告したように、CS10 が話題の関連情報を十分に保有していないこと考慮し、明確な不一致の表示を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。この 16 件の事例から、事実情報に合わない先行発話を命題の逸脱と留意して、CS が関連する情報の保有が不十分であると認知する場合、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意することが生じやすいと示唆された。

「インターアクション内の期待(言語ゲスト)」が自己表示の逸脱の留意に関与した事例では、例えば⁴³、CS2 は先行発話が事実情報(e.g. 中国のテレビ局も視聴率を重視している)に合わないとは認知し命題の逸脱と留意した。応答時に、「日本語でどのように言い返すかは考えていたが、瞬時に思い浮かべなかったためそのまま相づちをうって応答した」と FUI で報告したように、CS2 は不一致の表示に必要となる日本語の言語能力の不足を考慮し、言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識して自己表示の逸脱も留意した。

「インターアクション内の期待(目的と文化ゲスト)」がともに自己表示の逸脱の留意に関与した事例では、例えば⁴⁴、CS5 が無断駐輪で罰金された理由について、JS5 は通行の邪魔になるからであると説明した。この先行発話において、CS5 は「私の自転車だけではなく、その道にたくさんの自転車がとめられている。つまり日本人も道端に止めても大丈夫だと考えている。相手の説明に賛成できない」、「駐輪した道は自転車が置いていなくても車が通れるほど広くないから、通行の邪魔になると言われてもやはり納得できない」と不一致を感じ、実情(日本人もそこに自転車をとめている。車が通れるほどの広い道ではない)に合わないとは認知したため、命題の逸脱を留意した。応答時に、「会話の目的は、罰金をとる理由について日本人の JS5 に聞くことなので、言われた理由には納得できないが、反対の意見を言ってもあまり意味がない」、「やはり習慣の面では日本と中国はいろいろ異なるから、中国では罰金をとることはないと言ってもどうにもならない」、「日本では自転車の無断駐輪についてどうもそう思われているらしく、日本にいたのでこれに従うしかない」などと FUI で報告したように、CS5 は会話の目的(罰金の理由を聞く)、社会文化ゲスト(「言

⁴² 会話の原文は資料編(会話例)のペア 9 の例 8 を参照すること。

⁴³ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 1 の例 6 を参照すること。

⁴⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 4 の例 1(10～17 行目)を参照すること。

ってもどうにもならない。従うしかない」)としてのカテゴリ化を意識して自己表示の逸脱も留意した。

(6) CS の個人規範(1 件)

この要因が「JS のポジティブ・フェイス」とともにインプットされた事例は 1 件で、CS13 の事例⁴⁵となる。神戸が日本海側なので寒いところだとの JS15 の先行発話において、CS13 は「自分は夏の暑さを基準にしてある地方の気候の特徴を捉える。千葉は夏が暑いから、暑いところだと思う」、「神戸と千葉は緯度がほぼ同じなのでそれほど変わらないと思う。千葉が暑いところだから寒いという表現はおおげさだ。せいぜい涼しいと言える」と不一致を感じ、個人規範(e.g. 千葉は夏が暑いから暑いところだ。神戸は千葉と変わらない)からの違反であると認知し命題の逸脱を留意した。応答時に、「千葉が暑いところだという考えは相手にはないかもしれないので、直接的に否定の意見を述べることはよくない」、「相手の考えを確認する形で自分の考えを提示したほうがいい」と報告したように、CS13 は明確な不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

(7) インターアクション内の期待(目的)(1 件)

この要因が「日本の社会文化的規範」とともにインプットされた事例は 1 件で、CS24 の事例となる。第 3 章の例 19 で提示したように、CS24 は先行発話がインターアクションの参加目的(適切なチーム目標の設定)の達成を妨げると認知し、命題の逸脱と留意した。そして、「会議での直接的な反論は適切ではない」と日本の社会文化的規範をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

(8) インターアクション内の期待(会話進行)(2 件)

この要因が「JS のポジティブ・フェイス」とともにインプットされた事例は 2 件で、CS12 の事例に集中している。第 3 章の例 5 で提示したように、CS12 は実験についての JS14 の説明が必要ではないと不一致を感じたほか、会話進行への期待から外れている認知し命題の逸脱と留意した。応答時に、「説明の途中で説明が要らないと直接的に言い出すことはよくないから、確認の形で実験の名前を提示することにとどめた」と FUI で報告したように、CS12 は明確な不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

(9) インターアクションの期待(話題)(2 件)

この要因が「JS のポジティブ・フェイス」とともにインプットされた事例は 2 件で、CS12 の事例に集中している。第 3 章の例 4 で提示したように、CS12 は先行発話で提示された話題(バーゲンでの買い物)において違和感を覚え、不一致を感じて命題の逸脱を留意した。そして、CS12 は明確な不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する(相手がバーゲンでの買い物を楽しみにしているので興味がないと言ったら失礼だ)恐れがあると予

⁴⁵ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 14 の例 17(255～258 行目)を参照すること。

想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

なお、(8)と(9)の事例では、会話進行に関する先行発話を命題の逸脱と留意したため、会話進行の保持への関心によって、「JS のポジティブ・フェイス」の要因が前景化し、CS が不一致の表示自体において自己表示の逸脱を留意したと考える。

(10) CS のポジティブ・フェイス(1 件)

この要因が「JS のポジティブ・フェイス」とともにインプットされた事例は 1 件で、CS18 の事例⁴⁶となる。CS18 が JS21 の中国語の宿題⁴⁷でまとめた内容(CS18 の故郷の人は性格が「乱暴」だ)において、「乱暴という表現は不適切で納得できなかった。これを見て驚いた」と不一致を感じ、自分のポジティブ・フェイス(故郷のイメージに関連するメタポジティブ・フェイス)への侵害であると認知し、命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS21 がネットから調べてきた内容をそのまままとめただけで、本当にそう思っているとは限らない」、「JS21 が内容を中国語に訳した時は正しく訳せなかっただけかもしれない。だから、直接的に否定することはよくないと思った」と報告したように、CS18 は明確な不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想し、不適切だと判断して自己表示の逸脱も留意した。

なお、不一致の表示について、CS18 が FUI で「このようなマイナスな表現を故郷の人の性格に使ってはいけないとも言えない。中国人のいいことばかりを書かせることはないし、中国人としてここでは直接的に争う必要もなく、度胸を示すべきだ。こう書いてはいけないとは言えない」と報告した。この報告内容から、不一致の表示方法の選択において、CS18 のポジティブ・フェイス(度胸のある中国人としてのフェイス) という要因も関与したと考えられる。

(12) CS のインタレスト(1 件)

この要因が「JS のポジティブ・フェイス」とともにインプットされた事例は 1 件で、CS6 の事例⁴⁸となる。土日と一緒に勉強すると提案した JS6 の先行発話において、CS6 は「土日勉強の時間に当てると疲れる。土日はやはりゆっくりしたいからそれ以外の日がいい」と不一致を感じ、自分のインタレストが侵害される(e.g. 労力、時間のコストがかかる)と認知して命題の逸脱を留意した。応答時に、「相手がもっと忙しいのに空いている時間帯を真剣に探してくれて、土日にしたくないと言うと申し訳ない。まず賛成して、ついでにはほかの日はできないかと聞いてみようと思った」と FUI で報告したように、CS6 は相手のポジティブ・フェイスという要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断し自己表示の逸脱も留意した。

⁴⁶ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 1(45～51 行目)を参照すること。

⁴⁷ JS21 は日本語のサイトから中国各地の人の性格についての資料を収集し、中国語に訳して宿題の内容にまとめた。

⁴⁸ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 5 の例 2 を参照すること。

4.3 逸脱が留意された不一致応答におけるCSの調整

4.2では、留意の段階に焦点をあて、CSが不一致応答を行う際に留意した逸脱、インプットした社会的、場面的要因の詳細、逸脱の留意における諸要因からの関与を分析した。本節では、調整の段階に注目し、CSが留意した逸脱の解消、軽減にむけて行った調整の実態を明らかにした上で、個々の社会的、場面的要因が調整の段階に、特に双方の逸脱が留意された後の調整の優先順位の選択に与える影響を考察する。

4.3.1 命題の逸脱のみが留意された不一致応答におけるCSの調整：明確な不一致の表示

命題の逸脱のみが留意された不一致応答の全ての事例において、CSが留意した命題の逸脱を否定的に評価し、調整計画を立てて調整実施の段階に至り、不一致を明確に提示するように応答を調整したことは特徴である。これらの81件の事例は、CSが明示的不一致応答を行った点で共通しているが、CSが不一致応答で用いた言語表現の特徴によって、また大きく2種類に分けられる。具体的に、インターアクション・インタビューで報告された6件の事例を除いた⁴⁹75件の事例は、「中立の明示的不一致応答」(disagreement not softened or strengthened, Rees-Miller 2000:1095)と、「強調された明示的不一致応答」(aggravated disagreement, ibid)に分類でき、前者は49件で、後者は26件となっている。表3では、すでに命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の詳細、要因別のインプット回数を示した。下記の表10では、この75件の事例について、CSが応答時にインプットしたと報告された全ての要因(インプットされたが、命題の逸脱の留意に関与していない要因も含む)を事例ごとに集計した結果を、明示的不一致応答の種類別に示す。これより、この2種類の明示的不一致応答の事例を種類別に分析する。

表10：命題の逸脱のみが留意された事例におけるCSの調整(単位：件)

命題の逸脱の留意に関与した要因	ほかにインプットされた要因	中立	強調
中国語の言語的規範		10	3
中国の社会文化的規範	話題に関する情報の保有度(高い)	1	1
実情		5	8
実情	話題に関する情報の保有度(高い)	25	9
CSのポジティブ・フェイス、実情		0	4
CSのインタレスト		2	0
インターアクション内の期待(誤解)		5	1
CSの個人規範		1	0
合計		49	26

⁴⁹ この6件の事例は明示的不一致応答が行われたことについて確認できたが、CSが応答時に用いた言語表現の詳細について考察できないため、分類対象から外した。

4.3.1.1 「中立」の明確な不一致の表示

まず、3.5.1 で引用した「中立の不一致の表示」(Rees-Miller 2000:1094)の定義を再掲する：

発話内容が先行発話に対立する内容となっているが、特別な言語的マーカーが付随していない。一部の事例では否定的表現または「yes/no」のような語彙が用いられる。そして、先行発話の一部をほかの言葉に変えたり、異なるイントネーションに切り替えたりすることによって、先行発話を復唱し不一致を提示する「口頭シャドウイング」が用いられることがある。

上記の定義、不一致応答ムーブの構成要素の代表的な表現形式や言語表現⁵⁰を参考にし、CS が行った明示的不一致応答について、発話内容を強調する特別な言語的マーカー(e.g. 「よ」)が付随していない応答を、「中立の明示的不一致応答」とした。そして、応答の「合図」に非同調的マーカー(e.g. 「いいえ、いや、や、でも」)、「前部」に否定表現(e.g. 「違う、そうではない」)が用いられる応答もこの種類の応答であると定めた。

例えば、CS10 が「春は花粉症があるからいい季節ではない」との先行発話に対して、「わたし花粉症はないから」と応答した事例⁵¹や、そして、CS13 が「中国は物価が高騰している」との先行発話に対して、「いやけどそれは、北京とか上海とか、地価はね」(非同調的マーカー)、と応答した事例⁵²はこの種類の応答になる。

これより、「中立」の明示的不一致応答について、命題の逸脱の留意に関与した要因ごとに CS の調整段階を考察していく。

(1) 中国語の言語的規範

JS の先行発話が中国語の言語的規範に合わないため、CS が命題の逸脱を留意し、明示的不一致応答を行った事例は 13 件あり、そのうちの 10 件が「中立」の明示的不一致応答である。この 10 件の事例は主に CS18 の事例に集中し、CS の全体的傾向として判定しきれないが、「この言い方は普通の中国人が聞いても分からない。自分の考えをそのまま提示した」、「発音が間違っているので正しい発音を提示した」などと FUI で報告したように、CS は主に母語の言語的規範を適用し、留意した命題の逸脱を解消するために、不一致を明示的に示すように応答を調整した。日本語接触場面での母語規範の適用について、加藤(2010:185)は、非母語話者の言語的逸脱に対し、日本語母語話者は言語ホストとして、「正しい日本語の言語的規範に従わなければならない」との規範を顕在化させ、調整を行う場合があると指摘した。これらの事例⁵³から、中国語の言語表現に関する内容をめぐって不

⁵⁰ 王(2006)は Sinclair&Coulthard(1975)の発話交換構造モデルに基づいて、不一致応答ムーブを「合図」(singal)、「前部」(pre-head)、「主要部」(head)、「後部」(post-head)の四つの構成要素に分けて、これらの構成要素の代表的な表現形式や言語表現を挙げた。詳しくは王(2006:71-73)を参照すること。

⁵¹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 9 の例 5 を参照すること。

⁵² 会話の原文は資料編(会話例)のペア 14 の例 12 を参照すること。

⁵³ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 6 の例 1、ペア 19 の例 5、例 6(145 行目)、例 7~8、例 12、例 14~17 を参照すること。

一致が生じる場合、CS が言語ホストのカテゴリ化を意識して、先行発話が中国語の言語的規範からの違反であると命題の逸脱を留意した後、この逸脱の解消に向けて、不一致を明確に提示するように応答を調整する傾向があると示唆された。

(2) 中国の社会文化的規範

「中国の社会文化的規範」の関与で命題の逸脱が留意され、「中立」の明示的不一致応答が行われた事例は 1 件ある。この事例⁵⁴では、CS13 が「中国人にとっては春巻きがおかずではなく主食だ」との JS15 の先行発話に対して、「朝食の時は主食となる場合があるが、それ以外の場合は主食ではないともいえる」と考え不一致を感じた。そして、先行発話を中国の社会文化的規範(e.g. 春巻きが朝食以外の場合は主食ではない)からの違反であると認知し、命題の逸脱と留意した後、明示的不一致応答を行うように調整した。なお、FUI から、CS13 が応答時に「JS15 はテレビから得られた情報に基づいて話しただけで、春巻きに関する中国の食習慣がよく分からない。自分が知っている情報を教えようと思った」とも考えていたことがわかり、逸脱の留意に関与していないが、話題に関する情報を JS15 より多く保有するというのも不一致の表示方法の選択に関与したと考えられる。このように、中国の社会的文化に関する内容をめぐって不一致が生じた後、CS は文化ホストのカテゴリ化を意識し、中国の社会文化規範からの違反である先行発話において命題の逸脱を留意して、明示的不一致応答を行うように調整した。

(3) 実情

CS が「実情」の要因をインプットし、命題の逸脱を留意した後「中立」の明示的不一致応答を行った事例は 30 件ある。この 30 件のうち、「実情」の要因のみがインプットされた事例は 5 件であり、逸脱の留意に関与していないが「話題に関する情報の保有度(高い)」の要因と「実情」の要因がともにインプットされた事例は 25 件である。前者の事例は、例えば、第 3 章の例 13 のように、CS10 が「春は花粉症があるからいい季節ではない」との先行発話を「実情」(「自分は花粉症がないから大丈夫だ」)に合わないと認知し、命題の逸脱と留意して不一致を明確に提示した事例である。後者の事例において、話題に関する情報を JS より多く保有していることも、不一致応答の表示方法の選択に関与したと考える。例えば⁵⁵、「白玉のスープに豚肉を入れて食べる」との先行発話に対して、「スープに肉を入れるというわけではなく、白玉の中に肉を入れるだけだ。JS17 は実物を見たことがないので、情報を正しく伝達し、相手に分かってもらえることだけを考えていた」と報告したように、CS15 が実情に合わない(「豚肉をスープに入れない」)と認知し、先行発話において命題の逸脱を留意したほか、話題に関する情報の高い保有度(「JS17 は見たことがない」)も考慮し、不一致を明示的に示した(「スープじゃなくて、中身だけ」)。

不一致の対象の性格が不一致の表示方法に与える影響について、Rees-Miller(2000:1098) は、不一致の表示の中でも事実に対する訂正がルーティーンとして行われており、過酷な

⁵⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 14 の例 10(144～147 行目)を参照すること。

⁵⁵ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 16 の例 7(369～372 行目)を参照すること

ものではないと指摘した。また、大津(2001)は、不一致の表示に伴う緩和処置の側面において、ある事柄についての真偽判断の違いから生じる「事実認識の不一致」が、ある事柄についての個人的な評価の違いから生じる「評価の不一致」と異なると述べている。そして、Locher(2004:325)は、不一致の表示方法に関与する要因の一つとして、話題に関する熟知度、専門知識の保有度を挙げ、Deutsch&Gerard(1955)は、情動的支配力(informational power)も専門的支配力(expert power)の一つであるとしている(Frank&Raven 1959:267 より引用)。この 30 件の事例においても、CS が事実情報に合わない JS の先行発話から不一致を感じ、命題の逸脱を留意する場合、不一致の表示方法を考慮せず、不一致を明確に提示するように応答を調整する傾向があると確認できた。また、不一致の対象となる話題に関する情報の保有度が高いことも、CS が命題の逸脱を留意した後の明示的不一致応答の選択に関与していると示唆された。

(4) CS のインタレスト

この要因が関与した事例は 2 件で、CS11 の事例となる。「いちななにに」⁵⁶の時間帯に出勤してほしいとの JS13 の先行発話において、CS11 が「この時間帯も出勤するとすると、毎月の上限を超えてしまい、アルバイトができなくなるから、それをちゃんと伝えなければならなかった」と不一致を感じ、自分のインタレストが侵害される(e.g. 金銭的成本がかかる)と認知して、命題の逸脱を留意した。そして、不一致(「時間上限を超えてしまう」)を明確に提示するように調整を行った。Locher(2004: 328)は、参加者間のインタレストの衝突が深刻である場合、話し手がフェイス侵害(face-loss)を補うために、不一致の明示を選択せざるをえないことがあると指摘した。この 2 件の事例から CS の全体的傾向について判定しきれないが、CS は自分のインタレストを侵害する先行発話から不一致を感じ、命題の逸脱を留意する場合、明示的不一致応答を行う可能性が高まると示唆された。

(5) インターアクション内の期待(誤解)

この要因が関与した事例は 5 件あり、CS3 の 3 件と CS15 の 2 件となる。第 3 章の例 6 のように、CS15 は自分の発話内容が JS17 に誤解された(「どうも自分も能力試験に参加したと思われたらしい」)と不一致を感じ、命題の逸脱を留意した後、不一致を明確に提示し(「私はまだだ」)応答した。大津(2001)は、「意図と解釈の不一致」が生じる際に、緩和処置が伴わない明確な不一致の表示が生じやすいと指摘した。この 5 件の事例からも、CS は JS の先行発話から、自分の発話内容が間違っ理解され、発話意図が異なる意味で読み取られたことに気づき、不一致を感じ命題の逸脱を留意する場合、不一致を明示的に示すことが生じやすいと見られた。

(6) CS の個人規範

この要因が関与した事例⁵⁷は 1 件のみで、「千葉が寒いところだ」との JS15 の先行発話

⁵⁶ CS11 のアルバイト先の業務用語で、午後 5 時～夜 10 時までの時間帯を指す。会話資料は資料編(会話例)のペア 12 の例 6 を参照すること。

⁵⁷ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 14 の例 17(260～264 行目)を参照すること。

に対して、CS13 が不一致(「寒いところではなく暑いところだ」)を感じ、個人規範(夏の暑さを基準にしてある地方の気候の特徴を捉える)からの違反(千葉は夏が暑いから暑いところだ)であると認知し命題の逸脱を留意した。そして、命題の逸脱を解消するために不一致を明示的に示すように応答を調整した。

以上は CS が命題の逸脱のみを留意し、「中立」の明示的不一致応答を行うように調整した事例を考察した。これより、「強調された」明示的不一致応答が行われた事例を考察する。

4.3.1.2 「強調された」明示的不一致応答

まず、「強調された」(aggravated)不一致の表示について、Rees-Miller(2000:1094)の定義を再掲する。

修辞疑問文(rhetorical question)、intensifiers(ユニバーサルの限量詞: universal quantifiers)、第 2 人称の「you」を命令や非難の口調、または断定的語彙とともに使用する(use of personal you with imperative or accusatory force, or judgmental vocabulary)。

上記の定義、不一致応答ムーブの構成要素の代表的な表現形式や言語表現を参考にし、CS が行った明示的不一致応答について、発話内容を強調する特別な言語的マーカー(e.g. 「よ」)が付随する応答、非難の口調や修辞疑問文の形で行われた応答を、「強調された」明示的不一致応答とした。そして、非同調的マーカーや応答内容の繰り返しがなされ、または応答時の声が大きくなるという周辺言語的特徴が伴う応答も、「強調された」明示的不一致応答になると定めた。

例えば、CS10⁵⁸が「中国人は猫を食べる習慣がある」との先行発話に対して、声を大きくしながら「食べれないよ⁵⁹」(強調表現)と先行発話を非難し応答した事例や、第 3 章の例 1 のように、CS15 が「肉入りの“白玉”のスープの味は甘い」との先行発話に対して、「いい、いい、いい、いい、塩辛い」(非同調的マーカーの繰り返し)と不一致を示した事例、CS12⁶⁰が「研究室の博士はボーナスがなくて大変だ」との先行発話に対して、「ボーナスがもらえないぐらいで、いいんじやん」(修辞疑問文)と相手の同意を求めた事例、CS18⁶¹が相手の中国語の宿題に対して、「言わない絶対言わない」、「言わない、字を見ると意味が分からない⁶²」(断定的語彙の使用、反対意見の繰り返し)と応答した事例、などはこの種類の事例になる。

下記では、「中立」の明示的不一致応答との比較をふまえて、「強調された」明示的不一致応答について、命題の逸脱の留意に関与した要因ごとに CS の調整段階を考察していく。

⁵⁸ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 9 の例 14 を参照すること。

⁵⁹ 「食べないよ」という意味であると FUI で確認できた。

⁶⁰ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 13 の例 4(100 行目)を参照すること。

⁶¹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 9～10 を参照すること。

⁶² 「字を見ても意味が分からない」という意味であると FUI で確認できた。

(1) 中国語の言語的規範

この要因が関与した事例は CS18 の 3 件⁶³となる。CS が中国語の言語規範を参照し、先行発話において命題の逸脱を留意して、明示的不一致応答(「中立」と「強調」)を行った事例は全部で 13 件あり、そのうちの 12 件は CS18 の事例に集中している。「強調された」明示的不一致応答が行われた 3 件の事例では、JS20 が「彼は直線的な性格である」を中国語に直訳した文、「他的性格很聪明」(彼の性格は頭がいいことだ)と書いた中国語の文から、CS18 が不一致を感じ、命題の逸脱(「中国語では、“直線的”が“性格”を修飾することができない。おかしい」、「頭がいいということは人の性格ではない。これは明らかに間違っている。理解できない」)を留意した。CS の全体的傾向として判定しきれないが、この 3 件の事例と、「中立」の明示的不一致応答が行われた 9 件の事例を比較すると、不一致の対象となる中国語の言語表現が中国語の言語的規範からの違反であるという点では共通しているが、誤用の程度が高まるにつれて、CS がより強調した口調で不一致を示していくと示唆された。

(2) 中国の社会文化的規範

この要因が関与した事例は CS13 の 1 件となり、4.3.1.1 の「中国の社会文化的規範」、「話題に関する情報の保有度(高い)」が関与した事例に後続している。この事例⁶⁴では、「中国人にとっては、春巻きをおかずとしてご飯と一緒に食べることは許せない」との JS15 の先行発話に対して、CS13 が「朝食の時は主食となる場合があるが、それ以外の場合はおかずともいえる」と考え不一致を感じた。そして、先行発話が中国の社会文化的規範(e.g. 春巻きが朝食以外の場合は主食ではない)からの違反であると認知し、命題の逸脱と留意した後、「ぜんぜん平気だよ」と明示的不一致応答を行った。事例は 1 件のみで判定しきれないが、CS13 が同一話題をめぐって引き続き不一致を感じ、文化ホストのカテゴリ化を意識し命題の逸脱を留意したこと、すなわち先行発話が中国の社会文化規範から継続して違反することは、より明確な不一致の表示につながると考えられる。

(3) 実情

表 10 で示したように、CS が実情に合わないと認知し、先行発話において命題の逸脱を留意して明示的不一致応答(「中立」と「強調」)を行った事例は全部で 47 件あり、そのうちの 17 件において「強調」された明示的不一致応答が行われた。この 17 件の事例のうち、「実情」の要因のみが関与した事例は 8 件ある。例えば⁶⁵、「研究室の博士はボーナスがなくて大変だ」との JS14 の先行発話において、CS12 が「今の日本は皆が大変で、もっと大変な研究室がある」、「ボーナスがないことはごく普通のことだ」と不一致を感じ、命題の逸脱を留意した。そして、「ぜんぜん大変じゃないよ」と不一致を明確に提示した。「実情」の要因とともに、話題に関する情報を JS より十分に保有していることも不一致の表示方法

⁶³ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 9～10、例 13 を参照すること。

⁶⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 14 の例 10(150～153 行目)を参照すること。

⁶⁵ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 13 の例 4 を参照すること。

の選択に関与した事例は9件である。例えば⁶⁶、CS13が大学院に進学した後も奨学金をもらえるとのJS15の先行発話において、「今は交換留学で来ているが、期間が1年間だけで、大学院に進学したら私費となる」とCS13が不一致を感じ、命題の逸脱を留意した。また、FUIで「JS15は交換留学が1年間だけだということを知らないかもしれない。それでまだ奨学金がもらえると思っている」、「実はそうではないと説明することだけを考えていた」と報告したように、CS13が不一致の対象となった話題に関する情報の高い保有度(「JS15が知らない。説明することを考えていた」)も考慮したと考える。そして、CS13が「いや私費だよ」と強調して不一致を明確に提示するように調整した。

表10で示したように、CSが命題の逸脱のみを留意し、不一致を明確に提示するように応答を調整した事例は75件あり、そのうちの47件の事例において「実情」の要因が単独で(13件)、または「話題に関する情報の保有度(高い)」とともに(34件)不一致の表示方法の選択に関与した。4.3.1.1で援用した先行研究での指摘：情報的支配力も専門的支配力の一つであり(Deutsch&Gerard 1955, Frank&Raven 1959:267より引用)、話題に関する熟知度、専門知識の保有度も不一致の表示方法に関与する要因の一つであること(Locher 2004:325)、事実の訂正が伴う不一致の表示は過酷なものではない(Rees-Miller 2000:1098)などを参考にし、これらの47件の事例から、先行発話において事実情報に合わないCSが不一致を感じ、命題の逸脱を留意する場合、不一致の明示的表示、さらに強調する口調での不一致の表示が生じやすいと示唆された。

(4) 実情、CSのポジティブ・フェイス

この二つの要因がともに命題の逸脱の留意に関与した4件の事例は、全て「強調された」明示的不一致応答が行われ、CS10の事例に集中している。例えば⁶⁷、CS10の故郷の地名を間違えたJS10の先行発話において、CS10が不一致を感じ、「JS10が言ったところではない」と実情に合わないと認知して、「故郷のことはよく話しているし、JS10がチューターとして1年近くも付き合ってきたのに、まだ覚えていないようで少しがっかりした」と自分のポジティブ・フェイスが侵害された(故郷の地名を覚えてくれなかった)と考え、命題の逸脱を留意した。この逸脱の解消のために、CS10が「いいえ、私河南省の人じゃないよ」などと強調した形で不一致を示して応答した。不一致が生じる場合、「自己ポライトネス」⁶⁸ (self-politeness, Chen 2001:97)、「自己保全」(self-perservation, Bousfield 2007:28, Sifianou 2012:1560より引用)などの原則が機能し、Rees-Miller(2000)は、このような場合に話し手が「自己尊敬」(self-respect)を保つために不一致を強調して示す方法を選択することがあると指摘している。この4件の事例からCSの全体的傾向として判定しきれないが、JSの先行発話が事実情報に合わなく、そしてCSのフェイスを侵害する内容でもある場合、

⁶⁶ 会話の原文は資料編(会話例)のペア14の例11を参照すること。

⁶⁷ 会話の原文は資料編(会話例)のペア9の例12を参照すること。

⁶⁸ Chen(2001:88)は、「self-politeness」について、「コミュニケーションにおいて自分のフェイスを守りたいまたは強化したいという欲求が話し手の発話内容と発話の方式に影響を及ぼす場合」と定義した。「self」が指す範囲は話し手だけではなく、話し手の家族、友人、同僚、職業まで及んでいる(ibid)。

CS が先行発話において命題の逸脱を留意し、より明示的な不一致の表示方法を用いて調整する傾向があると伺える。

(5) インターアクション内の期待(誤解)

この要因が関与し、明示的不一致応答(「中立」と「強調」)が行われた事例は 6 件あり、強調した口調で不一致が提示された事例が 1 件である。この事例⁶⁹では、CS15 が「推測」と発話したが、JS17 に「しゅんそく」と間違っ聞き取られたため、不一致を感じ命題の逸脱を留意した。そして、「JS17 が聞き間違えたので、説明しなければならなかった」と FUI で報告したように、CS15 が誤解による命題の逸脱の解消を考慮し、「推測、推測」と繰り返して不一致を示し応答した。

全体的傾向として、26 件の「強調された」不一致応答は、主に CS が「実情」の要因をインプットし、命題の逸脱を留意した事例に集中している(21 件)。そして、不一致の対象となる話題に関する情報を JS より十分に保有していることが、逸脱の留意に関与していないが、「強調された」不一致の表示方法の選択に関与したとみられた。また、一部の事例に限られているが、先行発話が実情に合わなく、CS のフェイスを侵害する内容でもある場合や、CS が同一話題をめぐる引き続き不一致を感じ、命題の逸脱を留意する場合、より明確な不一致の表示方法が選択される可能性が高まると示唆された。

4.3.2 自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整：不一致表示の回避、婉曲な不一致の表示

自己表示の逸脱のみが留意された 29 件の不一致応答において、CS が逸脱を否定的に評価した後、調整計画を立てて実施の段階に至り、不一致を潜在化させ、または、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。表 5 では、自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の詳細、要因別のインプット回数を示した。下記の表 11 では、これらの 29 件の事例においてインプットされた諸要因を事例ごとに集計した結果を、CS の調整傾向(回避、婉曲)別に示す。これより、まず調整傾向別に事例を分類し、自己表示の逸脱に関与した要因ごとに CS の調整段階を考察していく。なお、「JS のポジティブ・フェイス」の要因が関与した事例には、CS が婉曲的に不一致応答を行った事例のほかに、不一致を潜在化させて不一致応答を行った事例もあるため、この要因を取り出して個別に考察する。

表 11：自己表示の逸脱のみが留意された事例における CS の調整(単位：件)

インプットされた要因	調整：回避	調整：婉曲
場面(ゼミ)	0	3
インターアクション内の期待(言語ゲスト)	2	0
インターアクション内の期待(言語ゲスト、目的)	2	0

⁶⁹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 16 の例 5 を参照すること。

インプットされた要因	調整：回避	調整：婉曲
JS のポジティブ・フェイス	11	8
JS のネガティブ・フェイス	1	0
話題に関する情報の保有度(低い)	0	2
合計	16	13

4.3.2.1 不一致表示の回避

CS が不一致を示さずに応答を行った事例は 16 件である。これらの事例において、CS が見せかけの同意、話題の切り替えなどによって、生じた不一致を潜在化させて応答した。

(1) インターアクション内の期待(言語ゲスト、目的)

「言語ゲスト」の要因が単独で、または「インターアクションの目的」の要因とともに関与した事例は 4 件あり、CS8 の 2 例、CS17 と CS31 の 1 例ずつとなる。単独で関与した事例では、CS17⁷⁰が「日本語が複雑になるので、詳しい説明を省いて話題を切り替えた」、CS31⁷¹が「日本語の表現を判断する資格がない。JS に言われた通りに直せばいい」などと FUI で報告したように、応答時に必要となる日本語能力の不足を考慮し、不一致の表示を回避するように応答を調整した。「インターアクションの目的」の要因も関与した事例では、CS8⁷²が書いたレジメの日本語の表現をめぐって不一致が生じたが、応答時に、「レジメの添削、用例の妥当性の判断を JS にしてもらうことが目的なので、とりあえず聞いておいて、自分の考えを言わないことにした」、「日本語のことについて、日本人である相手の考えを否定できる自信がない。すぐ反対の意見を言わないほうがいいと思った」と FUI で報告したように、CS8 がインターアクションの参加目的の達成を考慮し、言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識して、回避的不一致応答を行った。この 4 件の事例から、CS が「言語ゲスト」の要因をインプットし自己表示の逸脱を留意する場合、この逸脱を解消できない問題(村岡 2006:110-112)と捉え、「参加回避」(ファン 1999:40)の戦略を選択して、問題の潜在化を図ることは生じやすいと示唆された。

(2) JS のネガティブ・フェイス

この要因が関与した事例は 1 件のみで、CS21 の事例⁷³となる。新幹線の切符を無くした JS に、CS21 は途中で乗ったバスの中で落ちたかもしれない、バス会社に問い合わせたほうがいいと発話した。問い合わせても意味がないとの先行発話において、CS21 が不一致(「やはり問い合わせる必要がある」)を感じたが、「すてに自分の考えを 1 回述べたので、本人が聞こうとしたくないなら本人の意思を尊重して、そのまま聞かないことにした」と報告したように、JS のネガティブ・フェイスの保持を考慮し、不一致の表示を回避するように調整した。

⁷⁰ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 17 の例 1 を参照すること。

⁷¹ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の 4.2.2.1)の例 3 を参照すること。

⁷² 会話の原文は資料編(会話例)のペア 8 の例 1 を参照すること。

⁷³ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の 4.2.2.1)の例 5 を参照すること。

4.3.2.2 婉曲な不一致の表示

CS が不一致を婉曲的に示すように応答を調整した事例は 13 件である。これらの事例において、CS が不一致の表示に伴う JS のフェイスへの侵害を配慮し、程度副詞や様々なモダリティ表現を付け加えて不一致を示したり、または自分の異なる見解を支える裏付けの情報を提示したりすることで、不一致の表示方法を調整して応答を行った。

(1) 場面(ゼミ)

この要因が関与した事例は 3 件で、CS24 の事例に集中している。CS24⁷⁴がゼミでは、発表者に異なる見解を述べる際に、「ゼミの場面では、先生やほかの学生も同席なので言い方に注意する必要がある」、「直接的に正しくないと言ったのではなく、自分の考えの妥当性を相手に確認してもらい形で反対の意見を述べた」と報告したように、自己表示の逸脱を留意し、婉曲的不一致応答を行うように調整した。また、これらの報告内容から、CS24 がゼミの場面について、対立意見の直接な表出を抑えるべき場面であると捉えていると示唆された。ゼミでの不一致応答に関するリコール・インタビューでの報告(「基本的に不一致の直接な提示をしないようにしている。いつも質問の形や確認の形で提示する。質問の数も二つぐらいに抑える」)と合わせてみると、この 3 件の事例は、日中接触場面でのゼミにおいて行われる不一致応答に対する、CS24 の習慣化された言語管理の一端を示したと考えられる。

(2) 話題に関する情報の保有度(低い)

この事例が関与した事例は 2 件で、CS2 と CS28 の 1 件ずつとなる。CS2 の事例では、第 3 章の例 9 が示したように、CS2 が「来週はもう 6 月ではない」との先行発話から不一致(まだ 6 月だ)を感じたが、「確実に知っているわけではないので、確認の形で自分の考えを提示するようにした」と FUI で報告したように、情報の保有度も考慮し婉曲的不一致応答を行った。CS28 の事例⁷⁵では、「貸してあげたビデオテープはまだ返していない」との先行発話に対して、CS28 が「返したとの記憶もあるが、よく覚えていないので、返したと言いきらないようにして応答した」と FUI で報告したように、関連情報を十分に保有していないことを考慮し、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因が自己表示の逸脱の留意、調整に関与した背景に、Grice(1975:47)の「質の原則」(maxim of quality)、情報の保有度が不一致の表示方法に関与する要因であること(Locher 2004:325)などがあると考えられる。

これより、二つの調整傾向(回避、婉曲)にも関与した「JS のポジティブ・フェイス」に焦点をあて事例を分析する。

この要因が関与した事例は最も多くの 19 件であり、調整傾向別にみると、婉曲的不一致応答の事例は 8 件で、回避的不一致応答の事例は 11 件である。前者の事例では、例えば、第 3 章の例 18 が示したように、CS12 が応答時に「JS14 が買い物を楽しみにしているよう

⁷⁴ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の 4.2.2.1)の例 2 を参照すること。

⁷⁵ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の 4.2.2.1)の例 4 を参照すること。

なので、自分の考えを直接的に提示するのはよくないと思った」、「相手を考えさせたほうが納得してもらいやすくなるから質問の形を用いた」と、明確な不一致の表示に伴う相手のポジティブ・フェイスへの侵害を考慮し、不一致を婉曲的に示すように調整した。後者の事例では、例えば、CS18⁷⁶が JS20 の語学研修の計画に対して、不一致(「前回のコースと同じなので行く必要はない」)を感じたが、応答時に「JS20 が行く気満々のようで、行く必要がないなどと言うと、失礼になる。もう自分の考えを提示しないほうがいいと思った」と FUI で報告したように、相手のポジティブ・フェイスの維持を考慮して自己表示の逸脱を留意し、不一致を潜在化させるように調整した。

この 19 件の事例で不一致の対象となる話題の性格からみると、ある事柄についての JS の感想や評価をめぐって不一致が生じた事例は 16 件で、上記の CS12、CS18 の事例のように、婉曲的、回避的不一致応答行われた事例はそれぞれ 7 件と 9 件となっている。そして、JS の提案をめぐって不一致が生じた事例は 3 件で、婉曲的、回避的不一致応答の事例数はそれぞれ 1 件と 2 件となっている。前者の事例⁷⁷では、機能性の高い服の購入を薦めた JS14 の先行発話に対して、CS12 が「要するに服を買いたくない」と不一致を感じたが、「相手が親切に服を紹介しているので、直接的に要らないと伝えることはよくない」と相手のポジティブ・フェイスを考慮して、「夏の服はちょっと高い。長く着られない」と不一致をほのめかして示すように調整した。後者の事例⁷⁸では、例えば、似顔絵を描いてもらうことを薦めた JS16 の先行発話に対して、CS14 が「それほど残念に思っていない。中国でもできるからわざと日本でやる必要もない」と不一致を感じたが、「JS16 が好意的に薦めているので、必要ではないと言ったら申し訳ない。相手の話しに合わせて応答した」と FUI で報告したように、「残念だ。また機会があるからやってみる」と回避的不一致応答を行った。不一致の対象の性格が異なるものの、CS が婉曲、回避的不一致応答を選択した事例はそれぞれ 8 件と 11 件で、それほど大差がないとみられた。Locher(2004:328)は、会話の話題をめぐる参加者間の考えが異なる度合いも、不一致の表示方法に影響する要因の一つであると指摘した。そして、Sifianou(2012:1558)は、連帯関係にある参加者は、許容される不一致の表示方法の境界について共通の認識を有していると述べた。このように、CS が考えのくいちがいの度合い、JS との接触歴などにに基づき、許容される不一致の表示方法を考慮し、自己表示の逸脱を解消するための調整ストラテジーを選択したと考える。なお、この 19 件の事例では、異なる調整ストラテジーが用いられたが、CS が先行発話から不一致を感じ、JS のポジティブ・フェイスの維持を考慮して自己表示の逸脱を留意した後、「考えの差が小さいことを示す」(大津 2001⁷⁹)ように調整を行う管理プロセスにおいて、共通していると考える。

⁷⁶ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 22 を参照すること。

⁷⁷ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 13 の例 12 を参照すること。

⁷⁸ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 15 の例 3 を参照すること。

⁷⁹ 大津(2001)は JS の不一致の表示を考察し、「評価の不一致」に対して、「相手との考えの差が小さいことを示す」という方策が最も多く用いられると指摘した。

4.3.3 双方の逸脱が留意された不一致応答におけるCSの調整：明確、婉曲な不一致の表示、不一致表示の回避

CSが双方の逸脱を留意して否定的に評価した後、調整の段階において、逸脱の調整の優先順位を決めてから、調整計画を立て実施の段階に入る。そこでCSが選択した調整対象(片方の逸脱のみ、または双方の逸脱)に応じて、異なる調整ストラテジー(明示、回避、婉曲)を用いて不一致応答を行う。表7～表9では、CSが双方の逸脱をともに留意した事例で関与した社会的、場面的要因の詳細、要因別のインプット回数、そして、ペアでインプットされた要因の組み合わせを提示した。下記の表12では、これらの69件(明示：1件、回避：25件、婉曲：43件)の事例において関与した要因を事例ごとに集計した結果を、調整の優先順位別に示す。表12の右端の「命題明示」はCSが命題の逸脱の調整を優先させ、明示的不一致応答を行った事例、「自己回避」はCSが自己表示の逸脱の調整を優先させ、回避的不一致応答を行った事例、「双方婉曲」はCSが双方の逸脱の調整をともに考慮し、婉曲的不一致応答を行った事例の数を示す。

表12：双方の逸脱が留意された事例におけるCSの調整(単位：件)

命題の逸脱の留意に関与した要因	自己表示の逸脱の留意に関与した要因	命題 明示	自己 回避	双方 婉曲
中国語の言語的規範	場面の接触性	0	0	4
	インターアクション内の期待 (言語ゲスト)	0	1	0
	話題に関する情報の保有度(低い)	0	0	1
中国の社会文化的規範	日本の社会文化的規範	0	0	2
	インターアクション内の期待 (文化ゲスト)	0	1	0
	インターアクション内の期待 (言語ゲスト)、JSのポジティブ・フェイス	0	1	0
	JSのポジティブ・フェイス	0	2	0
日本の社会文化的規範	JSのポジティブ・フェイス	0	0	1

命題の逸脱の留意に関与した要因		自己表示の逸脱の留意に関与した要因	命題 明示	自己 回避	双方 婉曲
CS の接触規範		日本の社会文化的規範、 インターアクション内の期待(目的)	0	0	1
		インターアクション内の期待 (文化ゲスト)	0	1	0
実情		日本の社会文化的規範	0	2	0
		日本の社会文化的規範、 JS のポジティブ・フェイス	0	1	1
		インターアクション内の期待(目的)	0	1	0
		インターアクション内の期待 (目的) 、(文化ゲスト)	0	2	0
		インターアクション内の期待 (言語ゲスト)	0	2	0
		インターアクション内の期待 (言語ゲスト) 、JS のポジティブ・フェイス	0	1	0
		JS のポジティブ・フェイス	0	4	13
		話題に関する情報の保有度(低い)	0	1	15
常識		JS のポジティブ・フェイス	0	1	0
		話題に関する情報の保有度(低い)	0	1	0
		話題に関する情報の保有度(低い)、 媒体(電話)	0	0	1
CS の個人規範		JS のポジティブ・フェイス	0	0	1
CS のポジティブ・フェイス		JS のポジティブ・フェイス	0	0	1
CS のインタレスト		JS のポジティブ・フェイス	0	0	1
インターアクション 内の期待	目的	日本の社会文化的規範	1	0	0
	会話進行	JS のポジティブ・フェイス	0	2	0
	話題	JS のポジティブ・フェイス	0	1	1
合計			1	25	43

これより、調整の優先順位の選択における社会的、場面的要因からの関与に注目しながら、CS が双方の逸脱をともに留意した後の調整段階を優先順位別に考察していく。まず、命題の逸脱の調整を優先させた事例を考察する。

4.3.3.1 命題の逸脱に対する調整を優先させた不一致応答：明確な不一致の表示

CS が命題の逸脱の調整を優先させた事例は 1 件のみで、CS24 の事例となる。第 3 章の例 19 が示したように、デザインコンテストでは「単位とれればいい」との JS の先行発話において、CS24 が不一致(目標が低すぎる)を感じ、インターアクションの参加目的(適切な目標の設定)の達成を妨げると認知し、命題の逸脱を留意した。そして、応答時に、「日本ではこのような場合は通常は反駁しないほうがいいと分かるが、我慢できなくて反駁した」、「そう言わないと皆はやる気を失ってしまうから」など報告したように、CS24 が不一致の表示に関する日本の社会文化的規範(e.g. 会議では直接的な反駁を控えるべきだ)をインプットし、自己表示の逸脱も留意したが、インターアクションの参加目的の達成をより多く考慮し、命題の逸脱の調整を優先させた。CS の全体的傾向として判定しきれないが、双方の逸脱を留意した後、CS がインターアクションのゴール(村岡 2006:111)をより重視し、逸脱の調整の優先順位を決め、調整ストラテジーを選択することがあると示唆された。

4.3.3.2 自己表示の逸脱に対する調整を優先させた不一致応答：不一致表示の回避

CS が自己表示の逸脱の調整を優先させた事例は 25 件ある。これらの事例において、CS が留意した双方の逸脱から、自己表示の逸脱の解消を優先させ、不一致を潜在化できるように応答を調整した。双方の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のペアについて、事例ごとの調整傾向からみると、自己表示の逸脱の調整が優先された事例のみに関与したペアのほかに、双方の逸脱の調整がともに考慮された事例にも関与したペアもある。この視点によって、表 12 の集計結果を再整理すると、下記の表 13 の通りである。

表 13：自己表示の逸脱に対する調整を優先させた事例(単位：件)

番号	命題の逸脱の留意に関与した要因	自己表示の逸脱の留意に関与した要因	自己回避	双方婉曲
1	中国語の言語的規範	インターアクション内の期待 (言語ゲスト)	1	0
2	中国の社会文化的規範	インターアクション内の期待 (文化ゲスト)	1	0
3		インターアクション内の期待 (言語ゲスト)、JS のポジティブ・フェイス	1	0
4		JS のポジティブ・フェイス	2	0
5	CS の接触規範	インターアクション内の期待 (文化ゲスト)	1	0

番号	命題の逸脱の留意に関与した要因		自己表示の逸脱の留意に関与した要因	自己回避	双方婉曲
6	実情		日本の社会文化的規範	2	0
7			日本の社会文化的規範、 JS のポジティブ・フェイス	1	1
8			インターアクション内の期待(目的)	1	0
9			インターアクション内の期待 (目的) 、(文化ゲスト)	2	0
10			インターアクション内の期待 (言語ゲスト)	2	0
11			インターアクション内の期待 (言語ゲスト) 、JS のポジティブ・フェイス	1	0
12			JS のポジティブ・フェイス	4	13
13			話題に関する情報の保有度(低い)	1	15
14		常識	JS のポジティブ・フェイス	1	0
15			話題に関する情報の保有度(低い)	1	0
16	インターアクション	会話進行	JS のポジティブ・フェイス	2	0
17	内の期待	話題	JS のポジティブ・フェイス	1	1
合計				25	30

回避的不一致応答が行われた 25 件の事例をみると、7 番の「実情、日本の社会文化的規範、JS のポジティブ・フェイス」、12 番の「実情、JS のポジティブ・フェイス」、13 番の「実情、話題に関する情報の保有度(低い)」、17 番の「インターアクション内の期待(話題)、JS のポジティブ・フェイス」の四つのペアは、自己表示の逸脱の調整が優先された 7 件の事例に、そして、双方の逸脱の調整がともに考慮された 30 件の事例にも関与しているとわかった。これらのペアでの諸要因が逸脱の調整の優先順位に与える影響について、双方の逸脱の調整がともに考慮された事例と合わせて考察するが、まず、自己表示の逸脱の調整が優先された事例のみに関与した要因から分析していく。

CS が双方の逸脱を留意した後、自己表示の逸脱の調整を優先させ、不一致の潜在化を図り回避的不一致応答を行ったため、自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のほうが、調整の優先順位の選択により深く関わっていると考える。上記の四つの要因のペアに関与した 7 件の事例を除いた 18 件の事例では、自己表示の逸脱の留意に関与した要因は、「インターアクション内の期待(言語ゲスト)」、「インターアクション内の期待(文化ゲスト)」、「インターアクション内の期待(目的)」、「日本の社会文化的規範」、「話題に関する情報の保有度(低い)」、「JS のポジティブ・フェイス」の 6 種類の要因に集中している。な

お、「インターアクション内の期待(目的)」、「JS のポジティブ・フェイス」の 2 種類の要因を除いて、残りの 4 種類の要因は、CS が不一致の対象になる話題に関して、必要な情報(日本語の言語的規範、日本の社会文化的規範に関する知識を含む)を十分に保有していないことを認知し、インプットした要因である。換言すれば、この 4 種類の要因が関与した事例は、命題の逸脱が留意された背景において異なるが、CS が不一致の対象に関連する情報の不足によって自己表示の逸脱を留意し、この逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行うように調整した点では共通している。これより、自己表示の逸脱の留意に関与した要因別に、この逸脱の調整を優先させた事例を考察していく。

(1) 日本の社会文化的規範

この要因が単独で、または「JS のポジティブ・フェイス」とともにインプットされて、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は 3 件である。例えば⁸⁰、銀座は自分の故郷の歩行者天国と雰囲気が似ていると CS18 が感想を述べた後、「そうかな」と JS20⁸¹に疑われた。この先行発話において、CS18 は「実際に銀座に行ってきた。雰囲気が似ていると思う」と不一致を感じ、実情(e.g. 実際の体験からみて、似ている)に合わないと言明して命題の逸脱を留意した。応答時に、「中国人の私からみれば似ていると思うが、日本人はやはりそう思わないかもしれない」、「日本人の心の中で銀座はやはり特別な場所だから、反対の意見を言わないほうがいいと思った。銀座のほうはやはり豪華で故郷の歩行者天国と違っていると言いたかった」と FUI で報告したように、CS18 は日本の社会文化的規範(e.g. 銀座は特別で、豪華な場所の象徴だ)をインプットし、自己表示の逸脱を留意した後、この逸脱の調整を優先させ、「ホストに同調する」ストラテジー(村岡 2002:119)を選択して、回避的不一致応答を行った。この 2 件の事例で自己表示の逸脱の調整が優先されたことに、CS が相手の社会文化的規範をインプットし、「同調する」ストラテジーを選択したことがより深く関わっていると考えられる。

(2) インターアクション内の期待(言語ゲスト)

この要因が単独で、または「JS のポジティブ・フェイス」とともにインプットされて、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は 5 件である。例えば⁸²、CS2 が「中国のテレビ局は視聴率を重視しないほうだ」との先行発話において、不一致を感じると同時に、実情(e.g. 中国のテレビ局も視聴率を非常に重視している)に合わないと言明して命題の逸脱を留意した。応答時に、「日本語でどのように言い返したらいいかは考えていたが、瞬時に思い浮かべなかったためそのまま相づちをうって応答した」と FUI で報告したように、CS2 は不一致の表示に必要となる日本語の言語能力の不足によって、言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識し自己表示の逸脱も留意した後、この逸脱の調整を優先させ、回避的不一致応答を行った。ファン(1999:40)は、接触場面での言語ゲストが伝達の逸脱を留意する場合、参

⁸⁰ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 26 を参照すること。

⁸¹ JS20 は FUI で「その歩行者天国に行ったことがあり、銀座の雰囲気と似ていないと思う」と報告した。

⁸² 会話の原文は資料編(会話例)のペア 1 の例 6 を参照すること。

加回避のストラテジーを用いて調整することがあると指摘している。この5件の事例で自己表示の逸脱の調整が優先されたことに、CSが日本語の言語能力の不足によって、言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識したことはより深く関わっていると考えられる。

(3) インターアクション内の期待(文化ゲスト)

この要因が単独で、または「インターアクション内の期待(目的)」とともにインプットされて、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は4件である。例えば、第3章の例3が示したように、「ホテルの形はメロンに似ている」とのJS16の先行発話において、CS14が不一致(メロンに似ていない)を感じ、中国の社会文化的規範からの違反である(「この形なら中国人は船帆を連想しやすいが、メロンと言われて少し驚いた」)と認知し、命題の逸脱を留意した。応答時に、「このホテルの形から、日本人は果物の形を連想しやすいかもしれない」と考え、「このへんのことはよく分からない。メロンの形に見えるというのが日本では通常の考えかもしれないと思ったので、自分の考えを言わないことにして、きっと高級なホテルだという話に切り替えた」とFUIで報告したように、CS14は話題に関する日本の社会文化的規範の知識(e.g. 果物の形に関する連想)の不足を考慮し、自己表示の逸脱も留意した。そして、この逸脱の調整を優先させ、回避的不一致応答を行うように調整した。村岡(2002:119)は、接触場面での非母語話者が「ホストに同調する」ストラテジーを選択して相手の言語規範に従うように調整することがあると指摘した。この4件の事例で自己表示の逸脱の調整が優先されたことに、CSが日本の社会文化規範に関する知識の不足によって、文化ゲストとしてのカテゴリ化を意識したことがより深く関わっていると考えられる。

(4) 話題に関する情報の保有度(低い)

この要因が自己表示の逸脱に関与した事例は2件である。例えば⁸³、ゴールドキウイという果物は果実の中身が黄色いとのJS14の先行発話において、CS12が不一致を感じ(「中身が黄色い色のはずがない」)、常識からの違反である(「常識から考えれば、中身が黄色くなったら腐ったキウイとなってしまう。黄色い中身のはずがない」)と認知し、命題の逸脱を留意した。応答時に、「相手が言った品種のキウイを見たことがないので、否定する自信がない。相手の話をそのまま聞いておくことにした」とFUIで報告したように、CS12は話題に関する情報を十分に保有していないことを配慮し、自己表示の逸脱を留意した後、この逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行うように調整した。Locher(2004:325)が情報の保有度が不一致の表示方法に関与する要因であると指摘したように、この2件の事例で自己表示の逸脱の調整が優先されたことに、CSが不一致の対象に関する情報を十分に保有していないと認知したことがより深く関わっていると考えられる。

(5) インターアクション内の期待(目的)

この要因が単独で、または「インターアクション内の期待(文化ゲスト)」とともにインプットされて、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は3件である。例えば⁸⁴、無断駐輪

⁸³ 会話の原文は資料編(会話例)のペア13の例8を参照すること。

⁸⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア4の例1(10～17行目)を参照すること。

で罰金されたことの理由について、JS5は通行の邪魔になるからであると説明した。この先行発話において、CS5は「日本人もその道に自転車をとめている。つまり日本人も道端に止めても大丈夫だと考えている。相手の説明に賛成できない」、「駐輪した道は自転車が置いていなくても車が通れるほど広くないから、通行の邪魔になると言われてもやはり納得できない」と不一致を感じ、実情(日本人もそこに自転車をとめている。車が通れるほどの広い道ではない)に合わないと認知して、命題の逸脱を留意した。応答時に、「会話の目的は、日本人のJS5に罰金をとる理由について聞くことなので、言われた理由には納得できないが、反対の意見を言ってもあまり意味がない」、「やはり習慣の面では日本と中国はいろいろ異なるから、中国では罰金をとることがないなどと言ってもどうにもならない」、「日本では自転車の無断駐輪についてどうもそう思われているらしく、日本にいてこれに従うしかない」などとFUIで報告したように、CS5は会話の目的(罰金の理由を聞く)、社会文化ゲスト(「言ってもどうにもならない。従うしかない」)としてのカテゴリ化を意識し自己表示の逸脱も留意した。その後、CS5は自己表示の逸脱の調整を優先させて、不一致を示さずに回避的不一致応答を行った。この3件の事例で自己表示の逸脱の調整が優先されたことに、CSがインターアクションのゴール(村岡 2006:111)の実現を考慮したこと、そして、文化ゲストとしてのカテゴリ化を意識したことがともに深く関わっていると考えられる。

(6) JSのポジティブ・フェイス

この要因が単独で、または「インターアクション内の期待(言語ゲスト)」とともにインプットされて、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は7件である。まず、「インターアクション内の期待(言語ゲスト)」の要因もインプットされた2件の事例において、CSが不一致に伴うJSのフェイスへの侵害を考慮し、そして、上記の(2)で述べたように、日本語能力の不足も考慮して、自己表示の逸脱の調整を優先させて回避的不一致応答を行った。残りの5件の事例では、例えば、第3章の例4が示したように、CS12は先行発話で提示された話題(バーゲンでの買い物)に違和感を覚え、不一致を感じて命題の逸脱を留意した。そして、CS12は明確な不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する(「相手がバーゲンでの買い物を楽しみにしているので興味がないと言ったら失礼だ」)恐れがあると予想し、自己表示の逸脱も留意した後、この逸脱の調整を優先させて回避的不一致応答を行うように調整した。

以上は自己表示の逸脱の調整が優先された事例のみに関与した社会的、場面的要因のペアを取りあげ、逸脱の調整の優先順位の選択における諸要因からの関与に注目し、事例を分析した。これらの事例において、自己表示の逸脱の留意に関与した要因のほうが、この逸脱の調整の優先により深く関わっていることが明らかになった。18件の事例のうち、「インターアクション内の期待(目的)」(1件)、「JSのポジティブ・フェイス」(4件)が単独で自己表示の逸脱の留意に関与した事例を除いて、残りの13件の事例では、自己表示の逸脱の留意に関与した要因が、「インターアクション内の期待(言語ゲスト)」、「インターアクシ

ン内の期待(文化ゲスト)」、「日本の社会文化的規範」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の4種類に集中している。神尾⁸⁵(2002、服部 2004:235 より引用)は、情報が会話の参加者の双方に属してはいるが、聞き手のなわ張りにより深く入る場合、付加疑問、あるいは否定疑問文を伴う不一致の表示が増えてくると述べ、そして、情報が聞き手のなわ張りに深く入り、話し手のなわ張りに属さない場合、発言を不明確にしたり緩和したりする要素を含む不一致の表示が増えてくると指摘した。この13件の事例から、命題の逸脱が留意された背景が異なるものの、CSが不一致の対象になる話題に関する情報(日本語の言語知識、日本の社会文化知識を含む)を十分に保有していないこと、これらの情報がJSの「なわ張り」により深く入ることを認知し、自己表示の逸脱を留意する場合、この逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行う傾向があると考えられる。

4.3.3.3 双方の逸脱に対する調整をともに考慮した不一致応答：婉曲な不一致の表示

CSが双方の逸脱の調整をともに考慮した事例は43件ある。これらの事例において、CSが留意した双方の逸脱の解消に向けて、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。双方の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のペアについて、事例ごとの調整傾向からみると、双方の逸脱の調整がともに考慮された事例のほかに、自己表示の逸脱の調整が優先された事例にも関与したペアもある。この視点によって、表12の集計結果を再整理すると、下記の表14の通りである。

表14：双方の逸脱に対する調整をともに考慮した事例(単位：件)

番号	命題の逸脱の留意に関与した要因	自己表示の逸脱の留意に関与した要因	自己回避	双方婉曲
1	中国語の言語的規範	場面の接触性	0	4
2		話題に関する情報の保有度(低い)	0	1
3	中国の社会文化的規範	日本の社会文化的規範	0	2
5	日本の社会文化的規範	JSのポジティブ・フェイス	0	1
6	CSの接触規範	日本の社会文化的規範、 インターアクション内の期待(目的)	0	1
7	実情	日本の社会文化的規範、 JSのポジティブ・フェイス	1	1

⁸⁵ 情報のなわ張り理論の理論的側面は、神尾(1990、1998、2002)を参照すること。

番号	命題の逸脱の留意に関与した要因	自己表示の逸脱の留意に関与した要因	自己回避	双方婉曲
8	実情	JS のポジティブ・フェイス	4	13
9		話題に関する情報の保有度(低い)	1	15
10	常識	話題に関する情報の保有度(低い)、 媒体(電話)	0	1
11	CS の個人規範	JS のポジティブ・フェイス	0	1
12	CS のポジティブ・フェイス	JS のポジティブ・フェイス	0	1
13	CS のインタレスト	JS のポジティブ・フェイス	0	1
14	インターアクション内の期待 (話題)	JS のポジティブ・フェイス	1	1
合計			7	43

この 43 件の事例のうち、4.3.3.2 で提示したように、7 番の「実情、日本の社会文化的規範、JS のポジティブ・フェイス」、8 番の「実情、JS のポジティブ・フェイス」、9 番の「実情、話題に関する情報の保有度(低い)」、14 番の「インターアクション内の期待(話題)、JS のポジティブ・フェイス」の四つのペアは、双方の逸脱の調整がともに考慮された 30 件の事例に、そして、自己表示の逸脱の調整が優先された 7 件の事例にも関与している。これらのペアでの諸要因が逸脱の調整の優先順位に与える影響について、自己表示の逸脱の調整が優先された事例と合わせて考察するが、まず、双方の逸脱の調整がともに考慮された事例のみに関与した要因から分析していく。

CS が留意した双方の逸脱の解消、軽減を考慮し、不一致を婉曲的に示すように応答を調整したため、命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のほうが、調整ストラテジーの選択により深く関わっていると考え。上記の四つの要因のペアが関与した 30 件の事例を除いた 13 件の事例では、命題の逸脱の留意に関与した要因は、「中国語の言語的規範」、「中国の社会文化的規範」、「日本の社会文化的規範」、「CS の接触規範」、「常識」、「CS の個人規範」、「CS のポジティブ・フェイス」、「CS のインタレスト」の 8 種類の要因に集中している。なお、「日本の社会文化的規範」の要因を除いた 7 種類の要因が関与した事例は、参照された規範(常識⁸⁶を含む)のリソースが CS 側にある点で、または、CS のフェイス欲求(インタレストの保持を含む)に関わる点では共通している。換言すれば、これらの要因が関与した事例は、自己表示の逸脱が留意された背景において異なるが、CS が自分側に属する母語規範(言語的、社会文化的)、または個人レベルの規範(接触規範や個人規範、ポジティブ・フェイスやインタレストの保持に関する規範)を参照し、留意した命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮し、婉曲的不一致応答を行うように調整した点

⁸⁶ 本研究での「社会的常識」の扱い方について、第 3 章の 3.2.2 での説明を参照すること。

では共通している。これより、命題の逸脱の留意に関与した要因別に、双方の逸脱の調整がともに考慮された事例を考察していく。

(1) 中国語の言語的規範

この要因が単独で命題の逸脱の留意に関与した事例は5件である。例えば⁸⁷、JS20は「金遣いが荒い」を「大胆地花钱」(お金を大胆に使う)と中国語に訳したが、これに対して、CS18は「使い方が正しくない」と不一致を感じ、中国語の言語的規範からの違反であると命題の逸脱を留意した。応答時に、FUIで「JS20の訳が正しくないで直そうと思ったが、日本語では断言することがよくないとされているので、日本語を話す時はいつも言い切らないように気を付けている。ここでも正しくないと言わないようにした」、「やはり“ちょっと”のような限定表現をつけないと気がすまない感じだった」と報告したように、CS18が場面の接触性(ファン 2010:81)という要因をインプットし、「日本語では直接的な否定はふさわしくない」といった規範(cf. キム 2008:19-20)に従って、明確な不一致の表示を不適切だと判断し自己表示の逸脱も留意した。そして、CS18が双方の逸脱の解消を考慮して、「ちょっと」と程度限定の表現を用いて不一致を示すように応答を調整した。加藤(2010:185)は、非母語話者の言語的逸脱に対し、日本語母語話者は言語ホストとして、「正しい日本語の言語的規範に従わなければならない」との規範を顕在化させ、調整を行う場合があるが、調整のタイミングや調整のしかたにおいて、対人関係に関わる尊重規範も影響を及ぼしていると指摘した。この5件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CSが中国語の言語的規範を参照し命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮し、婉曲的な不一致の表示を選択した。

(2) 中国の社会文化的規範

この要因が単独で命題の逸脱の留意に関与した事例は2件である。例えば、美術館の見学に行ってきたCS14⁸⁸が、美術への関心は中国人より日本人のほうがずいぶん高いと感想を述べたが、JS16に「本当に↑」と疑われた。先行発話において、CS14は「中国では朝からもう開館待ちの行列ができていたことを見たことがないので、やはり日本人のほうは関心が高い」と不一致を感じ、中国の社会文化的規範(e.g. 美術館の前で行列ができることはまれである)からの違反であると命題の逸脱を留意した。応答時に、「中国人の私からみれば、やはり日本人のほうは美術に高い関心を持っていると思うが、日本人にとっては普通の光景で、もう見慣れているからそういう自覚を持っていないかもしれない」、「自分が見た光景を事例として提示することにとどめたほうがいいと思った」とFUIで報告したように、CS14は日本の社会文化的規範(e.g. 美術館の前で朝から行列があることはごく普通で、日本人は美術への関心が高いことの証明ではない)をインプットし、自己表示の逸脱も留意した。そして、CS14が双方の逸脱の解消を考慮して、「行った日は9時半にもう長い列ができた」と自分の考えを支える裏付けの提示にとどめ、不一致をほのめかして示すよ

⁸⁷ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 4 を参照すること。

⁸⁸ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 15 の例 2 を参照すること。

うに応答を調整した。この2件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CSが中国の社会文化的規範を参照し命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮し、婉曲的な不一致の表示を選択した。

(3) CSの接触規範

この要因が「日本の社会文化的規範」、「インターアクション内の期待(目的)」とともにインプットされ、命題の逸脱の留意に関与した事例は1件である。この事例⁸⁹では、ホームビジットに持って行く土産について、JS3はホストファミリーに子供がいるので、高価なものを用意する必要がなく、折り紙のような子供と一緒に遊べる道具を持っていけばいいと発話した。この先行発話において、CS3は「自分の印象では、日本人は他人の家を訪れる時に、箱入りのお菓子を持っていくことが礼儀なので、やはりそうしたほうが妥当だ」、「箱入りのお菓子は高いが、折り紙だけではやはり失礼になるかもしれない」と不一致を感じ、接触規範(e.g. 日本ではホームビジットに行く時に、箱入りのお菓子を持っていくことが礼儀正しいやりかただ)からの違反であると命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS3の話聞いて折り紙などのおもちゃ類のものでもいいと分かったが、やはり失礼になるかもしれないと思っている。ここではJS3にアドバイスを求めることが目的なので、直接的に自分の考えを提示する必要はないと思った」とFUIで報告したように、CS3は関連する日本の社会文化的規範(e.g. 折り紙でも失礼にならない)、インターアクションの目的(アドバイスを求める)などの要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意した。そして、CS14が双方の逸脱の解消を考慮して、賛同の意を示してから、「日本のお菓子とか」と自分の考えをほのめかして示すように応答を調整した。この1件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CSが自分の接触経験によって形成された接触規範を参照し、命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的な不一致の表示を選択した。

(4) CSの個人規範

この要因が単独で命題の逸脱の留意に関与した事例は1件である。この事例⁹⁰では、CS13が神戸の大学に進学する可能性があると言った後、神戸が日本海側に位置するから寒いところだとJS15が発話した⁹¹。この先行発話において、CS13が「自分はある地方の気候の特徴を捉えるには、夏の暑さを基準にしているので、千葉は暑いところだと思っている」、「神戸と千葉は緯度がほぼ同じなのでそれほど変わらないと思う。寒いという表現がおおげさだ」と不一致を感じ、個人規範(e.g. 暑いところだと考える千葉と緯度が同じなので、寒いところではない)からの違反であると命題の逸脱を留意した。応答時に、「千葉が暑いところだというのは自分の基準からの判断で、JS15はそう思っていないかもしれないので、直接的に否定することはよくないと思った。“千葉は暑くないですか”のような言い方は自分の考えを伝えることができ、相手に確認してもらう余地もあるので、このような質問の形で発話した」とFUIで報告したよう

⁸⁹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア2の例1を参照すること。

⁹⁰ 会話の原文は資料編(会話例)のペア14の例14(255～258行目)を参照すること。

⁹¹ JS15はFUIで「実際のことは分からないが、神戸は日本海側のほうにあるからなんとなく寒いイメージがする」と報告した。

に、CS13 が相手のポジティブ・フェイスという要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意した後、質問の形で不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。この 1 件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CS が個人規範を参照し、命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的な不一致の表示を選択した。

(5) CS のポジティブ・フェイス

この要因が単独で命題の逸脱の留意に関与した事例は 1 件ある。この事例⁹²では、JS21 が中国語の宿題⁹³に書いた内容(CS18 の故郷の人は性格が「乱暴」だ)において、CS18 が「乱暴という表現は不適切で納得できなかった。これを見て驚いた」と不一致を感じ、自分のポジティブ・フェイス(故郷のイメージに関連するメタポジティブ・フェイス)が侵害されると命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS21 がネットから調べてきた内容をそのままとめただけで、本当にそう思っているとは限らない」、「JS21 が内容を中国語に訳した時は正しく訳せなかっただけかもしれない。だから、直接的に否定することはよくないと思った」と報告したように、CS18 は明確な不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想し、自己表示の逸脱も留意した後、「なんで粗暴(乱暴)と書いてありますか」と質問の形で不一致をほのめかして示すように応答を調整した。この 1 件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CS が自分のポジティブ・フェイスの保持に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的な不一致の表示を選択した。

(6) CS のインタレスト

この要因が単独で命題の逸脱の留意に関与した事例は 1 件ある。この事例⁹⁴では、土日に一緒に勉強すると提案した JS6 の先行発話において、CS6 は「土日でも勉強の時間になると疲れる。土日はやはりゆっくりしたいからそれ以外の日がいい」と不一致を感じ、自分のインタレストが侵害される(e.g. 労力、時間のコストがかかる)と認知し命題の逸脱を留意した。応答時に、「相手がもっと忙しいのに空いている時間帯を真剣に探してくれて、土日にしたくないと言うと申し訳ない。まず賛成して、ついでにほかの日はできないかと聞いてみようと思った」と FUI で報告したように、CS6 は「JS のポジティブ・フェイス」の要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意した後、賛同の意を示してから、「金曜は↑」と質問の形で不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。この 1 件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CS が自分のインタレストの保持に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的な不一致の表示を選択した。

(7) 日本の社会文化的規範

この要因が単独で命題の逸脱の留意に関与した事例は 1 件ある。この事例⁹⁵では、学会

⁹² 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 1(45～51 行目)を参照すること。

⁹³ JS21 は日本語のサイトから中国各地の人の性格についての資料を収集し、中国語に訳して宿題の内容にまとめた。

⁹⁴ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 5 の例 2 を参照すること。

⁹⁵ インターアクション・インタビューの資料は資料編(第 4 章の事例)の 4.2.3 の例 6 を参照すること。

メンバーによる食事会の食事代の支払いについて、相手⁹⁶がほかのメンバーが大学の教授や教員なので自分が払わなくてもよいと言い出した。この先行発話において、CS23は「食事代は身分と関係なく払うべきだ」、「自分の分を払うことは日本の常識だ。これを守らないと非常識の人間だと思われる」と不一致を感じ、日本の社会文化的規範(e.g. 割り勘と決められた以上、自分の分をちゃんと払うべきだ)からの違反であると命題の逸脱を留意した。応答時に、「あまりストレートに言うとはよくない。相手の気持ちを考慮して、やわらげに自分の考えを伝えた」と報告したように、CS23は「JSのポジティブ・フェイス」の要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意した。そして、CS23が双方の逸脱の解消を考慮し、「これはよくないでしょう」、「そう思わないでしょうか」などと推量のモダリティを用いて、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。この1件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CSが日本の社会文化的規範を参照し、命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的な不一致の表示を選択した。

(8) 常識

この要因が「話題に関する情報の保有度(低い)」、「媒体(電話)」の要因とともにインプットされ、命題の逸脱の留意に関与した事例は1件ある。この事例⁹⁷では、友人のJSが電話でCS27に家庭教師のアルバイト情報を教えたが、高校進学のための補導であるが英語だけを教えればいいとのJSの先行発話において、「通常は全ての科目を教えることだ。英語だけを補導することがちょっとおかしい」とCS27が不一致を感じ、常識(e.g. 進学補導なら全科目の補導となる)からの違反であると命題の逸脱を留意した。応答時に、「実際のことは分からなく、電話で長く聞くのもよくないので、少し確認しただけだった」と報告したように、CS27が情報の保有度、コミュニケーションの媒体(電話)の制限を考慮し、自己表示の逸脱も留意した。そして、CS27が双方の逸脱の解消を考慮して、「本当に英語だけでいいか」などと確認することにとどめ、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。この1件の双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、CSが常識を参照し、命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的な不一致の表示を選択した。

以上は双方の逸脱の調整がともに考慮された事例のみに関与した社会的、場面的要因のペアを取りあげ、逸脱の調整の優先順位の選択における諸要因からの関与に注目して事例を分析した。13件の事例のうち、「日本の社会文化的規範」(1件)が単独で命題の逸脱の留意に関与した事例を除いて、残りの12件の事例では、命題の逸脱の留意に関与した要因が、「中国語の言語的規範」、「中国の社会文化的規範」、「CSの接触規範」、「CSの個人規範」、「常識」、「CSのポジティブ・フェイス」、「CSのインタレスト」の7種類に集中している。自己表示の逸脱の調整が優先された事例において、自己表示の逸脱の留意に関与した要因が調整の優先順位の選択により強く影響を及ぼし、JSの「なわ張り」により深く関わる要

⁹⁶ この事例では、インタラクティブ相手は中国語の母語話者であるが、CS23が日本語を用いて不一致応答を行ったため、一種の接触場面(第三者言語接触場面、ファン 2006:129)になると考えられ分析の対象に入れた。また、要因として「JSのポジティブ・フェイス」の要因を援用した。

⁹⁷ インタラクティブ・インタビューの資料は資料編(第4章の事例)の4.3.3.3の例8を参照すること。

因である。これに対し、双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、命題の逸脱の留意に関与した要因が調整の優先順位の選択により強く影響を及ぼし、CSの「なわ張り」により深く関わる要因である。神尾 (2002、服部 2004:235 より引用)は、情報が話し手のなわ張りに深く入り、聞き手のなわ張りには属さない場合、単純な言いきりの形を取る不一致の表示が増えてくると述べ、そして、情報が双方のなわ張りに属し、話し手のなわ張りにより深く入る場合、否定疑問文の形を取る不一致の表示が増えてくると指摘した。この12件の事例から、自己表示の逸脱が留意された背景が異なるものの、CSが先行発話において、自分の「なわ張り」により深く入る中国語の言語知識や社会文化知識、接触規範、個人規範識や常識からの違反であると認知し、または自分のポジティブ・フェイスやインタレストが侵害されたと認知し、命題の逸脱を留意する場合、自己表示の逸脱の調整を優先させることより、命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で、婉曲的不一致応答を行う傾向のほうが強いと考えられる。

以上、自己表示の逸脱の調整が優先された事例のみに、そして双方の逸脱の調整がともに考慮された事例のみに関与した社会的、場面的要因のペアに焦点をあて、事例ごとの考察を通して、調整の優先順位の選択における諸要因からの関与を考察した。これより、この二つの調整順位の選択にも関与した社会的、場面的要因のペアを取りあげて考察する。

(1) 実情、日本の社会文化的規範、JSのポジティブ・フェイス

CSがこの三つの要因をインプットし、双方の逸脱を留意した事例は2件あり、「自己回避」と「双方婉曲」の1件ずつとなる。自己表示の逸脱を優先させた事例⁹⁸では、自転車の無断駐輪は罰金が取られる理由について、道が狭くて車が通れなくなるから、罰金を取るのもしょうがないとJS5が説明した。この先行発話において、CS5は「駐輪した道は自転車が置いていなくても車が通れるほど広くないから、通行の邪魔になると言われてもやはり納得できない」と不一致を感じ、実情(車が通れるほどの広い道ではない)に合わないとは認知して、命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS5の説明から、日本では罰金が取られることが当たり前のように入受け入れられていると分かった」、「これまでの説明でも、JS5がずっと道が狭いからしょうがないと言っているので、自分の意見を言っても意見の対立が続くだけなので、相手の説明に合わせて話を続けたほうがいいと思った」と報告したように、CS5は日本の社会文化的規範(e.g. 無断駐輪に対して罰金を取ること)、JSのポジティブ・フェイス(「ずっとその理由を提示してきたので、あわせて話したほうがいい」)の保持を考慮し、自己表示の逸脱も留意した。そして、自己表示の逸脱の調整を優先させ、CS5は「日本の道は本当に狭いですね」と賛同の意を示すことにとどめて、回避的不一致応答を行うように調整した。

CSが双方の逸脱の調整をともに考慮した事例では、第3章の例15が示したように、日本の最大の港はCS14が言った横浜ではなく、神戸かもしれないとのJS16の先行発話にお

⁹⁸ 会話の原文は資料編(会話例)のペア4の例1(7～19行目)を参照すること。

いて、CS14 が不一致(横浜は一番大きな港だ)を感じ、実情に合わない(「自分がインターネットから調べてきた情報で、信憑性について自信がある。相手はただ自分のイメージを言っているだけだ」)と認知し、命題の逸脱を留意した。応答時に、CS14 が関連する日本の社会文化的規範(e.g. 日本は中国と異なる統計方法で都市の規模を計算する)の要因、JS16 のポジティブ・フェイス(「このまま話し続けたら対立が強まるだけで、何の結果もでない。相手のイメージを尊重する」)の要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意した。そして、CS14 が双方の逸脱の解消を考慮し、中国のサイトで載せられている情報の提示にとどめて、さらに蓋然性を示す「かもしれない」を文末に付け加えることによって、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。

このペアが関与した事例は2件のみで、CSの全体的傾向として判定しきれないが、回避的不一致応答が選択されたCS5の事例では、CS5が同一話題をめぐって引き続き⁹⁹不一致を感じ、JS5との考えのくいちがいの度合いが高いと考えたことは、調整の優先順位の選択により深く関わっていると考えられる。

(2) 実情、JSのポジティブ・フェイス

CSがこの二つの要因をインプットし、双方の逸脱を留意した事例¹⁰⁰は17件あり、「自己回避」と「双方婉曲」の事例はそれぞれ4件、13件となる。事例数の比較から、CSが先行発話において、実情に合わないと命題の逸脱を留意し、そして、JSのポジティブ・フェイスの維持を考慮し自己表示の逸脱も留意する場合、双方の逸脱の解消をともに考慮し、不一致を婉曲的に示す調整傾向がより強いと見られた。CSが自己表示の逸脱の調整を優先させ、回避的不一致応答を行った4件の事例は、CSがJSの主張が強いと感じ、不一致の表示に伴うJSのポジティブ・フェイスへの侵害をより多く考慮し、不一致を潜在化させた点では共通している。例えば、第3章の例16が示したように、中華街の肉まんがおいしいとのJS16の先行発話において、CS14が不一致を感じ、実情に合わない(「食べてみたが、おいしいというより、お世辞で言っても普通ぐらい」)と命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS16が2回もおいしいと言いつけ、とても気に入ったようなので、おいしくないそのまま伝えたらどうも失礼になると思い、相手の発話に合わせておいしいと言った」とFUIで報告したように、CS14が相手のポジティブ・フェイスの維持を考慮し、自己表示の逸脱も留意した。そして、JS16が自分の考え(おいしい)を強く主張していることを配慮し、CS14は自己表示の逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行った。

(3) 実情、話題に関する情報の保有度(低い)

CSがこの二つの要因をインプットし、双方の逸脱を留意した事例は16件あり、「自己回避」の事例が1件のみで、残りの15件の事例は「双方婉曲」の事例である。事例数の比較

⁹⁹ これまでの会話において、CS5がすでにJS5の先行発話が実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意した。会話の原文は資料編(会話例)のペア4の例1を参照すること。

¹⁰⁰ CSが「実情、インターアクション内の期待(言語ゲスト)、JSのポジティブ・フェイス」、「実情、日本の社会文化的規範、JSのポジティブ・フェイス」をインプットし、双方の逸脱を留意した事例は1件ずつあり、すでに分析されたため、ここでは取り入れなかった。

から、CS が先行発話において、実情に合わないと言明の逸脱を留意し、そして、不一致の対象になる話題に関する情報を十分に保有していないことを考慮し、自己表示の逸脱も留意する場合、双方の逸脱の解消をともに考慮し、不一致を婉曲的に示す調整傾向がより強いとみられた。例えば¹⁰¹、アルバイト先では外国人でも日本人と同じように、申し込めばシフトの時間を変更してもらえると JS20 が発話したが、この先行発話において、CS18 は不一致を感じ、実情に合わない(「アルバイト先では、外国人ならなかなかシフトを変えてもらえないと言語学校に通う友達から聞いた」)と認知し命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS20 が言ったように簡単に換えられると思わないが、自分はまだバイトの経験がないので、実際のことが詳しくない」、「友達の事例を提示し、外国人は日本人と同じようにバイトの時間を簡単に換えられないかもと言おうとした」と FUI で報告したように、CS18 が関連情報(e.g. アルバイト先でのシフト変更に関する情報)の不足によって、自己表示の逸脱も留意した。そして、CS18 は双方の逸脱の解消をともに考慮し、自分の考えを支える裏付けの提示によって、不一致をほのめかして示そうと調整した。この 16 件の事例は、命題の逸脱の留意に関与した要因が「実情」に集中するため、十分ではないが、CS が話題に関する情報の一部を保有していると予想できる。よって、CS が実情に合わないと言明の逸脱を留意し、情報の保有度を考慮し自己表示の逸脱も留意した後、不一致の表示を回避することより、自分が保有する情報に基づいて、不一致を婉曲的に示すように調整する傾向があると考えられる。

(4) インターアクション内の期待(話題)、JS のポジティブ・フェイス

CS がこの二つの要因をインプットし、双方の逸脱を留意した事例は CS12 の事例¹⁰²に集中し、「自己回避」と「双方婉曲」の事例は 1 件ずつとなる。「双方婉曲」の事例では、JS14 が服を買うという話題を持ち出したが、CS12 は「服を買うことに興味がない。この話題を続けたくない」と先行発話において不一致を感じ、話題に違和感を覚えたことで命題の逸脱を留意した。応答時に、「JS14 は服を買う気が満々なので、否定的意見を直接的に述べることはよくないと思った」、「かも」をつけて、自分は買わないほうだと提示しただけだ」と FUI で報告したように、CS12 が JS14 のポジティブの保持を考慮し、自己表示の逸脱も留意した。そして、CS12 は双方の逸脱の解消をともに考慮し、「今年は夏服を買わないかも」と不一致をほのめかして示すように調整した。「自己回避」の事例では、CS12 が服を買う話題をめぐって引き続き不一致を感じ、命題の逸脱(「JS14 がまた服の話を出して、本当に興味がない」)を留意したが、応答時に、「すでに服を買わないと言ったが、また買わないと言うと対立が強まるから、とりあえず聞いておくことにした」と報告したように、自己表示の逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行うように調整した。

事例が 2 件のみで CS の全体的傾向として判定しきれないが、CS が同一話題をめぐって引き続き不一致を感じ、命題の逸脱を留意する場合、1 回目以後の応答では JS のフェイス

¹⁰¹ 会話の原文は資料編(会話例)のペア 19 の例 24 を参照すること。

¹⁰² 会話の原文は資料編(会話例)のペア 13 の例 6、例 13 を参照すること。

維持をより多く考慮し、不一致を潜在化させる戦略を選択する可能性が高まると示唆された。

以上、自己表示の逸脱の調整が優先された事例にも、そして、双方の逸脱の調整がともに考慮された事例にも関与した社会的、場面的要因のペアを取りあげ、逸脱の調整の優先順位を選択における諸要因からの関与に注目し、事例を分析した。CS が「実情、JS のポジティブ・フェイス、日本の社会文化的規範」の要因のペア、そして、「インターアクション内の期待(話題)、JS のポジティブ・フェイス」の要因のペアをインプットし、双方の逸脱を留意した事例は、それぞれが 2 件であり、事例数が限られている。CS の全体的傾向として判定しきれないが、CS が同一話題をめぐって引き続き不一致を感じ、JS との考えのくいちがいの度合いが高いと認知する場合、1 回目以後の応答では、JS のポジティブ・フェイスの維持をより多く考慮し、回避的不一致応答を選択する可能性が高まると示唆された。CS が「実情、JS のポジティブ・フェイス」の要因のペア、そして、「実情、話題に関する情報の保有度(低い)」の要因のペアをインプットし、双方の逸脱を留意した事例では、事例数の比較から、CS が双方の逸脱の解消を考慮し、婉曲的不一致応答を選択する傾向がより強いとみられた。Rees-Miller(2000:1098)は、不一致の表示の中でも事実に対する訂正がルーティーンとして行われており、過酷なものではないと指摘した。この指摘を参考にして、CS が先行発話において実情に合わないと言題の逸脱を留意し、さらに、ほかの要因をインプットし自己表示の逸脱も留意する場合、不一致を潜在化させることより、言題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的不一致応答を選択する傾向のほうが強いと確認できる。なお、「実情、JS のポジティブ・フェイス」がインプットされ、回避的不一致応答が行われた 4 件の事例は、CS が JS の主張が強いと感じ、不一致の表示に伴う JS のポジティブ・フェイスへの侵害をより多く考慮し、不一致を潜在化させた点では共通している。

4.4 逸脱の留意が生じなかった不一致応答

以上、逸脱が留意され言語管理が行われた CS の不一致応答の事例を取り上げて考察した。本研究で収集した事例のうち、上記の言語管理が行われた事例のほかに、逸脱が留意されずに行われた不一致応答の事例もある(インターアクション・インタビュー：6 件、自然会話場面：30 件、擬似自然会話場面：3 件)。この 39 件の事例では、事実情報(14 件)、または、ある事柄に対する感想や評価(25 件)をめぐって不一致が生じた後、第 3 章の例 10 で示したように、CS が一つの異なる考えとしての JS の先行発話の妥当性を容認し、言題の逸脱を留意せず、そして、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意せずに不一致を示して応答した。その背景には、まず、Sifianou (2012:1555)が指摘したように、参加者の個人的特質(personal traits)、参加者間の接触歴(relational histories)が不一致の表示に用いられる特定の戦略の選択と使用に強く関与することがあると考えられる。その関与のしかたについて、Sifianou(2012:1558)は、議論好きな参加者がいるほか、あらゆる種類

の対立に対して反感を持つ参加者もいると述べ、長期的関係にある参加者は、特定のインターアクションに関する規範を共有し、参加者で許容される不一致の表示方法の境界についても共通の認識を有していると指摘した。この指摘から示すように、CS の不一致応答において、逸脱が留意され言語管理が活性化されることのほかに、CS の個人的特質、JS との接触歴などの要因によって、逸脱が留意されず、不一致応答が生成に近い形で行われることもあると考える。次に、職位、年齢、社会的役割などの差異による上下関係が潜在化している、との場面の特徴からの関与も大きいと考えられる。第3章の3.4.1で提示したように、親密関係にある参加者の間では、不一致の表示が必ずしもコンフリクトを引き起こし、インポライトネスな行動になるとは限らず、参加者間の親密さを示す指標になることもでき(Tannen 1984, Schiffrin 1984, Tannen&Kakav á1992, Locher 2004 ほか)、フェイス増強(face-enhancing)の役割を果たすことができる(Sifanou 2012:1560)¹⁰³。これらの39件の事例から、上下関係が潜在化する場面において、CS が不一致を明示的に示して応答することによって、相手との親密さを示し、または、インターアクションへの積極的な参加態度を示すことがあると確認できた。

4.5 上下関係が潜在化している場面でのCSの不一致応答の特徴

本章では、上下関係が潜在化している日中接触場面におけるCSの不一致応答を取りあげて分析した。言語管理が行われた事例について、「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階に焦点を当て、CSが留意した命題の逸脱、自己表示の逸脱の詳細、逸脱に対するCSの調整のバリエーションを明らかにし、これらの段階においてCSがインプットした社会的、場面的要因からの関与を考察した。また、生成的に行われた不一致応答の事例について、不一致の対象の性格、逸脱が留意されず、言語管理が行われなかったことの背景を考察した。

この222件の事例には、CSが逸脱を留意し言語管理を行った事例が179件(「その他」の4件の事例を除く)あり、CSが逸脱を留意せずに不一致応答を生成に近い形で行った事例が39件である。両方の事例数の比較から、不一致応答を行う際に、CSが何らかの規範を参照し、命題、自己表示の逸脱の片方、または双方を留意して、調整計画を立て計画を実施する、といった言語管理のプロセスをふまえて、応答を調整する傾向が顕著であることがわかった。

言語管理が行われた不一致応答のうち、CSが片方の逸脱のみを留意した事例は、命題の逸脱のみが留意された事例が81件であるのに対し、自己表示の逸脱のみが留意された事例は29件である。そして、CSが双方の逸脱をともに留意した事例を合わせてみると、命題の逸脱、自己表示の逸脱の留意が生じた事例はそれぞれ150件と98件であり、CSは不適切な不一致の表示方法より、JSの先行発話の内容のほうに多く注目し逸脱を留意する傾向

¹⁰³ Sifanou (2012:1560) では、直接的同意や沈黙に比べると、不一致の表示のほうはインターアクション参加への聞き手の関心をよりよく表せる(disagreement may indicate the addressee's interest through his/her involvement in interaction rather than indifference through a straightforward agreement or even silence)と指摘した。

があると示唆された。また、CS が双方の逸脱を留意した事例での調整の優先順位からみると、命題の逸脱に比べ(1 件)、自己表示の逸脱の調整が優先された頻度が高く(25 件)、双方の逸脱の調整がともに考慮された頻度が最も高い(43 件)ことが明らかになり、CS が双方の逸脱の解消を考慮し、不一致応答を調整する傾向が最も強いことが示唆された。

「逸脱の留意」の段階に関与した社会的、場面的要因の視点に基づいて考察すると、命題の逸脱の留意には、「実情」の要因が最も強く関与しているため、JS の先行発話の内容が事実情報に合わない場合、CS が先行発話において不一致を感じ、命題の逸脱を留意する傾向が強いと示唆された。その背後に、Grice(1975:47)の「質の原則」(maxim of quality)が働いていると考えられる。また、話題の性格によるところは大きい、JS の先行発話が「中国語の言語的規範」、「中国の社会文化的規範」からの違反であると認知する場合、CS が先行発話において命題の逸脱を留意することが生じやすい。なお、この二つの要因のインプットとともに、CS が話題に関する情報を JS より多く保有していると認知する場合、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、CS が命題の逸脱のみを留意する傾向があると示唆された。そして、Locher(2004:324)は、話し手が相手のフェイスより、自分のフェイス保持のほうに多くの関心を持つ場合、非緩和的な表示方法を用いて不一致を示すことが増える指摘したように、CS が先行発話において、自分の「ポジティブ・フェイス」、または「インタレスト」が侵害されたと認知する場合、命題の逸脱を留意する傾向があると確認できた。上記の要因のほかに、事例数が限られているが、CS が自分の発話意図が JS に誤解されたと認知する場合の「誤解」、会話の進行や話題に違和感を覚える場合の「インターアクション内の期待」の要因や、CS の接触規範、個人規範、そして、インターアクションの参加目的などの要因が命題の逸脱の留意に関わった事例もみられた。

自己表示の逸脱の留意には、「JS のポジティブ・フェイス」からの関与が最も強いため、不一致の表示にあたって、CS がポライトネスの実現を最も多く考慮していることが示唆された。また、話題の性格によって、自分の異なる見解が「日本の社会文化規範」からの違反であると認知し、CS が日本語、日本文化の「言語／文化ゲスト」のカテゴリ化を意識する場合、CS が不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意する傾向があるとわかった。「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因に関与した事例から、CS が「質の原則」(十分にな証拠がないことは言わないこと、Grice 1975:47)に従い、不一致の表示方法を考慮する傾向があると示唆された。そして、CS が不一致の表示がインターアクションの参加目的の達成を妨げると認知する場合、その提示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意する傾向があるとわかった。なお、一人の CS の事例に集中するが、「ゼミ」の場という場面的特徴の要因がインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関わった事例もみられた。

「逸脱の調整」の段階では、上記の要因が引き続き CS の調整ストラテジーの選択、使用に関与している。CS が命題の逸脱のみを留意する場合、逸脱を解消するために、明示的不一致応答を選択して調整を行う。また、逸脱の留意に関与していないが、不一致の対象となる話題に関する情報の保有度が高いことも、CS が命題の逸脱を留意した後の明示的不一

致応答の選択に関与しているとみられた。CS が自己表示の逸脱のみを留意する場合、逸脱を解消するために、婉曲的、または回避的不一致応答を選択して調整を行う。回避的不一致応答が行われた 4 件の事例から、CS が「言語ゲスト」の要因をインプットし自己表示の逸脱を留意する場合、この逸脱を解消できない問題(村岡 2006:110-112)と捉え、「参加回避」(ファン 1999:40)の戦略を選択する傾向が示唆された。

双方の逸脱が留意された事例では、CS が命題の逸脱を優先させた事例は 1 件のみであり、自己表示の逸脱の調整を優先させ、または双方の逸脱の調整をともに考慮した事例はほとんどである。自己表示の逸脱を優先させた事例において、自己表示の逸脱の留意に関与した要因のほうで、この逸脱の調整の優先により深く関わっていることが明らかになった。これらの事例から、命題の逸脱が留意された背景が異なるものの、CS が不一致の対象になる話題に関する情報(日本語の言語知識、日本の社会文化知識を含む)を十分に保有していないこと、これらの情報が JS の「なわ張り」により深く入ることを認知し、自己表示の逸脱を留意する場合、この逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行う傾向があると考えられる。双方の逸脱の調整がともに考慮された事例において、命題の逸脱の留意に関与した要因が調整の優先順位の選択により強く影響を及ぼし、CS の「なわ張り」により深く関わる要因である。これらの事例から、自己表示の逸脱が留意された背景が異なるものの、CS が先行発話において、自分の「なわ張り」により深く入る中国語の言語知識や社会文化知識、接触規範、個人規範識や常識からの違反であると認知し、または自分のポジティブ・フェイスやインタレストが侵害されたと認知し、命題の逸脱を留意する場合、自己表示の逸脱の調整を優先させることより、命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で、婉曲的不一致応答を行う傾向のほうが強いと考えられる。なお、CS が「実情」の要因と、「JS のポジティブ・フェイス」、または「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因をともにインプットし、双方の逸脱を留意する場合、不一致を潜在化させることより、命題の逸脱の解消に向けて、自己表示の逸脱の解消も考慮した上で婉曲的不一致応答を選択する傾向のほうが強いと確認できた。

以上の分析結果に基づいて、上下関係が潜在化している場面における CS の不一致応答の言語管理プロセス、特に、「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階に関与した社会的、場面的要因を命題の逸脱、自己表示の逸脱の留意に分けて、下記の図 1 で示す。なお、CS が命題の逸脱を留意した後、異なる見解の提示という「ローカル」な言語行動が、インタラクションの参加目的の達成という「グローバル」な目標に沿うと認知する場合、不一致を明示的に、または婉曲的に示すが、沿わないと認知する場合は自己表示の逸脱を留意し、不一致の表示を回避する傾向である。このように、逸脱の留意、調整における「インタラクション内の期待(目的)」の関与が変動性を持つと考えるため、ほかの要因から独立した形で図 1 に入れた。

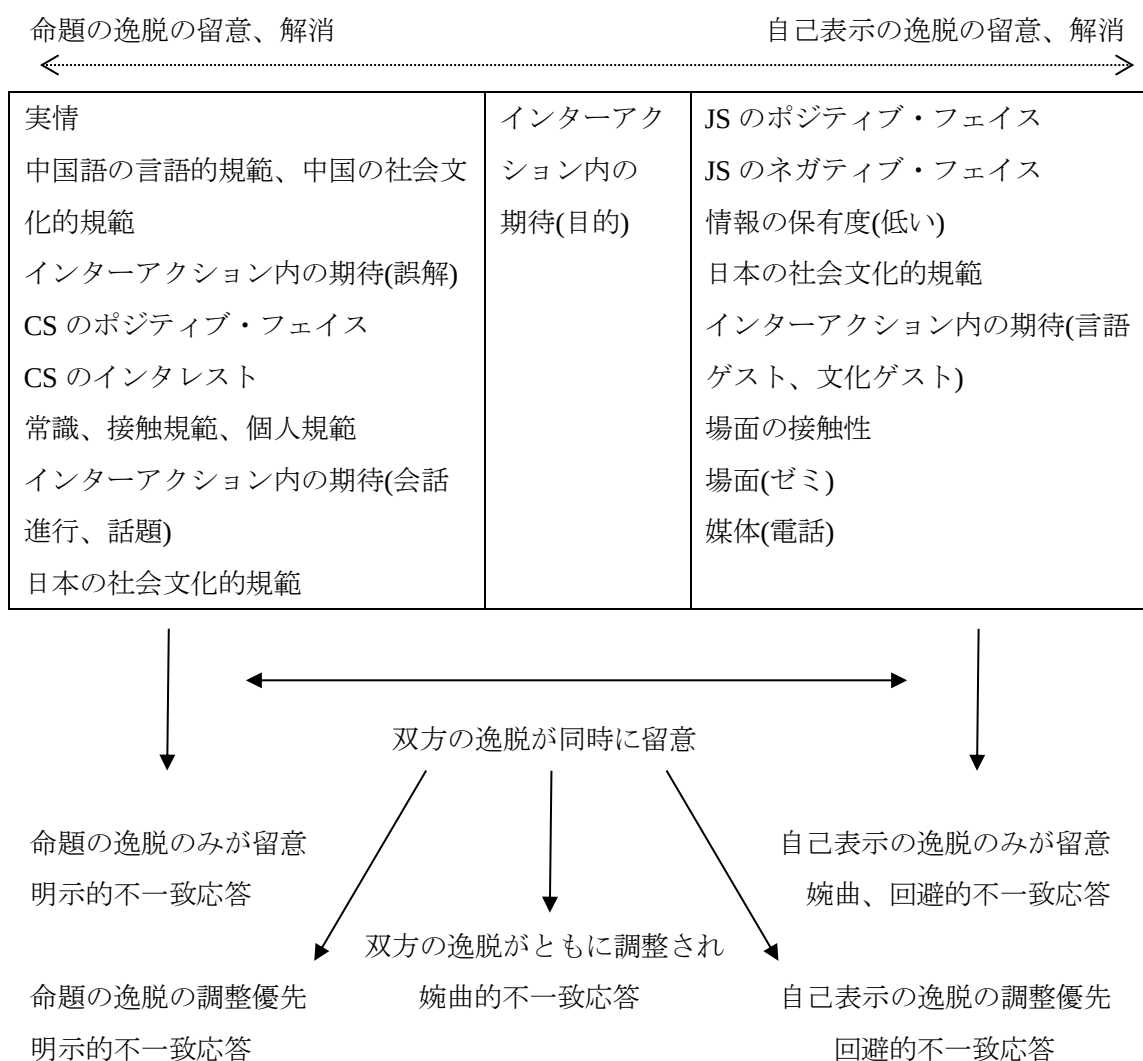


図 1：上下関係が潜在化する場面においてインプットされた要因と逸脱の留意、調整

本章では上下関係が潜在化している場面での CS の不一致応答を対象に、逸脱の留意および調整の段階に焦点を当て考察を行った。次章の第 5 章では、上下関係が顕在化している場面での不一致応答の事例を取り上げ、引き続き逸脱の留意、調整の段階に注目して考察を進めていく。特に、顕在化している「上下関係」という場面的特徴が CS の不一致応答の管理プロセスに与える影響をふまえて、事例ごとにインプットされた社会的、場面的要因からの関与を分析し、二つの場面の類似点と相違点を明らかにする。

第5章 社会的距離、力関係が顕在化する場面でのCSの不一致応答

本章では、職位、勤続年数、年齢、社会的役割などの側面での差異によって、上下関係が顕在化している(CSとJSの相互認識によって確立できている)場面におけるCSの不一致応答を分析する。

具体的には、第4章の分析手順と共通して、言語管理プロセスのモデルに基づき、「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階に焦点をあて、個々の不一致応答の事例においてCSがインプットした社会的、場面的要因、留意した逸脱、逸脱に対して行った調整の詳細を明らかにし、留意、調整の段階における諸要因からの関与を考察する。そして、逸脱が留意されずに行われた不一致応答の事例については、主に生成プロセスのモデルに基づいて、CSが「インプット」の段階で選択した要因の側面を考察する。最後は、以上の考察結果を踏まえ、CSの不一致応答が談話上に言語化されるまでの言語管理、生成のプロセスの諸段階において、どのような社会的、場面的要因が、どのように関与したか(あるいは関与しなかったか)を明らかにし、上下関係が顕在化している場面でのCSの不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスの特徴をあぶりだす。

5.1 CSの不一致応答における逸脱の留意、調整段階の全体的傾向

第4章では、上下関係が潜在化している場面でのCSの不一致応答を考察し、留意の段階において、命題の逸脱の留意には「実情」の要因、そして、自己逸脱の留意には「JSのポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因が強く関与する傾向がみられた。調整の段階において、特にCSが双方の逸脱を留意した事例では、JSの「なわ張り」により深く入り自己表示の逸脱の留意に関与した要因、そして、CSの「なわ張り」により深く入り命題の逸脱の留意に関与した要因が、それぞれ自己表示の逸脱を優先させたこと、双方の逸脱の調整をともに考慮したことにより深く関わっている。なお、上記の「実情」、「JSのポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因からの関与も大きいとみられた。これらの要因が、上下関係が顕在化している場面においてもCSにインプットされ、不一致応答に関する言語管理のプロセスに関与してくると予想される。また、ブラウン&レヴィンソン(2011:98-99)は、FTAの深刻度の測定に参照される要因として、聞き手が話し手に及ぼす力の量、つまり、非対称的な社会的側面である相対的力関係を示す「P(H, S)」を挙げ、これに共通して、スペンサー=オーディー(2004:33-44)は、インターアクションの参加者間の支配力の配分、社会的／相互作用的役割が、ラポールマネジメントのためのストラテジーの使用に関与する要因であると述べ、Locher(2004:328)は参加者の異なる役割、地位が不一致の表示方法に強く影響すると指摘している。様々な場面におけるCSの不一致応答に関する先行研究からも、社会的地位や年齢、職位などの側面における支配力の不均衡な配分から形成された上下関係が、不一致の表示、回避の選択、不一致の表示に用いられるポライトネス・ストラテジーの選択などに強く影響すると

指摘されている(Du 1984、Pan 2000、Liu 2004、王 2007 他)。以上の先行研究の指摘から、顕在化している「上下関係」の要因が、CS の不一致応答に最も強く影響する要因の一つであると示唆された。一方、意思決定や課題解決のための会話において、不一致の表示がむしろ期待される行為であり(Angouri&Locher 2012:1551)、特に、課題解決の会議においては、参加者間の職位、専門的知識などの差異に関係せず、不一致の表示が問題解決の機能を果たせると認められるため、フェイス侵害やインポライトネスな行為として否定的に評価されることがほとんどない¹(Angouri 2012:1576)と指摘された。Rees-Miller(2000)も、場面的コンテキストによって、社会的役割の配分と不一致の表示方法との対応関係が変動する可能性があるとして述べている。つまり、インターアクションの性格(e.g. 上司が同席する課題の解決方法を討論する会議)によって、CS が「上下関係」以外の要因もインプットし、「上下関係」の要因による影響と総合的に考慮した上で、不一致応答を管理していくことも起こりうると考える。

これより、上記の観点を念頭におきながら、上下関係が顕在化している場面での CS の不一致応答の事例を分析していくが、まず、逸脱の留意、調整の全体的傾向を確認する。下記の表 1(個々の集計項目名の詳細は第 4 章の 4.1 を参照する)では全体的傾向の集計結果を示し、表 2 では、逸脱が留意され言語管理が行われた事例の集計結果を取り出して、上下関係の潜在化している場面での集計結果とあわせて示す。

表 1：上下関係が顕在化する場面での不一致応答における逸脱の留意、調整の集計結果
(単位：件)

管理有無	留意された逸脱	調整された逸脱	事例件数	合計
管理あり	命題の逸脱のみ	命題の逸脱	29	113(78.7%)²
	自己表示の逸脱のみ	自己表示の逸脱	12	
	命題・自己表示	命題の逸脱	14	
		自己表示の逸脱	27	
		双方の逸脱	31	
管理なし	逸脱の留意なし	なし (生成プロセス)	1	1(1.5%)
その他	28 件(リコール・インタビューでの報告：26 件、JS の自己卑下に対する「実質的」否定的応答：2 件)			28(19.8%)

¹ 不一致の表示に伴う「個人攻撃」(personal attack)が否定的に評価される対象となる(Angouri 2012)。

² () 中の割合は全事例(142 件)に対するそれぞれの該当事例数の割合を表す。

表 2：言語管理が行われた不一致応答における逸脱の留意、調整の集計結果(単位：件)

留意された逸脱	調整された逸脱	潜在化場面： 事例件数	顕在化場面： 事例件数
命題の逸脱のみ	命題の逸脱	81(45.2%) ³	29(25.6%) ⁴
自己表示の逸脱のみ	自己表示の逸脱	29(16.3%)	12(10.6%)
命題・自己表示	命題の逸脱	1(0.005%)	14(12.3%)
	自己表示の逸脱	25(13.9%)	27(23.8%)
	双方の逸脱	43(24.1%)	31(27.7%)
合計		179(100%)	113(100%)

全体的傾向として、「管理あり」、「管理なし」、「その他」に属する不一致応答の事例数をみると、「管理あり」の事例数が最も多く(113件)、「管理なし」の事例が1件しかないことは特徴的である。「その他」でのリコール・インタビューから得られた26件の事例のうち、データの性格によって、命題の逸脱が生じたか否かについて判定しきれない事例は多いが、全ての事例においてCSが自己表示の逸脱を留意し、言語管理を行ったことを確認できた(詳しくは5.4で扱う)。上下関係が潜在化している場面(以下、潜在化場面とする)と比較すると、逸脱が留意され言語管理が行われた事例のほうは多数(「管理あり」+「その他」の26件=138件)である点で共通しており、全事例に対する言語管理が行われた事例の割合(約96.5%)が潜在化場面(約80%)より高いことがわかった。

表2に注目し「管理あり」の事例を留意のバリエーション別に分けて、それぞれの事例数を比較すると、CSが双方の逸脱を留意した事例は72件で6割以上を占め(約63%)、命題の逸脱のみを留意した事例はそれに次いで多く(29件、約26%)、自己表示の逸脱のみを留意した事例は最も少なく12件(約11%)であることがわかった。二つの場面は、CSが自己表示の逸脱のみを留意した事例の数が最も少ない点では共通しているが、事例数の最も多い事例の点では異なる傾向が見られた。具体的には、潜在化場面はCSが命題の逸脱のみを留意した事例であるのに対し、上下関係が顕在化している場面はCSが双方の逸脱とともに留意した事例である。逸脱が留意された事例を逸脱別に集計すると、命題の逸脱が留意された事例は101件(「命題のみ」+「命題・自己」)で、自己表示の逸脱が留意された事例は84件(「自己表示のみ」+「命題・自己」)あり、大差が見られなかった。この結果から、CSが不一致の表示方法より、先行発話の内容のほうを多く留意した潜在化場面と異なり、顕在化場面では、CSが先行発話の内容、不一致の表示方法の両方に注目し、言語管理を行う傾向がより強いと示唆された。

双方の逸脱が留意された事例(72件)での調整の優先順位からみると、CSが双方の逸脱とともに調整した事例、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例は近い割合を占め(双方：31

³ () の中の割合は「管理あり」の全事例(179件)に対するそれぞれの該当事例数の割合を表す。

⁴ () の中の割合は「管理あり」の全事例(113件)に対するそれぞれの該当事例数の割合を表す。

件、約 43%；自己表示：27 件、約 37%)、命題の逸脱の調整を優先させた事例は最も少なく 14 件(約 20%)であることがわかった。潜在化場面と照らしあわせると、調整の優先順位の選択において共通の傾向(双方＞自己優先＞命題優先)がみられた。なお、これらの調整の優先順位に属する事例が占める割合を比較すると、潜在化場面では、双方の逸脱の解消に向ける調整が最も多く(69 件のうちの 43 件、約 62%)、すなわち、CS が不一致の表示と対人関係の維持の二つの目的の達成を同時に考慮し、調整を行う傾向がより際立っている。これに対し、顕在化場面では、双方の逸脱の解消に向ける調整と、自己表示の逸脱を優先させる調整の割合がほぼ同じで、すなわち、CS が対人関係の維持をより多く考慮し調整する傾向と、双方の逸脱の解消をともに考慮し、調整を行う傾向と同じく強いとみられた。そして、CS が命題の逸脱の調整を優先させた事例の割合は、顕在化場面(14 件、約 20%)が潜在化場面(1 件、約 0.006%)より高いことが特徴的である。

5.2 CS の不一致応答における逸脱の留意と関与した社会的、場面的要因

本節では、上下関係が顕在化している場面での CS の不一致応答に関わるインタビューでの報告内容と会話内容、応答時の意識に関する CS の内省報告(FUI、インタラクショ
ン／リコール・インタビューのデータ)を分析対象に、CS が留意した逸脱、逸脱の留意における社会的、場面的要因からの関与の詳細を、逸脱の留意のバリエーション別に考察し明らかにする。

5.2.1 命題の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因

逸脱が留意され言語管理が行われた 113 件の事例のうち、CS が命題の逸脱のみを留意した事例が 29 件である。これらの事例で CS がインプットし、命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因について、下記の表 3 では要因別のインプット回数の集計結果を示し、単位が「回」である。そして、下記の表 4 では、事例別のインプットされた要因の構成の集計結果を示し、単位が「件」である。表 4 で示すように、CS が「実情」と「CS のインタレスト」の要因をともにインプットした事例が 1 件あるため、29 件の事例であるが、要因別のインプット回数の合計が 30 回となっている。

表 3：命題の逸脱のみが留意された事例に関与した社会的、場面的要因(単位：回)

命題の逸脱の留意に関与した要因		小計
実情		21(70%)
常識		3(10%)
社会経済的規範	会社の規範	2(8%)
	仕事の規範	1(3%)
CS のインタレスト		1(3%)

命題の逸脱の留意に関与した要因	小計
JS のインタレスト	1(3%)
CS のネガティブ・フェイス	1(3%)
合計	30(100%)

表 4：命題の逸脱のみが留意された事例(単位：件)

命題の逸脱の留意に関与した要因		小計
実情		20(69.4%)
実情、CS のインタレスト		1(3.4%)
常識		3(10.2%)
社会経済的規範	会社の規範	2(6.8%)
	仕事の規範	1(3.4%)
JS のインタレスト		1(3.4%)
CS のネガティブ・フェイス		1(3.4%)
合計		29(100%)

表 3 で示すように、CS が命題の逸脱のみを留意した事例では、「実情」のインプット回数が最も多く、30 回の 7 割を占めている。29 件の事例のうち、この要因に関与した事例は 21 件(単独で関与した事例：20 件、ほかの要因とともに関与した事例：1 件)であり、7 割近くである。上下関係が顕在化している場面においても、JS の先行発話が事実情報に合わない CS が認知する場合、Grice(1975:47)の「質の原則」に従い、先行発話において命題の逸脱を留意すると同時に、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意しないことは生じやすいと示唆された。

その次に多くインプットされたのが「常識」、「社会経済的規範」の要因である。これらの事例では、CS が JS の先行発話が世間一般に共有されている常識からの違反であり、または、参加している社会経済的活動に関する規範からの違反であると認知し、命題の逸脱を留意した。残りの 3 種類の要因は、すでに第 4 章の考察で提示した「CS のフェイス」、「CS のインタレスト」のほかに、「JS のインタレスト」の要因も含まれている。

これより、要因別のインプット回数の順番に基づき、表 3 の要因が単独で、そしてほかの要因とともに命題の逸脱の留意に関与して事例を例示し、CS が留意した逸脱、逸脱の留意における諸要因からの関与を分析する。なお、この節では、主に「逸脱の留意」の段階を考察するため、事例の例示にあたり、留意の段階に最も強く関わる CS の報告内容、会話内容の部分のみを取り出して例示する。

5.2.1.1 単独の社会的、場面的要因が関与した事例

まず、CS が 1 種類のみの要因をインプットし命題の逸脱のみを留意した事例を分析する。

(1) 実情

CS が「実情」の要因のみをインプットし、命題の逸脱を留意した事例は 21 件である。これより、第 4 章の 4.2.1 でも提示した CS が実体験によって確認が取れた事実情報として捉えている「実情」、そして、CS 自身や中国に関するその真偽が実証可能な事実情報としての「実情」の要因が関与した事例を、1 件ずつ取りあげて分析する。

例 1 16 歳のエリアキャプテンがいた(実情)

番号	発話者	発話
1	CS11	【】え、「地名」この前けっこう、なんかお、おかしかったと思ひまして一、16 歳の高校生は、なんかエリアー、ウィング↑スウィング↑ ⁵ なんか
2	JS12	<u>ならないならないならない、(???)</u>
3	CS11	<u>いや、ええと、エ、エリアキャプテン</u>
4	JS12	<u>エリアキャプテンならない、16 歳は、キャプテン 16 歳はキャプテンする人はたぶんないと思うしー</u>
5	CS11	<u>いや、ええと、前の店は一、ええと確かに 17 歳のキャプテンで一、そしてー【【</u>

例 1 では、CS11 がアルバイト先の休憩室で店長の JS12 と店の経営などについて話している。CS11 が前に働いていた地方の店⁶では、16 歳⁷の高校生が管理職(スウィング)を担当している(番号 1)と言った後、JS12 は否定を繰り返して(番号 2)応答した。この先行発話に対して、CS11 が否認表現(「いや」)を用いてから異なる見解(番号 3)を明確に提示し、JS12 に再び否定された(番号 4)後は、もう 1 回否認表現を用いて不一致を提示した(番号 5)。以上の会話のやりとりから、高校生が店の管理職になれるか否かをめぐって不一致が生じたと判定できる。JS の先行発話に対する感想として、「前の店では確かに 16、7 歳の高校生のエリアキャプテンがいた。JS12 にありえないと言われているので、確かにいたんですよとの情報を伝えたかった」と FUI で報告された。このように、CS が先行発話において、実情(高校生のエリアキャプテンがいた)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

例 1 のように、自分の経験により確認を取れた事実情報としてとらえる「実情」の要因

⁵ CS11 のアルバイト先では、従業員が仕事の熟練度によって、レベル 1-6、シフトリーダー、キャプテン、シニアキャプテン、スウィングと低いレベルから高いほうへランクづけされている。

⁶ CS11 のアルバイト先のほかの地域にある系列店舗である。

⁷ CS11 が FUI で、「記憶ではその高校生が 16、7 歳ぐらいだ」と報告した。

をインプットし、CS が命題の逸脱のみを留意した事例は 16 件である。

例 2 遅刻ではない(実情)

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略)) それで行ったのさ、(うん)たぶん、もう 6 時過ぎたころかな、(うんうん)そして、そこ(CS21 の担当するレジから離れているところ)でそのマネージャー(JS)に見つかった、もう当番の時間が過ぎたのに私がまだレジに入っておらず、うろうろしているからさ、(うん)彼女(マネージャー)は、その後は彼女から聞かれた、(うん)9 時ごろに彼女に聞かれた。“今日は遅刻したでしょう” って、(うん) “なぜその時はそこでうろうろしていたか” って、(うん)私は遅刻していないと答えて、(うん)遅刻ではないと言った、その男(バイト仲間)にそこへ行くように言われからと答えた
2	R	おう、彼(男のバイト仲間)と交替して
3	CS21	彼と交替して、(うん)でもその後はまた交替しなくていいと言われたから戻ってきた、(うん)私はその場でこの件を説明した
4	R	説明のしかたについて注意したところがあった↑
5	CS21	特に注意したところはない。ただ遅刻ではないことの説明だけを考えていた。(うん) もともとは遅刻ではないからさ、その男(バイト仲間)に頼まれて交替に行ったので、たまたまこっちのレジにいなかったのさ ((後略))

CS21 はアルバイト先のマネージャー(JS)とのインターアクションを報告している。当番の時間内で担当のレジから離れているところを JS に見かけられ、「遅刻したでしょう」(番号 1・6 行目)と疑われた。先行発話に対して、CS21 が遅刻ではなく、交替を頼まれ、バイト仲間のレジへ移動してただけである(番号 1・7～8 行目、番号 3)と応答したため、遅刻であったか否かをめぐって不一致が生じたと判定できる。先行発話に対する感想として、「もともとは遅刻ではない」、「事情の説明だけを考えていた」(番号 5・1～2 行目)と報告されたため、CS21 が先行発話において実情(遅刻ではない)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。また、応答時に「特に注意したところはない」(番号 5・1 行目)と報告したように、この事例では、CS21 が不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意せず、命題の逸脱のみを留意したことがわかった。

例 2 のように、CS 自身や中国に関するその真偽が実証可能な事実情報に合わないため、CS が JS の先行発話において命題の逸脱を留意した事例は 5 件である。

(2) 常識

例 3 人の別れ話をするべきではない(常識)

番号	発話者	発話
1	CS11	後この店はあと、ええと、自分やめて一、「苗字」やめて一
2	JS12	「苗字」わからない、(???)と別れれば
3	CS11	<笑>またそういうはなしをするまで一、いやです、いやいや、まあまあ、 <u>くた</u> とええの話ね>

例 3 も CS11 がアルバイト先で店長の JS12 と店の経営などについて話している時の事例である。CS11 は大学院の修了に伴いアルバイトをやめると話題を提起し、もう 1 人のバイト仲間もやめる予定である(番号 1)と発話した。JS12 がその人がもし恋人と別れればバイトをやめずに済むかもしれない(番号 2)と応答したが、この先行発話に対して、CS11 が「いやです、いやいや」(番号 3)と異なる見解を明確に提示したため、不一致が生じたと判定できる。先行発話に対する感想として、「付き合っている人の破局を期待することがおかしい。これはすべきではないことだ。店長がただバイトを辞めてほしくないから、彼氏と別れたほうがいいなどのことを言っているから。このような発話がよくないと思っている。「いやです」とは相手の発話内容が「いやだ」とことだ」と FUI で報告されたため、CS11 が JS12 の先行発話が社会的常識(e.g. 自分の都合で他人の破局を望むべきではない)からの違反であると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

(3) 社会経済的規範(会社の規範)

例 4 先にタイムカードを切って退勤を記録すべきだ(会社の規範)

番号	発話者	発話
1	CS29	そして、彼(JS)はだいたい片付けをし終わって、まあ 8 時、15 分だった、(おう)店の規定では、勤務時間内で仕事がまだ終わらない場合、まずタイムカードを切ってから残りの仕事を終わらせることになっている。でも、そういう人、つまり、 <u>仕事がまだ終わっていないならば、タイムカードを切らずにそのまま差しこみっぱなしにして、(うん)残りの仕事を終わらせてからカードをきるようにする人がいて、つまり残業の感じで、でも、私はこのような感じ(やり方)がとても嫌いなので、先にカードを切ってって言った</u>

例 4 では、CS29 がアルバイト先の勤務交替時に生じた、後輩の JS とのインターアクションを報告している。タイムカードを切らずに勤務時間内で終えなかった仕事を続けようとした JS に対して、CS29 が残りの仕事を終わらせる前に、まずカードを先に切ることだ(番号 1・7～8 行目)と応答したため、タイムカードを先に切るべきか否かをめぐって、不一致が生じたと判定できる。先行発話に対する感想として、「店の規定では先にカードを切るべきだと決められている。JS のやりかたがとても嫌いだ」(番号 1・2～3、7～8 行目)と報告

されたため、JS の先行発話が会社の規範(e.g. 勤務時間内で終えなかった仕事を続ける時は、まずタイムカードを切り、退勤時間を記録すること)からの違反であると認知し、CS29 が先行発話において命題の逸脱を留意したと確認できる。

(4) 社会経済的規範(仕事の規範)

例 5 新しい関数を導入すべきだった(仕事の規範)

番号	発話者	発話
1	R	それで昨日は調べているうちに何か問題を見つけられた↑
2	CS25	昨日、昨日は二つの小さなバグがあった、(おう)それは ((中略)) 私が自分でも試運転を 2 回やったから、 <u>彼(JS)がプログラムを書いた時はその新しい関数を導入しなかったためであると確定した</u>
3	R	だからそのプログラムはスムーズに動かなかった
4	CS25	そう、私がそれで彼を呼んできて、自分の試運転の結果をみせた、(おう) <u>彼にこれが間違っている、この関数を変えなかったと言った</u>

CS25 はプログラムのバグを見つけて、部下(JS)とのインターアクションを報告している。CS25 が JS に間違ったところを直接的に提示した(番号 4)ため、プログラムで用いるべき関数をめぐって不一致が生じたと判定できる。そして、JS が書いたプログラムのバグによって、プログラムの試運転が失敗した(番号 2)ため、そのバグ(JS の先行発話にあたると考える⁸)が仕事の規範(e.g. プログラミングに関する規範)からの違反であるため、CS25 に命題の逸脱と留意されたと確認できる。

(5) JS のインタレスト

例 6 餃子はただである(JS のインタレスト)

番号	発話者	発話
1	CS32	((前略)) それで、1 人の客は、私たちはギョウザをサービスしていたのさ(うん)、チップ ⁹ をくれたの、(うん) <u>2 個のギョウザをサービスしたが、どうしても 200 円を払うといっていて、(うん)それで私たちは、要らない、(うん)いけないと言った、それで、彼(客)はどうしてもは払うと言って、200 円を払ってくれた。(うん)その後は、しばらくしてまた買いにきて、肉まんを 3 個、ギョウザを 6 個ぐらい買った、(うん)私たちはまたそれ(サービス)としてギョウザ 1 個を渡して、<u>それでまた 100 円か 200 円を払ってくれた、それで【【</u></u>

⁸ Maynard(1985:3)が「あらゆる進行中の言語的、非言語的行動のタイプ」(any verbal or non-verbal proceeding act type)が対立しているならば、不一致を引き起こす引き金になりうると指摘した。この指摘を参考にし、JS が書いたプログラムにあるバグが不一致の対象であると判断し、分析の対象に入れた。

⁹ 定価では 2 個のギョウザの値段が 100 円であるが、その客が定価より多めに払ったため、CS32 は超過した分を「チップ」の感覚で受け取ったと報告した。

番号	発話者	発話
2	R	】】その時はどう、うんうん、どうぞ
3	CS32	それで、やはりよくないと思っていたのさ、(うん)もともとサービスなのにチップをもらえるなんて、(うん)、1人の男の仲間に走ってその客にお金を返してもらった

例6では、CS32が大学祭の時に中国料理の模擬店で働いたことを紹介し、商品の会計について客と交渉する時のインターアクションを報告している。JSがサービスとして無料で添えたギョウザの代金まで払ってくれたこと(番号1)に対して、CS32が「よくないと思っていた」、「もともとはサービスなので支払う必要がない」(番号3)と考えていた。これらの報告内容から、CS32が先行発話(代金を多めに支払ったことも含む)においてJSのインタレストが侵害されるおそれがあると予想し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

(6) CSのネガティブ・フェイス

例7 このような依頼は受け入れられない(CSのネガティブ・フェイス)

番号	発話者	発話
1	CS20	そして彼(JS)は“ <u>「苗字」さん(CS20)、あと皿も洗ってください</u> ”と言ったさ、これを聞いて腹立った、それで彼を呼び出して直接的に言った、(うん)“これは本来あなたのやるべき仕事で、僕がやる仕事ではない、 <u>「苗字」さん(ほかのバイト仲間)は君とおなじ時期に入店したが、もう一本回し¹⁰ができています</u> ”(後略))
2	R	このように直接的に言った

CS20がアルバイト先で後輩のJSから仕事を頼まれた時のインターアクションを報告している。皿の洗浄を頼むという先行発話に対し、CS20が直接的に異なる見解を提示した(番号1・2～5行目)と報告したため、その依頼の妥当性をめぐって不一致が生じたと判定できる。先行発話に対する感想として、「聞いて腹立った」(番号1・2行目)、「このように自分を指示してはいけない」(番号5)と報告されたため、CS20が職位と年齢の側面において下位であるJSの先行発話(指示)が自分のネガティブ・フェイス¹¹を侵害すると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

以上では、CSが1種類のみの要因をインプットし、命題の逸脱のみを留意した事例を分析した。これより、CSが1種類以上の要因をインプットし、命題の逸脱のみを留意した事例を分析する。

¹⁰ 1人で店の営業をこなすこと。

¹¹ さらに細かく分析すれば、JSの指示内容がCS20のネガティブ・フェイスへの侵害であり、JSがCS20を指示すること自体がCSの立場のフェイス(identity face, スペンサー＝オーティン2004:14, e.g.レベルの高い従業員であること)に対する侵害でもと考えられる。

5.2.1.2 複数の社会的、場面的要因が関与した事例

命題の逸脱のみが留意された事例のうち、1 種類以上の要因がインプットされて関与した事例は 1 件である。

例 8 終えなかった夜勤の仕事を完成すべきだ(実情、CS のインタレスト)

番号	発話者	発話
1	CS29	その後 8 時に(店に)入った後、昨日の人は、うん、昨日の朝までいた人はキャプテンではなく、(おう)1 人の、レベルの低い人(JS)だった、(おう)そして、店の中は、比較的、比較的、彼はまだぜんぜん片付けができていないさ
2	R	うん、彼は昨日の夜、あ、おとといの夜
3	CS29	おとといの夜、10 時から朝の 8 時まで、私が入った時は、交替の準備はまだ何もやっていない、(おう)、水槽も洗っていないし、深夜に入荷した肉なども整理されていない、そういう状況をみた私が機嫌悪くなったのさ、(うん)どうしてこれらの仕事はまだやっていないかと聞いて、彼は <u>昨日の夜はとても忙しくてちょっと散らかっている</u> と言っていて、(うん)、そこで私がパソコンをちょっと確認して、彼の当番時の売上高を調べられるからさ、(うん)売上高はそんなに高くなかった、つまり、彼がそれほど忙しかったわけではないさ、(おう)それで私が少し、しかるほどではないが、(うん)“ <u>そこまで忙しいわけがないでしょう、帰る前に片付けを終わいなさい</u> ”と言った、(うん)、そして、彼は分かった、分かったと言って、“はいわかりました、はいわかりました”って、(うんうん)答えた、彼よりレベルが高いからさ、(うん)、もしちゃんと片付けてもらわないと、次に入る私が疲れるから、非常に疲れる、だから帰る前にまず片付けを終えなさいという彼に言う必要があった

この事例は例 4 に前置する部分での事例であるが、CS29 は朝の勤務交替時のインタラク션을報告している。交替の準備がまだ終わっていない理由について、JS は夜勤が忙しかったと説明した。この先行発話に対して、CS20 が異なる見解を明確に提示した(番号 3・9～10 行目)ため、JS の説明をめぐって不一致が生じたと判定できる。先行発話に対する感想として、「売上高からみると、実は彼がいうほど忙しくなかった」、「片づけてもらえないと、交替の自分が疲れる」(番号 3・12～14 行目)と報告されたため、CS20 が先行発話において実情(それほど忙しくなかった)に合わなく、自分のインタレストが侵害される(余計な労力や時間のコストがかかる)と認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

5.2.2 自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因

逸脱が留意され言語管理が行われた 113 件の事例のうち、CS が自己表示の逸脱のみを留意した事例は 12 件である。これらの事例で CS がインプットし、逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因について、下記の表 5 では要因別のインプット回数の集計結果を示している。そして、下記の表 6 で示すように、CS が「上下関係」の要因をほかの要因とともにインプットした事例が 4 件(「上下関係、JS のポジティブ・フェイス、親疎(親しくない)」、「上下関係、話題に関する情報の保有度(低い)、親疎(親しくない)」、「上下関係、場面(公的)、JS のポジティブ・フェイス、話題に関する情報の保有度(低い)」、「上下関係、インターアクション内の期待(言語ゲスト)」)あるため、12 件の事例であるが、要因別のインプット回数の合計は 20 回となっている。

表 5：自己表示の逸脱のみが留意された事例に関与した社会的、場面的要因(単位：回)

自己表示の逸脱の留意に関与した要因	小計
上下関係	12(60%)
インターアクション内の期待(言語ゲスト)	1(5%)
JS のポジティブ・フェイス	2(10%)
親疎関係(親しくない)	2(10%)
話題に関する情報の保有度(低い)	2(10%)
場面(公的)	1(5%)
合計	20(100%)

表 6：自己表示の逸脱のみが留意された事例(単位：件)

自己表示の逸脱の留意に関与した要因	小計
上下関係	8(66.8%)
上下関係、インターアクション内の期待(言語ゲスト)	1(8.3%)
上下関係、話題に関する情報の保有度(低い)、親疎(親しくない)	1(8.3%)
上下関係、JS のポジティブ・フェイス、親疎(親しくない)	1(8.3%)
上下関係、場面(公的)、JS のポジティブ・フェイス、情報の保有度(低い)	1(8.3%)
合計	12(100%)

表 5 で示すように、「上下関係」の要因のインプット回数が最も高く、20 回の 6 割を占めている。そして、12 件の事例において、「上下関係」の要因のみが単独で自己表示逸脱の留意に関与し、ほかの 5 種類の要因が「上下関係」をはじめとする諸要因とともにインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与している。これによって、CS が自己表示の逸脱のみを留意した全ての事例において、「上下関係」の要因がインプットされ、逸脱の留意に

関与していることが明らかになった。この 12 件の事例では、CS が不一致を引き起こした JS の先行発話において、命題の逸脱を留意しなかったが、職位、勤続年数、年齢や社会的役割などの側面において顕在化している JS との差異を認知し、JS のほうが上位であることによって、不適切な不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意した。

これより、CS が「上下関係」を単独で、そして、ほかの要因とともにインプットし、自己表示の逸脱のみを留意した事例を分析していく。

5.2.2.1 「上下関係」の要因が単独で関与した事例

(1) 上下関係(社会的役割：客 - 店員)

例 9 わざと名札を隠すつもりではない(上下<社会的役割：客 - 店員>)

番号	発話者	発話
1	CS21	その時は髪を一筋束ねていて、このように前のほうに曲がって垂れていたのさ、(おう)その日はこのように垂れていて、急いでバイトに行ったので髪をすくのを忘れた、片方に曲がっている。髪はこのあたりに、(おうおう)それで、私の名札を遮るようになっていたかもしれない、(おう)遮ったとしても少しぐらいだと思うけど、(うん)髪の毛が長いから、(おう)そして、彼女(JS)は私を、私を見たのさ、 <u>“なぜ髪で名札を遮っているのか、これはいけない”</u> と言った、 <u>“隠しちゃダメ”</u> とか言っていた、(おう)けっこう怖い感じだった、(おう)言われた私も非常に、あのう、(うん)私は、 <u>“あ、すみません”</u> と言って、私は <u>“すみません”</u> と言った、(うんうん)そして髪を後ろに束ねたのさ、束ねてから名札を見せた、私の名前を
2	R	名札を隠している、これはいけないと言われた時はどのように思っていたか↑
3	CS21	わざとそうしたのではないさ、わざと髪で名札を隠そうとはしなかった、昨日はちょうど髪をすくのを忘れたから、(うん)でも、客に対しては、やはりこのように直接的に言えないから、(うん)そして確かに少しぐらいは遮られたかもしれない、自分もそれに気づかなかった、(うん)だから私はちゃんと謝った

例 9 では、CS21 がアルバイト先で名札が髪で遮られていると客の JS に言われた時のインターアクションを報告している。従業員として名札を髪で隠してはいけないとの JS の先行発話に対して、「わざとそうしたのではなく、髪をすくのを忘れて簡単に束ねただけなので自然にこのようになっている」(番号 3・1～2 行目)と CS21 が考えていたため、名札を隠すつもりであったか否かをめぐって不一致が生じたと判定できる。そして、髪が名札を遮ったことに対する感想として、「少しは遮られているかも、自分も気づかなかった」(番号 3・3～4 行目)が報告されたため、CS21 が不一致を感じたが、JS の先行発話において命題

の逸脱を留意しなかった(自分にも責任があると認める)と確認できる。

そして、応答時に「客に対しては直接的に言えない。謝った」(番号3・3～5行目)と報告したように、CS21が社会的役割(客-店員)の差異によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

下記の例10では、CSがアルバイト先の店長のJSに不一致応答を行う際に、「上下関係」の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意した。

(2) 上下関係(職位：店長-店員)

例10 バイト仲間をやめさせたほうがいい(上下関係<職位：店長-店員>)

番号	発話者	発話
1	CS11	(笑いながら)最低ですよ、あのう、ええと、「苗字」さんのことどうします↑これから
2	JS12	<u>「苗字」さんやめたいならやめてもいいよ</u>
3	CS11	<u>えー↑</u> {声が大きくなった}
4	JS12	<u>一応きょう、じゃ自分でもまた(される??)ぐらい(しか??)言えないんで一、いちおう「苗字」君に一、(はい)あのう、こまかめに入れなくなるよと言っというて、ちょっときつめに↑やめるとは言わなくていいんで一</u>
5	CS11	<u>あ、分かり</u> !!

例10では、CS11が頻繁に遅刻するバイト仲間の処分について店長のJS12に確認している(番号1)。本人がやめると言い出したらやめてもらってもいいとのJS12の発話に、CS11が「えー↑」(番号3)と驚きを示して応答した。先行発話に対する感想として、「やめさせようと自分が思っているが、店長の考えが理解できないでもない」、「処分を決めるのがやはり店長なので、自分の考えをすぐに提示することよりは、やはり確認してから言うことのほうがいいと思っていた」とFUIで報告されたため、処分のしかたをめぐって不一致が生じたと判定できる。そして、CS11が先行発話において命題の逸脱を留意しなかった(「店長の考えが理解できないでもない」)が、職位の差異(店長-店員)によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、自己表示の逸脱(「自分の意見をすぐに言わないほうがいい」)を留意したと確認できる。

番号4の発話では、JS12がほかの店員経由でそのバイト仲間をきつめに注意するが、やめるかどうかは本人の意志で決めてもらうことを指示したが、これに対して、CS11が受け入れの態度を示した¹²。応答時に「その人を辞めさせるとの考えを店長に提示しようと思っていたが、やはり自分はただのアルバイトなので、店長にアドバイスできる立場ではない。言うのをやめてとりあえず店長の指示を受け入れることにした」とFUIで報告したように、番号5の応答においても「上下関係」の関与によって、CS11が自己表示の逸脱を留

¹² 番号5の発話について、CS11がFUIで「JS12の発話に割り込まれたため、“分かりました”を言い終えなかった」と報告した。

意したと考えられる。

5.2.2.2 「上下関係」がほかの要因とともに関与した事例

CS が自己表示の逸脱のみを留意した事例には、上記の例 9、例 10 のように、「上下関係」の要因が単独で関与した事例のほかに、「上下関係」の要因がほかの要因とともに関与した事例もあり、全部で 4 件ある。これより、4 件の事例のうちの 2 件を取りあげ、CS が複数の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したことの背景をふまえて分析していく。残りの 2 件は自己表示の逸脱のみが留意された事例における調整を考察する 5.3.2 で扱う。

例 11 このような日本語は通じないわけでもない(上下<職位：課長 - 社員>、インターアクション内の期待<言語ゲスト>)

番号	発話者	発話
1	CS26	木曜日に彼(JS)に提出した時は、全体としては大丈夫だが、より分かりやすくするために、会議に参加せず初めてこの会議記録を見る人にも分かってもらえるように、もう少し書き直してくれと言われた、それでまた書き直して、昨日は直した内容をまた彼に見せて、 <u>これはやはり中国式の日本語で、まだ直す必要がある</u> と言われて、(うん)例えば、((後略))
		3 行を略した
5	CS26	そのことは言った。でも、課長がなおすと言ったからそれで書き直した、(うん)日本人が分からないと言ったからさ、これらの語彙を使って書いた文は中国語になってしまい、この日本語は日本人が分からないなら直せばいい、彼に自分が中国に滞在したことがあるので、(おう)書いた日本語が分かるが、中国語の分からないほかの日本人ならこれを読んでもわからないと言われたから<笑いながら>、それで私がまた書き直した、つまり、このように ((後略))
6	R	自分が書いた日本語でもいいと思った
7	CS26	私は大丈夫だと思う、使用した語彙は全部パソコンで変換できるからさ、(うん)簡潔に書こうと思って、漢語を使えば字数が少なくなるからさ、和語の語彙を使うと仮名などがあるから字数が多くなるさ、(うん)でも日本人なら読んでも分からないかも、彼が直すと言ったから、もう何もいう必要がなく直せばいい

CS26 は書き直した会議記録の日本語表現の妥当性について、課長の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。この事例では、不一致の対象が日本語の言語表現であるため、CS26 が職位の差異による上下関係のほかに、言語ゲストとしてのカテゴリ化も

意識するようになったと考える。日本語で書いてあるが、中国語発想の文であり、中国語の分からない日本人には理解できない(番号 1・5 行目)との JS の先行発話に対して、CS26 が漢語の語彙を多く使用したが、内容の理解に支障をきたさず、「大丈夫だ」(7 行目)と考えていたため、書いた文が理解可能であるか否かをめぐって不一致が生じたと判定できる。なお、中国人の自分や中国での滞在経験のある JS にとっては内容が分からないことはないが、中国語の分からない日本人なら分かりにくいかもしれない(番号 7・4 行目)とも CS26 が考えたため、先行発話の一部を認めたように見受けられ、命題の逸脱が留意されなかったと考えられる。応答時の意識について「課長が直すと言ったから書き直した」、「中国語の分からない日本人が読んでも分からないと言われたので、自分の考えを提示する必要がなく書き直せばいい」(番号 5、7)と語られ、CS26 が職位の差異(課長一部下)によって確立できた上下関係、日本語の言語ゲストの要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

例 12 京都の観光は計画を立てるまでする必要がないかも(上下<年齢：年上 - 年下>、保有度<低い>、親疎<親しくない>)

番号	発話者	発話
1	R	おう、彼女は何かアドバイスをしてくれたか↑京都観光の計画について
2	CS21	おう、彼女はその観光バスさ、(うん) <u>そのバスを利用して1日観光することができるなどのことを言った、これで、(うん)1回目の観光の時はまずみておいて、興味のあるところを見つけて、その後は計画を立てて、2回目の観光の時は興味のあるところへいけばいいって</u>
3	R	彼女のこのアドバイスをどう思った↑
4	CS21	彼女のこのアドバイス、(うん)でも私の考えでは、1回ぐらい行くことでもうじゅんぶんで、まあ、分からないが、また2回目の行く機会があるかもしれない、(うん)でも今のところからいえば、1回しかないさ
5	R	おう、それで彼女に言ったか↑
6	CS21	<u>これは言わなかった</u> 、(うん)でもこのことも考えていた、(おう)私は全部の見どころを必ず訪れるわけではないさ、有名なところをみればいいのさ、(うん)本当にこんなに見どころがたくさんあるのか、と思っていて、2回も行かなければならない、計画を立てる必要があるのかな
7	R	これも彼女に言わなかった↑

番号	発話者	発話
8	CS21	言わなかった、京都に行ったことがないさ、(うん)いったいどうなっているかは分からないから、もしかしたら確かに見どころがこんなにたくさんあるかもしれないと思って、(うん)だから言わなかった、そして、彼女は、もう 70 歳近くかな、いっしょにしゃべる時は気軽に話せるが、(うん)でも、まだそこまで親しくなっていない、知り合ってから 2 カ月ぐらいで、会ったことは 3 回ぐらいだけで、(おう)だから話す時はやはり気をつけている、(おう)敬語を使う時もある

CS21 は知り合いの JS と京都観光の計画について話し合う時のインターアクションを報告している。この事例では、不一致の対象が日本に関する情報であるため、CS21 が話題に関する情報の保有度も考慮するようになったと考える。京都は見どころが多いため 2 回に分け、計画を立ててから観光に臨む必要がある(番号 2)との JS の先行発話に対して、CS21 が 1 回しか行かない予定で(番号 4)、そして、見どころを全部みるわけではないので計画を立てるまでにして、2 回もいく必要がない(番号 6)と考えたため、京都観光の計画を立てることの必要性をめぐって不一致が生じたと判定できる。また、CS21 が不一致を感じたが、「もしかして確かに見どころがたくさんあるかもしれない」(番号 8・2～3 行目)とも考えたため、先行発話において命題の逸脱を留意しなかったと考えられる。

応答時の意識について、「行ったことがない、どうなっているかは分からない」、「JS が年寄りで、2 人の関係がまだそれほど親しくなったわけではないので、話す時はやはり気をつけている」(番号 9)と語られ、CS21 が話題に関する情報の保有度が低いこと、年齢の差異によって確立できた上下関係、そして、JS との親疎関係(接触頻度がまだ低く、親しい関係になったとはいえない)などの要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

5.2.3 命題の逸脱、自己表示の逸脱の双方が留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因

逸脱が留意されて言語管理が行われた 113 件の事例のうち、CS が双方の逸脱を留意した事例は 72 件である。これらの事例で CS がインプットし、逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の構成、要因別のインプット回数の集計結果を命題の逸脱、自己表示の逸脱の二つに分けて下記の表 7、表 8 で示す。

表 7：双方の逸脱が留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因
(命題の逸脱、単位：回)

双方の逸脱の留意に関与した要因(命題の逸脱)		小計
実情		34(47.2%)
常識		4(5.2%)
社会経済的規範	会社の規範	1(1.3%)
	仕事の規範	1(1.3%)
	経済的規範	5(6.5%)
CS のインタレスト		18(25%)
JS のインタレスト		1(1.3%)
CS のポジティブ・フェイス		8(10.4%)
合計		72(100%)

まず、命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の構成の側面から、上下関係の潜在化場面において CS が双方の逸脱を留意した事例(第 4 章の 4.2.3 の表 7 を参照する)と比較すると、「実情」、「常識」、「CS のポジティブ・フェイス」、「CS のインタレスト」の 4 種類の要因が共通していることが明らかになった。このことから、上下関係が顕在化するか否かに関わらず、CS が不一致を感じ、これらの要因をインプットする場合、先行発話において命題の逸脱を留意することが多くなると示唆された。そして、上下関係の顕在化場面において CS が双方の逸脱とともに留意した事例と、命題の逸脱のみを留意した事例(本章の表 3 を参照する)を比較した結果、「実情」、「常識」、「社会経済的規範(会社／仕事の規範)」、「CS のインタレスト」、「JS のインタレスト」の 6 種類の要因が共通し、「実情」のインプット回数が両方の事例においても最も高いこと、「CS のインタレスト」のインプット回数が「実情」の要因に次いで多いことがわかった。表 7 で示すように、72 件の事例のうち、この 2 種類の要因に関与した事例は 52 件(実情：34 件、CS のインタレスト：18 件)であり、7 割以上を占めている。表 3 の集計結果をあわせてみると、CS が先行発話において事実情報に合わない、または、自分のインタレストが侵害される恐れがあると認知する場合、命題の逸脱を留意する傾向が強いと示唆された。

以上の 6 種類の要因以外に CS がインプットした要因は、「経済的規範」、「CS のポジティブ・フェイス」の要因である。前者の場合は、実質的な経済活動の性格をもつインターアクションにおいて、CS が先行発話において関連する経済的規範からの違反であるためと認知し、命題の逸脱を留意した。後者の場合は、JS の先行発話が CS のポジティブ・フェイスに対する侵害となり、命題の逸脱と留意された。

下記の表 8 では、双方の逸脱が留意された事例において、CS がインプットし、自己表示の逸脱の留意に関与した要因の集計結果を示している。なお、CS が 1 種類以上の要因をイ

ンプットし、自己表示の逸脱を留意した事例は4件(「上下関係、インターアクション内の期待(目的)」、JSの「ムード」)、「上下関係、JSのポジティブ・フェイス、場面(公的)」、「上下関係、場面(公的)」、「上下関係、話題に関する情報の保有度(低い)」が1件ずつ)あるため、72件の事例であるが、要因のインプット回数の合計は78回となっている。

表8：双方の逸脱が留意された不一致応答に関与した社会的、場面的要因
(自己表示の逸脱、単位：回)

双方の逸脱の留意に関与した要因(自己表示の逸脱)	小計
上下関係	68(88%)
場面(公的)	2(2.4%)
インターアクション内の期待(目的)	1(1.2%)
JSのポジティブ・フェイス	3(3.6%)
JSのムード	1(1.2%)
話題に関する情報の保有度(低い)	3(3.6%)
合計	78(100%)

まず、自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の構成の側面から、上下関係の潜在化場面においてCSが双方の逸脱を留意した事例(第4章の4.2.3の表8を参照する)と比較すると、「インターアクション内の期待(目的)」、「CSのポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の3種類の要因が共通していることが明らかになった。このことから、上下関係が顕在化するか否かに関わらず、CSがこれらの要因をインプットする場合、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意することが多くなると示唆された。そして、上下関係の顕在化場面においてCSが双方の逸脱とともに留意した事例と、自己表示の逸脱のみを留意した事例(本章の表4を参照する)を比較した結果、「上下関係」、「場面(公的)」、「JSのポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の4種類の要因が共通し、「上下関係」のインプット回数が両方の事例においても最も高いことがわかった。表8で示すように、72件の事例のうち、「上下関係」がインプットされ自己表示の逸脱の留意に関与した事例が68件(単独で関与した事例：61件、ほかの要因とともに関与した事例：7件)であり、インプット回数が8割以上を占めている。表4の集計結果をあわせてみると、CSが主に職位、年齢、社会的役割などの側面におけるJSとの差異を考慮し、自己表示の逸脱を留意したことが示唆された。

以上の4種類の要因以外にCSがインプットした要因は、「インターアクション内の期待(目的)」、「JSのムード」である。これらの事例において、CSが不適切な不一致の表示方法がインターアクションの参加目的の達成を妨げ、または、JSのムードを害する恐れがあると予想し、自己表示の逸脱を留意した。

この 72 件の事例では、CS が不一致応答を行う際に、表 8 と表 9 の社会的、場面的要因とともにインプットし、命題の逸脱と自己表示の逸脱の双方を留意したが、インプットした要因の組み合わせの詳細は下記の表 9 で示す。行ごとに命題の逸脱の留意に関与した要因、列ごとに自己表示の逸脱の留意に関与した要因を並べ、「○」は当該の行と列の要因がペアでインプットされたことを示し、「()」にペアごとの事例数を提示した。

表 9：双方の逸脱が留意された事例に関与した社会的、場面的要因の組み合わせ(単位：件)

自己表示 命題	上下 関係	場面 (公的)	インターア クション内 の期待(目的)	JS の P. フェイス ¹³	JS の ムード	保有度 (低い)
実情	○(31 ¹⁴)	○(1)	○(1)	○(2)	○(1)	○(2)
常識	○(3)			○(1)		
社会経済的 規範(会社)	○(1)					
社会経済的 規範(仕事)	○(1)					
社会経済的 規範(経済)	○(5)					
CS の インタレスト	○(18 ¹⁵)	○(1)				○(1)
CS の P.フェイス	○(8)					
JS の インタレスト	○(1)					

表 9 で示すように、「上下関係」の要因が、命題の逸脱の留意に関与したすべての要因とペアでインプットされた事例はあり、72 件の事例における自己表示の逸脱の留意に、「上下関係」が単独で関与した事例、ほかの 5 種類の要因とともに関与した事例を合わせると 68 件でる。そして、表 8 で示すように、自己表示の逸脱の留意に関与した要因の中、「上下関係」のインプット回数が最も高い。このように、双方の逸脱が留意された事例において、CS が命題の逸脱を留意した後、主に「上下関係」の要因をインプットし、不一致の表

¹³ 紙面の幅による制限のため、「JS のポジティブ・フェイス」と「CS のポジティブ・フェイス」の要因を「JS の P.フェイス」、「CS の P.フェイス」と略して表示する。

¹⁴ この 31 件の事例には、「インターアクション内の期待(目的)」と「JS のムード」、そして、「JS のポジティブ・フェイス」と「場面(公的)」の要因も同時にインプットされた事例が 2 件ある。

¹⁵ この 18 件の事例には、「場面(公的)」の要因、または、「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因も同時にインプットされた事例が 1 件ずつある。

示方法を考慮し自己表示の逸脱を留意したことを示唆している。「上下関係」の要因のほか、第4章の4.2.3でも提示した、「JSのポジティブ・フェイス」(2件)、「話題に関する情報の保有度(低い)」(2件)の要因も自己表示の逸脱の留意に関与した。これより、「上下関係」の要因が単独で、そして、ほかの要因とともに自己表示の逸脱の留意に関与した事例、次に、「上下関係」以外の要因が自己表示の逸脱の留意に関与した事例の一部を取りあげ、双方の逸脱が留意された事例での「逸脱の留意」の段階を考察していく。この節で扱いきれない双方の逸脱が留意された事例は、「逸脱の調整」の段階を考察する5.3であらためて取りあげて分析する。

5.2.3.1 「上下関係」の要因が単独で自己表示の逸脱に関与した事例

CSが命題の逸脱を留意した後、「上下関係」の要因のみをインプットし、自己表示の逸脱を留意した事例は65件である。これより、事例を例示しながら考察していく。

(1) 上下関係(取引先 - 社員)

例13 これはただの言い訳だ(経済的規範、上下<社会的役割：取引先 - 社員>)

番号	発話者	発話
2	R	おう、あなたの会社のその計画書
3	CS30	それはまだここまでは至っていないが<笑いながら>、(おう)むこうの会社の社長(JS)が来た、このプロジェクトの責任者は、その会社は日本の会社だけど、このプロジェクトの責任者は中国人、(おう)その社長は、 <u>“インドの会社は中国人が、中国人が嫌い、私たちと中国人の関係がわるい、前には戦争もあった”</u> って、そして、 <u>“せっかくね、御社に声をかけちゃって、結局こういう話になっちゃって、もうあきらめるしかない、中断するしかない”</u> 、(おう) <u>“申し訳ないです”</u> と言った。実は私はこう考えていない、これはただの言い訳、言い訳だよ、(うんうん)その会社は独立してこの事業をやりたいだけだ、中国人はだめだと言われたら、責任者を変えればいいさ、 <u>“ただの言い訳だよ、そんなことを思うんだからもう勝手にやろ”</u> 、もちろんこれは直接的には言えない
4	R	直接的には彼に言えない
5	CS30	もちろん、私はただ <u>“あ、分かりました。残念ですね、また機会がありましたらいっしょにやりましょう”</u> と言っただけだ、自分は本当にどう考えているかとの話になると、それはぜったい彼には言えない、お客さんを気まずく感じさせてはいけないさ、相手はお客さんであることを配慮して、やはり顔を立ててあげる必要はある
6	R	おう、ただ分かりましたと言っただけで、実は独立して事業をやりたいとかのことは言わなかった↑

番号	発話者	発話
7	CS30	これはいえない<笑いながら>、主に彼らは、この話あなたたちから持ち込んだじゃ、(嗯)いまさらだめだというなよ、普通は言うなよ、(そうそう)このプロジェクトのためにもう何回も会議を開き、計画書もいくつか作った、今さらできないと言い出して、これは私たちの時間を無駄にしたのさ、(うん)もちろんこれは心の中でそうは思うだけで、直接的には言えない、やんわりと彼らに言わなければならない、言うべきところはやはり言う
8	R	彼らにまたほかのことを言ったのよね↑
9	CS30	そう、私はこのように言った後は、つまりとても残念で、また次回は機会があればと言った後は、むこうの社長はインドの会社がこのような考えだとは思わなかったと言って、そこで私はやんわりと彼らに言った (後略)

CS30 の会社が他社と協力して、インドの会社と合弁の形で工場をつくり、製品を日本に輸入するプロジェクトを計画している。例 13 では、CS30 がこの共同プロジェクトの進捗報告について、協力側の社長の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

このプロジェクトを担当する人が中国人であるため、取引がインドの会社に断られ、計画を余儀なく中止させられるとの JS の先行発話(番号 3・2～7 行目)に対して、CS30 が「こう考えていない。ただ相手が独立して事業を展開するための言い訳だ」(番号 3・8～9 行目)と考えていたため、プロジェクトが中止させられた理由をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱の留意

先行発話に対する感想として、「今さらできないと言い出して、今まで私たちがこのプロジェクトのために費やした時間を無駄にした」(番号 7・1～4 行目)と報告されたため、CS が JS の先行発話が経済的規範からの違反(e.g. プロジェクトの中止が会社のインタレストを侵害する)であると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

応答する際に、CS30 が不一致を示さずに JS の説明を受け入れる姿勢を示し(番号 5・1～2 行目)、応答時の意識について、「客を気まずく感じさせてはいけなから直接的には言えない」、「客の顔を立てる必要がある」(番号 5・3～5 行目、番号 7・5～6 行目)と報告された。これらの報告内容から、CS30 が社会的役割(取引先一社員)の差異によって確立できた「上下関係」の要因をインプットして、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

(2) 上下関係(部長 - 社員)

例 14 見積価格はせいぜい 30%を上乗せるまでだ(実情、上下<職位：部長 - 社員>)

番号	発話者	発話
5	CS21	どのように話していた、私の考えはつまり、例えば仕入れ価格に 10%、多くて 30%上乗せてもいい製品はあるが、いくつかの製品は、(うん)、ほかの商社の販売価格から考えると、上乗せ率が高すぎると、(うん)競争力がなくなる、いくつかの製品は 10%、20%しか上乗せできない
6	R	うん
7	CS21	それで、彼(部長)は、 <u>他社の価格をぜんぜんみない、比較しない客がいる(うん)、私たち(CS21 の会社)は、30%の純益がないと取引をしないことが原則なので、40%上乗せても高くはないと言った</u>
		6 行を略した
14	R	それでやはり部長が言った 40%に従って計画書を書いた
15	CS21	そう、言われたとおりに計画書を書いた
16	R	40%は合理的であると思っているか↑
17	CS21	合理的ではない(笑)、 <u>でも、部長もそう言ったし、会社の中でもこのよ</u> <u>うな決まりがあるので、その決まりに従って書いたのさ。客が必ずう</u> <u>ちの会社の見積価格と他社の価格を調べて、比較するからさ、(うん)、</u> <u>40%も上乗せると他社より高いことは部長も知っているはずだと思う</u> <u>けど、そう決められたから、それに従って計画書を作り直した</u>
18	R	多くとも 30%まで、40%上乗せたら、価格は高すぎると言った時は、何かを考えていたか↑
19	CS21	<u>言ったのは、ただ、40%なら他社の製品よりは高いということだけで、</u> <u>言う前に価格が高いという事実を伝えることにとどめ、部長に反対さ</u> <u>れたら、もう話さないと考えていた</u>

例 14 では、CS21 が自社製品の見積価格の設定について、部長の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

すべての製品は 40%上乗せするべきで、他社製品の値段を調べて比較しない客がいるから、高い価格設定ではないとの JS の先行発話に対して、30%以上の上乗せ率が高すぎて、このような価格設定は「合理的ではない」(番号 5、番号 17)と CS21 が考えていたため、見積価格の上乗せ率をめぐる不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱の留意

先行発話に対する感想として、「客が必ず価格を比較する」、「40%も上乗せると他社製品

より価格が高いことは事実だ」(番号 17・4 行目、番号 19・1 行目)と報告されたため、CS が JS の先行発話において実情 (客が他社製品の価格と比較すること。40%の上乗せ率は高めの価格設定だ)に合わないとは認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

CS21 が応答する前に関連情報の提示にとどめて、反対されたら不一致の表示を取り下げると計画した(番号 19・2～3 行目)こと、そして、「部長がそう決めまし、会社の決まりでもあるので、言われたとおりに計画書を書けばいい」(番号 17・1～2 行目)と報告された応答時の意識を合わせてみると、CS21 が職位の差異(部長－社員)によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

(3) 上下関係(先輩－後輩)

例 15 私が作った関係図は正しい(実情、上下＜勤続年数：先輩－後輩＞)

番号	発話者	発話
1	CS26	((前略))、彼(JS)が書いているうちに、“この図、この関係図”、つまり私が作ったその図でさ、(うん)、“この図、指向性には問題がある”と彼が言った、つまり、私が作ったその図にある、クライアント、会社、そして、媒体の三者間の関連性を示す矢印が間違っていると言われた。(うん)、そんなはずはないよと私が思っていた、だって、私がその図を何回もチェックしたし、ブラザー ¹⁶ にも確認してもらって、昨日のプレゼンの資料にも使われて問題がなかったから、どうしてあなたのところでは、問題が生じてきたか<笑いながら>
2	R	これらの考えを彼に言ったか↑
3	CS26	直接的には言えないさ、だから、“本当ですか↑”と聞いてから、彼が書いた図を確認しにそっちに行った。彼は、それぞれの主体の位置を変えたから、クライアントと私たちの会社の位置を、(おう)だから、間違っているようにみえた
		6 行を略した
10	R	言った時に何かを考えていた↑
11	CS26	先輩なので、あなたが書いた図は間違っているなどと直接的に言えないからさ、(うん)“たぶん、位置を変えたから、全体の構造が変わったかもしれない”と、このように、不確定な口調で考えを伝えた

例 15 では、先輩の JS は CS26 が作ったクライアント、会社、媒体の三者間の関連性を

¹⁶ CS26 の勤め先では「ブラザー・シスター制度」が導入されている。これは、配属部署の先輩社員（ブラザー・シスター）が新入社員を仕事の進め方から、時にはプライベートの相談までサポートする制度であると報告された。

示す関係図に基づいて、プレゼンテーション用の資料を作っているが、関係図について CS26 に確認する時のインターアクションが報告された。

1) 不一致の内容

関係を示す矢印の指向が間違っているとの JS の先行発話に対して、CS26 が「問題があるはずはない」(番号 1・5 行目)と考えていたため、関係図の正確さをめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱の留意

先行発話に対する感想として、「自分が何回もチェックし、ブラザーにも確認してもらい、プレゼンの資料にも問題なく使えたので、間違いがあるはずはない」(番号 1・5～8 行目)、「確認したら、JS がクライアント、会社などの表示位置を変えたから、矢印が間違っただけに見えることがわかった」(番号 3・2～4 行目)と報告されたため、CS26 が JS の先行発話において実情(関係図自体は間違っているない。JS の書き換えが原因だった)に合わないことを認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

応答時の意識について、「JS が先輩なので、直接的には不一致を示すことができない」(番号 3・1 行目、番号 11・1～2 行目)と語られた。この報告内容から、CS26 が勤続年数の差異(先輩－後輩)によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

(4) 上下関係(店長 - 店員)

例 16 樽こし¹⁷のための作業時間を増やすべきだ

(CS のインタレスト、上下<職位：店長 - 店員>)

番号	発話者	発話
1	JS12	<u>だからって混まないと思ってるところに増やしてくださいっていうのがおかしいじゃない</u>
2	CS11	まあ、そうくいうかもしれない ¹⁸
3	JS12	< <u>まちがっていないよね</u> >(笑)
4	CS11	<u>間違っていないですー</u> (笑)
5	JS12	ということで <u>ふえません</u> 、あのう、「 <u>苗字</u> 」さんも(そう思いませんか?)
6	CS11	<u>お、分りました、あのう、8月のスケジュール、まあ</u>

例 16 では、CS11 がキャンペーン期間中に、店の樽こしの作業時間を増やすかどうかについて店長の JS12 と話している。

1) 不一致の内容

キャンペーン期間中でも店が混まないから増やす必要はない(番号 1)との JS12 の先行発

¹⁷ CS11 のアルバイト先での作業で、肉を煮るための樽を一定の時間おきに濾す仕事である。

¹⁸ 2 行目の発話は先行発話の「キャンペーン期間中でも混まないと思う」の部分に対する応答である。

話に対して、CS11 が FUI で「やはり増やす必要がある。増やさないと自分を含めた店員全員の負担が重くなる」と考えたため、樽濾しの作業時間を増やすか否かをめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

「樽濾しの時間を増やさない、自分の負担が重くなる」との報告内容から、CS11 が JS12 の先行発話において自分のインタレストが侵害される(e.g. 労力がかかる)ためと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

不一致応答を行った時の意識について、「やはり増やしてほしいと思っているが、店長が明確に増やさないと言ったから、この件はすでに決まったという感じで、自分の考えの提示を控えた」(番号 4 の応答)、「店長がすでに増やさないと決めたのでアルバイトの私がそれに従うしかない。だから分かったと答えて次の話題に切り替えた」(番号 6 の応答)と FUI で報告された。これらの報告内容から、CS11 が職位の差異(店長－店員)によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

5.2.3.2 「上下関係」がほかの要因とともに自己表示の逸脱に関与した事例

5.2.3.1 の事例のように、双方の逸脱が留意された事例において、CS が「上下関係」の要因を単独でインプットし、自己表示の逸脱を留意した事例のほかに、この要因をほかの要因とともにインプットし、自己表示の逸脱を留意した事例は 7 件ある。

(1) 上下関係(部長－社員)

例 17 営業担当者を減らしても意味がない

(CS のインタレスト、上下<職位：常務、部長－社員>、場面<公的>)

番号	発話者	発話
1	CS19	((前略)) その後は人事の話さ、(うん)もしまた達成できないとしたら(販売目標)、(うん)営業担当の人の数はまた、変動するって(うん)うん
2	R	これについては、あなたたちは意見がなかったか↑それとも意見があるが言わなかっただけ↑
3	CS19	<u>意見を言わなかった</u>

番号	発話者	発話
4	R	あるが言わなかった<笑いながら>
5	CS19	考えてみよう、営業、担当の人はますます少なくなるでしょう、(うん)この間も何人か減らされた、(おう)今半期は大体、2人ぐらいいは減らされた、(おう)営業額が伸び悩むなら、それでも(うん)営業担当の人を減らすと、どうやって営業額を向上させるか↑(おう)しかも、減らされた人をやめさせるのではなく、会社の部門、営業、販売部門から、ほかの業務の部門に移すだけで、(おう)何のプラス的なものはないじゃないか(うん)だけど心の中でこう思っているだけで、口には出せなかった
6	R	おう、常務がいたためだね、だから言わなかった
7	CS19	常務だけではなく、常務と部長、(うん)ぜんぶ、全部は上意下達の指示で、(うん)下から上へ、いえる、意見を言える場合ではない、(おう)うん
8	R	これは、1種の会社の、どういったらいいだろう、企業文化↑つまり、上意下達になっているが、下から上へと意見を言える機会が少ない
9	CS19	そう、間違いない、会議の時は指示をうけるだけで、意見は言えない
10	R	部長とはわりとよく接触しているが、すこし様子が違う↑
11	CS19	うん、すこし違う、2人だけがいる時はコミュニケーションしやすいからさ

例 17 では、営業担当の CS19 が会社の会議に参加した時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

営業目標が達成できない場合、営業担当の人数をさらに減らすとの部長(JS)の先行発話に対して、CS19 が「さらに人数を減らすと、営業額の向上はより難しくなり、減らされた人をほかの部門に移すだけでプラス的な効果はない」(番号 5・1～6 行目)と考えていたため、この方策の妥当性をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「すでに営業額が伸び悩んでいるが、人数をまた減らすと営業額の向上はより難しくなる」(番号 5・1～6 行目)と報告されたため、CS19 が JS の先行発話において自分のインタレスト(営業目標の達成)が侵害されると予想し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

CS19 がその場で不一致を示さなかった(番号 3)ことについて、「その場に常務と部長がいる。意見を言える場合ではない」(番号 7)、「会議の時は指示をうけるだけで、意見は言えない」(番号 7、9)、「部長と 2 人だけの場合はコミュニケーションしやすい」(番号 11)と、

応答時の意識を報告した。これらの報告内容から、CS19 が職位の差異(上司－部下)によって確立できた上下関係、会議の場であるという「公的」場面の要因をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。さらに、「会議の場合は指示をうけるのみで、意見はいえない」(番号 7、9)との報告内容から、この事例では、CS19 が自己表示の逸脱を留意した背景に、社内会議での不一致応答に対する習慣化の言語管理が活性化されたことがあると考えられる。

(2) 上下関係(主任 - 社員)

例 18 関連性を示す言語表現の追加は必要ではない(実情、上下<職位：主任 - 社員>、インターアクション内の期待<目的>、JS のムード)

番号	発話者	発話
1	CS26	そう、関連性を示す表現を追加する必要はないと思った、この記録の中に、二つのまったく関係のないことだから、私はずっとそう思っていた、(うん)((中略))それで、彼(JS)は、それで、その人(JS)は、その人の頭はおそらく、熱だったのさ、(うん)すこし混乱していたかもしれない、(うん)彼は、彼は“でも、会議においてはこの人(参加者)のこの発言は、前後の部分を繋げる意味なので(うん)その発言の内容を追加しなければならない”と言った、(うん)私はその内容を入れる必要はないと思っている、その場にいたからさ、私が会議に参加したから、むこうの社長のこの二つの発言は、まったく別々のことについての発言だから、つながっている内容ではない、と言った
		4 行を略した
6	CS26	でも彼がどういうことを言いたかったかはよく分からなかった、つまり、本当に前後の部分を繋げる内容の追加が必要なのか、または、この二つの部分が関連しているということなのか、私からみれば、この二つのことは、二つのプロジェクトはまったく関係がないのではないかと考えていたのさ、(うん)そして、でも彼は、彼が言いたかったのは、この二つの部分は関係がないが、それにしても一つ、会議記録の中には一つ、前後の部分を繋げる内容を表す、一つの文書を入れる必要があるということなのかな
7	R	おう、会議記録の中には何らかの形で表す必要がある
8	CS26	そうそうそう

番号	発話者	発話
9	R	それで最後は明らかにした↑
10	CS26	最後は彼もこのような意味だったと思った、やはり主任レベルなので、あまり直接的に反論することはよくないさ(うん)、彼はあれだから、熱が出ているし、私が彼と言い争うことができないさ、もう1時間以上をかけてこの話をしている、とにかく会議記録を提出したい、もうこれ以上この話題について深く、検討したくないし、それで、 <u>分かったと答えて、彼の考えに従って、前後の部分を繋げる内容を追加した</u>
11	R	彼はその日は熱だった
12	CS26	そう、その日は朝から“今日は機嫌悪いからみんな気をつけろ”などと言っていた<笑いながら>、刺激を与えないほうがいいと思った

例 18 では、CS26 が書いた会議記録の内容について、主任の JS に確認する時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

取引先の社長の発言を、会議に参加しなかった人にも理解してもらうには、発言間の関連性を示す内容の追加が必要であるとの JS の先行発話に対して、「まったく異なる話題に関する発言で、関連性がない。追加する必要はない」(番号 1・1～2 行目、番号 6・3～5 行目)と CS26 が考えていたため、関連性を示す内容の追加の必要性をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「実際にその場にいたし、まったく別々の話題に関して発言した内容だから、関連性がない」(番号 1・8～10 行目)と報告されたため、CS26 が会議に参加したことから考えると、CS26 が JS の先行発話において実情(e.g. 実際は関連性のない発言内容だ)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

CS26 は JS に不一致を提示したが(番号 1・9～10 行目)、最後に JS の考えに従って関連性を示す内容を追加した(番号 10・5～6 行目)。応答時の感想について、「主任レベルの JS に対して、あまり直接的な反論はよくない」(番号 10・1～2 行目)と語られ、まず、職位の差異によって確立できた「上下関係」の要因がインプットされたと確認できる。また、「JS は熱があり、機嫌が悪いと言ったため、言い争うことができない。刺激を与えないほうがいい」(番号 10・2～3 行目、番号 12)との報告内容から、CS が相手のムードも考慮したと確認できる。そして、「もう1時間以上話している、とにかく記録を提出したい。これ以上は検討したくない」(番号 10・3～5 行目)との報告内容から、CS がインターアクションの参加目的(会議記録の内容確認、記録の提出)の達成も考慮したことを示唆された。これらの報告内容をあわせてみると、CS26 が「上下関係」、「JS のムード」、「インターアクシ

ン内の期待(目的)」の要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

(3) 上下関係(課長 - 社員)

例 19 クライアントとの打ち合わせは来月からだ

(実情、上下<職位：課長 - 社員>、JS のポジティブ・フェイス、場面<公的>)

番号	発話者	発話
1	CS26	会議の時、課長がまた今わたしたちが開発中のクライアントの話もしたのさ、(うん)一つのクライアントの情報を言い間違えた、本来は来月になってから具体的な協力計画の話をする予定のはずだが、彼が間違えたかもしれない、 <u>その計画の話が来週からすると言った</u> 、それで私たちは緊張していたく笑いながら>
2	R	それで課長に言ったか↑
3	CS26	言った、これはもう手帳に書いたから、確かにわざわざ手帳を取り出して確認した、課長のほうは間違えたはずだった
4	R	あなたはどのように言った↑
5	CS26	これはみんながいる、会議の時はさ、だから直接的に課長が間違ったとはいえない、顔が立たないから、 <u>とにかく先に賛成し、そうですね、この計画がとても重要だとかを言ってから、(うん)そして、実は来月からという話だったよねって、彼に確認する、という質問の形で言った</u>

例 19 では、CS26 が会議でクライアントとの打ち合わせの時間について、課長の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

打ち合わせが来週中に行われる予定だとの JS の先行発話に対して、CS26 が「来月から始まる予定のはずだ」(番号 1・2～3 行目)、「来月から始まると自分の手帳に書いてある」(番号 3)と考えていたため、打ち合わせの開始時間をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

「来月から始まると自分の手帳に書いてある。手帳をみて、JS のほうは間違っていると確認できた」(番号 3)との報告内容から、CS が JS の先行発話において実情(打ち合わせが来月から始まる予定だ)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「みんながいる会議の場面だから、直接的に課長が正しくないと言うと顔が立たない」と語られ、CS26 が職位の差異(課長一部下)によって確立できた上下関係、不一致の明確な提示に伴う JS のポジティブ・フェイス、会議であるという場面的特徴といった要因をインプットし、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

5.2.3.3 「上下関係」以外の要因が自己表示の逸脱の留意に関与した事例

72 件の双方の逸脱が留意された事例における自己表示の逸脱の留意に、「上下関係」が関与した事例は 68 件であり、それ以外の要因が関与した事例は 4 件である。

例 20 その人が夜勤の手伝いをすることはありえない(実情、保有度<低い>)

番号	発話者	発話
1	JS11	【】でも一、夕方のメンバー例え、夕方ってゆうか、「苗字」さんと一、 「苗字」くんは一、深夜のことを考えて、ちょっとずつやってて、いつ もくれるけどー
2	CS11	(??し)、「苗字」、「苗字」やってないよ
3	JS11	<ええ↑>
4	CS11	<やっていないと思う>、あいつはね、ほかの人と一緒に入るの、のば あい、おれは分からないけどー、俺といっしょに入る、ところはね、 仕事<やらない>

例 20 では、CS11 が後輩の JS11(年上)とアルバイト先の深夜の勤務について話している。夕方勤務のバイト仲間が、いつも深夜勤務の人を手伝ってくれるとの JS11 の先行発話に、CS11 は番号 2、番号 4 の発話で不一致応答をしたが、ここでは、番号 4 の応答に注目し分析する。

1) 不一致の内容

そのバイト仲間がよく深夜勤務の人を手伝うとの JS11 の先行発話に対して、手伝っていない(番号 2)と CS11 が異なる見解を明確に提示したため、当該のバイト仲間が深夜勤務の手伝いをしているか否かをめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「その人が深夜勤務の準備を手伝うところを見たことがない。やっていないと思う」と FUI で報告されたため、CS11 が先行発話において実情(手伝うところを見たことがない)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

番号 4 の応答内容において、個人的見解を示す言語表現の「と思う」が付け加えられ、ほかの人と一緒に働く場合のことが分からないが、自分と一緒にいる時はやっていないと主張の妥当性が限定された。Tsui(1991:607, Locher 2004:125 より引用)は、取りあげられた話題に関して持つ情報が不十分であることを示す「分からない」(I don't know)」について、不確定の意味を示すマーカーであり、不一致提示の前置き、明確な不一致提示の回避などの機能を果たすことができ、相手と話し手のフェイスを守ることに対する関心の現れであると指摘した。そして、応答時の感想として、CS11 が FUI で「確かに自分と一緒に出勤する時はみたことがないが、後輩の人と一緒にいるかもしれない。そこのへんの

ことがよくわからないので、“と思う”を意識的に追加した」と報告した。この感想と Tsui(1991) の指摘を合わせて考えると、CS11 が話題(バイト仲間が深夜勤務の人を手伝うこと)に関する情報の保有度が低いという要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

例 21 だれでもそのように言うはずだ(常識、JS の P.フェイス)

番号	発話者	発話
3	CS32	<そうそうそう>、その言い方が、ちょっと、ちょっとおかしいと思ったからさ、そして店長に正しいかどうかを聞いた、うん、“それでも大丈夫、それ、それでもいえる”、そして、うん、私が言った後は、店長は、あなたは日本人より、あのう、愛があると言った(笑)、彼はそのように言ったのさ(うん)、“ <u>日本人より愛がありますね</u> ” って言ったのさ、(うん)その後は、私は、私はたしか <u>何も言わなかった</u>
4	R	おう、どうして何も言わなかった↑これについて
5	CS32	でも彼の言ったことは、とても、とても汗が出る話(あきれる)だったね、(おう)、つまり、日本人より愛があるってなんだろう、中国人はまさか【【
6	R	】】愛がないっていうこと(笑)
7	CS32	(笑)そして、私が言いたかったのは、普通は人がそう言うでしょ、それを言いたかった、これは愛があるかどうかと関係がなく、普通の人は、そのようにするでしょと、思っていた
8	R	おう、これを彼に言った
9	CS32	<u>言わなかった</u>
10	R	おう、言わなかった(<笑>)、言っではいけないとか思ったから↑
11	CS32	彼がそのように言うてから、私がそのまま、私は“じゃ、そのまま引き受けましょう”って思っていた、彼はそう言ったから(うん)、それなら、引き受けましょう

例 21 では、CS32 が母の看病のためにアルバイトをやめて実家に帰るバイト仲間に、別れの挨拶を言った時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

バイト仲間に「お母さんの病気は早く治れるように」と言った CS32 が、店長の JS に「日本人よりは愛がある」(番号 3・5 行目)と評価された。この先行発話に対して、CS32 が「これは愛があるかどうかとは関係がなく、普通の人は、そのようにするでしょ」(番号 7)と考えていたため、自分の挨拶は愛がある人の象徴であることをめぐって、不一致が生じたと

判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「汗が出る話(あきれた)」(番号 5)、「普通の人ならだれでもそのように言う、日本人にしる中国人にしる、愛があるかどうかと関係ない」(番号 7)と報告されたため、CS32 が JS の先行発話において「褒め」の発話意図を読み取れたが、先行発話の内容が社会的常識(e.g. 病気療養中の家族を持つ人に病気の回復を祈ることは、ごく普遍的な礼儀であり、取り立ててほめるほどのものではない)からの違反でもあると認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。つまり、JS の先行発話には、「ほめ」として受け取られた側面のほかに、不一致を引き起こした内容、そして、留意された命題の逸脱の側面もあると考えられる。

3) 自己表示の逸脱

CS32 が JS の先行発話をただの「ほめ」として受け取るならば、「儀礼的不同意」(木山 2005:168¹⁹)を行うことになる予想されるが、このような応答が生じなかった(番号 3・6 行目、番号 9)。そして、応答時の感想について、「彼がそう言ったから、それなら引き受けよう」(番号 11)と報告された。このように、CS32 が JS のポジティブ・フェイスという要因をインプットし、不一致の表示自体が相手のフェイスを侵害する恐れがあると予想し、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。つまり、この事例において、CS32 が否定的応答が「儀礼的不同意」にならず、評価してくれた先行発話の内容を実質的に否定する応答となり、相手のフェイスを侵害する恐れがあることを考慮し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

5.3 逸脱が留意された不一致応答における CS の調整

5.2 では、留意の段階に焦点をあて、CS が不一致応答を行う際に留意した逸脱、インプットした社会的、場面的要因の詳細、逸脱の留意における諸要因からの関与を分析した。本節では、調整段階に注目し、CS が留意した逸脱の解消、軽減にむけて行った調整の実態を明らかにした上で、個々の社会的、場面的要因が調整の段階に、特に双方の逸脱が留意された後の調整の優先順位の選択に与える影響を考察する。

5.3.1 命題の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整：明確な不一致の表示

第 4 章の 4.3.1 でも提示したように、命題の逸脱のみが留意された不一致応答の全ての事例において、CS が留意した命題の逸脱を否定的に評価し、調整計画を立てて調整実施の段階に至り、不一致を明確に提示するように応答を調整した。表 3 では、すでに命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の詳細、要因別のインプット回数を示した。下記の表 10 では、この 29 件の事例において、CS が応答時にインプットしたと報告された全ての

¹⁹ 木山(2005:168)では、不同意の先行発話が自己卑下や相手（不同意する者）への「ほめではない」場合の不同意を「実質的不同意」とし、不同意の先行発話が「ほめである」場合の不同意を「儀礼的不同意」としている。

要因(インプットされたが、命題の逸脱の留意に関与していない要因も含む)を事例ごとに集計した結果を示す。

表 10 で示すように、CS が先行発話において事実情報に合わないと認知し、命題の逸脱を留意した後、話題に関する情報を JS より十分に保有することも認知し、自己表示の逸脱を留意せずに明示的不一致応答を行った事例は 15 件(1 件の事例において、JS との「親しい」親疎関係も関与した)で、全事例(29 件)の半分以上を占めていることが特徴的である。命題の逸脱のみが留意された事例において、CS が「実情、話題に関する情報の保有度(高い)」の二つの要因をインプットし、明示的不一致応答を行った事例が最も多い点では、上下関係が潜在化する場面と共通している。このような傾向の背景に、不一致の対象の性格(事実認識の不一致、大津 2001、木山 2005)、話題に関する熟知度から生じる「情報的支配力」(Locher 2004:325, Frank&Raven 1959:267)などが関わっていると考えられる。

つまり、これらの 15 件の事例において、事実情報の認識をめぐる不一致が生じ、CS が命題の逸脱を留意する際、上下関係において JS は上位であるが、話題に関する情報を JS より多く保有するため、「上下関係」の要因が背景化し、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和されたと考えられる。そして、CS が自己表示の逸脱を留意せず、命題の逸脱の解消のみを考慮し、不一致を明示的に示すように不一致応答をした。

表 10：命題の逸脱のみが留意された事例における CS の調整(単位：件)

命題の逸脱の留意に関与した要因		ほかにインプットされた要因	調整：明示
実情	上下関係		2 # ²⁰
	インターアクション内の期待(目的)		1
	親疎関係(親しい)		1
	保有度(高い)		14
	親疎関係(親しい)、保有度(高い)		1
	場面(講義)		1
実情、CS のインタレスト		上下関係	1 #
常識		話題(冗談)	3
社会経済的規範	会社の規範	上下関係	2 #
	仕事の規範	上下関係	1 #
JS のインタレスト			1
CS のネガティブ・フェイス		上下関係	1 #
合計			29

²⁰ 上下関係の構成要因のある側面において、CS は JS より上位である場合の事例件数に「#」をつけて示した。以下は同様。

「話題に関する情報の保有度(高い)」の要因のほかに、職位、勤続年数などの側面においてCSのほうが上位であるという「上下関係」の顕在化も、命題の逸脱を解消するための明示的不一致応答の選択に関与しているとみられた。Pan(2000:103)は、職位によって組織化された権力がCSの不一致の表示に伴う押し付けがましさを決める要因であると述べ、Liu(2004:106)は、自分の個人的利益(personal benefit)が損ねられることはないため、上下関係の上位にあるCSが下位にある相手のフェイス保持を考慮し、不一致の表示方法を調整することは少ないと指摘した。この7件の事例では、CSが命題の逸脱と留意する際、職位、勤続年数などの側面において自分が上位であることによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、明示的不一致応答を行うように調整したと考えられる。

上記の二つの要因のほかに、命題の逸脱の留意に関与していないが、明示的不一致応答の選択に関与した要因は「話題(冗談)」(3件)、「親疎関係(高い)」(2件)、「インターアクション内の期待(目的)」(1件)、「場面(講義)」(1件)の4種類がある。また、例6で示したように、CSが先行発話において「JSのインタレスト」が侵害されると認知し、命題の逸脱を留意して、不一致を明確的に提示するよう応答を調整した事例は1件である。

これより、CSが命題の逸脱のみを留意し、明示的不一致応答を行うように調整したことの背景の考察をふまえて、命題の逸脱の留意に関与した要因以外にCSがインプットした要因ごとに事例を取りあげ、調整の段階に焦点をあて分析していく。CSが「実情」と「情報の保有度(高い)」をともにインプットした事例が最も多いため、まず例1を再掲し、これらの事例でのCSの調整を分析する。

(1) 実情、話題に関する情報の保有度(高い)、親疎関係(親しい)

例 1²¹ 17歳のエリアキャプテンがいた(実情、保有度<高い>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS11	【【え、「地名」この前けっこう、なんかお、おかしかったと思ひまして一、16歳の高校生は、なんかエリアー、ウィング↑スウィング↑なんか
2	JS12	<u>ならないならないならない、(???)</u>
3	CS11	<u>いや、ええと、エ、エリアキャプテン</u>
4	JS12	<u>エリアキャプテンならない、16歳は、キャプテン16歳はキャプテンする人はたぶんないと思うしー</u>
5	CS11	<u>いや、ええと、前の店は一、ええと確かに17歳のキャプテンで一、そしてー【【</u>

²¹ 事例の再掲にあたり、元の通し番号を使って表示する。以下同様。

1) 不一致の内容

16歳の高校生が店の管理職になれるか否かをめぐって不一致が生じた(番号3、番号5)。

2) 命題の逸脱

FUIで「前の店では確かに16、7歳の高校生のエリアキャプテンがいた」と報告したように、CS11が先行発話において実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意した。

3) 自己表示の逸脱

応答時の感想について、CS11がFUIで「確かにいたんですよと、事実情報を伝えることだけを考えていた」と報告した。この報告内容と実際の応答内容(番号3、番号5)をあわせて考えると、CS11が不一致の表示方法を考慮せず、自己表示の逸脱を留意しなかったと確認できる。

4) 逸脱の調整

「JSがほかの地域の店で働いたことがなく、地方のことに詳しくないので、このようなことは確かにあったと伝えたかった」とFUIで報告したように、CSが不一致の対象となる話題(高校生が管理職になる可能性)に関する情報をJSより多く所有しているとも認知した。この事例では、CS11が先行発話において実情にあわないと認知し、命題の逸脱を留意したが、不一致の対象に関する情報の保有度が高いという要因のインプットによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、命題の逸脱の解消のみを考慮し、不一致を明示的に示すように応答を調整したと考えられる。

例 22 個人登録で年齢制限をかけられる(実情、保有度<高い>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS26	((前略))それで私が、(うん)うん、この前にその、その「商品名」はサンプルを配ったのさ、(うん)ちょうど4週目が空いているから、その穴を埋めてもらえないかをお願いしようと思って、(うんうん)それで言った後は、それはだめだと彼ら(他部門の同僚)に言われた、(うん) <u>そのその、そのクライアントからは、対面式で配ることしかできないと言っていたから、(うん)つまり、勝手に配ってはいけないということ、(うん)私は、でもその一、年齢制限があるのなら、つまり、年齢制限があっても大丈夫でさ、(うん)その機械を【【</u>
2	R	】】 うん、その時はどう言っていたか↑
3	CS26	言ったのは、ねんれい、当時に言った内容だね↑

番号	発話者	発話
4	R	そう、実は機械は年齢に制限をかけることができるから、サンプルを配るにはその機械を利用することができるなどの話
5	CS26	私、私が言ったのは、その、“あのマシン”、その機械のことをマシンと呼んでいるのさ(笑)、(おう)“あのう、あの機械は、実際は会員登録できる一、(おう)ので、会員登録によってですね、会員の属性がとれるんで、属性は、年齢制限をかければ、(うん)20代の、以下の人は一、あのう、抽選の形で一、落とすことができるという、方法もある、(うん)なあっていう、考えています、(うん)というように言っていた ((後略))
6	R	彼らに言った時はどう考えていたか↑
7	CS26	自分の考えを紹介しただけさ、(うん)彼らはその新しい機械のことにあまり詳しくないが、私と課長はこの機械のレンタルの販売を担当しているから、どのような機能があるかについてはわりとよく知っている、その機械は実は個人情報に登録することができ、登録情報に基づいて選別することができるのと彼らに教えてあげた
8	R	言った時は言い方などについて気を付けていたか↑同僚やほかの部門の課長などに教えていた時は
9	CS26	言い方については特に注意したところはない、ただ自分の考えを教えただけで、つまり彼らにその機械の機能をはっきりと説明できればいい、本当は年齢に制限をかけることができること、当時の目的は主にこれの説明だった

例 22 では、CS26 は所属部門の課長、他部門の同僚(課長、社員)との打ち合わせで、開発した新しい機械²²の販売促進について話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

その機械を使って、商品のサンプルを配ることができると CS26 が発話したが、年齢制限のあるサンプルなので、機械での配布ができない(番号 1・4～6 行目)と JS に否定された。先行発話に、CS26 が「機械の会員登録の機能を利用すれば配布できる」(番号 1・7～8 行目、番号 5)と異なる見解を提示したため、その機械をサンプルの配布に利用できるか否かをめぐって不一致が生じたと判定できる。

²² その機械はスーパーの販売促進向けに開発されたもので、会員登録ができ、クーポン券や商品のサンプルを自動的に配るなどの機能を揃えている。機械の販売形態は本体の販売ではなくスーパーやイベントの会場にレンタルしてレンタル料を取る形である。当月の 4 週目に機械をレンタルして商品のサンプルを配る予定のメーカーが急に依頼をキャンセルしたため、4 週目の空きを埋めるために速急に新しいメーカーを探してもらえないかと広告主担当の部門に申し入れ、部門会議が開かれたと FUI で CS26 が報告した。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、CS26 が「自分は機械のレンタルの販売を担当しているので、彼らよりは機械の機能に詳しい」、「その機械の会員登録の機能を利用すれば、年齢制限をかけることができると彼らに教えてあげた」(番号 7)と報告した。この報告内容と CS26 の応答内容をあわせて考えると、CS26 が JS の先行発話において実情(会員登録の機能を利用すれば年齢制限をかけられ、サンプルを配布できる)にあわないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「言い方について注意したところはない。はっきり説明できればいい。情報の説明は主に考慮した」(番号 9)と報告されたため、CS26 が不一致の表示方法を考慮せず、自己表示の逸脱を留意しなかったと確認できる。

4) 逸脱の調整

「彼らは新しい機械に詳しくない。販売を担当している自分のほうはよく知っている」(番号 7・1～3 行目)と報告したように、CS26 が不一致の対象となる話題(新しい機械の機能)に関する情報を JS より多く所有しているとも認知した。この事例は上記の例 22 と共通して、CS26 が先行発話において実情にあわないと認知し、命題の逸脱を留意したが、不一致の対象に関する情報の保有度が高いという要因のインプットによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、命題の逸脱の解消のみを考慮し、不一致を明示的に示すように応答を調整したと考えられる。

下記の例 23 では、JS との親しい親疎関係が「保有度(高い)」の要因とともにインプットされ、不一致の表示方法に関する規範の適用の緩和に関与したと考えられる。

例 23 出身大学によって初任給がずいぶん異なる(実情、親疎<親しい>、保有度<高い>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS20	((前略)) 彼(JS)が最初中国では出身大学が異なるとその就職先や、(うん)収入などは、ぜんぶ出身大学と直接的に関係していることを知らなくてさ、(うん)彼はそれが知らないから、(うんうん)彼は、よく清華大学に行くけど、(うん)清華大学は国内(中国)ではいい大学だということを知っているが、(うん)日本と同じように、<u>みんなの大学を出た後の初任給があまり変わらないと思っている、彼は(実際のことが)分からない、(うん)そこで私は中国では出身大学が異なると、社会人になった後の収入はぜんぜん違うという情報を教えてあげた、(うん)彼はそれを聞いてから、</u> “あ、そういうことだったんだ” って、そして私は、<u>中国での収入の格差は日本よりはずいぶん大きいから、みんないい大学に入りたがっているんだよ</u>と言った

番号	発話者	発話
2	R	先生に教えた時は、敬語の使用に気をつけていた↑またほかに注意したところはあった↑
3	CS20	ほとんどなかった、彼に“いいえ、違います。出身大学が違ったら収入がずいぶん違います”とそのまま言っただけ
4	R	丁寧語を使用していただけね
5	CS20	うん、丁寧語を使わない時もある、(うん)「苗字」先生は、気軽にしゃべれる数少ない先生の1人だと思う、(うん)彼はとてもやさしいし、普通に友達と話す感じで、“です・ます体”などの使用は、彼と話す時はそれほど気にかけていないよ
6	R	中国の実情は彼が考えていたのと違うということをそのまま直接的に伝えたんだね
7	CS20	そう、私は直接的に“いいえ、違います。出身大学違うと、収入がずいぶん違います”と言った、(うん)先生に直接的に説明した

例 23 では、CS20 は中国での出身大学と初任給の関係について、先生の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

出身大学が異なっても日本と同じように、大卒の初任給があまり変わらないとの JS の先行発話(番号 1・5～6 行目)に対して、CS20 が「中国では就職先や収入などは出身大学と直接的に関係している」(番号 1・1～2 行目)と考えていたため、中国では出身大学と初任給が関わっているか否かをめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「先生は実際のことは知らない」、「出身大学が異なると社会人になったとの収入がぜんぜん違うと教えてあげた」(番号 1・3 行目、7～8 行目)と語られ、CS20 が先行発話において実情(出身大学によって初任給がずいぶん異なる)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

CS が異なる見解を「直接的に、そのまま」(番号 3、番号 7)JS に提示したため、不一致の表示方法において自己表示の逸脱が留意されなかったと確認できる。

4) 逸脱の調整

「私の説明を聞いた後は“あ、そういうことだった”と言った」(番号・8～9 行目)、そして、「JS と友達感覚で気軽にしゃべれる」、「です・ます体の使用を留意しない場合もある」(番号 5)と報告したように、CS20 が話題に関する情報の保有度が高いこと、JS との親しい関係といった要因もインプットしたと確認できる。この事例では、CS20 が先行発話において実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したが、上記の二つの要因のインプッ

トによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、不一致を明確に提示するように応答を調整した。

(2) 常識、話題(冗談)

ここから再掲する例 3 では、話題の内容が冗談めいた内容であると CS が認知することによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和されたと考えられる。

例 3 人の別れ話をするべきではない(常識、話題<冗談>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS11	後この店はあと、ええと、自分やめて一、「苗字」やめて一
2	JS12	「苗字」わからない、(???)と別れれば
3	CS11	<笑>またそういうのはなしをするまで一、いやです、いやいや、まあまあ、 あ、くたええばの話ね>

1) 不一致の内容

バイト仲間の破局を期待するとの JS12 の先行発話によって不一致が(このような話をすべきではない)生じた。

2) 命題の逸脱

CS11 が先行発話が社会的常識(自分の都合で他人の破局を望むべきではない)からの違反であると認知し、命題の逸脱と留意した。

3) 自己表示の逸脱

応答時の感想について、CS11 が FUI で「ここは互いに冗談めいた話をしているという感じなので、そのまま直接的に言った」と報告した。この報告内容と実際の応答内容(番号 3)をあわせて考えると、CS11 が不一致の表示方法を考慮せず、自己表示の逸脱を留意しなかったと確認できる。

4) 逸脱の調整

「ここは互いに冗談めいた話をしているという感じなので、そのまま直接的に言った」との報告内容、そして、番号 3 の不一致応答に伴う笑いを合わせて考えると、CS11 が話題が「冗談」めいた内容であるという要因もインプットしたと確認できる。この事例では、CS11 が先行発話において常識からの違反であると命題の逸脱を留意したが、冗談であるという話題内容の特徴もインプットしたことによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、不一致を明確に提示するように応答を調整した。また、この事例では、CS11 が対人関係の構築・維持を促進できるリソース(c.f. Schiffman 1984:331, Tannen 1984 ほか)として、明示的不一致応答を行ったと考えられる。

(3) CS のネガティブ・フェイス、CS のほうが上位である

これより、CS の報告内容を補足して例 7 を再掲して、上下関係において CS が上位であるという要因が、命題の逸脱が留意された後の調整に与える影響を考察する。

例 7 このような依頼は受け入れられない(CS のネガティブ・フェイス、上下*、明示)

番号	発話者	発話
1	CS20	そして彼(JS)は“「 <u>苗字</u> 」さん(CS20)、あと皿も洗ってください”と言ったさ、これを聞いて腹立った、それで彼を呼び出して直接的に言った、(うん)“これは本来あなたのやるべき仕事で、僕がやる仕事ではない、 <u>「苗字」さん(ほかのバイト仲間)</u> は君とおなじ時期に入店したが、もう一回しができています” ((後略))
2	R	このように直接的に言った
3	CS20	そう、言わないといけない、言わないと後で僕はもっと疲れるから
4	R	彼に直接的に言って大丈夫だと思った↑
5	CS20	問題ないでしょう、(うん)彼は新人で、僕よりは年下で、まだ高校生だから、このように僕に指示を出してはいけない ((後略))

例 7 では、CS20 がアルバイト先で後輩の JS から仕事を頼まれた時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

皿の洗浄を頼む JS の先行発話(番号 1・1 行目)に対して、CS20 が「自分がやるべき仕事ではない」(番号 3)と考えていたため、その依頼の妥当性をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、CS20 が「聞いて腹立った」(番号 1・2 行目)、「このように自分を指示してはいけない」(番号 5)と報告した。これらの報告内容から、CS20 が職位と年齢の側面において下位である JS の先行発話(指示)が自分のネガティブ・フェイスを侵害すると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「相手が新人で年下だから不一致を直接的に示しても問題ない」(番号 5)と報告されたため、CS20 が不一致の表示方法を考慮せず、自己表示の逸脱を留意しなかったと確認できる。

4) 逸脱の調整

「相手が新人で年下だから不一致を直接的に示しても問題ない」との感想から、応答時に、CS20 が職位と年齢の側面において自分が上位であるという要因もインプットしたと確認できる。この事例では、CS20 が先行発話において自分のネガティブ・フェイスが侵害されると認知し、命題の逸脱を留意したが、上下関係において自分が上位であることによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、明確な不一致の表示の形で応答を調整した(番号 1・2～4 行目)と確認できる。

これより、CS が命題の逸脱のみを留意した事例において、インターアクションの参加目

的の達成、講義の場であるという場面的特徴がインプットされ、関与した事例を分析する。

(4) 実情、インターアクションの参加目的の達成

例 24 電話をかけてきた人はその人ではない(実情、インターアクション内の期待

<目的>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS11	【】あ、そう、そういえば、あのう、さきほどー、ええとさきほど、あのう、ええとなんか、「地名」の、からの電話があった
2	JS12	「地名」の↑
3	CS11	はい
4	JS12	「苗字」君↑
5	CS11	いやいや、「地名」の、「苗字」さんか、あ、「苗字」さんですよ

例 24 では、CS11 がほかの支店から業務連絡が入ったことを店長の JS12 に伝えている。

1) 不一致の内容

CS11 は支店からの連絡があったことを JS12 に伝えた(番号 1)後、電話してきた人の名前を提示した JS12 の発話(番号 4)に対し、異なる見解(番号 5)を明確に提示したため、不一致が生じたを判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「JS12 が言った人ではないので、その人ではなく「苗字」さんだよと伝えようと考えた」と FUI で報告され、CS11 が先行発話において実情(電話をかけてきた人)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、CS11 が FUI で「電話をかけてきた人の名前を教えることが会話の目的なので、JS12 の発話を聞いた後は何も考えないままでその人の名前を言った」と報告し、番号 5 の応答では、不一致を明示的に示したため、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意しなかったと確認できる。

4) 逸脱の調整

「電話した人の名前を教えることが会話の目的なので、何も考えないままでその人の名前を言った」との感想から、応答時に、CS11 が「会話の目的」の達成も考慮したと確認できる。この事例では、CS11 が先行発話において実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したが、インターアクションの目的の達成という要因のインプットによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、不一致を明確に提示するように調整した。

(5) 実情、場面：講義

例 25 先生の説明は正しくない(実情、場面：講義)

番号	発話者	発話
1	CS27	あ、あるある、水曜日に先生になんか言ったような気がする
2	R	昨日、だったよね↑
3	CS27	うん、昨日、(うん)なんだっけ、先生が言ったことは間違っていると思 って、それで直接的に、訂正した
4	R	おう、どのようなことだったか↑どのように訂正した↑
5	CS27	そう、直接的に言ったの、言ったのは(うん)“え、でも、でも”、と言 って、“でもこのようになるはずだ”と、などと言った
6	R	おう、このようになるはずだ、何かこう“でも”とか、その時も先ほ ど教えてくれたように、なんかこう“じゃない”とかを使ったか↑
7	CS27	いやいやいや、(うん)直接的に“だと思ふ”とかを言った、(おう)この ようになるはずだと思ふと言って、それで、何々からだ、とか、(うん) 理由を言ったのさ、(おう)どのようなことだったっけ、どのようなこと だったっけ、(うん)とにかく、実験の時に、うん、とにかく、とにかく 実験の時のことだった
8	R	つまり実験をする時に先生の話の訂正した
9	CS27	うん
10	R	先生の話の訂正したことがほかにもあった↑
11	CS27	うん、ある、日本人のほうはあまり訂正しないと思っているけど、((後 略))
12	R	言った後は先生のほうはどう答えた↑
13	CS27	先生は、“そう、この、このようなことである、このように考えても 間違いがない、ただし”(うん)いろいろ言っていて、そして、先生はや はり自分のその、意見を言ったのさ、(うん)それで、私が理解できた、 分かるようになった

例 25 では、CS27 が授業で先生の JS と実験内容の説明について話している時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

実験内容についての JS の説明に対して、CS27 が正しくない(番号 3)と考えていたため、説明内容をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

「先生が言ったのは間違っていると思って、直接的に訂正した」(番号 3)との報告内容から、CS27 が先行発話において実情(e.g. 実験内容に関連する事実情報)に合わないことを認知し、

命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

「直接的に訂正した」(番号 3、番号 7)との報告内容から、CS27 が応答時に不一致の表示方法を考慮せず、自己表示の逸脱を留意しなかったと確認できる。

4) 逸脱の調整

Rees-Miller(2000)は、授業の場面的特徴により、学生が教師に対して、「説得的」(forceful) 不一致の表示方法を多く使用する場合がと指摘した。この指摘と、CS27 が普段の授業においても、間違ったと考える先生の説明に対して不一致を直接的に提示することがある(番号 11)との報告内容を合わせて考えると、CS27 が「講義」であるという場面的特徴もインプットしたと確認できる。この事例では、CS27 が先行発話において実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したが、講義であるという場面的特徴によって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意せず、明確な不一致の表示の形で応答を調整した。

5.3.2 自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整：不一致表示の回避、婉曲な不一致の表示

自己表示の逸脱のみが留意された 12 件の不一致応答において、CS が逸脱を否定的に評価した後、調整計画を立て実施の段階に至り、不一致を潜在化させ、または、不一致を婉曲に示すように応答を調整した。表 5 では、自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の詳細、要因別のインプット回数を示した。下記の表 11 では、これらの 12 件の事例においてインプットされた諸要因を事例ごとに集計した結果を、CS の調整傾向(回避、婉曲)別に示す。

表 11：自己表示の逸脱のみが留意された不一致応答における CS の調整(単位：件)

インプットされた要因	調整： 回避	調整： 婉曲
上下関係	7	1
上下関係、インターアクション内の期待(言語ゲスト)	1	0
上下関係、情報保有度(低い)、親疎(親しくない)	1	0
上下関係、相手のポジティブ・フェイス、親疎(親しくない)	1	0
上下関係、場面(公的)、相手のポジティブ・フェイス、情報の保有度(低い)	0	1
合計	10	2

この 12 件の事例では、「逸脱の留意」の段階を考察した 5.2.2 ですでに示したように、「上下関係」の要因がすべての事例においてインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与している。調整の段階に注目すると、回避的不一致応答が行われた事例が 8 割以上(12 件の

うちの 10 件)を占め、婉曲的不一致応答が行われた事例が 2 件である。そして、「上下関係」が単独でインプットされた事例は全事例の半分以上(12 件のうちの 7 件)であり、回避的不一致応答のみが行われた。このことから、CS が「上下関係」の要因のみをインプットし、自己表示の逸脱のみを留意した後、逸脱の解消に向けて不一致の潜在化を図る傾向が強いと示唆された。これより、調整傾向別に事例を取りあげて分析していく。

5.3.2.1 不一致表示の回避

まず、「上下関係」の要因が単独で自己表示の逸脱の留意に関与し、CS が回避的不一致応答を行った事例を取りあげて説明する。下記は一部の報告内容を補足してから、例 9 を再掲する。

例 9 わざと名札を隠すつもりではない(上下<社会的役割：客 - 店員>、回避)

番号	発話者	発話
1	CS21	その時は髪を一筋束ねていて、このように前のほうに曲がって垂れていたのさ、(おう)その日はこのように垂れていて、急いでバイトに行ったので髪をすくのを忘れた、片方に曲がっていた、髪はこのあたりに、(おうおう)それで、私の名札を遮るようになっていたかもしれない、(おう)遮ったとしても少しぐらいだと思うけど、(うん)髪の毛が長いから、(おう)そして、彼女(JS)は私を、私を見たのさ、 <u>“なぜ髪で名札を遮っているのか、これはいけない”</u> と言った、 <u>“隠しちゃダメ”</u> とか言っていた、(おう)けっこう怖い感じだった、(おう)言われた私も非常に、あのう、(うん)私は、 <u>“あ、すみません”</u> と言って、私は <u>“すみません”</u> と言った、(うんうん)そして髪を後ろに束ねたのさ、束ねてから名札を見せた、私の名前を
2	R	名札を隠している、これはいけないと言われた時はどのように思っていたか↑
3	CS21	わざとそうしたのではないさ、わざと髪で名札を隠そうとはしなかった、昨日はちょうど髪をすくのを忘れたから、(うん)でも、客に対しては、やはりこのように直接的に言えないから、(うん)そして確かに少しぐらひは遮られたかもしれない、自分もそれに気をつけなかった、(うん)だから私はちゃんと謝った
4	R	うん、見せた後は彼女がまたほかに何かを言っていたか↑
5	CS21	なんとなく態度が悪そうな感じで、名札を見せた後はまたこうしてはいけないと言われていた、(うん)ずっと言っていた
6	R	あなたも説明などはしなかった

番号	発話者	発話
7	CS21	遮ってはいけないことさ、客なので、わざとそうしたのではないことを説明しなかった、(おう)、“すみません”と言ってから髪を後ろに束ねた

例 9 では、CS21 がアルバイト先で名札が髪で遮られていると客の JS に言われた時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

従業員として、髪で名札を隠してはいけないとの JS の先行発話(番号 1・6～7 行目)に対して、CS21 が「忘れただけで、わざとしたのではない」(番号 3・1～2 行目)と考えていたため、意識的に名札を隠しているか否かをめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

「自分も不注意だったので、名札が遮られたことになっていてやはりいけない」(番号 3・3～5 行目、番号 7・1 行目)との感想から、CS21 が JS の先行発話において、命題の逸脱と留意しなかったと判断できる。

3) 自己表示の逸脱

応答内容をみると、CS21 が不一致を提示せず JS に謝った(番号 1・9～11 行目、番号 7)ことがわかった。また、応答時の感想について、「客に対しては直接的に言えない」(番号 3・2～3 行目)、「客なので説明はしなかった」(番号 7)と報告されたため、CS21 が社会的役割(客一店員)の差異によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

「客だから直接的に言えない」(番号 3・2～3 行目)と報告したように、CS21 が自己表示の逸脱の解消を考慮し、不一致を潜在化させて応答を調整した。この事例では、CS21 が自分にも責任がある(「自分も不注意だった」番号 3・3～5 行目)と認知したことも、不一致の表示の回避に関わっていると考えられる。

例 26 病院のやりかたは正しい(上下<年齢：年上 - 年下>、JS の P.フェイス、回避)

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略)) 彼女(JS)が言い終わってからは笑っていて、病院側に教えてくれなかったと言った、私は“おう”と言って、病院側のほうも何か危ないことを心配しているから教えてくれなかったかも、(うん)だから患者の家族に聞いてくださいと言ったかもと答えた、(うん)それで彼女は見舞いに行く時は相手の家族に知られたくない時もあるといって、(おう)私はそれで何も言わなかった、ついでに日本の病院はぜんぶそのようにしているかを聞いた

番号	発話者	発話
2	R	彼女からの返答をどう思っていたか↑
3	CS21	彼女の考えは確固としていると感じている、(うん)つまりそうする必要はないと、(うん)考えているようで
4	R	(.)あなたのほうは、考えも確固としている↑
5	CS21	私も、このようなやり方は不便なところもあるが、とても、とてもいいと思っている、このような個人のプライバシーを尊重するやりかたはいいと思っている
		2行を略した
8	R	患者の家族に知られたくない時もあり、やはり病院側がやりすぎだと彼女に言われた後は、自分の考えをもう一度提示しなかったよね、その時はどう考えていたか↑
9	CS21	そう、言わなかった、彼女はとにかく病院のやりかたは悪かったと強調しているようなので、私はそれで何も言わなかった、実は、このことは、相手は日本人なら(うん)、つまり歳の近い人なら、もっと話す、自分の立場を提示する時はもっとはっきりと提示する
10	R	おう、近い歳の人
11	CS21	そう、自分が心配していることなどを、ぜんぶ相手に伝えるようにする。(うん)最初は私が病院側もそれなりの考えがあるかもしれないと考えてそのまま話したが、彼女はまた病院側が悪いと言って、とにかく病院側が悪いと考えているようだったので、また、彼女のほうもずいぶん年上で、自分の考えをこれ以上に言わないほうがいいと思った、もし同じ歳の人なら、事例を挙げて少しディスカッションすると思う

この事例は第2章の例2に後続する部分であり、CS21が知り合いの日本人と食事をしながら雑談する時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

患者のプライバシー保護のために、本人または家族の了承なしに入院患者の病室情報を部外者に提供しないという病院側のやり方に対して、JSがそこまでする必要がなくやりすぎだと発話したが、CS21がこのようなやりかたが妥当である(番号1・2～3行目、番号5)と考えていたため、病院のやり方をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

不一致が生じたが、CS21が病院のやり方については、やはり不便なところがある(番号5)とも考えているため、JSの先行発話において命題の逸脱を留意しなかったと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

CS21 が 2 回にわたって(番号 1・2～7 行目)応答したが、2 回目(1 回目の応答は 5.4 で扱う)の応答では不一致を提示せずに話題を転換させた(番号 1・6～7 行目、番号 9・1～2 行目)。そして、応答時の意識について、「病院側が悪いという JS の考えは確固している」(番号 3)、「JS が考えを強調している感じなので、何も言わなかった」(番号 9・1～2 行目)、「JS が年上なので、否定的な意見をこれ以上に示さないほうがいいと思った。年齢の近い相手なら自分の考えをもっとはっきりと提示する」(番号 11)と報告された。2 回目の応答内容、応答時の感想を合わせて考えると、CS が年齢の差異によって確立できた上下関係の要因、JS の強い主張によって「JS のポジティブ・フェイス」の要因をインプットし、不一致の表示自体が不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

「JS が考えを強調しているので、再度の不一致の表示をやめた」(番号 9・1～2 行目)、JS が年上なので、自分の考えをこれ以上に言わないほうがいいと思った」(番号 11・4～6 行目)と報告したように、CS21 は自己表示の逸脱を解消するために、不一致を潜在化させて応答を調整した。なお、1 回目の応答では、CS21 が不一致を提示し(番号 11・2～3 行目)、2 回目の応答では不一致を潜在化させたことに、CS21 が JS のポジティブ・フェイス、上下関係(年上 - 年下)の要因によって自己表示の逸脱を留意したことのほかに、JS が再び自分の考えを強調したことも関わっていると考えられる。つまり、第 4 章の 4.3.3.3 でも示したように、CS が同一話題をめぐって引き続き不一致を感じ、JS との考えのくいちがいの度合いが高いと認知する場合、1 回目以後の応答では、JS のポジティブ・フェイスの維持をより多く考慮し、回避的不一致応答を選択する可能性が高まると示唆された。

5.3.2.2 婉曲な不一致の表示

例 27 機器の操作方法は間違っている(上下<年齢：年上 - 年下>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS22	彼女(JS)は一つの新しい装置を持ってきて、まあ一つのなんかの機器だった、(うん)それで彼女は <u>このように操作すると説明したが</u> 、彼女も実は分からないかも、私の推測では。(うん)そして、私はその機器をみて、彼女が言ったような操作方法ではないかと思っていたのさ
2	R	お、それで彼女に教えた↑

番号	発話者	発話
3	CS22	言った、私が“あ、そうなんだ”、と言って、私は“なるほど、こうであると思っていた”と言った、(うん)実はこうであるはずだと思っていたく笑いながら>、でも、私はこのような言い方で提起した、(うん)、そして、彼女は“えっ、あなたがいった方法のほうが正しいかも”と言った。(おう)彼女はこのような言った、それで私が“あ、実は私もよく分からない”、(うん)“どちらもいけそうですね”と言った、(うん)自分はこのように言った、(うん)彼女は主婦で、私よりは年上だから直接的に言わなかった、このようにして言っていた
4	R	ほかのバイト仲間にも同じ方法で話している
5	R	若い人と話す時は、自分よりは若くて、年下の子がいるの、彼女たちには、もうずいぶん親しくなってきたから、ためぐちを使う、そして、普通は直接的に“何々じゃない↑”というふうに話す、もしこのようになるはずだと自分が思うならば、直接的に言う、彼女たちと話す時はもっと気楽で、全体としては異なっている

例 27 では、CS22 が新しい機器の操作方法についてバイト仲間の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

操作方法についての JS の先行発話に対して、CS22 が正しくないかもしれないと考えていたため(番号 1・3～4 行目)、操作方法の説明をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

CS22 が JS の説明に賛同できないが、自分の考えについて確定できない部分もある(番号 1・3～4 行目：「JS が言った操作方法ではないかも」)ため、先行発話において命題の逸脱を留意しなかったと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答内容をみると、CS22 が「そうなんだ、こうであると思っていた」(番号 3・1～3 行目)と不一致を遠回しに述べた後、自分の考えに賛同してくれた JS に対して「分からない、どちらもいけそう」(番号 3・5～6 行目)と主張の不確定さを強調したことがわかった。応答時の意識について、「JS が年上だから直接的に言わなかった」(番号 3・7～8 行目)、そして、年下のバイト仲間に対しては、より「直接的に、気楽に」(番号 5)不一致を示していると報告された。応答内容と応答時の感想を合わせて考えると、CS22 が年齢の差異によって確立できた「上下関係」の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

「JS が年上だから直接的に言わなかった」(番号 3・7～8 行目)と報告したように、CS22 が自己表示の逸脱を解消するために、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。

この事例に関するリコール・インタビューでは、CS22 が日本語使用場面での不一致応答について、「日本語の授業では、先に相手の考えを賛成してから、自分の意見を提示すること。反対の意見を述べる時は、言いきれないよう心がけることが大切であると教わったことがある」、「日本に来てから反対の意見を述べる時は、意識的にこのように調整する習慣がある」と報告した。例 27 で婉曲的不一致応答が行われた背景に、CS26 が上下関係の要因をインプットし自己表示の逸脱を留意したことのほかに、日本語使用場面における不一致応答の CS26 の習慣化された言語管理のからの影響もあると考えられる。

例 28 一からマニュアルを考える必要はない(上下<職位:課長 - 社員>、場面<公的>、相手の P. フェイス、保有度<低い>、婉曲)

番号	発話者	発話
3	CS26	私は新人なので、主に聞く役でさ、(うん)課長に質問をただけで、(うん)私たちが販売しているのは新しいメディアを利用するサービスなので、どのように対処したらいいかは皆がまだよく分からない、(うん)そこで私が考えたのは、その、それらの伝統のメディアはどのように対処しているか、例えば((中略))それらのメディアはこのようなトラブルがないさ、それで課長に <u>ほかのメディアのほうはどのように、このようなトラブルにどのように対処しているかを聞いた</u>
4	R	これは自分の考えを提示しようと思ってそう聞いたのか、それとも、ただほかのメディアのやりかたを知りたくて聞いただけなのか↑
5	CS26	私は実はよくわからない、だから課長にほかのメディアの対処のしかたを聞いた、そして彼は対処のしかたを教えてくれた、(うん)実は私が考えたのは、今はプロセスの設定について皆が分からないさ、それでずっと検討している、実はほかの伝統的メディアの対処のしかたを参照すればいいさ
6	R	おう、あなたはこのマニュアルの検討が必要ではないと思っていたよね↑
7	CS26	初歩的なところからマニュアルを作る必要はないと思っていた、まず既存のメディアの経験を参照すればいいさ、だから課長の回答が終わった後は、 <u>実はこれらの経験を参照してもいいかも</u> と言った、課長はそれができると言って、もう 1 人の同僚もできると言った
8	R	おう、実はやはり自分のこの考え方を提示しようと考えたよね↑
9	CS26	そう、でも私自身がこの件については詳しくないから、まず聞いてから“ついでに”の感じで提示したほうがいいのかさ
10	R	どうしてこのほうにしたほうがいいのか↑

番号	発話者	発話
11	CS26	まずマニュアルの検討を提起したのは課長だから、私は新人なので何を言っても彼らに疑われるから、最初からもう実は検討する必要がないと言いついてはいけないさ(うん)、また会議だったから、みんながその場にいるからさ、会議の時はわたしがふつうあまり直接的に言わない、言ったら課長の顔が潰れるからさ
12	R	うん、あなたの提案は実は参考として受け入れられた
13	CS26	そう、参考にしてもらえた、課長は説教が大好きだからさ、いつも私たちに講義をしている、経営の原理とかさく笑いながら、それで先に質問をしたら、彼は喜んで教えてくれるから、その後はまたついでに自分の考えを提示して、そのほうがいい

例 28 では、CS26 が新しいサービスを提供するための作業マニュアルを検討する部門会議で、課長(JS)、ほかの同僚と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

新しいマニュアルを作るとの JS の先行発話に対して、CS26 が一から作る必要がなく、ほかの伝統的メディアの経験を参照して作ればいい(番号 3・4～5 行目、番号 5・2～5 行目、番号 7・1～2 行目)と考えていたため、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

CS26 はマニュアルの作成自体に否定的意見を持つのではなく、一からマニュアルの内容を検討するのではなく、ほかのメディアの経験を参照した上で検討したほうがいいのかと考えるだけであるため、JS の先行発話において命題の逸脱を留意しなかったと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答内容からみると、CS26 がまず JS にマニュアル作成に関連することを聞き(番号 3・5～7 行目)、回答を得られてから自分の考えを不確定な形で提示した(番号 7・3～4 行目)ことがわかった。応答時の意識について、「詳しくないから確認してから提起したほうがいい」(番号 9 行目)、「マニュアルの検討を提起したのは課長なので直接的に反対してはいけない、新人なので何を言ってもまず疑われてしまう」、「会議なので直接な不一致提示を避けるべきだ」、「質問して必要な内容を教えてもらってから、考えを提示したほうが課長の顔を立てられる」(番号 11)などと報告された。応答内容、応答時の感想を合わせて考えると、CS26 が話題に関する情報の保有度(低い)、職位の差異によって確立できた上下関係、会議の場であるという場面的特徴、そして JS のポジティブ・フェイス²³といった

²³ ヘレン&スペンサー(2004:14)は、フェイスには「資質のフェイス」(quality face)と「立場のフェイス」(identity face)の二つの側面があると提起し、前者が個人的資質によって人間が事実上要求する価値にかかわるものであり、後者が社会もしくはグループにおける役割によって人間が事実上要求する価値にかかわるものである。この事例では、CS26 が配慮した JS のフェイスに、マニュアルの作成を提案する人としての資質のフェイス、課長としての立場のフェイスの二つの側面があると考えられ、ポジティブ・フェイス

要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

上記の応答時の感想から示すように、CS26 が自己表示の逸脱を解消するために、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。また、Angouri(2012:1576)が課題解決の会議においては、参加者間の職位、専門的知識などの差異に関係せず、不一致の表示が問題解決の機能を果たせると認められるため、フェイス侵害やインポライトネスな行為として否定的に評価されることがほとんどないと指摘した。例 28 において、CS26 が不一致の明確な提示が不適切だと判断し自己表示の逸脱を留意したが、課題解決(新しいマニュアルを検討する)の会議であるため不一致の表示が許容されると認知したため、不一致の回避より婉曲的不一致応答を選択したと考えられる。

5.3.3 双方の逸脱が留意された不一致応答における CS の調整：明確、婉曲な不一致の表示、不一致表示の回避

CS が双方の逸脱を留意して否定的に評価した後、調整の段階において、逸脱の調整の優先順位を決めてから、調整計画を立てて実施の段階に入る。そこで CS が選択した調整対象(片方の逸脱のみ、または双方の逸脱)に応じて、異なる調整ストラテジー(明示、回避、婉曲)を用いて不一致応答を行う。表 7～表 9 では、CS が双方の逸脱をともに留意した事例で関与した社会的、場面的要因の詳細、要因別のインプット回数、そして、ペアでインプットされた要因の組み合わせを提示した。下記の表 12 では、これらの 72 件(明示：14 件、回避：27 件、婉曲：31 件)の事例において関与した要因を事例ごとに集計した結果を、調整の優先順位別に示す。表 12 の右端の「命題明示」は CS が命題の逸脱の調整を優先させ、明示的不一致応答を行った事例、「自己回避」は CS が自己表示の逸脱の調整を優先させ、回避的不一致応答を行った事例、「双方婉曲」は CS が双方の逸脱の調整をともに考慮し、婉曲的不一致応答を行った事例の数を示す。なお、自己表示の逸脱の調整が優先されて回避的不一致応答が行われた事例では、CS が 1 種類以上の自己表示の逸脱の留意に要因が複合的に関与した事例は 3 件(「上下関係、目的、JS のムード」、「上下関係、場面(公的)」、「上下関係、保有度(低い)」であるため、要因のインプット回数の合計は 31 回となり、事例の合計数 27 件を上回っている。

(資質のフェイス)と上下関係(職位)の二つの要因が留意されたと解釈できる。

表 12：双方の逸脱が留意された事例における CS の調整(単位：件)

命題の逸脱の留意に関与した要因		自己表示の逸脱の留意に関与した要因	命題 明示	自己 回避	双方 婉曲
実情		上下関係	6	9	14
		上下関係、インターアクション内の 期待(目的)、JS のムード	0	1	0
		JS のポジティブ・フェイス	0	1	0
		上下関係、JS のポジティブ・フェイス、 場面(公的)	0	0	1
		話題に関する情報の保有度(低い)	0	1	1
常識		上下関係	1	0	2
		JS のポジティブ・フェイス	0	1	0
社会経済的規範	会社の規範	上下関係	1	0	1
	仕事の規範	上下関係	0	0	1
	経済的規範	上下関係	1	1	3
CS のポジティブ・フェイス		上下関係	4	4	0
CS のインタレスト		上下関係	2	7	7
		上下関係、場面(公的)	0	1	0
		話題に関する情報の保有度 (低い)、上下関係	0	1	0
JS のインタレスト		上下関係	0	0	1
合計			14	27	31

これより、調整の優先順位の選択における社会的、場面的要因からの関与に注目しながら、CS が双方の逸脱をともに留意した後の調整段階を優先順位別に考察していく。まず、命題の逸脱の調整を優先させた事例を考察する。

5.3.3.1 命題の逸脱に対する調整を優先させた CS の不一致応答

下記の表 13 では、命題の逸脱の調整が優先された 14 件の事例において、CS が応答時にインプットしたと報告された全ての要因(インプットされたが、命題の逸脱の留意に関与していない要因も含む)を事例ごとに集計した結果を示す。CS が双方の逸脱を留意した後、命題の逸脱の調整を優先させ、不一致の明確な提示を選択して明示的不一致応答を行ったため、命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のほうが、調整の優先順位の選択により深く関わっていると考ええる。命題の逸脱の留意に関与した要因の側面から、命題の逸脱のみを留意した事例(本章の表 3 を参照する)を比較した結果、「実情」、「常識」、「経済

的規範」、「CS のインタレスト」の4種類の要因が共通していることがわかった。そして、「実情」(6件)と「CS のポジティブ・フェイス」(4件)の2種類の要因が命題の逸脱の留意に最も強く関与しているとみられた。

表 13：命題の逸脱に対する調整を優先させた事例(単位：件)

命題の逸脱の留意 に関与した要因	自己表示の逸脱の留意 に関与した要因	ほかにインプット された要因	命題 明示
実情	上下関係		1
	上下関係	話題に関する情報の保有度 (高い)	3
	上下関係	場面(私的)	1
	上下関係	場面(私的)、インターアクション内の期待(目的)	1
常識	上下関係		1
経済的規範	上下関係		1
CS のポジティブ・フェイス	上下関係		4
CS のインタレスト	上下関係		2
合計			14

「実情」の要因がインプットされ、命題の逸脱の留意に関与した6件の事例では、逸脱の留意に関与していないが、「話題に関する情報の保有度(高い)」(3回)、「インターアクション内の期待(目的)」(1回)、「場面(私的)」(2回)の要因もインプットされた。5.3.1ですでに示したように、「話題に関する情報の保有度(高い)」、「インターアクション内の期待(目的)」といった要因が、CS が命題の逸脱のみを留意した事例での調整ストラテジーの選択に影響するため、これらの要因はCS が双方の逸脱を留意した事例での調整ストラテジーの選択にも影響すると予想される。

これより、命題の逸脱の留意に関与した要因ごとに、CS がこの逸脱の調整を優先させた事例を取りあげて考察する。

(1) 実情

例 29 水槽は汚かった(実情、上下<職位：社員 - アルバイト>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS29	まず彼(JS)に言ったのは、まず、(うん)今日、けさはけっこう忙しかったと言った、(うん)彼に“今日あさ来た時、忙しかったよ”と言った、“俺が来た時、シンクがけっこう汚かった”、(あ)“あ、そういえば、あのう先週の土曜、日曜日とおなじだったんで”と言った、(うん)((後略))

番号	発話者	発話
2	R	そして彼はどう答えた↑
3	CS29	“そういわれて困る、困るんですよ”、と彼はこのように言っていた、(お)それで私は、“ほんとうだよ、すごく汚かったのに、なんで困るの↑”、それでこのように聞いたのさ、“ <u>いそがしかった、先週の日曜日、忙しかったんですよ</u> ”、と彼から聞かれた、“ <u>忙しかったんですよ</u> ”
4	R	彼と一緒にだったか↑
5	CS29	そうそう、先週の日曜日は私たち2人が一緒に働いていたのさ、“ <u>そんなに忙しくなかったでしょう、あのう3連休の真ん中だし</u> ”、(うん)それで私が、“ <u>「苗字」さんがけっこう乱暴にやっただ、汚かった、超きたなかった、おれは本当に気持ち悪かった</u> ”、その後は彼が、“分かっているよ、分かっているよ、じゃ今度、ちゃんとやります”と言った
6	R	彼と比べると、どうでしょうね、彼のほうはレベルが高いのよね↑
7	CS29	比較すれば彼のほうはきっと上だ、＜笑いながら＞彼は社員、正社員だからさ、(おう)私はただアルバイトだから
8	R	忙しくなかった、彼は清掃を疎かにしたので確かに汚かった、などの内容は直接的に彼に伝えた↑言い方については注意したところがあった↑
9	CS29	なかった、このように直接的に彼に言った
10	R	でも理論上、彼のほうはレベルが高いよね
11	CS29	職位といえば彼は上だが、普段はこのように直接的に、しかも店長の前で言うことは確かによくない、(うん)店では、彼を軽視することではないが、“そんなに使えない”という感じ、店を仕切っている人は私ともう1人の女性のアルバイトだから、(うん)彼は社員だが、やはり私たちに及ばないところが少なからずある、しかも言ったのはすべて実情だから、その日は彼と一緒にだったからさ

例 29 では、CS29 が店長、正社員の JS と雑談している時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

CS29 が当日の朝は台所の水槽が汚くて先週の日曜日も同じような状況だった(番号 1)との話題を提起したが、JS が先週の日曜日は忙しく清掃が間に合わなかったからである(番号 3・3～4 行目)と応答した。この先行発話に対して、先週の水槽が汚れた理由は、JS が忙しかったことではなく、清掃を疎かにしたことである(番号 5・1～2 行目)と CS29 が考えていたため、JS が話した理由をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「その日は JS と一緒に出勤したので、彼が清掃を疎かにしたのは事実だ」(番号 5・1～2 行目、番号 11・5～6 行目)と報告されたため、CS29 が先行発話において、実情(その日は JS が言うほど忙しくなかった。水槽が汚かったのは JS が清掃を怠ったからだ)にあわないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

職位の側面において、正社員の JS に比べると自分はただのアルバイトである(番号 7)ため、「普段はこのように反対の意見を直接的に述べることはよくない」(番号・1～2 行目)と応答時の感想が語られ、CS29 が職位の差異(正社員 - アルバイト)によって確立できた上下関係の要因をインプットし、明確な不一致の表示が不適切だと判断して自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答内容をみると、CS29 が「先週は 3 連休の真ん中だから、忙しくなかった」、「清掃を乱暴にやっただけで、汚かった」(番号 5・1～4 行目)と、言い方を調整せずに「直接的に」(番号 9)JS に否定的な見解を示したことがわかった。このように、CS29 が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の解消を優先させ、不一致を明示的に示すように応答を調整した。

なお、CS29 が職位の側面における JS との差異(番号 11・1～2 行目)を認めるが、「彼はそれほど使えない、私たちに及ばないところが少なからずある」(番号 11・2～5 行目)と報告したように、CS29 が仕事経験の側面における JS との差異も考慮したと考えられる。そして、「その日は一緒だった。言ったのはすべて実情だ」(番号 11・5～6 行目)と報告したように、CS29 が不一致の対象になる話題について、関連する事実情報を確実に把握していることも考慮したと考えられる。この事例では、仕事の経験の側面において JS より上位であることと、話題に関する情報を確実に把握できていることが、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

例 30 曖昧に記述する必要はある(実情、上下<職位：主任 - 社員>、保有度(高い)、明示)

番号	発話者	発話
1	CS26	書き直ししてからは、(うん)うん、私は、その同期はいえない、決められないからさ、(うん)それでもう 1 人の同僚、私が所属する課の、もう 1 人、私のブラザーよりも年上の人、その、10 年、うーん、40 歳近くの人、あ、10 年目ではない、10 年目は私のブラザーだ、(うん)ブラザーよりは上の、主任レベルの人に確認してもらった

番号	発話者	発話
2	R	おう、この主任レベルの人は前の話に出たことはないね
3	CS26	そう、さっきまでの話には出たことはない、主任レベルの人は主に大阪を担当する ((中略)) 彼(JS)に見せて、この会議記録でオッケかと聞いた、彼は、最初は彼が、 <u>この文はあまりにも曖昧で、何を言いたかった</u> <u>は分からない</u> と言った、それは本部長が言ったその話でさ、(うんうん)本部長が私に指示を出した時は彼ら(JS を含むほかの会議の参加者)がその場にいなかったなので、(うんうん)私だけに指示した、それで私は本部長からわざと曖昧に書いておくと言われたから ²⁴ と答えた、((後略))
4	R	うん、あまりにもあいまいだと言われた
5	CS26	<u>彼にこの文はあまりにも曖昧だといわれて、違うと答えた、その日に本部長から詳しく書かないでくれと言われたからと答えた、そして、彼は最初からも直接的に、直接的に書かないとこの意味をどう表すかと言いつづけて、彼はとくに直接的に、このように言った、そして、書き直して、その意味に書き直してと彼に言われた</u>
6	R	おう、あなたも直接的にこのように直接的に書くことができないと言った↑
7	CS26	このように直接的に彼に言った、本部長からこの指示をうけた時は、ほかの人がその場にいなかったからさ、 <u>彼にこの状況を教えてあげた</u>
8	R	これは直接的に言っても大丈夫↑
9	CS26	これは大丈夫、事実はこちらだから、(うん)彼は主任レベルで、普段は気をつけているが、普通は直接的に言わないようにしている、でもこのことは私しか知らないから
10	R	本部長から言われたこと
11	CS26	そう、だから直接的に言っても大丈夫だと思った、彼はこのことを知らないからさ

例 30 では、CS26 が書いた会議記録の内容を上司の JS に確認してもらう時のインタラク션을報告している。

1) 不一致の内容

記録の内容が曖昧すぎて分かりづらいため、書き直す必要があるとの JS の先行発話(番号 3・3～4 行目)に対して、CS26 が当該部分の内容を意図的に曖昧に書く必要がある(番号 3・6～7 行目)と考えていたため、発言内容の精確な記述の必要性をめぐって不一致が生じ

²⁴ この会議では CS26 の会社と取引先の業務提携が議題として取りあげられたが、業務提携の可能性の一部が本部長によって断られた。会議後に、本部長が CS26 に、両社間の関係を配慮して断りに当たる発言の部分を曖昧に書くようにと指示した。

たと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「記入ミスではなく、この部分を曖昧に書くようにと本部長から指示をうけたため、このようになっている」(番号 3・4～7 行目)と報告されたため、CS26 が先行発話において、実情(記録ミスではなく部長の指示通りに書いただけだ)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「主任なので普段は不一致の表示に気を付けている」(番号 9・1～2 行目)と語られ、CS26 が職位の差異によって確立できた上下関係の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答時に、CS26 が「本部長からわざと曖昧に書いておくように言われたから、記入ミスではない」と不一致を「直接的に」(番号 3・6～7 行目、番号 5・1～2 行目、番号 7)JS に示したため、CS26 が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の解消を優先させて、不一致を明示的に示すように応答を調整したと確認できる。

なお、CS26 が職位の側面における JS との差異(番号 9・1～2 行目)を認めるが、「このことは事実なので直接的に言っても大丈夫だと思った」(番号 9・1 行目)、「本部長の指示内容を知っている人は自分だけで、JS も知らないで直接的に言っても大丈夫だ」(番号 3・5～6 行目、番号 7、番号 9・2～3 行目、番号 11)と報告したように、CS29 が話題に関する情報を JS より十分に保有していることも考慮したと考えられる。そして、CS26 が「本部長から指示をうけたのでわざと曖昧に書いた」との理由を述べたため、主任の JS より職位の高い人からの指示ということも考慮されたと考えられる。この事例では、話題に関する情報の保有度において JS より高いことと、職位の側面において JS より高い人から直接に指示されたことが、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考える。

例 31 その内容を会議記録に入れる必要がある

(実情、上下<職位：課長 - 社員>、期待<目的>、場面<私的>、明示)

番号	発話者	発話
1	R	その、その課長(JS)は最初あなたが書いた内容のことが分からなくて、そして彼に説明してあげた
2	CS26	うん、説明し終わって、“おう、こういうことだった”と彼が言った

番号	発話者	発話
3	R	どのように説明した↑どこか特に気をつけるところはあった↑課長がまだそのことが分からなかった時は
4	CS26	課長が忘れていたかも、つまり、(うん)たぶん私が書いた内容を見てそのことだとは直接的に思い出せなかったかも、(うん)その、その、課長、むこうの会社の課長、(そうそうそう)が提起したこと、それで私は、私 が書いた内容には、ここからはむこうの課長の発言の内容であると明記 されていないが、(うん)むこうからの、から質問が出されたのさ、(うん) そして、私はその答えをそのまま書き込んだ、「都市名」ではこれら、 どのようなメディアを直接的に使えばいいと書いた、(うん)そして、課 <u>長は直接的に、これらのメディアのことは書く必要があるかって、書く 必要がないと言われた</u>
5	R	あなたはどうか答えた↑
6	CS26	彼、彼はこれが要らないでしょうと言って、私は、いいえ、いいえ、私 は“これは一、あのう、「苗字」課長”、その人(むこうの会社の課長) は「苗字」というさ、(おう)“「苗字」課長が、「都市名」の、どう、 どういう場でつかって、人気をあげるためのメディアなのか、それに対 して疑問があったので、それに対しての答えだ”と答えた、“あ”と彼 (JS)は“このようなことだった”、“あ、これは思い出した”と彼が言 った、(おう)そのことなら、彼は、そのことならまだ具体さが欠けてい る、もう少し具体的に書くべきだと言った
7	R	あ、ここでは、たとえば、さっき言ったように、課長と話す時は、質問 をしたりして、または、まあまず質問をして、そしてついでに自分の考 えを提示するという方法を用いなかった
8	CS26	ここではしなかった、彼にこのようなことを聞かれたから、この内容を 確認したかったから、私が直接的に言った、実はこのようなことだった って、(うん)課長は直接、直接的に私を呼び出したから、(おう)だから、 だからまわりくどい言い方を略して、つまり、(おう)彼はこのことを検 討したいので、直接的にはっきりと説明すれば、(おう)これでいい
9	R	おう、ほかの人はいなかった
10	CS26	そう、この中国プロジェクトに参加しているのは課長と私だけで、他の 人がその場にいたら、みんなはそのことを知っているなら、課長に対し てはそのように直接的に言わないが、私と課長の2人だけだったから、 直接的に説明しても大丈夫

例 31 では、CS26 が会議記録に記入された内容の必要性について、課長の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

内容の一部を記録に入れる必要がないとの JS の先行発話(番号 4・7～9 行目)に対して、CS26 がこれらの内容は会議での発言内容であるため、記入する必要がある(番号 6・1～5 行目)と考えていたため、その内容を記入する必要性をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「JS は当時のことを思い出せなく、記入が必要ではないと発話したかも」(番号 4・1～7 行目)、「この内容は会議中にむこうの課長の質問に対する答えである」(番号 6・1～5 行目)と報告され、CS26 が先行発話において、実情(会議中の発言で、記入すべき内容である)に合わないため、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「ほかの人も同席ならば、課長の JS に対して明確な不一致の表示を行わない」(番号 10・1～3 行目)と報告され、そして、そして、JS との同一インターアクションでは、職位の差異による「上下関係」の要因が自己表示の逸脱の留意に関与したため、この事例においても、「上下関係」の要因が引き続き前景化し、CS26 が自己表示の逸脱を留意したと考えられる。

4) 逸脱の調整

応答時に、CS26 が「むこうの会社の課長の質問に対する答えだった」と「直接的に」(番号 6・1～5 行目、番号 8・2～3 行目)不一致を JS に提示したため、CS26 が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の解消を優先させて、不一致を明示的に示すように応答を調整したと確認できる。

なお、CS26 が職位の側面における JS との差異(番号 10・2～3 行目)を認めるが、「JS が私を呼び出して記録の内容を確認し検討したいから、はっきりと説明すればいい」(番号 8・3～5 行目)、「課長の JS に対して、ほかの人もその場にいたら直接的に言わないが、JS と自分だけだったので、不一致を直接的に示しても大丈夫」(番号 10)と報告したように、CS26 がインターアクションの目的(会議記録の内容確認)、二人きりの「私的」場面であるという場面的特徴も考慮したと考えられる。この事例では、インターアクションの目的を調整ストラテジーのゴールとすると、第三者がいない「私的」場面であることが、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

(2) 常識

例 32 コピー機の問題だ(常識、上下<職位：部長－社員>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS19	そのアンケートの副本を上司(JS)に渡す必要があるから、(うん)その副本は、(うん)コピー機でワンセットをコピーして、(うん)そして彼に渡して、枚数を数えなかったが、(うん)その正本を使って集計したから、(うん)そして彼は副本をみて、何ページかが足りないことに気づいて、(うん)とうして、参加者が 41 人だったから 41 ページになるはずで、手元に 36 ページしかなかったと言った、(うん)え、私はこれぜんぶ一緒にコピーして渡したから、足りるはずだと答えた、(うん)きっとコピー機は問題があると言って、(うん)“コピー機は問題ある。”と言った、(うん)あなたのやり方は間違っている、コピーした後は確認しなかったことは正しいやりかたではないと言われた
2	R	うん、それでどう答えた↑
3	CS19	それで私は、コピー機の問題のはずだと言った
4	R	自分の問題ではなくコピー機の問題だと思っていた
5	CS19	主にコピー機の問題だと思う、(うん)コピー機なら、入力された枚数だけにコピーするはずだからさ、これはコピー機の問題のはずだ
6	R	おう、答えた時は何か注意するところがあった↑やわらげに言ったりするとか
7	CS19	なかった<笑いながら>、指定した枚数だけにコピーしてくれるはずだからさ、機械の問題に違いないさ、だから言い方の調整を怠けた、直接的に言った

例 32 では、CS19 がアンケート用紙のコピー枚数が足りなかったことについて、上司の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

CS19 がコピーした後で枚数を確認しなかったため、このミスが生じたとの JS の先行発話(番号 1・8～10 行目)に対して、CS19 が自分のミスではなくコピー機の問題である(番号 5)と考えていたため、責任の所在をめぐる、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「コピー機は入力された枚数だけに印刷するはずなので、枚数が足りなかったのは機械に問題があったからだ」(番号 5、番号 7・1～2 行目)と報告されたため、CS19 が JS の先行発話が社会的常識(e.g. コピー機は入力された枚数だけに印刷するはずで、枚数を確認する必要はない)からの違反であるためと認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。なお、この事例では、JS の発話(番号 1・8～10 行目)から、コピーし

た後は枚数を確認するべきであるということのほうが、日本の社会的常識であると確認できる。すなわち、この事例では、CS19 が中国の社会的常識を参照して、先行発話において命題の逸脱を留意したと考えられる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「言い方の調整を怠けた」(番号 7・2 行目)と語られたため、CS19 が職位の差異によって確立できた「上下関係」がインプットされ、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答時に、CS19 が「コピー機の問題のはずだ」と不一致を「直接的に」(番号 3、番号 7・2～3 行目)JS に示した。このように、CS19 が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の調整を優先させ、不一致を明示的に示すように応答を調整した。この事例では、「コピー機が入力した枚数だけに印刷するはずで、確認する必要はない」とのことについて、CS19 が JS も共通の認識を持っていると考えることは、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

(3) 社会経済的規範

例 33 納期を 7 月に延ばすことはできない

(社会経済的規範、上下<社会的役割：取引先 - 社員>、明示)

番号	発話者	発話
1	R	むこうの会社の人(JS)と話す時は、むこうはやはり 7 月に延ばしてほしいと考えているが、それで説得できるように工夫しなければならなかった
2	CS30	そう、ここでは交渉というようなプロセスが必ずある
3	R	そうそうそう、交渉の時の言い方や内容などは、まだ覚えているか↑
4	CS30	覚えている
5	R	おう、どのように交渉していた↑
6	CS30	言い方は、(うん)これは、日本語でのセールス・トークということと関係している、(そうそうそう)つまり商談のテクニックのこと、(うん)相手はうちの会社の大切な取引先だから、話す時は非常に気をつけないといけない、(うん)会社に損失をもたらしてはいけない、そして、取引先の顔も立てないといけない

番号	発話者	発話
7	R	うん、具体的にはどのように言った↑
8	CS30	あまりに言いきってはいけなく、相手の顔を立てる必要があるから、(うん)これはセールス・トークのテクニックというものさ、(うん)まず、なかなか延ばせないといって、私は一生懸命こう、((中略)) そして彼は <u>1カ月延ばしてもらってとてもありがたいが、やはり納品を7月にのばしてほしい</u> といった、私は <u>これができない</u> と言った
9	R	ここでは直接的にだめだと言った
10	CS30	そう、彼は <u>また1カ月延ばしてほしい</u> と言ったから、私は <u>申し訳ありません</u> というしかなかった、 <u>7月の納品はうちの会社ができなく、上期決算のことに関わっている</u> と言った
11	R	おう、どうしてここでは直接的に言った↑さっきは客の面子を配慮する必要があると言ったが
12	CS30	彼らの面子を配慮しているから最初からもう7月はだめだなどと言わないことにした、(うん)でも彼らが6月はやはり早いと考え、7月の納品を頼んできた、これで売り上げは計上できなくなるさ、(うん)会社の損失になるならやはりはっきりと言わないといけなく、彼にこの理由をはっきりと伝えて、ここでは譲ってはいけなく、直接的に彼らに言うしかなく、7月はできないということを

例 33 では、CS30 が納品期間の延長について取引先の担当者(JS)と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

5月の納品を7月に延ばしてほしいとのJSの先行発話に対して、CS30が7月の納品が会社に損失をもたらすためできない(番号12・3～4行目)と考えていたため、7月までの納期延長をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「会社に損失をもたらしてはいけなく」(番号6・3行目)、「7月の納品だとその売り上げが上期決算に計上できなくなるから、会社に損失をもたらす」(番号10、番号12・3～4行目)と報告されたため、CS30がJSの先行発話が経済的規範(CS30の会社の収益に関わる規範)からの違反であると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時に、「取引先の顔を立てる必要があり、話す時は気をつけないといけなく」(番号6・2～4行目)、「相手のフェイスを配慮して、最初は7月がだめだと言いきらないようにしていた」(番号8、番号12・1～2行目)と報告したように、CS30が社会的役割(取引先—

社員)の差異によって確立できた上下関係の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

CS30 は不一致応答を 2 回行ったが、2 回目の応答では、異なる見解を明確に提示した(番号 8・5 行目、番号 10、番号 12・4～6 行目)。このように、CS30 が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の調整を優先させ、不一致を明示的に示すように応答を調整した。

なお、1 回目の応答について、CS30 が双方の逸脱の調整をともに考慮し、婉曲的不一致応答を選択した(番号 12・1 行目)と報告し、2 回目の応答について、「会社の損失になるならはっきりと言わないといけない。ここでは譲ってはいけない。だから延期できない理由を直接的に提示した」(番号 12・3～6 行目)と報告した。これらの報告内容から、2 回目の応答では、CS30 が JS の先行発話が自社のインタレストを侵害する度合いは大きいと認知したことが、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考ええる。

(4) CS のポジティブ・フェイス

例 34 患者の数は公開されている(CS の P.フェイス、上下<年齢：年下 - 年上>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS21	私がでも最近は中国にも何人かの感染者がでたと言って、(うんうん)もう何人かの感染者がいたのかな、でもすべてが輸入型だと言った、(うん)それで彼女(JS)は、中国でも大爆発、感染者が多く、多くなるかもしれないと言って、(うんうん)でも、 <u>中国はいつも隠すのだからさ</u> 、(うんうん) <u>中国は、いつも、言わないようにしている、感染者が出たとしても言わないのではないかと</u> 言って、(うんうん)彼女は、 <u>いつも言わない、いつも隠すようにしている</u> と言った、(うん)私は、 <u>そうでもなく最近はずいぶん改善されてきて、(うんうん)最近では、どこに、そして感染者が何人いるか、</u> ということはやはり公開されている、と言った、(うんうん)彼女は、中国は今、何があっても言わないとまた少し言い続けていた、(うんうん)私は、でも今は、今はこのようになっていると言った、彼女は、それならやっぱり公開しているのだね、やっぱり報道しているんだと言った、この時は、私は彼女のその発話にあまり賛同できなく、彼女に言った、やはり今の中国は ((後略))
2	R	おう、どのように、どのように具体的に彼女に言った↑
3	CS21	感染者の人数がよく覚えていないが、私は <u>この省には何人がある、この省には何人がある、</u> という情報が毎日ウェブサイトで更新されていると言った(うんうん)、それで彼女はやはり報道しているんだと言った

番号	発話者	発話
4	R	おう、これはやはり言うべきだと、彼女に伝える必要があると思った
5	CS21	うん、私の考えでは、うん、この時は、彼女は中国がこうでそうでと言っているのさ、私は中国人だから、このまま黙る、わけにはいけないさ、(おう)わが国のイメージにも関わっていると思っているさ、やはり言ったほうが良いと思った、(うん)中国のサイトでは全部チャートが載っているから、それぞれのところにいる感染者の人数などの統計さ、まいにち更新している
6	R	日本語を使って彼女に伝えた時は、日本語の使い方に気付いたところがあった↑
7	CS21	うん、日本語の使い方は、特に注意したところはない、主に私の言ったことが分かってもらえることを考えていた、中国は前のように隠ぺいしているのではないことを知ってもらえばいい、確かに SARS の時はいろいろ隠ぺいしていたのさ、(うん)でも今はそうではない、これが分かってももらえばいいと思っていた
8	R	ここでは、さっきの病院の話の時のように、言わないことを考えていなかった
9	CS21	そう、ここはそこまで考えなかった、(おう)彼女と話している時はわりと気をつけているのさ、(うん)やはり私よりは年長者なのでさ、でもここでは中国はいつも隠すと言われた時は、その話をうけて実はいま前と違っていると言った、やはり言ったほうが良いと思った

例 34 では、CS21 が中国国内でのインフルエンザの報道事情について、知り合いの JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

インフルエンザのことについて、中国ではいつも感染者の人数を隠しているとの JS の先行発話(番号 1・3～7 行目)に対して、CS21 が「この前よりはずいぶん改善され、感染者の人数がインターネットなどのメディアで公開され、毎日更新している」(番号 1・7～9 行目、番号 3・番号 5・4～6 行目)と考えていたため、中国は患者数を隠ぺいしているか否かをめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「JS の発話内容の真偽が中国のイメージと関わっている。黙るわけにはいけない」(番号 5・1～3 行目)と報告され、CS21 が先行発話が中国のメタイメージを損ね、自分のポジティブ・フェイスを侵害すると認知し、命題の逸脱と留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「JS が年長者だから言い方に気を付けている」(番号 9・1～2 行目)と語られ、CS21 が年齢の差異によって確立できた上下関係の要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答時に、CS21 が中国では今は感染者の数を毎日更新し、公開している(番号 1・7～9 行目、番号 3・1～3 行目、番号 5・4～6 行目)と不一致を明示的に(番号 7・1～3 行目)JS に示したため、CS21 が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の調整を優先させ、不一致を明示的に示すように応答を調整した。

Rees-Miller(2000)は、話し手が先行発話によって自分のフェイスが侵害されると認知する場合、「自己尊敬」(self-respect)を保つために不一致を強調して示す方法を選択することがあると指摘している。この事例では、「中国のイメージに関わっているので、やはり言ったほうがいい」(番号 5・1～4 行目)、「日本語の使い方を特に注意していない。中国では前のように情報を隠すのではない、ということを分かってもらえばいい」(番号 7・2～5 行目)などの報告内容で示すように、CS21 が JS の先行発話において、自分のフェイスのみならず、中国のメタイメージまで侵害されると認知したことが、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

(5) CS のインタレスト

例 35 その人は去年のお正月にも出勤した

(CS のインタレスト、上下<職位：店長 - アルバイト>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS29	それで彼(JS)は私に、“人がいなければ入ってくれるよね”と言った、(うん)つまり 3 日に入る人がいなかったら、また私に入ってほしいということさ、(うん)もともと嫌ながら大晦日の出勤を引き受けたのだから、2 日にはスキーに行く予定だし、また 3 日にも出勤すると本当にたいへんなことになる
2	R	おう、ここではどう答えた↑
3	CS29	私はその、「苗字」(日本人のバイト仲間)は、彼が入れるはずだと言った、彼らの日本人は元日が休みだから、3 日に入れるはずさ、(うん)店長は <u>彼</u> 、つまり私が言った日本人も来られないかもって、 <u>元旦だから</u> と言った、彼は <u>去年も入れたのではないかと私が答えた</u>
4	R	日本語でどう答えたかは覚えている↑
5	CS29	私は、“ <u>去年</u> ”、“ <u>「苗字」入れるんじゃない↑去年も入れたし</u> ”と言った
6	R	おう、このように直接的に店長に言った

番号	発話者	発話
7	CS29	大晦日の出勤でもうずいぶん不機嫌になったからさ、ここでは言わなければいけないと思ったさ、正月には私も休みたいさ、その人が去年の元旦にも出勤していたから、できると思う。店長はその人の休みだけを考え、私の休みも考えてほしいよと思っていた
8	R	このように言っても大丈夫だと思った↑それを言った時は言い方などについては注意したりしていた↑
9	CS29	しなかった、ここでは何も考えていない、直接的に彼は去年も出勤したと言った、店長には反論することはよくないが、このことは店長も知っているの、直接的に言っても大丈夫だと思った

例 35 では、CS29 が正月休みの出勤時間について、店長の JS と話し合う時のインタラク션을報告している。これまでの会話では、CS29 が上下関係(店長－アルバイト)の要因をインプットし、正月に出勤したくないが、不一致の表示を回避し、大晦日の夜から元旦の午後までの出勤を引き受けた。

1) 不一致の内容

ほかの店員が正月休み中で、3 日の仕事に入れない可能性があるため、3 日も出勤してほしい(番号 3・3～4 行目)と JS が発話したが、これに対して、その店員が去年の正月には出勤したので、今年も入れないことはない(番号 7・2～3 行目)と CS29 が考えていたため、その店員が出勤する可能性をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「3 日にも出勤するとたいへん疲れる」(番号 1・3～5 行目)、「正月には自分も休みたい。そのことは考慮してほしい」(番号 7・行目)と報告されたため、CS29 が先行発話において自分のインタレストが侵害される(e.g. 労力がかかる)と認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時に、「店長に反論することはないが、このことは彼も知っているの、言っても大丈夫だと思った」(番号 9・2～3 行目)と報告したように、CS29 は「上下関係」の要因を引き続きインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

CS29 が「その人が入れるんじゃない↑去年も入ったから」(番号 5)と「言い方を考慮せずに」(番号 9・1～2 行目)JS に提示した。このように、CS29 が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の調整を優先させて、不一致を明示的に示すように応答を調整した。

なお、CS29 が職位の側面の差異を認知し、自己表示の逸脱も留意したが、「大晦日の出勤を引き受けたことでずいぶん不機嫌になった。言わなければいけないと思った」(番号 7)と報告したように、自分のインタレストが侵害される度合いが高いことも認知したと考

えられる。そして、「このことは店長も知っているの、直接的に言っても大丈夫」(番号 9・2～3 行目)と報告したように、CS29 が不一致の内容が JS も知っている事実情報であるとも認知したと考えられる。先行研究の Rees-Miller(2000:1099)、Locher(2004:328)、Sifianou(2012:1560)では、話し手が生じた不一致に伴うインタレストの衝突や対立、または自分のフェイスへの侵害が深刻であると認知する場合、自分のインタレスト、フェイスを保持するために明確な不一致の表示方法を選択傾向が強まると指摘された。そして、Rees-Miller(2000:1098)は、不一致の表示の中でも事実に対する訂正は、ルーティーンとして行われており、過酷なものではないと述べている。これらの指摘を参考にし、JS の先行発話が CS29 のインタレストを侵害する度合いは大きいこと、そして、不一致の内容が JS と共有している事実情報であることは、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

5.3.3.2 自己表示の逸脱に対する調整を優先させた不一致応答：不一致表示の回避

CS が双方の逸脱を留意した後、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例は 27 件であり、回避的の不一致応答が行われた。下記の表 14 では、双方の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のペアを 27 件の事例ごとに集計した結果を示す。

表 14 で示すように、CS が命題の逸脱の調整を優先させた事例(5.3.3.1 の表 13 を参照する)と共通し、命題の逸脱の留意において、「実情」、「常識」、「経済的規範」、「CS のポジティブ・フェイス」、「CS のインタレスト」の要因が関与している。自己表示の逸脱の留意においても、「上下関係」が最も大きく関与している点では共通し、27 件の事例のうちの 24 件となっている(単独で関与した事例：21 件、ほかの要因とともに関与した事例：3 件)。このほかに、「JS のポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」、「場面(公的)」、「インターアクション内の期待(目的)」、「JS のムード」の要因も単独で、またはほかの要因とともにインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与している。

CS が双方の逸脱を留意した後、自己表示の逸脱の調整を優先させ、不一致の潜在化を図り回避的の不一致応答を行ったため、自己表示の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のほうが、調整の優先順位の選択により深く関わっていると考えられる。この 27 件の事例では、自己表示の逸脱の留意に関与した要因には、「上下関係」の要因のインプット回数が最も高く、そして、「上下関係」の要因が命題の逸脱の留意に関与したすべての要因と、ペアでインプットされた。このことから、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例において、留意された命題の逸脱の性格に関わらず、CS が JS との間の支配力の不均衡な配分を最も多く考慮していると示唆している。そして、自己表示の逸脱の留意に関与した「上下関係」以外の要因には、CS が自己表示の逸脱のみを留意した事例(5.2.2 の表 5 を参照する)と共通して、「話題に情報の保有度(低い)」、「場面(公的)」の要因がある。この二つの要因も自己表示の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

表 14：自己表示の逸脱に対する調整を優先させた事例(単位：件)

命題の逸脱の留意に関与した要因	自己表示の逸脱の留意に関与した要因	自己回避
実情	上下関係	9
実情	上下関係、インターアクション内の期待(目的)、JS のムード	1
実情	JS のポジティブ・フェイス	1
実情	話題に関する情報の保有度(低い)	1
常識	JS のポジティブ・フェイス	1
経済的規範	上下関係	1
CS のポジティブ・フェイス	上下関係	4
CS のインタレスト	上下関係	7
CS のインタレスト	上下関係、場面(公的)	1
CS のインタレスト	上下関係、 話題に関する情報の保有度(低い)	1
合計		27

これより、自己表示の逸脱の留意に関与した要因ごとに、逸脱の調整の優先順位における諸要因からの関与に焦点をあて、CS が双方の逸脱を留意し、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例を取りあげて分析していく。

(1) 上下関係(オーナー・アルバイト)

例 36 冷蔵庫の商品は整理済みだ(実情、上下<職位：オーナー・アルバイト>、回避)

番号	発話者	発話
1	CS22	彼(JS)はその冷蔵庫のことを言った、それまではその男の子(バイト仲間)が冷蔵庫を整理していたが、半分ぐらいまでやったところに彼(JS)は店に来て、その男の子を退勤させてから、自分がレジのほうに入った。私がシフトに入ってから冷蔵庫の整理をしろと彼に言われた。(うん)入った時は私がその男の子にどこまで整理できたかと聞いて、3 段目までやったと教えてもらって、それで 4 段目から棚を整理しはじめた。しばらくしたら彼はむこうで叫びだして、この辺の棚はもう整理しおわったかって、もう完了したと私が言ってから、 <u>前の列に並べてある商品には出していないものがあるからまだ整理が終わっていない</u> と言われた
2	R	もう一回整理しろということだよ

番号	発話者	発話
3	CS22	そう、(うん)彼は前の行は整理されていなく、あらためて冷蔵庫を整理しろと言った。でも、私はその男の子に聞いたのさ、前の列はすでに整理済みだと彼は言ったから、あらためてやる必要がないのさ、(うん)ただその後はまた客が入ってきて、商品を取り出したから整理されていないように見えただけのさ
4	R	あなたはどのようにしていた↑
5	CS22	私は“はい”と言った、前の列から整理しはじめて
6	R	実はもう整理済みだとは彼に言わなかった↑その後は客が来たから商品が取り出されたなどを言わなかった↑
7	CS22	言わなかった、とにかくオーナーから何かを言われる時は、私は常に“はい”で答えるから<笑いながら>、整理されていない前の列から商品を並べと言われたから、そこから並べ始めた、ゆっくりすればいいさ

例 36 では、CS22 がアルバイト先のコンビニで、冷蔵庫の整理についてオーナーの JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

JS が冷蔵庫の棚にある商品を並べなおす必要がある(番号 1・8～9 行目、番号 3・1～2 行目)と発話したが、「そこはもう整理済みだとバイト仲間から教えてもらった」(番号 1・4～6 行目)、「客がまた商品を取り出したから、整理されていないように見えるだけだ」(番号 3・2～5 行目)と CS22 が考えていた。すなわち、JS が客の視点から冷蔵庫の棚が整理されていないと考えているが、CS22 がバイト仲間の視点からすでに整理済みであると考え、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「3 段目まで整理が終わったと教えてもらった」(番号 1・4～6 行目)、「自分からバイト仲間から聞いて、前の列は整理済みだと教えてもらった」、「整理されていないわけではなく、客がまた商品を取り出したからそのように見える。あらためてやる必要はない」(番号 3)報告されたため、CS22 が先行発話において実情(冷蔵庫の前の棚は整理済みだ)に合わないとは認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「オーナーに何かを言われる時は常に“はい”と答えるようにしている」(番号 7)と語られ、CS22 がオーナーの JS に対して、職位の差異によって確立できた「上下関係」の要因を習慣的にインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答時に、「“はい”と答えた」(番号 5)、「整理済みだということを言わなかった」、「並

べなさいと言われたから、並べ始めた」(番号7)と報告したように、CS22が双方の逸脱を留意したが、支配力の不均衡な配分への順応をより多く配慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させ、回避的不一致応答を行うように調整した。

この事例では、CS22がアルバイトである自分に対してオーナーが持つ支配力をより多く考慮し、不一致を示さないように「自己管理」(ネウストプニー1995b)を行い、自己表示の逸脱の調整を優先させたと考えられる。

(2) 上下関係(客 - 店員)

例 37 髪はそれほど長くない(CS の P.フェイス、上下<社会的役割：客 - 店員>、回避)

番号	発話者	発話
1	CS22	そのお客さんは髪を前に垂らしてはいけないなどと言っていた
2	R	おう、どういうことだった↑
3	CS22	日本のお客さんはやはりとてもややこしい、私の髪はこれまでの長さでさ、(うん)そのおばあさん(JS)は、 <u>“スタッフとしては、女の子はこのように髪を垂らしておしゃれだが、スタッフとしてしてはいけない”</u> と言った、私は別におしゃれのために髪を垂らしているのではない、(うん)洗ったばかりの髪は自然に垂れてくるの、自然に垂れてくるから、束ねても後で垂れてくるから、もっと乱れてしまうのさ、(うん)今は後ろで束ねればいいのに、 <u>彼女の前髪は前に垂らしてはいけない、おしゃれをするなら仕事が終わってからすればいいなどと言っていた</u> 、(うん)実は髪はこうになっているのは彼女と何の関係もない、(うん)そこにおいてある商品に触れることもないし、そして、私は <u>“すみません”</u> 、 <u>などと言って謝った</u> 、そのお客さんはまた、“おばさんのことをうるさいと思わないで、私はみたら言わないと気が済まない性格だから”などと言っていた、(うん)すでにうるさかったのに、さらにこのようなことを言い続けて、それで私は、“そんなことございません”、“わたしのために言ってくれてありがとう、今後気をつける”と言った
4	R	おう、彼女に謝った
5	CS22	そう、そばにいた店長も謝っていた、ぜんぜん言いたくなかったが、でもやはりこのように言うのさ<笑いながら>、謝り続けて、彼女が帰った時はまた“ありがとうございます”、そして、“よろしくお願いします”と言った
6	R	これはどうして↑店長がそばにいない場合もこのように答える↑

番号	発話者	発話
7	CS22	店長がそばにいらなくても謝る、彼女はお客さんだから、彼女が言ったことに言い争いしてはいけないさ、自分の髪の毛のことは彼女とぜんぜん関係がないと思っているが、やはりすみませんなどと言わなければならない、(うん)時にはこれを自分のための鍛えとして考えている

例 37 では、CS22 がアルバイト先で、髪の毛の長さが客の JS に言われた時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

おしゃれのために髪を前に垂らすことは、店のスタッフとしてすべきではない(番号 1、番号 3・2～3 行目、7～8 行目)との JS の先行発話に対して、CS22 が「おしゃれのためではなく、髪が自然に垂れてきているだけだ」(番号 3・4～6 行目)と考えていたため、JS の指摘をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱の留意

先行発話に対する感想として、「髪が商品に触れるわけでもないのに、私の髪は彼女とまったく関係がない。うるさかった」(番号 3・8～10 行目、13 行目)と報告されたため、CS22 が先行発話において自分のポジティブ・フェイス(e.g. わざと髪を垂らしているのではない)が侵害されると認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

応答時の意識について、「客だから言い争いしてはいけない」(番号 7・1～2 行目)と語られ、CS22 が社会的役割の差異(客－店員)によって確立できた上下関係の要因をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断して、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答では、CS22 が不一致を示さずに JS に謝った(番号 3・10～11 行目)。そして、応答時に CS22 が「謝りたくないが、客だからやはり謝らなければならない」(番号 5、番号 7・1～3 行目)とも考えていた。応答内容と応答時の感想を合わせて考えると、CS22 が双方の逸脱を留意したが、社会的役割の相違のほうをより多く配慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させて、回避的の不一致応答を行うように調整したと確認できる。この事例では、例 36 と共通して、CS22 が店員である自分に対して客が持つ支配力をより多く考慮したことが、自己表示の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

(3) 上下関係(マネージャー－アルバイト)、話題に関する情報の保有度(低い)

これより、「上下関係」がほかの要因とともにインプットされ、自己表示の逸脱に対する調整の優先に関与した事例を取り上げて、考察していく。下記の例 38 では、CS21 が 4 月分のアルバイト代の計算が間違えられて不足していると考え、アルバイト先のマネージャーの JS と交渉する時のインターアクションを報告している。

例 38 足りない分は補欠すべきである(CS のインタレスト、
上下<職位：マネージャー - アルバイト>、保有度<低い>、回避)

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略)) 私が“そうか”といって、“実習にしても、すでにこの数字(もらった給料の額)を超えている”と言った。(うん)、そして彼女(JS)は“そう”と言って、(うん)そして彼女は“何月↑”と聞いて、4月分だと答えた、(うん)彼女は“4月分、4月分はなぜ今さら言い出したの↑”って、(うんうん)、 <u>“言ってもあるとは限らない、戻ってこない”</u> と言った、(おう)“ <u>戻ってくるとは限らない</u> ”、彼女は <u>“早めに言わないと、こことここは数がおかしいとかを言わないと”</u> などと言った。(うん)((中略)) そして、彼女は“じゃこれ(給料の明細書)もらっておく、確認してくる”といって、(うん)“ <u>でも問題があったとしても、お金が戻ってこない</u> ”と言った。(うん)彼女はこのようなことを言った、その時はずいぶんがっかりした、(うん)こんなに規模の大きいスーパーなのに、間違っただとしたらちゃんと返してくれるべきで、どうして間違っても、間違ってもお金が戻ってこない、返してくれないといえるのか、と思っていた
2	R	このことは彼女に言わなかったよね
3	CS21	<u>このことは言わなかった</u> 、(うん)その後はほかの人が入ってきて、忙しかったから(うん)、というのは、というのは、やはり自分の計算が間違っているかそれとも正しいのかはまだ分からないと思っていたからさ(うんうん)、もし、もし自分が間違っただとしたら、彼女にこんなことをいう必要もないし、(うん)、もし間違わなかったとしたら、必ず、その時になってまた彼女に言うからさ、(うん)((後略))

1) 不一致の内容

「言い出したのはもう遅いので、計算が間違っただとしても不足分の給料は戻ってこない」(番号 1・4～10 行目)との JS の先行発話に対して、CS21 が「間違っただとしたらちゃんと返してくれるべきだ」(番号 1・11～14 行目)と考えていたため、給料の計算を間違えた場合の補償をめぐる、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱の留意

先行発話に対する感想として、「がっかりした。金額が間違っただしたらちゃんと返してくれるべきだ」(番号 1・11～14 行目)と報告され、CS21 が先行発話において自分のインタレストが侵害される(e.g. 金銭的成本がかかる)と認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

応答時の意識について、「自分の計算は正しいかどうかはまだわからない」、「正しくなか

ったら彼女にこのようなことを言う必要もない」(番号3・2～5行目)と語られ、CS21が話題(アルバイト代の計算のしかた)に関する情報の保有度が低いこと、そして、職位の差異(マネージャー―店員)によって確立できた上下関係の要因をインプットし、その場での不一致の表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

CS21が「自分の計算は正しいかどうかはまだわからない」、「正しくなかったら彼女にこのようなことを言う必要もない」(番号3・2～5行目)と考え、応答時にJSに不一致を提示しなかった(番号3・1行目)。応答内容と応答時の感想を合わせて考えると、CS21が双方の逸脱を留意したが、自己表示の逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行うように調整したと確認できる。この事例では、CS21がJSとの職位の相違をより多く考慮したことのほか、話題に関する情報を十分に保有していないということも、自己表示の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

「上下関係」の要因がほかの要因とともにインプットされ、自己表示の逸脱に対する調整の優先に関与した事例はほかに2件あるが(5.2.3.2の例18を参照する)。これより、「上下関係」以外の要因が単独でインプットされ、関与した事例を分析する。

(4) 話題に関する情報の保有度(低い)

例39 他の店のバイト仲間の性格(実情、情報の保有度<低い>、回避)

番号	発話者	発話
1	CS11	あー、ってー、あのうー、あの人のそういう人格つめたい<ってゆう>
2	JS12	<つめたく>ないよ
3	CS11	えー↑
4	JS12	「苗字」さん、緊張しててみんなこう無表情っていうじゃない、ってー ー応うちとー、むこうのメンバー何人か(やっと思えばー??)、ひとまず入 ったら「苗字」さんを笑わせましようと思んなで
5	CS11	えー↑ ²⁵
6	JS12	やってたの、(え↑) ((後略))

例39では、CS11が店長のJSと他店のバイト仲間の性格について話している。

1) 不一致の内容

その人が冷たい(番号1)人だとCS11が感想を述べた後、JS12に「冷たくない」(番号2)と否定された。この先行発話に対して、CS11が「この前の応援で一緒に働いた時は冷たい感じだった」と考え、話題の人の性格をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱の留意

先行発話に対する感想として、「この前の応援で一緒に働いた時は冷たい感じだった。店

²⁵ 番号5の「えー↑」と番号6の「え↑」は、メンバー全員が協力してその人を笑わせようとしたことに対して、「ありえない、びっくりした」との感想を表す内容であるとCS11がFUIで報告した。

長の話は信じられなかった」と FUI で報告されたため、CS11 が先行発話において実情(冷たい人の感じだった)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

応答時に、「冷たい人だなという感じたったが、一緒に働いたことは1回しかなくて、本当は冷たい人かどうかはよく分からないので反対意見の提示をとりやめた」と FUI で報告したように、CS11 が話題(バイト仲間の性格)に関する情報の保有度が低いという要因をインプットし、不一致の表示自体を不適切だと判断して、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

番号3と番号5の発話では、CS11 が不一致を示さずに応答した。すでに提示したように、応答時に CS11 が「一緒に働いたことは1回しかなくて、本当は冷たい人かどうかはよく分からないので反対意見の提示をとりやめた」と考えていた。応答内容と応答時の感想を合わせてみると、CS11 が双方の逸脱を留意したが、情報の低い保有度をより多く考慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行うように調整した確認できる。

この事例では、不一致の対象になる話題に関して、CS11 が情報を十分に保有していないと認知したことが、自己表示の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

(5) JS のポジティブ・フェイス

下記の例 40 は例 1 に後続する部分であり、16 歳の高校生が店のエリアキャプテンになれるか否かをめぐって不一致が生じた。そして、CS11 が否定的意見を述べた JS12 の先行発話において実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意した。1 回目の応答(番号 1)では、CS11 が自己表示の逸脱を留意せず、異なる見解を明確に提示した。この後は、JS12 が 17 歳の子がエリアキャプテンになれない理由(番号 4、番号 6)を述べ、CS11 の発話を引き続き否定していた。これより、CS11 の 2 回目の応答(番号 5、番号 7)に注目し分析する。

例 40 17 歳のエリアキャプテンがいた (実情、JS の P.フェイス、回避)

番号	発話者	発話
1	CS11	いや、ええと、前の店は一、ええと確かに 17 歳のキャプテンで一、そして一 【 【
2	JS12	【 【ええと 17 歳キャプテン、やってる<ということは一>
3	CS11	<ふり、フリーター>

番号	発話者	発話
4	JS12	ええと店長がどこまで責任をとれるか、どうということかという、(おえさせませんでした??)17歳の子責任おえません、キャプテンなのに、おえることができない、たとえばの話、ほんじめで金銭のことでわたしのミスかもしれないけど、5000円でました、たとえば「苗字」さんとかおめえから(いいかたがないけど??)まあ弁償しろの話になるかもしれないじゃない
5	CS11	はい、まあ
6	JS12	17歳の子弁償しろってゆうのがどうするかちょっと親に聞いてください、 <u>うん、その子キャプテンですってゆう、しよ、関係ないから、本来、シフトリーダーに一、高校生をシフトリーダーするのがよほどだよ</u>
7	CS11	<u>うん</u>

1) 不一致の内容

JS12の発話に対して、FUIで「働いた店には16、7歳の高校生がエリアキャプテンを担当していることは事実だ」との感想を抱え続けていたとCS11が報告したため、高校生がエリアキャプテンになる可能性をめぐる不一致が引き続き存在していると判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想について、「JS12が言っていることは分かるが、前の店では確かに高校生のエリアキャプテンがいた」と報告された。CS11がJS12の先行発話(番号4、番号6)において、引き続き実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと判断できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「地方と千葉はそれぞれの事情が異なっている。店長は地方のことが詳しくないので理解できないかもしれない」、「店長の話を否定した後は、まだ信じてもらえなかったようで、自分の意見をさらに強調すると、対立の状況が続いてしまうと思ったので、再びの不一致の表示を控えた」とFUIで報告された。このように、CS11が再びの不一致の表示が相手のポジティブ・フェイスを侵害する恐れがあると予想し、不一致の表示自体を不適切だと判断して、自己表示の逸脱も留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

2回目の応答では、CS11が相づちをうつのみで(5、7行目)、JSに不一致を示さなかった。この応答について、CS11が「自分の意見をさらに強調すると、対立の状況が続いてしまうと思ったので、再びの不一致の表示を控えた」と報告した。応答内容と応答時の感想を合わせて考えると、CS11が双方の逸脱を留意したが、JSのポジティブ・フェイスの維持をより多く考慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行うように調整した確認できる。

この事例では、再度の不一致の表示が JS のポジティブ・フェイスを侵害する度合いが高いことは、自己表示の逸脱に対する調整の優先に関わっていると考えられる。

「上下関係」以外の要因で、「JS のポジティブ・フェイス」と「常識」が自己表示の逸脱の調整の優先に関与した事例は 1 件ある(5.2.3.3 の例 21 を参照する)

5.3.3.3 双方の逸脱に対する調整をともに考慮した不一致応答：婉曲な不一致の表示

CS が双方の逸脱の調整をともに考慮した事例は 31 件ある。これらの事例において、CS が留意した双方の逸脱の解消に向けて、不一致を婉曲的に示すように応答を調整した。下記の表 15 では、双方の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因のペアを 31 件の事例ごとに集計した結果を示す。

表 15：双方の逸脱に対する調整をともに考慮した事例(単位：件)

命題の逸脱の留意に関与した要因		自己表示の逸脱の留意に関与した要因	双方 婉曲
実情		上下関係	14
		上下関係、JS のポジティブ・フェイス、 場面(公的)	1
		話題に関する情報の保有度(低い)	1 ^{#26}
常識		上下関係	2
社会経済的規範	会社の規範	上下関係	1
	仕事の規範	上下関係	1
	経済的規範	上下関係	3
CS のインタレスト		上下関係	7
JS のインタレスト		上下関係	1
合計			31

表 15 で示すように、片方の逸脱の調整を優先させた事例(5.3.3.1 の表 13、5.3.3.2 の表 14 を参照する)と共通し、命題の逸脱の留意において、「実情」、「常識」、「社会経済的規範(会社の規範、経済的規範)」、「CS のインタレスト」、「JS のインタレスト」の要因が関与したとみられた。

自己表示の逸脱の留意において、自己表示の逸脱に対する調整を優先させた事例と共通して、「上下関係」が最も大きく関与している。31 件の事例のうちの 30 件において、「上下関係」の要因が単独で(26 件)、またはほかの要因とともに(1 件)関与している。そして、「上下関係」以外に、「JS のポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」、「場面(公的)」が自己表示の逸脱の留意に関与した事例もみられた。

²⁶ この事例では、CS が職位において JS よりは上位である。

この 31 件の事例では、「上下関係」の要因が最も多く自己表示の逸脱の留意に関与し、そして、この要因が命題の逸脱の留意に関与したすべての要因とペアでインプットされた。このことから、これらの事例において、CS が命題の逸脱の性格に関わらず、JS との間の支配力の不均衡な配分も多く考慮しているため、双方の逸脱をともに解消できるように調整ストラテジーを選択したと示唆された。

これより、「上下関係」が単独で、またはほかの要因とともに関与した事例、「上下関係」以外の要因が関与した事例を取りあげ、双方の逸脱の調整をともに考慮し事例を分析する。

(1) 上下関係(部長、本部長 - 課長)

例 41 その会社の下期実績は収入予想に組む必要はない

(実情、上下<職位：部長、本部長 - 課長>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS30	つまり私たち 2 人の課長が部長と本部長に報告する、(うん)午後の 1 時から 2 時までは下期、実績予想、(うん)報告会、どうしてこのような報告会があるかという、今年は震災があつて、((中略)) 部下とのヒアリングはすでに終わり、今は私ともう 1 人の課長が部門のリーダーとして上司に単独で報告する、1 人あたりは 30 分で、短い時間で、午後 1 時半からは私の報告で、途中で本部長たちは質問してくる、それに対して説明しなくちゃいけない
2	R	あなたが書いた予想報告については何か言われた ↑
3	CS30	あつた、彼らの意見というのは、私の報告の中に、上期でうちの会社におよそ 2000 万円の利潤をもたらしてくれた会社があるが、私は下期、の予想を書いた時は組んでいない、入れなかった、(おう)彼(JS)は、“ <u>これ(その会社からのオーダー)は毎月があるから、どうしてこの会社の売り上げを組んでいなかったか、組むべきだ</u> ”と言った、私は、“ <u>これは上期の規模で計算すれば、月に 200 トン、半年で 1200 トンじゃん</u> ”、(うん) “でも、今は、自動車メーカー、この、50%ダウン、回復していると <u>言っているんだけど、早く戻れば、えー、10 月、まあ 9 割回復、そうすれば、<u>这个 200 トン、半年の在庫ではなくなる、(うん)使用量が減少したからさ、1 年間分、または 8 カ月、の在庫を持つ</u>”、その会社のオーダーが後ろ倒しになってくる、11 月と 12 月はオーダーがくるかもしれないが、それだったらその分の利潤を入れることができる、でも、ここにはもう一つの会社があり、この会社は 11 月と 12 月の利潤はないかもしれない、これでちょうど、一つは利潤があり、もう一つはない、だから一つしか入れなかった、相殺してちょうどバランスが取れると言った</u>
4	R	おう、この内容はぜんぶ彼らに伝えた

番号	発話者	発話
5	CS30	そう、上司の人は特に数字の真実性を重視しているから、私ははっきりと説明してあげなければならない、この報告会は主に上司に状況報告し、そして上司から何か質問が聞かれた時は、また説明する
6	R	言った時は気をつけているところはあったか↑
7	CS30	これは、一つとして上司が正しくないと直接的に言わないこと、(うん)部長と本部長だから、まず裏付けを述べなければならない、つまり <u>確実なデータを持って説明すること、これで上司に納得してもらう、(おう)だから私が答えた時は、この会社についての予想、もう一つの会社の状況、どのように相殺するかなどを報告し、だからこの会社からの売り上げを入れなかったと詳しく説明した</u>
8	R	おう、日本語の言い方については何か特に注意したところはあったか↑
9	CS30	言う時は断言する口調は避けるべきだ、つまり、上司のあなたは実情を把握できていなく、私から説明してあげましょう、のような言い方は無礼な言い方だ、(うん)言う時は、一つは数字、データを中心に述べる、 <u>そして、柔らかい表現を使う、例えば“というふうに思われます、と予測したほうが良いように思います”</u> など

例 41 では、CS30 が下期実績予想報告会で、上司の JS と予想の結果について話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

ある会社から得られる利潤を予想の結果に入れるべきだとの JS の先行発話に対して、「自動車の生産は 50%も減少したから、その会社からのオーダーも後ろ倒しになり、予想通りの利潤にならない」、「利潤があるとしても、下期に利潤が上がらない会社の一つあり、この二つの会社についての予想が相殺できるから、入れないほうはバランスが取れる」(番号 3・7～16 行目)と CS30 が考えていたため、下期実績予想の統計方法をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

JS が「実情を把握できていない」(番号 9・1～2 行目)と CS30 が考えていたため、CS30 が先行発話において実情(e.g. 震災の影響でその会社の下期の利潤は予想通りにならない)に合わないと認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「上司が正しくないことを直接的に言ってはいけない。確実なデータを提示し、自分の考えの裏付けを述べてから、納得してもらう必要がある」(番号 7・1～3 行目)、「私から説明してあげましょうという態度が礼儀正しいことではない。柔らかい表現を付け加えて断言の口調を避けることだ」(番号・1～3 行目)と語られたため、CS30

が職位の差異によって確立できた上下関係の要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断して、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答内容をみると、CS30 が自分の考えについて、「裏付けを述べて、詳しく説明した」(番号)が、説明する時に「断言の言い方を避けて、数字、データなどの裏付けの提示を中心に、柔らかい言語表現を加えた」(番号 9)とも報告されたため、CS30 が双方の逸脱の解消をともに考慮して、不一致を婉曲的に示すように応答を調整したと確認できる。

なお、自己表示の逸脱の調整を優先せず、やわらかい言語表現を用いて不一致を示したことについて、「予想報告会なので、上司に質問されたら、説明をしなければならない」(番号 1、番号 5)と報告された。そして、上司に説明する時は自分の異なる見解を裏付けるデータを提示しなければならない、断言の口調を避けるべきだ(番号 7、番号 9)とも CS30 が理由を述べた。このように、CS30 が上下関係の要因以外に、インターアクション場面の性格(上司に実績予想について報告する場面、詳しい説明が求められる)も考慮したと考えられる。この事例では、実情に合わないこと、顕在化している上下関係、そして、インターアクション場面の性格がともに婉曲的不一致応答が行われたことに関わっていると考えられる。

(2) 上下関係(店長 - アルバイト)

例 42 勤務時間数を減らしてはいけない

(自分のインタレスト、上下<職位：店長 - アルバイト>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS29	私は彼(JS)に来月のスケジュールはどのように組まれたかと聞いて、(うん)もう作り終わったと彼が言った、 <u>基本的には頼まれたままに作ったが、勤務時間は数時間ぐらい減らしたと言った</u> 、スケジュールを確認したら、私が頼んだように組んでくれなかったことに気づいて、さらに毎回は1時間が減らされ、すこし腹立った
2	R	それで彼に言おうと思った↑
3	CS29	私が頼んだままにスケジュールを組んでほしく、1分間たりとも減らさないでほしかった(うん)彼からは毎回はただ1時間だけ減ったように見えるが、私にとっては大きな損失だ、(うん)ということと言おうと思った。1週間に1、2時間が減らされると、1カ月で1万円になるからさ、(そうそうそう)私はまた論文を書かなければならないから、この前に頼んだようにスケジュールを作ってもらえば、集中してアルバイトをする時間が取れ、収入も減らない、という意味を伝えようと思った
4	R	これについては彼にどう言った↑

番号	発話者	発話
5	CS29	とても悩んでいるふりをして彼に言ったのさ、スケジュールを組む人は店長だから、直接的にこれはだめで変えてくださいとは言えない、(うん)私が言ったのは、1週間で2時間が減らされると2000円、1か月で8000円となる、私の生活費としてはけっこう大きな額である、(うん)などのようなことを言ったさ、お願いするみたいな口調でさ
6	R	それで彼はどのように答えてくれた↑
7	CS29	その後は彼がまたみてる、換わってもらえる人がいたら、かわってもいいって、“自分でいじっていいよ”と言ってくれた

例 42 では、CS29 が来月の出勤スケジュールについて、店長の JS と話し合う時のインターアクションを報告している。

1) 不一致の内容

出勤スケジュールはほぼ CS29 の希望どおりに組んだが、勤務時間を少し減らしたとの JS の先行発話に対して、CS29 が「頼んだままに組んでくれていなく、毎回の勤務時間は 1 時間ほど減らされた」(番号 1・3～5 行目)、「依頼したままのスケジュールを組んでほしかった」(番号 3・1～2 行目)と考えていたため、出勤スケジュールの組み方をめぐって、不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「毎回は 1 時間が減らされ、少し腹立った」(番号 1・5 行目)、「毎回は 1 時間ほど減らされると、1 か月の収入は 1 万円近く減少し、論文を書く時間の調整も難しくなる」(番号 3・2～7 行目)と報告されたため、CS29 が先行発話において自分のインタレストが侵害される(e.g. 金銭的、時間的コストがかかる)と認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

応答時に、「スケジュールを組む人は店長なので、直接的に言えない」(番号・1～2 行目)と報告したように、CS29 が職位の差異によって確立できた上下関係の要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断し、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答時に、CS29 が「直接的にスケジュールを変えてください」と言ったのではなく、「悩んでいるふりをして、お願いする口調」で自分の主張を支える理由を提示した(番号 5)ため、CS29 が双方の逸脱の解消をともに考慮して、不一致を婉曲的に示すように応答を調整したと確認できる。

CS29 が職位の差異によって自己表示の逸脱を留意したが、それに対する調整を優先せずに、双方の逸脱の解消をともに考慮した背景に、JS の先行発話が CS29 のインタレストにもたらす侵害の度合いが高いことが関わっていると考えられる。

(3) 上下関係(課長 - 社員)、JS のポジティブ・フェイス、場面(公的)

下記では、例 19 を再掲し、「上下関係」の要因とほかの要因がともに CS の調整に関与した事例を分析する。

例 19 クライアントとの打ちは来月からだ(実情、上下<職位>、JS のポジティブ・フェイス、場面<公的>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS26	会議の時は、課長はまた今わたしたちが開発中のクライアントの話をしたのさ、(うん)一つのクライアントの情報を言い間違えた、本来は来月になってから具体的な協力計画の話をする予定になっているはずだが、彼は間違えたかもしれない、 <u>来週からその計画の話をすると言った</u> 、それで私たちは緊張していた<笑いながら>
2	R	それで課長に言ったか↑
3	CS26	言った、これはもう手帳に書いたから、確かにわざと手帳を取り出して確認した、課長のほうは間違えたはずだった
4	R	あなたはどのように言った↑
5	CS26	これはみんながいる、会議の時はさ、だから直接的に課長が間違えたとはいえない、顔が立たないから、 <u>とにかく先に賛成し、そうですね、この計画はとても重要だとかを言ってから、(うん)そして、実は来月からという話だったよねって、彼に確認する、という質問の形で言った</u>

1) 不一致の内容

打ちは来週中に行われる予定だとの JS の先行発話に対して、CS26 が「来月から始まる予定のはずだ」(番号 1・3 行目)と考えていたため、打ち合わせの開始時間をめぐって不一致が生じたと判定できる。

2) 命題の逸脱

「来月から始まると自分の手帳に書いてある。手帳をみて、JS のほうが間違っていると確認できた」(番号 3)との報告内容から、CS26 が先行発話において実情(打ち合わせが来月から始まる予定だ)に合わないことを認知し、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱

応答時の意識について、「みんながいる会議の場面だから、直接的に課長が正しくないという顔が立たない」(番号 5・1~2 行目)と語られ、CS26 が職位の差異(課長-社員)によって確立できた上下関係、JS のポジティブ・フェイス、会議の場面であるという場面的特徴、といった要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

応答時に、「とにかく先に賛成して、そして、確認の形で来月だったよねと不一致を提示

した」(番号5・2～4行目)と報告したように、CS26が双方の逸脱の解消をともに考慮し、不一致を婉曲的に示すように応答を調整したと確認できる。

この事例は、「手帳をみて来月から始まることを確認した」(番号3)と報告したように、話題に関する情報の保有度はJSよりCS26のほうが高いと考えられる。CS26が命題の逸脱に対する調整を優先せず、双方の逸脱の解消をともに考慮した背景に、JSとの職位の差異が関わっていると考えられる。

(4) 話題に関する情報の保有度(低い)

「上下関係」以外の要因が関与した事例は1件のみで、下記では例20を再掲し、調整段階に焦点を当て分析する。

例20 その人が夜勤の手伝いをすることはありえない(実情、保有度<低い>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	JS11	【】でも一、夕方のメンバーたとえ、夕方ってゆうか、「苗字」と一、「苗字」くんは一、深夜のことを考えて、ちょっとずつやってて、いつもくれるけどー
2	CS11	(??し)、「苗字」、「苗字」やってないよ
3	JS11	<ええ↑>
4	CS11	<やっていないと思う>、あいつはね、ほかの人と一緒に入るの、のばあい、おれは分からないけどー、俺といっしょに入る、ところはね、仕事<やらない>

夕方勤務のバイト仲間が、いつも深夜勤務の人を手伝ってくれる(番号1)とJS11が発話したが、ここでは、番号4のCS11の発話を取りあげて分析する。

1) 不一致の内容

JS11の先行発話に対して、CS11が1回目の応答では(番号2)否定的意見を明確に述べたため、そのバイト仲間が深夜勤務の手伝いをしているか否かをめぐって不一致が生じたと確認できる。

2) 命題の逸脱

先行発話に対する感想として、「その人が深夜勤務の準備を手伝っているところを見たことがない。やっていないと思う」とFUIで報告したため、CS11が先行発話において実情(手伝うところを見たことがない)に合わないと感じ、命題の逸脱を留意したと確認できる。

3) 自己表示の逸脱の留意

応答時の意識について、FUIで「確かに自分と一緒に出勤する時はみたことがないが、後輩の人と一緒にの時はやったことがあるかもしれない。これらのことがよくわからないので、“と思う”を意識的に追加した」と報告したように、CS11が話題(そのバイト仲間が深夜勤務の人を手伝うこと)に関する情報の保有度が低いとの要因をインプットし、明確な不一致の表示を不適切だと判断して、自己表示の逸脱を留意したと確認できる。

4) 逸脱の調整

番号4の発話では、CS11が不一致の内容に個人的見解であることを示す言語表現の「と思う」を付け加え、ほかの人と一緒に働く場合のことは分からないが、自分と一緒にの時はやっていないと主張の妥当性に制限をかけたため²⁷、婉曲的不一致応答が行われたと確認できる。

この事例では、CS11が先行発話が実情に合わなく命題の逸脱と留意したが、命題の逸脱に対する調整を優先せず、双方の逸脱の解消をともに考慮した背景に、不一致の対象になる話題に関する情報を十分に保有していないことが関わっていると考えられる。

5.4 「その他」の事例

5.2と5.3では、主にインターアクション・インタビューでの報告内容を対象に、CSが行った具体的な不一致応答の事例を取りあげ、個々の不一致応答における言語管理プロセスの「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階に焦点をあて考察を行った。インターアクション・インタビューでは、不一致応答の具体的な事例に関連するエピソード的経験や情報(同一のJSとの間で生じた意見の不一致や不一致応答のエピソード、日中接触場面での不一致応答に関する習慣化された言語管理のパターンなど)もリコール・インタビューで報告され、26件の事例を得られた。これらの事例において、JSの先行発話によって不一致が生じたことを確認できるが、インターアクションに関する場面的情報を詳しく想起してもらえなかったため、CSが先行発話において命題の逸脱を留意したか否かについて判断しがたい場合が多い。なお、自己表示の逸脱の留意、調整の側面からみると、CSが不一致応答を行う際に、不一致が生じた場面に埋め込まれた社会的、場面的要因をインプットし、不適切な不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意した後、これらの逸脱の解消を考慮し、婉曲、または回避的不一致応答を行うように調整した事例は大半である。応答内容や場面的情報の詳細について詳しく調べられないため、これらの事例を分析の対象として取りあげなく、具体的な不一致応答の事例を分析する時の参考資料にとどめることにした。下記の表16では、CSがリコール・インタビューで報告した26件の事例において、インプットされた社会的、場面的要因、不一致応答の傾向を示す。

²⁷ (Tsui 1991:607)は、取りあげられた話題に関して情報を十分に所有していないことを示す「分からない」(I don't know)は、不確定の意味を示すマーカーで不一致提示の前置き、明確な不一致提示を回避するなどの機能を果たすことができ、相手と自分のフェイスを守ることに対する関心の現れであるとしている(Locher 2004:125より引用)。

表 16 : 「その他」の事例においてインプットされた要因、CS の不一致応答の傾向

インプットされた要因	明示	婉曲	回避
上下関係	2# ²⁸	2#	6
上下関係、インターアクション内の期待(文化ゲスト)	0	0	1
上下関係、話題に関する情報の保有度(低い)	0	0	1
上下関係、インターアクション内の期待(目的)	1#	2# ²⁹	2
上下関係、インターアクション内の期待(目的)、親疎(親しい)	1	0	0
上下関係、親疎関係(親しい)	1#	0	0
上下関係、親疎関係(親しくない)	0	0	3 ³⁰ #
上下関係、場面(公的)、JS の P.フェイス、情報の保有度(低い)	0	1	0
上下関係、場面(ぜみ)	0	1	0
職場の雰囲気	1	0	0
場面の接触性	0	1 ³¹	1
合計	6	7	14

5.5 逸脱の留意が生じなかった不一致応答

5.2 と 5.3 では「逸脱の留意」の概念を援用し、逸脱が留意され言語管理が行われた CS の不一致応答を対象に、逸脱の留意、調整の段階に注目し分析を行い、CS がインプットした社会的、場面的要因からの関与を考察した。第 3 章の 3.4 ですでに述べたように、CS の不一致応答において、常に逸脱が留意されるとは限らなく、場面の特徴からの影響で特定の要因が背景化されることに伴い、ある逸脱に関する規範の適用が緩和されるため、片方の逸脱しか留意されない、または逸脱が留意されないことがある。上下関係が顕在化している場面では、事例数は限られているが、逸脱が留意されずに行われた事例が 1 件収集でき、下記で提示して説明する。

例 43 病院のやりかたは正しい(逸脱の留意なし)

番号	話者	発話
5	CS21	私も、とても、とてもいいやりかただと思っている、このような個人のプライバシーを尊重するやりかたはいいと思っている
6	R	彼女に病院のやりかたはまだ納得できるといった時は、やはりその考えを彼女にぜんぶ伝えた↑言った時はどのように考えていた↑

²⁸ 「#」がついている事例では、上下関係において CS のほうは上位である。

²⁹ この中の 1 件の事例は、上下関係において CS のほうは上位である。

³⁰ この中の 1 件の事例は、上下関係において CS のほうは上位である。

³¹ CS24 が日本語使用の場面においてはなるべく否定的意見の提示を抑えるようにし、提示するとしても質問の形を使用したりして婉曲に示すように管理していると報告したため、「婉曲」と「回避」のところに 1 件ずつと計上した。

番号	発話者	発話
7	CS21	彼女が病院のこのようなやり方はいきすぎると言った時は、納得できるいいやりかただと思った。病院もあなたはどのような人なのかは分からないからさ、(うん)、私はそのまま彼女に言っただけで、ほかのことは考えていなかった。(うん)その後は彼女がまた病院のやりかたは必要ではないといって、考えが確固していると感じたから、たぶんこのことは彼女とわりと直接的に関係しているからかな、実は病院のやりかたはやはり納得できるなどと言うのを控えた
8	R	患者の家族に知られたくない時もあり、やはり病院側がやりすぎだと彼女に言われた後は、自分の考えをもう一度提示しなかったよね、その時はどう考えていたか↑

例 43 は例 26 の一部であるが、病院側が患者のプライバシーを保護するために、部外者に病室番号を提供しない方針の必要性をめぐって不一致が生じたが、CS5 がこのようなやりかたは不便なところもあることを認めたため、先行発話において命題の逸脱を留意しなかったと確認できた。また、CS5 が「ほかのことを考えていなくそのまま」(番号 7・3～4 行目)と異なる見解を JS に提示したため、不一致の表示方法において自己表示の逸脱を留意せず、不一致を明示的に示したと確認できる。つまり、この会話での 1 回目の不一致応答においては、CS が双方の逸脱を留意せず、生成的に不一致応答を行ったと考えられる。この事例を高(2006)が提案した生成プロセスのモデルに基づいてみると、「インプット」の段階では、JS の先行発話の内容、場面情報などがインプットされ、「機能(発話意図)」の段階では、明確な不一致の表示という機能が決まり、そして、不一致の表示に必要となる言語表現が自動的選択され、明示的不一致応答が表層化されたと考えられる。

2 回目の応答(例 26 を参照する)において CS が自己表示の逸脱を留意したことの背景を考える際、Locher(2004:328)が指摘した、話題をめぐる参加者間の考えが異なる程度も不一致の表示方法に影響する要因の一つであることが参照できる。つまり、「彼女自身と関連する話題なので JS が強く主張したかもしれない」、「その後は JS がまた自分の考えを述べ、考えは確固していると感じた」(番号 7・4～7 行目)と報告したように、JS が反対の意見を再び述べたことによって、CS21 が JS との考えのくいちがいの度合いが高いと判断した。そして、不一致の表示方法に関する規範が顕在化され、CS21 が自己表示の逸脱を留意し、回避的不一致応答を行うように調整したと考えられる。

5.6 上下関係が顕在化している場面での CS の不一致応答の特徴

本章では、上下関係が顕在化している日中接触場面における CS の不一致応答を取りあげて分析を行った。言語管理が行われた事例について、「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階に焦点を当て、CS が留意した命題の逸脱、自己表示の逸脱、逸脱に対して行った調整の

詳細を明らかにし、CS がインプットした社会的、場面的要因からの関与を考察した。これより、上下関係が顕在化している日中接触場面での CS の不一致応答に関する言語管理プロセスの特徴をまとめる。

「上下関係」の顕在化が最も顕著な場面的特徴であると考えられるため、これより、この要因のインプットが生じたか否かの視点を加えて、CS の不一致応答における逸脱の留意、調整の全体的傾向を集計し、下記の表 17 で示す。

表 17：「上下関係」の要因のインプットと CS の不一致応答における逸脱の留意、調整

17-1 「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の全体的傾向

逸脱の留意	逸脱の調整		
	明示	婉曲	回避
命題のみ	29	0	0
自己表示のみ	0	2	10
命題＋自己表示	14	31	27

17-2 「上下関係」のインプットがある場合の傾向

逸脱の留意	逸脱の調整		
	明示	婉曲	回避
命題のみ	7	0	0
自己表示のみ	0	2	10
命題＋自己表示	14	30	24

17-3 「上下関係」のインプットがない場合の傾向

逸脱の留意	逸脱の調整		
	明示	婉曲	回避
命題のみ	22	0	0
自己表示のみ	0	0	0
命題＋自己表示	0	1	3

本研究で収集した、上下関係の顕在化している日中接触場面での CS の不一致応答の事例から、次のような特徴を見いだした。

まず、事例の全体的傾向として、CS が命題の逸脱のみを留意した事例では、明示的不一致応答のみを行い、CS が自己表示の逸脱のみを留意した事例では、明示的不一致応答を行わず、婉曲または回避的不一致応答を行った。そして、CS が双方の逸脱を留意した事例では、逸脱の調整の優先順位を決めてから、明示、婉曲、または回避的不一致応答を行うよ

うに調整を行うことが明らかになった。

「上下関係」のインプットが「あり」と「なし」の場合を、逸脱の留意のバリエーションの側面に基づいて比較すると、命題の逸脱のみが留意された事例は「あり」の場合において最も数が少ないが、「なし」の場合は圧倒的に多い(26 件のうちの 22 件)ことが明らかになった。このことから、CS が「上下関係」をインプットしなかった場合、JS の先行発話で提示された命題内容のほうに集中し、不一致応答を調整する傾向が強いとみられた。また、このような傾向から、CS が「上下関係」をインプットした場合、先行発話の命題内容のほかに、不一致の表示方法にも注目するようになってくると予想される。

これより、「上下関係」がインプットされた場合に注目し、CS が自己表示の逸脱のみを留意した事例、双方の逸脱をともに留意した事例での調整傾向を考察する。CS が自己表示の逸脱のみを留意した 12 件の事例では、「上下関係」の要因がすべての事例においてインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与している。12 件の事例のうち、CS が回避的不一致応答を行うように調整した事例は 10 件であり、婉曲的不一致応答を行った事例は 2 件である。この 2 件の事例は、CS が習慣化された不一致応答の言語管理のパターンを適用した事例が 1 件あり(5.2.2 の例 27 を参照する)、残りの 1 件の事例(5.2.2.2 の例 28 を参照する)において、「上下関係」のほかに、「場面(公的)」、「JS のポジティブ・フェイス」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因も自己表示の逸脱の留意に関与し、CS がインタラクティブ場面の特徴(課題解決の会議)によって不一致の表示が許容されると認知したため、不一致の回避より婉曲的不一致応答を選択したと考えられる。

CS が双方の逸脱を留意した 68 件の事例では、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例、双方の逸脱の解消をともに考慮した事例を合わせると事例の大半(54 件、約 8 割)を占めている。残りの 14 件の事例では、CS が命題の逸脱の調整を優先させ、明示的不一致応答を行った。Pan(2000)と Liu(2004)は、階層的な権力の構造が確立している場面において、力関係の不均衡な配分が CS の不一致の表示に最も大きく関与しているものであると指摘した。具体的な関与の形について、Pan(2000)は、CS が発話事象の社会的コンテキスト、異なる場面での異なる力関係を認知した上で、場面ごとに決められた社会的制約に適応し、個人に強いられる社会的期待に満たすことができるように、自分の役割と発話戦略を決めていくと述べている。双方の逸脱がともに留意された事例での調整傾向からも、上下関係が顕在化している場面において、CS が「上下関係」をインプットし、不一致が生じた場面での自分の位置づけを判断した上で、不一致の表示方法により多く注目し、留意した自己表示の逸脱の解消をより多く考慮して、不一致応答を調整する傾向が強いとみられた。

なお、「上下関係」の要因が CS の不一致応答における逸脱の留意、逸脱の調整に強く関与する一方、表 17(17-2)で示すように、この要因が前景化しているにも関わらず、CS が命題の逸脱のみを留意した事例は 7 件ある。そして、CS が双方の逸脱を留意した後は、命題の逸脱の調整を優先させた事例は 14 件あり、双方の逸脱の解消をともに考慮して調整を行った事例は 30 件もある。さらに、CS が「上下関係」の要因をインプットせずに命題の

逸脱のみを留意し、明示的不一致応答を行った事例は 22 件である。これらの事例から、「上下関係」の要因のほかに、命題の逸脱の留意に関与した要因も上下関係の顕在化している場面での CS の不一致応答に強く関わっていると示唆された。つまり、上下関係が顕在化している場面では、CS が上下関係の維持を重視し、不一致の潜在化を図り、または不一致を婉曲的に示すように調整する規範は強く機能している一方、命題の逸脱の留意に関与した要因をはじめとする諸要因のインプットによって、CS が先行発話の命題内容のほうに集中し、命題の逸脱の解消に向けて調整ストラテジーを選択する規範も強く作用していると考えられる。

これより、まず、CS が明示的不一致応答を行った事例での諸要因からの関与を整理してから、命題の逸脱、自己表示の逸脱の留意に関与した要因別に、上下関係の顕在化している場面での CS の不一致応答の言語管理プロセスと諸要因の相関関係をまとめる。

5.6.1 「上下関係」のインプットがある場合の明示的不一致応答

この場合の明示的不一致応答は 21 件で、CS が命題の逸脱のみを留意し応答を調整した 7 件と、双方の逸脱を留意した後で命題の逸脱の調整を優先させた 14 件となる。前者の 7 件の事例は、職位、年齢などの側面において CS のほうが上位である点では共通している。例 4～5、例 7～8 で「JS はレベルが低いし、年下でもあるので、直接的に言っても大丈夫」と報告された応答時の感想から示すように、CS が「上下関係」の要因をインプットした後、自分が上位であることによって、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和されたと考えられる。そして、CS が自己表示の逸脱を留意せず、留意した命題の逸脱の解消に集中して明示的不一致応答を行うように調整した。この 7 件の事例における命題の逸脱の留意に、「実情」、「会社の規範」、「仕事の規範」、「CS のインタレスト」、「CS のネガティブ・フェイス」といった要因が関与した。

CS が双方の逸脱を留意し、命題の逸脱の調整を優先させた 14 件の事例について、命題の逸脱の留意に関与した要因からみると、「実情」(6 件)、「CS のポジティブ・フェイス」(4 件)、「CS のインタレスト」(2 件)、「常識」と「経済的規範」の 1 件ずつとなっている。

これより、命題の逸脱の留意に関与した要因ごとに、CS が双方の逸脱を留意した後で、命題の逸脱の調整を優先させた事例の特徴を考察する。

(1) 「実情」

CS が双方の逸脱を留意し、命題の逸脱の調整を優先させた 14 件の事例のうち、この要因が関与した事例は 6 件ある。まず、Grice(1975:47)の「質の原則」、Rees-Miller(2000:1098)) が指摘した、不一致の表示の中でも事実に対する訂正は、ルーティーンとして行われており、過酷なものではないことが、命題の逸脱に対する調整の優先の背景になっていると考えられる。

そして、CS がインプットした、逸脱の留意に関連していない場面的要因：「話題に関する情報の保有度(高い)」(3 件：5.3.3.1 の例 30 を参照する)、「場面(私的)」(2 件：5.3.3.1 の

例 31 を参照する)、「インターアクションの目的(1 件：同上³²)、なども明確な不一致の表示方法の選択に関与したと考える。第 4 章の 4.3.1 ですでに示したように、CS が先行発話において事実情報に合わないと認知し、命題の逸脱を留意した後、話題に関する情報を JS より十分に保有していると認知する場合、不一致の表示方法を考慮せず不一致を明示的に示すことが多くなる。その背景に、Deutsch & Gerard(1955)が指摘した、高い情報の保有度による「情報の支配力」は専門的支配力の一つである(Frank&Raven 1959:267 より引用)ことがあると考えられる。そして、インターアクションの参加者数や参加目的などが不一致の表示方法に関与する要因であるとスペンサー＝オーディー(2004)、Locher(2004)が述べたように、CS が JS との 2 人きりの場面であるという場面的特徴、インターアクションの参加目的の達成を考慮し、命題の逸脱の解消に集中し、明示的不一致応答を行った事例は 2 件ある。

残りの 1 件の事例(5.3.3.1 の例 29 を参照する)では、CS が職位の差異による「上下関係」をインプットし、自己表示の逸脱も留意したが、話題に関する事実情報を確実に把握していること、仕事経験の側面において自分のほうが上位であることを認知し、命題の逸脱の解消を優先させた。Pan(2000)は、力関係の配分に対する CS の認知のしかたについて、固定化の視点から認知する側面があるほか、実際の場面の社会的、場面的コンテキストを参照した上で、「動態的」視点から場面ごとの異なる力関係を捉える側面もあると指摘した。この事例において、話題に関する情報の高い保有度のほかに、CS が仕事の経験における差異の側面からその場での力関係を捉えていることも、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっている。

(2) CS のポジティブ・フェイス、CS のインタレスト

先行研究の Rees-Miller(2000:1099)、Locher(2004:328)、Sifianou(2012:1560)は、話し手が生じた不一致に伴うインタレストの衝突や対立、または自分のフェイスへの侵害が深刻であると認知する場合、自分のインタレスト、フェイスを保持するために明確な不一致の表示方法を選択傾向が強まると指摘し。この 6 件の事例(CS のポジティブ・フェイス：5.3.3.1 の例 34 を参照する、CS のインタレスト：5.3.3.1 の例 35 を参照する)においても、先行研究の指摘通りに、CS が「上下関係」の要因によって自己表示の逸脱も留意したが、先行発話が自分のポジティブ・フェイス、またはインタレストを侵害する度合いが高いと認知し、命題の逸脱の調整を優先させて不一致を明示した。

(3) 常識

事例は(5.3.3.1 の例 32 を参照する)1 件しかなく CS の全体的傾向としてまとめられないが、CS が不一致の対象と関連する常識について、JS も共通する認識を有していると考え、命題の逸脱の調整を優先させたと考える。Brown&Levinson(1987)が挙げた FTA の深刻度の算出公式に従って考えると、上下関係において上位である JS に対して、CS が関連する常

³² この事例においては、CS が「場面(私的)、インターアクション内の期待(目的)」の要因をともにインプットした。

識(「コピー機は入力された枚数だけにコピーするはずだ」)が共有されていると考え、不一致を示すこと(「R」にあたる)が上下関係の維持、JSのフェイスを侵害する度合いが低いと判断し、明示的な不一致の表示方法を選択したと解釈できる。

(4) 経済的規範

この要因が命題の逸脱に対する調整の優先に関与した事例は1件(5.3.3.1の例33を参照する)ある。この事例では、CSがこれまでの不一致応答において双方の逸脱の調整をともに考慮し、不一致を婉曲的に示すように調整したことが特徴である。2回目の応答では、「会社の利益を損ねてはいけない」、「ここでは譲ってはいけないから直接的にできないと明言した」と報告したように、CSがインターアクションの進行に伴い、経済的規範からの違反であるJSの先行発話が一定の限度を超え(e.g. 会社の利益を侵害する)、より深刻な逸脱になってくると判断したため、あらためて命題の逸脱の解消を優先させて調整を行った。上記の(3)で示したように、CSが先行発話において自分のインタレストが侵害される度合いが高いと認知する場合、命題の逸脱の調整を優先させる可能性ある。この事例でも共通して、CSが先行発話が会社の利益を侵害する程度が深刻であると判断し、経済的規範を「強く」意識して(加藤 2010:45)適用し、命題の逸脱の調整を優先させて明示的不一致応答を行った。

CSが「上下関係」の要因をインプットし、明示的不一致応答を行った21件の事例の考察から、次のような特徴がみられた。まず、上下関係のある側面において上位である場合、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、CSが自己表示の逸脱を留意せず、命題の逸脱の留意、解消に集中する傾向はある。次に、上下関係のある側面において下位であり、CSが「上下関係」の要因をインプットし自己表示の逸脱を留意する場合、命題の逸脱の留意に関与した要因、そして、インプットされたが、逸脱の留意に関与していない要因の特徴によって、命題の逸脱の調整を優先させる可能性もある。前者の要因には、「実情」、「常識」、「インターアクション内の期待(目的)」、「CSのポジティブ・フェイス」、「CSのインタレスト」があり、後者の要因として、「話題に関する情報の保有度(高い)」、「場面(私的)」の要因が挙げられる。特に、CSが話題に関する情報を十分に保有していると認知する場合、または、先行発話が自分のポジティブ・フェイスやインタレストを侵害する度合いが高いと認知する場合、留意した双方の逸脱において命題の逸脱の調整を優先させ、明示的不一致応答を行うように調整する可能性が高まる。

5.6.2 「上下関係」のインプットがない場合の明示的不一致応答

上下関係が顕在化している場面にも関わらず、CSが不一致応答を行う際に、この要因が前景化しなかったと考える事例は22件である。これらの事例では、命題の逸脱の留意に関与した要因、インプットされたが逸脱の留意に関与していない要因によって、CSが「上下関係」の要因をインプットせず、命題の逸脱の解消に集中し、不一致を明示的に示した。これより、命題の逸脱の留意に関与した要因ごとに事例の特徴を考察していく。

(1) 実情

CS が先行発話において実情に合わないと認知し、命題の逸脱を留意した後、職位、年齢、社会的役割などの差異によって確立できた上下関係の要因をインプットせず、明示的不一致応答を行った事例は 18 件である。18 件の事例のうち、話題に関する情報の高い保有度という要因によって、「上下関係」の要因が背景化したと考えられる事例(5.2.1 の例 1、5.3.1 の例 22 を参照する)は 16 件である³³。5.6.1 の分析結果をあわせてみると、CS が「実情」の要因をインプットして命題の逸脱を留意した後、話題に関する情報を JS より十分に保有していると認知する場合、「上下関係」の要因をインプットし自己表示の逸脱を留意せず、または自己表示の逸脱を留意していながらも、命題の逸脱の解消に集中する傾向が強まると考えられる。

また、JS との親しい関係が関与した事例は 2 件(5.2.1 の例 2、5.3.1 の例 23 を参照する)あり、そのうちの 1 件(例 23)において「話題に関する情報の保有度(高い)」の要因もインプットされ、明示的不一致応答の選択に関与した。このように、CS が留意した命題の逸脱の特徴(「実情に合わない」)、CS が Brown&Levinson(1987)の D、P、R の三つの要因のうち、力関係の「P」より社会的距離の「D」の要因を主に考慮することによって、「上下関係」の要因が背景化し、CS が自己表示の逸脱を留意せずに明示的不一致応答を行う可能性がある。

もう 1 件の事例(5.3.1 の例 25 を参照する)では、CS が先生の JS の説明が正しくないと考えて不一致を感じ、「上下関係」の要因をインプットせずに明示的不一致応答を行った。Rees-Miller(2000)は、授業の場面的特徴によって、学生が教師に対して「説得的」(forceful)不一致の表示方法を用いる傾向は強まると指摘した。この事例において、CS が講義の場面であるという場面的特徴を認知したため、「上下関係」の要因が背景化し、自己表示の逸脱を留意せずに明示的不一致応答を行ったと考えられる。

(2) 冗談

この要因が関与した 3 件の事例(5.2.1 の例 3 を参照する)は CS11 に集中し、CS の全体的傾向としてまとめられないが、CS11 が話題を冗談めいた内容と捉えたため、「上下関係」の要因をインプットせず、留意した命題の逸脱の解消のみを考慮した。

(3) JS のインタレスト

この要因が関与した事例(5.2.1 の例 6 を参照する)は 1 件あり、CS が JS のインタレストに対する侵害の軽減に集中したことが、「上下関係」の要因が背景化したことに関わっていると考えられる。

CS が「上下関係」の要因をインプットして自己表示の逸脱を留意せず、留意した命題の逸脱の解消に集中し、明示的不一致応答を行った 22 件の事例から、次のような特徴がみられた。まず、これらの事例では、命題の逸脱の留意に関与した要因が「実情」の要因に集

³³ この中の 1 件の事例では、「親疎関係(親しい)」の要因もともにインプットされた。

中していることが特徴である(22 件のうちの 18 件)。そして、第 4 章の 4.3.1、本章の 5.6.1 の分析結果と共通して、CS が「実情」の要因によって命題の逸脱を留意し、不一致の対象となる話題に関する情報を JS より十分に保有していると認知する場合、「上下関係」の要因に注目して自己表示の逸脱を留意することが減少し、命題の逸脱の解消に集中する傾向が強まるとみられた。高い情報の保有度のほかに、JS との親しい関係、インターアクションの参加目的の達成からの関与も数少ないながらもみられた。そして、インターアクション場面の特徴(講義の場面)、JS のインタレストの保持に向けられる関心といった要因も、「上下関係」の要因の背景化に関与したとみられた。

5.6.3 CS の不一致応答に関与した社会的、場面的要因の全体的傾向

これよりは、5.6.1 と 5.6.2 の考察結果を踏まえて、CS がインプットした社会的、場面的要因と、不一致応答の言語管理のプロセスにおける「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階との関連性を整理し、上下関係が顕在化する場面での CS の不一致応答の特徴をまとめる。まず、命題の逸脱の留意に関与した要因を取りあげて整理する。

(1) 実情(55 件)

CS がこの要因をインプットし、命題の逸脱を留意した後は、自己表示の逸脱を留意せずに明示的不一致応答を行う事例のほかに、自己表示の逸脱も留意し、回避的、または婉曲的不一致応答を選択する事例もあった。

明示的不一致応答が行われた 27 件の事例のうち、まず、CS が上下関係のある側面において上位であるため、自己表示の逸脱を留意せずに命題の逸脱の解消のみを考慮した事例が 3 件ある³⁴。そして、上下関係の側面において下位であるが、CS が「話題に関する情報の保有度(高い)」、「親疎関係(親しい)」、またはインターアクションの場面が講義の場面である、といった要因をインプットし、「上下関係」の要因が背景化した事例が 18 件ある。これらの事例では、CS が「上下関係」の要因をインプットして自己表示の逸脱を留意せず、命題の逸脱のみを留意して明示的不一致応答を行うように調整した。CS が「上下関係」の要因をインプットし、双方の逸脱を留意した事例では、「話題に関する情報の保有度(高い)」、「場面(私的)」、「インターアクションの目的」などの要因のインプットによって、命題の逸脱の調整を優先させた事例は 6 件ある。

婉曲的不一致応答が行われた 16 件の事例では、CS が主に「上下関係」の要因をインプットし(単独に関与した事例：14 件、ほかの要因とともに関与した事例：1 件)、自己表示の逸脱も留意した後、双方の逸脱の解消をともに考慮して応答を調整した。残りの 1 件の事例では、自己表示の逸脱の留意に関与した要因が「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因である。「場面(公的)」、「JS のポジティブ・フェイス」が「上下関係」とともに関与した事例が 1 件ある。この事例(5.3.3.3 の例 20 を参照する)では、CS がインターアクション

³⁴ 「CS のインタレスト」がともにインプットされ、命題の逸脱の留意に関与した事例は 1 件ある。

ン場面の特征(課題解決の会議なので、自分の考えの提示が求められ、許容される)を認知したため、上下関係の維持と命題の逸脱の解消を同時にできるように、婉曲な不一致の表示を選択したと考えられる。

回避的不一致応答が行われた 12 件の事例では、上の 16 件の事例の傾向と共通して、CS が主に「上下関係」の要因(12 件のうちの 9 件)をインプットし、自己表示の逸脱も留意した後、上下関係の維持をより多く考慮し、自己表示の逸脱の調整を優先させた。

(2) 常識(7 件)

明示的不一致応答が行われた 4 件の事例では、CS が冗談めいた話題の内容であると認知したことによって、「上下関係」の要因が背景化し、CS が命題の逸脱のみを留意し調整を行った事例は 3 件(5.2.1 の例 3 を参照する)である。残りの 1 件の事例(5.3.3.1 の例 32 を参照する)において、CS が双方の逸脱を留意したが、命題の逸脱の留意に参照された常識について JS も共通する認識があり、不一致を示しても上下関係を損ねないと考え、命題の逸脱の調整を優先させた。

婉曲的不一致応答が行われた事例は 2 件である。その 1 件の事例では、CS が先に明示的不一致応答を行い(5.3.3.1 の例 32 を参照する)、JS に反論されてから、あらためて婉曲的不一致応答を行うように調整した。この事例から、CS が不一致の表示が上下関係を損ねる度合いが高くなると判断する際、調整の優先順位を変更し、明確な不一致の表示を回避する傾向になることを示唆した。

回避的不一致応答が行われた事例は 1 件(5.2.3 の例 21 を参照する)である。CS が JS のポジティブ・フェイスの維持を考慮し、自己表示の逸脱の調整を優先した。

(3) 会社の規範(3 件)

明示的不一致応答が行われた 2 件の事例(5.3.1 の例 7 を参照する)では、CS が職位において上位であると認知し、不一致の表示方法を考慮せず、命題の逸脱のみに注目し応答を調整した。

婉曲的不一致応答が行われた事例は 1 件である。ここで注目したいことは、職位の側面において CS のほうは上位でありながらも、年齢や勤務経験の側面において下位であることを考慮し、自己表示の逸脱を留意して双方の逸脱の調整をともに考慮した。この事例では、Pan(2000)が指摘した場面性が上下関係に対する CS の認知に与える影響がみられた。

(4) 仕事の規範(2 件)

明示的不一致応答が行われた 1 件の事例(5.2.1 の例 5 を参照する)では、CS が職位において上位であると認知し、不一致の表示方法を考慮せず、命題の逸脱のみに注目し調整した。

婉曲的不一致応答が行われた事例は 1 件である。同一 CS であるが、この事例では職位の差異に注目し、自己表示の逸脱も留意して双方の逸脱の調整をした。

(5) 経済的規範(5 件)

この 5 件の事例は CS30 に集中し、取引先の代表である JS に対して、CS30 が先行発話において命題の逸脱を留意したほか、社会的役割の差異に注目し、自己表示の逸脱も留意

した。

明示的不一致応答が行われた事例は 1 件(5.3.1 の例 33 を参照する)あり、この前の不一致応答において、CS が双方の逸脱の解消をともに考慮し、婉曲的不一致応答を選択した。

婉曲的不一致応答が行われた事例は 3 件あり(5.2.3 の例 13 を参照する)。そのうちの 2 件の事例に前置した応答では、CS が自己表示の逸脱の解消をより多く考慮し、回避的不一致応答を選択した。

回避的不一致応答が行われた事例は 1 件である。これらの 5 件の事例について、会話進行の視点から捉えると、CS は命題の逸脱より、先に自己表示の逸脱、または双方の逸脱の解消を考慮する傾向があるとみられた。そして、CS が同一話題をめぐって引き続き不一致を感じ、JS の先行発話による命題の逸脱が深刻になると認知する場合、調整の優先順位を変更し、より明確な不一致の表示方法に推移する傾向もあるとみられた。

(6) CS のポジティブ・フェイス(8 件)、CS のネガティブ・フェイス(1 件)

この 8 件の事例は、CS が「上下関係」の要因をインプットし、双方の逸脱を留意した後、片方の逸脱の調整を優先させ、明示的、回避的不一致応答を行った事例は 4 件ずつである。明示的不一致応答の事例から、Rees-Miller(2000)、Locher(2004)、Sifianou(2012)で指摘されたように、自分のポジティブ・フェイスが侵害される程度が深刻である場合、話し手がより明確な不一致の表示方法を選択する傾向にあると確認できた。そして、回避的不一致応答の事例から、CS はポジティブ・フェイスが侵害された度合いより、力関係の「P」要因のほうをより多く考慮し、自己表示の逸脱を優先させる傾向もあるとみられた。

自分のネガティブ・フェイスが侵害されたと認知した事例(5.2.1 の例 7 を参照する)では、CS が職位の側面において上位であることにより、不一致の表示方法を考慮せず、命題の逸脱の解消に集中した。

(7) CS のインタレスト(18 件)

明示的不一致応答が行われた事例は 2 件であり、CS は「上下関係」の要因をインプットして双方の逸脱を留意した後、命題の逸脱の調整を優先させた。

婉曲的不一致応答が行われた事例は 7 件であり、CS は「上下関係」の要因をインプットして双方の逸脱を留意した後、双方の逸脱の解消をともに考慮した応答を調整した。

回避的不一致応答が行われた事例は 9 件であり、そのうちの 1 件(5.2.3 の例 17 を参照する)では「場面(公的)」、「話題に関する情報の保有度(低い)」の要因も関与した。

CS が明示的不一致応答を選択した 2 件の事例(5.3.1 の例 35 を参照する)では、CS がこれまでに婉曲、回避的不一致応答を行ったことは特徴である。一般的傾向としてまとめられないが、CS が自分のインタレストが侵害される程度が深刻になると判断する場合、より明確な不一致の表示方法を選択する傾向にあると示唆された。

(8) JS のインタレスト(2 件)

この要因が関与した 2 件(5.2.1 の例 6 を参照する)の事例では、明示的、婉曲的不一致応答が 1 件ずつ行われた。JS のインタレストに対する侵害の軽減に集中したことは、「上下

関係」の要因の背景化、明示的な不一致の表示方法の選択に関わっていると考える。

以上は、命題の逸脱の留意に関与した社会的、場面的要因の側面から、CS の不一致応答の特徴を整理したが、CS が自己表示の逸脱のみを留意した事例もあるため、これよりは、自己表示の逸脱の留意に関与した諸要因の側面を取りあげて考察を加える。

(1) 上下関係(87 件)

CS が言語管理を行った 113 件の事例のうち、「上下関係」の要因がインプットされた事例は 87 件である。CS が職位、年齢、社会的役割などの側面において上位である 7 件の事例を除いて、残りの 80 件の事例では、CS がこの要因をインプットし、自己表示の逸脱を留意した(自己表示の逸脱のみを留意した事例：12 件、双方の逸脱をともに留意した事例：68 件)。全体的傾向として、CS が先行発話の命題内容に注目するとともに、力関係の「P」要因に最も多くの関心を払っているとみられた。

これらの事例における CS の調整傾向をみると、まず、CS は上下関係において上位である場合、不一致の表示方法を考慮せず、すべての事例において明示的不一致応答を行った。

CS は下位であり、自己表示の逸脱のみを留意した事例では、回避的不一致応答のみを行った。双方の逸脱を留意した 68 件の事例において、CS が命題の逸脱の留意に関与した要因(「実情」、「常識」、「経済的規範」、「CS のポジティブ・フェイス」、「CS のインタレスト」)、インプットしたが逸脱に関与していない要因(「話題に関する情報の保有度(高い)」、「場面(私的)」、「インターアクション内の期待(目的)」)を考慮し、命題の逸脱の調整を優先させた事例は 14 件である。つまり、CS が上下関係の要因によって自己表示の逸脱も留意したが、上記の要因のインプットによって、命題の逸脱の解消をより多く考慮する傾向になる可能性が高まると考えられる。

また、5.6.2 で示したように、命題の逸脱に関与した要因や、JS との親しい関係、高い情報の保有度などによって、「上下関係」の要因が背景化し、CS が自己表示の逸脱を留意しない可能性もある。

(2) JS のポジティブ・フェイス(5 件)、JS のムード(1 件)

CS が不一致の表示に伴う JS のフェイスへの侵害を考慮し、自己表示の逸脱を留意した事例は 5 件(自己表示の逸脱のみを留意した事例：2 件、双方の逸脱をともに留意した事例：3 件)であり、婉曲的(2 件)、または回避的(3 件)不一致応答が行われた。また、CS が JS のムードを考慮し、自己表示の逸脱も留意した後、この逸脱の調整を優先させた事例は 1 件ある。これらの事例において、CS がポライトネスの実現という普遍規範に従って、不一致応答の調整を行ったと考える。

(3) 場面(公的)(3 件)

この要因がほかの要因とともにインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は 3 件であり、回避的(2 件)、婉曲的不一致応答(1 件)が行われた。第三者がいる公的場面において、CS が自己表示の逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を選択することが多くなると予想できるが、婉曲的不一致応答が行われた事例において、場面的特徴(課題解

決の会議)からの関与が大きいと考えられる。

(4) 話題に関する情報の保有度(低い)(4 件)

この要因が単独で、またほかの要因とともにインプットされ、自己表示の逸脱の留意に関与した事例は 2 件ずつであり、回避的(2 件)、婉曲的不一致応答(2 件)が行われた。これらの事例では、CS が主に情報の保有度の度合いを考慮して、不一致の表示方法を調整した(5.3.3.3 の例 20、5.3.3.2 の例 39 を参照する)と考えられる。

(5) 親疎関係(親しくない)(2 件)

この要因がほかの要因とともにインプットされ、CS が自己表示の逸脱のみを留意した事例は 2 件であり、回避的不一致応答が行われた。

(6) 日本語の言語ゲスト(1 件)

この事例では、不一致の対象となる話題の性格(日本語の言語表現)によって、CS が言語ゲストとしてのカテゴリ化を意識し、「参加回避」(ファン 1999)のストラテジーを用いて不一致応答を調整した。

以上の分析結果から、まず、上下関係が顕在化している場面において、CS が不一致応答を行う際に、留意した命題の逸脱の調整のほかに、「上下関係」の要因を最も多くインプットし、自己表示の逸脱も留意して調整を行う特徴があることを確認できた。そして、CS が上下関係の維持を考慮し、婉曲的、回避的不一致応答を行う傾向が強い一方、不一致の対象となる話題の性格や不一致が生じた場面の場面的特徴によって、CS が「上下関係」の要因のみに注目するとは限らなく、それ以外の要因と総合的に考慮した上で命題の逸脱の調整を優先させる傾向もある。さらに、ほかの要因の前景化によって、「上下関係」の要因をインプットして自己表示の逸脱を留意せず、不一致応答を調整する可能性もある。

以上の分析結果に基づいて、上下関係が顕在化している場面における CS の不一致応答に関する言語管理プロセス、特に、「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階に関与した社会的、場面的要因を命題の逸脱、自己表示の逸脱の留意に分けて、下記の図 1 で示す。なお、第 4 章と共通して、「インターアクション内の期待(目的)」の関与が変動性を持つと考えるため、ほかの要因から独立した形で図 1 に入れた。

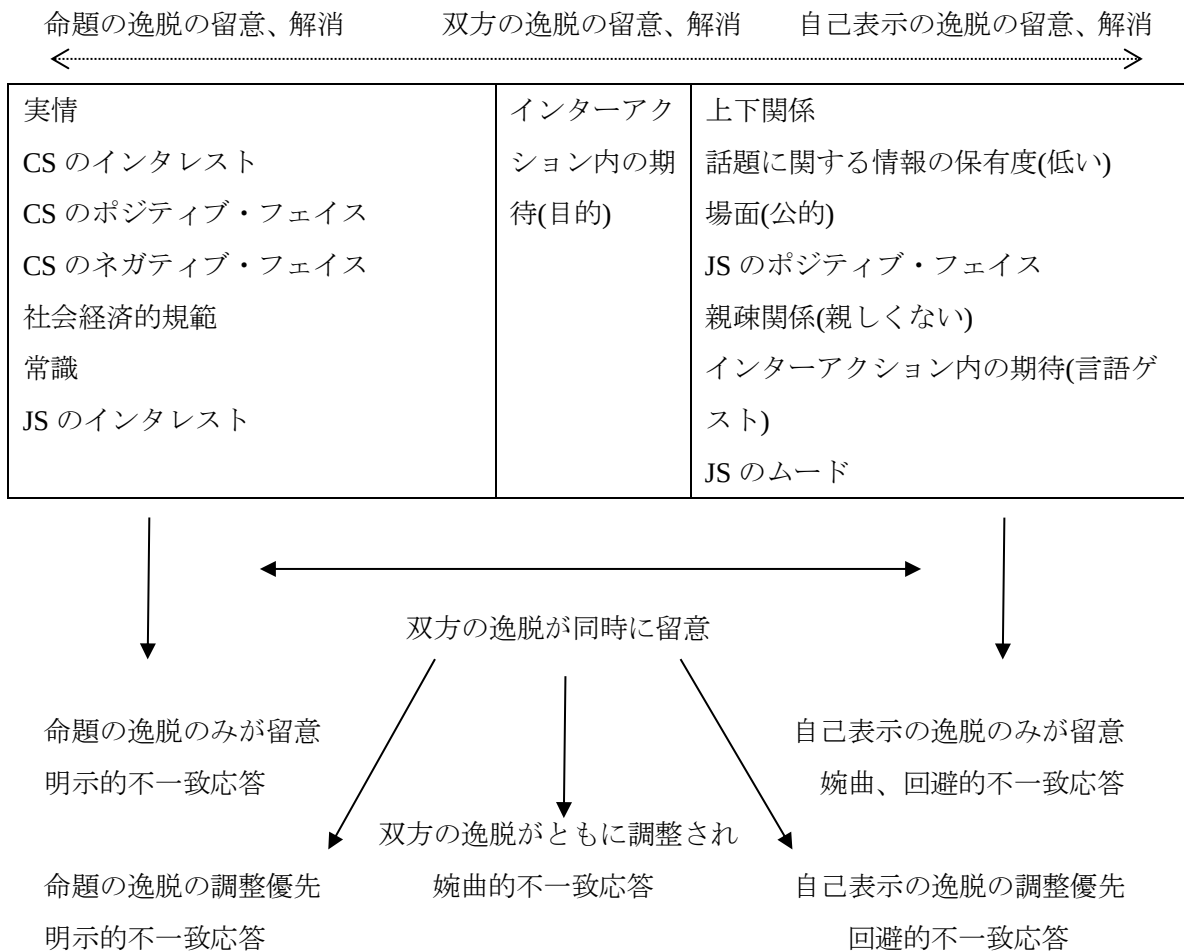


図 1：上下関係が顕在化する場面においてインプットされた要因と逸脱の留意、調整

不一致が生じた具体的な事例から明らかにされた社会的、場面的要因のほかに、リコール・インタビューで得られた事例からも、「上下関係」の要因が自己表示の逸脱の留意、調整に大きく関与していることを確認できた。そして、場面の「接触性」によって、CS が日本語使用の場面では明確な不一致の表示を習慣的に回避する事例、上下関係を重要視しない「職場の雰囲気」によって、CS が職位の差異などを考慮せず、率直な意見交換のほうを重視する事例も報告された。

第 6 章では、第 4 章と第 5 章で明らかになった、上下関係が潜在化している場面、そして顕在化している場面での CS の不一致応答に関する言語管理プロセス、特に逸脱の留意、逸脱の調整の段階の特徴的傾向を比較し、留意された逸脱、逸脱に対する調整の詳細、また、インプットされた社会的、場面的要因からの関与、などの側面における両場面の類似点と相違点を考察する。そして、日中接触場面における CS の不一致応答の言語管理、生成プロセスのモデルを提案し、今後の CS の不一致応答に取り組むべき課題を述べる。

第6章 結論

これまでは、上下関係の潜在化している日中接触場面、および顕在化している日中接触場面におけるCSの不一致応答を分析対象に、「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階に焦点をあて、留意された逸脱の詳細、逸脱の調整の優先順位、これらの段階における社会的、場面的要因からの関与について考察してきた。また、逸脱が留意されずに行われたCSの不一致応答について、不一致の対象の性格、表層化された不一致応答の傾向などの側面を分析した。本章では、上記の二つの場面でのCSの不一致応答の特徴を比較し、逸脱の留意と調整、社会的、場面的要因からの関与、などの側面における類似点と相違点を考察する。そして、本研究で取りあげられたCSの不一致応答の全体的な特徴に基づき、CSの不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのモデルを提案する。最後に、今後の研究に取り組むべき課題を提示する。

6.1 両場面におけるCSの不一致応答の異同点

本節では、留意された逸脱、逸脱に対して行われた調整などの側面から、両場面での不一致応答事例の全体的な傾向を比較し、そして、両場面にインプットされた社会的、場面的要因の構成、逸脱の留意、調整の段階におけるこれらの要因からの関与などを比較し、異同点を明らかにする。

6.1.1 不一致応答事例の全体的な傾向

上下関係が潜在化している場面(以下、潜在化場面とする)でのCSの不一致応答の事例をみると、逸脱が留意され言語管理が行われた事例は8割占め、残りの2割近くの事例では逸脱が留意されず、生成に近い形で応答が行われたことがわかった。この結果から、JSの先行発話においてCSが不一致を感じてから応答する際に、先行発話の内容による命題の逸脱、または、不適切な不一致の表示方法による自己表示の逸脱を留意した上で、不一致応答を調整していく傾向が強いと示唆された。

上下関係が顕在化している場面(以下、顕在化場面とする)において、まず、不一致応答に対する言語管理が行われた事例のほうが圧倒的に多いという点では、潜在化場面と共通しているとみられた。特に、生成に近い形で行われた不一致応答の事例は1件のみで、潜在化場面に比べると、全事例で占める割合が低いことは特徴的である。「上下関係」の要因が自己表示の逸脱の留意、調整に深く関わっているため、生成に近い形で応答が行われた事例の割合は潜在化場面のほうが高いことから、「上下関係」の要因が背景化することによって、CSが不適切な不一致の表示方法を留意し、管理の対象と扱うことが少なくなると考えられる。

逸脱の留意のバリエーションに目を向けると、潜在化場面では、命題の逸脱のみが留意された事例が最も多く、逸脱の留意が生じた全事例の5割近くである。それについて多い

のは双方の逸脱が留意された事例で、自己表示の逸脱のみが留意された事例のほうは最も少ない。これに比べると、顕在化場面では、双方の逸脱が留意された事例は最も数が多く、逸脱の留意が生じた全事例の6割以上占めている。命題の逸脱のみが留意された事例はそれに次いで多く、自己表示の逸脱のみが留意された事例のほうは最も少ない。比較した結果から、自己表示の逸脱のみが留意された事例数が最も少ない点で、両場面は共通しているとみられた。また、命題の逸脱のみが留意された事例の割合は潜在化場面のほうが高いことから、潜在化場面では、不一致の表示方法に関する規範が緩和され、自己表示の逸脱が留意されないことは生じやすいと示唆された。

双方の逸脱が留意された事例での調整の優先順位をみると、まず、潜在化場面では、双方の逸脱を調整した事例は最も多く(約6割)、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例はそれに次いで多く、4割近くを占めており、命題の逸脱の調整を優先させた事例は1件のみである。顕在化場面においても、同じ傾向がみられたため、両場面において、双方の逸脱を留意し不一致応答を行う際に、CSが双方の逸脱の解消を同時に考慮し、または自己表示の逸脱の解消を優先させて、応答を調整していく傾向が強い点では共通していると考えられる。

命題の逸脱の調整を優先させた事例が占める割合を比較して、顕在化場面のほうが高いことは特徴的である。顕在化場面でCSが命題の調整を優先させ、明示的不一致応答を行った14件の事例では、その半分近くが「CSのポジティブ・フェイス」、「CSのインタレスト」の要因のインプットによって、CSが命題の逸脱を留意した事例である。潜在化場面で上記の要因がインプットされ、明示的不一致応答が行われた事例は、CSが命題の逸脱のみを留意した事例に集中している。この比較の結果から、まず、CSが自分のポジティブ・フェイス、またはインタレストが侵害されることによって留意した命題の逸脱に対して、その調整を優先させる可能性が高いという点において、両場面が共通していると示唆された。そして、顕在化場面では、CSが「CSのポジティブ・フェイス」、「CSのインタレスト」の要因をインプットし、命題の逸脱を留意した後、上下関係の顕在化によって自己表示の逸脱も同時に留意した事例が多いため、この種類の逸脱の解消は、命題の逸脱の調整を優先させた事例に集中してきた。一方、潜在化場面では、CSが上記の二つの要因をインプットし、命題の逸脱を留意した後、上下関係の要因の背景化によって、自己表示の逸脱を留意せず、不一致応答を調整していくことのほうが多いため、命題の逸脱の調整を優先させた事例の割合が低くなったと推察される。

6.1.2 両場面での逸脱の留意、調整に関与した社会的、場面的要因

両場面においてインプットされ、CSの不一致応答に関する言語管理プロセス、特に逸脱の留意、調整の段階に関与した社会的、場面的要因は、要因別のインプット回数の集計結果に基づいて、下記の表1で示す。

表 1：両場面での逸脱の留意、調整に関与した社会的、場面的要因(単位：回)

逸脱の種類	潜在化場面	小計	顕在化場面	小計
命題の逸脱の	実情	101	実情	54
	中国語の言語的規範	18	CS のインタレスト	19
	中国の社会文化的規範	8	社会経済的規範	10
	インターアクション内の期待 (誤解)	5	CS のポジティブ／ネガティ ブ・フェイス	9
	CS のポジティブ・フェイス	5	常識	5
	インターアクション内の期待 (会話進行、話題)	4	JS のインタレスト	2
	常識	3		
	CS のインタレスト	3		
	日本の社会文化的規範	1		
	接触規範	2		
	個人規範	2		
	インターアクション内の期待 (目的)	2		
自己表 示の 逸脱	JS のポジティブ／ネガティ ブ・フェイス	51	上下関係	80
	情報の保有度(低い)	21	情報の保有度(低い)	5
	インターアクション内の期待 (言語ゲスト、文化ゲスト)	13	JS のポジティブ・フェイス	5
	日本の社会文化的規範	8	場面(公的)	3
	インターアクション内の期待 (目的)	6	親疎関係(親しくない)	2
	場面の接触性	4	インターアクション内の期待 (言語ゲスト)	1
	場面(ゼミ)	3	インターアクション内の期待 (目的)	1
	媒体(電話)	1	JS のムード	1

命題の逸脱の留意に関与した要因の構成をみると、まず、潜在化場面では 12 種類の要因がみられたが、それに比べると、潜在化場面での要因が 6 種類に集中し、バリエーションが少ないほうであるとわかった。これは、主に両場面の考察に用いられた分析材料の性格

に起因する結果であると考えられる。顕在化場面の考察では、職場やアルバイト先での仕事内容に関する会話、大学での講義などのインタラクティブに関する報告内容が中心に扱われたが、潜在化場面の考察のほうは、日常会話の内容が中心となり、話題のバリエーションがより豊富であるため、生じた不一致のバリエーションもより豊富となり、命題の逸脱の留意に關与した社会的、場面的要因の多様性につながっていると考えられる。

そして、命題の逸脱の留意には「実情」の要因が最も大きく關与している点では、両場面は共通している。Grice(1975:47)の「質の原則」が普遍規範として参照され、事実情報に合わないJSの先行発話が命題の逸脱とCSに留意される可能性が最も高いと考えられる。そのほか、「CSのインタレスト」、「CSのポジティブ・フェイス」も共通の要因として、両場面での命題の逸脱の留意に關与しているとみられた。JSの先行発話がCSのインタレストやフェイスに侵害をもたらすと判断される場合、その場で「上下関係」の要因が顕在化するか否かに関わらず、CSに命題の逸脱と留意されることは生じやすいと推察できる。人間が自分のインタレストに対する主張(ネウストプニー2006:88)やフェイス欲求(Brown&Levinson 1987)に向かう関心が、その背景にある要因と考えられる。

自己表示の逸脱に關与した要因について、潜在化場面では、「JSのフェイス」の要因が最も大きく關与しているとみられたが、顕在化場面では、「上下関係」の要因からの關与が圧倒的に大きいことが特徴的である。これによって、まず、「上下関係」が顕在化しているという場面的特徴が、CSの不一致応答に関する言語管理、特に自己表示の逸脱の留意、調整に強く影響していると確認できた。そして、上下関係が潜在化している場面において、不一致の表示に伴うJSのフェイスへの侵害が主な配慮対象となり、CSがフェイス侵害の解消、軽減に注目して、自己表示の逸脱を留意し、不一致応答を調整していく傾向が強いことがわかった。なお、自己表示の逸脱の留意に關して最も多く注目される要因が、両場面において異なるものの、ポライトネスの実現(Brown&Levinson 1987)に対する配慮が、両場面において共通していると考えられる。

以上の二つの要因のほかに、自己表示の逸脱の留意に關与した共通の要因として、「話題に関する情報の保有度(低い)」、「インタラクティブ内の期待(目的、言語ゲスト)」がみられた。上下関係が顕在化するか否かに関わらず、不一致の表示に必要な話題情報や日本語の言語知識を十分に保有していない、また、不一致の表示自体が当該のインタラクティブの目的の達成を妨げるとCSが判断する場合、自己表示の逸脱を留意することは生じやすいと示唆された。そして、事実情報に合わないため、CSがJSの先行発話を命題の逸脱と留意した事例において、話題に関する情報の保有度が高いという要因のインプットによって、自己表示の逸脱を留意しない可能性がある、という点でも両場面は共通しているとみられた。不一致の表示の中でも事実に対する訂正は、ルーティーンとして行われており、過酷なものではないと指摘され(Rees-Miller 2000:1098)、高い情報の保有度による「情報の支配力」は専門的支配力の一つである(Deutsch&Gerard 1955, Frank&Raven 1959:267 より引用)と指摘されたように、CSが「実情」の要因をインプットし、命題の逸脱を留意し

た後は、話題に関する事実情報を JS より多く保有していると判断する際に、上下関係が顕在化するかどうかに関わらず、不一致の表示方法に関する規範の適用が緩和され、自己表示の逸脱を留意される可能性が低くなると示唆された。

双方の逸脱が留意された後の調整の優先順位の選択からみると、潜在化場面では、命題の逸脱の調整を優先させた事例が 1 件のみであることが特徴的である。顕在化場面では、不一致の対象に話題に関する情報の保有度が高いこと、JS との二人きりの「私的」場面であることなど、逸脱の留意に関与していないが、命題の逸脱に対する調整の優先に関わっている。そして、潜在化場面では、命題の逸脱が留意された背景が異なるものの、CS が不一致の対象になる話題に関する情報を十分に保有していないこと、これらの情報が JS の「なわ張り」により深く入ることを認知し、自己表示の逸脱を留意する場合、この逸脱の調整を優先させて、回避的不一致応答を行う傾向がある。これに対して、顕在化場面では、話題に関する情報の保有度が低いことによって、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例もあるが、全体としては、上下関係の要因が深く関わっている。そして、潜在化場面では、自己表示の逸脱が留意された背景が異なるものの、CS が先行発話において、自分の「なわ張り」により深く入る母語の言語規範、個人規範識や常識からの違反であると認知し、または自分のポジティブ・フェイスやインタレストが侵害されたと認知し、命題の逸脱を留意する場合、双方の逸脱の解消を考慮した上で、婉曲的不一致応答を行う傾向のほうが強いとみられた。これに対して、顕在化場面では、自己表示の逸脱の調整を優先させた事例と共通して、上下関係の要因がより深く関わっている。なお、同一話題をめぐって不一致が引き続き存在し、CS が 1 回目の応答では異なる見解を明示的に示した場合、再度の不一致の表示が JS のポジティブ・フェイスにもたらす侵害を考慮し、調整の優先順位を変更し、婉曲、または回避的不一致応答を選択する傾向にある点では、両場面は共通している。

6.2 CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのモデル

以上、上下関係が潜在化、顕在化している場面での CS の不一致応答に関する言語管理プロセス、特に逸脱の留意と調整の段階の詳細、関与した社会的、場面的要因の構成などを比較し、類似点と相違点を考察した。これらの側面において異なる特徴がみられたものの、社会的、場面的要因のインプットから逸脱の留意と評価、調整計画(双方の逸脱が留意された場合の調整の優先順位の選択を含む)、計画実施の段階に至るまで、一連の管理プロセス自体は共通していると考えられる。これよりは、言語管理プロセス(Neustupný1985a, 1994 ほか)、生成プロセス(ネウストプニー1999、高 2006)を参考にし、両場面での CS の不一致応答の考察結果に基づいて、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのメカニズムを説明するモデルを提案したいと思う。

6.2.1 言語管理プロセスと生成プロセス

まず、接触場面での言語管理プロセス、生成プロセスに関する先行研究を再掲し、概観

した上で、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスのモデルを考案する時の留意点を整理する。

Neustupný(1985a, 1994 ほか)は接触場面での言語管理の実態をとらえるために、考察の手順として言語管理プロセスを提起した。このプロセスは、言語に注意を向けることから始まり、「規範からの逸脱」、「逸脱の留意」、「留意された逸脱の評価」、「調整計画」、「調整計画の実施」の五つの段階から成り立っている。なお、管理プロセスが常に「逸脱」から「計画実施」に至って行われるのではなく、各段階において中途終了する場合もある。接触場面研究が進むに伴い、個々の段階内の、または段階間の移行中のメカニズムについて、認識が深められ多くの知見が蓄えられてきた。本研究で提案したいモデルの構築に示唆を与えた先行研究の指摘を下記に提示する。

接触場面で適用される規範について、参加者がどのような逸脱を留意し、評価したかということが、最後の調整実施と必ずしも結びつかないこともあるように、村岡(2002)は、評価と調整実施の段階では、異なる規範が参照される可能性を提起し、フェアブラザー(2002)においても、逸脱の留意、評価や調整の段階において、様々な規範が適用されるとしている。また、加藤(2010:41)は、接触場面における規範の適用のされ方の違い、例えば、規範の「顕在化」と「潜在化」、「意識的使用」、「無意識的使用」などの特徴を挙げた。そして、留意された逸脱に対する評価は、否定的なものであるとは限らず、肯定的評価、または中立的評価(非評価)がなされることも可能であり、否定的に評価された逸脱は、二次的に非評価されたりして、さらに肯定的に再評価される場合もある(Fairbrother 2000、村岡 2006 他)。これらの先行研究が指摘した、適用される規範の多様性と場面性、逸脱に対する二次的評価、または「再評価」のプロセスが、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスの構築、特に、逸脱の留意の傾向(片方、または、双方)、留意された双方の逸脱に対する調整の優先順位の選択などを考える際の参考となる。

ネウストプニー(1999)はインターアクションあるいはコミュニケーションというプロセスの構造を記述するために、「管理プロセス」の前の段階として「生成プロセス」を設定し、この2種類のプロセスの考察によって、インターアクションの実態の記述をより明白にしようと試みている。「生成プロセス」には、コミュニケーションが開始される以前の「インプットのプロセス」から実際に発話されるまでの「表層化のプロセス」までを指している(加藤 2010:11)。具体的には以下のように構成されている。

(1) インプットのプロセス(inputing, coding)

行動場面の多くの事柄をまず、行動で使うもの(例えば、参加者の年齢)と使わないもの(例えば、参加者の目の色)に分ける段階であり、「コミュニケーションの目標」、「コミュニケーションのセッティング(時間と場所)」、「コミュニケーションの参加者、内容」が決まる。

(2) 配列のプロセス(arrangement)

上記の段階で選ばれた項目を一つの「連鎖」に並べるという課題が遂行される段階であ

り、インターアクションの内容的連鎖、参加者のネットワークの形などが決まる。なお、文法行動はこの段階において問題になるが、この段階のアウトプットはメッセージだけではない(例えば、ネットワークの参加者の配列)。

(3) 表層化のプロセス

配列の計画が実際の行動に移されるための段階で、媒体の選択や実際の performance(運用)が必要である。

ネウストプニー(1999:10-11)より引用

「生成プロセス」は「管理プロセス」の前の段階に位置づけられ、「管理プロセス」とは次元が違うが、ネウストプニー(1999)はこの二つのプロセスを同じレベルのものとして取り扱っている。さらに、管理プロセスが必ず表層化の後で行われるのではなく、問題が起きた瞬間に適用されることもあり、生成する途中での段階においてある項目が足りないことが分かったと、全体のプロセスがもう一度インプットの段階に戻されるなどの行動が普通である(ネウストプニー1999:11)。このように、管理プロセスは生成プロセスと前後に位置するとは限らなく、生成プロセスと平行して展開されることもある(ネウストプニー1995b:10)。

高(2006)はネウストプニー(1999)を参考にし、下記の図 1 で提示する生成プロセスのモデルに基づき、韓国人日本語学習者の受身文生成の過程を分析した。生成プロセスが管理プロセスの前の段階に行われるのではなく、生成プロセスと平行して、管理プロセスがどの段階からも生じうるという点では、ネウストプニー(1999)と高(2006)が共通するが、ネウストプニー(1999)は生成プロセスを三つの段階に分けたが、高(2006)のモデルでは生成プロセスを「インプット」、「機能」、「表現」、「表層化」の四つの段階に分けて取り扱っている。

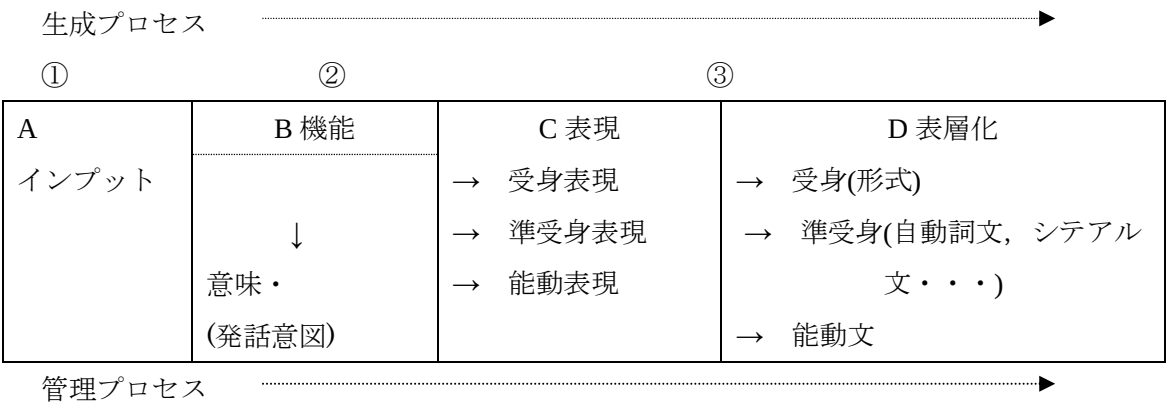


図 1： 受身の生成過程に関するモデル(仮)高(2006:92)より¹

さらに、高(2006)は「インプット」から「機能」の選択の過程、「機能」から「表現」の

¹ 個々の段階における具体的な要素と内容について、高(2006:92-93)を参照すること。

選択の過程、「表現」から「表層化」の選択の過程、といった三つの過程において(図1の①、②、③の部分)は一定の「選択規則」(規範)が働き、逸脱が生じ、生成プロセスと平行して、言語管理が行われる可能性がある」と指摘した。

生成プロセスにおける段階の分け方について、ネウストプニー(1999)と高(2006)では異なるものの、段階の構成要素と内容、管理プロセスと生成プロセスの共起関係、プロセス内の段階間の移行における規範の参照や逸脱の留意などに関して、共通していると考ええる。上記の先行研究で提示されたインターアクションあるいはコミュニケーション一般)に関わる管理プロセス、生成プロセスについての指摘から、次のようなことが確認できた。

- (1) ある言語表現は何らかの条件のもとで、その場に埋め込まれる社会的、場面的要因のインプットから機能の選択、機能から表現の選択、表現から表層化の選択という過程を経て、談話上に表層化される。この過程において、管理プロセスが必ず活性化されるとは限らなく、問題が生じずに機能、表現などの選択が生成的に行われる場合もある。
- (2) 管理プロセスは生成プロセスと同じレベルのもので、ある言語表現が表層化され、言語問題を起こした場合のみで管理プロセスが適用されると限らなく、生成プロセスの段階の中に、または段階間の移行過程においても適用される可能性がある。
- (3) 社会的、場面的要因のインプットがあつたのにも関わらず、それに対応する言語の機能や表現が選択されない場合あり、参加者の発話意図によって機能の選択や表現の選択が調整されたりすることがある。

6.2.2 CSの不一致応答の言語管理、生成のプロセスのモデル

これまでの考察結果から示したように、CSの不一致応答には、逸脱が留意され言語管理が行われた事例のほか、逸脱が留意されずに応答が行われた事例もある。そして、留意された逸脱には、命題の逸脱、自己表示の逸脱の2種類の逸脱があり、CSが双方の逸脱を常に同時に留意するとは限らなく、片方の逸脱のみを留意する場合もある。調整の段階では、双方の逸脱が留意される場合、逸脱の調整の優先順位が選択されることがある。以上の特徴を念頭において、主に下記で提示した目的に対応できるように、CSの不一致応答の言語管理、生成のプロセスのモデルを考案した。

- (1) CSの不一致応答に関する管理プロセス、そして、生成プロセスの構造を一つのモデルで記述、考察できる。
- (2) 片方のみ、または双方の逸脱の留意、双方の逸脱が留意された後の調整の優先順位の選択、などの逸脱の留意段階、調整段階のバリエーションの記述、考察に対応できる。
- (3) 不一致応答が表層化されるまでの「インプット」、「機能」、「表現」の段階、そして、段階間の移行における選択、さらに、これらの過程における社会的、場面的要因からの関与を記述、考察できる。

下記の図2では、提案するモデルの基本構造が示されているが、特徴として、次のよう

な2点が挙げられる。

(1) Neustupný(1985a, 1994 ほか)の管理プロセスを基礎的フレームワークのもとにし、高(2006)の生成プロセスを「調整計画」の段階に取り入れ、管理プロセスの中に生成プロセスの段階が内包される構造となっている。

これによって、不一致応答が表層化される前の「機能」、「表現」などの段階、段階間の移行における選択の過程を詳しく考察でき、調整計画が立案される段階の詳細な記述が可能になると考える。

(2)「命題の逸脱」の留意が、「自己表示の逸脱」の留意の前に位置づけられた。この2種類の逸脱の留意、調整などに関する言語管理は、あくまでも連続プロセスの中で行われるため、生じる順番を明確に分けられないと考えるが、本研究では2種類の逸脱に関する管理プロセスの個別な記述、考察に対応できることを考慮し、「命題の逸脱」が「自己表示の逸脱」に先行するという視点に基づいてモデルを考案した。

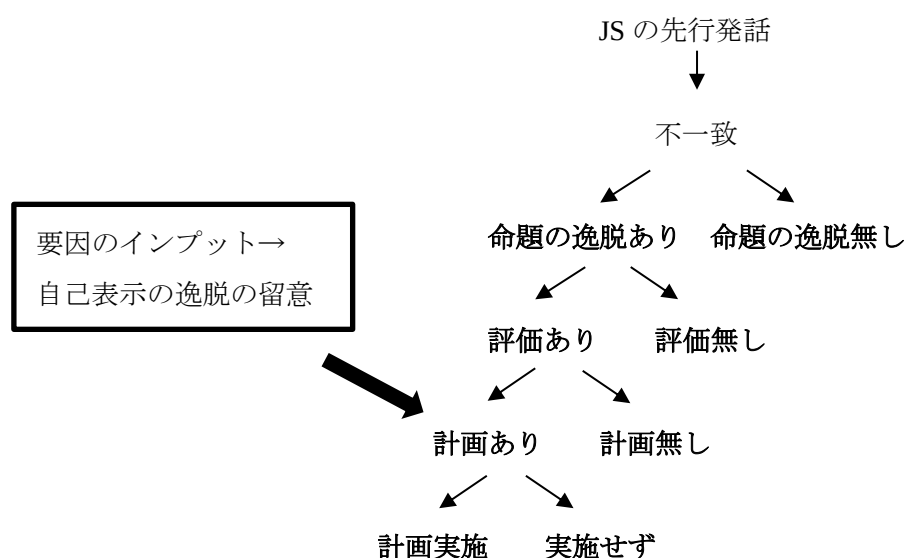


図 2：CS の不一致応答に関する管理・生成プロセスのモデルの基本構造

図2で示すように、CSがJSの先行発話より不一致を感じ、先行発話を「命題の逸脱」と「留意」して、否定的な「評価」を行い「調整計画」の段階に進んだ後、何らかの社会的、場面的要因の「インプット」によって、「自己表示の逸脱」を新たに留意することがある。そして、CSは双方または片方の逸脱を解消、軽減するための調整計画をたて、「計画実施」の段階に至る。このように、「命題の逸脱」の留意から始まる管理プロセスの流れはこのモデルの基本構造を成している。

なお、上記に提示された双方の逸脱が留意される場合のほかに、片方の逸脱のみが留意される場合があり、どちらの逸脱も留意されない場合もある。そして、調整に関しても、片方の逸脱のみが留意されて調整が行われる場合もあり、留意された双方の逸脱に対する

調整の優先順位が選択される場合もある。CS の不一致応答に関する言語管理、生成プロセスのメカニズムを詳しく説明できるように、モデルの更なる精緻化が必要となり、次のようなモデルを考案した(図 3)。

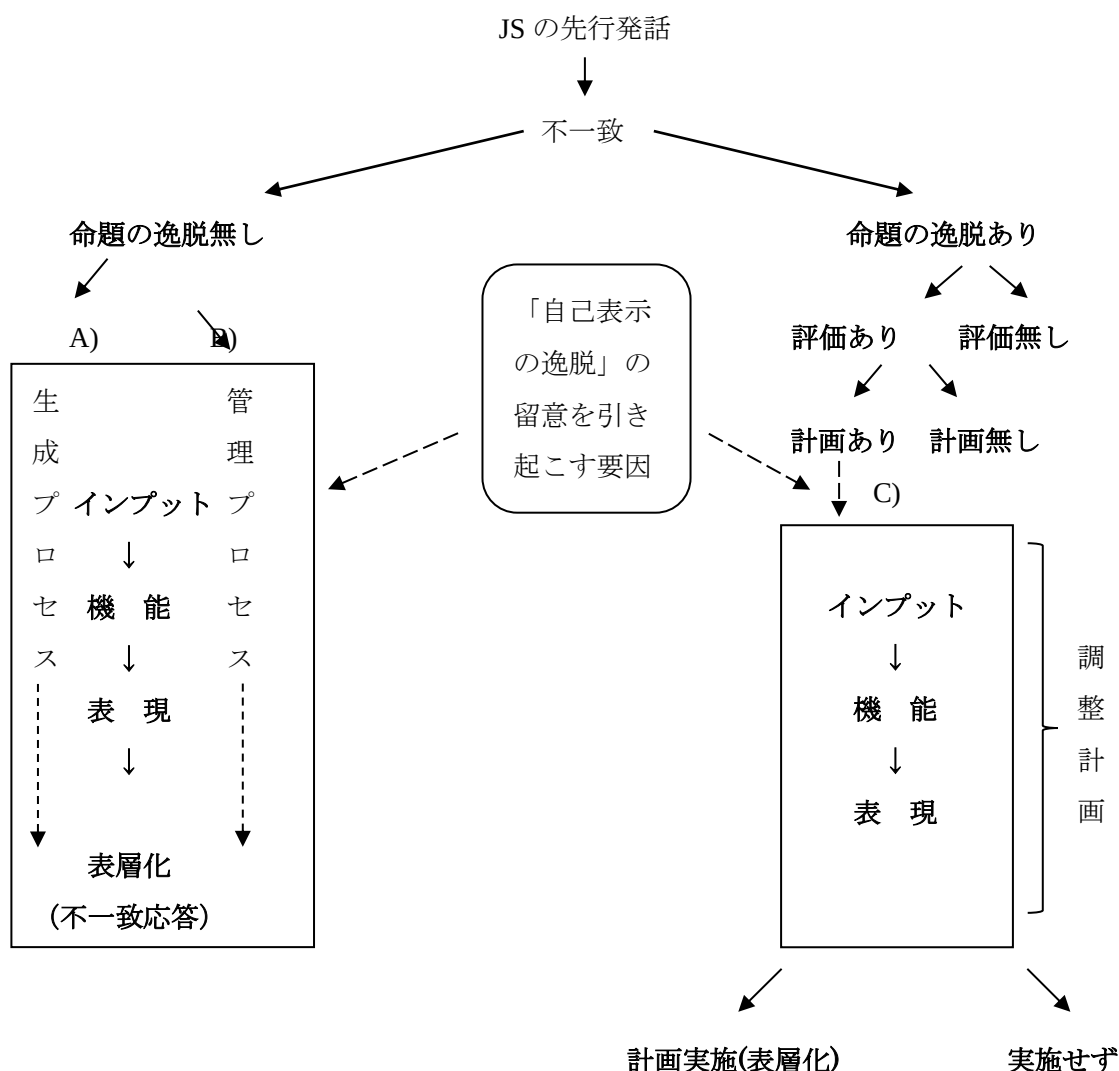


図 3： CS の不一致応答に関する管理・生成プロセスのモデル

図 3 で示されたモデルの流れは次のようになっている：

- (1) 基礎的フレームワークは Neustupný(1985a, 1994 ほか)の管理プロセスであるが、不一致が生じた後は、JS の先行発話が命題の逸脱と CS に留意されない場合は、「命題の逸脱無し」の下にある「A)」、「B)」の方向に、留意される場合は、「命題の逸脱あり」の下にある「C)」²の方向に、それぞれ進んでいく。

² JS の先行発話が「命題の逸脱」と留意された後は、「評価」まで至らなかった場合、または「評価」されたが「調整計画」まで至らなかった場合も存在すると考えるが、ここでは、考察結果に基づいて、命題の逸脱が否定的に評価され、調整計画の段階に至ると想定した上で、モデルを考案することにした。

(2) 「命題の逸脱無し」の場合、生成プロセスに移行し、そこで、先行発話のメッセージ内容、話題に関する CS の所有情報、場面の参加者などの要因が、不一致応答が生成するためのインプットの対象になると考えられる。

なお、「命題の逸脱」が留意されずに生成プロセスに移行した後は、インプットされた要因によって自己表示の逸脱が新たに留意されるか否かに応じて、さらに二つの異なる方向に分かれる。つまり、双方の逸脱が留意されない場合への移行と、自己表示の逸脱のみが留意される場合への移行である。具体的には：

- A)：自己表示の逸脱が留意されない場合は、管理プロセスが活性化されることなく、生成プロセスの流れに沿って、不一致応答の実施に必要な機能、言語表現がほぼ自動的に選択され、不一致応答が表層化されていく。このような場合、逸脱が留意されなく、言語管理が行われなかった不一致応答の事例にあたる。
- B)：自己表示の逸脱が留意される場合、管理プロセスが活性化され、CS が自己表示の逸脱を解消、軽減するために必要となる機能、言語表現を選択し、不一致応答を表層化していく。このような場合、自己表示の逸脱のみが留意され、言語管理が行われた不一致応答の事例にあたる。

「命題の逸脱無し」の場合の詳しい流れは、下記の図 4 のようになっている。

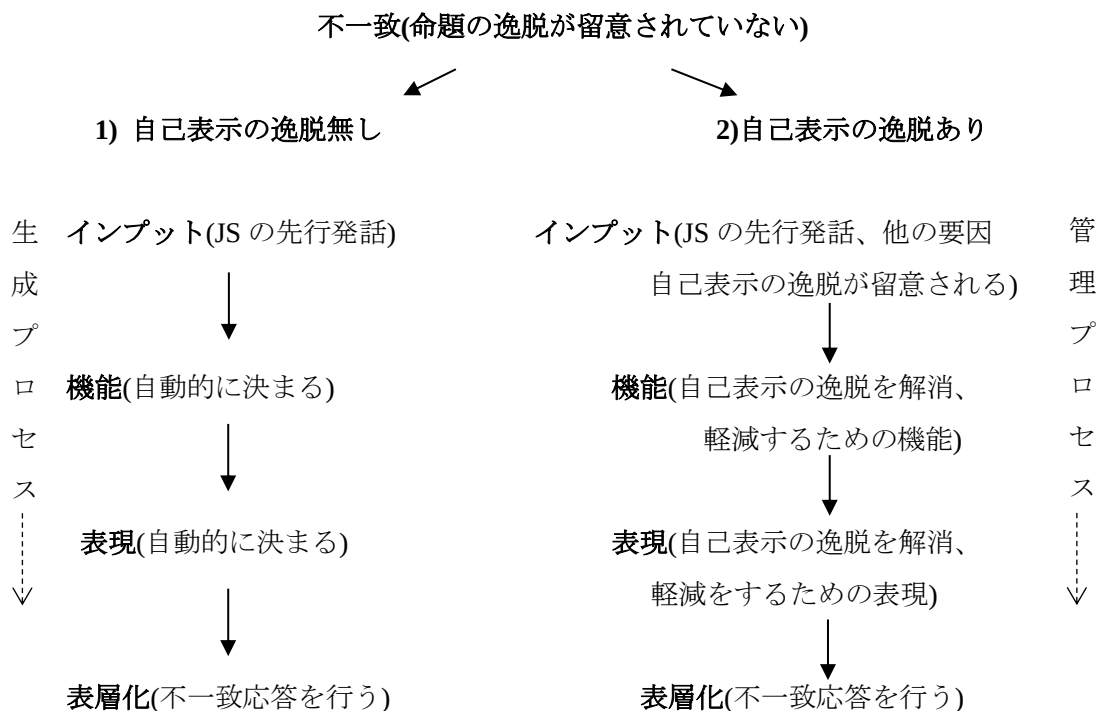


図 4：命題の逸脱が留意されない場合の CS の不一致応答の言語管理、生成のプロセス

(3) 「命題の逸脱あり」の場合は、逸脱が否定的に評価されるとしたら「調整計画」の段階に進んでいく(図 3 の「C」)。この段階の特徴をより詳しく記述、考察できるように、

高(2006)の「生成プロセス」の四つの段階を導入した。

「調整計画」の段階では、命題の逸脱を解消、軽減するための計画が立てられるうちに、インプットされた要因によって自己表示の逸脱が新たに留意されるか否かに応じて、さらに二つの異なる方向に分かれる。つまり、命題の逸脱のみが留意される場合への移行と、双方の逸脱が留意される場合への移行である。また、双方の逸脱が留意された後は、逸脱の調整の優先順位が決められる場合があるため、「命題の逸脱あり」の場合の言語管理プロセスを下記の図5ように考案した。

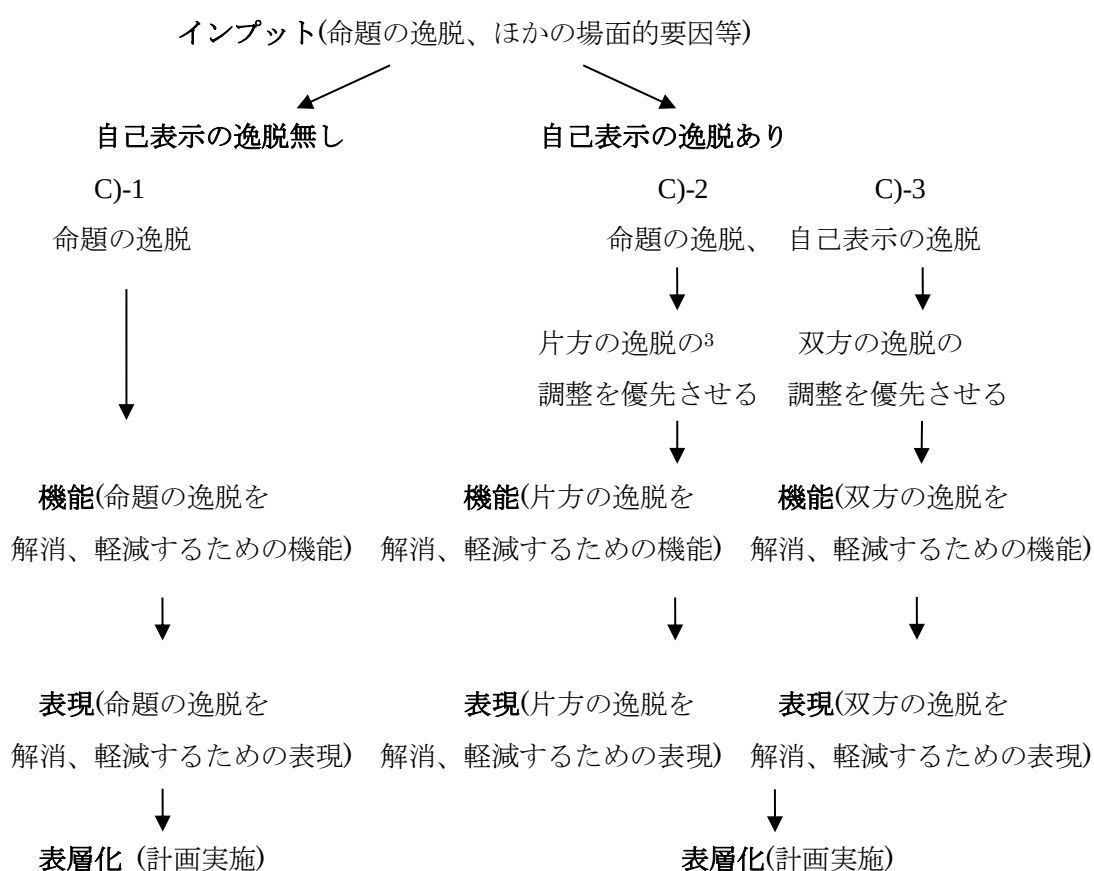


図5：「命題の逸脱」が留意される場合のCSの不一致応答の言語管理のプロセス

C)-1：自己表示の逸脱が留意されない場合は、CSが命題の逸脱のみを解消、軽減するために必要となる「機能」と「表現」を選択し、不一致応答を表層化していく。このような場合、命題の逸脱のみが留意され、言語管理が行われた事例にあたる。

自己表示の逸脱も留意される場合は、CSが逸脱の調整の優先順位を考慮してから、逸脱を解消、軽減するための計画を立てることになる。

³ 紙面の幅が制限されているため、「命題の逸脱」、「自己表示の逸脱」に対する調整を優先させる流れを分けて記入せず、「片方の逸脱」の調整を優先させると表すことにした。

C)-2 : CS が片方の逸脱の調整を優先させ、逸脱を解消、軽減するために必要となる「機能」と「表現」を選択し、不一致応答を表層化していく。このような場合、命題の逸脱、または自己表示の逸脱の調整が優先され、言語管理が行われた事例にあたる。

C)-3 : CS が双方の逸脱の調整を優先させ、逸脱を解消、軽減するために必要となる「機能」と「表現」を選択し、不一致応答を表層化していく。このような場合、双方の逸脱の調整がともに考慮され、言語管理が行われた事例にあたる。

以上の図 2～5 は、CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスを提示したが、これらのプロセスのメカニズムの記述、考察に参照できると考える。

6.3 今後の課題

本研究では、接触場面理論、ポライトネス理論に基づいて、「逸脱の留意」の概念を援用し、言語管理プロセス、生成プロセスを用いることによって、上下関係が潜在化している日中接触場面、および上下関係が顕在化している日中接触場面における CS の不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスを分析し、特に「逸脱の留意」、「逸脱の調整」の段階の焦点を当て考察を行った。これによって、両場面での CS の不一致応答において留意された逸脱、行われた調整のバリエーション、これらの段階に関与した社会的、場面的要因の詳細、などの側面における特徴が明らかになり、異同点をまとめることができた。さらに、管理プロセス、生成プロセスのモデルを参考にし、今回の考察結果に基づいて、日中接触場面での CS の不一致応答の言語管理、生成プロセスのモデルを提案した。このモデルを利用して、日中接触場面での CS の不一致応答における逸脱の留意、逸脱調整の優先順位の選択、調整計画の実施、などの段階についてより詳しく考察することができると考える。逸脱が留意されずに言語管理が行われた CS の不一致応答についても、このモデルはそこに含まれる生成プロセスの考察に対応できると考える。

今後の課題として、まず、分析対象とする不一致応答のデータをさらに増やし、提案したモデルの妥当性、信頼性、汎用性を検証することが必要であると考えられる。本研究では、インターアクション・インタビューの方法と会話収録の方法を併用して、上下関係の潜在化、顕在化している日中接触場面での CS の不一致応答の事例を収集し、考察を行った。これらの調査方法を用いることによって、CS が不一致応答を行う際にインプットした社会的、場面的要因、応答時の内面的動きなどの側面についての考察が可能となった。なお、それぞれの調査方法の異なる性格、そして、自然会話場面とインターアクション・インタビューの調査において、会話収録の時間やインタビューの回数が調査協力者によって異なることなど、不一致応答に対する量的な分析の結果に影響すると考えられる。また、インターアクション・インタビューでは、CS が行った不一致応答の応答内容、応答時の内面的動きの一部が詳しく報告され、分析に値する材料を得られたが、不一致応答に用いられた言語表現や調整ストラテジーの詳しい分析に用いると、やはり限界はあると思われる。

特に、上下関係が顕在化している場面の考察は、主にインターアクション・インタビューのデータに基づいて行われたが、ディスコースのレベルから上下関係をはじめとする諸要因が不一致応答に与える影響を考察するには、インターアクション・インタビューのデータのほかに、会話データの収集も不可欠である。一方、自然会話のデータに基づいて、CSが実際に行った不一致応答の内容に迫って考察することはできるが、親しい友人関係の参加者による日常的雑談の内容が多く、参加者と話題がある程度制限されているため、分析材料としてバリエティはやや欠けている。したがって、モデルの検証を行う際に、まず、調査協力者、調査場面の構成の多様化を工夫し、個々の調査方法およびそこから得られたデータの性格をよりよく吟味した上で、分析データの均一化、精細化を図り、不一致応答の事例をさらに充実させる必要がある。そして、CS、JSの母語場面での不一致応答にも目を向け、これまでの対照研究の分析結果をモデルの検証に応用することも今後の課題として考える。

本研究では、CSの不一致応答における逸脱の留意、調整の段階に関与した社会的、場面的要因の構成、関与の特徴について、ある程度明らかにすることができたが、これらの要因がほかの管理プロセスの段階との繋がりも、解明すべき課題と考える。特に、場面ごとに埋め込まれる様々な社会的、場面的要因のインプットにおいて、インプットの選択をめぐる規範(高 2006:102)が適用されることはあると考え、留意された逸脱の調整の優先順位の選択においても、一定の規範が働いていると推察できる。これらの規範の内容や適用のしかた、また関与する要因などにも注目し、考察を深める必要がある。さらに、本研究では、主に先行発話の内容の側面に注目し、逸脱の留意、調整の段階に与える影響を考察した。今後は、内容の側面にとどまらず、先行発話の発話意図とCSの不一致応答の関連性を探るべきである。JSの発話意図が異なると、CSが不一致応答において留意する逸脱、行う言語管理も異なってくると予想される。このように、発話行為の視点を取り入れ、異なる発話意図の下で行われたJSの先行発話が、CSの不一致応答に関する言語管理、生成のプロセスにどのように関与しているか、についての考察が必要である。

日本語教育への応用を考えると、異なる場面でのCSの不一致応答の言語管理、生成のプロセスを考察した本研究は、第一歩を踏み出したことに過ぎない。ポライトネスの実現の視点に基づいて、日本語での「婉曲的」または「回避的」不一致応答に用いられる言語表現、調整ストラテジーのパターンを提示することは一定の効果があるが、談話上に現れる言語表現が「明示的」、「婉曲的」、または「回避的」のどれに属するかについて、参加者によって解釈が異なると思われるため、不一致応答に対するJSの評価の視点からも、CSの不一致応答を考察する必要がある。特に、親しい関係に参加者の間では、不一致の表示が連帯の関係を促進する機能を持ち、相手の会話に興味を示すには、直接的な同意や沈黙よりは有効である、そして、仕事上の問題の解決を目指す話し合いでは、明確な異なる見解の提示が認められると先行研究から指摘されたように、明示的不一致応答が必ずしも相手のフェイスに対する侵害に結び付けられるとは限らない。したがって、不一致応答の受け

手である JS からの評価と対応、後続する会話の展開の分析結果に基づき、明示的な不一致の表示方法を含む適切な不一致応答のあり方を明らかにし、会話の授業で取り入れるべき指導法や指導項目を講じることが大切であると思われる。

楊(2010、2011)では、インプットする社会的、場面的要因に対する CS の選択、CS がインプットした要因に基づいて行う発話意図、表現の選択、表層化された CS の不一致応答などについて、JS による評価の視点を導入して考察を試みた。コミュニケーション上の問題が生じた背景には、不一致を示す明示度が高いことより、インプットする社会的、場面的要因の選択をめぐる規範や、インプットした要因に対する解釈などの側面における社会的、社会言語的背景の違い、不一致対象の性格や不一致応答の談話上の位置などのほうが、要因として強く関わっているとみられた。今後は、分析データを補充するとともに、JS の先行発話の発話形態からの影響、CS の不一致応答に対する JS からの評価を考察の視点に加え、提案したモデルについての検証を行い、日本語教育への応用方法を熟考したい。

《参考文献》

- Angouri, Jo., and Locher, Miriam. A. (2012). Theorising disagreement. *Journal of Pragmatics*, vol 44, issue 12, pp. 1549-1553.
- Angouri, Jo. (2012). Managing disagreement in problem solving meeting talk. *Journal of Pragmatics*, vol 44, issue 12, pp. 1565-1579.
- Austin, J. L. (1962). *How to Do Things with Words*. Oxford University Press.
- Beebe, L. M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic transfer in ESL refusals. In Scarcella, R, C., Andersen, E.S. & Krashen, S, D. (eds.), *Developing Communication Competence in a Second Language*. pp. 53-73. New York: Newbury House Publishers.
- Blum-Kulka, S. (1982). Learning to Say What You mean in a Second Language: A study of the Speech Act Performance of Learners of Hebrew as a Second Language. *Applied Linguistics*, 3-1, pp. 29-59.
- Blum-Kulka, S., House, J., and Kasper, G. (1989). *Cross-cultural pragmatics: requests and apologies*. Norwood; New Jersey: ABLEx.
- Bousfield, Derek. (2008). Impoliteness, preference organization and conductivity. *Multilingua* 26, pp. 1-33.
- Brown, P., and Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. New York: Cambridge University Press. (ペネロピ・ブラウン、スティーヴン・C・レヴィンソン著 田中典子(監訳) (2011) ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象 研究社)
- Chen, Rong. (2001). Self-politeness: A proposal. *Journal of Pragmatics*, vol 33, issue 1, pp. 87-106.
- Cheng, Winnie., and Tsui, Amy B.M. (2009). ‘ahh ((laugh)) well there is no comparison between the two I think’: How do Hong Kong Chinese and native speakers of English disagree with each other? *Journal of Pragmatics*, vol 41, issue 11, pp. 2365-2380.
- Cohen, A. D. (1996). Investigating the production of speech act sets. In S.M. Gass and J. Neu (eds.), *Speech acts across cultures: Challenges to communication in a second language*. pp. 21-43. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Coulter, J. (1990). Elementary properties of argument sequences. In G. Psathas (eds.), *Interaction competence*. pp. 181-203. Lanham, MD: University Press of America.
- Du, Jinwen Steinberg. (1995). Performance of Face-threatening Acts in Chinese: Complaining, Giving Bad News, and Disagreeing. In Gabriele Kasper (eds.), *Pragmatics of Chinese as native and target language*. pp. 165-206. Hawai: University of Hawai'i Press.
- K. Anders Ericsson., and Herbert A. Simon. (1993). *Protocol analysis: verbal reports as data*. London: The MIT Press.
- Fairbrother, L. C. (2000). Analysis of Intercultural Interaction Management within a Party Situation. 社会言語科学 第2巻第2号 pp. 33-42

- フェアブラザー, L. C. (2000) 言語管理モデルからインターアクション管理モデルへ 村岡英裕(編) - 接触場面の言語管理研究 vol.1 - 千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 40 pp.55-66 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- フェアブラザー, L. C. (2002) 相手言語接触場面における日本語母語話者の規範適用メカニズム 村岡英裕(編) - 接触場面における言語管理プロセスについて(Ⅱ) - 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 38 pp.1-12 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- フェアブラザー, L. C. (2004) 日本語母語話者と非母語話者のインターアクションにおいて逸脱がなぜ留意されないのか 村岡英裕(編) - 接触場面の言語管理研究 vol.3 - 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 104 pp.55-67 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- Fan, S. K. (1992). Language management in contact situations between Japanese and Chinese. Ph. D. thesis. Department of Japanese Studies. Monash University, Melbourne.
- ファン, サウクエン(1998) 接触場面の言語管理 国立国語研究所日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成研究会発表原稿・会議用録 pp.1-16 国立国語研究所
- ファン, サウクエン(1999) 非母語話者同士の日本語会話における言語問題 社会言語科学 2-1 pp.37-48 社会言語科学会
- ファン, サウクエン(2002) 対象者の内省を調査する(1): フォローアップ・インタビュー 言語研究の方法 - 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために - pp.87-95 東京: くろしお出版
- Fan, S. K. (2004). Language learners' conversational participation in non-goal-oriented network situations: An attempt of International Encounter Groups in the university setting 村岡英裕(編) - 接触場面の言語管理研究 vol.3 - 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 104 pp.69-89 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- ファン, サウクエン(2006) 接触場面のタイポロジーと接触場面研究の課題 国立国語研究所編 日本語教育の新たな文脈 - 学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性 - pp.120-141 東京: アルク
- ファン, サウクエン(2010) 異文化接触 中島平三監修 シリーズ朝倉〈言語の可能性〉8 西原鈴子編 言語と社会・教育 pp.75-99 東京: 朝倉書店
- French, J. R. P., and Raven, B. (1959). The bases of social power. In D. Cartwright (eds.), *Studies in social power*. pp. 150-167. Ann Arbor, MI: Institute for Social Research. New York: Harper & Row.
- Goffman, Erving (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. New York: Anchor Books.
- Grice, H.P. (1975). Logic and conversation. *Syntax and Semantics*, 3, pp. 41-58.
- Grice, H. P. (1989). *Studies in the Way of Words*. Cambridge Mass: Harvard University Press.
- 服部幹雄 (2004) 不同意の会話行為における中間言語語用論 - 日本人英語学習者の場合 - 名古屋女子大学紀要 人文・社会編 (50) pp.231-236

- Hayashi, Makoto. (2009). Marking a 'noticing of departure' in talk: En-prefaced turns in Japanese conversation. *Journal of Pragmatics*, vol 41, issue 10, pp.2100-2129.
- Hayashi, Makoto. (2010). An overview of the question-response system in Japanese. *Journal of Pragmatics*. vol 42, issue 10, pp.2685-2702.
- 平野美恵子 (2006) 多文化共生指向の日本語教育実習生による反対意見表明の変化 - ティーチャー・コミュニティー構築の過程から - WEB 版リテラシーズ第 3 巻 1 号 リテラシーズ研究会編 くろしお出版 21
- 堀田智子・吉本啓 (2012) 中国人日本語学習者の「不同意」行動 - 談話の一考察 - 2012 年度日本認知科学会第 29 回大会 pp. 2-14
- 藤森弘子 (1994) 日本語学習者にみられるプラグマティック・トランスファー - 「断り」行為の場合 - 名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集 1 pp.1-19 名古屋学院大学留学生別科(日本研究プログラム)
- Hymes, D. (1972). Models of the Interaction of Language and Social Life. In Gumperz, J. J. and Hymes, D. (eds.), *Directions in Sociolinguistics*. pp.35-71. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Hymes, D. (1974). *Foundations in Sociolinguistics: An Ethnographic Approach*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Ikeda, K. (2008). *A conversation analytic account of the interactional structure of "Arguments"* 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 言語文化論集 29-2, pp.289-304
- 井出祥子 (1986) 日本人とアメリカ人の敬語行動 南雲堂
- 李善雅 (2001) 議論の場における言語行動 - 日本語母語話者と韓国人学習者の相違 - 日本語教育 111 号 pp.36-45 日本語教育学会
- 伊藤恵美子 (2000) マレー語話者の社会文化的能力と滞日期間の関係について - 勧誘に対する『断り』の場合 - (口頭発表) 2000 年度日本語教育学会秋季大会予稿集 pp.238-243
- Jernudd, B.H. and Neustupný J. V. (1987). Language planning: for whom? In L. Laforge (eds.), *Proceedings of the International Colloquium on Language Planning*. pp.69-84. Quebec: Les Presses de l'Université Laval .
- Jones, K. (1990). Conflict in Japanese conversation. Ph.D. Dissertation. University of Michigan.
- ジョーンズ, キンベリー (1993) 特集 話し合い - 日本人のコンフリクト時の話し合い アメリカ人研究者から見た場合 日本語学 12-4 pp.68-74 明治書院
- Kakavá Christina. (1993). Aggravated corrections as disagreement in casual Greek conversations. *Proceedings of the First Annual Symposium about Language and Society-Austin (SALSA)*. Texas Linguistic Forum 33. pp. 187-95.
- 神尾昭雄 (1990) 情報のなわ張り理論 東京：大修館書店
- 神尾昭雄・高見健一 (1998) 談話と情報構造 東京：研究社出版
- 神尾昭雄 (2002) 続・情報のなわ張り理論 東京：大修館書店
- 加藤好崇 (2010) 異文化接触場面のインターアクション：日本語母語話者と日本語非母語話者

のインターアクション規範 東海大学出版会

- キム, キョンソン (2008) 韓国人超上級日本語話者の言語管理 - 事前調整を中心として - 村岡英裕(編) - 言語生成と言語管理の学際的研究 接触場面の言語管理研究 - Vol.6 千葉大学大学院人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書 198 pp.13-27 千葉大学人文社会科学研究所
- 金桂英 (2012) 日本語学習者の「不同意コミュニケーション」における変容 - 1 人の中国語を母語とする日本語学習者の事例から - 第 45 回お茶の水女子大学日本言語文化学会発表要旨
- 金水敏・今仁生美 (2000) 現代言語学入門 4: 意味と文脈 東京: 岩波書店
- 金志宣(2000) turn 及び turn-taking のカテゴリー化の試み - 韓・日の対照会話分析 - 日本語教育 105 pp.81-90 日本語教育学会
- 木山幸子 (2005) 日本語の雑談における不同意の様相 - 会話教育への示唆 - 言語情報学研究 報告 6 号 pp.165-182 東京外国語大学
- 木山幸子 (2005) 日本語の雑談における不同意 ポライトネスの観点から 日本研究教育年報 9 pp.27-48 東京外国語大学日本課程留学生課
- 黄英哲 (2003) インタビュー会話に見られる JS の応答伝達技術 - 「不同調」の表現と管理をめぐって 日本語教育学会春季大会予稿集 pp.195-200 日本語教育学会
- 高民定 (2006) 文法能力の規範についての一考察 - 接触場面の受身の生成を中心に - 村岡英裕(編) - 多文化共生社会における言語管理 接触場面の言語管理研究 - vol.4 社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129 pp. 91-102 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 高民定・村岡英裕 (2009) 日本に住む中国朝鮮族の多言語使用の管理 - コードスイッチングにおける留意された逸脱の分析 - 言語政策第 5 号 pp. 43-60 日本言語政策学会
- 今千春 (2002) 日本語母語話者の留意プロセス - 日本語非母語話者の受容面に対する管理の一考察 - 村岡英裕(編) - 接触場面における言語管理プロセスについて - 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 38 pp.13-27
- 熊谷智子 (1994) 日本語教育映像教材 中級編 関連教材 伝えあうことば 4 機能一覧表 (共著) 東京: 国立国語研究所
- 熊取谷哲夫 (1995) 特集 依頼表現 - 発話行為理論から見た依頼表現 発話行為から談話行動へ - 日本語学 14-11 pp.12-21 東京: 明治書院
- Leech, Geoffrey N. (1983). *Principles of Pragmatics*. New York: Longman.
- Levinson, Stephen C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- スティーヴン・C・レヴィンソン(著) 安井稔/奥田夏子(訳) (1990) 英語語用論 東京: 研究社
- Liu, si. (2004). *Pragmatic Strategies & Power Relations in Disagreement: Chinese Culture in Higher Education*. Florida: Universal Publishers.
- Locher. Miriam A. (2004). *Power and Politeness in Action: Disagreements in Oral Communication*. Berlin: Mouton de Gruyter.

- Marra, M. (2012). Disagreeing without being disagreeable: Negotiating workplace communities as an outsider. *Journal of Pragmatics*, vol 44, issue 12, pp. 1580-1590.
- Maynard, D. W. (1985). How children start arguments. *Language in Society* 14, pp. 1-29.
- 宮崎里司 (1991) 日本語教育と敬語 主として敬語回避の観点から 日本語教育論集 世界の日本語教育 1 pp.91-103 国際交流基金日本語国際センター
- Mori, Junko. (1999). *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese: Connective Expressions and turn construction*. Philadelphia: Joan Benjamins North America.
- Mori, Junko. (2006). The working of the Japanese token hee in informing sequences: An analysis of sequential context, turn shape, and prosody. *Journal of Pragmatics*, vol 38, issue 8, pp.1175-1205.
- Muntigl, P., and Turnbull, W. (1998). Conversational structure and facework in arguing. *Journal of Pragmatics*, vol 29, issue 3, pp. 225-256.
- 村田和代 (2002) やわらかい明瞭さ:アメリカ英語のポライトネスの一側面について 龍谷紀要 24(1) pp.39-52 龍谷大学
- 村岡英裕 (2002) 在日外国人の異文化インターアクションにおける調整行動とその規範に関する事例研究 村岡英裕(編) - 接触場面における言語管理プロセスについて vol.2 - 千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 34 pp.115-126
- 村岡英裕 (2003) 社会文化能力はどのように習得されるか - 社会文化規範の管理プロセスからシラバスの構築へ 日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成論文集第3巻日本語教育の社会文化能力 pp.458-495 独立行政法人国立国語研究所
- 村岡英裕 (2004) フォローアップ・インタビューにおける質問と応答 村岡英裕(編) - 接触場面の言語管理研究 vol.3 - 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 104 pp.209-226 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 村岡英裕 (2006) 接触場面における問題の類型村岡英裕(編) - 多文化共生社会における言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.4 - 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129 pp.103-116 千葉大学大学院社会文化科学研究科
- 村岡英裕 (2010) 接触場面におけるコミュニケーション - 日本に住む外国人の言語管理を通してみた言語問題の所在 - 日本語学 29-14 pp.153-169 明治書院
- 村岡英裕 (2010) 接触場面における習慣化された言語管理はどのように記述されるべきか: 類型論的アプローチについて 村岡英裕(編) - 接触場面の変容と言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.8 - 千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 228 pp.47-59 千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 生駒知子・志村明彦 (1993) 英語から日本語へのプラグマティック:「断り」という発話行為について 日本語教育 79 pp.41-51 日本語教育学会
- Neustupný J. V. (1974). Sociolinguistics and the Language Teacher. *Linguistic Communications* 12, pp. 1-24.
- ネウストプニー, J. V. (1981) 外国人の日本語の実態 (1) 外国人場面の研究と日本語教育 日本

- 語教育 45 pp.30-40 日本語教育学会
- Neustupný J. V. (1985a). Problems in Australian -Japanese contact situations. In Pride, J. B. (eds.). *Cross-cultural encounters: communications and miscommunications*. pp. 44-84. Melbourne: River Seine.
- Neustupný J.V. (1985b) . Language norms in Australian-Japanese contact situations. In Clyne, M. (eds.), *Australia, meeting place of languages*. pp. 161-170. Pacific Linguistics.
- Neustupný J.V. (1994). Language of English Contact Discourse and Language Planning. In T. Kandiah & J. Kwan-Terry (eds.), *English and Language Planning*. pp. 50-69. Singapore: Academic Press.
- ネウストプニー, J.V. (1994) 日本研究の方法論 - データ収集の段階 - 待兼山論叢 日本語学篇 28 pp.1-24 大阪大学
- ネウストプニー, J.V. (1995a) 新しい日本語教育のために 東京：大修館書店
- ネウストプニー, J.V. (1995b) 日本語教育と言語管理 阪大日本語研究 7 pp. 67-82 大阪大学
- ネウストプニー, J.V. (1997) プロセスとしての習得の研究 阪大日本語研究 9 pp.1-15 大阪大学
- ネウストプニー, J. V. (1999) コミュニケーションとは何か 特集：日本人のコミュニケーション 日本語学 18 巻 7 号 pp.4-16 東京：明治書院
- ネウストプニー, J. V. (2000) ネットワーク：規範性とインタレストの問題 平成 11 年度文化庁 日本語教育研究委嘱 日本語教育における教授者の行動ネットワークに関する調査研究 - 最終報告 pp.37-50
- ネウストプニー, J.V. (2002) データをどう集めるか 言語研究の方法 - 言語学・日本語学・日本語教育学に携わる人のために - pp.15-33 東京：くろしお出版
- Neustupný, J. V. (2005). Foreigners and the Japanese in Contact Situations: Evaluation of Norm Deviations. *International Journal of the Sociology of Language*. 175-6. pp. 307-323. MOUTON DE GRUYTER.
- Noda, Mari. (2004). Hidden Disagreement: Relation Maintenance in the Japanese Discourse of Disagreement. In Polly Szatrowski(eds.), *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction*. pp.95-122. 東京：くろしお出版
- 岡崎眸 (1995) 日本語学習者における語用論上の転移再考 東京外国語大学論集 50 pp.97-109
- 大津友美 (2001) 雑談における共感作りのためのコミュニケーション行動 - 不一致を表明する際の緩和処置について 言語と文化第 2 号 pp.211-222 名古屋大学大学院国際言語文化研究科
- 大塚淳子 (2005) 不同意の表明 - 日本人大学生の場合 日本語・日本文化 31 号 pp.81-92 大阪大学
- 大和祐子 (2009) 意見の一致を目指す会話における意見交渉の過程 - 意見が異なる者同士の「歩み寄り」の始まりを中心に - 言葉と文化 (Issues in Language and Culture) 10. pp.59-75 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 日本言語文化専攻
- Pan, Yuling. (2000). *Politeness in Chinese face-face Interaction*. Advances in discourse process vol.67.

- Stamford: Ablex Publishing Corporation.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/dispreferred Turn Shapes. In J. M Atkinson and J. Heritage (eds.), *Structure of Social Action: Studies in Conversation Analysis*. pp. 51-101. Cambridge: Cambridge University Press.
- Rees-Miller, J. (2000). Power, severity, and context in disagreement. *Journal of Pragmatics*, vol 32, issue 8, pp. 1087-1211.
- Rose, K. R., and Ono, R. (1995). Eliciting speech act in Japanese: the effect of questionnaire type. *Language Learning*, 45-2, pp.191-223.
- 桜井厚 (2002) インタビューの社会学 - ライフストーリーの聞き方 東京：せりか書房
- Sciffrin, D. (1990). The management of a cooperative self in argument: The role of opinions and stories. In A. Grimshaw (eds.), *Conflict talk*. Cambridge: University Press pp. 241- 259. eprinted in J. Corner and J. Hawthorn (eds.), *Communication studies: A reader*. Edward Arnold.
- ロッド エリス(著) 金子朝子(訳) (1996) 第二言語習得序説 - 学習者言語の研究 東京：研究社
- Scollon, R., S. W., and Jones, R. H. (2012). *Intercultural communication: a discourse approach, 3rd edition*. West Sussex : John Wiley & Sons, Inc.
- ローラ・ミラー (2004) 日本人とアメリカ人は職場で相手への否定的評価をどう伝えるか スペンサー&オーディー(編著) 浅羽亮一(監修) 異文化理解の語用論 - 理論と実践 pp.113-132 東京：研究社
- Searle, J. R. (1969). *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Searle, J. R. (1972). *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: University Press.
- Sifianou, M. (2012). Disagreements, face and politeness. *Journal of Pragmatics*, vol 44, issue 12. pp. 1554-1564.
- 白井香織 (2009) 不同意の間接的発話行為に関する異文化比較研究 - 日本語とアメリカ英語の場合 - 千葉商大紀要 47-1 pp.87-101 千葉商科大学国府台学会
- Soring, K. (1977). Disagreement and contradiction as communicative acts. *Journal of Pragmatics*, vol 1, issue 4, pp.347-374.
- Spencer-Oatey, Helen. (Eds.) (2000). *Culturally Speaking: Managing rapport through talk across cultures*. The continuum publishing company. (スペンサー&オーディー編著 浅羽亮一(監修) (2004) 異文化理解の語用論－理論と実践 東京：研究社)
- 末田美香子 (2000) 初対面場面における不同意表明と調整のストラテジー 日本語教育論集 16 号 pp.23-46 国立国語研究所日本語教育センター
- 梶本総子 (2004) 提案に対する反対の伝え方 - 親しい友人の会話データを基にして 日本語学 23 号 10 巻 pp.22-33 東京：明治書院
- Szatrowski Polly (編) (2004) *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction* 東京：くろしお出版
- 武田加奈子 (2004) 接触場面における勧誘応答の分析 - 勧誘者が被勧誘者の応答を断りと判断

- する要素 村岡英裕(編) - 接触場面の言語管理研究 vol.3 - 千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 104 pp.35-54
- Tannen, D. and Kakav á C. (1992). Power and solidarity in Modern Greek conversation: disagreeing to agree. *Journal of Modern Greek Studies* 10 (1) pp. 11-34..
- 滝浦真人 (2005) 日本語の敬語論：ポライトネス理論からの再検討 東京：大修館
- Thomas, J. (1983). Cross-cultural pragmatic failure. *Applied Linguistics*. 4(2), pp. 91-112.
- Ting-Toomey, S. (2005). The matrix of face: an updated face-negotiation theory. In: Gudykunst, W. B. (eds.), *Theorizing about Intercultural Communication*. pp. 71-91. Sage Publications, Thousand Oaks,
- Tuan, Jeanne H., and Hsu, Helen J. (2009). An analysis of indirectness in disagreement: a corpus study on intercultural conversations between Taiwanese and Native Speakers of English 樹徳人文社会電子学報 第五卷第二期 Shu-te University
- Tsui, Amy B. M. (1991). The pragmatic functions of *I don't know*. *Text*, 11 (4). pp.607-622.
- 宇佐美まゆみ (2001) ポライトネス談話理論構想 国立国語研究所(編)談話のポライトネス 東京：凡人社
- 宇佐美まゆみ (2003) 改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 多文化共生社会における異文化コミュニケーション教育のための基礎的研究 13-14, pp. 4-21.
- 宇佐美まゆみ (2008) 特集 敬語研究のフロンティア - ポライトネス理論研究のフロンティア ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論 社会言語科学 11-1 pp.4-22 社会言語科学会
- Van Eemeren, Frans H., and Grootendorst, Rob. (1984). *Speech Acts in Argumentative Discussions: A Theoretical Model for the Analysis of Discussions Directed Towards Solving Conflicts of Opinion*. The Holland: Foris Publications Holland.
- Ian Walkinshaw. (2009). Learning Politeness: Disagreement in a Second Language. *Contemporary studies in descriptive linguistics series*. vol 24, New York: Peter Lang.
- 王氷菁 (2011) 日中接触場面における人称表現の選択に関与する社会的・場面的要因 村岡英裕(編) - 接触場面・参加者・相互行為 接触場面の言語管理研究 vol.9 - 千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 238 pp.13-27 千葉大学社会文化科学研究科
- 王萌 (2007) 不同意の表明の仕方：日中の対照を中心に 比較社会文化研究 22 pp.13-22 九州大学
- 王萌 (2008b) 日本人の不同意表明の仕方(2) 比較社会文化研究 24 pp.13-22 九州大学
- 王萌 (2008a) 日本人の不同意表明の仕方(1) 比較社会文化研究 23 pp.13-22 九州大学
- Wang, Y. (1998). The linguistic structures of agreement and disagreement in Mandarin Chinese. Paper presented at the Joint Meeting of the 7th International on Chinese Linguistics and the 10th North American Conference on Chinese Linguistics, Stanford University. California, U.S.A., pp. 25-28.

- 王玉明 (2005) 接触場面における不一致への応答 - 中国人学習者と日本語母語話者の相違 -
千葉大学文学研究科修士論文
- 王玉明 (2006) 接触場面における不一致への応答 - 中国人学習者と日本語母語話者の相違 村
岡英裕(編) - 多文化共生社会における言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.4 - 千葉大
学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書 129 pp.69-78 千葉大学人文社会科
学研究科
- Wilson, D. and Wharton, T. (2009). *Recent advances in pragmatics*. Tokyo, Japan: Taishukan Publishing.
(ディアドリ・ウィルスン、ティム・ウォートン著 今井邦彦(編) (2009) 最新語用論入門
12 章 東京：大修館書店)
- 山岡政紀・牧原功・小野正樹 (2010) コミュニケーションと配慮表現 日本語語用論入門 東
京：明治書院
- 楊昉 (2009) 意見の不一致における類型と調整ストラテジー - 中国語母語場面と日中接触場面
の事例分析 - 村岡英裕(編) - 多文化接触場面の言語行動と言語管理 接触場面の言語管
理研究 vol.7 - 千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 218 pp.65-85 千
葉大学大学院人文社会科学研究科
- 楊昉 (2010) 日本語による不一致応答の社会的、場面的要因の分析 - 中国人居住者の事例 -
村岡英裕(編) - 接触場面の変容と言語管理 接触場面の言語管理研究 vol.8 - 千葉大学大
学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 228 pp.95-114 千葉大学大学院人文社会
科学研究科
- 楊昉 (2011) 中国語母語話者の不一致応答の分析 - 日本語母語話者に留意された逸脱の視点か
ら - 村岡英裕(編) - 接触場面・参加者・相互行為 接触場面の言語管理研究 vol.9 - 千葉
大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 238 pp.69-86 千葉大学大学院人文社
会科学研究科
- 楊昉 (2012) 中国語母語話者の不一致応答の言語管理・生成プロセスのモデル - 日中接触場面
の事例からの一考察 - 村岡英裕(編) - 外来性に関わる通時性と共時性 接触場面の言語
管理研究 vol.10 - 千葉大学大学院人文社会科学研究科プロジェクト報告書 248 pp.89-106
千葉大学大学院人文社会科学研究科
- 楊虹・倉田芳弥 (2011) 中日接触場面の討論における意見表明の仕方 - 学習者と日本語母語話
者のモダリティ使用の観点から - 社会言語科学会第 28 大会発表論文集 pp.24-27 社会言
語科学会
- Yeung, L. (2000). The question of Chinese indirectness: A comparison of Chinese and English
participative decision-making discourse. *Multilingua-Journal of Cross-Cultural and Interlanguage
Communication*. vol 19, issue 3, pp. 221-264.

謝 辞

本研究をまとめるに当たり、多くの方々からご指導・ご協力をいただきました。ここに心より感謝申し上げます。

まずは、接触場面の参加者である私を観察者の位置にご案内くださり、接触場面研究の面白さ、奥深さをお教えいただき、丁寧なご指導と数々のご助言、たくさんの激励のお言葉を頂きました指導教官である村岡英裕先生に深く感謝申し上げます。本研究の研究計画を立てる初期の段階から博士論文の執筆・修正まで数えきれないほどのご指導・ご助言をいただきました。先生はいつも私にとって自分の無知をさらけだしてなんでも気軽に相談できる存在であり、くじけそうになった時には励ましの言葉、気が緩んだ時には戒めの言葉をかけてくださいました。本当にありがとうございました。また、審査委員の片桐雅隆先生、石井正人先生、高民定先生には論文を丁寧に読んでいただき、貴重なコメントと激励の言葉をいただきました。ここに感謝申し上げます。さらに、数々のご助言をくださいました副指導教官である岡部嘉幸先生、宗宮好和先生に深く感謝申し上げます。日本語教育合同ゼミの吉野文先生、佐藤尚子先生、西住奏子先生には、毎回の研究内容の発表に貴重なコメントをいただき、ここに感謝申し上げます。

そして、何よりも本研究の調査に快く協力してくださいました皆様に感謝の意を表したいと思います。皆様のご協力がなければこの論文を書き上げることは不可能だと思います。また、研究内容についていつも親切にアドバイスをしていただいている院生仲間の今さん、鄒さんをはじめとしたゼミの皆様は心より感謝いたします。論文の校正を快く引き受けてくださいました野原さん、植屋先生、それから、日本での留学生生活をずっとあたたく見守ってくださり、励ましてくださる学外の友人の皆様は心より感謝申し上げます。

最後に、私のやりたいようにやらせてくれた両親、心の支えとなってくれたお茶の水女子大学大学院の方穎琳さんに心より、感謝をしたいと思います。ありがとうございました。

資料編

〈目次〉

〈凡例〉	2
第2章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(中国語原文).....	4
第3章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(中国語原文).....	5
第4章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(日本語訳)	7
4.2.1.2 の事例.....	7
4.2.2.1 の事例.....	7
4.2.3 の事例.....	11
4.3.2.1 の事例.....	11
4.3.3.3 の事例.....	12
第5章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(中国語原文).....	13
不一致応答の会話例.....	39
会話資料、インタビューアクション・インタビュー資料の紹介	82
1 擬似自然会話場面の紹介	82
2 自然会話場面の紹介	85
3 インターアクション・インタビュー資料の紹介	89

〈凡例〉

1 会話資料、インターアクション・インタビュー資料の文字化記号

意味内容がすぐ理解できるように漢字仮名交じりで内容を示すようにし、以下のような記号化の設定を行い、文字化を行った。なお、インターアクション・インタビュー資料の文字化にあたり、報告内容の詳細な記述を保ちつつ、下記に示された文字化の規定を一部簡略化した形で文字化を行った。

記号	意味
ー	音を伸ばした発音 「ーー」は相対的に伸びが長いことを表す
↑	上昇イントネーション(疑問文に付くことが多い)
、	語句の断続を明らかにする息継ぎの箇所を示す
。	文の切れ目を表す
(数字)	会話中の沈黙時間の長さを示す。()の中の数字は沈黙時間の秒数である
< >	同時発話されたものは、重なった部分の双方を< >で括る
【 】	第1話者の発話が終わる前に、途中から挿入される形で、第2話者の発話が始まる場合、結果的に終了した第1話者の発話の終わりには、【】をつけ、第2話者の発話の冒頭に】をつける
=	間が短い発話の交替を示す
()	短く、特別な意味を持たない「あいづち」は、相手の発話中の最も近い部分に()に括って入れてある
(笑)	笑いながら発話したものや笑い等は、(笑)、(笑いながら)と記してある
(< >)	相手の発話の途中に、相手の発話と重なって笑いが入っている場合は、短いあいづちと同様に扱って、(< 笑 >)と記してある
“ ”	発話中に、話者及び話者以外の者の発話、思考などの内容を引用された場合、その部分を“ ”に記してある
????	聞き取り不能であった部分につける。その部分の推測される拍数に応じて、?のマークをつける
(内容?)	音声聞き取りにくい場合、()の中に聞き取れた内容を表記し、?をつける
「 」	固有名詞等、協力者のプライバシーの保護のために明記できない単語を表すときに「人名」、「地方名」、「店名」などのように提示する
{ }	声の大きさの変化などの周辺言語的特徴を示す

2 各章で挙げられた不一致、不一致応答の事例

まず、第2、3、4、5章で挙げられた事例に関するインターアクション・インタビュー資料(中国語原文または日本語訳文)を章ごとに提示する。次に、会話資料から抽出できた不一致応答の事例を会話のペア別に提示する。紙面の制限を考慮し、参加者間で生じた不一致、CSの不一致応答にあたるインタビューでの報告内容、会話の部分のみを提示することにした。

不一致を生じさせたJSの先行発話に下線の「__」、CSの不一致応答に下線の「...」をつけて示す。なお、不一致の対象がJSの書いた文章の内容であるため、文字化データで提示できない場合、または、一つの不一致に対して、複数回の不一致応答が行われた場合は個別に脚注をつけて説明を加える。

3 会話資料、インターアクション・インタビュー資料の紹介

収集した擬似自然会話、自然会話の資料では、個々のペアの会話がどのような流れで展開され、どのような話題をめぐって不一致が生じ、不一致応答が行われたかを提示し、ペアごとに談話の特徴を簡単に説明する。そして、インターアクション・インタビュー資料について、不一致が生じて不一致応答が行われたインターアクションに関する場面的情報を提示し、どのような不一致応答の事例が報告されたかを簡単に説明する。

第2章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(中国語原文)

例1 ワイシャツの色は茶色だった(不一致が生じたと報告された事例)

番号	発話者	発話
1	CS22	我看那件衬衫是茶色的嘛，(嗯)我就写了茶色， <u>结果他说是灰色。其实就是茶色的嘛</u>
2	R	嗯，那你怎么说呢↑
3	CS22	因为是客人嘛，我也不能说什么。(嗯)我就说，“ <u>对不起，因为灯光看成茶色了，下次我会注意的</u> ”((後略))

例2 病院のプライバシー保護の方針が正しい(調査者の質問によって確認できた不一致)

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略))她就觉得，有点做得过，过，过，太过了嘛
2	R	嗯， <u>她觉得做得比较过</u>
3	CS21	嗯
4	R	你呢，你觉得医院的那个＝
5	CS21	＝ <u>我觉得做法挺对的。因为</u> ((後略))

第3章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(中国語原文)

例2 私のミスではない(先行発話において逸脱が留意された)

番号	発話者	発話
1	CS22	所以我就还蛮详细地跟他解释了这个问题，第一，(嗯)因为我是新来的，所以我数钱会比较ゆっくり，(嗯)，第二，因为是在我们两个当班的期间，你要是实在不相信的话，你可以把那个防犯カメラの录像调出来。因为有很多太店子可以调出来看你给钱的时候是不是给错了，它这个是可以找出来的...
2	R	对，它上面好像是有 【
3	CS22	】 因为有两个是对着レジ的，我说你可以把它找出来看。(嗯)他说那个那个，“そこまでも”什么的，说了一堆。(嗯)就说不可能录得那么详细，又说了一堆的借口。(嗯)我说那如果都不愿意的话，那我只能说，那我只能认栽，我们两个在这个阶段又没有找到什么原因，只有我们两个当班，我们两个每人出两千五，这个责任我必须付，(嗯)我要负这个责任，可是你不能说是我一个人的错
		4行を略した
4	R	你原来说跟那个オーナー你也是一直说“はい、わかりました”，对吧
5	CS22	嗯，但是我收钱的时候一直很小心，不可能是我的错，(嗯)，平时可能会注意一点，不过那个时候我就是赔了钱，也要说清楚不是我的错

例8(第2章の例1を参照する)

例11 出身大学によって初任給がずいぶん異なる(自己表示の逸脱が留意されなかった)

番号	発話者	発話
1	CS20	((前略)) 他一开始不知道说在中国学校不同的话出来的那个工作呀，(嗯)收入什么的跟，都有直接关系嘛，他不知道嘛，(嗯)他就说，比如说他经常去清华，(嗯)他知道清华在国内是好学校，(嗯)但是他以为，就跟日本似的，出来大家大体上收入差不多嘛，他不知道，(嗯)所以我就跟他说在中国毕业学校不一样，出来的收入完全不一样嘛，(嗯)他听了说“啊，还有这样的事”，然后我说中国的收入差距比日本大得多，所以大家都想进好学校嘛
		2行を略した
2	R	那你跟他说的時候，是不是注意用敬語啊，或者其他方面也比较注意

番号	発話者	発話
3	CS20	基本上没有，我就跟他说“ <u>いいえ、違います、出身大学の違いによって収入はずいぶん違います</u> ”
4	R	就是用尊敬语
5	CS20	嗯，有时候尊敬语都没有，(嗯)我跟「苗字」先生，我觉得，为数不多的聊得挺好的几个老师，(嗯)因为他特别的やさしい，我就感觉跟朋友聊天一样，什么です，ます的，我跟他说的时侯就不怎么注意
6	R	就直接告诉他中国的情况不是他想的那样的
7	CS20	对，我就直接说“ <u>いいえ、違います。出身大学違うと、収入はずいぶん違います</u> ”，(嗯)我就直接跟他说明了

例 19 目標の設定が低すぎる(命題の逸脱の解消を優先させた調整)

番号	発話者	発話
1	CS24	((前略)) 你知道一上来这个女孩就说了什么吗，(嗯)就是这个女孩，她一上来我们那一组一凑到一起她就开始“ <u>みんな 「展示会名」 にいかにいいよね</u> ”、(嗯)“ <u>合格すればいい</u> ”<嗯>(<嗯>)、“ <u>パスすればいい</u> ”、(嗯)“ <u>単位とればいいよね</u> ”(嗯)就是那种意思，然后你这一句话就整个，你想大家就算有激情你这一句一讲出来就，整个就淡了嘛，而且日本小孩也没有激情到，一定要反驳你这句话嘛，但是我还是受不了，我当时就说了一句，我就说，“ <u>その目標でいくと一、単位取れなくない↑</u> ”<笑いながら>、(嗯)就那种，你不能目标定太低了嘛，(嗯)我们即使不定最高标准的目标你也不要，就等于一开始，一上来就泼了一盆冷水
		4 行を略した
2	R	嗯，你当时还是没忍住说了
3	CS24	<笑>对，其实我当时知道在日本的话，一般这种情况不要反驳嘛，(嗯)但是我还是觉得要说一下，不然大家都没干劲了

第4章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(日本語訳)

4.2.1.2の事例

例1 実情、インターアクション内の期待(目的)

番号	発話者	発話
1	CS20	((前略)) 中国語で書いた文章をもとに日本語に訳した文章の意味を指摘してくれる時がある、彼女(留学生支援室のチューター)は、その一段落の文章を読んで、(うん)私が何を言いたいのかが分からないので、(うんうんうん)なかなか直せないと思う時がある、(うんうん)昨日の添削の時も、私が書いた文の主語は曖昧すぎて分からないと言った ((後略))
2	R	その時はどのように答える↑、彼女のアドバイスにどのような態度をとっている↑
3	CS20	態度は丁寧じゃないといけないと思う、文章をなおしてくれているからさ、もしうまく直せないなら発表はだめになるかもしれないからさ、(うん)だから、まじめで、まあ、敬語を使うかどうかということはないが、ただし、丁寧な態度で、まじめに聞いている、いつもは ((後略))
4	R	態度、態度は丁寧だけど、やはり言うよね、たとえば、自分は、自分はこのような意味を示そうとしているのではなくとか
5	CS20	それ、これは当然だ、これは自分の発表に関わっているからさ、まずは自分の考えをちゃんと彼女に伝えなければならない、(うん)反駁すべき時は反駁する必要があるさ、彼女が指摘したその文は、実は、 <u>前の段落の内容と合わせてみれば、意味が曖昧になっていないと思うからさ(うん)、それで、その考えを明確にチューターに言った</u>

4.2.2.1の事例

例2 場面(ゼミ)

番号	発話者	発話
1	CS24	((前略)) そう、道端で、その(店)ほかのところで、露天店舗で売っているそれらの陶磁器、1、2元の、それらのとてもやすい陶磁器、私の感覚では、それらはにせもので、(うん)景德鎮の製品ではないと思っている、でも、「人名」の研究では、巨匠レベルの作品以外の、そのへんの工房、手工房で作られたものは、値段が安すぎると述べている、(うん)彼女のようなプロの目では、それらの製品も景德鎮のものになっている、(うん、そう)でも、私たちの目では、それはただの偽物だ ((中略)) <u>だから彼女は今の景德鎮の製品はもうだめになってしまっ、偽物だらけになっていると考えている、(お一)質が低いと考えている、この観点は、私たち(発表を聞いているゼミ生)はあまり賛同できないさ、私は“それは一、あなたたちは詳</u>

		しいからそう思うわけで、詳しくない人、たとえば私のように、陶磁器に関して、まったく、たぶん、そんなに、知識を持たない人は、まだ、景德镇という一、あの、ブランドという、景德镇の陶磁器は、あのう、すごいすぐれたものの一、思っている、とおもいます、どうでしょうね”と発言して、(うん)このように、ここで、話し合っていた
2	R	つまり、彼女はその一、その、景德镇の製品は、もういいものがあまり残っていないと考えている
3	CS24	そう
4	R	あなたはまだいいと、思っている
5	CS24	そう、まだいいブランドだ
6	R	まだいいブランド、(そう)あるいはまだいいものだ、(うん)それで、そのまま直接に、彼女に、自分の考えを示した
7	CS24	この問題、そう、(うん)この問題は、「人名」が言ったように、彼女は、(うん)景德镇は、それはもう本当に質の低いものだとか、なんとかと言っていた、(うん一)彼女のこの観点に、もちろん彼女は陶磁器のプロで、この分野について私たちより詳しいが、一つの観点としては認めるが、(うん)でも、私たちのような普通の人は聞いた後はやはり賛同できないと思ったから、彼女の観点到反駁した、とても激しい直接な反駁ではないが
8	R	やはり言い方などに気を付けていた
9	CS24	つまり、ゼミの時は、このゼミでは私が多く発言するほうで、異なる考えがあったら話すが、(うん)でも、ゼミの場で他人の研究に意見を言うときは、言うときはやはり気を付ける必要があると思う、(うん)普段の友達の間のおしゃべりのような場合ではないから、先生やほかの学生も聞いているからさ、(うん)直接にそれは正しくないなどを言わなく、私たちのような素人からみれば景德镇の陶磁器はまだいいものだと思っていると伝え、彼女に確認する感じで発言した

例3 インターアクション内の期待(言語ゲスト)

番号	発話者	発話
1	R	広告のデザインについて同僚と話していた時に、いっしょに検討したところがあったか↑
2	CS31	あった。(うん)週末までにキャンペーン用のウェブ広告のデザインを決めなければならないので、自分が作った広告のサンプルを出して一緒に話していた。(おう)最初は、使った文字のフォントと色について検討していた
3	R	具体的にはどのような話があったか↑

番号	発話者	発話
4	CS31	(笑いながら)今度のキャンペーンはいわゆる史上最大の割引を打ち出すということなので、自分がスーパーの大売出しのチラシに使われるフォントを使ってみて、インパクトを出そうとした。彼(JS)はその広告をみて、笑いながら“スーパーのチラシみたいね”と言った
5	R	あなたはどのように答えたか↑
6	CS31	このようなデザインを選んだ理由を説明したのさ、(うん)これについて彼は別にふさわしくないなどと言っていなかった。(おう)だけど、 <u>広告に使われている日本語の表現について、直す必要があると言った</u>
7	R	あなたも変えたほうがいいと思ったか↑
8	CS31	うん、書いた文は通じないことでもないと思ったけど、でも、やはり日本語の表現になると、彼らに言われた通りに変えればいい。(おう)日本語の表現のことは、自分はあまり口を出すことはしない、これを決める権力はやはり日本人側のほうにあるからさ
9	R	そうか、日本語のことが話題となると、あまり意見を言わない
10	CS31	<u>うん、言わなかった、意見はないね(笑いながら)、日本語のことなら日本人のほうに決めてもらう、そのように直せばいい、(うん)でも、デザインの面なら、さきほどの文字のフォントや色などについて自分のほうがいいと思う時は、自分の理由を提示する、一緒に検討する</u>

例 4 話題に関する情報の保有度(低い)

番号	発話者	発話
1	CS28	非常勤控室に、「苗字」先生とあってさ、(うん)すこし話していた
2	R	おう、どんなことを話していたかまだ覚えている↑
3	CS28	どんなことだったかな、まあ授業の話しを少ししていた、(うん)もうすぐ期末なので、期末試験の採点なども宜しくねなどと言っていた記憶がある、(うん)その後は、 <u>彼がこの前に僕が借りたビデオテープはまだ返していないようで、探してほしいと言っていた、(うん)来週の授業に使いたいという</u> ことで
4	R	あなたは返すのを忘れたか↑
5	CS28	いや、(笑いながら)僕の記憶ではすでに返したと思っていたのよ、(おう)封筒に入れて彼に渡した記憶だったからさ、しかもその控室だったと思っている
6	R	おう、それを彼に言ったか↑

番号	発話者	発話
7	CS28	そこまではっきりと言いきらなかった、自分の記憶はどうも封筒に入れて返したということだけど、もしかしてまだ返していないかもしれない、彼にそう言われたので、もしかして返してのは別のビデオテープで、彼が言ったそのテープではないかもしれないと思ったのさ、(うん)自分もよく覚えていなく
8	R	それでどう言ったか↑「苗字」先生に
9	CS28	はっきり覚えていないので、言いきれないのさ、(うん)だから、“この前に封筒に入れて返した記憶があるけど、自分が間違っているかもしれないし、またうちに帰ってから探してみる”と言った
10	R	おう、家で見つかった↑
11	CS28	(笑いながら)見つからなかった。だから返したかもしれない、また研究室で探してみる

例5 JSのネガティブ・フェイス

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略)) 私は、だったらまたその、バス会社に問い合わせしてみようかと言って、(うん)往復はぜんぶバスを使っていたのさ、(うん)だれかに拾われたかどうかを問い合わせる、(うん)でも、彼女(友達のJS)が問い合わせをしなかった、拾われてもごみとして捨てられたかもって、(うん)または、見えないからさ、新幹線の切符は、これぐらいのちっちゃい切符だからと言った(うん)((中略)) それで【【
2	R	】友達は問い合わせをしなかった
3	CS21	しなかった、その後私が、 <u>問い合わせしてみたほうがいいかも、もし拾われたらそこ(バス会社)へ取りにいけばいいからさ、(うんうん)彼女は、まず、拾われてもごみとして捨てられるかもしれないし、そして、拾われてもその切符はまた換金できるから、</u> といって、問い合わせをしなかった
4	R	あなたは聞いたほうがいいと思っていた
5	CS21	うん
6	R	その後はまた彼女に言った↑
7	CS21	<u>最初は言った、(うん)彼女は問い合わせをしなかった、その後はもう1回言ったが、(うん)この二つの理由を提示された、(うんうんうん)、もし本人が聞こうとしたくないなら、もうそのまましておこうと思って言うのをやめた</u>

4.2.3 の事例

例 6 日本の社会文化的規範、JS のポジティブ・フェイス

番号	発話者	発話
1	CS23	うん、彼が言うには、 <u>皆は教授かなんかでさ、先生とか、(うん)別にこれを払わなくてもいいって、(うんうん)どうも得をしようと考えているらしいのさ、(おう)、これはいけないじゃないか、日本ではお金はないのが別のことでしょ</u>
2	R	そう
3	CS23	と思っている
		4 行を略した
4	R	その時はどのように言ったかはまだ覚えている↑
5	CS23	私が思うには、これは、彼の名字は「苗字」で、(うん)、「苗字」さん、(うん)私は、“「苗字」さん、これはよくないでしょう、ほかの人はみんな、みんなは、(うん)割り勘をしている、私たちはこのように、これぐらいの、特別視、されると、よくないんじゃないですか”ってゆう、<ふうに>、(<おうー>)彼に言った、
6	R	言う時には何か気を付けているところがあったか↑
7	CS23	気を付けているところは、もちろんあまりにもストレートに言うとはよくないから、(うん)、彼の気持ちも考慮して、先ほど言ったように、“あなたもそう思わないでしょうか”のように、少し和らげめに提示した
8	R	でも、ここではやはり提示しようと考えた
10	CS23	うん、やはり大事だと思ったのさ、このようなことは明示的に提示しないと、(うん)中国人はみんな得することだけを考えていると思われるから、これが分からない、“常識がわからない”、(おう)常識わからないあって非常識にならからね
11	R	おう、この評価は非常に
12	CS23	うん
13	R	そのう
14	CS23	うん、とても大事だと、思っている

4.3.2.1 の事例

例 7 実情、場面(ゼミ)、明示的不一致応答

番号	発話者	発話
1	R	彼(JS)は日本語能力試験の成績で調査対象者を選択すると言ったよね↑

番号	発話者	発話
2	CS20	そう、日本語能力試験の成績を1種の客観的な判断基準にすると、考察しやすいと彼は言った、例えば、中国語の新聞を読む人の中にどのような日本語レベルの人が最も多いとかの分析とか、でも、彼は実際の状況が知らない、(おう)もともと私の調査対象者は学生に限らず、サラリーマン、アルバイトなどの人も対象だ。中国物産店でアンケート用紙を配った時に気付いたが、学生が少ない(おう)、家族滞在の人やアルバイトの人は多い、彼らは能力試験をうけたことがない、だから彼の言うどおりに選別すれば、もう調査ができなくなる
3	R	それを彼に伝えた↑どう言っていた↑
4	CS20	物産店で調査した時の実情を教えた、 <u>実際の状況はこのようなことから、能力試験の成績だけを基準にすると調査ができないと、(うん)説明した</u>
5	R	日本語の表現などに気付いたことはあったか↑
6	CS20	<u>自分の考えをはっきりと説明できることだけ、ほかのことを考えていなかった、ゼミの時はやはり自分の考えをはっきりと示す、(うん)、ゼミというのはみんなが思うままに発言でき、各人の研究について話し合う場だからさ</u>

4.3.3.3の事例

例8 常識、保有度<低い>、媒体(電話)；双方；婉曲

番号	発話者	発話
1	CS27	((前略)) <u>彼女(JS)は、あまり気にしなくていい、英語だけを教えればいいって、そのような話を、(うん)それで私がこう、責任感は大丈夫なの↑、このようなことはって思っていた(笑いながら)、一瞬、私がこのようなことを、考えていた、(うんうんうん)先生としては何でも管理すべきだと思ったのさ、(うん)それで、まあ彼女はそういったからそのまま聞いていた、私は、うん</u>
2	R	彼女に何も言わなかった↑
3	CS27	<u>電話で話していたので、そこまで詳しく聞くのもあまりよくないさ、本当に大丈夫かなどと確認しただけで</u>
4	R	あなたが思うには、高校進学の手導では、やはり五つの科目を全部おしえるべきだということ
5	CS27	うん、全部おしえたほうがいい、通常はこうになっているから、その時はとにかく聞いておいて、その子(手導する生徒)と会ってからまた話し合って決めればいいさ

第5章で用いられたインターアクション・インタビュー資料(中国語原文)

例2 遅刻ではない(実情)

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略)) 去了嘛(嗯), 大概, 可能 6 点也过了吧, (嗯嗯)然后那个经理在那边就看到我了, 因为那个时间还没有进レジ嘛, 还在那里走来走去,(嗯)她说, 后来她就问我, (嗯)到九点多的时候她就问我, 她说“ <u>你今天迟到了吧</u> ”, (嗯)“ <u>为什么那个时候在那里走啊</u> ”, (嗯)我就说没迟到, (喔)我说不是迟到,... <u>我说是那个男的让我去的</u>
2	R	喔, 跟他换一下
3	CS21	跟他换一下, (喔)但是后来又说不行不行, 所以又回来了, (喔)我就解释了一下这个事情
4	R	那你解释的时候没有特别想什么↑
5	CS21	没有, 我就想着跟她说没迟到嘛, (嗯)因为本来就没迟到, 是那个男的让我过去接一下, 所以正好没来这边的レジ嘛, (喔)这个マネージャー很好说话的
6	R	喔, 是吗↑
7	CS21	因为从我研修的时候开始就是她一直教我嘛, 算是很熟的, 比其他的那些负责的要好说一些

例4 先にタイムカードを切って退勤を記録すべきだ(会社の規範)

番号	発話者	発話
1	CS29	然后他, 大概收拾了之后, 然后, 也就是到 8 点, 15 分, (喔)因为店里的规矩是, 到了规定时间你工作没做好的话, 先打卡下班再把工作做完, <u>你, 就是说, 很多人就是说, 工作没做完的话, 他不打卡, 他只是把卡这样放着, (嗯)他做完了再打卡, 就是说有一种残業这样的感觉, 但是我自己的很是不喜欢这种感觉...我让他先把卡打了</u>
2	R	喔, 这个你也是直接说了
3	CS29	对, 这个是公司规定, 我作为レベル高的人有这个权力嘛, (嗯)然后, 他说也可以吧, 看他脸上就, 多多少少有一点, 不高兴吧, <笑い>, 但是, 但是必须得做, 这是, 可能对我来说, 是和别人不一样的地方, (喔)我就说,

		然后，这就是交接的时候的一个问题吧 ((後略))

例 5 新しい関数を導入すべきだった(仕事の規範)

番号	発話者	発話
1	R	那你昨天在检查的时候里有没有发现问题呢↑
2	CS25	昨天，昨天有 2 个小问题，(喔)就是 ((中略)) 我自己也运行了 2 遍， <u>确定是他写程序的时候没有把那个新的参数导进去</u>
3	R	所以那个程序就运行不正常
4	CS25	对，我就把他叫过来，给他看我自己运行的结果，(喔) <u>就跟他说你这个不对，没有改这个参数</u>
5	R	这个你就是直接告诉他
6	CS25	<u>对，直接告诉他，(喔)就告诉他哪儿哪儿错了</u> ，然后他就看了一下，说知道了，就去改
7	R	这个他也没有什么意见
8	CS25	没有，这个一看就明白，他一看就懂了，(喔)就说知道哪儿错了
9	R	你说的时候也没有注意日语的用法什么的
10	CS25	这里没有，因为确实是他错了，我比他资格要老嘛，(对)比他经验要丰富些，那就直接告诉他错的地方，因为这个是工作上的事情，把问题直接说清楚说明白，解决遇到的问题最重要嘛，(喔)我跟他们说的时候很直接，我也要他们跟我，(嗯)跟我说的時候也是直接说，有什么说什么

例 6 餃子はただである(JS のインタレスト)

番号	発話者	発話
1	CS32	((前略)) 然后，就是好像有个人还，就是我们送那个东西嘛(嗯)，他还给我们小费(嗯)， <u>给他两只饺子他还一定要给我们 200 块钱</u> ，(嗯)，然后我们就说，不要嘛，(嗯)说这是不行的， <u>然后他就一定要给我们</u> ，(嗯)然后，走了之后，过来一会儿他过来又来买 3 只包子好像，(嗯)6 只饺子还是什么，(嗯)，反正我们又，反正当做那个东西我们又送他一只嘛， <u>他又给我们 100 还是 200 的小费</u> ，然后【【
2	R	】】你们怎么，嗯嗯，你说

番号	発話者	発話
3	CS32	然后就，我们就觉得不太好嘛，(嗯)白送人家东西还，还给我们小费之类的，(嗯)就让一个男生跑过去，把钱还给那个人嘛
		2行を略した
6	R	你们是，怎么样跟他说明的呢？就是他一定要给你们那 200 块钱，小费什么的，你们说不能收
7	CS32	好像，我就这么直接地，“ <u>サービスですから、それはいけませんよ</u> ”，就这样说，好像<笑いながら>

例 7 このような依頼は受け入れられない(CS のネガティブ・フェイス)

番号	発話者	発話
1	CS20	他跟我说，“ <u>「苗字」さん(CS20)、あと皿も洗ってください</u> ”，这我一听就来火了，我就把他叫出来直说了、(嗯)我就跟他说，“ <u>这个本来是你应该做的，不是我的任务，你看人家「苗字」さん跟你一起进店的，他现在都可以一本回し了</u> ”((後略))
2	R	你就这么直接跟他说了
3	CS20	对，不说不行啊，不说的话我待会儿干活更累
4	R	你觉得跟他直说没关系↑
5	CS20	那有什么，(嗯)他是个新人，比我小，还是个高中生，他不能跟我这么下命令 ((後略))

例 8 終えなかった夜勤の仕事を完成すべきだ(実情、CS のインタレスト)

番号	発話者	発話
1	CS29	然后 8 点钟进去之后，因为就是昨天在的，嗯，昨天到早上的不是我们的那个キャプテン，(喔)是一个，算是一个レベル比较低的人，(喔)然后就在那儿，然后就是比较的，就是比较的，他就还没，根本就没收拾好嘛
2	R	嗯，他是昨天晚上，啊，前天晚上
3	CS29	前天晚上，10 点到昨天早上 8 点，然后我进去的时候，交班的准备还什么都没做，(喔)，水槽也没洗，然后晚上进的肉什么的也没有整理好，然后我看了就心情不好嘛，(嗯)，我就问他为什么这些工作都没有做完， <u>他就说昨天晚上很忙，有点乱</u> ，(嗯)我就去看了一下电脑，因为可以查到他当班时候

		的营业额，(嗯)营业额并不高，也就是说他其实根本就没有那么忙，(喔)我就，带着一点，也不是凶他，我就说，(嗯)晚上不至于这么忙吧，<u>你给我收拾好了你才能走</u>，(嗯)然后，他就跟我说，他说知道了知道了，“はいわかりました、はいわかりました”，(嗯嗯)就这么，因为我的レベル比他高嘛，(嗯)就这个对我来说，如果他不收拾好的话，接下来我会很累，我会非常累，所以我得叫他收拾好了，然后才能走

例 9 わざと名札を隠すつもりではない(上下<社会的役割：客 - 店員>)

番号	発話者	発話
1	CS21	当时我是扎，头发是这样歪着的嘛，(喔)那天就是这样歪着的，因为也不记得要去梳头发了，赶过去就在上班，就扎了个歪的，头发在这边，(喔喔)然后，不就把我的那个名字可能遮到了还是怎么回事啊，(喔)可能就算是遮到了也就是遮到一点儿，(嗯)因为我头发蛮长的，(喔)然后她就，她就看到了嘛，她说，“<u>为什么要用头发把名字遮起来，这样是不行的</u>”，然后说，“<u>想隐瞒是不行的</u>”，(嗯)然后就很凶嘛，她就在说，(嗯)说得我就很，那个啊，(嗯)我说，“<u>喔，不好意思啊</u>”，我说，“<u>不好意思啊</u>”(嗯嗯)然后就把头发放回去了啊，放回去就给她看嘛，我的名字
2	R	你听到她说你把名字牌遮住了，这样不行的时候是怎么想的呢
3	CS21	其实我是无意的嘛，不是有意的要用头发把名字牌遮住，正好昨天忘记梳头了，(嗯)但是对客人的话，还是不能这么直接说，(嗯)而且确实可能有一点遮住了，我自己也没有注意，(嗯)所以我就ちゃんと謝った
4	R	嗯，那她后面看到以后还说了什么没有呢
5	CS21	她的态度反正感觉就不是很好，我给她看了名字牌以后她还在说这样不行，(嗯)说了很久
6	R	那你也没有跟她解释什么的
7	CS21	不应该遮住的嘛，因为是客人，所以也没有解释说我不是故意的或者怎么样的了，(喔)就说了句“すみません”，就把头发放到后面去了

例 11 このような日本語は通じないわけでもない(上下<職位：課長 - 社員>、日本語の言語
ゲスト、回避)

番号	発話者	発話
1	CS26	星期四给他看的时候，他说大体没问题，你看看再怎么写得能让别人看懂，就是没有开过这个会的人，第一次看这个会议记录的人也能明白，那我说就又改了，昨天我改完之后就又给他看了，他说你这个还是中文化，还是要改，(嗯)比如说 ((中略)) 他说这些都日文中没有的，日本人不用，他说，要再改
2	R	喔，那你怎么说的呢↑
3	CS26	其实不是没有的，因为我都是用电脑打出来的嘛，就是都没问题嘛，那些词都是直接就出来了，(喔)它不是没有出来，出来了，证明是日文中有的嘛
4	R	喔，那你跟他说了没有呢，就是这些词其实有
5	CS26	这个我说了，不过课长说要改，那就改了，(嗯)因为他说日本人看不懂嘛，就是说我那些词用在一起，就像中文一样，那日语的话他日本人看不懂那就改了，他说他因为在中国呆过，(喔)所以他还能明白，不过其他不懂中文的日本人看不懂<笑いながら>，那我就改了嘛，改成什么 ((後略))
6	R	那你觉得自己的写的这些日语其实也可以
7	CS26	我是觉得也可以，因为用的词语电脑里面都有嘛，(嗯)我是想写得简洁一点，因为用那个汉字的话字就少嘛，你用日语词语的话有假名什么的字就多了嘛，(嗯)他说一般的日本人看不懂我写的日语，要改，那也不用说什么改就是了

例 12 京都の観光は計画を立てるまでする必要がないかも(上下<年齢：年上 - 年下>、情報の保有度<低い>、親疎<親しくない>)

番号	発話者	発話
1	R	喔，那她给你什么建议没有呢↑就是去京都旅行的计划什么的
2	CS21	喔，她说那个観光バス嘛，(嗯)，她说可以利用那个バス的一日游什么的， <u>这样就是，(嗯)第一次去玩的时候先看一看嘛，看有什么地方是自己感兴趣的，然后就可以做计划，第二次去的时候就去这些自己感兴趣的地方</u>
3	R	那你觉得她的这个建议怎么样呢↑
4	CS21	她的这个建议，(嗯)但是我觉得，应该去一次就差不多了，当然啦，也不准，可能还有第二次去的机会，(嗯)不过就现在来看的话，就只有一次嘛

5	R	喔，那你跟她说了没有呢↑
6	CS21	这个没有说，(喔)不过我就在想啊，(嗯)就是我也不是什么地方都要看到嘛，就看看那些有名的地方就可以了嘛，(嗯)有这么多地方要看吗，我就在想，还要去两次，做计划什么的
7	R	这个也没有跟她说↑
8	CS21	没有说，因为我自己也没有去过京都嘛，(嗯)不知道到底是个什么样子的，万一有那么多要看的的地方呢，(嗯)所以我就没说嘛，而且，我跟她，因为她有差不多 70 了吧，就是跟她在一起聊天还是很轻松，(嗯)不过，就是好像还不是那么熟嘛，因为我认识她大概 2 个月，大概就是见了 3 次面吧，(喔)所以我跟她说话的时候还是比较注意的嘛，(喔)有时候还用敬语什么的

例 13 これはただの言い訳だ(経済的規範、上下<社会的役割：取引先 - 社員>)

番号	発話者	発話
1	CS30	((前略)) 正好呢，我们有一个客户叫「会社名」産業，它是，跟印度也，也有关系，(喔)也有产品销往印度，还从印度买产品过来，(嗯)那么它就说，怎么样，我们一起把产品卖过来，“いっしょにやあって、いっしょに提携して、一緒にやろうか”，(嗯)就是这个依頼きてて、我们说行吧，然后就经过了很多次回合のうちあわせ、最后我们就提出了方案，打算合作在印度建一个合资工厂，((中略)) 然后昨天他们就是進捗状況を報告しに来た
2	R	喔，就是关于你们的那个方案
3	CS30	那倒还没有到这一步<笑いながら>，(喔)他们的社长过来了，他们这个项目的主要的负责人，他们公司虽然是一个日本公司，但是项目的主要负责人是中国人，(喔)他们社长就说，“ <u>印度公司说中国人，我们不喜欢中国人，我们跟中国人关系不好，我们曾经有过战争</u> ”，然后就会说“ <u>せっかくね、御社に声をかけちゃって、結局こういう話になっちゃって、もうあきらめるしかない、中断するしかない</u> ”，(喔)“ <u>申し訳ないです</u> ”，其实我不这样认为，其实这只是一个借口，言い訳だよ、(嗯嗯)他们公司就是想自己干，(嗯)那你说中国人不行，换一个负责人就可以了嘛，“ただの言い訳だよ，そんなことを思うんだからもう勝手にやろ”、当然了我不能直接跟他说
4	R	不能直接跟他说
5	CS30	当然，我只是说，“ <u>あ、分かりました。残念ですね、また機会がありました</u> ”

		らいっしょにやりましょう”，至于我自己心里实际是怎么想的，那肯定不能跟他说，因为你不能让客户难堪嘛，你得考虑到对方是客户，还是要给他们面子
6	R	喔，你就说明白了，没说那个其实你们是想自己做什么的↑
7	CS30	那这个不能说＜笑いながら＞，主要是他们，この話あなたたちから持ち込んだじゃ、(嗯)いまさらだめだというなよ、普通はいうなよ、(对对)，因为在这前为了这个项目，我们开过好多次会了，方案都做了好几个，你现在说不行，这不是浪费我们时间嘛，(嗯)当然这个我只能心里这么想，不能这么直说，我只能再やんわり地跟他们说，言うべきところはやはり言う
8	R	你还跟他们说了其他的是吧↑
9	CS30	对，我这个说完以后，就是说很遗憾，希望下次还有机会以后，他们社长说他们也没想到印度公司是这样的意见，我然后就やんわり地跟他们说了 ((後略))

例 14 見積価格はせいぜい 30%を上乗せるまでだ(実情、上下＜職位：部長 - 社員＞)

番号	発話者	発話
1	CS21	把利润应该加多少上去(嗯)，跟我们那社长，喔不，跟我们那部长在谈
2	R	嗯嗯嗯，你们怎么谈的还记得吗↑
3	CS21	怎么谈的↑
4	R	嗯
5	CS21	怎么谈的，我的意见就是说，比方说有些产品在进价上加百分之十，甚至百分之三十的话可以，那有些产品的话，因为，(嗯)考虑到别的商社的卖的价格，你价格方面加得太高的话，(嗯)就没有竞争力了。有的产品就只能加百分之十，百分之二十
6	R	嗯
7	CS21	然后他就说， <u>有些人根本就不看，比较商社的价格(嗯)，我们公司的原则是，没有在百分之三十的利润的话是不做的，加价百分之四十不算贵</u>
8	R	喔，那你呢，他说要保证营业额所以要提高价格，你也是这样想的↑
9	CS21	((前略)) 但是我们这个公司的话该不该保持这个利润率，一直保持这个利润率的话，是不是还有生意做，这个应该是一个值得考虑的问题
10	R	喔，那这个你跟部长讨论的时候说了这些

11	CS21	没说没说(笑), 我只是说加百分之三十吧, 百分之三十的应该是合理的, (嗯) 因为他说要加百分之四十, 我说百分之三十比较合适, 百分之四十的话, (嗯) 就超过其他公司定价了...
12	R	那部长怎么说的呢↑
13	CS21	他的意思还是说要加百分之四十, 让我按照这个比率写计划书
14	R	那你还是按照部长说的百分之四十写了计划书
15	CS21	对, 我就按照他说的写计划书
16	R	那你觉得百分之四十合理吗↑
17	CS21	不合理(笑)。不过既然部长这么说, 公司里面也是这么一个要求, 那我就按要求写咯。其实客人肯定会比较我们公司和其他公司的报价, 部长应该也知道如果价格百分之四十的话, 会比其他公司贵。但是既然这么决定了, 我就按照这个重新写了计划书
18	R	就是你说最多加百分之三十, 加百分之四十就是超过了那个价格太高了, 你是怎么想的↑
19	CS21	我只说了如果是百分之四十的话, 要比其他公司贵这个事。我在说之前就想好了, ...只说价格高这个事实, ...如果部长反对, 我就不说了
20	R	具体是怎么说的呢↑
21	CS21	我想想, 就是, 我只是说那个事实, (喔)“もし 40 パーセントのせるなら、...えー、他社さんより高い、といわれるので”(嗯), “やはり 30 パーセントのせたほうがいいんじゃないですか、と思います”
22	R	这里你提了一个意见, 一个百分比的问题
23	CS21	这个本身的话, 只是说一个事实吧, 其实(喔)

例 15 私が作った関係図は正しい(実情、上下<勤続年数：先輩 - 後輩>)

番号	発話者	発話
1	CS26	((前略))3 年那个人, (嗯)他用, 他说, “那个资料”, 他说那个资料, 那个, 他说那个资料可以, (嗯)然后说, 他说他要把那个资料, (嗯)再改一下。拿到另外一个客户那边去。(喔)他不停地在改。然后他在改的时候, 他就在问我, 他说“你这, 这个图”就是我做那个的关系图嘛, (嗯)“你这个图, 方向指向有问题”, 他说, 我做的那个图里有客户, 我们, 还有媒体, 说表示这

		<u>三者之间关系的箭头指向有问题。</u> (嗯)我想说怎么可能有问题呢，这张图我自己检查了好几遍，然后带我的这个人也确认了，昨天做演示的时候也用了这张图没有问题，怎么到了你这里就有问题(笑いながら)
2	R	这些想法你都告诉他了吗↑
3	CS26	这个不能直说啊，...所以我就问他，...“真的吗↑”然后就跑过去看他画的图，...看是怎么一回事，他把各个主体的位置改动了，就是客户和我们公司的位置，(喔)，所以看起来就不对了
4	R	喔，就是，对调了还是什么↑
5	CS26	他是，对，它是，我们，(嗯)公司和客户，还有那个流通，流通就是说物流，(嗯)就是说业务，我们和「会社名」，还有比方说，还有我们的那个，销售，还有客户，(嗯)就是最终的客户，消费者。他把那个位置换了一下
6	R	喔，那就很(乱了) 【
7	CS26	】(那就)肯定乱了
8	R	那中间那些箭头，箭头什么的方向都没换，是吧↑
9	CS26	就那些箭头他没换，(喔)他没换，他就乱了。他乱了他就说我，说我有问题，然后我说“呃，是吧↑我说你这个地方，我说那个其他地方可能也变了，(嗯)嗯)我说，他说“喔，对呀对呀，那算了。”他说反正我已经改了，(嗯)我已经都改了，无所谓了，(嗯)他就是这么说
10	R	你说的时候是怎么想的呢↑
11	CS26	因为他是前辈，所以我也不能直说是你自己把图画错了什么的嘛，(嗯)“可能，这个位置改动了，所以整个的结构就变了，我就这样，不太肯定的这种语气跟他说了我的想法

例 17 営業担当者を減らしても意味がない

(CS のインタレスト、上下＜職位：部長 - 社員＞、場面＜公的＞)

番号	発話者	発話
1	CS19	((前略)) 然后就是讲人员的问题嘛，(嗯)就是如果说还是达不成的话，(嗯) <u>人员的话就会，又会变动</u> ，(喔)嗯
2	R	这个倒是你们都是，是没有意见呢，还是没有说意见呢
3	CS19	<u>有意见没说</u>
4	R	有意见没说＜笑いながら＞

番号	発話者	発話
5	CS19	你想想吧，营业，人员的话会越来越少的吧，(喔)前两天又减了几个，(喔)这一期的话我们就减了大概，2个人左右吧，(喔)营业如果不好，然后你(嗯)从事的销售人员如果还减的话，那怎么样提高营业额呢↑(喔)你减了一个人也不是说从公司里剔出去了，只不过说从公司一个部门，从营业部门，销售部门转到业务部门去了，(喔)没有什么プラス的东西，(嗯)当然这些只是心里这样在想，但是嘴上说不出来
6	R	喔，这是因为常务在场是吧↑所以你没说
7	CS19	不只是常务，常务和部长，(嗯)都是，都是，自上而下的指示，(喔)不是自下而上的，能够，能够提出意见的这样的场合，(喔)嗯
8	R	这个的话，是你们公司的一种，怎么说呢↑企业文化↑就是从上往下比较好，但是从下往上提意见的机会很少
9	CS19	对，没错，开会的时候就只是听指示，提不了意见
10	R	那你和你们部长还算接触得比较多的，是不是不一样些
11	CS19	嗯，是不一样些，因为只有2个人的时候好交流嘛

例 3 関連性を示す言語表現の追加は必要ではない(実情、上下<職位：主任 - 社員>、インタラクティブ内での期待<目的>、JS のムード)

番号	発話者	発話
1	CS26	对，我觉得就是没有必要表现那个承上启下的这个，在里头。因为完全是两件事情，我的脑子里面一直是这么认为的，(喔)((中略)) 然后，他说，然后那个人，我估计那个人脑子可能就是说，他，他一直发烧嘛，(嗯)他有点糊涂了，(嗯)他就，他说“ <u>但是在会议里面，那个人，说的那句话，是有承上启下的意思的，(嗯)你把那个话必须要说出来</u> ”，(嗯)我就觉得没有必要把那个话说出来嘛，因为我就在现场，参加了这个会议的嘛， <u>我说对方社长的这两句话，说的是完全不同的内容，所以不是有关联的内容</u> 。
		4行を略した

番号	発話者	発話
6	CS26	但是那个好像我就不知道他想表达什么样的意思，就是说，真的是需要承上启下还是，这两个事情确实是有关系，我在，看的上，我觉得这两件，这两个项目是完全没关系的项目吧，(嗯)而且，但是他，他想表达的那个意思是不是说，虽然这两个项目没关系，也是要，有一个，在会议当中有一个，承上启下的一个，一个一个，文書在这里
7	R	喔，在会议记录里面要有所体现
8	CS26	对对对
9	R	那最后你搞清楚没有呢↑
10	CS26	最后我觉得他也是这个意思，(嗯)他因为是主任级，我也不好太直接地去反驳他，而且他因为，也是，你想他发了烧，我也没办法去跟他争，已经花了一个多小时跟他讲那个，主要是要把会议记录发出去，我也不想再深的，去探讨这个问题，所以我就说知道了， <u>按他那个想法加了一段承前启后的内容</u>
11	R	他那天发烧
12	CS26	对，他那天一早就说“我今天发烧，心情不好，大家小心点”什么的<笑いながら>，还是不要刺激他的好

例 19 クライアントとの打ち合わせは来月からだ

(実情、上下<職位：課長 - 社員>、JS のポジティブ・フェイス、場面<公的>)

番号	発話者	発話
1	CS26	那开会的时候呢，课长还说了一下目前我们开发的客户的情况嘛，(嗯)他有一个客户的情况没说对，就是本来应该是下个月才跟他们谈具体的合作计划的，他可能搞错了， <u>说是下个星期就要开始</u> ，然后我们就很紧张<笑いながら>
2	R	那你跟课长说了没有呢↑
3	CS26	说了，因为这个我都记在本子上了，我记得我还特地拿出来看了一下，应该是课长他记错了
4	R	你是怎么说的呢↑
5	CS26	这个因为是大家都在，开会的时候嘛，所以我也不能直接说课长说错了， <u>我反正就先先赞成，说是啊，这个计划很重要什么的</u> ，(嗯)然后再说， <u>其实好像是说的下个月开始吧，就跟他确认，用提问的方式</u>

例 21 だれでもそのように言うはずだ(常識、相手の P.フェイス、回避)

番号	発話者	発話
1	CS32	((前略)) 然后我就说, 嗯, 我好像就说, 希望你妈妈身体赶快好起来, (嗯嗯) 我就说, 嗯, 那时是说, “お母さんの病気はやくなおれるように”, 我就这么说嘛, 然后, (嗯), 我觉得有点怪, 我就问一下老板说, 我这么说对不对, 然后老板就说, “嗯, 这样也, 也说”, 老板就说, (嗯)嗯, 他用了, 他是, 然后他想了一下, 他说“お母さんの病気がなおればいいね”, (嗯)他说, 他就这么说嘛, 嗯, 然后我就说, 然后我就按老板那句话再说了一遍
2	R	喔, 你自己觉得那个说法, 可能不一定很好<的样子>
3	CS32	<对对对>, 我觉得那句话, 有点, 有点怪嘛, 就问一下老板看对不对, 嗯, “也没关系, 也, 这么说”, 然后, 嗯, 我说完了之后吗, 那老板就说, <u>你比日本人还有, 还有那个什么, 还有爱(笑)</u> , 他就这么说嘛(嗯), “ <u>日本人より愛がありますね</u> ”, 他就是这么说嘛, (嗯), 然后我就, <u>我好像也没说什么...</u>
4	R	喔, 为什么没说什么呢, 这个
5	CS32	不过我觉得他那句话, 很, 很, 滴汗啊, (喔), 就是, 什么叫比日本人还有爱那样子, 中国人难道就【【
6	R	】】难道就没有爱是吧(笑)
7	CS32	(笑)然后我就想说, 一般人都会这个说吧, 我想这么说, 这也没有很有爱或者怎么样, 一般人都, 都会这样做的, 我就这么想的
8	R	喔, 你跟他说了
9	CS32	没
10	R	喔, 没说(<笑>), 你觉得不能说还是怎么样
11	CS32	那他这么说, 那我就, 我觉得, 那我就, 承受了吧, 他就这么说, (喔)那就, 我就接受了吧

例 22 個人登録で年齢制限をかけられる(実情、保有度<高い>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS26	((前略))所以我就、(嗯)嗯、以前发过那个, 那个「商品名」的样品嘛, (嗯)因为正好第 4 周空出来了, 所以就想看能不能拜托把这个缺给补上, (嗯嗯)我说了以后呢, 他们就说这个不行, (嗯)这个这个, 因为这个客户说过只能面对面的发放, (うん)就是说不能随便发放, (嗯)我的话, 但是那个、因为有

		年齢限制的嘛，就是说，就是有年龄限制也没关系嘛，(嗯)把那个机器【【
2	R	】】 嗯，那个时候你是怎么说的呢↑
3	CS26	说的是，年龄，你是说当时的内容是吧↑
4	R	对，其实机器可以限制年龄，发放样品的时候可以利用这个机器这些内容的时候
5	CS26	我，我说的是，那个，“ <u>あのマシン</u> ”、我们把那个机器叫做マシン嘛(笑)、(哦) <u>“あのう、あの機械は、実際は会員登録できる一、(哦)ので、会員登録によってですね、会員の属性がとれるんで、属性は、年齢制限をかければ、(嗯)20代の、以下の人は一、あのう、抽選の形で一、落とすことができるという、方法もある、(うん)なあっていう、考えています、(嗯)我就是这么说的 ((後略))</u>
6	R	跟他们说的时候是怎么考虑的呢↑
7	CS26	我就只是介绍了自己的想法，(嗯)他们对那个新机器不是很熟，我因为和课长负责这个机器的租赁的销售，所以对有什么样的功能很熟悉，我就告诉他们，其实那个机器可以登录个人情报，然后可以根据登录情报来甄选对象
8	R	说的时候对于说法什么的有注意的地方吗↑告诉同事啊，还有其他部门课长的时候
9	CS26	说法方面没有什么特别注意的地方，只是告诉了他们我自己的想法，就是把那个机器的功能跟他们说明清楚就可以了，其实是可以设置年龄限制的这件事情，当时的主要目的就是这个的说明

例 23 出身大学によって初任給がすいぶん異なる(実情、親疎<親しい>、保有度<高い>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS20	((前略)) 他一开始不知道说在中国学校不同的话出来的那个工作呀，(嗯)收入什么的跟，都有直接关系嘛，他不知道嘛，(嗯嗯)他就说，比如说他经常去清华，(嗯)他知道清华在国内是好学校，(嗯)但是他以为， <u>就跟日本似的，出来大家大体上收入差不多嘛</u> ，他不知道，(嗯)所以我就跟他说在中国毕业学校不一样， <u>出来的收入完全不一样嘛</u> ，(嗯)他听了说“啊，还有这样的事”，然后我说中国的收入差距比日本大得多，所以大家都想进好学校嘛
2	R	那你跟他说的時候，是不是注意用敬語啊，或者其他方面也比较注意

番号	発話者	発話
3	CS20	基本上没有，我就跟他说“ <u>いいえ、違います、出身大学の違いによって収入はずいぶん違います</u> ”
4	R	就是用尊敬语
5	CS20	嗯，有时候尊敬语都没有，(嗯)我跟「苗字」先生，我觉得，为数不多的聊得挺好的几个老师，(嗯)因为他特别的やさしい，我就感觉跟朋友聊天一样，什么です，ます的，我跟他说的时候就不怎么注意
6	R	就直接告诉他中国的情况不是他想的那样的
7	CS20	对，我就直接说“ <u>いいえ、違います。出身大学違うと、収入ががずいぶん違います</u> ”，(嗯)我就直接跟他说明了

例 25 先生の説明は正しくない(実情、場面：講義)

番号	発話者	発話
1	CS27	啊，有有，星期三的时候好像跟老师说了一件什么事儿来着
2	R	昨天，是吧↑
3	CS27	嗯，昨天。(喔)什么事儿来着，老师说我就觉得他说得不对，然后我直接就， <u>就给他纠正了</u> 。
4	R	喔，是什么事儿呢↑是怎么跟他纠正的呢↑
5	CS27	对啊，我直接就说了，我就说(嗯)“え、でも、でも”...我就说， <u>但是应该这样吧，这样的</u>
6	R	喔，是应该这样的，什么什么“でも”这样的，也是什么什么刚才你说的“じゃない”这样的吗↑
7	CS27	不是不是不是，(喔)我就直接说“ <u>だと思ふ</u> ”这样的，(喔)我觉得应该是这样， <u>然后，因为什么什么什么，(嗯)就是把理由说了，(喔)什么事来着，什么事儿来着，(嗯)反正就是，就是实验，就是，反正，反正是做实验的时候</u>
8	R	就是做实验的时候你给老师纠正了
9	CS27	嗯
10	R	那其他的时候你也有跟老师纠正的时候
11	CS27	嗯，有，我觉得他们日本人都不太怎么想纠正 ((後略))
12	R	那你说了以后老师怎么回答的呢↑
13	CS27	老师说，“对呀，是，是这样的，你想的这一点也对，但是”(嗯)什么什么的，然后老师还是说他的那个，意见嘛，(嗯)然后我就明白了，我就听懂了

例 26 病院のやりかたは正しい(上下<年齢：年上 - 年下>、相手の P.フェイス、回避)

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略)) 她自己说完就自己在那里笑, 说医院不告诉她, 我就“喔”了一声, 我说医院可能也是怕有什么危险的情况发生, (嗯)所以可能就没说, (嗯)让你问她的家人。然后她说有时候她去也不想让别人的家人知道, (喔), 我就没说了, 就问她是不是日本现在医院都是这样的
2	R	那你对她返回说的话是怎么想的呢 ↑
3	CS21	我就觉得她的想法还是很坚定的吧, (嗯)就觉得没必要这样嘛, (喔)可能就觉得
4	R	(.)那你自己呢, 你自己的想法也坚定吗 ↑
5	CS21	我觉得这种方法虽然会有不方便的地方, 也挺, 我觉得就是也挺好的, 就是这种对个人隐私的尊重也是挺好的, 我是觉得
		2 行を略した
8	R	她跟你说有时候去医院不想让病人的家里人知道, 医院的做法过分了以后, 你没有再跟她说自己的想法了吧, 那个时候你是怎么想的 ↑
9	CS21	对, 没说了。因为感觉她认为医院就是不好, 一直在强调这一点, 所以我也就没说了。其实这个的话, 如果是日本人的话, (嗯)就是同龄人的话, 我会跟说得更多一点, 我表述的时候我的立场会更鲜明一点
10	R	喔, 同龄人
11	CS21	对, 我会把我有什么样的担心什么的, 我都会想着去告诉对方。(喔), 最开始我说可能医院方面也有自己的考虑的时候就是这么直接说的, 但是因为她还说医院不好, 总之是觉得人家不好的样子, 另外她年纪又比我大很多, 所以我觉得还是不再往下说比较好一些, 如果是同龄人的话, 我会举例子, 跟她讨论一下。

例 27 機器の操作方法是間違っている(上下<年齢：年上 - 年下>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS22	她拿来一个新的装置, 就是一个什么机器, (嗯)然后她说应该这样操作的, 实际上她可能也不知道, 我估计, (嗯)然后我看了一下觉得可能不是她说的那样嘛
2	R	喔, 那你告诉她了没有呢 ↑

3	CS22	说了,我说“啊,原来是这样”,我说“ <u>なるほど,我原来还以为应该是这样的</u> ”,(嗯)其实是我认为应该是这样的<笑いながら>,但是我是以这样的方式来说的,(嗯)然后她就说“呃,好像是你说的这种方法比较对啊”,(喔)她就这样说,然后我就说“啊...其实我也不太知道”,(嗯)“ <u>好像都可以</u> ”(嗯)自己就这样说,因为她是主婦,比我年纪大所以我没有直说,是这么说的
4	R	跟其他的店员也都是这么说
5	R	跟年轻人的话,有比我年轻的,比我小一点的,跟她们说,现在已经很熟了,会用简体,然后我一般就会直接说,“ <u>什么什么じゃない↑</u> ”,那应该是这样的话,那我就直接这么说,跟她们就会更随意一些,整个都不同的

例 28 一からマニュアルを考える必要はない(上下<職位:課長-社員>、場面<公的>、相手のPフェイス、保有度<低い>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS26	那天开会呢,正好前几天发生了一个事故,是比较严重的事故,就是((中略))因为这个新的服务还没有完全定下来一个具体的流程,日语叫マニュアル嘛,(嗯)然后昨天是截止日期,那就基本定下来,比如接到订单后应该这么做,谁来负责什么的,那这次是那个广告负责的人出了问题,那就是主要就是他在汇报嘛
2	R	嗯,那你没有参与到那个汇报里面去↑
3	CS26	我是新进去的,所以主要是听嘛,(嗯)我就只问了课长,(嗯)就是说因为我们卖的是新的媒体服务,大家就不清楚应该怎么做还好,(嗯)那我就想,那些传统的媒体是怎么做的,比如 ((中略)) 那他们就没有问题嘛, <u>我就问课长那其他的媒体方面是怎么做的,怎么处理这些问题的</u>
4	R	那你是想提出自己的看法,还是只是想知道其他媒体的做法呢↑
5	CS26	我其实自己也不是很清楚,所以就问课长其他的媒体的做法,然后他就告诉我说,是怎么的,(嗯)其实我是在想,就是大家现在还是搞不清怎么安排流程好嘛,就一直在讨论,其实就参照其他的那些传统媒体的方法就可以了嘛
6	R	喔,其实你觉得没有必要在讨论这个マニュアル是吧
7	CS26	我就是觉得不用从头开始定方案,就先参考现有的媒体的经验嘛,那我等课长回答以后, <u>就说那其实我们也可以参考这些经验的</u> ,那课长就说是可以的,

		还有一个同事也说可以
8	R	喔，你其实还是想提出自己的这个看法，是吧↑
9	CS26	对，但是我自己本身不是很清楚这个事情，所以先问问，然后再ついでに这样的说出来要好一些嘛
10	R	为什么要好一些呢↑
11	CS26	因为这个首先是课长提出来要讨论的，我是新人嘛，那我是什么他们都会怀疑，不能一上来就说其实不用讨论什么的嘛，(嗯)而且是在开会，那大家都在嘛，一般开会的时候我都不会怎么直接说什么的，你说了以后的话，那课长的话就没面子嘛
12	R	嗯，那其实你的提议也是说被作为参考了
13	CS26	对，被作为参考了，我们那个课长他自己很喜欢说嘛，就总是喜欢给我们上课，说这个经营的原理什么的<笑いながら>，那我就先问他的话，他就很高兴地给我们将这些嘛，然后我再顺便提一下自己的看法，就比较好了

例 29 水槽は汚かった(実情、上下<職位：社員 - アルバイト>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS29	我先是给他说，先是给他说，(嗯)今天，今天早上反正挺忙的，(嗯)我跟他说，“今日あさ来た時、忙しかったよ”，(嗯)“俺が来た時、シンクがけっこう汚かった”，(啊)“あ、そういえば、あのう先週の土曜、日曜日とおなじだったんで”，(嗯)((後略))
2	R	那他怎么说呢↑
3	CS29	“そういわれて困る、困るんですよ”，然后他就这么说，(喔)我就说，“ほんとうだよ、すごく汚かったのに、なんで困るの↑”，然后我就这样问他嘛，“ <u>いそがしかった、先週の日曜日、忙しかったんですよ</u> ”，他就问我嘛，“ <u>忙しかったんですよ</u> ”
4	R	他跟你一块儿↑
5	CS29	对对，上个星期天，我们一块儿进的嘛，“ <u>そんなに忙しくなかったでしょう、あのう3連休の真ん中だし</u> ”，(嗯)然后我说，“ <u><苗字>さんがけっこう乱暴にやったんで、汚かった、超きたなかった、おれは本当に気持ち悪かった</u> ”，然后他就说，“分かっているよ、分かっているよ、じゃ今度、ちゃんとやります”

6	R	喔，那他和你比的话，我也不知道应该怎么比，他比你レベル要高吧
7	CS29	算起来他肯定比我高，＜笑いながら＞，他是社员，正社员嘛，(喔)我只是アルバイト嘛
8	R	你说不忙，因为他没有打扫所以确实很脏，这些都是直接跟他说的，说法上有什么注意的地方吗↑
9	CS29	没有，我就是直接这么跟他说的
10	R	但是按理说他应该比你职位要高吧
11	CS29	职位说起来是比我高，一般这么直接说，还是当着店长的面说确实不好(嗯)不过在店里的话，不是说看不起他，只是说他，“そんなに使えない”，就是，这个店里的事情都是我和另外一个女的在管嘛，(嗯)虽然他是社员，还是有点不如我们，而且我说的都是实情，那天他跟我在一起的嘛

例 30 曖昧に記述する必要はある(実情、上下＜職位：主任 - 社員＞、保有度(高い)、明示)

番号	発話者	発話
1	CS26	改完之后呢，(嗯)嗯，我就，那个我同期他不能说，不能决定嘛，(嗯)然后我就给另外一个人，就是我那个课里，另外一个，比我的ブラザー还要年纪大，就是那个，10 年，嗯-有一个，将近四十岁的一个人，不是 10 年目、我的ブラザー是 10 年目嘛，比他上一级的，就是想当于主任级的一个人
2	R	喔，这个主任级的人好像还没有出现过
3	CS26	对，刚才我说的事里面还没有出现过，主任级的这个人他主要负责大阪 中略 我就让他看，问我这个纪录 OK 了没有，他说，一开始他就说， <u>他说你这句话，太含糊了，不知道你在想说什么</u> ，就是我们的本部长说的那句话嘛，(嗯嗯)因为本部长跟我说的時候他们都不在那个边上，(嗯嗯)就只是跟我说的， <u>然后我就说本部长说让我特意写含糊一点((後略))</u>
4	R	嗯，他说你写的这个太含糊了
5	CS26	<u>他说你这个太含糊了</u> ，我说不是的，我说那天本部长跟我说了，他说不能那么直接写，然后他一开始他就直接说，不直接写怎么表达这个意思啊，他反正很直接的，他就这么说了，然后他说你改掉，改成那个意思
6	R	喔，那你也是直接跟他说不能这么直接写的
7	CS26	我也是这么直接跟他说的，因为当时本部长是这么跟我说的，他们其他人都

		不在嘛，所以我就告诉他这个情况
8	R	这个直接说也没有关系
9	CS26	这个没有关系，因为事实是这样的，(嗯)那他就是相当于主任嘛，我一般还是比较注意的，一般不会直接说，不过这个事情因为只有我知道嘛
10	R	就是本部长跟你说的这个事情
11	CS26	对，所以我想直接说也没关系的，因为他不知道这个情况嘛

例 4 その内容を会議記録に入れる必要がある(実情、上下<職位：課長 - 社員>、期待<目的>、場面<私的>、明示)

番号	発話者	発話
1	R	那，那个课长最开始没有搞懂你的意思，然后你给他解释
2	CS26	嗯，解释完之后，“喔”他说是那个事情啊，他说
3	R	你跟他解释的时候怎么解释的呢↑有没有特别在意的地方呢↑课长还，没搞清楚
4	CS26	课长可能忘了，就是说，(嗯)可能就是，看了我那段话没有直接想到是那个，(嗯)那个，那个，课长，对方的那个课长，(对对对)提的那个事情，然后我就，但我在那个字面表述上面我也没表述出那个意思来，(喔喔)是对方有提，有疑问嘛，(嗯)然后，然后我就直接写的这个回答，可以在「都市名」直接用的这一些，哪些媒体，(嗯)然后，课长就直接说， <u>这个媒体有没有必要写，他就觉得没必要写</u>
5	R	那你怎么说呢↑
6	CS26	他，他就说，这个不要吧，我说，没有，我说，“これは一、あのう、「苗字」課長”，那个人叫「苗字」嘛，(喔)“「苗字」課長が、「都市名」の、どう、どういう場でつかって、人気をあげるためのメディアなのか、それに対して疑問があったので、それに対しての答えだ”、“啊”他说是那个事情，“啊，那个事情他想起来了”他说，(喔)他说那个话，啊，他说这样的话，不是很具体，应该再具体一点
7	R	啊，这个你没有用，比方说，你原来说和课长说，话的时候，有时候喜欢用提问哪，或者是比较，就先提个问，然后在顺带地说出一下自己的意见那个方法
8	CS26	这里没有，他既然是问了我这个问题，想确认这个内容，那我就直接说了，

		其实是这么一回事，(嗯)课长是直接拉，拉了我去的，(喔)所以，所以就，也没有那么绕了，就是说，(喔)他既然是想讨论这个事情，就直接把它说清楚，(喔)就可以了
9	R	喔，其他人没有在
10	CS26	对，因为只有课长和我参加了这个中国的计划，有其他人在场，大家都知道这个事情的话，那我对课长不会这么直接说的，因为就我和课长 2 个人，那直接说明也没关系

例 32 コピー機の問題だ(常識、上下<職位：部長 - 社員>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS19	因为我要把那个アンケートの副本给我们那个上司，(嗯)结果那个副本的话呢，(嗯)我去那个コピー機去印了一份嘛，(嗯)然后交给他，我也没有数页数，(嗯)因为我是用的那个正本进行的集計，(嗯)然后呢他发现那个副本呢，好象有几张不够，(嗯)他说为什么，因为是 41 个人参加是 41 张嘛，为什么我这个只有 36 张，(嗯)呃，我说，这个一起コピー的，都给你了，不会有问题的，(嗯)我说那肯定是机子出问题了，(嗯)“コピー機は問題ある”，(嗯)他说是你自己不对，印的时候没有确认
2	R	嗯，那你怎么说的呢↑
3	CS19	然后我说，应该是机器的问题
4	R	你觉得不是你的问题，是机器的问题
5	CS19	我觉得主要是机器的问题，(嗯)因为コピー機的话，你放多少张纸进去就应该出来多少张嘛，这个应该是机器的问题
6	R	喔，那你说的时候注意了什么呢，就是委婉一点什么的
7	CS19	没有，<笑いながら>因为这个你印多少张就应该是多少张，肯定是机器的问题嘛，我就懒得去注意说法了，就直接说了

例 33 納期を 7 月に延ばすことはできない

(経済的規範、上下<社会的役割：取引先 - 社員>、明示)

番号	発話者	発話
1	R	那你跟对方公司那边说的时候，他那边还是想 7 月份，然后你还得想办法说服他

2	CS30	对，这里肯定有一个交涉的这种
3	R	对对对，交涉的时候那些，说法啊内容啊，你还有印象吗↑
4	CS30	有印象
5	R	喔，那你是怎样交涉的↑
6	CS30	说法是这样的，(嗯)这个就牵涉到，日语叫セールス・トーク，(对对对)就是商谈的技巧问题，(嗯)因为对方是我们很重要的客户，所以你说的时候就要非常注意，(嗯)既不能给公司造成损失，但是又要给客户面子
7	R	嗯，那你具体是怎么说的呢↑
8	CS30	因为不能说得很绝，要给客户的面子，(嗯)这个属于セールス・トーク的技巧，(嗯)首先就说很难，然后我是一生懸命这个，((中略)) 然后他说推迟一个月很感谢， <u>但是还是没有达到他们的要求，就是还是想延长到7月份交货，我说这个不行</u>
9	R	这里你是直接说不行
10	CS30	对，因为他还是说想再推迟一个月， <u>那我只能说申し訳ありません、7月份交货的话我们公司办不到，因为涉及到上期決算的问题</u>
11	R	喔，那这里为什么你是直接说的呢↑刚才你说还要考虑客户的面子
12	CS30	我是考虑到他们的面子，所以没有一开始就说7月份不行什么的，(嗯)但是他们觉得6月份还是早了，还是要7月份交货，因为这个销售没有办法計上了嘛，(嗯)公司有损失的话，那还是要说清楚，跟他说清楚这个理由，这里的话我是不能让步的，就只能直接告诉他们，说这个7月份的话是不可能的

例 34 患者の数は公開されている(CS の P.フェイス、上下<年齢：年上 - 年下>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS21	我就说，不过最近中国也有几例了，(嗯嗯)我说，也有那么几例了吧，但是全部是输入性的，(嗯嗯)她就说了一句，她说中国说不定也会大爆发，也会，也有很多人得，(嗯嗯)但是， <u>中国いつも都是隠すの嘛，(嗯嗯)她说中国不是，いつも，就是不会说嘛，就算有也不会说嘛，(嗯嗯)她说，いつも都不会说的，都会隐瞒的，(嗯嗯)我说，也没有，我说最近还好，(嗯嗯)我说最近哪个地方有几个人还是。都会说的嘛，(嗯嗯)她说，中国现在有什么，她还是说了一下，她说有什么也不会说啊什么的，我就说，但是现在，现在是怎么怎么样，她就说那やっぱり还是说了呀，やっぱり还是报道了啊，就是这个时</u>

		候，我不太同意她的那个说法，我就跟她说了，我觉得现在的话， ((後略))
2	R	喔，怎么，你是怎么具体跟她说的呢↑
3	CS21	我不记得具体的病例数，我就告诉她， <u>因为每天网站上面都有嘛，(嗯嗯)哪个省有多少，哪个省有多少，那她就说那还是报道了呀</u>
4	R	喔，这个的话你觉得还是应该说一下，告诉她
5	CS21	嗯，因为我觉得，嗯，在这个时候，她就说到中国怎么怎么样嘛，那我是个中国人，那就不能这么，不说啊，(喔)我觉得，好像也关系对我们国家的印象的问题，我觉得，然后我就想，还是说一下比较好，(嗯)我看每天中国的网站上面都有那个表，就是什么地方有多少病人什么的，每天都更新
6	R	那你在用日语告诉她的时候，有没有注意的日语的用法呢↑
7	CS21	嗯，日语的用法的话，没有特别的注意，我主要想她能明白我的意思，知道中国不像原来隐瞒，就可以了，因为确实在 SARS 的时候有很多隐瞒嘛，(嗯)但是现在不是这样了，我就想着让她能明白就可以了
8	R	那这里的话，就没有像刚才说医院的那个事情的时候，就是想着不说了
9	CS21	对，就这里我就没有考虑那么多了，(喔)我其实跟她聊的时候还是比较注意的嘛，(嗯)因为她毕竟是我的长辈的年纪嘛，但是这里她说到中国一直隐瞒的时候，我就接着她的话说其实现在也不是原来那个样子了，就觉得还是要说一下好一些

例 35 その人は去年の元旦休みにも出勤した

(自分のインタレスト、上下<職位：店長 - アルバイト>、明示)

番号	発話者	発話
1	CS29	然后他就对我说，“人がいなければ入ってくれるよね”，(嗯)就是说 3 号要是没有人的话，还是要我出嘛(嗯)，我本来就是很不情愿地答应大晦日出嘛，2 号要去滑雪的话，3 号再出勤就很累了
2	R	喔，那你这里是怎么说的呢↑
3	CS29	我就说那个，「苗字」，我说他应该可以出，因为他们日本人元旦休息的话，3 号应该可以出，(嗯)店长说他， <u>就是我说的那个日本人可能也来不了，因为是元旦</u> ，我说他不是去年也出了吗
4	R	你还记得是用日语怎么说的
5	CS29	我说，“去年”、“ <u>「苗字」は入れるんじゃない↑去年も入れたし</u> ”

6	R	喔，你就这样直接跟店长说的
7	CS29	因为他要我大晦日出我已经心情很不好了嘛，这里我就是觉得不说不行了，元旦我也想休息啊，那个人去年元旦也来上了班，应该是可以的。店长只考虑了那个人的休息，我的休息也得考虑考虑吧
8	R	你觉得这样说没关系↑说的时候没有怎么想说法什么的
9	CS29	没有，我这里没想什么，就直接说他去年也出了，反驳店长是不合适，当时我想这个事情店长也知道，所以直接说也没关系

例 5 冷蔵庫の商品は整理済みだ(実情、上下<職位：オーナー・アルバイト>、回避)

番号	発話者	発話
1	CS22	他就说那个冷蔵庫的那个事情，因为之前是那个男生做的那个冷蔵庫，那个男生做了一半，他来了，他就让那个男生回家，自己在レジ那里，我进去以后就让我去冷蔵庫那里整理，(嗯)我进去的]时候就问那个男生，问他做到哪里了，他说做到第三排了，然后我就从第四排开始做，结果没过多久他就在那边喊，说你这几排做完完了吗，我说做完了， <u>他说那前面几排的东西有些没有拿出来，没做完</u>
2	JS12	就是要你再做一遍是吧
3	CS11	对，(嗯)他说前面几排都没有整理，要我从头开始去整理冷蔵庫，但是我问了那个男生嘛，他说前面几排已经做完了，那我就没有必要再做了嘛，(嗯)只不过后面有客人来了把里面的东西拿走了那就看起来好像没有整理的样子
4	JS12	那你怎么办呢↑
5	CS11	<u>我就说“はい”，然后就从前面几排开始整理</u>
6	JS12	你没有告诉他其实已经整理过了，后面是因为有顾客来了所以东西动了
7	CS11	<u>没有，反正オーナー说什么的时候，我都是“はい”来回答<笑いながら>，他说没整理要我从前面开始摆货，我就开始摆了，反正慢慢来</u>

例 37 髪はそれほど長くない(CS の P.フェイス、上下<社会的役割：客 - 店員>、回避)

番号	発話者	発話
1	CS22	那个客人说头发不能放在前面什么的
2	R	喔，是怎么一回事呢
3	CS22	日本的客人还是挺ややこしい的，我的头发是留到这里的嘛，(嗯)然后这个

		老奶奶就说，“ <u>你作为一个スタッフ的话，虽然女孩子这样子比较おしゃれ</u> ”，我倒不是为了おしゃれ，(嗯)只是因为刚洗的头发它会自然的掉过来，既然它会自然掉下来，那我就绑起来待会儿还是会掉下来，那就更乱了，(嗯)我现在后面扎起来就可以了，她就在那里说 <u>前面的头发不能放在前面，おしゃれ的话你可以工作完了以后再おしゃれ</u> ，(嗯)其实这个头发放在这里不关她什么事，(嗯)又不会碰到那些商品什么的， <u>然后我就在那里道歉，我说“すみません”</u> ，怎么怎么样，然后那个客人还说“你不要嫌おばさんうるさい，这个我看到了就一定要说，我这个人就是这样不说我还不舒服怎么怎么样”，(嗯)已经觉得很うるさい了，还要这样问你，那我就说，“そんなことごさいません”，我说您都是为了我好，我下次一定注意
4	R	喔，你跟她道歉
5	CS22	对，我旁边的店长也在道歉，其实我根本就不想说，但是还是会说这样子＜笑いながら＞，一直道歉，然后走了还跟她说“ありがとうございます”，然后还要加上“よろしくお願いします”
6	R	这个是因为什么呢↑要是店长没在旁边还是会这么回答吗↑
7	CS22	店长没在旁边也会道歉的，因为她是客人，所以她说的不能争辩嘛，虽然我觉得我的头发根本就不关她的事，还是要说对不起什么的，(嗯)有时候我就把它当作对自己的一个锻炼

**例 6 足りない分は補欠すべきである(CS のインタレスト、
上下＜職位：マネージャー - アルバイト＞、保有度＜低い＞、回避)**

番号	発話者	発話
1	CS21	((前略)) 我说“是吗”，我说“就算实习的话也，也已经超过这个数字了”(喔)，然后她说“是啊”(嗯)，然后她说“几月的”，我说四月的，(嗯)，她说“四月的，四月的你怎么才说呀”，(嗯嗯)她说，“ <u>那说了也不一定有了，也回不来了</u> ”。(喔)她说 <u>也不一定会给你了</u> ，她说“ <u>那要早点说嘛，什么什么问题</u> ”。(嗯) ((中略)) 然后她说“那你这个给我吧，我去看一看”。(嗯)她说，“ <u>但是就算有问题，钱也回不来了</u> ”。(嗯)然后她就这样说了一句，然后当时我还觉得心情挺觉得不好的嘛，(嗯)我在想，你们这个大个地方，错了就要还给我呀，为什么错了然后说，错了也不会还给我呢，钱也回不来了
2	R	这个你没跟她说吧

3	CS21	这个我倒是没说，(嗯)因为后来就有人来了嘛，就很忙了，我就没说。因为，因为我在想，到底是没搞清楚对了还是错了嘛，(嗯嗯)万一，万一对了的话，那我也没必要在她面前说这样的话嘛，(嗯)，万一错了的话呢，那我肯定会，到时候再跟他说嘛，((後略))

例 41 その会社の下期実績は収入予想に組む必要はない(実情、上下<職位：部長、本部長 - 課長>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS30	等于是我们两个课长要向部长和本部长汇报，(嗯嗯)下午的 1 点到 2 点是しもき，実績予想、(嗯)報告会，它为什么有这个一个报告会呢，因为今年有一个这个震災，((中略)) 我跟部下的ヒアリング已经完了，现在是我和另外一个课长作为リーダー单独向上级汇报，每个人是 30 分钟的时间，很短的时间，下午 1 点半开始由我汇报，中间本部长他们就会質問してくる、それに対して説明しなくちゃいけない
2	R	那他们对你做的预想有没有提出什么意见 ↑
3	CS30	有，这个意见就在于，我的报告里面，有一个公司上半年给我们公司创造的利润是差不多 2000 多万吧，下半年，我做预算的时候就組んでいない，入れなかった，(喔)他就说，“<u>这个每个月都有，你怎么没有把这个公司的东西算进去，应该要算进去</u>”，我就告诉他，“<u>这个如果是按照上半年的进度的话，每个月 200 トン、半年で 1200 ドンじゃん，(嗯)但是现在这个，自動車メーカー，这个，50%ダウン，回復していると言っているんだけど、早く戻れば、えー、10 月、まあ 9 割回復、そうすれば、这个 200 トン，就不是半年的在庫了，(嗯)因为使用量减少了嘛，就可能是 1 年分、或者是 8 カ月、の在庫を持つ”，所以它这个下订单就会往后退，虽然它 11，12 月可能有订单，那么利润可以加进去，但是我这里还有一个公司，它 11，12 月可能没有利润，那么这样正好，一个有，一个没有，那么就只放了一个，相殺してちょうどバランスが取れる</u>
4	R	喔，那你这些都告诉他们了
5	CS30	对，他做上司的特别讲究数字的真实性，所以我要跟他说清楚，这个报告会主要就是要向上级汇报清楚情况，然后他们有什么疑问的话，我们再做说明
6	R	那你说的有什么注意的地方吗 ↑

7	CS30	这个的话，一个是你不能直接说上司的不对，(嗯)因为是部长和本部长，所以你首先要说出裏付け，就是要有充分的数据来说明，让上司納得，(喔)所以我说的時候呢，那这个公司的预算是多少，另外一个公司又是什么情况，怎么个抵消，所以我是这样写的，没有把它算进去，详细地说明了
8	R	喔，那日语说法什么的有什么特别的地方没有呢 ↑
9	CS30	说的時候要注意不能特別斷言的語氣，就好像你上司其實不了解情況，听我来介绍说明，这样的话不礼貌，(嗯)说的時候一个是以事实，数据为主，另外语气比较柔和，比如“というふうに思われます、と予測したほうが良いように思います”这样的

例 42 勤務時間数を減らしてはいけない

(自分のインタレスト、上下<職位：店長 - アルバイト>、婉曲)

番号	発話者	発話
1	CS29	我就问他下个月的时间是怎么排的，(嗯)他说已经排好了，我就拿时间表过来看了一下，他说 <u>基本是按照我的要求做的，不过少了几个小时</u> ，结果发现就是没有按照我提出来的那个时间给我排，每次还少了一个小时，就有点上火嘛
2	R	那你想跟他说明白 ↑
3	CS29	我就想让他按我提出来的这样就放进去，就 1 分钟也不减，(嗯)我对他说你看起来每次只减了一个小时，但是对我来说是很大的一个损失，(嗯)我想给他说这个意思，一个星期减 1, 2 个小时，一个月就有 1 万块钱呢，(对对对)，而且我因为还有文章要写，他如果按照我原来提出的那样排，就可以保证我能比较集中地打工，而且收入也不会少，我就是想告诉他这个意思
4	R	这个你是怎么说的呢 ↑
5	CS29	我就假装比较郁闷地跟他说嘛，因为店长来定这个スケジュール的，我当然不能直接说这不行得给我换，(嗯)我说， <u>一个星期给我减 2 个小时就 2000 块，一个月就是 8000 块</u> ，这个对我来说是很大的一笔生活费，(嗯)我就这么跟他说嘛，就是用请求的语气
6	R	那他怎么回答你的呢 ↑
7	CS29	后来他说再看看，你看看可以跟谁换，就去换，“自分でいじっていいよ”，他就这样跟我说

不一致応答の会話例

- ・ 下記では、擬似自然会話、自然会話場面で収集した CS の不一致応答の事例を会話のペア別に提示する。擬似自然会話場面での CS1-JS1 の会話を参考資料として用いることにとどめ、分析対象に入れなかったため、提示しないことにした。ペア 1～7 のデータは擬似自然会話場面、ペア 8～19 データのは自然会話場面での不一致応答の事例でなる。
- ・ ()の中に、インプットされた要因の内容、留意された逸脱、行われた調整の種類も合わせて提示する。不一致応答が生成的に行われた事例について、「逸脱の留意なし」と表示する。
- ・ 留意された逸脱について、片方の逸脱のみが留意された場合、「命題のみ」、「自己のみ」と表示し、双方の逸脱が留意された場合、「双方」と表示する。
- ・ 調整の種類について、「明示／婉曲／回避」と表示している。双方の逸脱が留意され、片方の逸脱の調整が優先された場合は、「命題優先」または「自己優先」と表示する。

ペア 1 CS2-JS2

例 1(保有度<低い> ; 自己のみ ; 婉曲)

番号	発話者	発話
9	JS2	【】名残惜しいです
10	CS2	来週の火曜日は↑
11	JS2	えっ、来週一、まだ六月だったっけ↑火曜日
12	CS2	六月じゃなーいですねも、六月でしょう↑

例 2(逸脱の留意なし)

番号	発話者	発話
33	JS2	やっぱりスープが、あっさりしててー、(あはーい)具合が悪いとき、悪いときは、食べやすいですね、(たべやすい)、うん
34	CS2	あのう、さっぱりしているんですけどー(うーん)、味は、あのう、薄くない、味は、<とても> 【】

例 3(実情、JS の P.フェイス ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
86	JS2	えっ、インスタント、(うん)ですか↑あらー、(笑)いま、(??)インスタント面も高いでしょう
87	CS2	あ、ひゃくえん、でした、ひゃくえん

例 4(実情、JS の P.フェイス；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
111	CS2	<うん>、そうでうね、やっぱり量が、学校の量は外の量より(JS：うん)ちょっと多いみたいですね
112	JS2	<u>うんー↑</u>
113	CS2	<u>イメージが、私、しますけど、(うんー↑)うん、そう、ではないですか↑</u>
114	JS2	まあ、でもそうね、こんなにふんたんな面は<入って>いないわね、(<うん>)そとね
115	CS2	はい
116		{二人が黙って食べ続ける}(6)
117	CS2	<u>それに、あのう、牛井屋さんの量も多い、それ、ゆ、あのう、ええ、すき屋とか、そうゆうところの<量は> Ⅱ</u>
118	JS2	<u>Ⅱ</u> <あ、吉野家↑>
119	CS2	<u>うん、(うん)はい、は多いんですけど一、(うん)普通の一、料理店は一、(うん)あまり、<量がー>(<そうね>、うんうん)学校よりは、あまり、多くないみたいですね</u>
120	JS2	うーん

例 5(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
158	JS2	<u>毎日やるっくてゆう>のも、(<うん>)すごく<ない>(<はい>)ですか、キャストの人がかわいそうっていうか、(<笑>)寝られないんですよ、俳優さんたちは</u>
159	CS2	<u>あー、まい、あたぶん、(うん)もう、あのう、すでに完成して↑、まいにち</u>

例 6(実情、言語ゲスト；双方、自己優先；回避)

番号	発話者	発話
166	JS2	<u>うーん、(2)、うん、じゃさあ、逆に言えば中国ってそうゆうのをあまり気にしないで一、(はい)とにかくバンと流し<てー></u>
167	CS2	<u><そうで>すね一、(<うーん>)<はい></u>

ペア 2 CS3-JS3

例 1(接触規範、日本の社会文化的規範、目的；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
96	JS3	<u>たとえば、私が客の立場だったらー、(はい)折り紙とかを持って行って、一緒に、子どもたちとやるかな、って<思う> 【</u>
97	CS3	<u>】 <あつ>折り紙、(うん)おお、そうだよね</u>
98	JS3	うん、で別になんか折り紙ってそんなに高くないしー、(笑)
99	CS3	<u>うん、鶴、鶴</u>
100	JS3	鶴とか、(??)<とか>(笑いながら)
101	CS3	<u><飛行機>のほう、(笑)幸せですね、(うーん)あー、そう、うん、日本のお菓子とか、おやつ</u>

例 2(実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
114	JS3	<u>(.)そう、(うん)、でもな、いいね、そうしたらなんか、どういう曲をやっているのか、とか聞かせてもらったりとか、お母さんは、(<笑>)料理について教えてくもらったりとか>(<そうですね>)うん</u>
115	CS3	<u>でも、そこでもー、まあ、おひるとかしないし、たぶんそういうチャンスがないね</u>

例 3(中国語の言語的規範、言語ゲスト；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
121	CS3	でも、ミュージシャンってー、(うんうん)あのう演奏家↑(あつ、そうか<そうか>)<歌手>↑
122	JS3	<u>かつ、ミュージシャン(???)両方、いうかな↑</u>
123	CS3	<u>あつ、そうですか↑</u>
124	JS3	<u>(2)歌手、あ、そうだね、どうだろう、ミュージシャンっていったらでもそうか、楽器やるひとみたいな(あ、そう<ですねー>)<うーん></u>
125	CS3	<u>ピアノとか、(うーん)バイオリン、うーん、(1)そう</u>
126	JS3	<u>あつ、でも、たぶんね↑、けっこうミュージシャンといたらー、日本だとー、なんかバンドとかそういうのを想像するかな</u>
127	CS3	<u>へえー↑</u>
128	JS3	<u>なんかこう、クラシックとか、<の人をー>、(<はいはい>)あまりミュージシャンと言わないようなく気がする> 【</u>
129	CS3	<u>】 <あ、そうですか></u>
130	JS3	うん

番号	発話者	発話
131	CS3	おう↑はい、(1)おう、わかった、(1)、あ、一曲聞かせば(<笑>)<笑>でも、(.)忙しいでしょう↑そういう人

例 4(誤解；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
256	CS3	ちょうかい
257	JS3	ちょうぶん<ちょうぶんどっかい↑>
258	CS3	<りす>、じゃなくて、<あ>(<うん>)聞く↑

例 5(誤解；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
356	CS3	うんでもあんまり時間ないよね
357	JS3	(1)時間↑
358	CS3	そう、<そのう> 【
359	JS3	】<あのお>ええと日常の、生活の中で
360	CS3	そうだよねー<あんまり>、(<うんうん>)うん、気をつけないね、ふだん、あ真剣に、一步一步で、(2)、今はできない
361	JS3	(笑いながら)忙しいんだ
362	CS3	いや、別にそんなに忙しくないけどー、(うん)うん、日本に来てから時間が、(1)早い、<気がするんですねー>
363	CS3	<あー、過ぎるのが>
364	JS3	はい、(うん)1日たぶん、24、24時間が、足りない
365	JS3	うん、<笑>(<笑>)やりたいことがいっぱい
366	CS3	たぶんあさー、まあ、おきるのはー(うん)遅いと思うけど(<笑>)恥ずかしいことなんですけど、<笑>(<笑>いいえいいえ)普段は授業がない場合は、(うん)11時、(うん)11時、おきるのは早い、私にとっては(<笑>)目覚まし時計がないと、ぜったい、どうしても起きられない

ペア 3 CS4-JS4

例 1(実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
320	CS4	】 おおきいー、(.)にんぎょう↑
321	JS4	(.)うん、うごい、動いてさー
322	CS4	(2)山車でしょう

ペア 4 CS5-JS5

例 1(11 行目と 17 行目：実情、目的、文化ゲスト；双方；自己優先；回避

19 行目：実情、JS の P.フェイス、日本の社会文化的規範；双方；自己優先；回避

21 行目：中国の社会文化的規範、日本の社会文化的規範；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
7	CS5	(笑いながら)はい、チャリンコ、(うん)移動されました<よね>、(<うん>)って、痛かった、痛かった、だよ、わたし、痛かった、(<あ、なるほどね>)<なんか、2 千円>払ったから一、痛かった、だよねー↑で、ええと一、中国で一ええと、(.)なんか一、ええと、駐輪場↑とゆうーところが一、(うん)ええと、ないわけ一、じゃないんですが一(<うん>)<ええと>みんな、ええと、好き勝手に一、(うん)ええと、(.)道路の一、両側に、自転<車を>(<うん>)置いて一、なんか一、ええと、ええと、勝手に一、置いても一、(うん)ええと、罰金なんか、ないので一、(うん)(笑)ちゅう、日本は一、やっぱり一ええと、あのう、禁止、ああ、ほうじ禁止、(うーん)の、ところに一、おちゃうと一、なんか、罰金なんか一、ある一、ということ、不思議だと思って(笑)、<不思議>に思って
8	JS5	<u>(あ一)、まあ、けっこう、最近一、なんだよねー↑(はい)あのう、できたのが、もう確かに 10 年ぐらい前からかな、になったんだけど一、(うん)やっぱ、せまい、じゃん、<日本って></u>
9	CS5	<え一>、ってなんで、ええと、えと一、置いて、いけないところを、置いちゃうと一、(うん)なんか一、移動される
10	JS5	<u>やっぱ邪魔<に一>なっちゃう(<うん>)、っていうのがあって一</u>
11	CS5	<u>え一、もしかしたら一ええと、あのう、目の不自由なひと一、<とか一></u>
12	JS5	<そうそうそう>、とか
13	CS5	なんか、えっ↑、救急車
14	JS5	もそうだし一
15	CS5	えっ、救急車、消防車、(.)<とか一>
16	JS5	<u><うん、とか一>、もしくは、(はい)ベビーカーを引いたお母さんとか、<通れ>(<はい>)<ないとか、ってゆうのがなっちゃうとかいっちゃう??></u>
17	CS5	<u><ああ、そうですか>(うーん)え一↑</u>
18	JS5	やっぱり<始め>(<はい>)のころはね↑、ちゃんとその一、ね、(はい)そうゆうのをやめてくれって言っているんだけど、やっぱり、(はい)減らないから、じゃ、あのう罰金
19	CS5	<u>そうですか、そうね、日本の、ええと、道路が本当に狭い<よね↑></u>
20	JS5	<狭い>
21	CS5	<u>そう、ええと中国は一、なんか、日本より一、<道路>(<うん>)が広くて</u>

		二、(うん)、なんか一、人は一、ほとんど、歩道、で一、歩いている一、(うん)んと一、消防車とか、(うん)救急車とか一、<ほと>んど一、(<うん>)車道で一、走っ<てい>る、(うん)それで一ええと、おいても、ええと、さま一、なんか、なんとゆうか、(2)あのう、障害、(うん)邪魔(うん)邪魔一に、ならないと思う、(うん)それで一、みんな自由勝手に一、(うん)好き勝手に一、置いていて
22	JS5	なるほどね、まあ、すみませんけどちょっとどっちがいい {置いてある飲み物を指さす}

例 2(中国の社会文化的規範、JS の P.フェイス、言語ゲスト；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
25	JS5	<u>まあ、そう、日本も一あれだよ、(はい)そうゆう、道路事情でやっぱり、(はい)まあそもそも国が狭いってゆうのもあるから一、(あ一)うんやっぱどうしても狭くなっちゃうし、<あとは、昔の>、(<そうだね、はい>)みち一、を、けっこう使っているさ、日本で、たとえば、そのほら、(はい)江戸時代とかのものを、(はい)五年、百年ぐらい以上、百年ぐらい前の、造られた道を一、(はい)あのう実は改修して一、(はい)今の道にしているから一、実はすごい狭かったりするのね</u>
26	CS5	<u>お一、(うん)ええ日本全国どこでも一、ええと、道はそんなに狭いの↑</u>

例 3(接触規範、文化ゲスト；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
115	CS5	(笑いながら)なかなかいい人だと思います
116	JS5	うん<なかなか>
117	CS5	<そうそう>
118	JS5	<u>それが(笑)、言えないせりふだね、おれなんかは、(<笑>)なんかはずかしくて、いえるもんじゃないそんなことってさ</u>
119	CS5	(笑いながら)はい、え一↑(.)そうそう、う一ん
		4行を略した
124	JS5	ああ、なるほど、だからいえるんだね、(笑)うん、 <u>あのことね、あのふつう</u> いわないよ↑、日本人そんなこと
125	CS5	あ、そう↑

ペア 5 CS6-JS6

例 1(実情、目的；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
30	CS6	【】 水曜日の一、3 限に一、(うん)そこであのう、着物の一
31	JS6	<u>あ、まえいったやつねー</u>
32	CS6	<u>あでもわたしがー<あの>(くうん>)体育の授業が、もってー</u>

例 2(自分のインタレスト、JS の P.フェイス；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
185	JS6	分かった、土日にしようか↑どう↑<でうん?↑> (<あー>) (人名) ちゃんがどっか行かないー、おでかけとか、ほら、(うん) うちらが、予定ない日の一、土曜日とか、日曜日とかに一、私のうち来てー、やるとか
186	CS6	あー、そう<それも> (<うん>) いいね、(うんうん) きん、金曜日は、<これ>

ペア 6 CS7-JS7

例 1(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
142	JS7	<u>パアオー、パアオー(xiao ロンパアオ↑)ショウロンパアオじゃなくて、パアオーチー</u>
143	CS7	あっ、中国語で↑
144	JS7	そうそう
145	CS7	<u>あっ、baozi</u>
146	JS7	<u>ポアオズ、<もー> 【</u>
147	CS7	【】 <u><あっ>、ポじゃやくて、ポア</u>

例 2(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
252	JS7	<u>中国、でー、クリスマスの、時期に一、</u>
253	CS7	うん
254	JS7	<u>大学生テストがいっぱいあるんでしょ↑</u>
255	CS7	<u>ええ↑</u>
256	JS7	え↑違う↑(笑)
257	CS7	<u>うーん、ち、うん、うちの大学は、うーん、中間テストが、(うん)あるんだけどー、(うん)日本語学科の(うん)学生は(うん)特別、ないよ↑</u>

例 3(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
348	JS7	【】＜あっ＞、「 <u>苗字</u> 」先生↑、じゃなくて↑
349	CS7	<u>うん</u> うち、 <u>教育が、学部の先生じゃないよ</u> ↑

ペア 7 CS8-JS8

例 1(言語ゲスト、目的；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
19	JS8	(笑)“ <u>思う</u> ”は別になくてもいい、じゃんですか(1)論文ですね
20	CS8	<u>次のような問題点がある、と</u>
21	JS8	と、そうしたら一、指摘できるところ、まあ、“ <u>思う</u> ”があってもいいじゃないのかなあ
22	CS8	なる
23	JS8	“ <u>と思う</u> ”だとなんか、論文だったらちょっと、＜軽い感じ↑＞ 【】
24	CS8	【】＜ <u>考えられる</u> ＞
25	JS8	あ、考えられるとかはいいと思いますね
26	CS8	<u>うーん</u>

例 2(実情、保有度＜低い＞；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
389	JS8	<u>湖南って南のほうでしたっけ</u>
390	CS8	(1)湖南、湖南は、あ <u>のう</u> 、(2)中部、 <u>地域</u> 、 <u>という</u> でしょう

例 3(逸脱留意なし；明示)

番号	発話者	発話
405	JS8	しかもあれですか、 <u>日本で、中国語を忘れていって、</u> (＜笑＞)(笑)、 <u>すごく怖い</u> の <u>ではない</u> ですか↑
406	CS8	<u>ない</u> んです

例 4(実情、保有度＜低い＞；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
477	JS8	<u>図書館でそのカードが使えない</u> んですよ
478	CS8	<u>あ、そうですか</u>
479	JS8	あんまり意味がない(笑)
480	CS8	<u>えっ、つかえる一、ます</u> ↑

ペア 8 CS9-JS9

例 1(実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
11	JS9	台湾のビザは大陸の人は(なかなか申請できないよね??)
12	CS9	それほど難しくないとおもいますが、でも、(うん)やっぱりとくべつ、(笑)めずらしく私 II

例 2(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
15	JS9	なんか否定しているのか肯定しているのかよくわからない
16	CS9	えっ↑そうなんですか↑
17	JS9	なんか、(うん)乗り気なのか、乗り気じゃないのかみたいな(笑)
18	CS9	いつもあの、あのう、“せんせい、これほめているんですか”<あのう、そう、そうですか>,,
19	JS9	<けんかしているんですか↑>
20	CS9	みたいな、(笑いながら)感じでー、もう、だから、まあ、そういう人に(鍛えられているから)ですかね、(笑)そんなに難しくはなかったと思いますけど、うーん

ペア 9 CS10-JS10

例 1(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
27	JS10	これぐらいの音量でいいの↑
28	CS10	違うよ、普通に話すって
29	JS10	これ普通で、大丈夫↑
30	CS10	これ普通なの↑
31	JS10	<ふつう> II
32	CS10	II 普通じゃないでしょうー{声が大きくなる}

例 2(逸脱留意なし；明示)

番号	発話者	発話
45	JS10	うん、(笑)なんかそのごみばこないかなとりあえず、これも、これ<にー?? ≥
46	CS10	<ごみ箱じゃない↑>ないんじゃない↑

例 3(逸脱留意なし；明示)

番号	発話者	発話
92	JS10	そう、(<うん>) <なんか>それできー、こう人体にこんなにたくさんの血管がめぐらされて<いるんだなって> 【
93	CS10	】 <こわいと思う↑>
94	JS10	うん、<だってね> 【
95	CS10	】 <面白いじゃん>

例 4(常識、JS の P.フェイス；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
96	JS10	面白いけど、(<笑>) <u>なんかそれを勉強しているとー、私はなんか、いま、この手に、このシャープペンを持つ手に、力をこめたら血管切れるんじゃないかとか思って力がすごくでなくなったの</u>
97	CS10	<u>へえー↑</u>

例 5(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
156	CS10	<あき>か、うーん、春はいちばん好きかなー、わたしは
157	JS10	<u>花粉症じゃん、はる</u>
158	CS10	<u>(1)わたし花粉症はないからー</u>

例 6(逸脱留意なし；明示)

番号	発話者	発話
172	JS10	なんかこう、 <u>海に浮かぶひょう</u> 、< <u>ひょうざんみたい</u> >
173	CS10	<u><えっ、きもい>(笑)</u>
174	JS10	(笑)きもい↑
175	CS10	<u>きもいよ</u>

例 7(逸脱留意なし；明示)

番号	発話者	発話
176	JS10	(2) <u><つしたをはいてあつくない↑</u>
177	CS10	<u>あつくないよ</u>

例 8(実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
204	JS10	なのかなー、なんかね、 <u>あすだって聞いたけど、でも今日なのかな、えっ、ちえよ、オープンキャンパスー、<これは></u>
205	CS10	<u><きょうじゃない↑></u>

例 9(逸脱留意なし；明示)

番号	発話者	発話
220	JS10	(笑いながら) <u>そんなはなしはしないって言ったじゃん</u>
221	CS10	<u>え、いいんじゃないいいじゃん、べつにー</u>

例 10(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
238	JS10	<u>(???と勇者のでんせつ)↑じゃないよね</u>
239	CS10	<u>ちがう、それは7月</u>

例 11(逸脱留意なし)

番号	発話者	発話
487	JS10	<u>最近は一、ぜんぜんやっていないね</u>
488	CS10	<u>やらなくていいじゃん、<こんな>ふうに</u>

例 12(実情、CS の P.フェイス；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
555	JS10	<u>そんなかなんしょうって内陸だっけ</u>
556	CS10	<u>いいえ、わたしかなんしょうの人じゃないよ{声が大きくなる}</u>
557	JS10	あ、(??)だっけ
558	CS10	うん
559	JS10	じゃ出身は↑
560	CS10	(1)、いまさら出身はって、<教えない、教えない>
561	JS10	<え↑ごめーんね>
562	CS10	教えない(笑)
563	JS10	ごめんねー、ごめんね、(あさ?)こうげき?だ
564	CS10	もうあんだと話したくない<笑>
565	JS10	ごめんね、ごめんなさい
566	CS10	じゃ、こっちにこようか
567	JS10	<u>(5)、けいりんだ</u>
568	CS10	<u>(1)、違うよー{声が大きくなる}、(<笑>)なんでけいりんまで</u>

番号	発話者	発話
569	JS10	けいりんが出身だったら毎日(???)ほうだい
570	CS10	(2)けいりんはねー↑りょうはいいいんだけど、生活はちょっと
571	JS10	かんとんしょう
572	CS10	かんこう↑
573	JS10	<u>かんとんしょう↑</u>
574	CS10	<u>ちがう、(うーん)もっと北</u>
575	JS10	<u>もっと北、わからない、どこだっけ、吉林省</u>
576	CS10	吉林省↑吉林省は、きたのほうだよ↑わたしみなみ、<海のほう>
577	JS10	<南↑>
578	CS10	もういいや、もういいや

例 13(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
635	JS10	<u>まあ、ネイテブの発音で</u>
636	CS10	<u>ネイテブじゃない↑わたし(<笑>)</u>

例 14(実情、CS の P.フェイス；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
657	JS10	<u>ねこ食べるんだっけ、中国では</u>
658	CS10	<u>食べれないよ {声が大きくなる}</u>

ペア 10 CS11-JS11

例 1(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
28	JS11	<u>長いなー</u>
29	CS11	<u>べつに、いや、いちごからほんじめー、(うん)ほんじめが終わってからー、ええと<入店準備></u>

例 2(51 行目：実情；命題のみ；明示) (53 行目：実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
50	JS11	<u>1) でもー、夕方のメンバーたとえ、夕方ってゆうか、「苗字」さんとー、</u> <u>「苗字」くんはー、深夜のことを考えて、ちょっとずつやってて、いつも</u> <u>くれるけどー</u>
51	CS11	(??し)、 <u>「苗字」、</u> <u>「苗字」</u> <u>やってないよ</u>
52	JS11	<ええ↑>

番号	発話者	発話
53	CS11	<やっていないと思う>、あいつはね、ほかの人と一緒に入るの、のばあい、おれは分からないけどー、俺といっしょに入る、ところはね、仕事<やらない>

ペア 11 CS11-JS12

例 1(CS のインタレスト、上下<職位> ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
1	JS12	深夜、本当はたぶん悪いんだけどね、(はい)本当は最低でも普通の店長だったら半分以上ぐらひは深夜入らないとだめでしょうって人が多いんだけどー、(はい)まあちょこちょこ入ってるからー、「苗字」くんとか ¹
2	CS11	うん、わかりました、じゃ、どうします↑あ、もう、もう最後だから{声が大きくなる}(笑)、<かんべん>。】

例 2(CS のインタレスト、上下<職位> ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
19	JS12	まあはいっちゃうかもしれないけどね
20	CS11	え、ええ、まずいちばん、いちばん最後までちょっと、かんべんかんべんしてくださいよ、てんちょう、最後の最後で、いちばんの最後で、<まあ>{声が大きくなる}(笑)

例 3(上下<職位> ; 自己のみ ; 婉曲)

番号	発話者	発話
29	JS12	「苗字」さんやめたいならやめてもいいよ
30	CS11	えっ↑
31	JS12	いちおうきょう、じゃ自分でもまた(される??)ぐらい(しか??)いえないんでー、いちおう(苗字)くんに一、(はい)あもう、こまかめに入れなくなるよといつて、ちょっときつめに↑やめるとは言わなくていいんでー
32	CS11	あ、わかり。】

例 4(56 行目 : 実情、保有度<高い> ; 命題のみ ; 明示

60、64 行目 : 実情、上下<職位> ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
55	JS12	<「苗字」さんまわれないわけじゃないけど>
56	CS11	いやいや、前はね、仕事やらなかったですけどー、いまは<ちゃん、ちゃんと>。】

¹ この例 3～4 では、JS12 が作った深夜出勤のスケジュールをみて、CS11 は不一致を感じた。

番号	発話者	発話
57	JS12	Ⅱ べ、??でね
58	CS11	いや、いまはちゃんと仕事をやりますよ
59	JS12	いやただね、＜笑＞やるのをほめやったあたりまえだからさー
60	CS11	いやいや、だから、いや、あのう、じぶんからみると、そういう＜感じがするけどー＞ Ⅱ
61	JS12	Ⅱ <うん、でもレベル>4のところ、でもあのう、(ローだね?)まだね
62	CS11	いやでも、まあ、いちおう仕事をやらないよりはー Ⅱ
63	JS12	Ⅱ (やらないと?)きついだろうな
64	CS11	(そうね)いやでも、いやでもさ、あのう、ええといまふたりま、ええとこの前、ええと、ふつ、ふつかかん、ええと、土曜日にいっしょに入って、ですよね、まああのう、あのう2時間の2人の回しのときに一、まあけっこう、まあ、まあ手伝ってくれたの、＜っていう感じ＞ Ⅱ

例 5(CS のインタレスト、上下<職位> ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
76	CS11	あのう、ええと 8 月の、前期から日曜日は、9、え、8、9.5 と 11.5 ですよ
77	JS12	<u>いけるでしょう、ふつう</u>
78	CS11	きついんですよ
79	JS12	<u>たいじょうぶ、日曜大丈夫でしょう</u>
80	CS11	きついんですけどー

例 6(CS のインタレスト、上下<職位> ; 双方 ; 自己優先 ; 回避)

番号	発話者	発話
95	JS12	<u><樽こししないの>この(うち)</u>
96	CS11	え、やらないですか↑
97	JS12	<u>うん、やらないことにした</u>
98	CS11	(1)え↑

例 7(CS のインタレスト、上下<職位> ; 双方 ; 自己優先 ; 回避)

番号	発話者	発話
127	JS12	<u>だからって混まないと思ってるところに増やしてくださいっていうのがおかしいじゃない</u>
128	CS11	まあ、そう<いうかもしれない>
129	JS12	<まちがっていないよね>(笑)
130	CS11	間違っていないですー(笑)

番号	発話者	発話
131	JS12	ということでふえません、あのう、「苗字」さんも(そう思いませんか?)
132	CS11	お、わかりました、あのう、8月のスケジュール、まあ

例 8(実情、保有度<低い>；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
208	CS11	あー、でー、あのうー、あの人のそういう人格つめたいくってゆう>
209	JS12	<つめたく>ないよ
210	CS11	えー↑
211	JS12	「苗字」さん、緊張しててみんなこう無表情っていうじゃない、ってー 応うちとー、むこうのメンバー何人か(やっとなめばー)、ひとまず入ったら 「苗字」さんを笑わせましょうとみんなで
212	CS11	えー↑

例 9(288、290 行目：実情、保有度<高い>；命題のみ；明示

292、294 行目：実情、上下<職位>；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
287	JS12	調理者らくだよ
288	CS11	えー↑(2)、いや思いません、<お、お> Ⅱ
289	JS12	Ⅱ <うん、責任>のほうがつついよ、そう洗い場もし、りょう、どっちかにふるがっちったらー、接客者にふるえて洗い場きついよ
290	CS11	まあ、いやでもこの店の調理者はほかの店よりー、<き、つ>
291	JS12	<らくだよ>ずっと
292	CS11	らくですか↑
293	JS12	まあ普通ぐらいという、きつくはないと思うよ、(いろいろ?)
294	CS11	えー↑

例 10(392、395 行目：実情、保有度<高い>；命題のみ；明示

399 行目：実情、JS の P.フェイス；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
391	CS11	Ⅱ え、(地名)この前けっこう、なんかお、おかしかったと思ひましてー、16歳の高校生は、なんかエリアー、ウィング↑スウィング↑なんか
392	JS12	ならないならないならない、(???)
393	CS11	いや、ええと、エ、エリアキャプテン
394	JS12	エリアキャプテンならない、16歳は、キャプテン 16歳はキャプテンする人はたぶんないと思うしー
395	CS11	いや、ええと、前の店は一、ええと確かに 17歳のキャプテンでー、そし

		てー【
396	JS12	【】 ええと 17 歳キャプテン、やってるくということはー>
397	CS11	<ふり、フリーター>
398	JS12	ええと店長がどこまで責任をとれるか、どういことかという、(おかないませんでした??)17 歳の子責任負えませんが、キャプテンなのに、おえることができない、たとえばの話し、ほんじめで金銭のことでわたしのミスかもしれないけど、5000 円でました、たとえば(苗字)さんとかおめえから(いいかたがないけど)まあ弁償しろの話になるかもしれないじゃない
399	CS11	はい、まあ

例 11(常識、話題<冗談> ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
417	CS11	えっ、あこの店はあと、ええと、自分やめてー、「苗字」やめてー
418	JS12	「苗字」わからないんだけど、「苗字」とわかれば
419	CS11	(笑)またそういうはなしをするまでー、いやです、いやいや、まあまあ、<まあたとえの話ね> 【
420	JS11	【】 <まあ「苗字」さん>、「苗字」さんやめてー
421	CS11	まあ、た 【
422	JS11	【】 あ、(???)「苗字」がやめちゃってー
423	CS11	あー、あとー
424	JS11	「苗字」がやめちゃうか分からないんだよ
425	CS11	<いや> 【
426	JS11	【】 <がっこう>(??さるから)、<続けない>
427	CS11	<いや、いやいや>

ペア 12 CS11-JS13

例 1(実情 ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
32	JS13	あの人だって、二十何年でしょうが
33	CS11	20、6 って {ほかの場所へ移動} (7)、うん↑入ってもいいんだよ ²

例 2(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
39	CS11	<いやでも>正直にいうとさー、(うん)「苗字」さん仕事ができる、今はね、今の段階で仕事ができる、え↑きょう、しょ、食事食わないの↑

² この例 1 では、JS13 が作って出勤スケジュールをみて、CS11 は不一致を感じた。

番号	発話者	発話
40	JS13	(3)、 <u>たぶん「苗字」さんはいるから一、話を録音すると思ったから一めし(もってこなかった)(笑)</u>
41	CS11	<u>いやべつに一</u>

例 3(実情、JS の P.フェイス ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
93	CS11	(2)、えでも、でも「苗字」さん、できないと思う↑
94	JS13	「苗字」さん
95	CS11	<u>うん、仕事できると思う↑、うん</u>
96	JS13	いえばやるけどー
97	CS11	<u>だから、できるんじゃない、この新人、新人さんに、あ、ええと、だれだっけ、わ、「苗字」さんさすが、し、しごと出してないってゆうこと↑</u>

例 4(実情、JS の P.フェイス ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
108	JS13	<u>あいつだめだって</u>
109	CS11	<u>いや、あいつだめじゃない、あのうー、きゅうあめで</u>

例 5(実情、JS の P.フェイス ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
141	JS13	ゆうきゅう、ええ、(???)、<から一>(くうん)<「苗字」さんと金曜 2 人はきついよなあ、きついよね、「苗字」さんと金曜 2 人は????>
142	CS11	<u>いや、いけるような気が、いや、「苗字」さんってさー、ちゃんといわないと仕事なんか、何をやるのがわからない、これはポイント、だからいって、あ、これやるよこれやるよこれやるよっていってー、(うん)あいつできる</u>

例 6(CS のインタレスト ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
206	JS13	まあ <u>できればいちななににで出てほしかったんだけどね</u>
207	CS11	<u>いや、い、いちななににで超えちゃうから</u>
208	JS13	あ、そうなんだ
209	CS11	うん
210	JS13	<u>ここね、9 なるよ、9.5 じゃなくて</u>
211	CS11	<u>うん、<でもこえちゃう></u>

ペア 13 CS12-JS14

例 1(話題進行、JS の P.フェイス；双方；自己優先、回避)

番号	発話者	発話
33	JS14	あのう、ちょっと待ってください(笑) (1) ええとね、としのきって分かるかな、あのう、ベンゼンに一、(.)うんとー 【I
34	CS12	【I うん、TS.でしよう↑

例 2(話題進行、JS の P.フェイス；双方；自己優先、回避)

番号	発話者	発話
37	JS14	くうん、それ>でもっている一、ポロライト、(うん)を、つかんだけど、その反応性がすごい高いから一、(うーん)その、N2 ちゃん、ようえきでやらないかならないから一、(うん)それを使う、うーん、その、なんだけな、(<笑>)<笑>、きょう持ってきた、{物を探す} ちくろへきさんを一、(うん)ちゃんきとして入れるのね、いみなぞ(??)、(うーん)、でもすごい、おおきい、かさば、おおきい、バルキーが、置換きだから一、(うん)って、なんかそのう、ちくろへきさんに一、うーんと一、おーえちき、が付いている、(うん)やつがあるんだけど一、(うん) あのうおーえちきって、あのう、おど、おどただつりきとか一、じゃん(??)、(<うんうん>)<反応性>が低いから一、(うん)その一としぬきに一、まずそのおーえちきを一、置換して一、そのとしぬき一、を、(うん)今度あのう、(??)なぞうるのほうに、きゅうかく反応させるみたいに、(うーん↑)そう、やつをやるんだ、(うん)今日はだからその一、としぬきをつける、(.)<実験>(<うーん>)みたいな、うんそう
38	CS12	あそうかそうか ³

例 3(JS の P.フェイス；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
44	JS14	なんか、久しぶりの実験だから、(笑)ちょっと、緊張するな(笑)(<笑>)、くうん>
45	CS12	<そうか>
46	JS14	うん
47	CS12	何週間ぶり↑
48	JS14	うーん、(1) 2 週間ぐらい行っていないかもしれない、先週は、ずっと実験してなくて一、(<そうなんだ>)<で先々週>も、(うん)実験とゆうか、あそうだね一、再結晶とかだったから一、そんな一、うーん、そのふらすぽとか一、つかって一、シリンジつかって一、みたいな、実験は、そう 2

³ この例 2 では、JS14 の実験説明が長くて不必要であると思って、CS12 は不一致を感じた。

		週間やっていないね、うーん<笑>
49	CS12	<u>うーん</u>
50	JS14	だからちょっと、気をつけないとって、(うん)ひさしぶりだとなんか失敗しそうだから、ちょっとこわいな
51	CS12	久しぶりだとねー
52	JS14	<u>うん</u>
53	CS12	すごい、疲れやすいかもしれないね
54	JS14	<u>うん、そうだね</u>

例 4(96、100、102、104 行目：実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
95	JS14	うん、なんだかんだねー、うーん、でもなんか、なんだろう、今年はボーナスがないとかなんとかでー、そのー、<笑>(うん)きのうその飲み会があったのをー、そのなんか、ボーナスが、ないからー、まあ、ないけどー、まあ、皆がんばろうね、っていうことで<笑>(うーん)なんか飲み会をしたらしいよ↑たいへんなんだねー、<まあ、お金> Ⅱ
96	CS12	Ⅱ<ぜんぜん>たいへんじゃないよ
97	JS14	そうか<(笑)>(笑)
98	CS12	もっとたいへんな、(あー)研究室がいっぱいあるよ
99	JS14	そうだよね
100	CS12	ボーナスがもらえないぐらいで、<うん>ねえー↑、(<おー>)<いいん>じゃん
101	JS14	<たしかに>
102	CS12	<いまの日本だし>
103	JS14	うん、(2) まあ贅沢な悩みじゃ悩みなのかな、(笑)
104	CS12	<u>うん、贅沢だと思う</u>
105	JS14	(笑)うーん
106		{二人とも食べている}
107	CS12	(4)、まあ、(6)、 <u>これも含めて向上心だね、きつとね</u>

例 5(JS の P.フェイス；自己のみ；婉曲)

番号	発話者	発話
120	JS14	うん、そのなんかバーゲン、用にさー、仕入れた服とかも、あるわけじゃん、ようは、(うん)その、もともとの一、定価からー、<なんか>(うん>)やすくしているのとー、(うん)なんかバーゲン用の、みたいなものがある <u>から</u> 、(うん)、 <u>うん、そのー、なんだろう、本当は高いけどー、安くなっているっていうんだったら買おうと思うんだけどー、でももとからやすっ</u>

		<u>ぽそ一なものはやっぱり、て、<ちょっと抵抗>がある、<笑>(<うーん>)うん</u>
121	CS12	<u>あでも、もともと高かったものを安くする理由考えたことがある↑</u>
122	JS14	もともと高かったものをやすくする理由↑
123	CS12	うん
124	JS14	うーん、なんだっけ、服ってたしかー、(うん)その一、さん、三割とか二割とか、それぐらいの値段でうっても、利益がでるとかだっけ
125	CS12	<u>うーん、(うん)でも原価でどうしてうらないんだろうって、(うん)つまり一、うれないんじゃないかなって思っちゃう、だから<バーゲン>あんまり買いたくない、(<あー>)</u>

例 6(話題、JS の P.フェイス ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
132	JS14	うん、たしかに、だからその辺あんまりだまされないように一、(うん)本当に自分の必要なものかどうかを見極めてね、(うん)うん、買いたいなあ一、と思うけど
133	CS12	<u>今年は一、夏服は買わないかも</u>

例 7(実情 ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
144	JS14	<u>うんうん、(食べている?)なんだかんだ、いえ一、うん、家より図書館のほうが快適かもしれないしね</u>
145	CS12	うん、(笑)
146	JS14	うん
147	CS12	<u>いや、うちの、場合は、逆かも</u>

例 8(常識、保有度<低い> ; 双方 ; 自己優先 ; 回避)

番号	発話者	発話
167	JS14	<u>あ、それなのかな、<なんか>(<うん>)黄色っぽいのがあるんだけど一、ちょっと</u>
168	CS12	<u>あ、中身が↑</u>
169	JS14	そうそうそう
170	CS12	<u>そうなんだ</u>

例 9(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
189	JS14	でも、 <u>ごはん、えらいね、つくるの、<ちゃんと>昼とよると、(うん)<朝も作っているわけでしょう↑</u>
190	CS12	<u>うん、あさー、きょうはパスタとかでー、(えー)もう、できているもの、(うん)ルーとか買ってきてー(笑)、(うんうんうん)、ママとかー、(笑)(うんうん)、買ってきてー、(うんうんうん)</u>

例 10(JS の P.フェイス；自己のみ；婉曲)

番号	発話者	発話
230	JS14	うんうん、<それは>思うかも<笑>(うん↑)っていうかなんか、あたらしいコミュニティを探さなきゃいけないのかなー、ってきがする、<あのう>(うん↑)あっ、なんかけっこう、このー、何年かですごい変わった気がしてー、(うん)まあそのう、バイト、バイトかけもちで(?)の一個をやめたりとかー、(うん)あと、サークルーもう、なんだろう、ほとんど行かなくなっちゃった↑って、まあ今年に入って研究室にはいって、ってまあもう一個続けているバイトも、まあ、週にも二回ぐらいしか行っていないから、(そう)うん、まあやっぱりだいぶー、ね、研究室のほうに、そのう、シフトし(すぎて?)きてる↑からねー、自分が、いる環境↑が、(うん)あなんか、うん、研究室だけー、なっちゃうとなんか、あのう、まずい気がするから、(笑)(うん)もっと外とのねー、つながりをもったほうがいいんー、だよなあと思うんだけどね、ずっと習い事をしたいなあって思ってるんだよね、(うん)もうずっと言っているよね、なんかいろいろ、(笑)(うん)よ、ヨガがしたいとかなんか、ねえ、スポーツしたいみたいなのを言っているから、うん、ってなんかまあ、今いちばん必要なのは運動の気がするしー、運動と新しい、環境というのを考えるとー、まあなんか習い事ね、日曜日はとりあえず休みだからー、うん、しなきゃなあー、と思いつつ、うん、でもやっぱりー、あのう、ネックとしてはー、あれだよ、月謝とか(笑)、(うん)経済的な面々はあるからねー
231	CS12	そうか
232	JS14	うん
233	CS12	<u>わたしが、それよりは、時間かな、<日曜日>、(<時間>)ええと、(うん)日曜日しかや、やすみないからー、(うん)うん、その日は(そうか)のんびりしたいかも、(うん)じ、自分の時間というよりも、(うん)何もしない時間↑(うん)うん⁴</u>

⁴ この例 10 では、JS14 が話した新しい環境を求めていることに対して、CS12 は不一致を感じた。

例 11(JS の P.フェイス ; 自己のみ ; 婉曲)

番号	発話者	発話
242	JS14	朝寝をしたっていうがあるからね、(笑)
243	CS12	そう
244	JS14	休日はね、うーん、そう
245	CS12	<u>そう、わたし、なんか、だんだん義務みたいになってきて、いかなきゃい</u> <u>けないというのを、(うーん)(っていうようにたらー)(うーん)いやだなーと</u> <u>思っ</u>

例 12(JS の P.フェイス ; 自己のみ ; 婉曲)

番号	発話者	発話
256	CS12	<u>っていうか、うちたぶーん、買っても一、“なに↑うん、あれがないかも、</u> <u>あ、そうか”、<なんてゆうか></u>
257	JS14	(笑いながら)<あれがないって何>が↑
258	CS12	<u>なにじぶん、白衣で、過ごしてくいるからね></u>
259	JS14	<あー>そうか
260	CS12	もう、デザインより機能的<な>(笑)、<ものに>なっちゃうかなあ
261	JS14	(笑いながら)<確かに>、そうしたら、もう、あのうー、なんかユニクロ <u>とか、そうゆうファストファッション系でも、(うん<うん>)<ねー>、</u> <u>いいかもね、(そう)そのほうが快適いいかもしね、うん、そうか</u>
番号	発話者	発話
262	CS12	<u>ちょっと高いんだよね、(<うーん>)<しかもー>、(たしかに)なんかなつ</u> <u>の服とかって、(うん)一年とか二年ぐらいしか、着れないじゃん</u>

例 13(話題、JS の P.フェイス ; 双方 ; 回避)

番号	発話者	発話
276	JS14	そう、店員さんにはちょっと申し訳ないけどー、<笑>うん、でも一、ま <u>あそうだねー、うん、気持ちの、気持ちの問題っていうのあるかもしれな</u> <u>い、<笑>うん、買わなくてもね、そのう、着てる気分を、味わえ、てば、</u> <u>いいのかなーって思っているところあるからねー、<うん></u>
277	CS12	<u><うーん></u>

ペア 14 CS13-JS15

例 1(実情、保有度<低い> ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
34	JS15	うん、 <u>でも、それ、年間でしょう↑</u>
35	CS13	<u>うん、こっちは↑こっちは年間じゃないの↑年度分</u>

例 2(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
44	CS13	早稲田は日本でひょうばんいい↑
45	JS15	うーん、私立のなかではすごいいいよ
46	CS13	けどー、(うん)なんか、わたしのイメージでは、(うん)わせだ、は、(2)あ のう、...
47	JS15	(2)なんかあったつけ、なんか事件が＜あった＞↑
48	CS13	＜よかった＞

例 3(逸脱留意なし)

番号	発話者	発話
57	JS15	＜どう＞だろうねー↑そんな、(息をすう音)、すごいなんかひょうばんおち た、こ、印象、私は＞持っていないけどねー＜
58	CS13	なんか質悪くなっているって
59	JS15	うーん↑でも友達も、早稲田大学はいったけどー、学校行っていないとか ＜笑いながら＞、(＜笑い＞)、＜なんか＞ 【
60	CS13	】 ＜なんか＞うーん、はいりやすい↑{声が小さくなる}
61	JS15	そ 【
62	CS13	】 大学院、は
63	JS15	あ、そうなの↑
64	CS13	うん
65	JS15	あ、そうなんだ、私はわからない(や?)
66	CS13	なんか年間、(うんうん)さんかい、四回も、試験、＜おこなっているの ＞、(＜うん↑＞)学生が募集、しにくいから＜笑いながら＞
67	JS15	あ、そうなんだ、へえー、あ、でも青学とか、すごい人数少なくてさー、 (うーん)なんかでも大学院、ともなると、いろいろレベルが違うのかね↑(う ーん)、その、大学そのものよりもさ
68	CS13	いまその経済学＜のクラス＞で、(＜うーん＞)たぶん、さん、さん、ぜん ぶで30人ぐらいで一、(うん)なんかあ、25人ぐらいは一、(うん)早稲 田をうけ＜そう＞＜笑いながら＞、

例 4(逸脱留意なし)

番号	発話者	発話
78	CS13	うんうん、(うーん)面接、研究計画書(について??)、(うーん)あれ、その 先生の話によると、早稲田は一、(うん)毎年すごくしつ、悪い学生、(うー ん↑)うけれる ⁵

⁵ この例 3～6 では、CS13 は JS15 の「早稲田大学は評判が高い」という先行発話に対して、数回にわ

例 5(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
83	JS15	どうなんでしょう、わせだね、 <u>早稲田はまだ出ていないよね、要項が</u>
84	CS13	<u>うん、もうでている、か、＜留学生はもう＞</u>

例 6(逸脱留意なし)

番号	発話者	発話
104	CS13	<u>先生とね、はやめに連絡、とらないと、なんか、筆記試験どんなにたかい点数があつても、(えー↑)うん</u>

例 7(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
111	JS15	<u>どこの大学、いんも</u>
112	CS13	<u>いやいやいや、早稲田だけ</u>

例 8(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
132	JS15	<u>なんかベトナムって、ヘルシーじゃない、料理、フォーとかさー、生春のまきとかさー、あぶらっていう感じがしないけど</u>
133	CS13	<u>うーん、ヘルシーなものはヘルシーだけど、(うん)ヘルシーじゃないものがくすごく</u>
134	JS15	<u><あ、そうなのだ></u>
135	CS13	<u>アンヘルシー(笑いながら)</u>

例 9(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
140	JS15	<u>あつ、にらも入っていますね</u>
141	CS13	<u>入っていない、入ってない</u>

例 10(中国の社会文化的規範、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
144	JS15	<u>なんか中国人にとって一、春巻きは、なんだろう、おかずじゃないって、なんかでゆってた</u>
145	CS13	おかずじゃない↑
146	JS15	主食↑メイン↑
147	CS13	<u>メインー、朝ごはんはメインかも</u>

たって不一致応答を行った。

番号	発話者	発話
148	JS15	あー、そうなんだ
149	CS13	うん
150	JS15	<u>なんか日本人のさー、中華弁当とかだとさー、(うん)ご飯といっしょに春巻きが入っているじゃん、それがなんか、許せないって、なんか<テレビで></u>
151	CS13	<えっ↑>
152	JS15	いったた
153	CS13	<u>ぜんぜん平気だよ</u>
154	JS15	あ、ほんとう↑(笑いながら)
155	CS13	うん
156	JS15	じゃー 【
157	CS13	】 <u>朝ごはんいいの<時間>(＜うーん＞)、だったら、(うん)おかずだ<と思う>(笑)</u>

例 11(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
178	JS15	うーん、でも、だって、(苗字) <u>ちゃん私費じゃない↑</u>
179	CS13	<u>え、私費だよ</u>

例 12((実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
187	JS15	<u>そうか、でもいま売ればすごい、高く売れるんじゃない↑なんか中国さー、すごいまあ物価が上がっているって聞くんだけど</u>
188	CS13	<u>いやけどそれはー、北京とか上海とか</u>
189	JS15	あ、そうなんだ
190	CS13	<u>地価はね</u>
191	JS15	うん
192	CS13	<u>私のふるさとの<ぶっか>(＜うん＞)上がっているけど、(うん)地価はそんなにあがって<いない>(笑いながら)</u>

例 13(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
194	JS15	(6) <u>この前テレビでやってたのはさー、(うん)もう日本の、ぶっかよりー、なん、日本のぶっかを越えるのはもう時間の問題なんかのことをいってた、(うーん)その、中国のね、この、そのー、なんだろう、い、不動産の値段とかー 【</u>

番号	発話者	発話
195	CS13	11 うん、不動産の値段は、(うんうん)たぶん、中国の大都市だったら、(うん)日本よりも高い<思う>
196	JS15	<だよな>
197	CS13	けどほかの一、なんか食品とかは一、(うん)そんなことはまだ

例 14(実情、保有度<高い> ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
200	JS15	でも、 <u>ファーストフード</u> は日本とあんまりかわらないっていった
201	CS13	<u>かわっているよ</u> ↑

例 15(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
220	JS15	(笑)なんだろうね、その一、千円のいみ、(うん) <u>手続きとかあるのかな</u> く笑い>
221	CS13	<u>郵送料じゃない</u> ↑

例 16(実情、保有度<低い> ; 双方、婉曲>

番号	発話者	発話
249	JS15	<u>そこ</u> に書いてある(って)
250	CS13	<u>ここ</u> には書いていないと<思う>

例 17(258 行目 : 個人規範、JS の P.フェイス ; 双方 ; 婉曲

260、262、264 行目 : 個人規範 ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
255	JS15	神戸ね、神戸もいいなあ、いつてみたいなあ、でも日本海だから、さむい <u>か</u>
256	CS13	<u>えっ</u> ↑(笑)
257	JS15	と、たぶーん、なんか、日本海側寒いイメージ
258	CS13	<u>だけど、ちばあ</u> つくない↑(笑)
259	JS15	<u>暑いか</u> ↑ふゆ<さむ>くない↑
260	CS13	<え>冬は、わたし冬はどんなにさむくても、<へいき>
261	JS15	<あ、そうか>
262	CS13	<u>けど、なつは、</u> <暑かったら>
263	JS15	<あー>
264	CS13	<u>それは</u> ちょっといやだ

例 18(中国の社会文化的規範、JS の P.フェイス；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
271	JS15	ええ、なんか、 <u>大阪のおばちゃんとか、すごい強そうなイメージ、(あー)なんかね、横断歩道とか、無視してわたるらしいよ、あのう、信号を、<信号を無視></u>
272	CS13	<u><あー></u>

例 19(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
309	JS15	<u>いいでしょう</u>
310	CS13	フィ、fit フィットネス↑
311	JS15	うん
312	CS13	<u>つらくない↑(笑いながら)</u>
313	JS15	いや、なんかねー 【
314	CS13	】 <u>筋肉でるよ(笑いながら)</u>

例 20(JS の P.フェイス；自己のみ；婉曲)

番号	発話者	発話
321	JS15	そうそう、うんとう、うんとうしてないからさー、ちょっと、ね、ちょっといい機会だから、三週間みっちり、ただで使わせもらおうと思うて>、
322	CS13	(<うーん>)、 <u>けど私なら、なんか、きかいの運動より、(うーん)ダンスとかよかったと思う></u>

例 21(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
378	JS15	<u>なんか東南アジアにいかうかつていうはなし>、(<おー>)</u>
379	CS13	東南アジア、あついよ(笑)
380	JS15	あついでね、でもね、寒い所よりはぜんぜんいいんですよ、わたしも、あついの(ならまだ??)
381	CS13	<u>うん、東南アジア、<咳></u>
382	JS15	<でも> 【
383	CS13	】 <u><すごく>行きたいところないね、東南アジア(笑)</u>

例 22(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
392	CS13	<u>あ、ベトナムは、あんまりみることはないんじゃない↑</u>

番号	発話者	発話
393	JS15	そう↑(笑)
394	CS13	<u>なん、なにかおもしろいと思う↑</u>
395	JS15	いやー、でもなんかさー、なんだろう、(1)なんかアジアの、なんかごちゃごちゃした感じが好きなんですよ、わたし
396	CS13	あー
397	JS15	なんか、タイも好きだから、だい、好きになるかなーみたいな、なんか＜東南アジア＞
398	CS13	＜あー＞
399	JS15	のへん、＜にているんじゃない↑＞
400	CS13	<u>＜なんか東南アジア＞、の中で、(うん)ベトナムは、いちばん魅力、場所</u> <u>ないと思う(笑いながら)</u>

ペア 15 CS14-JS16

例 1(中国の社会文化的規範、文化ゲスト；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
74	JS16	なん、なんかね名前＜覚え＞ていないです(＜はい＞)すごい聞くんだけどー(はい)わたしいつもそれを通して、(うん)うちのー、 <u>家族はー、(はい)家族</u> <u>というか、うちのー、父親とー、(はい)弟はー、(はい)このホテルのこと「メロン」</u> <u>ってゆうの(笑)</u>
75	CS14	<u>あ、そうですか、きっと高級なホテルだと＜思います??＞</u>

例 2(中国の社会文化的規範、日本の社会文化的規範；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
93	CS14	立派な作品だから、(うん)たぶーん、意味が分からないほうが、いいと思いますよ＜笑いながら＞、(1)日本人は、本当にびじゅつー、意識がー、とっても、(1) 関心が、もっていますと思いますね
94	JS16	<u>あ、ほん＜とうにー↑＞</u>
95	CS14	<u>＜はい＞行く時はー、(うん)たしかー、9時半ぐらいですね、(うん)でも、</u> <u>長い列がー、(うん)並びました、もう＜並びましたね＞</u>

例 3(JS の P.フィエス；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
142	JS16	＜あ、そう↑＞六本木に行ったことないけどー、(はい)けっこうだっても いろんなところでやっているよね、 <u>似顔絵、今度やってみなよ</u>
143	CS14	<u>そうですね(うーん)その時は時間が、あまり、なかったからー(えー)やって</u> <u>いくないですね＞</u>

番号	発話者	発話
144	JS16	<うーん>、 <u>残念<ですね></u>
145	CS14	<u><残念だよね></u>
146	JS16	はい
147	CS14	たしかまた機会が、あるかもしれない<と思い>まーす(<ねー>)はい (1) あ、わたし(笑)

例 4(JS の P.フィエス；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
210	JS16	浮世絵も最後とかだったらねー、<これで最後にかえるだけだったらねー> ≥
211	CS14	<あ、そうですね>(笑)
212	JS16	<u>だからー(笑)</u>
213	CS14	そうですね、でもまた機会が、あるかもしれないと思ってⅡ..

例 5(実情、日本の社会文化的規範、JS の P.フェイス；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
309	CS14	はい、(<笑>)横浜はたしか今の日本、でも一、最大の港の一、都市ですね
310	JS16	(1) <u>最大なのかなー、でも大きいと思う<よ>(<はい>)うーん、なんかこう、神戸とか、(<はい>)<あっち>のほうも大きいと思うけど</u>
311	CS14	<u>あ、そうですか</u>
312	JS16	うーん
313	CS14	<u>あ、かもしれない、でも中国語の(うん)インターネットのホームページで載っているのは一、(うん)横浜市は、<とても> Ⅱ.</u>
314	JS16	Ⅱ 一番↑
315	CS14	はい
316	JS16	あ、本当に↑
317	CS14	<u>大きな港です、でも一、じつは、そうですか分からないんです (2) あ、..インドの<すいとう>(<うん>)ですね</u>

例 6(実情、JS の P.フェイス；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
364	JS16	<あ、中華街の>肉まんたべたー↑
365	CS14	はい、食べました
366	JS16	本当に↑おいしいよ、(<笑>)おいしいですよ
367	CS14	(笑)本当においしーかったです(.)あ、北京の、ことおり、(1) でもその、あ、パンダさん

ペア 16 CS15-JS17

例 1(誤解；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
148	CS15	(.)でも一、通学の時間はみじかくな、短いですから一
149	JS17	すうがくの時間↑<笑いながら>はい
150	CS15	つうがく、<なんか> 【
151	JS17	】 <あ、通学>

例 2(199 行目：実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

201、203 行目：実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
198	JS17	あのう、わたし本当にいま中国語を習っていますけど一、(はい)ぜんぜん、 なんかもう、ついていけないし一、いちおうあのう発音とか、うーんがん ばろうって思ったのに一ってゆう毎回思っているんですけど一、(そうだね 一??)わたしこれで2年間、中国語を勉強して一 【
199	CS15	】 2年間ですか↑
200	JS17	3年目で一、(はい)留学しろって言われても一、<苗字>さんのように、< 苗字>(<まあ>)さんは日本語専攻で一、(はい)1年2年いって一、(はい) って私も一、そのように一、中国語を1年2年勉強して3年で中国で生活 しろ、たぶん、むりです<笑>
201	CS15	できますよ
202	JS17	いや一、むりです、ぜったい無理だと思いますなんか、なんだろう 【
203	CS15	】 できる先輩、なんかわたし、していますよ

例 3(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
210	JS17	で、あのう今の中国語の勉強みたいに一、説明とかは中国語で、(はい)で 文法とかを日本語の(はい)お一、 <u>でもいきなりこっちにきた、わけですよ</u> <u>ね、<なのにな??></u> 【
211	CS15	】 <でも>日本人の、うん教師もいますから一

例 4(誤解；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
219	CS15	きのうあいやいやいや、おととい、(お)ありま一した
220	JS17	おい、おととい↑
221	CS15	はい
222	JS17	お一、おつかれさまでした、なんか4種類 【

番号	発話者	発話
223	CS15	<u>11 え、わたし、まだですけど</u>

例 5(誤解；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
231	CS15	(6) 聞き取りといえ一、(はい)推測の能力が、大事だと思いまーす
232	JS17	<u>うーん↑しゅん、しゅんそく↑</u>
233	CS15	<u>すいそく、<すいそく></u>

例 6(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
311	JS17	おーおう、えー↑年におどろく、おかねー↑
312	CS15	<u>うーん↑(そう?)じゃなくて一、たぶん、年は、むかし年は化け物なので一、(はい)年を過ごすと一、そのう、ばけもの一、なんか、ばける↑(うん)の感じがあって、(1)、おとしーだまは一、(はい)うん子どもの健康をしゅうふくように、(お一)なる、かもしれない</u>

例 7(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
366	CS15	<そして一>南のほうは、(はい)肉もあるかもしれません<え↑>豚肉、(え↑<笑>)<いろいろな> 11
367	JS17	11 <あまいの>たべたと思ったら {笑いながら} 豚肉がでる
368	CS15	<u>えええ、いいえいいえ、豚肉が入ったら一、ええ塩辛いです</u>
369	JS17	あ一、塩辛い、えー↑ってそれ一に、(はい)入れて食べるんですか↑
370	CS15	<はい>
371	JS17	<u><スープ↑></u>
372	CS15	<u>スープじゃなくて一、中身だけ</u>

ペア 17 CS16-JS18

例 1(実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
263	JS18	<u>まあすごい狭いけどね一</u>
264	CS16	<u>うーん、まあこの間大阪にいくそのう、JSR バスも一、(うーん)せまいし</u>
265	JS18	そうか<そうか>
266	CS16	<u><たぶん>ほとんど同じだと思いますよ</u>

例 2(実情、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
295	JS18	うん、新宿はすごい人が多くてー、って出口もね六ヶ所ぐらいあるのかなー、(あー)ってバス乗り場にでる出口は一つしかないんだけどー、<そこに>(うーん)行くまではすごい分りにくくて、あのね東京都庁方面って書いてあるー(うん)ほう、に、いけば、出れる
296	CS16	あー、でも今度は JSR バスじゃなくてー、まあ普通の一、別の会社のバス

例 3(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
303	JS18	Ⅱ <だから>新宿は本当に分りにくいよ、(あー)わたしいつも東口に <u>出ようとするんだけどー(<笑>)必ず南口に出るんだよ<笑></u>
304	CS16	どうして↑
305	JS18	わかんない
306	CS16	でもあそこになんか何々出口が<書いてある>Ⅱ

例 4(実情；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
321	JS18	<分からなかったら>聞けばいいんだよだれかに
322	CS16	あーでも分かりやすいですよ
323	JS18	分かりや<すい↑>
324	CS16	<うん>分かりやすい

例 5(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
360	JS18	え先生とかじゃにはならないのー↑
361	CS16	うーんまー、あれでもいいんですけどー、ちょっと、なんかわたしー、{舌をうつ}そうゆうー、学生に対してあまいですよ(笑)

例 6(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
366	JS18	Ⅱ <u>でも中国でいまさ、逆にすごく景気がいいじゃんー、日本と違ってー</u>
367	CS16	うーん、まあ、仕事探すのも、難しいですよ、だからみんな公務員になりたい(うん)いちばん<安定な仕事だからー>

例 7(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
438	CS16	お二コマ続けてたの↑
439	JS18	うん
440	CS16	むり、(笑)
441	JS18	(笑いながら)ぜったい無理、＜二コマ続けるとか＞ II
442	CS16	II ＜でも、え、じ＞時間も同じですよ、＜90 分＞

ペア 18 CS17-JS19

例 1(言語ゲスト；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
6	JS19	<u>あー、(うん)日本の、観光客↑みたいなかんじ↑</u>
7	CS17	<u>うーん、＜かんこうきゃく＞</u>
8	JS19	＜ではないかな＞
9	CS17	<u>かもしれません(笑)、(えー↑)こんど、先輩もー、うん、あのおじいさんのおかげでー、(うん)大阪に行ってー、(うん)なんか、つうやくの仕事をー、してー、(あ)いるついでにー(笑)、(うん)観光を、観光することもできます、うん</u>

例 2(中国の社会文化的規範、JS の P.フェイス；双方；自己優先；回避)

番号	発話者	発話
82	CS17	ちば、ちばのところ、えー、千葉の近くには、(うん)売っていないですか↑
83	JS19	<u>たぶん、北海道限定ですかね</u>
84	CS17	<u>えー</u>

例 3(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
137	JS19	ですか↑ <u>つもりはしないぐらい</u>
138	CS17	<u>うーん、いやー、寒いときはー、(うん)積もっていますけどー、うん、そういう年は少ないですね、(あー)うん</u>

例 4(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
241	JS19	<u>でもあの紙はぜんぶ書けばいいっていう＜もん＞じゃないから大丈夫ですよ、(＜うーん＞)ただ</u>
242	CS17	かんじんなところ、(笑)(そうそうそう)書けば大丈夫だと思います、うん、でも、今日も先生にありました、なんか、(笑いながら)先生は、無愛想で、

例 5(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
245	JS19	えー大丈夫です(けど??)(うーん) <u>それって、なんか前に課題を出し忘れたやつ</u>
246	CS17	<u>いや</u>

例 6(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
249	JS19	<u>うんうん、大丈夫、じゃないですか、(<笑>)テスト、うけていればー、(うーん)たぶん(笑)</u>
250	CS17	<u>(笑)いや、でも先生の顔をみると本当にかわいです、え、こ、こわいです</u>

例 7(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
255	JS19	(1)、 <u>だい、いや、大丈夫でしょう、(うん)シニフィアンか</u>
256	CS17	<u>うん、笑うこともしないし(笑)</u>

例 8(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
263	JS19	(2)、 <u>猫</u>
264	CS17	<u>いや、うん、ねこ＜でもないです＞</u>

ペア 19 CS18-JS20

例 1(45、49、51 行目：CS の P.フェイス、JS の P.フェイス；双方；婉曲)

53 行目：実情、JS の P.フェイス；双方；婉曲

番号	発話者	発話
44	JS20	<u>「地名」ね、調べてたよ</u>
45	CS18	<u>え↑</u>
46	JS20	「地名」「地名」「地名」、本当↑(笑)
47	CS18	<u>(笑いながら)え↑え↑え↑</u>
48	JS20	(???)調べたり、ごめん(笑いながら)
49	CS18	<u>なんで、粗暴って。【</u>
50	JS20	<u>】 <ほん>、本当に↑</u>
51	CS18	<u>書いてありますか↑(笑いながら)</u>
52	JS20	(笑いながら)えこのまえ、ちょっと、あのう＜こうゆう>(<うーん>)こと の話を、＜してー>(<うーん>)
53	CS18	<u>正直(うん)正直は<正直>(<うん>)なんですけどー、粗暴は(<笑>)に<</u>

		ほんご>(くうん>)で↑日本語で>(くええと>)どういいですか↑

例 2(逸脱留意なし、明示)

番号	発話者	発話
64	JS20	【】 <強い>まあイメージ(笑)
65	CS18	つーよいかなー、現代の<若者>(くうん>)みんな、自己意識が強いんじゃないですか(笑)(<笑>)

例 3(中国語の言語的規範、接触性；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
86	JS20	新しいものが、あそうか、<まちが> 【】
87	CS18	【】 <新しいもの>のほうがいいかもしれません

例 4(中国語の言語的規範、接触性；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
107	CS18	(6)dadandehuaqian「思い切ってお金を使う」【】
108	JS20	【】 おかしい
109	CS18	てー
110	JS20	<なんか> 【】
111	CS18	【】 <ちょっとー>

例 5(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
116	JS20	<うーん>すぐお金を使っちゃう、(.)なん (5) なんっていえばいいんだろう、すぐお金、
117	CS18	(12)、あーそうですねー、(2)、huaqianbuxinteng「お金を使っても惜しまず」 って<言葉か?> 【】

例 6(145 行目：中国語の言語的規範；命題のみ；明示

155 行目：中国語の言語的規範、接触性；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
145	CS18	あ痛より一疼の<ほうが>
146	JS20	<お違う>
147	CS18	いいです
148	JS20	え、違うんだ、この字とこの字は
149	CS18	はい
150	JS20	わたしこれがー中国語でこれ(のるんだ?) と思ってた

151	CS18	え↑
152	JS20	違う↑
153	CS18	え↑
154	JS20	なんか 【
155	CS18	【 あ、だい<たい>(＜うん＞)同じ、なんです<けどー>(＜うん＞)や っぱり中国人<だ>からー(うん)あのうちよつとニューアンスが<ある というような>(笑)

例 7(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
165	CS18	反叛「反抗」は一(うん)反抗「抵抗」より一(うん)強い
166	JS20	あ、＜そうなんだ＞
167	CS18	<感じが>つよくて一、あのう何でも(うん)あのうそのはんたい一(笑)(あ ーうん)反対のことをして一

例 8(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
175	CS18	(4) 直線の性格はどういう意味ですか↑<笑いながら>(＜笑＞中国語であ まり<つかわ> 【
176	JS20	【 <直線、直線>的(笑いながら)ってゆう、けっこう日本語はなんか、ま っすぐの<ひとみみたいな> 【
177	CS18	【 <まっすぐ>
178	JS20	うんなんかそこを一<まげること???> 【
179	CS18	【 <あ、耿、耿直>耿直

例 9(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
180	JS20	あいわないんだ中国語は(笑いながら)
181	CS18	いわないぜったい言わないこれは(笑いながら)

例 10(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
184	JS20	あそうなん、これは、いわないんだ(＜笑いながら＞)
185	CS18	(笑いながら)言わない、(.)字を見ると意味が<わからない>
186	JS20	<えー>あほんとう↑(＜笑いながら＞)(7) あよかった一(???)とかが、 これは、この言葉は
187	CS18	あ(うん)あります(あー)これはいい、やっぱりーいわない(笑いながら)

例 11(中国語の言語的規範、接触性；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
191	CS18	うーん、 <u>rexindegongzuo</u> 「熱心に仕事をする」、あのうみる、この言葉を(うん)みたら一意味が分かりますけどー、(うん)あのう<やっぱり>
192	JS20	<不自然>
193	CS18	中国人、(うん)だったらー、<そうはいわないと>
194	JS20	<なんとといえば>
195	CS18	おもいます
196	JS20	しぜんかな
197	CS18	<u>熱心地做工作</u> (仕事に熱心)、(4) うー<ん>↑ 【

例 12(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
229	CS18	<はい> <u>很在意着装</u> (身だしなみに気をつける)
230	JS20	あーやっぱ小心じゃないんだ
231	CS18	うん

例 13(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
249	CS18	(2) <u>あのう</u> 聡明は頭がいい、聡明は性格じゃなくて
250	JS20	うわーそうか(笑いながら)
251	CS18	(笑)性格は、あたまが、いいというのは(<笑>)性格じゃないですよ(笑いながら)

例 14(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
253	CS18	<u>私利</u> (私利)
254	JS20	うん
255	CS18	<u>自私自利</u> 「利己的」のほうが
256	JS20	おー
257	CS18	いいです

例 15(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
259	CS18	冷静 これはー<いらない>
260	JS20	<要らない>おー

例 16(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
272	CS18	Nadade「傲慢な」とくゆう>(くうん>)のは意味がわからなくないですけど >(くあー>)、(2) nengzuoda「事業を大きくすることができる」
273	JS20	(2) あーなるほどねー
274	CS18	(2)nengzuodade「事業を大きくすることができる」yibanshishanxiren「普通 は山西省の人」、<zuoda「事業を大きくする」>(くうーん↑>)っていうの はくあの方>、(くうん>)ある企業をく大きく>(くうんうん>)して一、ま た力を強くして一、くあの方そ、そう>

例 17(中国語の言語的規範；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
291	CS18	有礼貌「礼儀正しい」
292	JS20	あ、言わないんだ、(4) あの方これが、くなんかとも>

例 18(中国語の言語的規範、保有度<低い>；双方；婉曲)

番号	発話者	発話
293	CS18	<ちょっとへん>(笑)
294	JS20	だち、なんだっけ友達になりやすい、とか(あー)そういう
295	CS18	友達になりくやすい>
296	JS20	<友達に>うん、この
297	CS20	あ、很好交朋友↑

例 19(320 行目：実情、保有度<高い>；命題のみ；明示

322 行目：実情、JS の P.フェイス；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
319	JS20	一人なんだ一、えー↑さびしいよね(笑)
320	CS18	いやさびしくはくない>、(くうん>)自由です
321	JS20	(笑)あ本当↑でも大変だよ、一人はね
322	CS18	ある時はあの方たぶん、きょうふうのく映画>(くうん>)を見ているとき は(笑)く二人で>

例 20(実情、保有度<高い>；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
345	JS20	留学生、の授業をうけるの↑専門、く専門、なんか> 【
346	CS18	】 くあー>専門な授業くじゃない>

例 21(実情、保有度＜高い＞；命題のみ；明示)

番号	発話者	発話
373	JS20	<u>Ⅱ</u> ＜あそうなんだ、じゃ＞いっしょに宿題をやれば＜笑いながら＞
374	CS18	いやいや＜宿題は＞
375	JS20	＜だめだ＞
376	CS18	自分でやれば＜いい＞
377	JS20	＜あそうです＞
378	CS18	と思います＜笑いながら＞
379	JS20	えだれかはさ、やってる隣でやればいいじゃん＜???＞ <u>Ⅱ</u>
380	CS18	<u>Ⅱ</u> ＜あいやだめー＞
381	JS20	だめなんだ
382	CS18	うーん、あのう＜自分＞(＜うん＞)が一、読まなければーあのう意味が分からない＜で＞(＜あ＞)でしょう↑(うんうん)先生が、あのう、この一、文章を、(うん)文章の意味を、(うん)まとめてー、まとめてくださいって言われたらー、(あー)分からないですよ

例 22(JS の P.フェイス；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
453	JS20	<u>Ⅱ</u> そうそうそうあした(あ)うんなんかまた行きたくね、に＜なっちゃって＞
454	CS18	＜「大学名」大学↑＞
455	JS20	うん＜同じー＞ <u>Ⅱ</u>
456	CS18	<u>Ⅱ</u> ＜短期留学↑＞
457	JS20	そうそうそう(笑)
458	CS18	えー↑

例 23⁶(466 行目：JS の P.フェイス；自己のみ；婉曲)

468 行目：JS の P.フェイス；自己のみ；回避)

番号	発話者	発話
465	JS20	春休み去年も(うん)2 月の、おわり、から 3 月の半、なんか今年も、同じで、＜本当に＞(＜おー＞)まったく同じ、で(＜笑＞)＜笑＞「苗字」さんは、また同じ授業ですよ、みたいな＜笑＞
466	CS18	まそうですね(そう)また同じ授業に＜きまっているー＞
467	JS20	＜そうなんだよねー＞もうでもー、ね、練習になるからー、いきたいなー＜とはおも＞(＜うーん＞)って
番号	発話者	発話

⁶ 例 23 は例 22 に後続して、CS18 は JS20 の春休みの語学研修計画に不一致を感じて行った応答である。

番号	発話者	発話
468	CS18	<u>そう<ですね> 【</u>

例 24(実情、保有度<低い> ; 双方 ; 婉曲)

番号	発話者	発話
511	JS20	<え↑そう↑、>かなでもお店による、と思うけど>、(<うーん>)みせ、(.)その仕事によって変わるから一ぜんぜん、なんか関係ないこと、もし私の、働いているところに一外国人の人がいても一、同じ、だし一、(うーん)うんぜんぜん関係ないと思うよ、うーん
512	CS18	<u>私、あのう東京で一、(うん)「学校名」言語学校に通っている一 【</u>

例 25(実情、保有度<高い> ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
624	JS20	おじさん↑(<笑>)<笑いながら>おじさん↑
625	CS18	旅行の時に知り合いになった(笑いながら)
626	JS20	<u>あぶないよ</u>
627	CS18	<u>うーんあぶなくはない</u>

例 26(643 行目 : 実情、日本の社会文化的規範、 ; 双方 ; 自己優先 ; 回避

645 行目 : 実情 ; 命題のみ ; 明示)

番号	発話者	発話
637	CS18	(1)(地名)の(うん)ほこう、ほこう 【
638	JS20	】 歩行者
639	CS18	歩行者天国(うんうん、歩行者天国)雰囲気かいてるんじゃないですか↑<地名の> 【
640	JS20	】 <本当↑>銀座と一↑
641	CS18	うん
642	JS20	<u>そうかな</u>
643	CS18	<u>でも銀座一(うん)やっぱ一、(うん)豪華的で一...(うんうん)</u>
644	JS20	私も一回しか銀座に行ったことがなくて一、なんか、高級だった、うん<笑>
645	CS18	<u>でもそんなに高く、もないと思います</u>

例 27(逸脱留意なし)

番号	発話者	発話
669	JS20	じゃつかえなよこれから、宿題がでたらー、心が折れるね、(いえばいいんだ?)(1) <u>なんかー、ね上海にさ、(うん)ディズニーランドできるよね、(.)</u> <u>ってゆううわさ</u>
670	CS18	うん
671	JS20	<u>すごいねー</u>
672	CS18	<u>なんで↑</u>

会話資料、インタビューアクション・インタビュー資料の紹介

1 擬似自然会話場面の紹介⁷

1) ペア 1 の会話(CS1、JS1)

CS1 が今読んでいる参考文献の著者の知名度 → CS1 の研究対象である雑誌の投稿者(☆)
→ CS1 の今までの渡日歴(☆) → CS1 の研究対象である雑誌の投稿者(☆) → CS1 の研究対象である雑誌の記事内容(☆) → CS1 の進学予定(☆) → JS1 の知り合いと CS1 の学年の違い(☆) → CS1 の中国国内の指導教官(☆) → JS1 の知り合いの先生の近況(☆)
→ 大学の履修制度(☆) → 研究資料の獲得方法(☆) → 研究資料のオープン・リソース(☆) → 研究資料の閲覧方法(☆) → 研究資料の購買費用(☆) → 研究資料の閲覧用の機器 → 研究資料の公開のかたち(☆) → 研究資料の提供方法 → CS1 の研究テーマが決まった背景(☆)

特徴：初対面の場面で、JS1 のほうは年上で大学の教師でもあるため、CS1 の留学経験や研究テーマなどに関する情報確認や意見交換が中心な話題となり、事実情報をめぐる不一致がほとんどである。CS1 の不一致応答に対して、JS1 は違和感を覚えたことが少なく、留意した不一致応答に関しても初対面の CS1 の非母語話者の身分を考慮し規範の適用を緩和させ中立に評価した。また、自分の知らない事実情報についての CS1 の不一致応答をマイナスに評価していない。

2) ペア 2 の会話(CS2、JS2)

6 月は今週末までなのかについて(☆) → 七月の学食のメニュー → 8 月の学食の運営
→ トムヤムクンの味 → フォーのスープの味(☆) → JS2 の帰り道によるスーパー → CS2 の寮の近くに新しくオープンしたスーパー(激安のたまご) → JS2 のおばあさんの膳立ての作り方 → CS2 が食べたカップラーメンの値段(☆) → JS2 の好きなカップラーメンの値段の変動 → 外の食堂より学食の量が多い(☆) → JS2 が見たドラマの紹介 → 日本と中国でのドラマ放送の時間の違い(☆) → 視聴率に対する両国での考えの違い(☆) → JS2 が留学した時のアメリカのドラマ事情 → CS2 がいま見ている昼間のドラマ

特徴：中国のドラマの放送事情といった母国に関する事実情報をめぐる不一致では、CS2 は明示的不一致応答を行っている。物事に関する評価や見解をめぐる不一致に対し、CS2 がより多く相手話者の情報の所有度などを配慮し、不一致応答を調整しているとみられた。一方、JS2 は主に母語規範を参照し婉曲的不一致応答を行うよう心がけ、そして、自分は留学経験があり接触場面の経験も多いので CS2 の直接的な否定的応答をほとんど留意していないと報告した。

3) ペア 3 の会話(CS3、JS3)

テニスをした経験 → 日本の大学の体育授業の科目 → 運動服着用場面 → 日本人女性の服 → CS3 がホームビジットの時にもって行く土産(☆) → ホストファミリーの

⁷ 不一致が生じた話題を太字にし、「☆」をつけて示している。

家族構成(☆) → ミュージシャンという語彙の意味範囲(☆) → 合気道の説明(☆) → 部活とサークルの違い(☆) → CS3が中国の大学で参加したスポーツの紹介 → 日本語能力試験の紹介 → 中国の大学での英語試験の紹介 → スキンケア用の化粧品の紹介 → CS3の今の生活のテンポ(☆)

特徴：不一致は主にホームビジットの話題に移った後に生じ、CS3が不一致を感じながらも相手規範をより多く考慮し不一致提示を回避したり、賛同の意を示してから異なる考えを遠回しに提示したりして不一致応答を行うようにしている。なお、普段の付き合いにおいても、JS3は母語規範を多く参照しているタイプなので、自分は相手のこの特徴を配慮しながら普段の付き合いに参加している、とCS3は相手との接触一般について報告してくれた。

4) ペア4の会話(CS4、JS4)

煎餅とブリッツの違いの説明 → 煎餅やおかきなどの違いの説明 → ブリッツのメーカー → 11月11日はブリッツの日 → 日本語での外来語は難しい → 英語の学習歴 → 日本の大学生も英語の資格が求められているか → 日本での英語検定試験のレベル分けの説明 → 互いに英語検定試験の経験の紹介 → これからの3連休の予定 → 日本の学校での成績の評価方法 → レポートと卒業論文の書き方の説明 → CS4がレポートを書くための資料の入手方法を尋ねる → 近くにある図書館の紹介 → CS4の3連休の予定の説明 → 前に一緒に観光に行ったところで見た風景(☆) → JS4にこうしようともみじの違いの説明を求める → CS4のふるさとの名所の紹介

特徴：様々な話題をめぐって会話が展開されてきたが、不一致はほとんど生じなかった。二人がこの前の観光の時にみた風景について、記憶が異なることによって不一致が生じたが、CS4ははっきりと想起できないので婉曲的不一致を行うように調整した。

5) ペア5の会話(CS5、JS5)

自転車の無断駐輪で罰金された(CS5) → 中国ではこれで罰金されることが考えられない → JS5による罰金する理由の説明(☆) → 日本の歩道の説明 → JS5による罰金する金額の説明(☆) → 防犯登録 → CS5の友達の自転車がパンクさせられた経験 → 最近はいたずら犯罪が増えたこと → 日本人に対する印象 → JS5に自転車の置く場所を尋ねる → JS5の自転車が移動された経験 → 自転車が移動された日に助けてくれたCS5の友達の話し → その友達に対するJS5の評価(☆) → 評価の理由の説明 → CS5によるその友達との普段の接触の紹介

特徴：主にCS5が自転車の無断駐輪で罰金されたことをめぐって不一致が生じた。罰金される理由についてJS5は説明したが、CS5は母語規範を参照し罰金することの妥当性を納得できていない。なお、CS5は不一致応答をする時に日本の社会文化的規範を配慮し、回避的応答を選択した。普段の接触で不一致が生じた場面について、JS5はチューターの立場から説明することが多く、CS5は相手の考えに合わせることも多いと報告された。また、感じた不一致について、CS5は一度ほかの日本人の友人の考えを聞いてからまたJS5と話し合うように調整したりする場合があるが、それでも考えが一致できない時は、意見を保留し回避的応答を行う

ように調整していると報告された。なお、JS5 はチューターであるので普通の日本人の考えより説得力があると感じている一方、二人の間の年齢差も気にかけっていると CS5 の報告から分かった。

6) ペア 6 の会話(CS6、JS6)

CS6 に茶道部のことを説明する → サークルと部活の異なり → CS6 が参加したいサークルの情報提示 → 茶道部の参加費 → JS6 による参加しているサークルの説明 → 一緒に勉強する時間のスケジュール → 中国語での「曜日」の言い方 → 互いの時間の確認 → CS6 による履修している授業の説明 → **一緒に勉強する時間の決定(☆)** → CS6 の翌日の予定 → 一緒に勉強する時間の決定 → CS6 による防災ツアーの予定の説明 → **CS6 の地震経験(☆)** → JS6 の中国語の授業 → 中国と日本のしぐさの異なり → 茶道部説明の確認 → CS6 による着物体験の授業の紹介 → こたつの説明 → CS6 の所属する大学の寮の紹介 → CS6 の中国の大学での冬の過ごし方の紹介

特徴：会話の最初のところでは JS6 が部活の紹介を行い、CS6 にとっては未知の情報が多いので不一致は生じていなかった。その後は一緒に勉強できる時間について話し合い、CS6 が最初は不一致を感じて婉曲的応答を行ったが、その後は時間の調整に妥協し(JS6 の提案の受け入れ)、話題転換を行って会話を進めていった。なお、CS6 は自分の不一致応答に留意することがほとんどなく、会話の維持により多く関心を払い、会話が停滞しないよう話題提供のほうを主に管理していたと報告された。

7) ペア 7(CS7、JS7)

CS7 によるホームビジットの説明 → CS7 による日曜日の防災ツアーの説明 → JS7 の近況について尋ねる → CS7 によるプロジェクト研究の紹介 → JS7 による履修している授業、普遍教育の説明 → 日中の大学での単位判定 → JS7 による自分のアルバイトの説明 → CS7 によるやってみたいアルバイトの説明 → 予定の食文化交流会のスケジュール → **JS7 がショウロンポウを作ってみた経験(☆)** → 日中両国の饅頭の中身の違い → CS7 が新しく買ったリュック → 食文化交流会の場所の確認 → お菓子の箱に印刷してある説明文 → 日本に来てから最も気に入った食べ物 → **中国でのクリスマス事情(☆)** → 中国の旧正月 → 日本の七夕 → 知り合いの住む場所 → 前日にみたドラマの紹介 → ごめんくださいの意味の確認 → **ごめんくださいの意味を教えてくれた着物の先生(☆)** → 「だって」の使い方の確認 → 日本語の新しい流行語の確認

特徴：全体としては CS7 のほうはより積極的に話題を提供し、会話の進行をリードしていたように見受けられた。そのために、長く話し続けられた話題が少なく、不一致もそれほど生じていなかった。中国でのクリスマス事情、そして、授業の先生といった CS7 が確実に把握している事実情報をめぐる不一致に対して、CS7 は明示的に異なる見解を提示した。なお、不一致応答を行う際に事実情報に関する知識の保有度を配慮した場合があったが、会話全体において最も多く留意しているのは自分の発話の「ためぐち」スタイルの正確さであると CS7 が報告した。

8) ペア 8(CS8、JS8)

CS8の研究計画の添削(☆) → 研究計画の中に挙げられた例文の検討 → 学部生の時の研究テーマの説明(CS8) → ゼミでの発表の予定 → CS8による希望のアルバイトの職種の説明 → CS8の大学の所在地(☆) → CS8のふるさとの紹介 → CS8の中国語レベル(☆) → CS8が持ってきた参考資料の入手方法 → 高校の時の数学の成績 → コピーカードの使える場所(☆) → いまとっている授業内容(JS8) → CS8が加入している携帯電話の会社

特徴：CS8の最初の目的は研究計画の添削をJS8に依頼することで、前半は添削内容についての会話のやりとりのみであった。CS8の研究計画の内容、書き方などをめぐって生じた不一致について、CS8は主にインターアクションの目的(内容の添削、アドバイスをしてもらう)および非母語話者の身分(言語ゲスト：ファン 2006)を配慮し回避的不一致応答を行うように調整した。添削が終了後の会話の中で、様々な話題について会話が展開されていったが、不一致がそれほど生じていなかった。生じた事実情報をめぐる不一致に対して、CS8は明示的に不一致を示した。なお、JS8はCS8との学年、年齢の差異をなんとなく配慮し、直接的な不一致の提示を抑えようとして会話に臨んだと報告したが、CS8のほうは主に添削という目的の達成を管理していたと語った。

2 自然会話場面の紹介

1) ペア 1(CS9、JS9)

アルバイト先での友人が仕事をやめた後の計画 → 中国人の台湾ビザの申請(☆) → 共通して知っている先生に対する評価(☆) → 台湾の交流窓口の担当に対する評価(☆) → CS9の婚活の話 → 結婚予定の話

特徴：CS9にはインターアクション・インタビューにも協力してもらったが、インタビューでは日中接触場面においてなるべく異なる意見を提示しないように会話に参加していると報告された。ここでの自然会話場面の会話においては、CS9が不一致の対象に関する情報の所有度や相手話者のポジティブ・フェイスを配慮し、不一致応答を調整していたと報告した。

2) ペア 2(CS10、JS10)

ICレコーダーの操作 → JS10の発話する時の声の大きさ(☆) → 周りで飛んでいる虫 → ゴミ箱はあるか → 一人でダンスを練習している学生(☆) → 天気 → 高校の生物の授業で習った人間の血管の話(☆) → 毛虫の話 → JS10による自分が触れる動物の説明 → ICレコーダーの電池が切れた → 天気 → 二人の好きな季節(☆) → 溶けたアイスクリーム(☆) → CS10のかっこう(☆) → 日本の抹茶アイスクリーム → 今日はオープンキャンパスの日なのか → 最近に放送されたアニメ(☆) → オープンキャンパスの話 → CS10の卒業後の進路 → アイスクリームを追加したい → 日本人は甘いものが大好き → アイスクリームがこぼれた → 最近の暑い天気 → 最近の勉強進捗 → 共通して知っている先生の年齢 → 文学部の期末試験 → 今の場所からデパートへ移動する → チューターとしてのJS10の指導のしかた(☆) → 先生についての

冗談 → CS10の出身地(☆) → 道端でみたネコ → CS10の中国語の発音 → 中国人はネコを食べるか(☆)

特徴： 事実情報や物事に対する評価をめぐって様々な不一致が生じた。相手話者のJS10とは友人関係で、チューターでもあり、言い間違えても直してもらえるため、CS10は普段から言い方にそれほど気をつけていないと報告した。不一致提示の際に用いる言語表現について、「…じゃない」と「…じゃん」は親疎関係の差異によって使い分ける時があると報告されたが、ほかに注意して使う表現はほとんど言及されていなく、CS10はこの会話における不一致応答の表示方法をほとんど管理していないように見受けられた。なお、CS10の不一致応答に対して、JS10は文法上の間違いを留意したが、唐突で自分のフェイスに対する侵害であるといったマイナスな評価はなかった。

3) ペア 3(CS11、JS11)

アルバイト先での朝食 → CS11によるアルバイトの時間割の説明(☆) → JS11の作業スピード → 共通して知っているバイト仲間の仕事ぶり(☆) → 深夜の作業についての改善点 → JS11の当日の売上高

特徴： 相手は年上であるが、アルバイト先でのランクが自分より低いため、CS11は不一致応答を含む発話についてほとんど管理していないと報告した。不一致が生じた2箇所においては、CS11が明示的に不一致を示し、表示のしかたを管理していないように見受けられたが、JS11の自分卑下の発話内容に対しては否定的応答をした。

4) ペア 4(CS11、JS12)

深夜出勤のスケジュール(☆) → 無断欠勤のバイト仲間の処分(☆) → 新しく入ってきたバイト仲間の仕事に対する評価(☆) → 新しく決められた勤務交替の時間帯(☆) → CS11の後日の予定 → 業務連絡の電話が入ったことを伝える → ほかの店でのバイトの人に対する評価(☆) → バイト仲間の業務指導 → 今の店での仕事内容の配分(☆) → JS12のほかの店での勤務経験の紹介 → ほかの店の店長の仕事ぶり → バイト仲間のこと → CS11が前に働いた店での若いキャプテン(☆) → 数人のバイトの人がやめる時の対応方法 → 夕方から入る人を増員する → 中国での店舗の進出 → 中国での店舗の責任者の紹介

特徴： JS12はアルバイト先の店長であるため、自分の考えを相手に提示するが、決定はあくまでも相手に決めてもらおうとCS11は会話が始まる前にすでに事前調整を行った。行われた不一致応答をみると、CS11は主に相手話者の職位を配慮し、婉曲的または回避的不一致応答を行うように調整していた。事実情報をめぐる不一致においては、直接的に事例を提示し異なる見解を提示する不一致応答が行われたが、JS12に反論されるとなるとCS11は賛同の意を示し、自分の意見を引き下げるように調整した。このような応答傾向の選択のほか、不一致応答に用いられる言語的表現の選択も見られた。

5) ペア 5(CS11、JS13)

CS11 の送別会 → 録音する時は食事をしてもいい(☆) → 共通して知っている中国人のバイト仲間に対する評価-1(☆) → ほかのバイト仲間の髪型 → JS13 の携帯電話 → ほかのバイト仲間の有給休暇の申請 → ほかのバイト仲間のスケジュールの確認 → 共通して知っている中国人のバイト仲間に対する評価-2(☆) → 来週の天気 → CS11 の送別会の日程が決められた理由の説明 → ほかのバイトの仲間の仕事ぶりに対する評価 → ほかのバイトの仲間のスケジュール → 共通して知っている中国人のバイト仲間に対する評価-3(☆) → CS11 の次週の予定 → ほかのバイト仲間の今後の予定 → ほかのバイト仲間に業務連絡 → JS11 のこれからの連休 → 有給休暇の使い方 → **CS11 の今月の出勤時間の確認(☆)**

特徴： JS13 はアルバイト先でのランクは CS11 と同じで、年下でもあるため、不一致応答を含む発話をほとんど留意していないと CS11 は報告した。行われた不一致応答からみると、同じ話題(中国人のバイト仲間の仕事に対する評価)をめぐる、異なるタイミングであわせて 3 回にわたって CS11 が自分の考えを支える事例を提示し、異なる見解を示したが、相手話者のポジティブ・フェイスを配慮して 1 回の不一致提示での発話量を管理していると報告された。また、事実情報や自分のインタレストに関する不一致は、CS11 は明示的不一致応答を行った。

6) ペア 6(CS12、JS14)

CS12 は前日に遅くまで研究室にいたこと → JS14 の当日の実験の説明(☆) → 実験に伴う JS14 の緊張感(☆) → 長い実験に伴う倦怠感 → JS14 の先輩の当日の機嫌 → 研究室の先輩がバーゲンに行ってきた → 今年はボーナスなしで研究室の先輩は大変である(☆) → JS14 は週末にバーゲンに行く予定(☆) → 夏休みの買い物の予定 → 夏休みの勉強予定 → 夏休みに勉強する場所(☆) → キュウイの品種(☆) → CS14 の自炊(☆) → 朝食の選択 → 今までの会話の進行 → JS14 の七夕の願い(☆) → JS14 は習い事を始めたい(☆) → CS14 が新しい服を買わない理由(☆) → 前日は研究室の先生全員をみかけた → 夏休みの目標

特徴： 生じた様々な不一致に対して、CS12 は主に相手のポジティブ・フェイス、話題に関する情報の保有度などを配慮して、不一致の表示の明示度を調整したが、言語的表現の選択と使用においては日本語の規範に従って「慣習的に」行われた調整が多い。また、CS12 の異なる見解の提示に対して、JS14 は否定的に評価することなく一つの考えとして受け入れて賛同の意を示してから、自分の考えを提示するようにしている。

7) ペア 7(CS13、JS15)

CS13 の特別研究のレポート → CS13 が申し込む予定の大学院の年間の学費(☆) → 学費免除制度 → 早稲田大学の評判(☆) → 早稲田大学の出願期間 → CS13 が受験予定の大学院の数 → ベトナム料理(☆) → CS13 が作った春巻き → 中国では春巻きはおかずであるかどうか(☆) → 春巻きの作り方 → 入学願望の記入事項の確認 → CS13 の地元の地価(☆) → 中国の物価の高騰(☆) → 日中両国のファーストフードの値段の比

較(☆) → 能力試験成績の証明書の発行費用(☆) → 慶応大学の中国語での書き方 → 大学院紹介の小冊子に連絡用の電話番号が書いてあるかどうか → 神戸は寒いイメージ(☆) → 関西の人は関東の人よりは親切である(☆) → CS13 の地元の交通事情の紹介 → 早稲田大学のデザイン専攻の学費 → JS15 が無料体験できるフィットネスクラブの紹介(☆) → CS13 の卒業論文の進め方 → JS15 の東南アジア観光の計画(☆) → CS13 が行きたい旅行先

特徴：ペア 6 と似たように様々な不一致が生じたが、CS13 はほとんど明示的不一致応答を選択し応答した。特に早稲田大学をめぐる評価について、関連する情報の保有度が高いため CS13 は様々な事実情報を提示し不一致を示し、JS15 のフィットネスクラブの利用や観光計画に対しても明確的に異なる見解を提示した。なお、JS15 はこれらの不一致応答に対して、情報の保有度の不均衡で確認しながらなんとなく納得できたことがある一方、事実情報の提示を通して自分の主張を支えようとしている努力も多くみられた。なお、上記の三つの話題についての CS13 の不一致応答に対して、JS15 が逸脱と留意し否定的に評価したことは興味深い。

8) ペア 8(CS14、JS16)

JS16 の今度の週末の過ごし方 → CS14 の横浜観光 → 一緒に観光に行った友達の紹介 → 横浜でのホテルの外観(☆) → 美術に対する日本人の関心(☆) → 美術館で行われる展覧会 → 展望台での似顔絵(☆) → 山下公園までの道 → 美術館の隣の結婚式場 → 道端の古いビル → 博物館での浮世絵の展示(☆) → 屋台船と思われる船 → 赤レンガ倉庫でのコスプレー → JS16 の地元の島でのコスプレーの紹介 → コスプレーの人の服 → 横浜の歴史 → 横浜は日本の中では最大の港である(☆) → 中華街で売っている食べ物のサイズ → JS16 がアメリカの修学旅行でみた食べ物のサイズ → 中華街で売っている肉まんの味(☆) → 中華街でのパンダのかざり → 中華街で売っている T シャツの値段 → みかけた交番に張ってある知らせの内容 → 駐車場の時間単価を示す時計 → 横浜の夜景 → CS14 が授業での花嫁服の体験(☆) → 日本での結婚式での化粧直しの説明

特徴：生じた不一致に対して、CS14 は主に相手のポジティブ・フェイスと社会文化的背景の異なりを配慮し、不一致応答の傾向を調整すると同時に、個々の発話意図を実現させるための言語的表現の選択も行った。なお、JS16 は CS14 の不一致応答に対して、唐突と感じたことがなかったほか、文化ホスト(ファン 2006)の立場をとり説明を加えたりすることが多い。

9) ペア 9(CS15、JS17)

JS17 の習った中国語の表現 → 近況報告(CS15 が読んでいる小説、JS17 の髪型) → 日本の美容院の価格 → 髪に関する慣用句 → 中国語での「前髪」の言い方 → 最近食欲が旺盛である → 24 日の補講は心配である → 自転車の入構許可 → 自転車に乗る時の注意事項 → 千葉県での風が強い → 今年の冬の天気予測 → 留学生の語学力はすごい(☆) → CS15 による日本語学習歴の説明(☆) → 日本語能力試験の紹介(☆) → 外国語の聞き取りに求められている能力(☆) → 日本人の大晦日の過ごし方 → JS17 の

去年の大晦日の過ごし方の紹介 → 駅伝の説明 → 二人の家庭での年玉事情 → **中国での年玉の由来の説明(☆)** → 中国語での旧暦の数え方 → **中国式の白玉の説明(☆)**

特徴： 生じた事実情報をめぐる不一致に対して、CS15は主に意思伝達のほうに注意を払い、事実情報や説明の内容を付け加えてJS17に異なる考えを提示するようにしている。なお、否定されたことを気にすることはなく、自ら発言してくれないことのほうは心配だと報告されたように、CS15の否定的応答に対して、JS17は違和感を覚えたことはなく、主にチューターの立場を考慮し会話能力の促進の視点からCS15の発話内容における文法的側面や話題展開能力の側面に注目していた。

10) ペア 10(CS16、JS18)

CS16が持ってきた飴のみやげ → 日中両国での花嫁衣裳の色 → CS16のデジカメ → 共通して知っている人の公務員試験の結果 → CS16の彼氏の仕事 → CS16の知り合いの仕事 → この前に見に行ったマーチングコンテスト → 長野県の雪つもり → **先生の病気(☆)** → この前の飲み会 → 大学での第二外国語教育 → JS18が習ったことのある第二外国語 → JS18がとっている英語の授業 → 3年生編入試験での英語テスト → TOEIC 試験 → 大学での語学留学 → JS18の友人の語学留学の紹介 → 友人が留学先で人気の高かった理由 → JS18の顔たち → **CS16が奈良に行く時に利用予定のバス(☆)** → JS18がバスを利用しない理由 → **CS16が利用するバスの乗り場(☆)** → **新宿駅は出口が多くて間違えやすい(☆)** → **CS16が東京駅での乗り換え経験(☆)** → JS18が東京駅での乗り換え経験 → JS18が受ける予定の公務員試験 → CS16が院生終了後の予定 → **中国での就職事情(☆)** → 日本での就職事情 → バイバイの中国語での言い方 → **さようならの意味確認(☆)** → 日中両国での授業中のあいさつ → **中国での大学の授業時間の長さ(☆)**

特徴： 生じた不一致に対して、CS16は主に当該話題に関する情報の保有度を配慮し、応答の傾向を調整していたが、それに伴う言語表現の選択についてはあまり印象に残っていないと報告した。なお、JS18はアルバイトの経験を通して、異なる意見の直接的な提示をなるべく避けるように調整する習慣を身につけ、場面や相手話者の特徴によって「慣習的に」不一致提示のしかたを管理していると報告した。CS16の不一致応答から、JS18は直接的な不一致提示を留意し母語話者との異なりを感じたが、相手話者の異なる言語、文化的背景、性格などを考慮し、マイナスな評価をしていない。

11) ペア 11(CS17、JS19)

CS17が長野観光に行く時に案内してくれる日本人(☆) → JS19が前日に行ってきたコンサート → JS19のドームシティーの観光計画 → 知り合いの留学生が通りかかった → CS17が持ってきたみやげを食べる → 食べているお菓子の種類の説明 → **CS17が好きな北海道のお菓子の販売場所(☆)** → 北海道へ行くための交通機関の利用 → 札幌の雪祭りの紹介 → 中国での雪祭りの紹介 → 中国のスキー場の数 → JS19がスキーに行った経験 → 千葉の冬の雪 → **CS17の地元の冬の雪(☆)** → JS19のお正月の予定 →

お正月前後の補講 → JS19 の沖縄観光の予定 → JS19 が補導している留学生 → **CS17 が参加しているゼミの名前(☆)** → JS19 の知り合いの春休みの観光予定 → **CS17 の中間テスト(☆)** → **中間テストの授業の担任先生(☆)** → CS17 の漢字テストの結果 → 取りかかった CS17 の知り合いの日本人との会話 → **CS17 の語学レベル(☆)** → CS17 の英語の学習歴 → CS17 の日本語の学習歴 → JS19 の外国語の学習歴 → 巻き舌音の発音

特徴： 生じた不一致に対して、CS17 は主に当該話題に関する情報の保有度、相手話者のポジティブ・フェイスを配慮し、応答の傾向を調整したほか、異なる発話意図を実現させるための言語的表現の選択もみられた。なお、興味深いことに、CS17 が確認の意図で発話した応答内容が異なる意見の提示と JS19 に思われた事例は 2 箇所あった。JS19 は CS17 の不一致応答に対して、新しい情報として受け入れてマイナスに評価したことはほとんどないが、言語ホストとしての役割が疑われていると感じた時は CS17 の不一致応答を否定的に評価し、調整の対象にした。

12) ペア 12(CS18、JS20)

CS18 の日本語レベル(☆) → JS20 のアルバイト先での外国人の日本語レベルの説明 → CS18 が銀行の暗証番号を忘れた → **JS20 の木曜日の授業(☆)** → JS20 がとっている授業と就職の関連性 → JS20 が調べてきた CS18 の故郷の人の性格(☆) → JS が調べてきた中国の若者の性格(☆) → JS20 の中国語の宿題における表現の確認(☆) → JS20 が調べてきた CS18 の故郷の人の性格(☆) → JS20 の中国語の宿題における表現の確認(☆) → **CS18 の寮生活(☆)** → **CS18 が取っている科目(☆)** → CS18 が取っている授業の先生の性格 → **授業の宿題の取り組み方(☆)** → JS20 が電車に乗る時のハプニング → CS18 の自転車での通学 → JS20 の小学校の時の自転車免許 → **JS20 の春休みの語学研修(☆)** → CS18 の春休みのアルバイト探し → **アルバイト先での時間調整(☆)** → JS20 のアルバイト探しの経験談 → CS18 の友達のアルバイト探しの出来事 → 中国語検定 → CS18 がうけている授業の内容紹介 → JS20 が気に入ったお菓子の紹介 → 二人の余暇の過ごし方 → JS20 の中国語を向上させる方法 → **CS18 のこの前の観光(☆)** → **銀座に対するイメージ(☆)** → JS20 が東京タワーをのぼった経験 → 日本語の慣用句 → **上海でのディズニーランドの建設(☆)** → 日本のディズニーランドの値上げ → 上海万博 → JS20 の中国語練習の環境

特徴： 生じた不一致に対して、CS18 は主に日本語の言語、社会文化的規範を参照し、婉曲的に不一致を示すことができるように言語表現を選択し不一致応答を調整している。そして、会話の前半はやわらげめの言語表現の使用を心がけていたが、会話の進行に伴ってだんだん気軽にしゃべれるようになったと感じたため、不一致応答に対する管理はある程度緩和されてきたと報告した。JS20 は CS18 の不一致応答に対してマイナスに評価したことは少なく、特に自分の中国語の宿題に対する指摘をプラス的に受け入れた。ただし、自分の語学研修の計画に対する CS18 の回避的不一致応答を留意し、調整の対象にした。

3 インターアクション・インタビュー資料の紹介

CS19

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
上司、ほかの同僚	会社/会議	会議参加	回避
上司	会社	商品の見積価格の確認	婉曲、回避 ⁸
		出席者リストの確認	回避
		コピーした資料の枚数の確認	明示、回避
上司* ⁹	会社	仕事のやりかたの意見交換	回避
上司*	会社	商品の見積価格の確認	回避

CS20

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
マネージャー	アルバイト先	仕事の指示をうける	回避
後輩	アルバイト先	仕事が頼まれる	明示
先生 A	大学/授業	講義をうける	明示
同じゼミの学生	大学/ゼミ	発表内容の意見交換	明示
日本語支援の チューター	大学	発表原稿を添削してもらう	明示
マネージャー*	アルバイト先	仕事の指示をうける	回避
A 以外の先生*	大学/講義	講義をうける	回避
後輩*	アルバイト先	雑談/仕事の指示を出すなど	明示

CS21

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
客 A	アルバイト先/商品 の清算	客に指示される	回避
		客に責められる	回避
		客に責められる	明示、回避
客 B	アルバイト先/商品 の清算	商品代金の確認	婉曲
先輩 A	アルバイト先	仕事の指示をうける	明示
マネージャー	アルバイト先	給料の確認	婉曲、回避
先輩 B	アルバイト先	あいさつ	明示
知り合い A	レストラン/食事	雑談(病院のやりかた)	婉曲
		雑談(CS21 の旅行計画)	回避
		雑談(中国の報道事情)	明示

⁸ 原則的には生じた不一致ごとに場面情報、応答傾向を提示する。一つの不一致をめぐる、1 回以上の不一致応答が行われた事例について、同じ行にまとめて場面的情報、生じた応答の順番などを提示する。

⁹ 「*」がついている事例は、リコール・インタビューから得られたエピソード的情報である。

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
知り合い B	旅行先	雑談(兵馬俑)	回避
		雑談(長安)	明示
		トラブル解決の話し合い	回避
チューター	大学	発表準備の相談	回避
		雑談	明示
先輩 A*	アルバイト先	仕事の指示をうける A	回避
		仕事の指示をうける B	回避

CS22

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
マネージャー	アルバイト先	仕事の指示をうける A	回避
		仕事の指示をうける B	回避
		入金の責任の確認 A	明示
		入金の責任の確認 B	明示
店長	アルバイト先	出勤時間の確認	婉曲
客 A	アルバイト先	洗濯物を預かる	回避
客 B	アルバイト先	洗濯物を預かる	回避
客 C	アルバイト先	客に指摘される	回避
客 C	アルバイト先	客に指摘される	回避
バイト先の同僚	アルバイト先	機械の使い方の確認	婉曲
バイト先の後輩	アルバイト先	仕事の話の意見交換	明示
友達 A	友達のうち/食事	アルバイト先の知り合いの紹介	回避
友達 B	友達のうち/食事	雑談	明示、婉曲、 回避
友達 C	友達のうち/食事	雑談	明示、明示
友達 D	友達のうち/食事	雑談 A	回避
		雑談 B	回避
マネージャー*	アルバイト先	仕事の指示を受ける	回避
店長*	アルバイト先	仕事の指示を受ける	回避

CS23

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
同学会のメンバー	定期例会の後	食事の割り勘の意見交換	婉曲

CS24

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
先生 A	大学/ゼミ	先生のコメント意見交換	婉曲
先生 B	大学/講義	講義をうける	婉曲
上司、クライアントの代表	アルバイト先	企画案の打ち合わせ	婉曲
同級生 A	大学/ゼミ	発表内容の意見交換	婉曲、回避
同級生 B	大学/ゼミ	発表内容の意見交換 A	婉曲
		発表内容の意見交換 B	婉曲
		発表内容の意見交換 C	婉曲
同級生 D	大学	展示会の感想を話し合う	婉曲
同プロジェクトチームのメンバー	大学/プロジェクト会議	プロジェクトの打ち合わせ	明示
日中接触場面での不一致応答一般*	日中接触場面	不一致が生じる場合	婉曲、回避
先生 C、D*	大学/講義	講義をうける	婉曲
合同ゼミのメンバー*	大学/ゼミ	発表内容の意見交換	婉曲、 (回避)
博士ゼミのメンバー*	大学/ゼミ	発表内容の意見交換	婉曲、 (回避)

CS25

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
同僚	会社	「用件定義」の説明	明示(待遇表現の調整)
部下	会社	プログラミングの意見交換	明示
部下*	会社	プログラミングの意見交換	明示
ほかの部門の担当者*	会社	業務上の打ち合わせ	明示

CS26

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
先輩 A	会社	会議の議事録内容の確認 A	明示、明示、 回避
		会議の議事録内容の確認 B	回避
同期	会社	会議の議事録の添削	回避
上司、同僚	会社/会議	打ち合わせの時間の確認	婉曲
		作業マニュアルの検討	婉曲
上司	会社	会議の議事録に用いられた 日本語語彙の確認	婉曲
		会議の議事録に用いられた 日本語表現の確認	回避
		会議の議事録内容の確認 A	婉曲
		会議の議事録内容の確認 B	婉曲
先輩 B	会社	会議の議事録内容の確認	回避
先輩 C	会社	レポートの内容の確認	回避
先輩 D	会社	作成した資料が指摘される	婉曲
ほかの部門の 担当者、上司	会社	業務展開の打ち合わせ	明示
先輩 D*	会社	企画案の打ち合わせ	回避
先輩 E*	会社	業務上の話し合い	明示、婉曲
上司、同僚*	会社/会議	業務改善について話し合う	婉曲

CS27

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
先生	大学/授業	講義をうける	明示
補導する生徒の母親	生徒のうち	補導スケジュールの確認	回避
友達	電話で話す	アルバイトの紹介をうける	回避
友人 A	花火大会の帰り	雑談	明示
友人 B	大学/実験	英単語の確認	明示
補導する生徒	補導	雑談	明示

CS28

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
知り合いの先生	大学/控室	返却物の確認	婉曲

CS29

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
店長	アルバイト先	仕事の指示をうける (シフト変更)	婉曲、回避、 明示、回避
		労働時間数調整の相談	婉曲
社員	アルバイト先	勤務状況についての雑談	明示
後輩	アルバイト先	仕事の指示をだす	明示、明示

CS30

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
取引先 A	会社	納期延長の交渉	婉曲、婉曲、 明示
取引先 B	会社	共同開発事業の打ち合わせ	回避、婉曲
上司	会社	営業予想の報告	婉曲、婉曲
部下 A	会社	業務上の話し合い	婉曲
部下 B	会社	業務改善について話し合う	明示
部下 C	会社	業務改善について話し合う	回避
部下*	会社	仕事の指示をだす	婉曲、明示
部下 A*	会社	業務上の話し合い	婉曲
上司*	会社	業務上の話し合い	婉曲、回避

CS31

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
同僚	会社	広告のデザインの打ち合わせ A	回避
		広告のデザインの打ち合わせ B	回避
同僚*	会社	広告のデザインの打ち合わせ A	明示
		広告のデザインの打ち合わせ B	明示
		デザインの打ち合わせ一般	明示
上司*	会社	業務上の話し合い	明示、回避

CS32

相手	場所/場面	インターアクション内容	応答の傾向
客 A	アルバイト先	レジでの会計	回避
客 B	アルバイト先	商品代金の確認	婉曲
客 C	大学祭の模擬店	商品代金の確認	明示
店長	アルバイト先	雑談 A	回避
		雑談 B	明示